

一般国道
210号線 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告

第 4 集

つかんどう
塚 堂 遺 跡 IV

D 地区 (第 2 分冊)

福岡県浮羽郡吉井町所在遺跡の調査

1 9 8 5

福岡県教育委員会

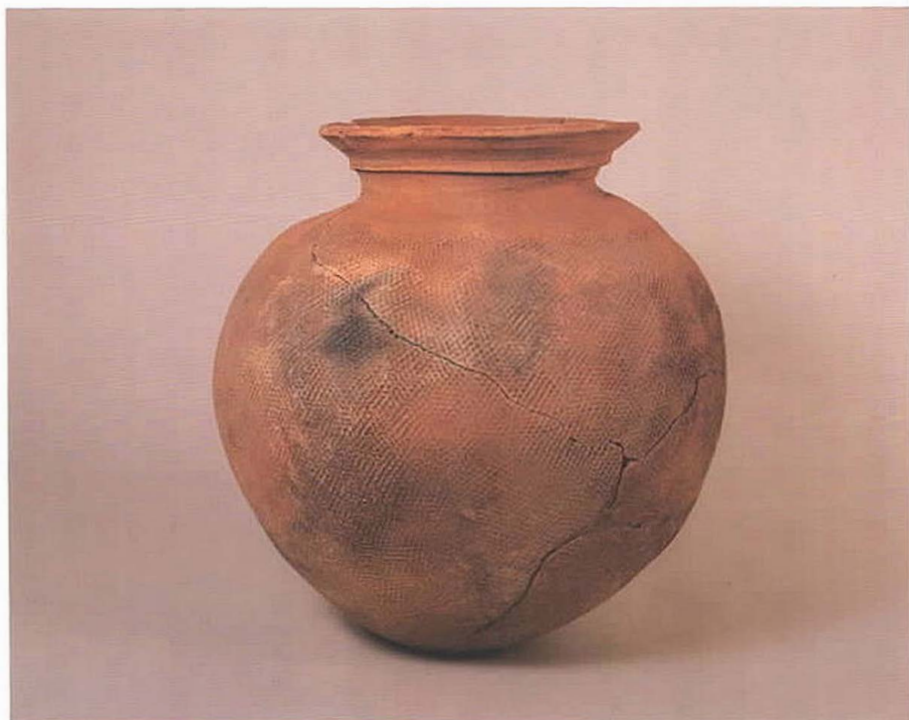
塚 堂 遺 跡 IV

D 地区 (第 2 分冊)

福岡県浮羽郡吉井町所在遺跡の調査



1. 9号住居跡出土硬質竹管文土器 (315)・土師器 (313)



2. 13号住居跡出土斜格子タタキ目土器 (506)



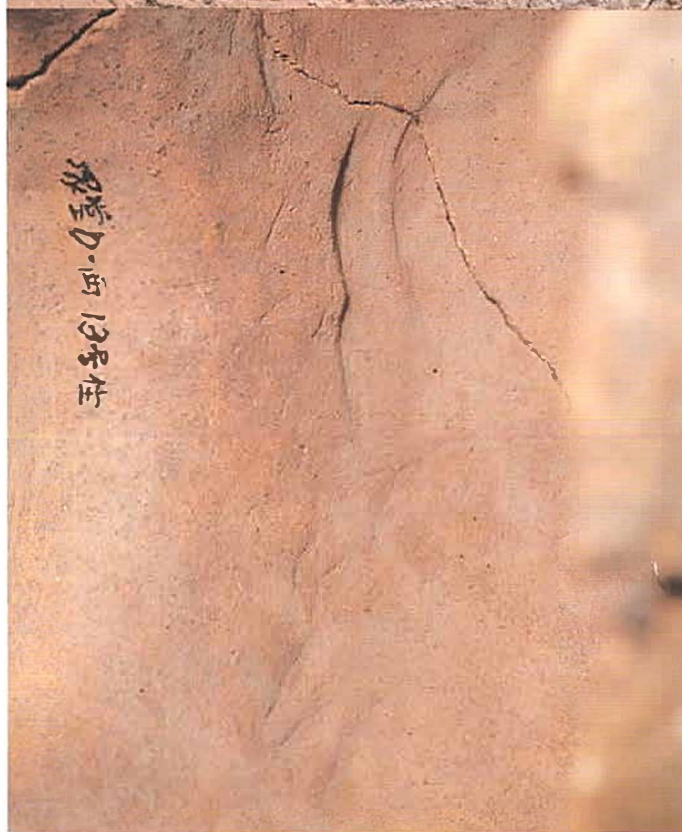
1. 9号住居跡出土硬質竹管文土器 (315)



2. 出土遺物色調説明使用の色名帳



同 斜格子タタキ目〈同〉



13号住居跡出土土器 (506) 当て具痕〈実大〉

序

『浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集（第2分冊）が刊行の運びとなりました。

この報告書は、福岡県教育委員会が建設省から委託を受けて、一般国道210号線浮羽地区バイパス建設に伴い、1979年度から実施をしている文化財の調査記録であります。

今回の報告は、このなかで1979年度に調査した塚堂遺跡D地区についての成果の一部を『塚堂遺跡Ⅳ』としてまとめたものであります。

本書が、文化財への親しみと活用に御利用いただければ幸甚に存じます。

発刊にあたり、調査に御協力いただいた地元の方々、吉井町教育委員会、建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所に心からお礼申し上げます。

1985年3月30日

福岡県教育委員会

教育長 友野 隆

例 言

1. 本書は、1979年度以来、福岡県教育委員会が建設省から委託を受けて、一般国道210号線 浮羽バイパス建設に伴い破壊される埋蔵文化財の発掘調査を実施した遺跡の第4冊目の報告書である。
2. 本書に収録した遺跡は、福岡県浮羽郡吉井町所在の「塚堂遺跡」で、バイパス建設予定地内のD地区の遺構検出状態・遺物出土状態を中心に、『塚堂遺跡 IV』D地区（第2分冊）として報告するものである。
3. D地区の調査は、福岡県教育庁管理部文化課主任技師 馬田弘稔・同池辺元明が担当した。
4. 調査後の整理は、県立九州歴史資料館で実施し、遺物の復原作業には、文化課嘱託 岩瀬正信の指導のもとに、整理作業塚堂班員と馬田があたり、遺物の実測作業には、文化課整理補助員 平田晴美・原富子と馬田他があたった。
また、遺物写真の撮影作業には、資料館技術主査 石丸洋（巻頭図版）・文化課整理補助員 平島美代子（図版）があたり、遺構図面の整理は馬田、製図は文化課整理補助員 豊福弥生・鶴田佳子と馬田、遺物図面の整理は馬田、製図は豊福と馬田があたった。
5. 本書の編集・執筆は、馬田が担当した。

本文目次

序

第1章 はじめに

第1節 調査の経過と調査組織	1
1. 調査の経過	1
2. 調査の組織と関係者	1
第2節 調査・整理・保管・公開の方法	2
1. C・D地区調査前の知見	2
2. 調査の方法	3
3. 整理の方法	6
4. 保管の方法	7
5. 公開の方法	8

第2章 D地区の調査

第1節 はじめに	11
第2節 遺構と遺物	11
1. 住居跡	11
1号住居跡	13
2号住居跡	22
2号A(新)住居跡	22
2号B(古)住居跡	24
3号住居跡	26
4号住居跡	27
5号住居跡	33
6号A(新)住居跡	40
6号B(古)住居跡	45
7号A(新)住居跡	46
7号B(古)住居跡	62
9号住居跡	68
10号住居跡	85
11号A(新)・B(古)住居跡	90
12号住居跡	114
13号住居跡	117
14号住居跡	124
15号住居跡	130
16号住居跡	134

17号 A (新) · B (古) 住居跡	136
18号住居跡	150
19号住居跡	151
20号住居跡	152
21号住居跡	162
2. 掘立柱建物	165
1号掘立柱建物	165
2号掘立柱建物	165
3号掘立柱建物	166
4号掘立柱建物	167
5号掘立柱建物	168
6号掘立柱建物	170
7号掘立柱建物	170
3. 土塚	171
1号土塚	171
2号土塚	173
3号土塚	173
4号土塚	173
5号土塚	173
6号土塚	175
7号土塚	175
8号土塚	175
9号土塚	175
4. 円形周溝	175
1号円形周溝	176
2号円形周溝	178
3号円形周溝	178
4号円形周溝	179
5号円形周溝	179
6 · 7号円形周溝	180
8号円形周溝	181
9号円形周溝	184
10号円形周溝	185

11号円形周溝	186
5. 溝状遺構	195
1号溝状遺構	196
2号溝状遺構	196
3号溝状遺構	196
4号溝状遺構	197
5号溝状遺構	199
6. その他の遺物	200
縄文土器	200
弥生土器	202
軟質沈線文土器	202
土師器	202
軟質縄蓆タタキ目土器	202
須恵器	203
土製品	206
鉄製品	206
ガラス製品	210
石製品	210

第3章 おわりに

第1節 塚堂遺跡の調査・整理報告書について	215
1. A～D地区の住居跡出土状態	215
2. A～D地区の遺物出土状態	217
第2節 塚堂遺跡の各時代について	218
1. 縄文時代	218
2. 弥生時代	219
3. 古墳時代	219
4. 歴史時代	219
5. 過去・現在・今後	220

図 版 目 次

- 巻頭図版 1 1. 9号住居跡出土硬質竹管文土器(315)・土師器(313)
2. 13号住居跡出土斜格子タタキ目土師器(506)
- 巻頭図版 2 1. 9号住居跡出土硬質竹管文土器(315)
2. 出土遺物色調説明使用の色名帳
- 巻頭図版 3 1. 13号住居跡出土土器(506) 当て具痕〈実大〉
2. 同 斜格子タタキ目
-
- 図版 152 1号住居跡出土土器①
- 図版 153 1号住居跡出土土器②
- 図版 154 1号住居跡出土土器③
2号住居跡出土土器・ガラス小玉
- 図版 155 4号住居跡出土土器①
- 図版 156 4号住居跡出土土器②
- 図版 157 5号住居跡出土土器①
- 図版 158 5号住居跡出土土器②, 6号A(新)住居跡出土土器①
- 図版 159 6号A(新)住居跡出土土器②
6号B(古)住居跡出土ガラス小玉
7号A(新)住居跡出土土器①
- 図版 160 7号A(新)住居跡出土土器②
- 図版 161 7号A(新)住居跡出土土器③
- 図版 162 7号A(新)住居跡出土土器④
- 図版 163 7号A(新)住居跡出土土器⑤
- 図版 164 7号A(新)住居跡出土土器⑥
- 図版 165 7号A(新)住居跡出土土器⑦
- 図版 166 7号A(新)住居跡出土土器⑧
- 図版 167 7号A(新)住居跡出土土器⑨・同M24出土鉄刀子
- 図版 168 7号B(古)住居跡出土土器①
- 図版 169 7号B(古)住居跡出土土器②
- 図版 170 7号B(古)住居跡出土土器③
- 図版 171 7号B(古)住居跡出土土器④
9号住居跡出土土器①
- 図版 172 9号住居跡出土土器②
- 図版 173 9号住居跡出土土器③
- 図版 174 9号住居跡出土土器④
- 図版 175 9号住居跡出土土器⑤
- 図版 176 9号住居跡出土土器⑥
10号住居跡出土土器①
- 図版 177 10号住居跡出土土器②
- 図版 178 10号住居跡出土土器③
- 図版 179 10号住居跡出土土器④

- 11号住居跡出土土器①
- 図版 180 11号住居跡出土土器②
- 図版 181 11号住居跡出土土器③
- 図版 182 11号住居跡出土土器④
- 図版 183 11号住居跡出土土器⑤
- 図版 184 11号住居跡出土土器⑥
- 図版 185 11号住居跡出土土器⑦
- 図版 186 11号住居跡出土土器⑧
- 図版 187 11号住居跡出土土器⑨
- 図版 188 11号住居跡出土土器⑩・鉄刀子
12号住居跡出土土器①
- 図版 189 12号住居跡出土土器②
- 図版 190 13号住居跡出土土器
13・14号住居跡出土土器
- 図版 191 14号住居跡出土土器
15号住居跡出土土器①
- 図版 192 15号住居跡出土土器②
16号住居跡出土土器・鉄鏝
17号住居跡出土土器①
- 図版 193 17号住居跡出土土器②
- 図版 194 17号住居跡出土土器③
- 図版 195 17号住居跡出土土器④
- 図版 196 17号住居跡出土土器⑤
- 図版 197 17号住居跡出土土器⑥
- 図版 198 17号住居跡出土土器⑦・ガラス小玉
18号住居跡出土土器
- 図版 199 20号住居跡出土土器①
- 図版 200 20号住居跡出土土器②
- 図版 201 21号住居跡出土土器
- 図版 202 1・7・8号円形周溝出土土器
8号円形周溝出土ガラス小玉
9・10号円形周溝出土土器
11号円形周溝出土土器①
- 図版 203 11号円形周溝出土土器②
- 図版 204 11号円形周溝出土土器③
- 図版 205 11号円形周溝出土土器④・ガラス小玉
- 図版 206 縄文・弥生土器，土師器
- 図版 207 軟質縄蒔タタキ目・沈線文土器，須恵器①
- 図版 208 須恵器②
- 図版 209 土製品・石製品①・鉄製品①
- 図版 210 鉄製品②
- 図版 211 石製品②

挿 図 目 次

第 1 図	塚堂遺跡の位置と周辺主要遺跡（1/200000）〔馬田弘稔作成，豊福弥生製図〕	9
第 2 図	住居跡模式図と柱穴間距離計測例図〔馬田作成，豊福製図〕	12
第 3 図	カマド模式縦断面図〔馬田作成，豊福製図〕	13
第 4 図	1号住居跡実測図（1/60）〔川述昭人・馬田実測，豊福製図〕	14
第 5 図	1号住居跡カマド実測図（1/20）〔馬田実測，豊福製図〕	15
第 6 図	1号住居跡出土土器実測図①（1/3）〔平田晴美・原富子実測，豊福製図〕	17
第 7 図	1号住居跡出土土器実測図②（1/3）〔原実測，豊福製図〕	18
第 8 図	1号住居跡出土土器実測図③（1/3）〔馬田・原実測，豊福製図〕	19
第 9 図	1号住居跡出土土器実測図④（1/3）〔馬田・原実測，豊福製図〕	20
第 10 図	1号住居跡出土土器実測図⑤（1/3）〔馬田・原実測，豊福製図〕	21
第 11 図	2号A(新)・B(古)・3号住居跡実測図（1/60） 〔柳田康雄・馬田実測，豊福製図〕	23
第 12 図	2号A(新)住居跡カマド実測図（1/20）〔新原正典実測，馬田作成，豊福製図〕	折込み
第 13 図	2号A(新)住居出土土器実測図（1/3）〔馬田・原実測，豊福製図〕	26
第 14 図	3号住居跡出土土器実測図（1/3）〔馬田実測，豊福製図〕	27
第 15 図	4号住居跡実測図（1/60）〔浜田信也・馬田・池辺元明実測，豊福製図〕	28
第 16 図	4号住居跡カマド実測図（1/20）〔馬田実測，豊福製図〕	折込み
第 17 図	4号住居跡出土土器実測図①（1/3）〔馬田・平田・原実測，豊福製図〕	30
第 18 図	4号住居跡出土土器実測図②（1/3）〔馬田・平田・原実測，豊福製図〕	31
第 19 図	4号住居跡出土土器実測図③（1/3）〔馬田・平田・原実測，豊福製図〕	32
第 20 図	5号住居跡実測図（1/60）〔浜田・馬田・池辺実測，豊福製図〕	34
第 21 図	5号住居跡カマド実測図（1/20）〔馬田実測，豊福製図〕	折込み
第 22 図	5号住居跡出土土器実測図①（1/3）〔馬田・平田・原実測，豊福製図〕	37
第 23 図	5号住居跡出土土器実測図②（1/3）〔馬田・平田・原実測，豊福製図〕	38
第 24 図	5号住居跡出土土器実測図③（1/3）〔馬田・平田・原実測，豊福製図〕	39
第 25 図	6号A(新)・B(古)住居跡実測図（1/60） 〔浜田・馬田・池辺実測，豊福製図〕	40
第 26 図	6号A(新)住居跡カマド実測図（1/20）〔池辺実測，馬田，豊福製図〕	折込み
第 27 図	6号A(新)住居跡出土土器実測図①（1/3）〔馬田・原実測，豊福製図〕	43
第 28 図	6号A(新)住居跡出土土器実測図②（1/3）〔馬田・原実測，豊福製図〕	44
第 29 図	6号B(古)住居跡出土土器実測図（1/4）〔馬田実測，豊福製図〕	45
第 30 図	7号A(新)・B(古)住居跡実測図〔浜田・馬田・池辺実測，豊福製図〕	折込み
第 31 図	7号A(新)住居跡南壁中央土壇実測図（1/30）〔馬田実測，豊福製図〕	47

第 32 図	7号A(新)住居跡カマド実測図(1/20)〔馬田実測, 豊福製図〕	折込み
第 33 図	7号A(新)住居跡出土土器実測図①(1/3)〔馬田・原実測, 豊福製図〕	50
第 34 図	7号A(新)住居跡出土土器実測図②(1/3)〔馬田・原実測, 豊福製図〕	51
第 35 図	7号A(新)住居跡出土土器実測図③(1/3)〔馬田・原実測, 豊福製図〕	53
第 36 図	7号A(新)住居跡出土土器実測図④(1/3)〔馬田・原実測, 豊福製図〕	54
第 37 図	7号A(新)住居跡出土土器実測図⑤(1/3) 〔馬田・平田・原・長野智恵子実測, 豊福製図〕	55
第 38 図	7号A(新)住居跡出土土器実測図⑥(1/3) 〔馬田・平田・原・長野智恵子実測, 豊福製図〕	56
第 39 図	7号A(新)住居跡出土土器実測図⑦(1/3) 〔馬田・平田・原・長野智恵子実測, 豊福製図〕	57
第 40 図	7号A(新)住居跡出土土器実測図⑧(1/3)〔馬田実測, 豊福製図〕	59
第 41 図	7号A(新)住居跡出土土器実測図⑨(1/3)〔馬田・原実測, 豊福製図〕	60
第 42 図	7号A(新)住居跡出土土器実測図⑩(1/3)〔馬田実測, 豊福製図〕	61
第 43 図	7号B(古)住居跡出土土器実測図①(1/3) 〔馬田・原・黒岩由美実測, 豊福製図〕	64
第 44 図	7号B(古)住居跡出土土器実測図②(1/3)〔馬田・原実測, 豊福製図〕	65
第 45 図	7号B(古)住居跡出土土器実測図③(1/3)〔馬田・原実測, 豊福製図〕	66
第 46 図	7号B(古)住居跡出土土器実測図④(1/3)〔馬田実測, 豊福製図〕	67
第 47 図	9号住居跡実測図(1/60)〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	折込み
第 48 図	9号住居跡カマド実測図(1/20)〔馬田実測, 豊福製図〕	折込み
第 49 図	9号住居跡出土土器実測図①(1/3)〔馬田・原実測, 豊福製図〕	74
第 50 図	9号住居跡出土土器実測図②(1/3)〔馬田・平田・原実測, 豊福製図〕	75
第 51 図	9号住居跡出土土器実測図③(1/3) 〔平田・原・長野・黒岩実測, 豊福製図〕	76
第 52 図	9号住居跡出土土器実測図④(1/3)〔馬田・原・林真理子実測, 豊福製図〕	77
第 53 図	9号住居跡出土土器実測図⑤(1/3)〔馬田・原実測, 豊福製図〕	79
第 54 図	9号住居跡出土土器実測図⑥(1/3)〔馬田実測, 豊福製図〕	82
第 55 図	9号住居跡出土土器実測図⑦(1/3)〔馬田・原実測, 豊福製図〕	83
第 56 図	9号住居跡出土土器実測図⑧(1/3)〔原実測, 豊福製図〕	84
第 57 図	10号住居跡実測図(1/60)〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	85
第 58 図	10号住居跡出土土器実測図①(1/4)〔馬田・平田・林実測, 豊福製図〕	87
第 59 図	10号住居跡出土土器実測図②(1/4)〔馬田・平田・林実測, 豊福製図〕	88
第 60 図	10号住居跡出土土器実測図③(1/4)〔馬田・原実測, 豊福製図〕	折込み
第 61 図	10号住居跡出土土器実測図④(1/4)〔馬田・平田実測, 豊福製図〕	89

第 62 図	11号A(新)・B(古)住居跡実測図(1/60) 〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	91
第 63 図	11号A(新)住居跡カマド実測図(1/20)〔馬田実測, 豊福製図〕	折込み
第 64 図	11号住居跡出土土器実測図①(1/3)〔馬田・平田実測, 豊福製図〕	95
第 65 図	11号住居跡出土土器実測図②(1/3)〔馬田・平田・原実測, 豊福製図〕	96
第 66 図	11号住居跡出土土器実測図③(1/3)〔馬田・平田・原実測, 豊福製図〕	97
第 67 図	11号住居跡出土土器実測図④(1/3)〔馬田・平田・原実測, 豊福製図〕	98
第 68 図	11号住居跡出土土器実測図⑤(1/3)〔馬田・平田実測, 豊福製図〕	101
第 69 図	11号住居跡出土土器実測図⑥(1/3)〔馬田・平田実測, 豊福製図〕	103
第 70 図	11号住居跡出土土器実測図⑦(1/3)〔馬田・平田・原・林実測, 豊福製図〕	104
第 71 図	11号住居跡出土土器実測図⑧(1/3)〔馬田・平田・原実測, 豊福製図〕	105
第 72 図	11号住居跡出土土器実測図⑨(1/3)〔馬田・平田・原実測, 豊福製図〕	107
第 73 図	11号住居跡出土土器実測図⑩(1/3)〔馬田・平田実測, 豊福製図〕	109
第 74 図	11号住居跡出土土器実測図⑪(1/3)〔馬田・平田・原実測, 豊福製図〕	111
第 75 図	11号住居跡出土土器実測図⑫(1/3)〔馬田・平田実測, 豊福製図〕	112
第 76 図	12号住居跡実測図(1/60)〔浜田・池辺実測, 馬田作成, 豊福製図〕	114
第 77 図	12号住居跡出土土器実測図①(1/3)〔馬田・原実測・豊福製図〕	115
第 78 図	12号住居跡出土土器実測図②(1/3)〔原実測, 豊福製図〕	116
第 79 図	13号住居跡実測図(1/60)〔馬田実測, 豊福製図〕	117
第 80 図	13号住居跡カマド実測図(1/20)〔馬田実測, 豊福製図〕	折込み
第 81 図	13号住居跡出土土器実測図①(1/3)〔馬田実測, 豊福製図〕	120
第 82 図	13号住居跡出土土器実測図②(1/3)〔馬田実測, 豊福製図〕	121
第 83 図	13号住居跡出土土器実測図③(1/3)〔馬田実測, 豊福製図〕	123
第 84 図	14号住居跡実測図(1/60)〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	125
第 85 図	14号住居跡カマド実測図(1/20)〔新原実測, 馬田作成, 豊福製図〕	127
第 86 図	14号住居跡出土土器実測図(1/3)〔馬田実測, 豊福製図〕	129
第 87 図	15号住居跡実測図(1/60)〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	131
第 88 図	15号住居跡カマド実測図(1/20)〔浜田信也実測, 馬田作成, 豊福製図〕	折込み
第 89 図	15号住居跡出土土器実測図(1/3)〔馬田・原実測, 豊福製図〕	133
第 90 図	16号住居跡実測図(1/60)〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	134
第 91 図	16号住居跡出土土器実測図(1/4)〔馬田実測, 豊福製図〕	135
第 92 図	17号A(新)・B(古)住居跡実測図(1/60) 〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	折込み
第 93 図	17号A(新)住居跡カマド実測図(1/20)〔浜田実測, 馬田作成, 豊福製図〕	折込み
第 94 図	17号住居跡出土土器実測図①(1/3)〔馬田・原・林実測, 豊福製図〕	140

第 95 図	17号住居跡出土土器実測図② (1/3)〔馬田・原・林実測, 豊福製図〕	141
第 96 図	17号住居跡出土土器実測図③ (1/3)〔馬田・平田実測, 豊福製図〕	143
第 97 図	17号住居跡出土土器実測図④ (1/3)〔馬田実測, 豊福製図〕	145
第 98 図	17号住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)〔馬田・平田実測, 豊福製図〕	147
第 99 図	17号住居跡出土土器実測図⑥ (1/3)〔馬田・原・林実測, 豊福製図〕	148
第 100 図	17号住居跡出土土器実測図⑦ (1/3)〔原実測, 豊福製図〕	149
第 101 図	17号住居跡出土土器実測図⑧ (1/3)〔平田実測, 豊福製図〕	150
第 102 図	18号住居跡・1号掘立柱建物・8号円形周溝実測図 (1/60) 〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	折込み
第 103 図	18号住居跡出土土器実測図 (1/3)〔馬田・平田・林実測, 豊福製図〕	151
第 104 図	19号住居跡出土土器実測図 (1/4)〔馬田実測, 豊福製図〕	152
第 105 図	19号住居跡・10号円形周溝・5号溝状遺構実測図 (1/60) 〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	折込み
第 106 図	20号住居跡実測図 (1/60)〔浜田・池辺実測・馬田, 豊福製図〕	153
第 107 図	20号住居跡カマド実測図〔馬田実測, 豊福製図〕	折込み
第 108 図	20号住居跡出土土器実測図① (1/3)〔馬田・平田・原・林実測, 豊福製図〕	157
第 109 図	20号住居跡出土土器実測図② (1/3)〔馬田・原, 林実測, 豊福製図〕	159
第 110 図	21号住居跡実測図 (1/60)〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	163
第 111 図	21号住居跡出土土器実測図 (1/4)〔馬田・林実測, 豊福製図〕	164
第 112 図	2号掘立柱建物実測図 (1/4)〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	165
第 113 図	3～7号掘立柱建物, 34号土塚, 1号溝状遺構実測図 (1/60) 〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	166
第 114 図	3号掘立柱建物実測図 (1/60)〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	167
第 115 図	4号掘立柱建物実測図 (1/60)〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	168
第 116 図	5号掘立柱建物実測図 (1/60)〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	169
第 117 図	6号掘立柱建物実測図 (1/60)〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	170
第 118 図	7号掘立柱建物実測図 (1/60)〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	171
第 119 図	1・2号土塚, 2号溝状遺構実測図 (1/30) 〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	172
第 120 図	1号土塚出土土器実測図 (1/30)〔原実測, 豊福製図〕	173
第 121 図	3・4号土塚, 1号溝状遺構実測図 (1/30) 〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	174
第 122 図	1号円形周溝出土土器実測図① (1/4)〔馬田・原・林実測, 豊福製図〕	176
第 123 図	1号円形周溝出土土器実測図② (1/4)〔馬田・原実測, 豊福製図〕	177
第 124 図	2～7号円形周溝出土土器実測図 (1/4)〔馬田・林実測, 豊福製図〕	181

第 125 図	8号円形周溝出土土器実測図(1/4)〔馬田・林実測, 豊福製図〕	182
第 126 図	9号円形周溝実測図(1/60)〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	183
第 127 図	9号円形周溝出土土器実測図(1/4)〔馬田実測, 豊福製図〕	184
第 128 図	10号円形周溝出土土器実測図(1/4)〔馬田・林実測, 豊福製図〕	186
第 129 図	11号円形周溝実測図(1/60)〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕	187
第 130 図	11号円形周溝土器出土状態実測図①(1/30)〔新原・馬田実測, 豊福製図〕	188
第 131 図	11号円形周溝土器出土状態実測図②(1/20)〔馬田作成, 豊福製図〕	189
第 132 図	11号円形周溝出土土器実測図①(1/4)〔平田・原実測, 豊福製図〕	折込み
第 133 図	11号円形周溝出土土器実測図②(1/4)〔馬田・平田・原実測, 豊福製図〕	折込み
第 134 図	11号円形周溝出土土器実測図③(1/4)〔馬田・平田・原実測, 豊福製図〕	折込み
第 135 図	11号円形周溝出土土器実測図④(1/4)〔馬田・平田・原実測, 豊福製図〕	折込み
第 136 図	11号円形周溝出土土器実測図⑤(1/4)〔平田・原実測, 豊福製図〕	折込み
第 137 図	1号溝状遺構出土土器実測図(1/4)〔馬田実測, 豊福製図〕	196
第 138 図	4号溝状遺構出土土器実測図①(1/4)〔馬田・林実測, 豊福製図〕	197
第 139 図	4号溝状遺構出土土器実測図②(1/4)〔馬田・林実測, 豊福製図〕	198
第 140 図	4号溝状遺構出土土器実測図③(1/4)〔馬田・林実測, 豊福製図〕	199
第 141 図	5号溝状遺構出土土器実測図(1/4)〔馬田実測, 豊福製図〕	200
第 142 図	縄文・弥生土器, 土師器実測図(1/3)〔馬田実測, 豊福製図〕	201
第 143 図	軟質・硬質土器, 須恵器実測図(1/2)〔馬田実測, 豊福製図〕	203
第 144 図	須恵器実測図(1/2)〔馬田実測, 豊福製図〕	205
第 145 図	土製・製鉄・石製品実測図(1/1)〔馬田実測, 豊福製図〕	207
第 146 図	鉄製品実測図(1/2)〔馬田実測, 豊福製図〕	209
第 147 図	石斧・石鎌・石包丁実測図(1/2)〔馬田・小田和利実測, 豊福製図〕	211
第 148 図	砥石実測図(1/2)〔馬田実測, 豊福製図〕	213

表 目 次

表 1	塚堂遺跡調査区一覧表〔馬田弘稔作成〕	10
表 2	住居跡模式計測表〔馬田作成〕	12
表 3	カマド模式計測表〔馬田作成〕	13
表 4	1号住居跡計測表〔馬田作成〕	223
表 5	2号A(新)住居跡計測表〔馬田作成〕	223~224
表 6	2号B(古)住居跡計測表〔馬田作成〕	224
表 7	3号住居跡計測表〔馬田作成〕	224
表 8	4号住居跡計測表〔馬田作成〕	225

表	9	5号住居跡計測表〔馬田作成〕	225～226
表	10	6号A(新)住居跡計測表〔馬田作成〕	226
表	11	6号B(古)住居跡計測表〔馬田作成〕	226
表	12	7号A(新)住居跡計測表〔馬田作成〕	227
表	13	7号B(古)住居跡計測表〔馬田作成〕	227
表	14	9号住居跡計測表〔馬田作成〕	228
表	15	10号住居跡計測表〔馬田作成〕	229
表	16	11号住居跡計測表〔馬田作成〕	229～230
表	17	12号住居跡計測表〔馬田作成〕	230
表	18	13号住居跡計測表〔馬田作成〕	230
表	19	14号住居跡計測表〔馬田作成〕	231
表	20	15号住居跡計測表〔馬田作成〕	231～232
表	21	16号住居跡計測表〔馬田作成〕	232
表	22	17号A(新)住居跡計測表〔馬田作成〕	233
表	23	17号B(古)住居跡計測表〔馬田作成〕	233～234
表	24	18号住居跡計測表〔馬田作成〕	234
表	25	19号住居跡計測表〔馬田作成〕	234
表	26	20号住居跡計測表〔馬田作成〕	234～235
表	27	21号住居跡計測表〔馬田作成〕	235
表	28	1号掘立柱建物計測表〔馬田作成〕	235
表	29	2号掘立柱建物計測表〔馬田作成〕	236
表	30	3号掘立柱建物計測表〔馬田作成〕	236
表	31	4号掘立柱建物計測表〔馬田作成〕	237
表	32	5号掘立柱建物計測表〔馬田作成〕	237
表	33	6号掘立柱建物計測表〔馬田作成〕	238
表	34	7号掘立柱建物計測表〔馬田作成〕	238
表	35	出土遺物一覧表〔馬田作成〕	239～298

付 図 目 次

付 図 1	一般国道210号線 浮羽バイパス路線図と塚堂遺跡各調査区の位置 (1/1,000) 〔石山勲・新原・馬田・佐々木隆彦・小池史哲・豊福作成, 豊福製図〕
付 図 2	塚堂遺跡D地区遺構配置図 (1/200)〔馬田・豊福作成, 豊福製図〕
付 図 3	5～9号土坑, 1～7号円形周溝, 1・2・4号溝状遺構実測図 (1/80) 〔浜田・馬田・池辺実測, 豊福製図〕

第1章 はじめに

第1節 調査の経過と調査組織	1
1. 調査の経過	1
2. 調査の組織と関係者	1
第2節 調査・整理・保管・公開の方法	2
1. C・D地区調査前の知見	2
2. 調査の方法	3
3. 整理の方法	6
4. 保管の方法	7
5. 公開の方法	8

第1章 はじめに

第1節 調査の経過と調査組織

1. 調査の経過

『塚堂遺跡』は、福岡県浮羽郡吉井町大字宮田・徳丸に所在する（第1図）。

調査は、福岡県教育委員会が、『一般国道210号線浮羽バイパス』建設に伴い、破壊される埋蔵文化財として、建設省の委託を受けて、1979年度以降発掘を実施してきたもので、1984年度までに、A～E地区を調査し、4冊の報告書を刊行している。（図版142，表1）

調査に至る経過は、上記報告書の『塚堂遺跡Ⅰ』^(註1)に収録し、D・E-2～4地区を除く各地区の調査の経過については、同書や『塚堂遺跡Ⅱ』^(註2)・『塚堂遺跡Ⅲ』^(註3)に収録されているため、本書では省略し、D地区について略説する。

D地区の調査は、1980年5月～1981年3月にかけて実施し、10月まではC地区の調査も併行させたが、1980年度は、例年になく降雨量が多く、地区境界に農業用水路が流れていることもあって、10月までは、両地区共に幾度となく水没した。

このため、10月までの調査は、両地区のなかで、日々の水量の少ない地区を排水して発掘したが、排水作業に1日以上を要することもあるなど、遅々として進まなかった（『塚堂遺跡Ⅰ』図版87。10号住居跡の遺物出土状態・10号円形周溝の河原石出土状態は、水没・排水のなかで、地山が細砂質土であったことも不幸して、残念ながら図示し得なかった）。

また、調査区北側は、バイパス建設路線内ではあるが、既に農業用水路側溝が仮設されていたため、12・17・18号住居跡などで、未調査区を多く残すこととなった。

11月以降は、D地区のみの調査で、水没の恐怖は去ったが、降霜・降雪によって、調査の遅れを回復することはできなかった（『塚堂遺跡Ⅳ（第1分冊）』^(註4)図版138～140）。

以上のことに加えて、後述する調査の方法で発掘を実施したため、出土遺構の「量」からすれば、昨今流行の発掘レベル（省力・省記録）に比べて、多大の日数を要することとなった。

しかし、遺構・遺物の出土状態の記録を通しての、「質」の向上からすれば……。とは言え、調査担当者の行政的なものを含めての力量不足こそ、当初に問題とすべきではあるが……。

関係各位をはじめ、塚堂遺跡で日々の営みをされた当時の方々に対し、調査担当者として深くお詫びすると共に、深く反省する。

2. 調査の組織と関係者

1980年度の、D地区調査の組織と関係者については、既刊の『塚堂遺跡Ⅰ』に示したC地区

についてのものと同じであるため、再録を避けて省略する。

1984年度の、D地区の整理報告をするにあたっての組織と関係者は、下記のとおり。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所		福岡県教育委員会	
所長	沢山 民季	総括 教育長	友野 隆
副所長	寺崎 学	教育次長	安倍 徹
工務課課長	堂園 良光	管理部部長	伊藤 博之
第1係長	松下 敏男	文化課課長	前田 栄一
第2係長	古賀 一征	課長補佐	中村 一世
第3係長	緒方 良一	庶務	庶務係長 松尾 満
調査課課長	松嶋 憲昭	主任主事	川村喜一郎
調査係長	小野 義春	調査	調査第2係長 栗原 和彦
		主任技師	馬田 弘稔

なお、遺物の整理作業には、有馬信子・高橋アイ子・竹田スミ子・鳥巢純子・平石史子・若松和子、遺構図面の整理・面積計測および土器一覧表の浄書などの作業には、豊福弥生・関久江・養原鈴美・原カヨ子・真鍋弘子の各員に多大の協力を受け、第147図の打製石斧・石鎌の実測を、小田和利氏にお願いした。記して感謝する。

第2節 調査・整理・保管・公開の方法

1. 塚堂遺跡C・D地区調査前の知見

1979年度の調査は、前方部を西側・後円部を東側にとる塚堂古墳の周濠部のみの調査で、この際、前方部前縁外濠外縁（葺石肩）西側（B地区）と前方部南側縁外濠外縁（葺石肩）南側（C地区）の両周辺部については、前者は古墳時代前期の遺構の一部調査、後者は未調査であった。^{（註「I」）}

また、この際の前方部南側内堤では、縄文時代の遺構の発掘を一部実施し、歴史時代の黒色土器などの遺物のわずかの散布を確認すると共に、古墳南東部（D地区）を試掘し、弥生時代後期の遺構の一部（10号住居跡）を確認していた。

加えて、遺跡周辺の圃場整備事業に伴う事前調査を、1979年度に実施した際に、塚堂古墳東地区で、弥生～古墳時代前期の遺構の所在も確認していた（付図1、表1）

以上のことの他に、塚堂古墳の西方約600mには、同古墳より古い前方後円墳で、国指定重要文化財の金銅装眉庇付冑などを長持形石棺と共に出土した『月の岡古墳』、同約500mには装飾古墳として著名な前方後円墳である、国指定史跡『日の岡古墳』の所在も、既知のものであった（第1図）。

2. 調査の方法

以上のことから、C地区では古墳（周濠）と他の遺構との時期的関係・D地区では3古墳との立地的関係を主に明らかにするための一助としての、調査着手以降破壊される塚堂遺跡の記録保存を行うこととした。

上記の記録保存のための調査の方法は、以下のとおりである。

C地区 既述の前方部南側縁外濠未調査区は、排土処理などの困難から完掘を断念し、外濠外縁葺石^(註「J」)1～2段までの検出によるプランの追認と、この部分での他遺構との切り合い関係の確認を行った。

C地区からは、縄文時代に属する明確な遺構は検出されず、弥生時代後期～古墳時代前半の住居跡などが出土したが、削平が著しく、重複関係にある2軒の住居跡のなかで、3号住居は弥生時代後期、7号住居は既述外縁部まで遺存せず、その南側で削平され、出土遺物もないというものであった。他の6軒のなかで、2・5・6号住居が5世紀前半代のものであるが、同様に削平が著しく、既述外縁部との重複関係にもなかった。

しかし、上述の追認時に、外濠埋土中に設けられた小土壇を検出した。遺物の出土はないが、土壇埋土は、住居などの他の埋土とは明らかに異なり、D地区1・2号土壇埋土と同様で、特に2号土壇プランと類似したプランであったことは、外濠の埋没過程を知る際の一助となるであろう。

なお、遺構・遺物の出土状態が以上のようなものであったため、プラン検出後に削り取った各住居埋土は、すべて水洗した結果、多くのガラス小玉を収納することができた。埋土を『削らずに掘り下げよ』との御助言も一部に頂いたが、削り取った埋土中にも、出土状態不明の遺物があることをして、『出土状態』なる語句を以下に使用することを許容願いたい。

D地区 出土遺構・遺物の出土状態の記録を主とし、C地区出土遺構・遺物の遺存状態の不良をも補う一助とすべく、調査を実施した。

各遺構別の調査方法（対処の仕方）は、各遺構の説明項に譲り、以下は主に遺構・遺物への調査時の対処の不備であった点を明らかにしておく。

㊸ 南東隅部（図版5・6）

2・3号住居……他の遺構の水没を最小限度にするため、1～5号溝状遺構と共に、南東隅部検出の2・3号住居を当初に掘り下げ、遺物の出土もわずかであったため、集水箇所とした。

このため、遺物の出土状態は図示し得なかったが、柱穴・土壇・カマドの発掘は、10月以降に実施した。

1～7号円形周溝……重複が著しく、各所にセクション壁を設定して発掘したが、後述するように、切り合い関係が充分には確認し得なかった例もあった。

また、各周溝部の地山が、2・3号住居部と共に、細砂質土であることに加えて、埋土中から出土した若干の土器片を、滞水中で出土状態のまま保持することができず、遺物の出土状態は図示し得なかった。

㊦ 南端部 (図版10・11)

1号住居……遺物の出土状態は、図示し得たが、後述するように、土坑・柱穴の一部を図示しないという重大な過失をしてしまった。

3～7号掘立柱建物……すべての柱穴の断面観察は実施していない。若干を試みたが、柱痕などは確認し得なかった。また、各建物の柱列配置の一部は、実測図(縮尺1/20)整理段階での確認である。

㊧ 南西隅部 (図版12～15)

5号住居……図版33-1に示す出土状態を、水没・排水の繰返しで、図示する幾を逸してしまった。

20号住居……後述するように、カマド検出時に、第107図にアミ部で示す河原石を、写真・図示することなく除去してしまった。

7号A(新)住居……溝状遺構AM22・24南半部埋度と4号溝埋土の差位がわずかで、若干4号溝埋土までM22・24として掘り下げてしまった部分がある。

7号B(古)住居……BD23の焼土土坑の断面観察後の図示を実施しなかった。

㊨ 北西隅部 (図版19～21)

11号住居……20号住居での炭化材などの出土状態を図示し得なかったことから、11号住居では図版68の出土状態を、縮尺1/40の平板実測で実施し、その直後に同1/20実測図を得ようとしたが、20号住居同様に水没・排水作業にて、同1/20での図示には至らなかった。

19号住居・10号円形周溝・5号溝……図版132-1に示すように、各遺構間の新・旧関係確認後の発掘途中で、水没・排水後の発掘再開の際、既掘部の清掃時に各プランを拡幅して発掘してしまった部位があった。(第105図参照)

㊩ 北端部 (図版9)

15号住居……図版93・94に示す河原石群の出土状態を、11号周溝が未調査の段階であったため、10号周溝出土河原石群例などが、15号住居攪乱土坑内から出土したものと認識で、図示していない。したがって、石群の個数・法量・個別の観察などは、ほとんどしなかった。

最後に、住居付設のカマドの調査方法の概要を示す。

塚堂遺跡出土のカマドは、本体が埋土と明確に識別し得るほど堅固な粘土で築かれたものがなく、天井部が完存する例もない。また、内壁が赤褐色に焼けて、原位置・旧状のまま検出される例もほとんどなく、一部が暗赤紫色を呈するのみである。

これらのことは、C地区6号住居を発掘時に、南壁中央土坑・床中央土坑・北壁中央焼土塊がほぼ直列するなかで(図版149)中央土坑に明確な灰・焼土などは認められず、北壁で床面に接していた焼土塊は、地山の細砂質土ではなく、粘質土ではあったが、直下および周辺の床面などは焼けておらず、これをカマド付設住居と確認することはできなかったことから、十分に予期できた(残存壁高約10cm、詳細は『塚堂遺跡Ⅰ』参照)。

上記のことから、D地区では、住居プラン検出の際、当初に北壁中央部付近のみを、単に掘

り下げるのではなく、カマド袖（あるいは焼土粒など）の所在を確認できるレベルまで、慎重に削り下げる方法をとった。

このことにより、未調査区を残す住居を除くすべての古墳時代の住居で、カマドの所在を確認し得た（図版144に示すA地区3号住居のように、床中央炉のみで、同様の調査法でカマドが付設されなかったことを確認した例もある）。

なお、この際、大半のカマドは住居壁プラン検出面とほぼ同じレベルで、その所在を確認したが、図版76に示す11号住居例のように、やや下位で、その所在を確認したものもある。

しかし、カマドは、同一住居内に1基だけ付設するとは限らず、改築前の古カマド残滓の有無なども考慮すべきであり、住居埋土のその他の部分の発掘も、同様に慎重を期したが、A地区1号住居などのような例は、D地区ではなかった。（図版143）

（註「I」）
その後の調査法は下記のとおりである。

1. 所在確認後、カマド上面プランを検出し、検出状態の写真・実測記録。
2. 検出プランよりも若干の余裕を保って掘り、カマド内埋土などは、壁際までは完掘しない。この状態を、カマド発掘状態として写真・実測記録。
3. 断面写真・実測図を多数作成。

1～3のことは、9号住居（図版42～49）・20号住居（図版114～122）などのように、やや詳しい図版の掲示で示したが、一部を残余頁の関係で割愛している（B地区1号住居西カマド例を、『塚堂遺跡I』では割愛せずに、同書図版42～47中に計43板の写真で、第53図中に10ヶ所の断面図で示しているのを、参照されたい）。

1～3の作業を通して、最終的にカマドプランを把握・記録するという方法を採用した。

このことよって、より詳細なカマド構造（補修状態も含めて）の確認が可能で、掘り誤りを防ぐことができるが、縦断面図主軸と実際のカマド主軸とに、若干の差位が生じる例もある。

しかし、この発掘例の方が、遺存度の要い、はた、初期カマドの構造の確認・記録には、最善の方法と言えよう。他遺跡での同時期前後の住居調査例（塚堂遺跡C地区6号住居焼土塊・D地区7号B住居焼土土壇例も含めて）で、「焼土塊・灰層」検出のみとして、「断面図は1枚」のみ記録し、これがために「カマド残滓」を炉跡として報告した例は、少なからずあると思われる、単に焼土塊・粘土塊出土として処理された住居も多いはずである。

明確な粘土を使用しない例では、壁体は崩壊・流出するし、支脚は意識的に抜き去る例もあり、修復後の壁体は焼土・灰残滓を主組材として設ける例もあり、この際の支脚掘り方は地山には達しない。

また、前述「焼土塊・灰層」除去後のプランは、不整形の凹凸を呈すピットのみとなってしまう例すら多い。

以上の調査法（最良だとは思わないが）以外に、例えば、

- ①. 良心的に一応 図版143—1 に似た状態まで掘り、
- ②. 写真・実測図などの記録もなく、スコップにて支脚使用の小形甕を掘り出し、

④. 若干の説明を加える。

なお、D地区の調査による、記録保存のための実測図は以下のとおり。

遺構・遺物出土状態実測図

縮尺1/10……各カマドのすべてと、住居・円形周溝の一部の個別図（第5・12・16・21・26・31・32・48・63・79・80・85・88・93・107・130・131図）。実測図面枚数は20枚。

縮尺1/20……上記以外の実測図。実測図面枚数は42枚。

縮尺1/40……住居跡の一部（第26・30・62・92・107図）。実測図面枚数は3枚。

縮尺1/100……縮尺1/20実測図と重複した遺構配置図。実測図面枚数は2枚（他に、スケッチ図1枚）。

縮尺1/200……割り付け杭打ち図1枚。

3. 整理の方法

遺物への註記 遺跡名・地区名・遺構名・出土位置・層位と共に、出土状態実測原図中の出土番号の各項を註記することを原則とした。

しかし、実測していない破片については、残念ながら、上記原則が許される体制ではないので、収納箱（後述）内に上記の各項註記の紙製ラベルを入れ、箱外にビニール製粘着テープ（後述）を貼って、雑然と収納。

遺物の実測 実測番号を3桁の001番から順次使用し、前述の各項を実測図中に註記し、別途に遺物実測台帳を作成することを原則とした。

実測番号は、遺構別に連続することも原則としたが、復原作業の進行上これが徹底しなかったため、台帳では、各遺構別に新たに地区名・構名と共に、001番からの土器番号を順次使用して、この番号を前記3桁の実測番号の前に付して、各遺構内で何個体の実測をしたかを明らかにし、都合6桁の番号を、各遺物の個別認識番号とした。

しかし、残念ながら、約50個体については諸種の御助言？などにより、個別認識番号を付すことを省略したため、無番となった。

なお、実測番号は、001～021・101～248・294～312・314～473・501～999までを使用し、他は欠番であるが、186～188は重複番号を使用してしまったため、実測個体総数は、実測番号を付したものの約850個体と前述無番の約50個体の、合計約900個体である。しかし、残余頁の関係で、39個体の実測図を掲載していないので、本報告書には約850個体の遺物を示した。

遺物の色調観察 日本色彩社編著『Today's COLOR/300』香取千尋発行、1974、東京、の色名帳を使用。この色名帳記載の連続番号1～300色中の何番目の番号の色調であるかを当初に記し、一般色の和名、(マンセル記号)の順で、器内59 明るい茶(3.0YR 5.5/4.0)、器外63

明るい茶 (3.5YR 5.5/4.0) 器肉73 黄茶色 (5.0YR 5.0/5.0) などと示した。

上記例では、一般色名は59・63共に、同一色名に属するが、通例報告書流に示せば、59は淡茶褐色・63は橙褐色・73は茶褐色となるようである(巻頭図版2-2参照)。

なお、蛇足ではあるが、(マンセル記号) 標記では、59 明るい茶では、3.0YRは色相を示し、YはYellow(黄)・RはRed(赤)の略、5.5は明度、4.0は彩度を示す。PはPurple(紫)・BはBlue(青)・GはGreen(緑)・NはNeutral(無彩色白～黒まで)の略。

4. 保管の方法

遺構・遺物の写真・実測図・台帳・表などの資料や遺物などは、現在、福岡県太宰府市大字太宰府1025所在の『県立九州歴史資料館』にて保管中(電話 092-923-0404)。

遺物の保管 実測済みの土器では、前記遺物台帳にしたがって、例えば9号住居跡出土では048番目・D地区全体では780番目に実測した、器高24.1cmを測る、本文中の第54図316の甗は、『塚堂D地区9号住 出土番号No.2 D-9住 048780(個体認識番号) 810312(出土年月日)』と記入した、7.0×10.0cm大の紙製カードを付して、プラスチック製青色パンコンテナの収納箱(横×縦×深:39.5×58.6×28.4cm)に収納。この際、収納箱前面には、ビニール製白色粘着テープ(5.0×15cm)を貼り、『塚堂D地区9号住 048780』と標記〔大形の土器〕。

また、11号住居跡出土では001番目・D地区全体では829番目に実測した、器高5.8cmを測る、本文中の第72図434の杯は、『塚堂D地区11号住 出土番号No.30 D-11住 001829 801225』と記入した既述カードを付して、プラスチック製黄色パンコンテナの収納箱(横×縦×深:39.7×60.9×14.9cm)に収納。この際、収納箱前面には、既述粘着テープを貼り、『塚堂D地区11号住 001829』と標記〔小形の土器〕。

なお、既述のように、実測をしていない破片については、上記黄色パンコンテナに、『塚堂D地区17号住 上層』と標記した既述粘着テープを貼って、既述カードと共に雑然と収納。

しかし、鉄製品については、保存処理を施した、県立九州歴史資料館 技術主査 横田義章氏の保存科学室にて保管。

また、手捏土器などの極めて小さい土器や、第142～145・147・148などの特殊遺物については、標本箱にて、極めて大きい土器(第56図328)については台座にて、それぞれ保管。

遺構・遺物出土状態実測図の保管 紙袋No.1(横×縦:43.5×56.5cm)には、縮尺1/10原図の13号住居跡・7号A(新)住居跡D21・各住居跡カマドと11号円形周溝、同1/20原図の1～3号住居跡、同1/40原図の7・11・17号住居跡実測図を保管。紙袋No.2(同)には、縮尺1/20・1/100原図の遺構図と同1/200の区割図を保管。

遺構・遺物出土状態写真の保管 写真用ファイル帳にて保管(モノクロ4×5判用が9冊、同35mm判用が3冊、カラーリバーサル35mmスライド用が11冊)。

遺物写真の保管……写真用ファイル帳にて保管(ブローニー判用が10冊)。

遺物実測原図・遺物台帳原本の保管 原図は、いずれも縮尺 1/1 で実測。B 5 判大のものはトップホルダー（1冊60頁）にて収納。これより大きいものは、縮尺 1/2・1/3 の青焼図にして収納（冊数は22冊。厚さ計84.5cm）。

なお、トップホルダー内では、各遺構別の台帳・出土状態コピー図を当初の頁に、以下の頁に実測図を収納。また、B 5 判以上の大きい実測図原図は、紙袋No. 3（横×縦：58×87cm）にて収納。

その他の計測表などの保管 上記トップホルダーにて収納（冊数は5冊）。

その他の分析資料図・表などの保管 既述紙袋大・小の二者にて収納。

5. 公開の方法

調査中の公開 発掘現場説明会。吉井町有線放送による、福岡県文化財保護指導委員(当時)の文化財解説。地元の見学者、日の岡古墳などの見学者、賢学諸兄の来訪者などへの、適時の説明。

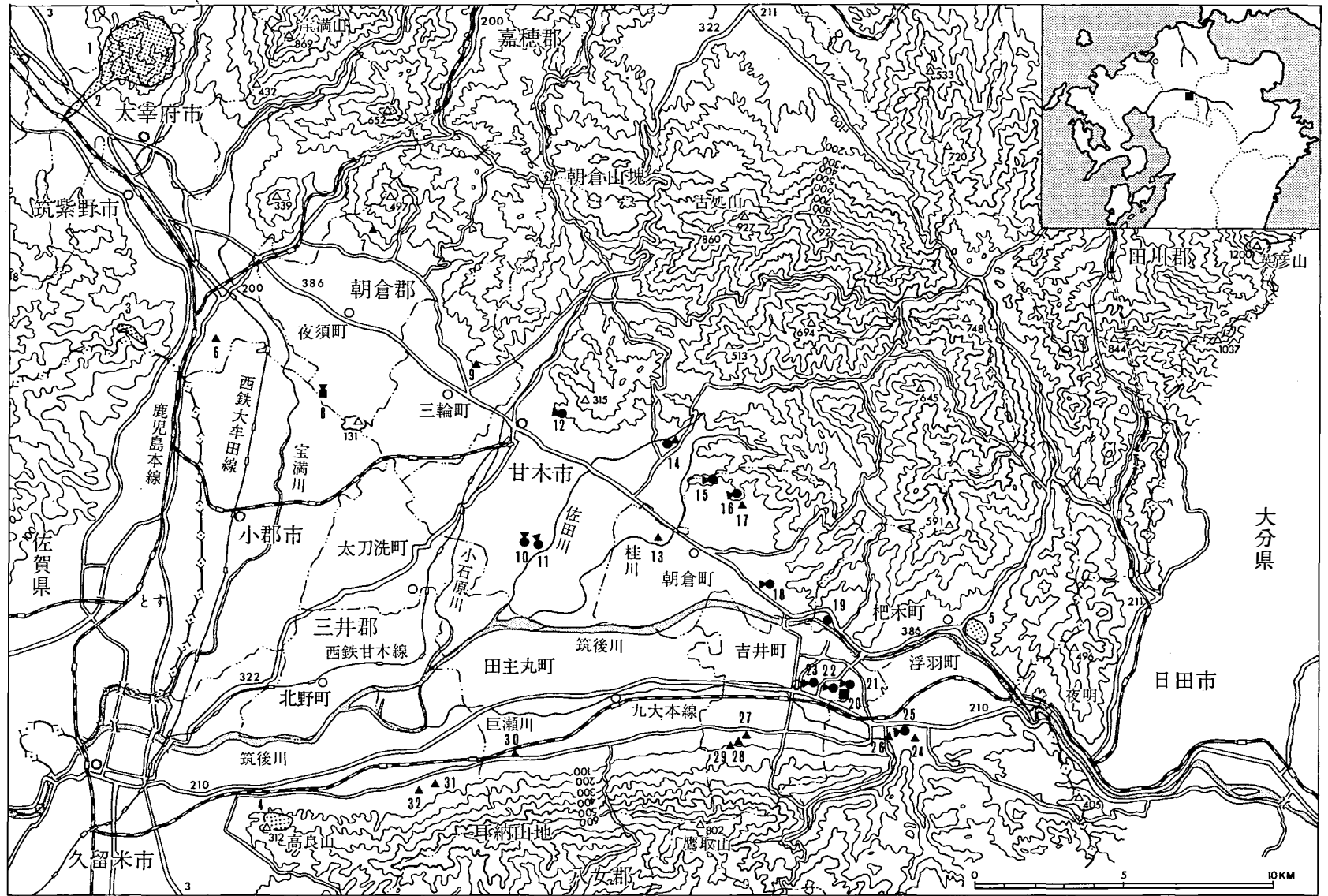
整理中の公開 唯一の例外を除き、覧学諸兄への遺物の一部（全量は、多量にて無理）公開。記録写真・実測図の公開。

上記の唯一の例外を示す。日本国内には、実に器用な覧学がいるらしい。第53図 壺315を、無断で観察・実測して頂いた。覧学諸兄への実測図コピーの配布もあるらしい。事前に、その旨の御連絡さえして頂いていたら……。唯一の例外なく、公開と記せたものを。調査・整理を通して、遺構・遺物の出土状態の記録に努めたものである。覧学諸兄への公開も、その出土状態を説明し、その後の御助言を傾聴し、本書の執筆に益したつもりである。このような、唯一の例外行為＝遺構・遺物の出土状態無視にて遺物を云々解釈する行為は、一掃すべきもの。

報告書刊行後の公開 遺物のなかには、第143図821のように、脆弱な軟質縄蓆タタキ目土器などもある。事前の、その旨の御連絡を許す。

その他の遺物のあるものは、『県立九州歴史資料館』あるいは、『吉井町立歴史民俗資料館』にて展示を検討中。既に、A～C・E-1地区の遺物の一部は、後者にて公開展示中。

その他、既述4項で説明した一切の記録資料は、事前の、その旨の御連絡があれば、調査・整理担当者も可能な限り（所用の許す限り）、期日指定の後で、立会説明し、便宜を計りたい。資料の眼前への提示に、10分は必要としないだろう。



- | | | | | | | |
|-----------------|----------------|------------|-------------|-----------------|-----------------|-----------|
| 1. 特別史跡 水城跡 | 6. 五郎山古墳 | 11. 神蔵古墳 | 16. 宮地獄 9号墳 | 21. 塚堂古墳 | 25. 橋名古墳 | 30. 寺徳古墳 |
| 2. 大野城跡 | 7. 観音山古墳 | 12. 鬼枕古墳 | 17. 宮地獄 1号墳 | 22. 国指定史跡 日の岡古墳 | 26. 重定古墳 | 31. 前畑古墳 |
| 3. 基肆城跡 | 8. 国指定史跡 焼ノ峠古墳 | 13. 狐塚古墳 | 18. 刺塚古墳 | 23. 月の岡古墳 | 27. 国指定史跡 珍敷塚古墳 | 32. 下馬場古墳 |
| 4. 国指定史跡 高良山神蔵石 | 9. 仙道古墳 | 14. ヤツエ塚古墳 | 19. 志波宝満宮古墳 | 24. 国指定史跡 塚花塚古墳 | 28. 鳥船塚古墳 | |
| 5. 杷木神蔵石 | 10. 小田兼白塚古墳 | 15. 鳥巢院古墳 | 20. 塚堂遺跡 | 29. 附 古細古墳 | ▲ 裝飾古墳 | |

第1図 塚堂遺跡の位置と主要遺跡 (1/200,000)

表1 塚堂遺跡調査地区一覧表

調査地区	調査区間	大字	小字	地番	調査担当(協力)	報告書(編集)	(執筆分担)
A地区	1981年7月～12月	宮田	四太郎	574-2 575-1	馬田 小池 (児玉)※1	第2集 (副島)	(副島) (馬田) (小池)
	1982年4月～9月			576-1	副島 佐々木 馬田 ※2		
B地区	1981年8月～12月	徳丸	西	159-1 161-1 160-1	馬田 (浜田) 小池 (伊崎) ※3	第1集 (馬田)	第4章1・3節(馬田) 第4章2節(小池・馬田) 第6章, 8章1・2節 (馬田)
C地区	1980年5月～11月	宮田	四太郎	552-1・2 555 556-1 2014 557-1・2 558-1・2	栗原 馬田 池辺 ※4		
D地区	1980年5月 ↓ 1981年3月	徳丸	西	147 150-1 149-1 151	馬田 (柳田 川述) 栗原池 (浜田 新原)※5	第4集 (馬田)	(馬田)
E地区	1982年7月～10月	宮田	屋敷	461-1・2 459-1 456	副島 馬田 佐々木 ※6	第3集 (佐々木)	(佐々木 副島)
	1984年7月～12月		曲金	444-1 447-1 446-1～3・5	橋口 馬田 (佐々木)※7	第5集	1985年度刊行(予定)
塚堂古墳	1979年7月～8月	徳丸	西	158-1	石山 新原 川述 ※8	第1集 (馬田)	第3章(石山) 第4章2節3・4 (小池) 第5章・8章3節 (小池) 第7章 (新原)
	1979年9月～12月			159-1 160-1・3	石山 (浜田 馬田) (橋口) (児玉 池辺)※9		
	1981年7月～8月	宮田	四太郎	558-1・2	石山 馬田 (児玉)		
	1982年9月	徳丸	西	159-1 160-1	小池 馬田		
B北地区	1982年9月	徳丸	西	159-1	小池 馬田		
塚堂古墳 東地区	1979年7月～8月	徳丸	西		新原 川述 (石山) ※10		

※1～10には、調査補助員として日高正幸が、※8には同 高田一弘が、※9には同 片岡宏二の協力もあった。

第2章 D地区の調査

第1節	はじめに	11
第2節	遺構と遺物	11
1.	住居跡	11
2.	掘立柱建物	165
3.	土 壇	171
4.	円形周溝	175
5.	溝状遺構	195
6.	その他の遺物	200

第2章 D地区の調査

第1節 はじめに

D地区の調査は、1980年当時、5世紀前半～中頃の詳細な調査類例が少なかった、各種多様の住居付設カマドの検出や、住居内（外）への多量の各種遺物の再配置による出土、および調査区の水没・乾燥・凍結などに、一喜一憂するものであった。

以下、上述の住居を含めて、出土した各種の遺構と遺物について報告する。

第2節 遺構と遺物

1. 住居跡

住居跡（以下、住居と略）は、1～5号、6号A（新）・B（古）、7号A（新）・B（古）、9～21号住居までの22軒の住居壁を確認し、2・11・17号住居では、改築後のA（新）期の他に、改築前のB（古）期の柱穴・土壇・溝状遺構などの一部を確認した。

以下、8号住居を欠番とし、合計25軒の住居について報告するが、住居内外の各種柱穴・カマドなどについては、第2・3図の模式図に示す統一名称・番号を使用して説明する。

なお、住居の計測結果は、表4～34に示すが、その計測方法は表2・3の模式計測表に従う。^(註5)

主柱穴 P11から付す。4個の主柱穴を配すと考えられるが、P12の位置で柱穴が検出されなかった例でも、P11～14を使用し、計測表にP12を欠番と明記する。

なお、P11～14の位置で柱穴が検出されず、P21・22の位置でそれぞれ1個を検出した例は、P21・22の番号を使用せずに、P11・12を付して、主柱穴2個とする。

また、P11-14・P12-13間は、P11-12・P14-P13間と等しいか・小さいものとする。

主軸柱穴 P21から付す。主柱穴間のほぼ中央に位置する柱穴。

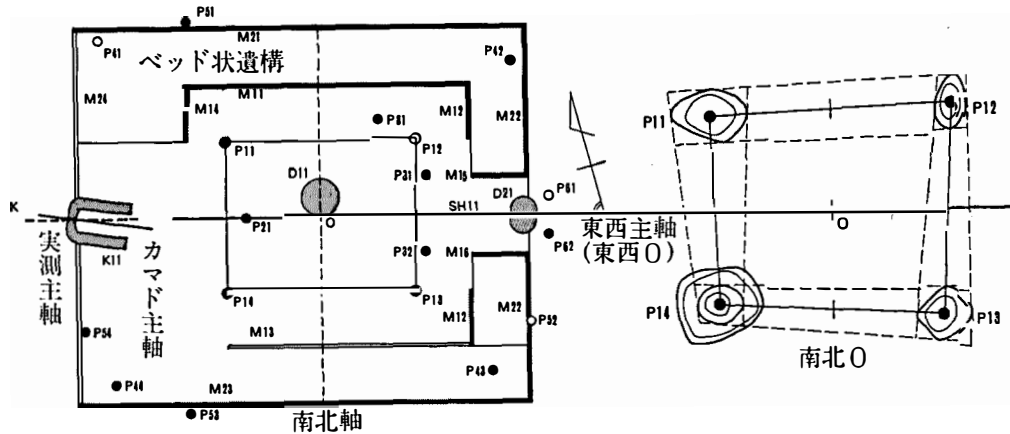
なお、P21側の主柱穴列とは反対の主柱穴列側に、当初からP22を設けない例も多く、計測表にはP22を欠番と明記しない。

主軸間柱穴 P31から付す。主柱穴からやや離れ、P31-32間の方が、P11-14・P12-13間よりも小さい柱穴。

なお、主柱穴から大きく離れ、あるいはP11-14・P12-13間よりも柱穴間距離が大きい例は、他の機能を考えて、後述の施設柱とする。

対角柱穴 P41から付す。主柱穴から離れ、主柱穴あるいは壁隅を対角線状に結んだ線上・近くに位置する柱穴。

なお、P41・43などの位置で検出されなかった例でも、P41～44（P41～48の例もある）を使用し、計測表にはP41・44を欠番と明記する。



第 2 図 住居跡模式図と柱穴間距離計測例図

表 2 住居跡模式計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	主軸間柱・主柱間	施設柱間	主軸柱間	番号	短径×長径	深さ
東西 N-75°-W	P ₁₂ ・P ₁₄ P ₂₂ ・M ₁₅	P ₁₁ -P ₁₄ ?	P ₁₁ -P ₁₂ ?	P ₁₁ -P ₁₂ ?	P ₁₁ -東西O ?	P ₁₁ -南北O ?	P ₁₁ P ₁₂ P ₁₃ P ₁₄		
		P ₁₂ -P ₁₃ ?	P ₁₄ -P ₁₃	P ₂₂ -P ₁₃	P ₂₂ -東西O	主軸間柱間 P ₁₁ -P ₂₂	平均		
		平均							

壁柱穴 P51から付す。住居壁に位置する柱穴。壁に近い住居内外の柱穴も含める。

その他の柱穴 P81から付す。上記以外の柱穴。

住居中心O P11-14・P12-13間および、P11-12・P14-11間の中心を結ぶ中心。

主軸O P11-14・P12-13間中心を通る軸。なお、主柱穴2個例では、P11-12を通る軸。

中央土坑 D11から付す。住居中央部付近に位置する土坑。なお、攪乱部・未調査区に配されたことが明かであるが、検出できなかった例では、計測表に欠番と明記する。

壁土坑 D21から付す。住居壁に位置する土坑。なお、壁に近い住居内外の土坑も含める。

溝状遺構 M11から、あるいはM21から付す。M11~14は、壁から大きく離れ、床面の使用機能を、中央部と周辺部に区画する例で、後述の方形（半円形）区画外縁に沿って連続する例も多いが、必ずしも4条が当初から設けられたわけではない。

また、M15からは、2条が対で、互いに平行・直交方向に配され、最も近い壁と直交する例。

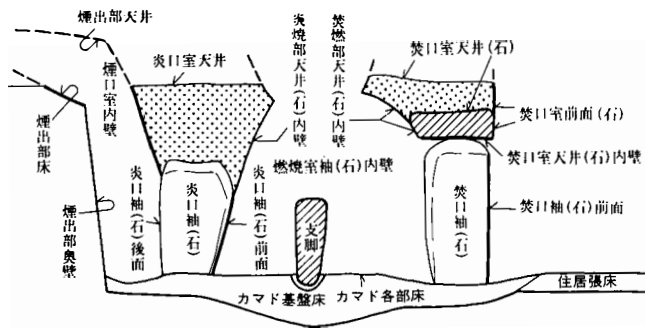
なお、M15からは張り床除去後に確認できる例も多く、張り床上面で検出できなかった例もあると考えられ、1条のみしか確認されなかった例でも、M15・16を使用し、計測表に1条を欠番として明記する。

M21~24は、壁に沿う例。所謂、周溝として各壁間が連続する例も多い。

方形（半円形）区画 11から付す。区画形状が方形を呈する例ではS、半円形を呈する例ではCを、番号の前に加える。

M15~20で他の床面と区別され、壁に接した区画で、その中央部あるいは近接して、D21を

設ける例が多い。(A地区6号住居は、M 17・D 21・C 11を設け、A地区22号住居は、M 15・16・D 21・S 11を設ける。^(註「II」)D地区9号住居は、M 15・S 11 A・Bが配されている)。



第3図 カマド模式縦断面図

なお、所謂、ベッド状遺構が、壁の中途までしか設けられない例では、この設けられない低い床面も、中央部の低い床面と区別して、この例に加える(A地区11号住居は、

表3 カマド模式計測表

煙道	煙口部	炎口部	炎燃部	支脚	焚燃部	焚口部	前庭	部位名
	煙口室	炎口室	燃焼室			焚口室		
←	+h	+g	+f	+e	o	-a	-b	-c
				+d	-d			計測点

(単位cm)

ベッド状遺構・D 21・S 11を配し、D地区9号住居は、ベッド状遺構・S 12を配す。^(註「II」)

また、区画部のみを別途の張り床とするD地区7号A(新)住居例や、区画部を地山削り残しとする例もある(B地区2号住居は、S 11のみを設ける)。^(註「I」)

張床 住居床面の張床。

カマド基盤床 カマド構築部の張床。

なお、基盤床には、構築部を住居の張床下面よりも深く掘り下げた後で、張床したため、基盤床の埋土と住居張床土が一致する例もある。

また、住居張床後に新たに掘り下げて基盤床とする例・古期カマド残滓を整地盛土する基盤床例などもある。

前庭 カマド前方(手前)の窪み。薪・炭・灰などの出し入れによって生じた窪み。

また、カマド前方の、薪・炭・灰の堆積部や、当初から窪められた部分も含める。

焚口室(部) カマド前室。

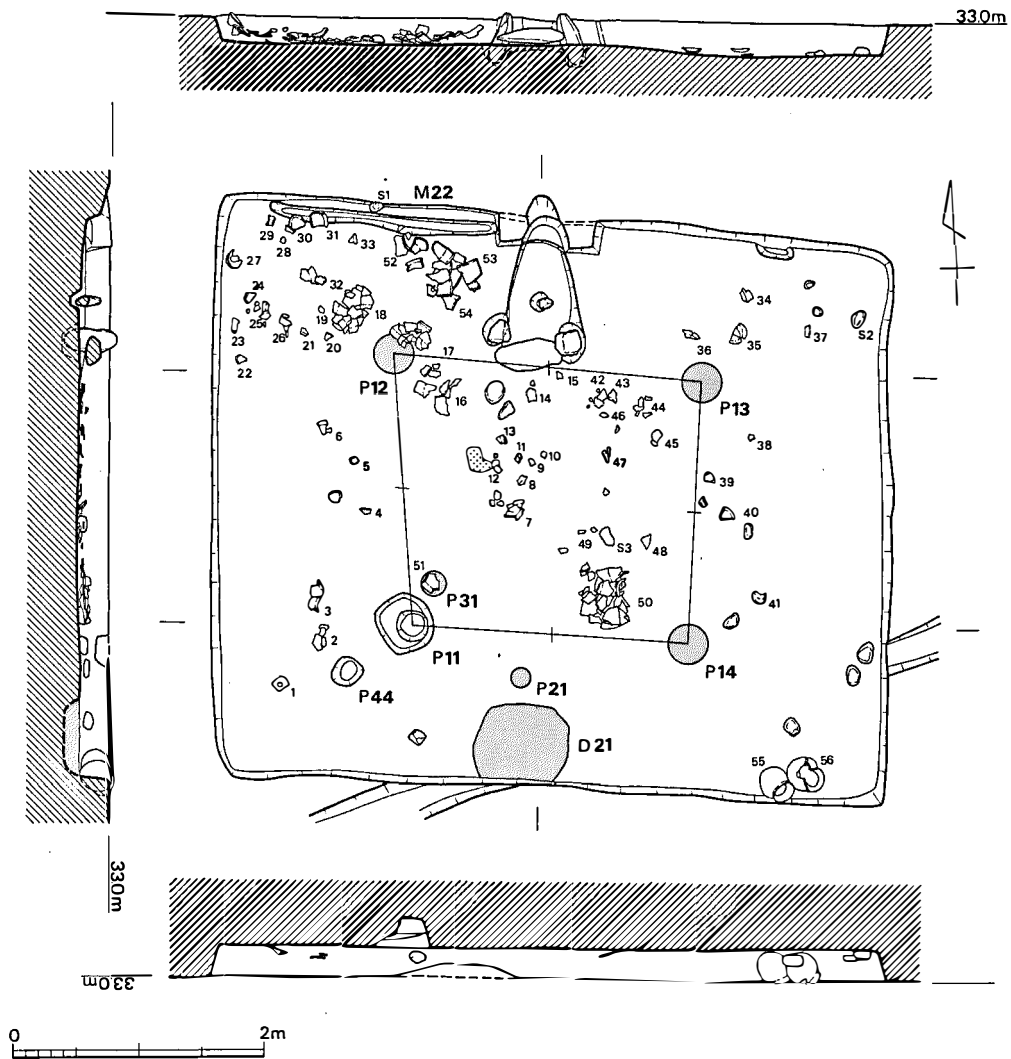
燃焼室(焚燃・支脚・炎焼・天窗部) カマド中室。支脚前方で薪などを多く焚く焚燃部、同側方の支脚部、同後方で薪などをほとんど焚かない炎焼部、支脚上方の天窗部に分ける。

炎口室 カマド後室。実際は、炎以外にも、煙・灰なども通るが。

煙口室(煙口・煙出・煙道部) カマド奥室。奥壁下端までを煙口部、同上端外方で傾斜が急な部位を煙出部、住居外に長く緩傾斜する部分を煙道部に分ける。

1号住居跡 (図版22~27-1, 第4図, 表4)

調査区南端部で検出。北壁中央部に、北向きのカマド付設。弥生時代の6号円形周溝・1号溝状遺構を切り、歴史時代の2号溝状遺構に切られる(図版10-1)。

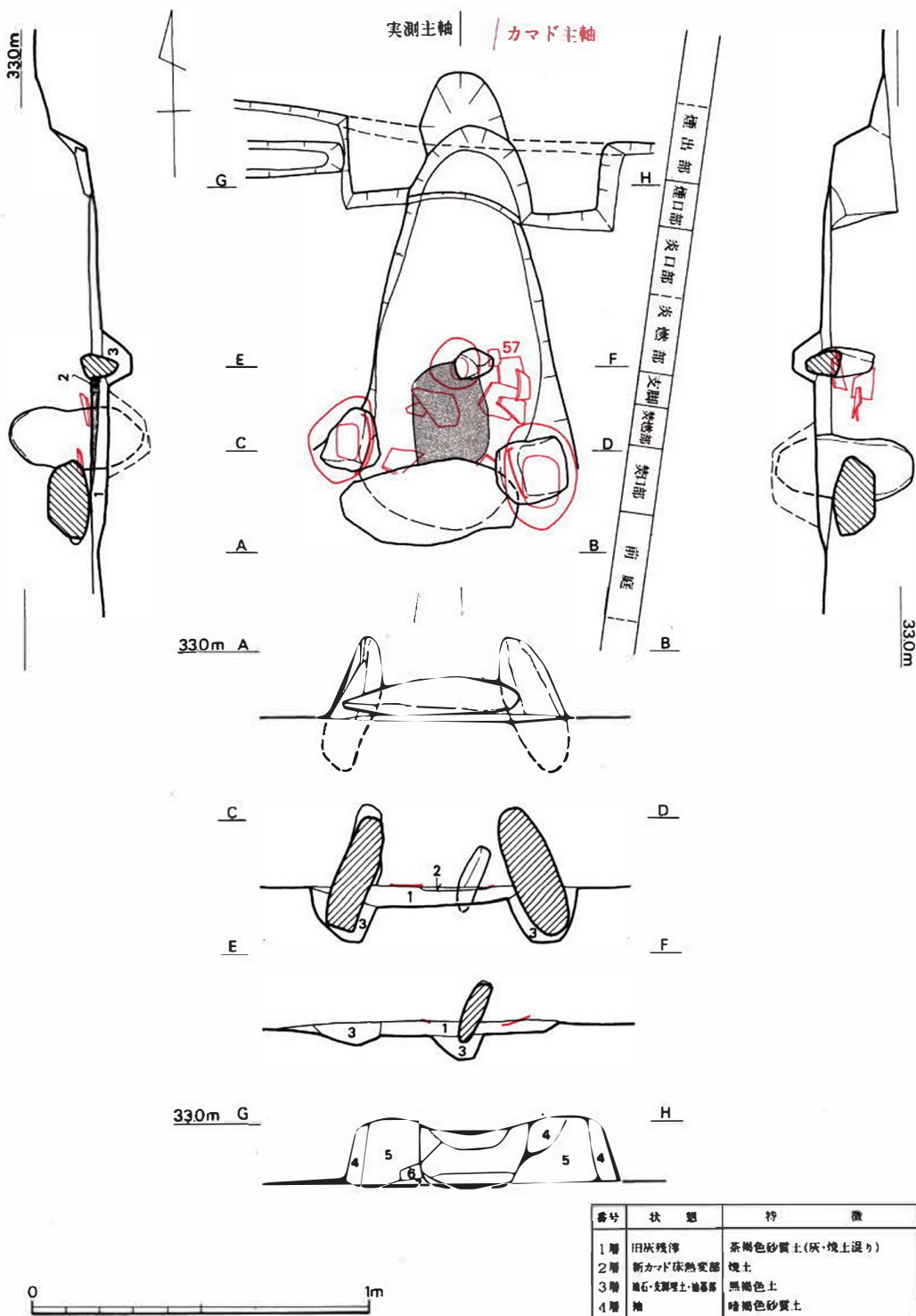


第 4 図 1号住居跡実測図 (1/60)

なお、1号住居の実測に限って、D地区全体の実測用割り付け杭打ち以前に行ったため、他の遺構・遺物のように調査区全体で統一された割り付け方眼紙を使用せず、別途のものを用いた。この別途図では、出土遺物が著しかったため、図版23を撮影後に遺物出土状態とP11・14・各壁を実測し、その後で他の柱穴・D21を完掘（図版22）。他の柱穴・D21の実測は、前述の統一割り付け方眼紙にて行ったものと思っていたが、後日の整理の段階で、実際に別途図・カマド実測図のポイント以外は実測していなかった事に気付いた。

しかし、図版23にはP13・14・21の検出上面プランが、図版22には第4図のM12中央部の北壁寄りの河原石S1・北東壁隅部の同S2の東側で東壁に接した小石・中央部の出土番号No49に東接する同S3が撮影されており、以上のS1～3は、第4図にも実測されていた。

以上のことから、図版22・23・出土状態別途図などを比較検討し、第4図では、P12～14・



第 5 図 1号住居跡カマド実測図 (1/20)

21・31・44, D21の略位置をアミ目で示す。

主柱穴配置は、南側・北側柱列方向と南・北壁方向がいずれも一致。また、柱穴間距離では北側柱列P12-13間が2.46mと他の柱穴間距離に比べて大きいことが、このことは北壁部に設けられたカマドの位置と主軸Oに規制されて、P12を西壁寄りに配したものと見えよう。

柱軸柱穴P21は、P11-14の南側柱列～D21間で検出。主柱穴よりも径は小さく、D21の中央北面に配す。

P31は、出土位置から主軸間柱穴としたが、P32が検出されなかったことと、明確なP21が住居南半部に設けられていることから、その他の柱穴P61とすべきであろう。

対角柱穴P44は、P21・D21同様に住居南半部に配され、P11-14・P44-21柱列方向が一致。このことから、P41～43は当初から配されずに、P44のみがP21・D21との関係で設けられた可能性が強い。

壁土D21は、南壁中央部に配され、カマドと共に住居主軸に西接する配置。

溝状遺構は、M12を北壁のカマド西袖以西で検出。

カマド(図版23・24・第5図,表4)

カマド実測・発掘主軸N-2°-Eは、煙出部先端～支脚の中軸線を使用。

前庭部・焚口室 袖石前面で、長さ53cm・幅25cm・厚さ13cmの大きい河原石を検出。内傾した両袖石頂部間間は54cmで、前面の石の長さとはほぼ一致。両袖石の南面あるいは北面をそれぞれ結ぶ線は住居北壁(カマド奥壁)方向といずれも一致。これらのことから、河原石使用の両袖石は、共に旧状を保っており、当初から内傾した状態で前述の前面出土の石を架して、焚口室を構築したものと見えよう。このときの焚口天井の高さは約20cm。

窪みは、古いものを旧灰残滓1層除去後に検出。南端は、ほぼ前面出土の天井石付近までで、両袖石以南に半円形状に広がっていた。新しい窪みは検出されず、カマド前面に、やや広い範囲で焼土・灰・炭がカマド壁残滓と共に若干床面から盛り上がった状態で検出。

燃焼室 支脚は、東側に傾いて検出。周辺からは第10図031の甑の口縁部・底部破片が出土。支脚前面～焚口室間の床中央部は熱変焼土化した2層を検出。この下層は旧灰残滓の1層。

炎口室 燃焼室と共に袖・天井は遺存せず、2層上面にその残滓が若干堆積。

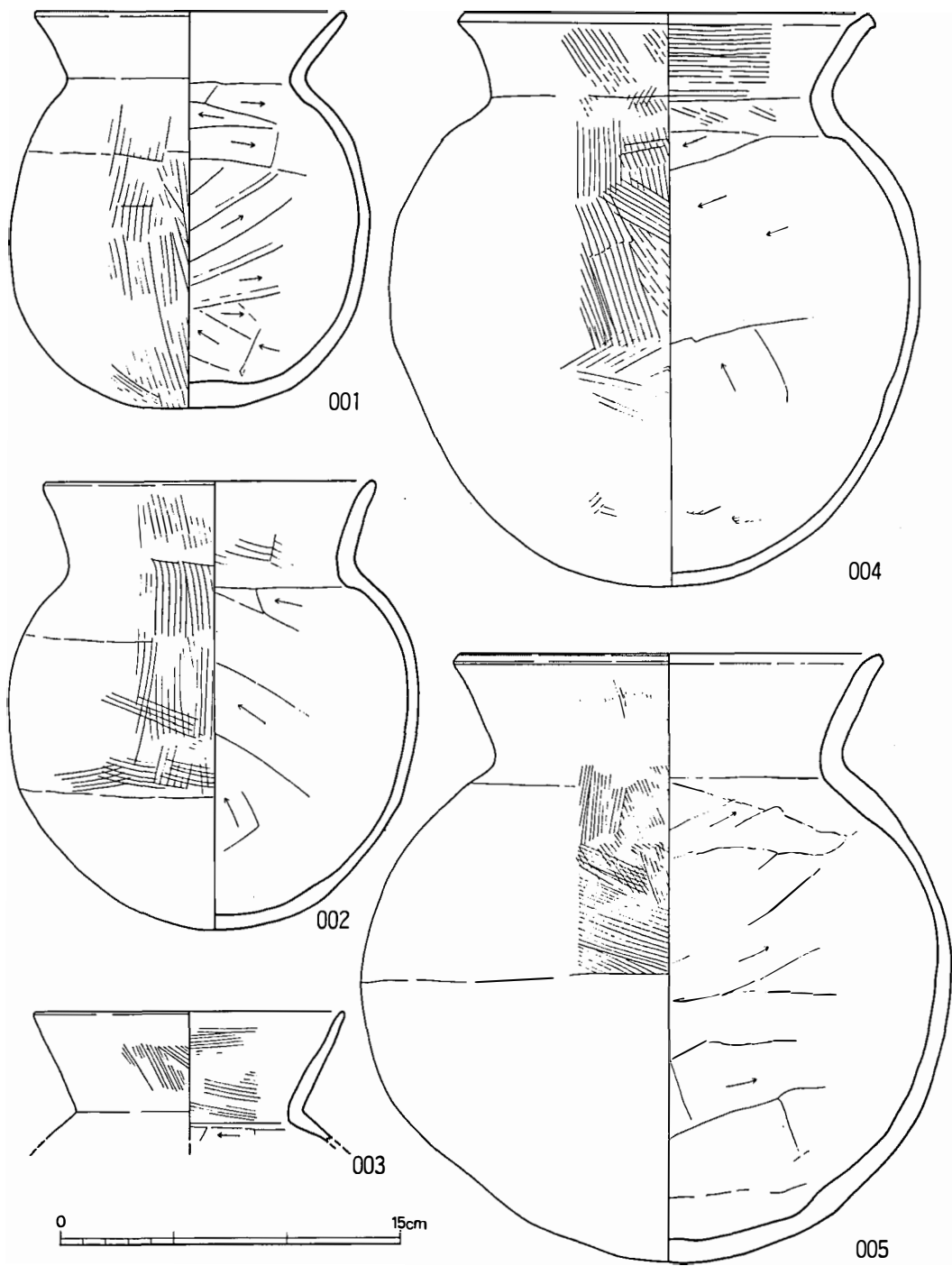
煙口室 袖部・基盤が遺存。縦断面図に示すように、住居北壁・床面に7層の基盤土を使用して煙口室床を炎口床より5cmほど高く設け、緩傾斜面とする。床面には1層は遺存せず。

煙出部 北壁外に張り出し部として、23cmの長さまで確認。床面に著しい熱変は認められず。

以上のように、炎口・燃焼室袖は遺存しなかった。カマド遺棄時に、両室は意識的に破壊され、この際に焚口天井石も除去されて袖石前面に据えられた可能性が強く、出土遺物もこの時に一部は完形、他は折損・破砕され、再配置されたものである。

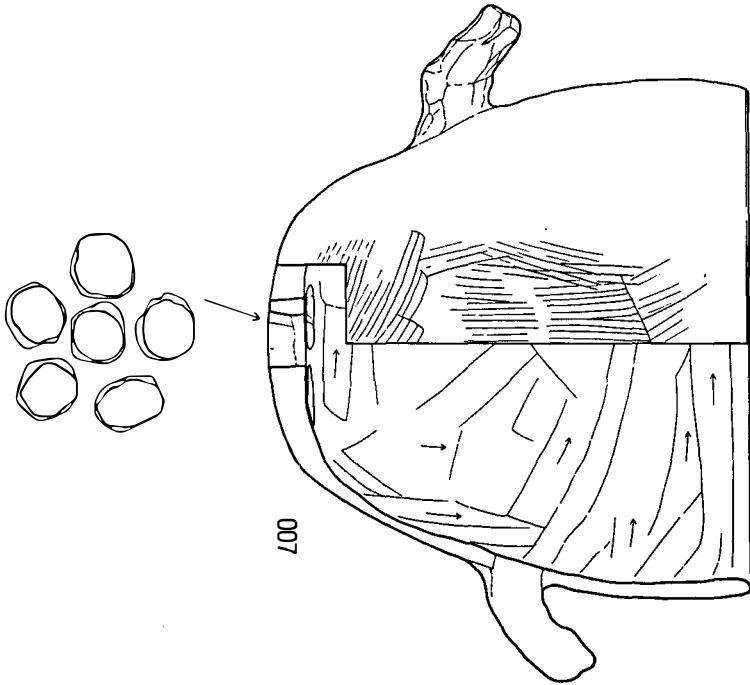
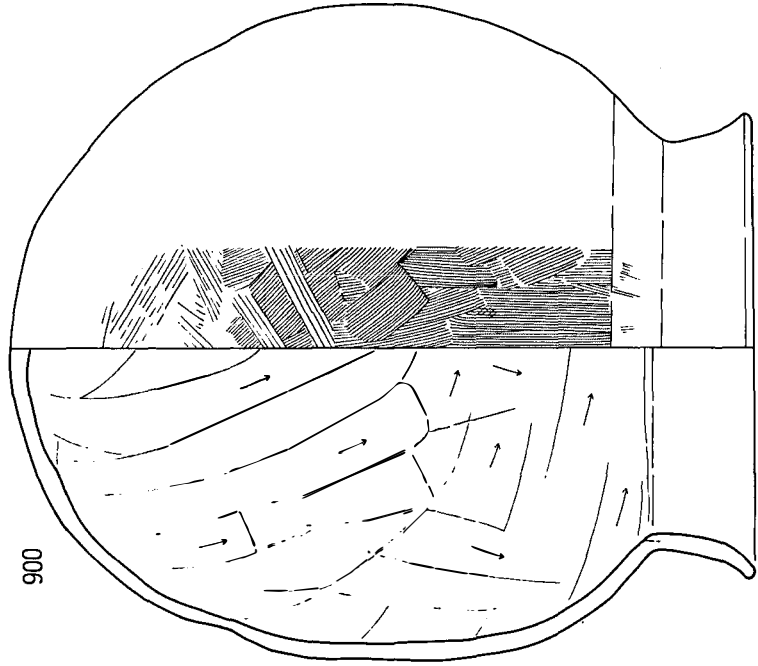
出土遺物(図版152～154,第6～10図,表35)

埋土中からの、出土遺物はわずか。多量の遺物群は、床面およびわずかに浮いた状態で出土。**壺**(001～006・024・025) 001は、口縁部が大きく外傾し、端部は丸い。球形に近い胴部は、002・005・006と同様だが、底部は平底気味に造作。焼成時に器形は瓦解したものと見られ、破

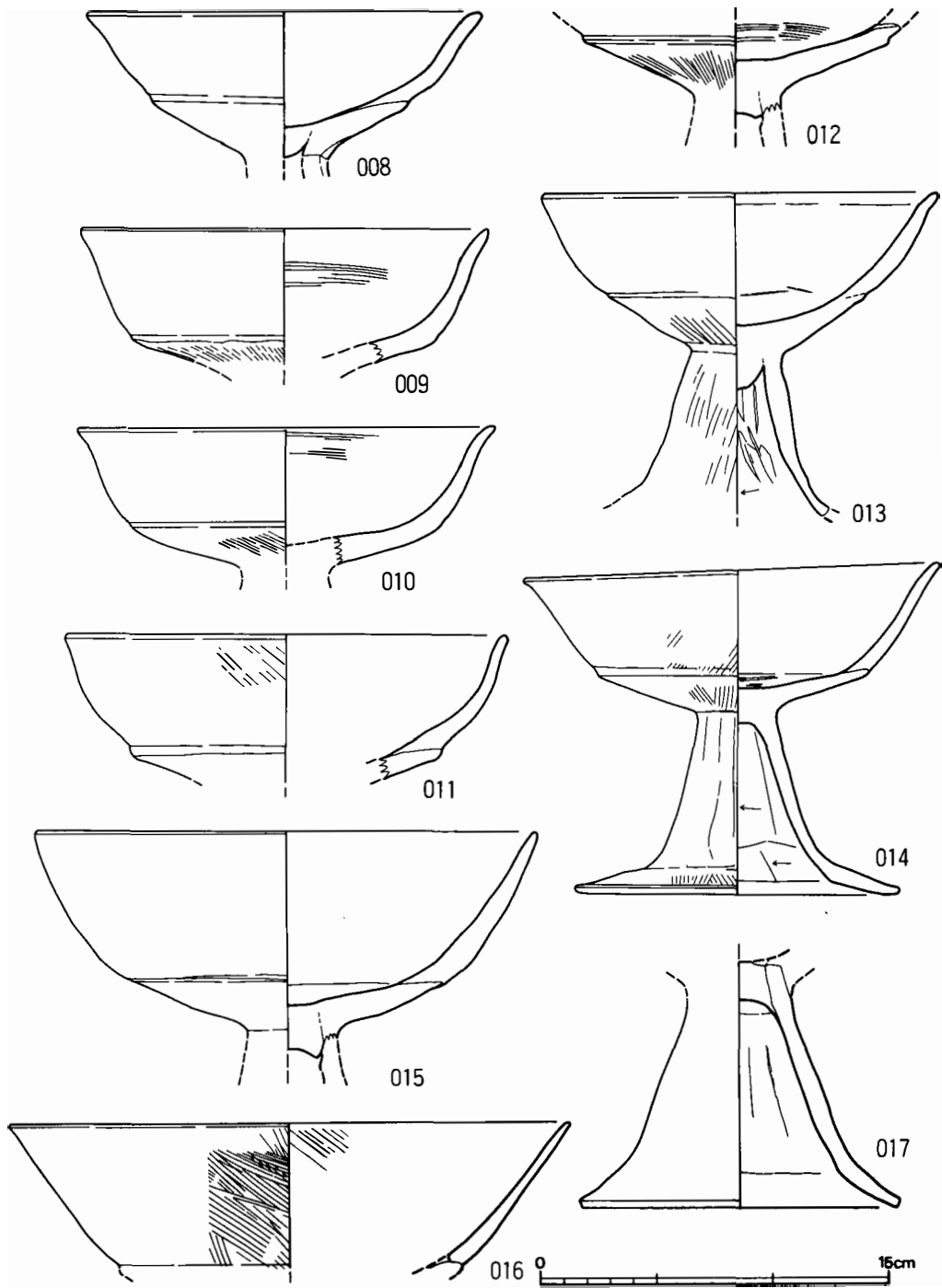


第 6 図 1号住居跡出土土器実測図① (1/3)

片間で色調が著しく異なり，焼成前のヒビ割れ部への補修胎土も付着。

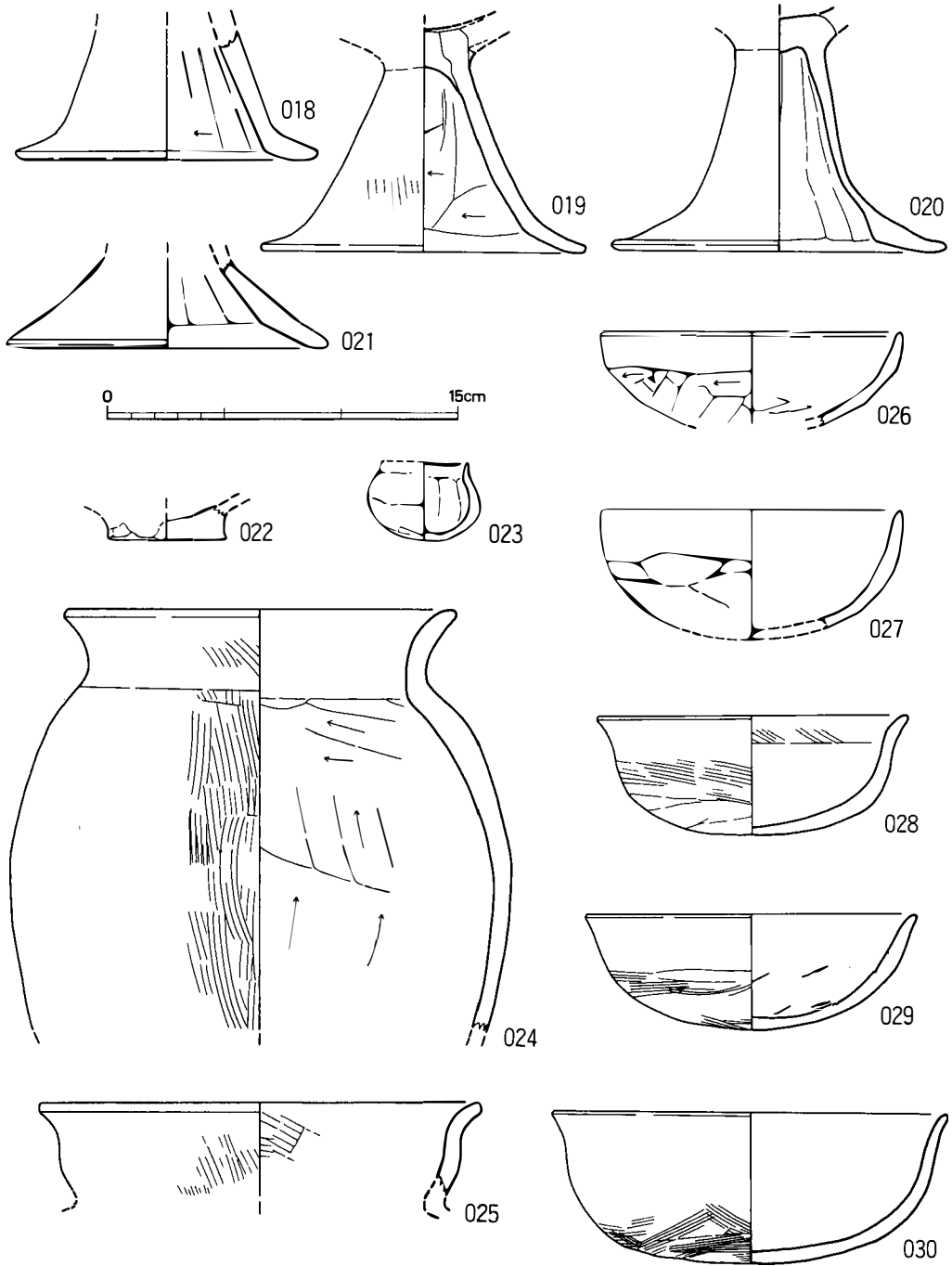


第 7 图 1号住居跡出土土器実測图② (1/3)



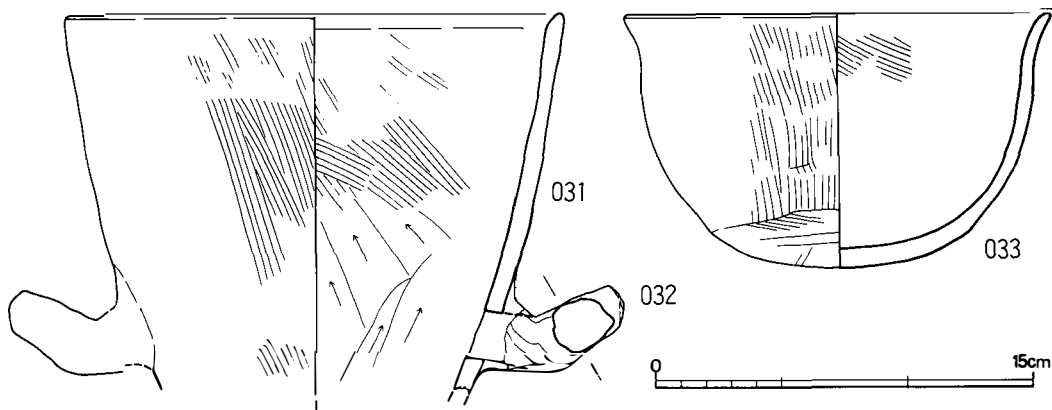
第 8 図 1号住居跡出土土器実測図③ (1/3)

004・005は、共にD21東の南壁・床に接して出土。004は完形，005は一部欠損するだけで、完形に近い。005は、口径19.0・胴部最大径26.2・器高27.0cm。両者は法量だけでなく、共に球



第 9 図 1号住居跡出土土器実測図④ (1/3)

形胴部から大きく直線的に外傾する口縁部の、端部内面が更に外傾し、上面はシャープな造作。
 なお、共に胴下半部は、ハケ目後にヘラナデし、005はこのために胴最大径下に稜有り。



第 10 図 1号住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)

006は、004・005に比べてやや法量が大。断面図に示すように、器周の一部では口縁部が直立気味であるが、器周の大半は004・005同様の造作。下位は大ハケ目を加え、底部はナデ。

024は No 3 (口縁器周残1/2弱), No 4・37 (胴部片), No 7 (口縁同1/8), No57 (口縁同3/8) および床面から15cm上位出土の胴部片とが接合し、口肩部器周残1/1・胴部同1/2までを復原。

002は、口縁部は同じ中形の004に類似し、直線的に外傾、端部も丸い。同様に、胴上位にわずかの稜も認めるが、これは両者間のハケの工程差によるもの。胴下半部の、ハケ後のナデによるわずかの稜は、むしろ大形例の004～006に類似。

以上のことから、024は破片の出土状態を含めて検討中。他は、再配置されたと言えよう。

高杯 (008～021) 014は杯部下半の底部が直線的で、屈折した上半はわずかに弯曲気味であるが、ほぼ直線的に外傾し、口縁部はやや外反。脚部は、八の字状の脚柱部から、更に大きく裾部へ開き、この屈折は器内面が顕著。脚部破片の一部は、破片後の2次加熱により、赤褐色。

015は、杯部上半が部位によって異なるが、一部では、014のように外反せず。008は、杯部上半が内弯し、端部は外反。016は、大形で、杯部上半は直線的に外傾。

以上のなかで、器形の全様が明かなのは014のみであるが、008～011の杯部・017～021の脚部の特徴は014と一致し、013も同様。これらの器周残も良好例が多く、再配置されたものと言えよう。015も、カマド西からの一括床面出土で、杯部は完形に接合できたので、脚部折損後の再配置。しかし、016は既述の甕 024近くでの出土破片で、検討必要か。

杯 (026～030) 026・027は、口縁部がわずかに内弯・内傾し、体部はヘラ削りのまま。

028～030は、口縁部が外傾、端部が外傾・外反。体部はヘラ削り後、一部ハケで強く造作。

026・027は器周残は不良。028～030はいずれも完形に接合。029はカマド西 No17-2 (器周残1/2) とカマド東 No35・36 (器周残1/4) が接合。030はカマド南 No14 (口縁同1/4弱) とカマド西 No16-2 (口縁～底部片)・No53-2 (口縁同1/4弱) が接合。

以上のことから、028～030は明かな再配置と言えよう。026・027は検討を要すか。

鉢 (033) 杯028～030に特徴が一致することなどから、再配置されたものと言えよう。

甗 (007・031・032) 007は、近接して出土した高杯 014 同様に、破片後の2次加熱を受け、赤変した破片があり、意識的破碎後に、火を使用した祭祀(カマド破棄に伴う)が明らかで、再配置されたものと言えよう。

031は、器形が007と著しく異なり、体部から口縁部へ直線気味で、わずかに内反。カマド内出土破片で、下半を欠失するが、他に同一個体の底部破片も出土。007同様に、カマド破棄あるいは住居破棄に伴う、意識的破碎後の再配置と言えよう。

032は、床面から10cm上位出土。胎土・焼成・色調が031と類似。同一個体か。棒状の把手は細身で、シャープに屈折して、外傾。この把手は、検討必要か。

手捏土器 (023) 甗のミニチュア。既述の中・大形甗同様の器形。カマド西への再配置。

2号住居跡 (図版31・32, 第11図, 表5・6)

調査区の南東隅部で検出。北壁中央部に、北向きのカマド付設。弥生時代の1号円形周溝・1号溝状遺構、古墳時代の3号住居を切り、歴史時代の2号溝状遺構に切られる(図版5)。

なお、住居を発掘する際の床面で検出した柱穴・土壇等の埋土に著しい差位は認められなかったが、壁中央土壇・溝状遺構のあり方から、明らかに新・旧の2軒の住居が重複していると考えられ、2号A(新)住居と2号B(古)住居に別けて説明。

2号A(新)住居

A P11~14・21・31, A D21~23, A M12・21~24などを検出。

主柱穴配置は床中央部に位置し、各柱列方向とこれにそれぞれ近接する壁方向はほぼ等しい。西側柱列のA P11・12は、掘り方内を更に1段深く掘る。あるいは2号B(古)住居B P12・14との重複によるものか。柱穴中心の位置は、A・B期共に、一段深い掘り方の中心を計測。

主軸柱穴A P21は、南壁中央土壇A D21内で北接して配し、A D21底面からの深さは0.06m。

主軸間柱穴は、A P11近くでA P31を検出。A P14近くでのA P32は未検出。

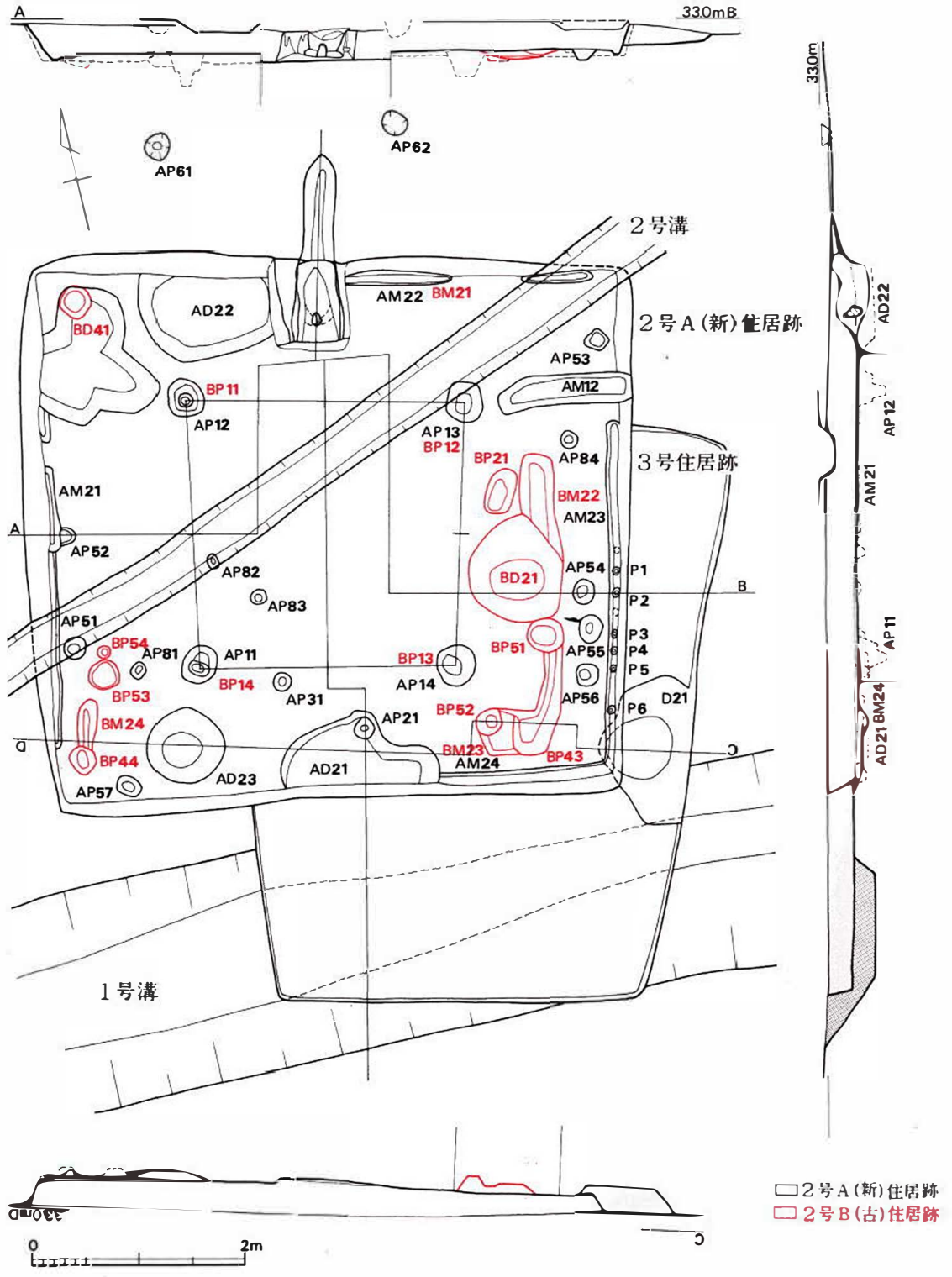
A P11近くではA P82・83が検出されていることから、主軸間柱穴としたA P31は、あるいはA P81~83と同様にその他の柱穴とすべきか。

壁柱穴配置は、A P51・55が南北主軸にそれぞれ対称の位置に、A P52は西壁中央に配す。A P53・57は対角柱A P42・44とすべきかも知れぬ。

施設柱穴は、カマドを配した北壁外の煙道先端近くの位置で、A P61・62を検出。位置からして、カマドに伴う施設柱の可能性が強い。

溝状遺構配置は、東壁に接して、北側柱列A P12・13方向に一致したA M12を配し、A M23はA M12以北では配さず。A M21は西壁中央部が更に一段深くA M24は南壁西半部には配さぬ。

ところで、A M23では東壁南半部のみ、溝底に8個の小ピットを検出(図版30)。第11図では8個中で、A M23P1北側の1個とA M23P2~P3間の1個の計2個を現場で実測するのを忘れてしまい、A M23P1~6の6個しか図示していない。これら小ピットは溝底で検出したもので、溝埋土中からは検出していない。断面形状は、所謂、杭様のものを打ち込んだようなV字形ではなく、溝底からの深さも0.03mと浅い皿状。



第 11 图 2号A(新)·B(古)·3号住居跡実測図 (1/60)

壁土壇配置は、A D21を南壁中央部に、A D22を南壁西半部に、A D23を北壁西半部にそれぞれ配す。A D22・23は東西主軸で対峙した位置にあるが、A D22はカマド配置と関係が強い施設と考えられよう。

カマド（図版28-2・29-1，第12図，表5）

前庭部・焚口室 前庭部は、A－B断面に示すように明確ではなく、住居構築時から周位の床面レベルよりも若干高く地山を削り残す。C－D断面部も同様で、このことは、地山が砂質土であることからの、カマド焚口室・前庭部の除湿を考慮したものと考えられる。焚口部はほぼA－B・C－D断面間であるが、袖上面レベルがE－F断面以南では急に下がることから、焚口室袖は天井と共に除去したものか。

燃烧室 支脚の掘り方は検出せぬことから、支脚はカマド基盤4層整備の段階で埋置したもので、旧状を保つ。塚堂遺跡出土のカマド支脚については、意識的除去あるいは再埋置例が多い。前述の焚口室袖の意識的除去は、カマド破棄行為に伴う支脚を使用時のままにすることを許容する補完行為と言えよう。

焚燃部床面は、支脚前面部が2cm程4層で基盤整備する。

炎焼部は、I－J断面付近で、床面が平坦な4層上面から緩傾斜の3層上面へと変換する部位以南。袖上面レベルが急に下がるK－L断面～I－J断面間は、炎口室袖上部および天井の除去に起因するものと考えられる。

炎口室 前述のように、除去されているが、2層が遺存する北端付近までが炎口室と考えられ、基盤整備のための床面下の土壇底も、この部位まではほぼ平坦に設ける。

煙口室・煙出部 8層北端までが煙口室。土壇はこの煙口室～支脚前面間に深く設けており、砂質土地山を掘り下げ、粘質土4・5層による除湿の為の基盤整備を行ったものと言えよう。

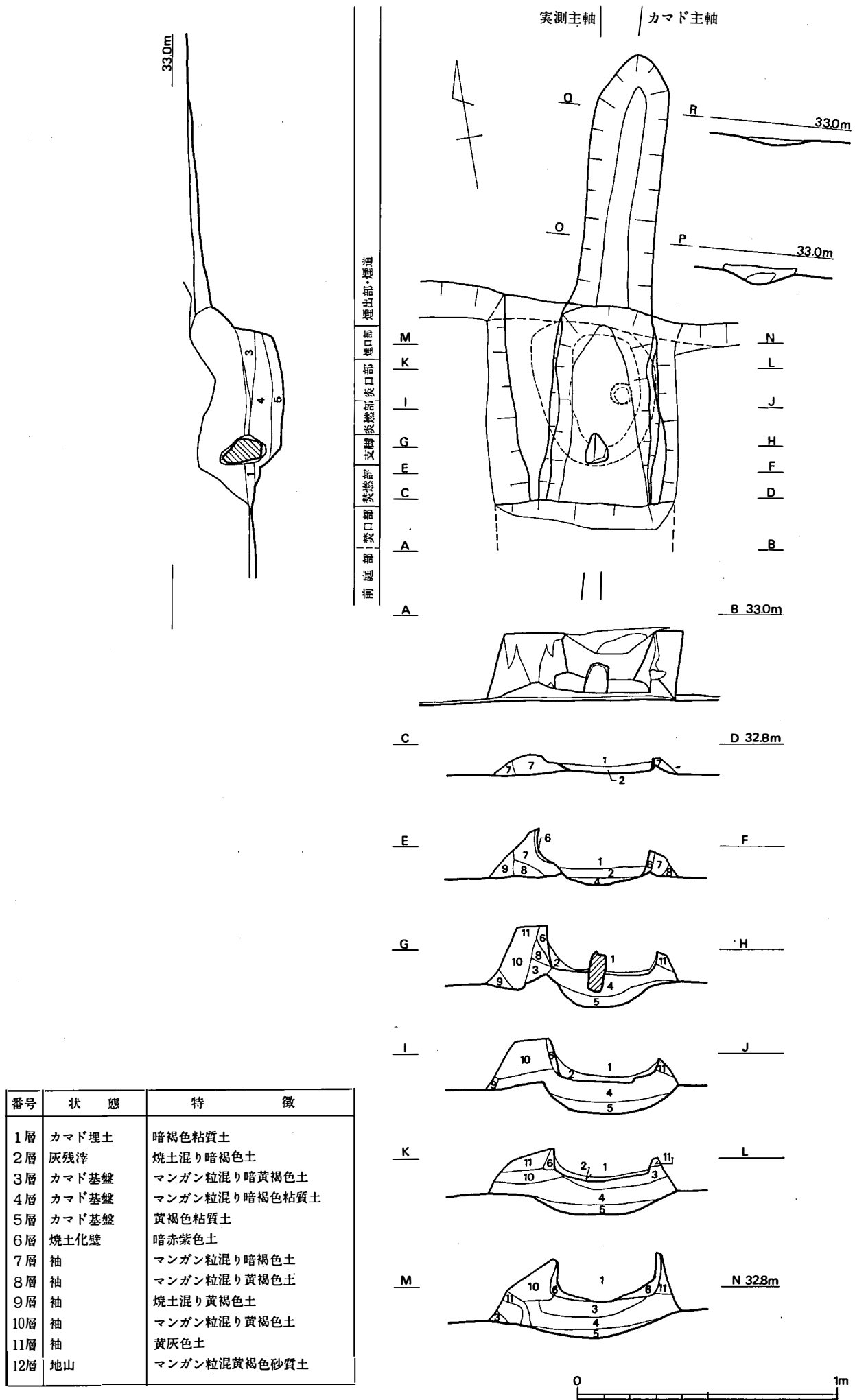
煙出部の奥壁は、住居壁とほぼ一致し、床面は上面から北へ98cmまで遺存。床・壁共に火熱を受け赤紫色を呈していたが、地山が砂質なため、明瞭な焼土にはなっていない。煙道部はカマド主軸に一致して、直線的に設けるが、その先端から以北の調査区内P61～62間の主軸上には煙道北端を示すようなピット等は検出していないが、P61・62は、カマドの屋外の上部施設に関係するものか。

2号B（古）住居跡

前述したように、柱穴・土壇などの明確な埋土の差位から検出したものではないが、以下に説明する柱穴・土壇などの配置から、2号A（新）住居跡と区別した。

主軸穴配置は、B P11～14が、共にA P11～14といずれも重複するものと考えた。

主軸柱穴は、東壁中央土壇B D21に近接して北側にB P21を配す。このB P21を主軸間柱穴B P31とし、B P32は未検出で、A P82を主軸柱穴B P21と考えることも一部可能であるが、A P82が小ピットであることと、B P21の位置から、これを主軸柱穴とし、主軸間柱穴B P31・32は当初から配されなかったものと判断。また、2号B（古）を改築して2号A（新）を設けたと考えるとき、2号A（新）も古い住居の住居プランを踏襲したものとし、主軸間柱穴としたA P31は既述したように、その他の柱穴として、主軸間柱穴A P31・32も当初から配されな



第 12 図 2号A (新) 住居跡カマド実測図 (1/20)

かったものとするべきであるか。

対角柱穴配置は、北東壁隅部のB P 42が未検出。B P 41・43・44を2号A（新）の対角柱穴と考えることも一部可能であるが、B P 43がBM22・23内に、B P 44が同様にBM24内に位置することから、B P 41と共に2号B（古）の各壁隅部に配された対角柱穴と判断。

壁柱穴配置は、東壁側のBM22内でB P 51を、西壁側でB P 53を検出。共に南側柱列B P 13-14延長線上にほぼ配置。

壁土壇B D 21は、東西Oに南接して配し、2号A（新）東壁からBM22と共に約0.6mほど離れた位置。他のA D 21～23土壇を南・北壁に接するか近接して配すことから、これをB D 21と判断。

しかし、埋土が他の土壇と同じことから、2号A（新）でも継続使用されたものか。

溝状遺構配置は、南壁でB P 52、西壁でB P 44に接してBM23・24の一部を検出。BM22は東壁北半部では検出せず。北壁側のBM21は、AM22と重複していると考え、2号A（新）は、2号B（古）の北壁を除く各壁を若干拡張して増改築したものと判断でき、北壁中央のカマドは、重複使用したものと見えよう。

なお、カマドの重複使用は、いずれの土壇内からも焼土を検出していないことで、A D 21・B D 21などが、2号B（古）のカマド床残滓土壇ではないことから言えるであろう。

出土遺物（図版154、図13、表35）

遺物の出土量が少なく、器形の全様が明かなものは杯のみで、既述のように住居も改築が行われていることから、確実に2号A（新）住居に伴うと言えるものはわずか。

甕（034～037）034・035は、共に外傾する口縁部が厚手で、端部は丸い。036は、外反する口縁部が薄手で、端部上面はやや丸味を呈するが、下傾して平坦面有り。

037は、大きく外弯する口縁がヨコナデによって更に外反し、端部はシャープな稜有り。

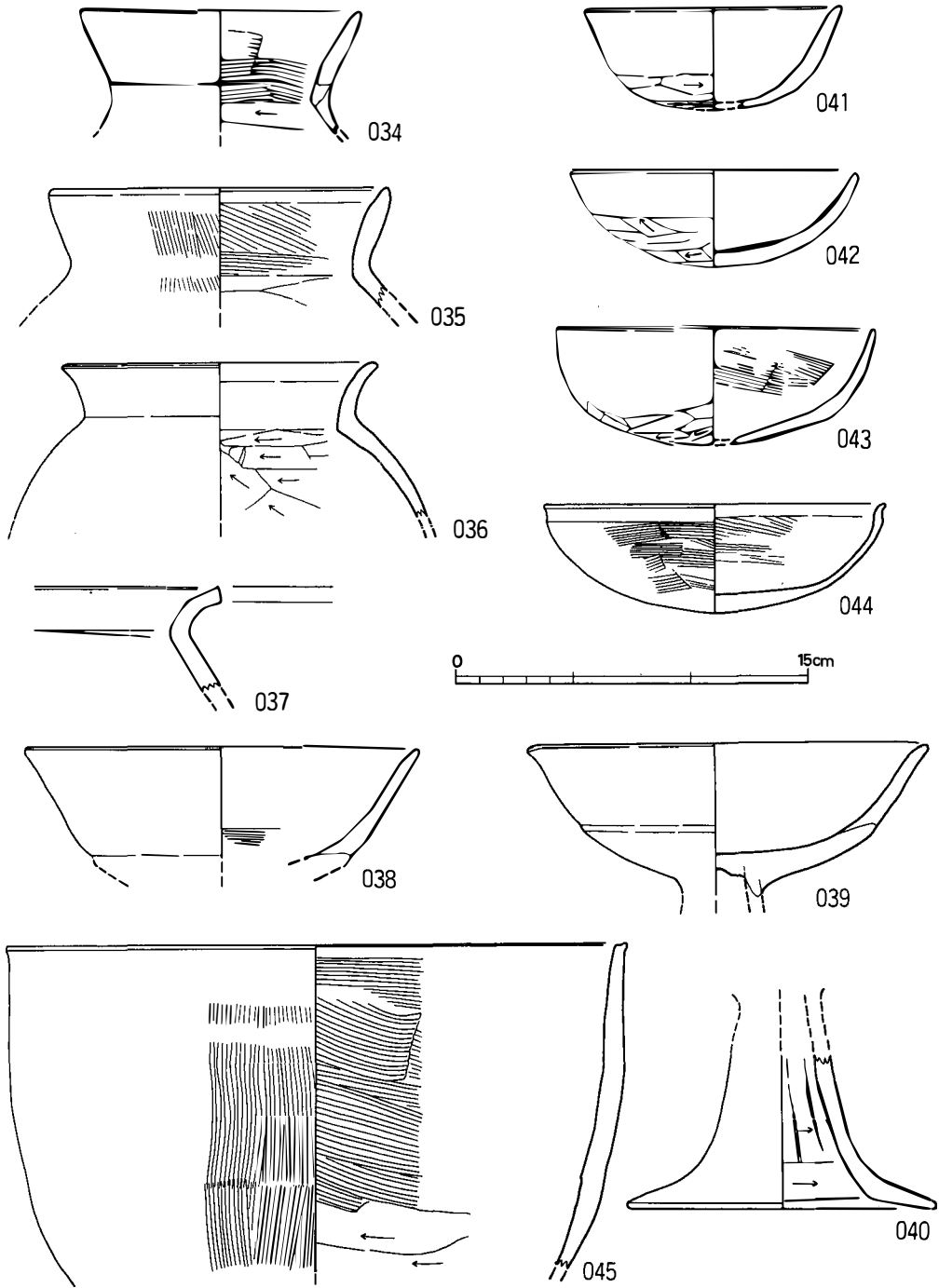
高杯（038～040）038・039は、共に同様の器形。直線気味の杯部上半は端部でわずかに外反。

040は、脚柱部が八の字状にまで開かず、裾部との屈折もほとんど認めぬが、器内の屈折稜はシャープ。

杯（041～044）041～043は、共に口縁部が外傾。044は、直立気味の口縁部が端部で大きく外反し、ヘラ削り後にハケを強く施して調整するなど、前者との差位が顕著。

甌（045）器外は整然としたハケ、器内も口縁下10cmまではハケのまま。ヘラ削りは体部下半のみ。上半部は直線的にわずかに内傾し、端部はヨコナデが強く、上面は凹む。

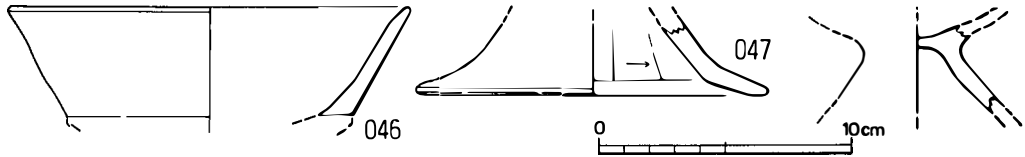
以上の土器のなかで、甕はいずれも破片で埋土から出土したものであるが、034・035は共伴参考と言えるか。高杯は、039が杯の043と共に南壁中央土壇A D 21北埋土出土で、A D 21はおそらく埋設に近い段階で破棄されたものであろうが、039は杯部が完形・043も略完形に接合されたことから、A D 21を南壁に配したことを意識しての投棄の可能性が強い。040は東側溝状遺構AM12の肩部床面出土であり、共に共伴と言えよう。杯は、041が支柱穴内・042が床面出土で、共に完形。043や甌の045と共に、共伴と言えよう。



第 13 図 2号A:(新)住居跡出土土器実測図 (1/3)

3号住居跡 (図版27, 第11図, 表7)

調査区の南東隅部で検出。2号住居に大半を切られて、その詳細は不明であるが、検出され



第 14 図 3号住居跡出土土器実測図 (1/3)

た各壁の方向から、住居の南北軸は約N-12.5°-Eを測る。

住居は、壁土壇D21以南を1号溝状遺構埋土中に設けるが、溝埋土は砂混り暗褐色土で、住居埋土の暗褐色粘質土とは異っており、明瞭に識別できたが、柱穴等は検出せぬ。図版27-1の小ピットは後世のもの。2号住居床面検出柱穴群のなかに、当住居に伴うものがある可能性は少なく、あるいは当初から明確な柱穴は設けなかったものか。住居プランも、他の住居と著しく異なった長方形。

溝状遺構・壁柱穴・対角柱穴などは、細砂質地山であるD21以北の遺存床面でも検出せず。

壁土壇D21は、東壁中央やや南寄りに配す。東西Oに南接する位置に設けたものか。

出土遺物 (第14図、表35)

2号住居に切れ、壁残存高もわずかであるため、土器数片が埋土から出土しただけ。

高杯 (047~048) 047は、脚部が八の字状に開き、脚柱部と裾部との屈折は、器外では著しくないが、器内で若干の稜有り。048は、脚柱部が大きく八の字状に裾部まで開くものと考えられ、047とはやや異なる形状か。047の杯部は、2号住居の039に類似する。

以上のように、図示し得たものはいずれも高杯で、これらは床面出土ではないが、2号住居出土高杯と比べて著しく新しいと言う特徴は認められず、3号→2号住居の順で新しいと言う切り合い関係に矛盾するものではない。共伴参考としてよいであろう。

4号住居跡 (図版31・32、第15図、表8)

調査区の南西隅部で検出。北壁中央部にカマド付設。

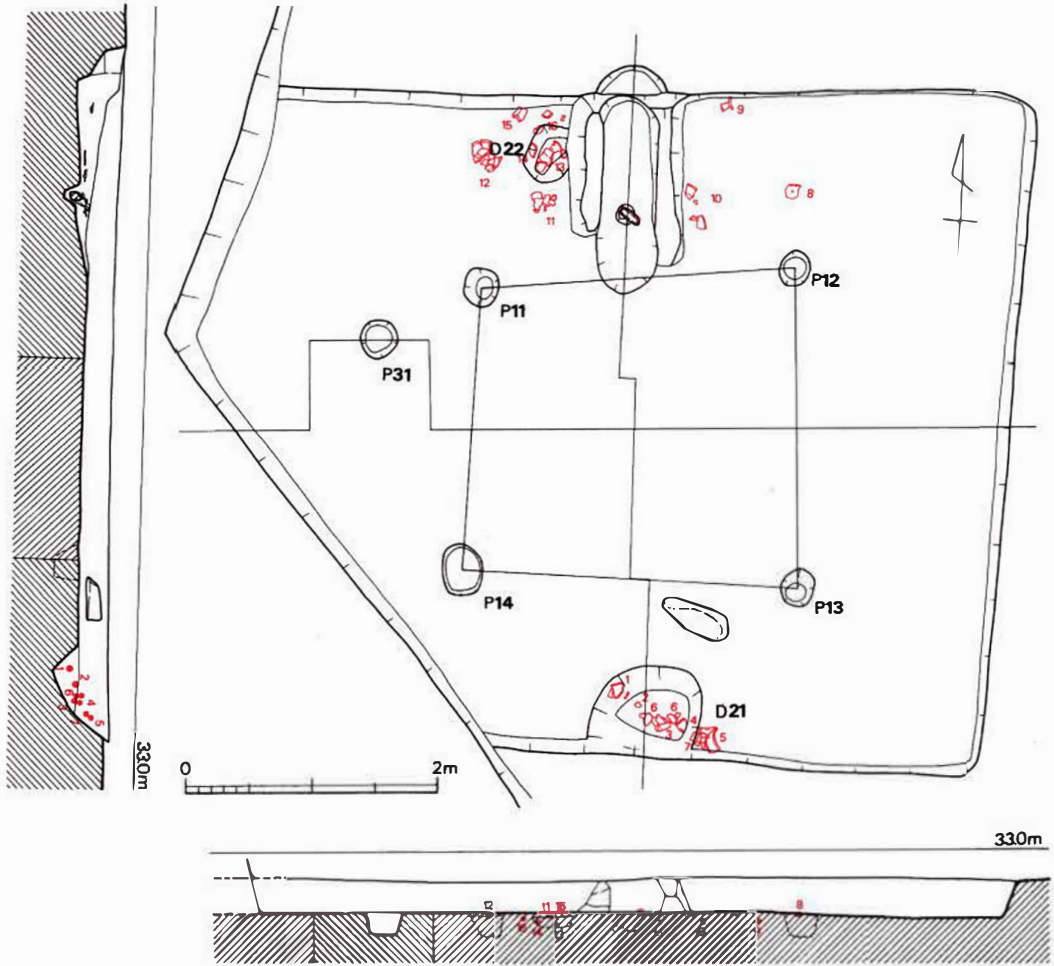
P11~14・31・南壁D21・北壁D22を検出。D21・22・カマド内からの土器の出土が多い。

主柱穴配置は、南壁あるいは北壁からいずれも等距離に位置するが、東壁からの距離はP13がP12よりも約20cm小さくて近くに位置。西壁は調査区壁の断面でも確認されなかったことから、調査区外に位置し、調査区壁コーナー上面から10cm程以西かと考える。しかし、調査区壁は西側を流れる農業用水路があるため、これ以上の拡張を断念。

主軸間柱穴は、住居を4号溝状遺構埋土内に設けるため、P32の確認ができなかったが、東西方向に長軸を有する大型住居であることから、P32は設けられていたと思われる。

壁土壇南壁D21は、カマド主軸に東接して設け、壁外には張り出さず。遺物はいずれも壇底から上位で出土したが、出土番号No6の口縁部片はカマド西袖近くの同No12の高杯と接合し、全体の遺存率7/8でほぼ完形に近い (第18図061)。

出土土器群の中には完形の杯や略完形の甌などの器種を含む。また、後述するように、カマド内からも意識的に脚部を欠損した高杯の出土があり、D21北近くで出土したカマド焚口室天



第 15 図 4号住居跡実測図 (1/60)

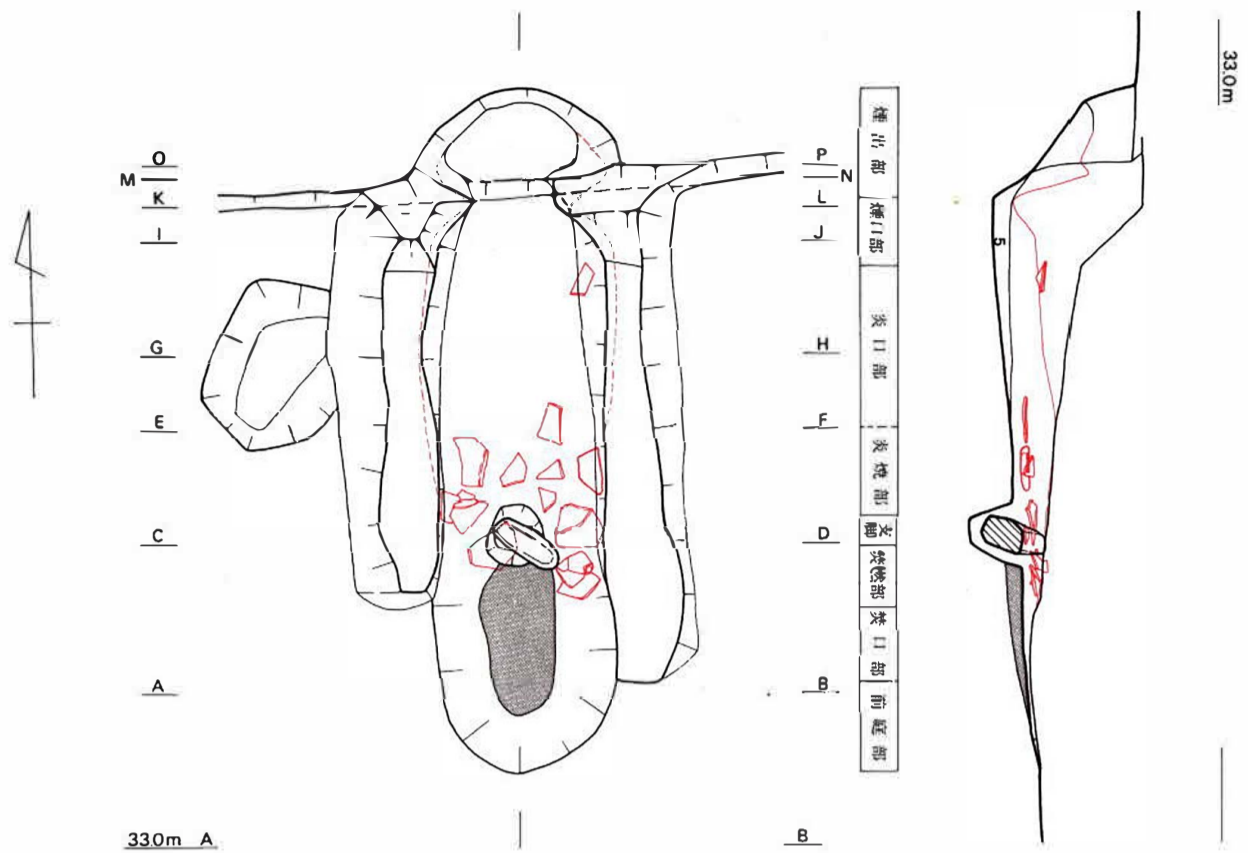
井石も床面から若干浮いた状態であることなどから、D22土壇内出土土器も含めて、これらは再配置一括資料と言える。

カマド西壁外土壇D22は、D21同様の状態で土器が出土し、他のカマド両袖外の、土器群の出土状態からして、カマド遺棄などに伴う祭祀一括資料と言え、祭祀の際に設けられたものであろう。なお、同No10の高杯はカマド内の破片と接合（第18図065）。

カマド（図版31・32、第16図、表8）

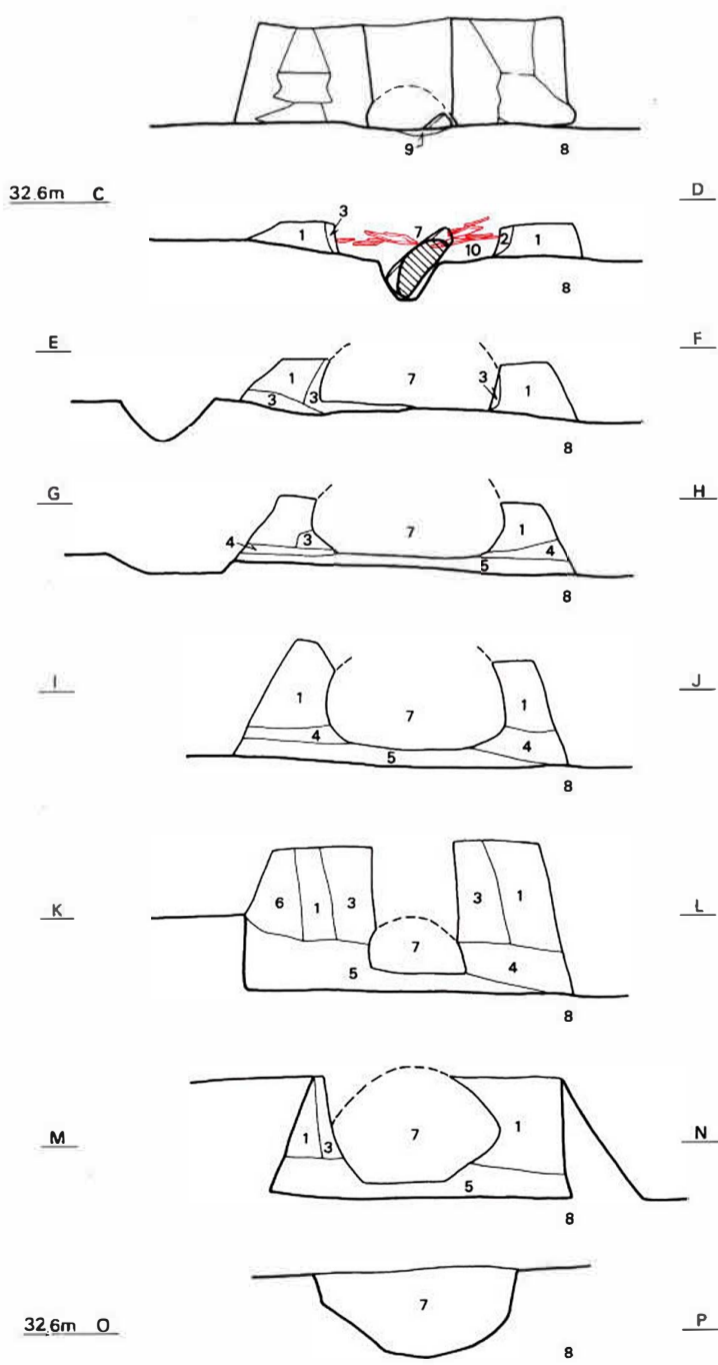
前庭部・焚口室 奥壁から両袖南端までの距離は東袖の方が長い。また、支脚前面の地山の熱変焼土化部分の9層南端は、東袖南端より約10cmほどより南側に広がる。これらのことから、東袖南端は焚口室前面の原位置をほぼ保ち、西袖は焚口室除去の際に共に除去されたものと考え、両袖長の差を焚口部長として計測。

燃焼室 支脚は南西方向に大きく傾いており、掘り方は前述9層を切って検出され、埋土は灰残滓の10層であった。また、室内からは第18図064・065の2個体分の高杯破片が出土したが、脚部は出土していない。これらのことから、支脚は意識的に抜去後に、再度掘り方内に配され



33.0m A

B



32.6m C

D

F

H

J

L

N

P

地山 赤変部



番号	状態	特徴
1層	カマド外壁	黄褐色砂質土
2層	カマド焼土壁	赤褐色焼土ブロックを含む暗褐色粘質土
3層	カマド内壁	暗褐色粘質土(2層に似る)
4層	カマド基部	暗褐色砂質土
5層	カマド基盤	黄褐色粘質土ブロックを含む暗褐色土
6層	カマド外壁	暗黄褐色砂質土
7層	カマド内流入土	4層に似るがよりザラザラする。
8層	地山	黄褐色粘質土
9層	地山熱変部	赤褐色焼土
10層	灰残滓	赤褐色焼土・炭混り灰暗褐色粘質土

第 16 図 4号住居跡カマド実測図 (1/20)

たものと考えられる。この際、この支脚を用いて高杯を破碎したものか。

焚焼部の位置は、前述の高杯片分布が支脚周辺部に集中し、ほぼC-D断面部以南であることや、この断面部以北では床面プランが奥壁に向けて狭くなることなどから、ほぼC-D断面部までと考えられる。

炎口室 両袖共に上面の遺存高は、奥壁から12cmまでは住居検出面と同じだが、これから急激に18cm低くなり、袖南端へと緩傾斜。また、この部分で壁最大内径は以南に比べて急激に狭くなる。これらのことから、袖上面の段差は炎口室天井部の除去の際に袖の上部も除去された結果を示すものと考えた。

煙口室・煙出部 床面・壁最大内径プラン共にK-L断面部で最も狭くなる。また、縦断面図に示すように、奥壁下端とカマド基盤の5層の傾斜変換部も一致。これらのことから、K-L断面以南が煙口室と考えられる。

煙出部は、住壁北壁から半円状に張り出す部分で、床面の傾斜は5層上面にそのまま続く。

土層観察 地山は粘質土であるためか、カマド構築部を床面より一段と深く掘り下げることはせず、5層の粘質土で盛土し、基盤を整備する。この基盤上に4層の砂質土で袖基部を構築するが、燃焼室以南ではこの作業を認めず。袖・天井部は、1～3・6層をサンドイッチ状に使用するが、C-D断面以南の2・3層は薄く、K-L断面以北の3層は厚い。

なお、焼土ブロックを混入するこの3層は、内壁の補修部と考えるよりも、構築時当初から内壁材として使用したものと考えられる。また、D21近くで長さ約60cmの河原石が床面から約10cm上位で出土したが、焚口室天井部に使用していた石材とも十分に考えられる。

出土遺物 (図版155・156, 第17～19, 表35)

(註6)

土器群には、カマド内・外出土例と南壁土坑A D21出土の二者有り。

前者の出土状態は、図版31にも示すように、北壁部に埋土がわずかに流入はしているが、カマド南半部では、床面には埋土が堆積していない段階で再配置されたことを示している。

後者の出土状態も同様で、図版32-2・第16図断面図に示すように、南壁からの埋土の流入がわずかにA D21に及んだ段階で再配置されたことを示している。

両者は、後述する接合関係からも言え、住居の時期を知る際の良好な再配置土器群となろう。

壺 (049) 精製された胎土で、焼成も良く、器壁を薄手に丁寧に調整を施す。

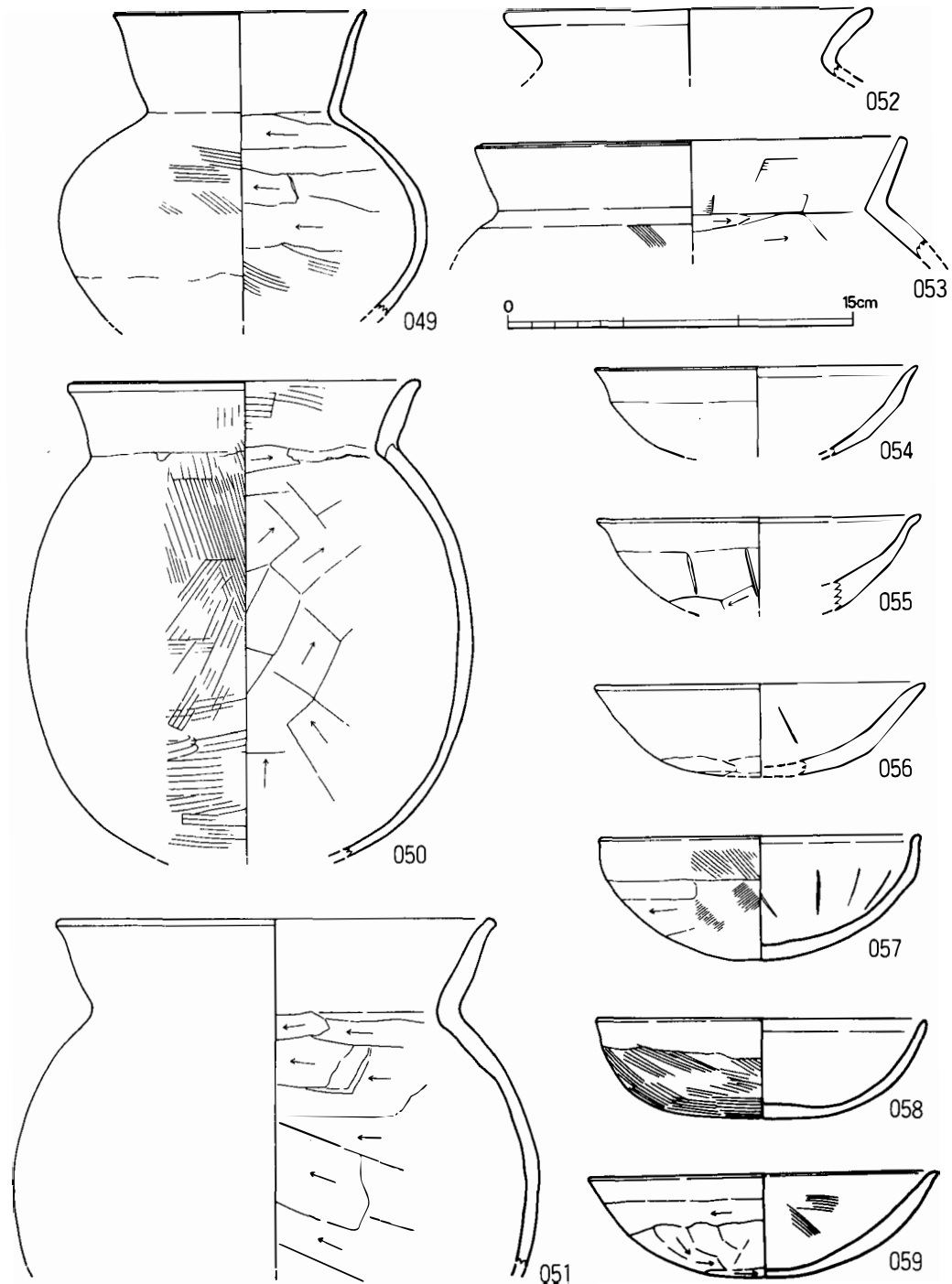
甕 (050～053) 050は、球形の胴部から、口縁部が直線的に外傾し、厚手。

051は、AD21内のNo.3-2(頸～胴上半器周残1/8)・No.6-2(同4/1)の破片と埋土からの口縁器周残1/8の破片が接合し、全体の器周残は、1/4となった。口縁部はわずかに曲屈しつつ外傾し、ヨコナデによって、端部内面はわずかに凹み、上面はやや丸味を呈して下傾。

053は、口縁部が肩部からシャープに屈折して、わずかに内弯気味に外傾。ヨコナデによって、端部は凹み、シャープに造作。

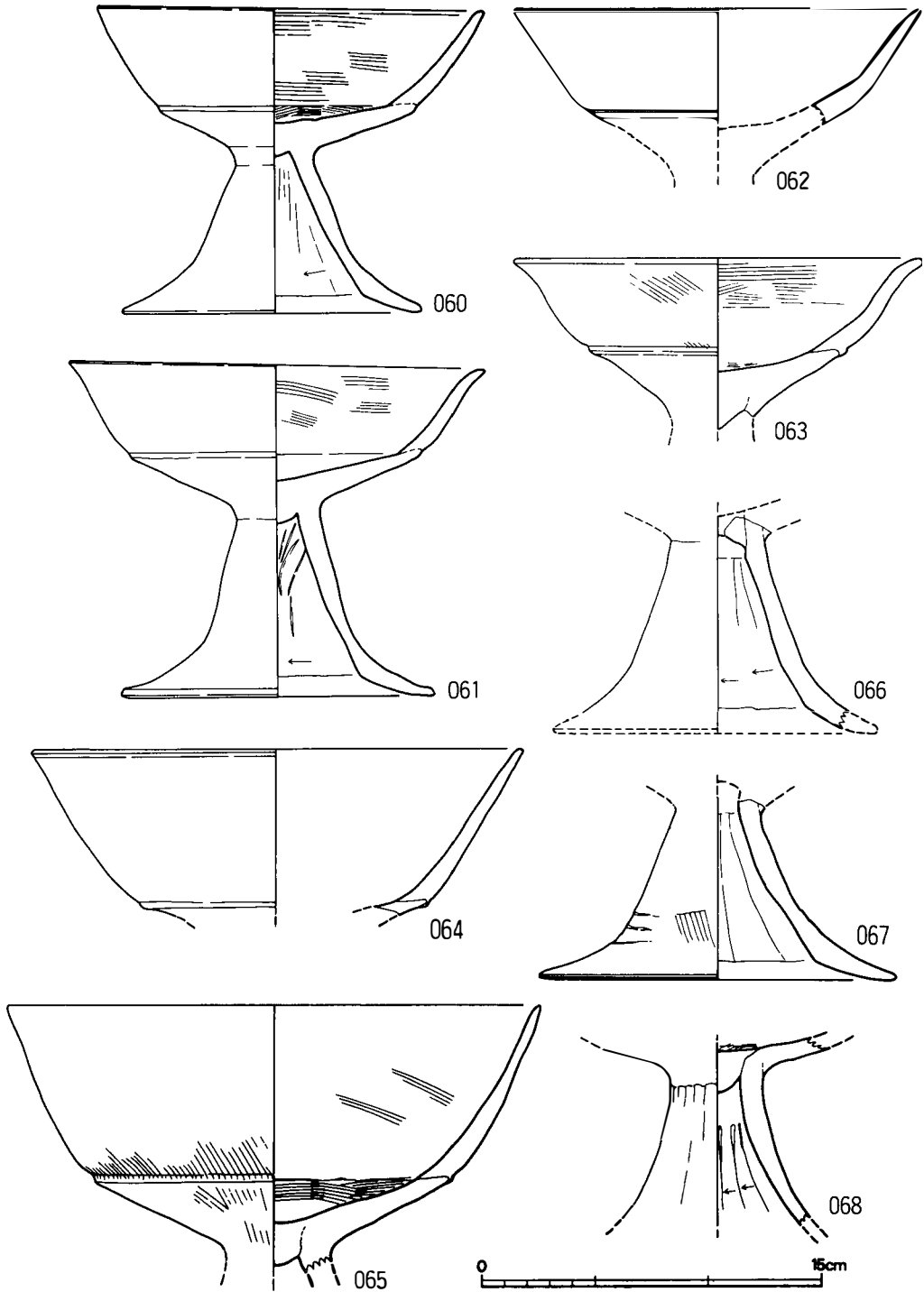
高杯 (060～068・074・075) 061は、A D21からNo.6-1(口縁器周欠1/4)・カマド西からNo.12(脚下半器周残1/4)が出土して接合し、全体で7/8を復元し得た。

060・061は、共に同様の脚部を呈し、杯部も底部から直線的に外傾するなど、類似する点が



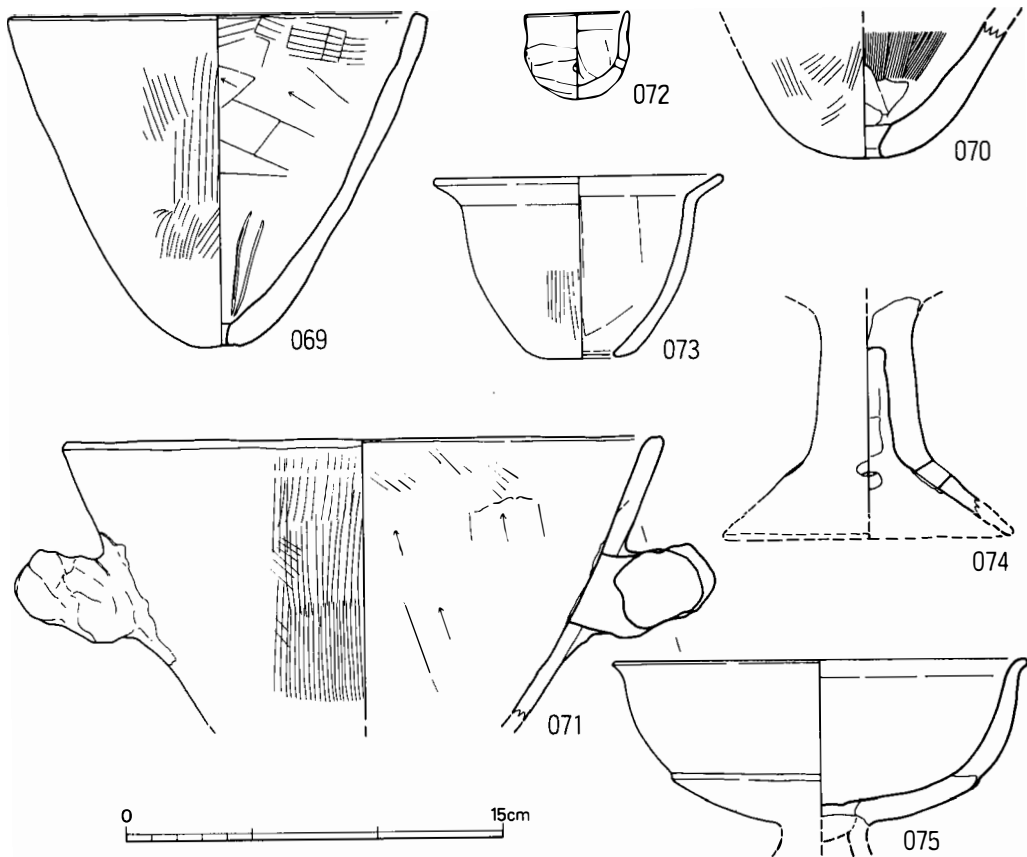
第 17 図 4号住居跡出土土器実測図① (1/3)

多いが、口縁部は、前者が端部上面が外傾し、外面は直縁的に対し、後者は、端部内外面共に杯部から更に外傾するというわずかな差位を認める。



第 18 図 4号住居跡出土土器実測図② (1/3)

064・065は、共に大形。杯上半が口縁部までほぼ直線的に外傾するなど類似する点が多いが、



第 19 図 4号住居跡出土土器実測図③ (1/3)

064は、端部外面はわずかに外方向に突出気味、065は、杯上半がわずかに内弯気味などわずかな差位有り。しかし、この差位はヨコナデ・ヘラナデ・ハケ調整の強弱によるものであろう。

068は、060・061の脚部に類似。

杯 (054~059) 055は、口縁部が厚手の体部から更に外傾し、端部は大きく外反。

057は、口縁部外面はハケ目を明瞭に残し、体部外面はヘラ削り後に一部ハケ目。口縁部は、わずかに内弯気味でほぼ直立し、端部はわずかに外反。

058は、口縁部は体部からわずかの稜を呈して外傾し、ヘラ削り後に、強くハケ目。

059は、口縁部と体部との稜は明瞭ではなく、そのまま外傾し、端部上面はほぼ平坦。

甑 (069~071・073) 069・070は同様の特徴。弾頭形を呈して厚手で、焼成前の円孔は1個。

071は、胴下位から口縁部にわずかに内弯気味に外傾し、水平に近い把手を付す。

073は、小形鉢で、焼成前に1孔を穿つ。

手捏土器 (072) 甑のミニチュアで、胴下位に小孔を穿つ。

以上のことから、壺および052を除く甕は再配置されたものと言えよう。

高杯では、060・061・064・065が068と共に上述と同じ。075は、4号住居最上層 (杯上半器周残 1/2) と5号住居最上層 (杯上半同 1/8・同下半同 1/1) 出土の2片が接合し、全体で 3/4

にまで復原されたが、063と同様に厚手の杯上半が著しく内弯し、端部は大きく外弯気味で、前述の共伴としたものとは出土状態・器周残を含めて明瞭な差位が認められ、除外すべきか。

杯では、055・057～059が再配置されたもので074は、明かな混入例。

甗は、069・070が弾頭形で把手を付さないが、071の体部形状との類似もあり、出土位置・出土状態から、072を含めて、再配置されたものと言えよう。

073は、住居が弥生時代の4号溝状遺構埋土を切って設けられており、混入資料とすべきか。

5号住居跡（図版33～39-1，第20図，表9）

調査区の南西隅部で検出。北西壁隅部に、北向きのカマド付設。弥生時代の4号溝状遺構を切ると共に、古墳時代の20号住居も切る（図版13～15）。

P12・13・21・32・壁柱穴・施設柱穴・D11を検出し、住居床面からは、多くの炭化材・灰が出土した火放ち家屋。

主柱穴配置は、P12・13のみが検出され、P12内からは川原石が2個出土。住居北半部が4号溝と切り合っていることから、P12内に礎石として使用したもののか。

なお、P12・13は壁隅部に設けられており、本来は対角柱P42・43を付すべきであるが、P12および壁外の施設柱P61～69の存在から、明らかに主柱穴と考えられ、P12・13を付す。

5号住居同様に壁隅部にカマドを付し、床面積も同様に小さい6号A（新）住居では、柱穴は主軸柱穴1個のみしか検出されていないことから、カマドを壁隅部に設け、柱数を少なくすることで床空間の効率的使用を考慮したもののか。

P11は、カマド支脚の位置に当たることから、当初から設けられていないことは明らか。

P14は、床面で検出の努力をしたが、出土せず。P32が設けられていることから、P11同様に当初から設けられなかったものと判断。

主軸柱穴は、住居中央に設けられ、カマド主軸延長軸線上にP21・P13を配し、住居外のP64・65はこの軸線に対峙して検出。

主軸間柱穴は、P32のみの検出であるが、P31の位置はカマド西袖近くに当たることから、当初から設けられなかったものとする。

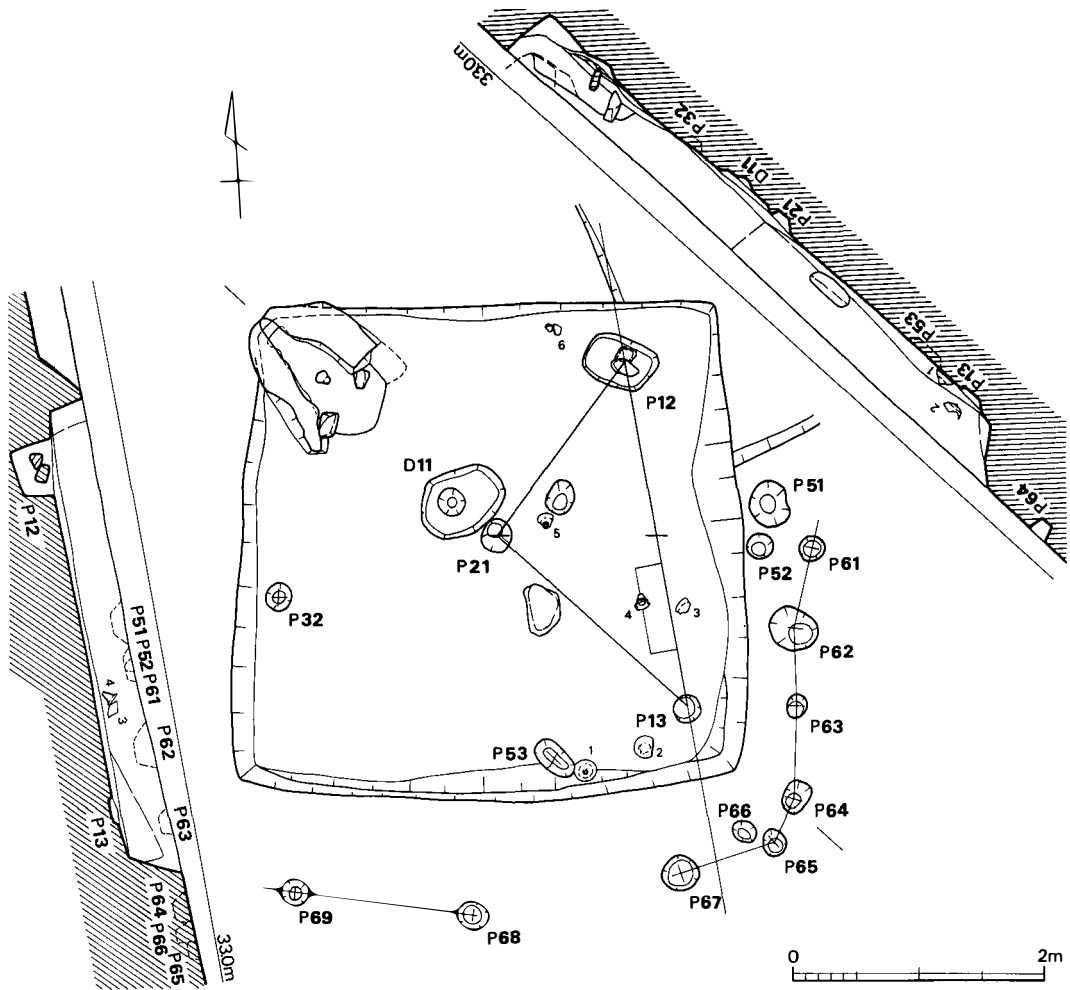
壁柱穴は東壁外にP51・52を、南壁内にP53を配し、P21・53とP12・13柱列方向は南壁方向と共にいずれもほぼ等しい。

また、P51・52はP12-13の中心とP21の中心を通る住居主軸に接して配す。

これらのことから、P53は他の住居内の柱同様に家屋の上部構造を決定する柱材に使用され、P51・52は妻を決定する柱材に使用したものと判断。

住居外の施設柱は、東壁外にP61～64を、南壁側にP65～69を検出。東壁側では、P61以北に2個ほどの施設柱を配していたことが充分に考えられるが、20号住居の埋土中からの確認が困難で、検出し得なかった可能性が強い。

しかし、北壁と西壁側は4号溝の埋土中ではあるが、住居北・西両壁プランは明確に検出し得たから、当初から配されていたものなら、充分に検出できたはずであるが、確認されていない



第 20 図 5号住居跡実測図 (1/60)

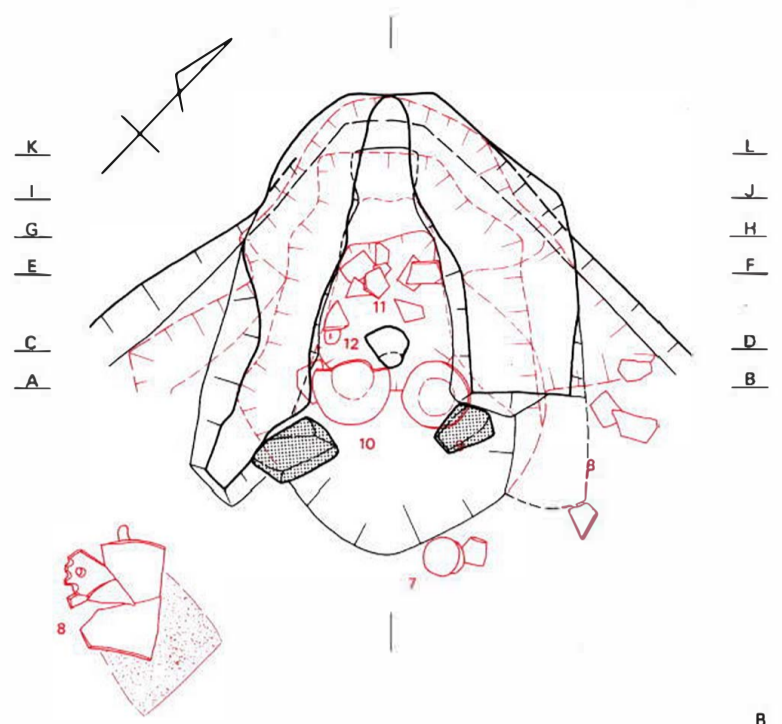
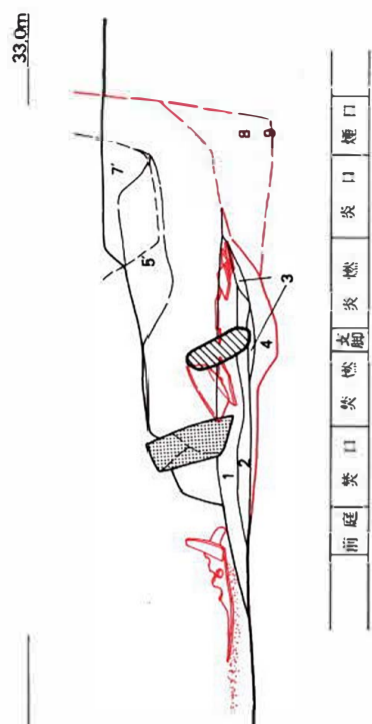
い。カマド配置からして、ここでは北・西壁側には施設柱は配されなかったものとする。

なお、施設柱穴群の用途については、これを垂木材の地表部での固定材用とすることも一部には可能であるが、ここではP53の配置からつぎのように考えた方が妥当であろう。P61～67間とP68～69間には住居に伴う柵列を設ける。P67～68間は住居内への出入口部で、P53・67・68を使用してその出入口部施設材とする。

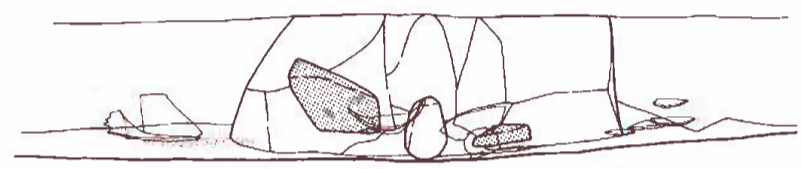
カマド (図版34～39-1, 第21図, 表9)

天井の一部も良好に遺存し、燃烧室内から土製手捏鏡・高杯が藁灰と共に出土して、カマド遺棄時の祭祀行為を確認。

前庭部 縦断面図に示すように、明確な窪みとしての前庭部は検出されなかった。新灰の2層が焚口室南面に10cmほど広がり、その上部に藁灰の1層が同様に30cmほど広がる。この1層はカマド南面の甑・壺下面でも部分的に検出。

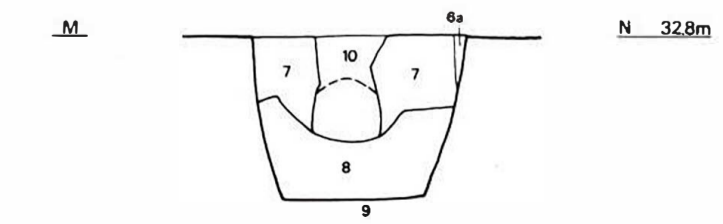
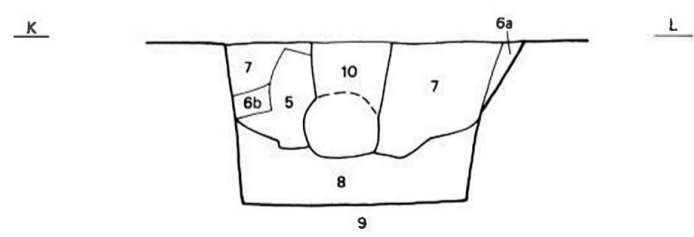
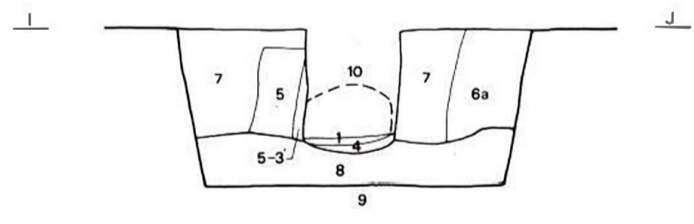
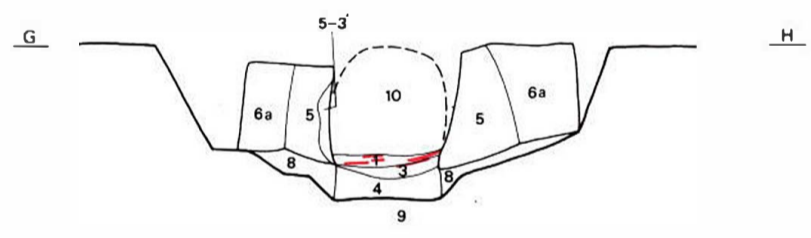
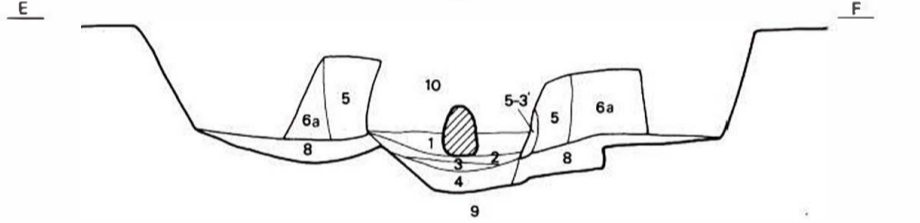
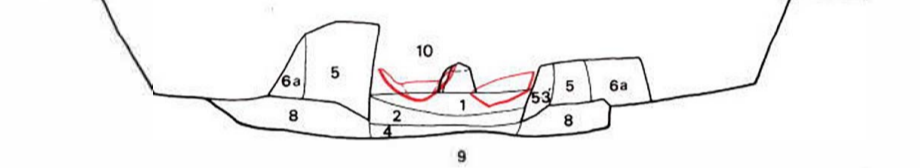


A B 33.0m



C D 32.8m

焼土塊
 ワラ灰



番号	状態	特徴
1層	祭祀灰残滓	ワラ灰層(焼土ブロックを若干含む)
2層	新灰残滓	暗褐色粘質土(焼土ブロックを含む)
3層	焼土(壁・床)	砂質赤褐色焼土
4層	旧灰残滓	暗褐色粘質土(焼土粒を含む)
5層	袖内壁	黄褐色砂質土(粘性やや有り)
6a層	袖外壁	暗褐色砂質土(焼土粒を含む)
6b層	袖外壁	暗褐色粘質土
7層	炎口・煙口・壁体	黄褐色粘質土
8層	カマド基盤	暗褐色粘質土(黄褐色粘質土ブロック含む)
9層	地山	黄褐色粘質土
10層	住居埋土	暗茶褐色粘質土

*5は5層・7は7層の見透し



第 21 図 5号住居跡カマド実測図 (1/20)

焚口室 東袖が除去され、最も火熱を受けて赤褐色焼土となっている天井部分は、焼土塊のまま焚口両袖部に据え置かれていた。この焼土塊は共に1層中にその下面が至っている。

燃烧室 C-D断面に示すように、高杯杯部が2個体（第22図079・081）整然と配す。（図版35-1）。この高杯も共に前述の焼土塊（天井部）同様に、その下面は1層中に至っている。2個の高杯の口縁部南端が、燃烧室と焚口室の境と看取。

支脚は河原石製で、縦断面に示すように焼土の3層に下面が接して、南方へ傾いて出土したが、明確な掘り方は検出されなかった。この3層は2層下位で検出されたものであるが、支脚前面の焚焼部よりも、むしろ支脚後面の炎焼部に広がっており、旧灰残滓の4層が熱変焼土化した火床とは考えられぬ。おそらく、使用時の支脚は4層中に埋置して安定させたもので、支脚は一度抜去されたもので、3層は壁・天井部の焼土の落化したものか、焚焼部の火床の一部であろう。しかし、支脚上方は天窗部であることから、支脚前面の焚焼部火床の一部が移動したものと看取してよいだろう。

炎口室 I-J～M-N断面間が炎口室で、床面は基盤整備土の8層上面。床面は、煙口室との境に向けて緩傾斜し上昇。天井の一部は、K-L・M-N断面で示すように良好に遺存。

煙口室・煙出部 煙口室床面は47°の傾きで上昇し、同奥壁の傾斜角は82°を測る。

煙出部は住居壁外に明確な張り出し部としては検出されていない。遺存壁高25cmを測る2号住居カマドでは煙出部が検出されているが、5号住居の遺存壁高は30cm以上を測る。カマドの位置が、住居壁隅部であることから、煙出部を住居壁外に設けず、煙口室先端を開口しただけの構造とも考えられる。

土層観察 第21図の平面図には、カマド基盤整備のための掘り方をTTTTTTで、基盤整備土の8層のプランをTTTTTTTで、旧灰残滓で埋められたプランをTTTTTTでそれぞれ赤線で示す。

また、縦断面には、西袖の天井部の遺存高と5層上面の見透しを加えて、共に赤線で示す。

基盤の掘り方は、縦断面に示すように、焚口室から奥壁に向けて緩傾斜をするが、燃烧室床下は更に深く掘り下げる。この燃烧室部分の基盤土は、袖基盤土の8層を用いず、旧灰残滓を混入した4層を用いており、深く掘ることに加えて基盤土の使用に際してもより一層の室内の除湿を考慮している。このことは、住居北半部が弥生時代の4号溝状遺構埋土内に設けられていることに起因するものか。

炎口室以北の基盤は、8層のみを使用し、住居壁に袖が密着し、間隙は認めず。炎口室の床から天井までの高さは、K-L断面図で復現すると、17cmを測る。

カマド祭祀 カマド内部と前庭部付近にかけて、藁灰の1層を検出。層の厚さは最高で6cmを測り、多量の藁が燃されている。

また、図版33-1に示すように、住居内からは多くの炭化材が出土し、中央部で床面から8cmほどの高さで堆積し、周辺部では一部検出壁面の高さまで続くものも認められた。しかし、この炭化材はカマド内およびカマド前面の遺物上面からは検出されず、他の遺物が炭化材中あるいはその下の床面から出土したことに比べて著しい差位と言える。

以上のことに加えて、カマド内および前面の遺物等の出土状態から、住居・カマド遺棄に伴

う祭祀行為は以下のように看取できよう。

①家屋破棄・カマド破棄前の行為

出土番号 No.1 の完形高杯杯部(第22図080)は床面に接して伏せた状態で、炭化材下から出土し、折損された脚部は未検出である。このことから、高杯は家屋破棄・カマド破棄前の祭祀行為に使用したものと考えられる。

②家屋破棄(火放ち)行為

同 No.2・4・5(第22図077・084・083)の高杯はいずれも杯部・脚部が折損された状態で、床面から若干上位の炭化材中から出土。火放ち行為に際して再配置されたものと考えられる。

なお、前述No.1に加えてNo.2は共にカマドと反対方向の南東壁隅部で検出されており、カマド中の2個の高杯の出土位置を考慮すれば、カマドの存在を強く意識したものと看取される。

③カマド破棄(播火)行為

㊸支脚抜痕が明瞭でないことから、最初に支脚を抜去し、その後で天井部を除去する(カマド機能停止行為)。

㊹稲藁をカマド内に入れ、あるいはカマド前面にも稲藁を置く。その後で、カマド内にNo.12の土製手捏鏡(第145図837)を伏せ置き・甑(第23図098)破片を入れる(カマド播火前行為)。

なお、土製手捏鏡は焼成が著しく悪いことから、未焼成のまま伏せ置かれたもので、甑の破片は、東袖外で床面から若干浮いた状態で炭化材中から出土したNo.8-1の破片と接合したことから、前述の㊹の家屋破棄行為に伴って破碎されたものと看取される。

㊺カマド前面の稲藁上に、No.8-2の甑(第24図100)を置き、火を放つ(カマド播火行為)。

このときに、㊸あるいは㊹の行為で使用した高杯は杯部以下を折損する(第22図079・081)。
なお、前面の甑はつぶれた状態で出土しており、完形近くにまでに接合できた(図版158)ことから、破碎はされなかったものと看取される。

㊻前述のNo.9・10の脚部折損の高杯杯部を支脚前面の焚燃部に整然と配し、支脚を抜去前の位置に配する。また、No.7の小壺(第23図088)を前庭部に置く。

その後で、㊸の行為で除去した焚口天井部を焚口室両袖部に配する(カマド封印行為)。

出土遺物(図版157・158, 第22~24図, 表35)

埋土中からも若干の遺物の出土があったが、床面からのものにカマド内・外の土器群と、第20図に示した高杯群の良好な資料を得た。

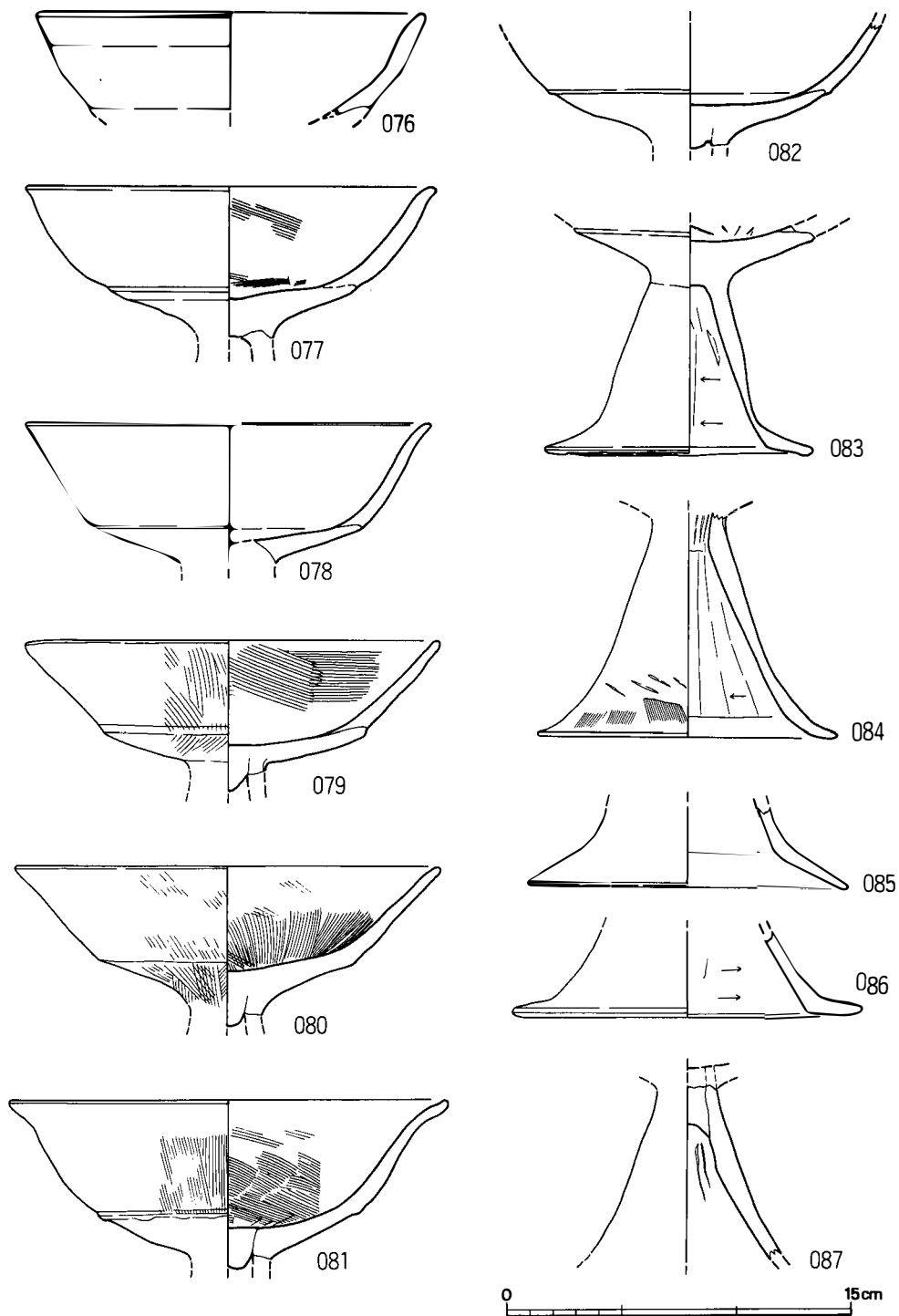
壺(088) 小形。胴部器外は、上位がハケ目後ナデ、中位以下が丁寧なヘラ削り。

甕(094~096) 096は、口縁部が大きく外傾。端部はシャープな稜有り、平坦上面は下傾。

高杯(076~087) 077は、杯部が完形に接合。器内は、下半の底部と脚部との接合部である中央のみをナデ、他はハケ目のままで、上半は一部ハケ目を残す。

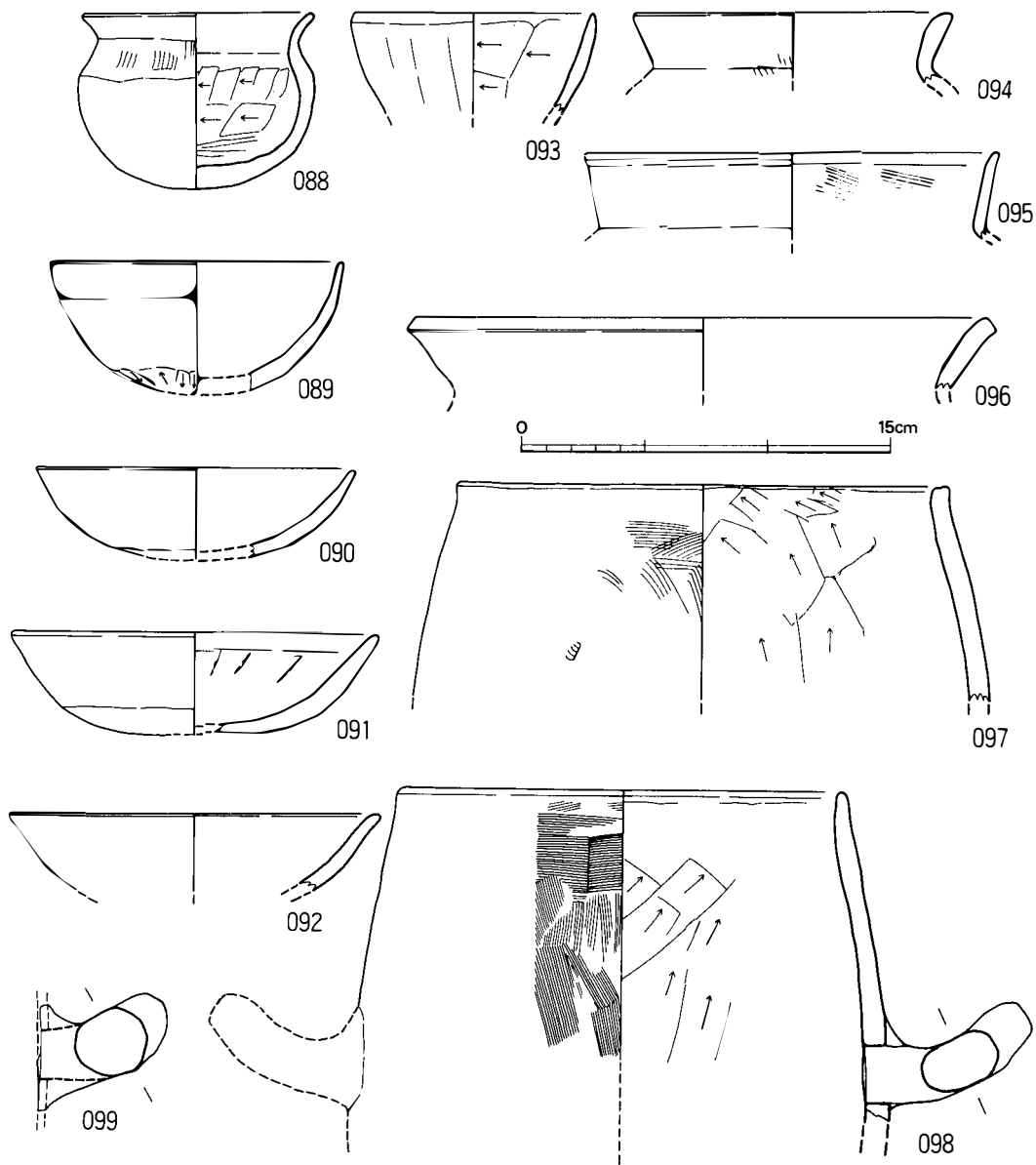
079は、杯部完形。器外および器内上半はハケ目のままで、器内下半以下のナデは丁寧。杯部の上・下半部の胎土接合時に下半部に付したハケ目を観看。

080は、杯部完形。器内の中位以下および器外下半はハケ目のまま。器内中位以下には油煙様の黒色付着物が認められ、カマド祭祀時の火の使用に関係するものであろう。



第 22 図 5号住居跡出土土器実測図① (1/3)

081は、図版35で土製手捏鏡(第145図837)の出土状態を示すために、杯上半の破片の一部を



第 23 図 5号住居跡出土土器実測図② (1/3)

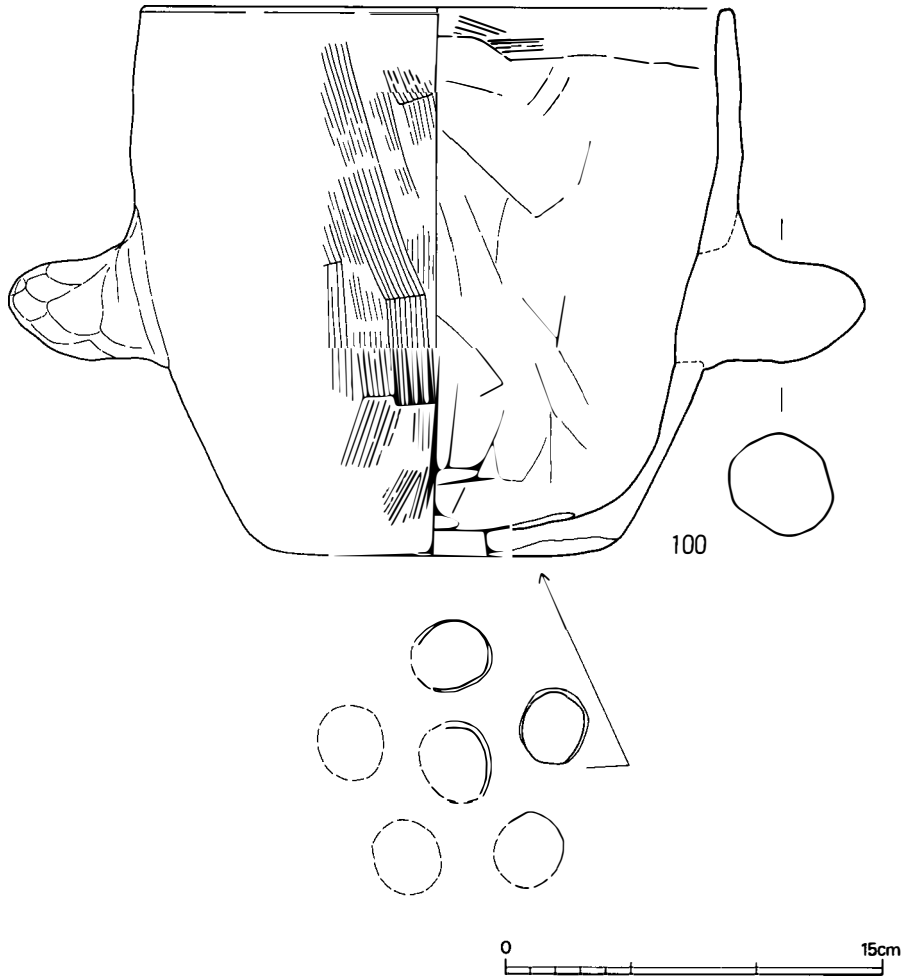
除去したためで、当初は杯部は079同様に完形で配されていたもの。

080 同様のハケ目を残すが、器外下半は磨滅のため、不明。

083は、中央土坑東のNo.5 (脚部器周残7/8・+10cm) と床面出土 (脚裾同1/8) と埋土出土 (杯下半同1/3) の破片が接合し、杯下半以下を完形に復原し得たもの。八の字状に開く脚柱部は、ややエンタシス状気味で、脚裾部は更に屈折して開く。

084は、器外は脚柱部から裾部に八の字状に開くが、器内では著しい稜を有して屈折。

杯 (089~092) いずれも破片。



第 24 図 5号住居跡出土土器実測図③ (1/3)

甑 (098~100) 098は、カマド内(器周残1/4)と埋土下位(器周残1/8)出土の破片が接合し、他に埋土出土の胴部片と把手1個が同一個体片と認め得る。

器外は細いハケ目を施す。把手は、水平に体部に付し、中位で大きく外傾。

100は、カマドの西だけでなく東でも破片の一部が出土し、接合。底部は平底で、器外は丁寧なナデ。把手の径は大きく、やや体部から下傾。

鉢 (093) 器外は縦方向、器内は横方向にヘラ削り。

以上のなかで、高杯では、077・079~081がいずれも杯部が、完形かあるいは完形に近く接合されると共に、脚部を欠失する。079と081はカマド内からの出土であるが、前者は080と類似し、杯上半は直線的に外傾する。後者は077と類似し、杯上半はわずかに内弯しつつ、口縁部で大きく外反する。077は床面から10cm上位からの出土であるが、図版37-1に示すように、床面出土の080と共に、南壁東半部で近接して検出された。

これらのことも考慮すれば、077~081の杯部と083・084の脚部は一括共伴資料と言えよう。

壺の088・甗の098～100も前述の高杯同様に考えてよく、100は最古式須恵器甗の器形の影響
 と言え、098の器形と併存する好資料。

甗については、096が器周残1/8の破片であるが、カマド内出土であることから、共伴資料と
 言え、杯についてはいずれも破片であることから、今少し考慮すべきであろう。

なお、表35では出土位置の項が空白だが、他の住居出土土器表の空白と異なり、いずれも図
 版31-1に示すような床面に接した炭化材を検出する際の埋土下層～床面間で出土したもの。

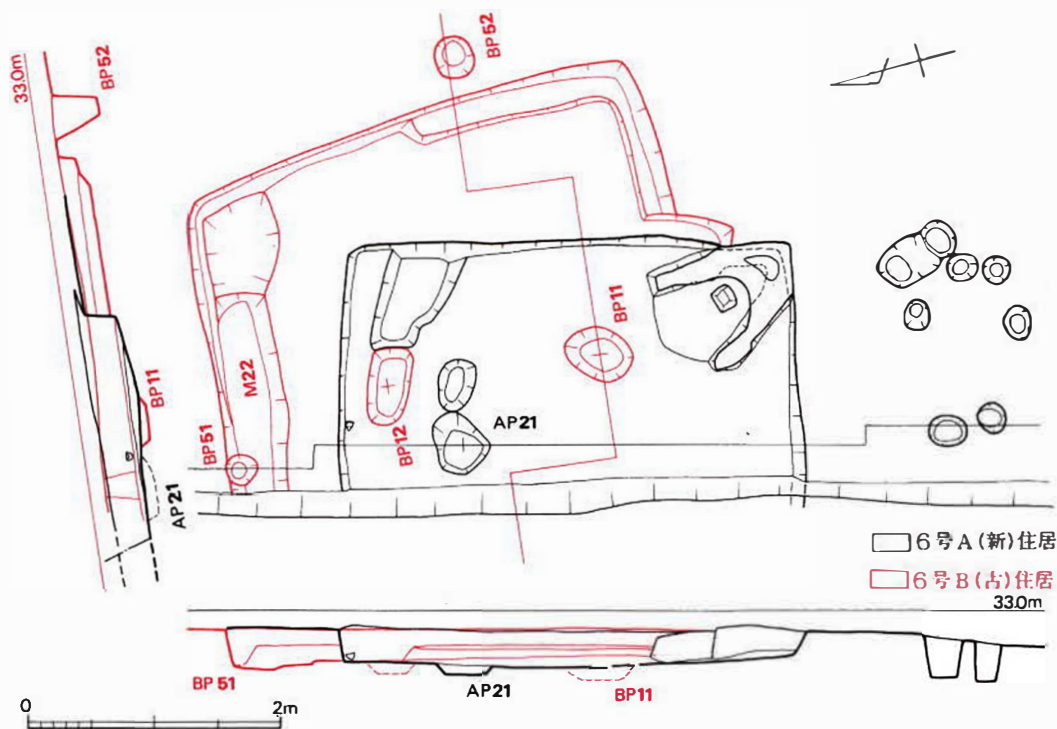
6号A(新)住居跡 (図版39～1～42, 第25図, 表10)

調査区西端検出。南東壁隅部に、南向きのカマド付設。弥生時代の6号B(古)住居を切る。

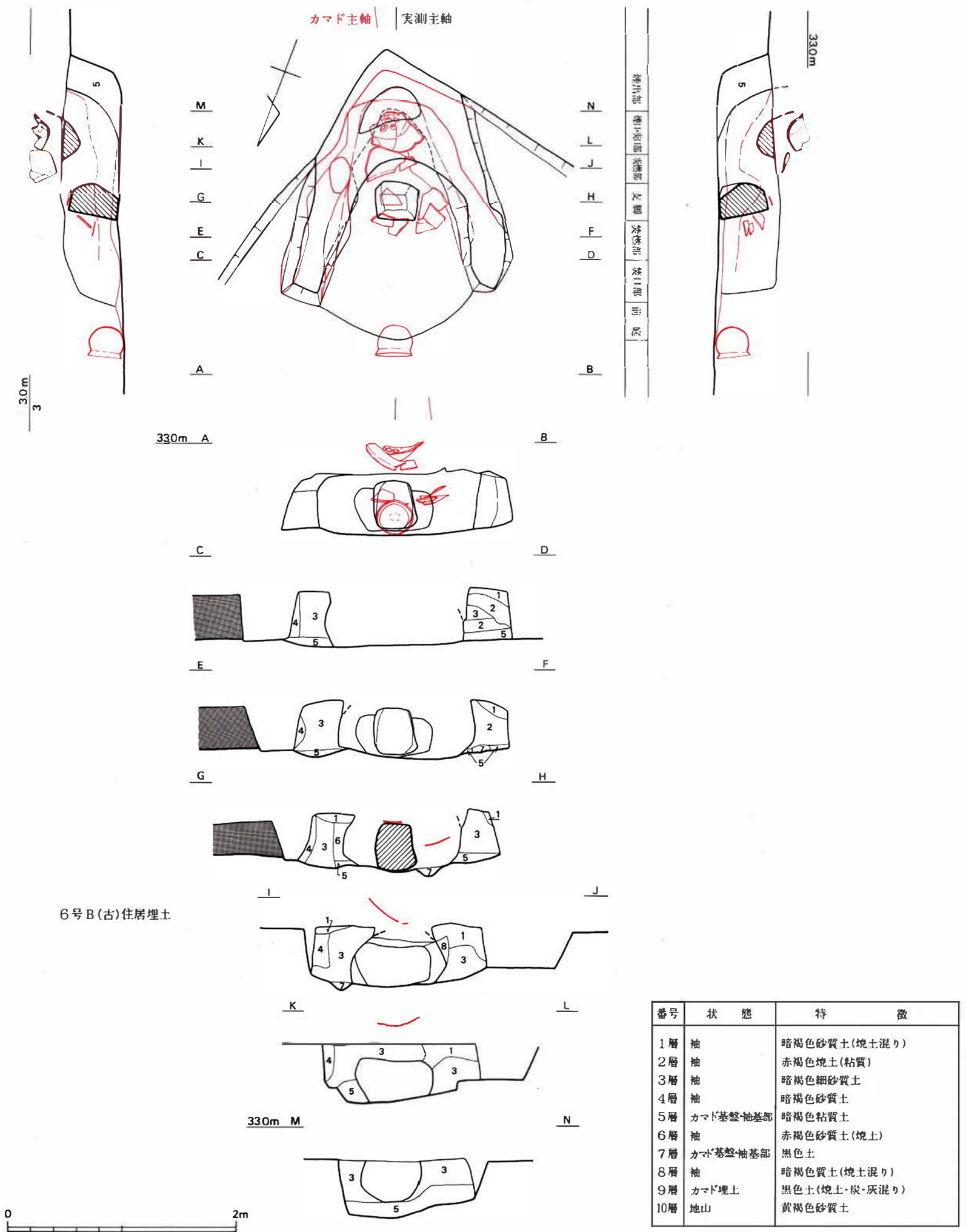
以下の説明では、6号A(新)住居の柱穴をAPと呼び、6号B(古)住居の柱穴・土壇な
 などをBP・BDなどと呼ぶ。

主柱穴は検出されなかった。カマド前面のBP11は、A期の柱穴とするにはカマドの位置か
 ら無理と判断。AP21に東接するピットはB期に属するかも知れぬ。AP21を主軸柱と考え、
 主柱穴を設けないものと判断。住居壁プランは、東壁に対し南・北両壁はほぼ直交。このこ
 ころから、主軸はAP21の中心を通り、東壁に平行なN-8.0°-Eと計測。主軸柱を南壁側に設けず
 に、北壁側に位置させたのは、カマドの位置に規制されたものであろう。

なお、床面積の復原は、主軸東半部面積を2倍して求めたもの。



第25図 6号A(新)・B(古)住居跡実測図(1/60)



第 26 図 6号A(新)住居跡カマド実測図(1/20)

カマド（図版40・41，第26図，表10）

カマドの実測・発掘に際しては，煙出部南端～支脚中心～前庭部北端を結んだ中軸線S－20°－Eをカマド実測主軸として使用。

前庭部・焚口室 両袖共に，北端は焚口室前面の旧位置を保っており，西袖最大内径が急に狭くなるC－D断面部までが，焚口室と考えられよう。焚口室天井は遺存せず。

燃烧室 支脚は大きい河原石で，底部の安定もよい。G－H断面部床は若干周辺からレベルが低いだけで，特に掘り込んではいない。E－F断面部で，袖は最大内径を有すが，縦断面に示すように，このE－F断面部でも床面のレベルが周辺よりも若干低い。このことから，支脚の使用時の位置は，出土位置よりもやや北方であったことも考えられる。

支脚前面の焚燃部では，床面から10cm以上浮いた状態で，高杯（第27図105）破片が出土し，その1片は支脚上面に接していた。

支脚後面の炎焼部では，縦断面図に示すように，天井内壁の一部も遺存する。

炎口・煙口室 炎口室天井は良好に遺存し，煙口室内壁の一部も遺存。

煙出部の奥壁は5層によって，住居奥壁から15cm内側に設ける。

土層観察 カマド袖のなかで，1・2・6・8層はいずれも焼土あるいは焼土を含んでおり，これは袖の補修部とも考えられるが，焼土を含まない3層は，C－D断面西袖では2層中にブロック状に検出され，1層は2・3層の上部に認められる。しかし，K－L断面では，1層が3層中に貫入しており，M－N断面では基盤5層上に位置して，煙口室の壁体となる。

以上のことなどから，袖体には当初から，焼土あるいは焼土を含むものを使用したものとする方がよいであろう。

なお，袖除去後に，ほぼ袖プランに一致する掘り込み部を検出。これは地山が砂質土であることから，カマドの除湿効果を考慮して設けたものであろう。掘り込み内埋土は，5層の粘質土を使用しており，この5層は煙口室床・袖基部と煙出部の構築にも使用。

遺物出土状態 前庭部北端で，床面に接して第27図109の甕が完形で出土した。炎口部上位の甕（第28図114）は断面図では5cm程浮いた状態で図示しているが，I－J断面に代表されるように，袖最上位の土層が1層の焼土混りのものであったために，カマドプラン検出の際，この層をカマドの灰残滓と誤認して掘り下げたことに起因するもので，本来はK－L断面の3層上位に使用されていた1層上に接して出土したもの。

したがって，この甕はカマド遺棄に際し，炎口上部に再配置したものであり，前庭部の完形の甕も同様に，床面に再配置したものと言えよう。

なお，K－L断面近くの東袖部で出土した第27図110の手捏土器は，3層上位の前述した掘り下げて除去してしまった1層内に埋められていたものと考えられる。住居北壁でも，第27図111の手捏土器の出土があった。

以上のことから，手捏土器の東袖内埋置はカマド構築時の，高杯の破碎と支脚上面への配置はカマド破棄時の祭祀行為によるもので，前庭部の甕・炎口室上部の甕の配置もカマド破棄行為に伴うものとする。

出土遺物（図版 158・159，第 27・28 図，表 35）

出土遺物は少ないが、カマド内・外で良好な完形資料を得た。

壺 (101) 器外胴部はヨコナデ・横方向ナデを施すが、一部に細ハケ目残。頸肩部からシャープに屈折した口縁部は、直立気味でやや外傾。端部はわずかに丸味を呈すが、ほぼ平坦。胴部の調整を含めて丁寧な造作。

甕 (102～104・116) 104 は、図版 42-2 の左・116 は同右に示すもので、共に潰れた状態で、カマド西床面から出土。116 は口径 18.8・胴部最大 22.9・器高 30.9 cm。

104の器外は、胴上位をハケ後にナデ、中位以下もナデを施すがハケ目を多く残すため、中位にわずかの稜有り。球形胴部から大きく直線的に外傾する口縁部は、丁寧にヨコナデを施し、端部はわずかに丸味を呈すが、上面はほぼ平坦で下傾。ハケ目はやや細く、最大径は胴中位にある。

116の器外は縦方向の細ハケ目と太ハケ目が整然。頸肩部からシャープに屈折して直線的に外傾する口縁部の、ヨコナデは丁寧。端部はわずかに凹む。

高杯 (105～107) 105は、大形例。杯部下半から大きく屈折して、直線的に外傾する上半は、口縁部が更に若干外傾。端部は、ヨコナデでシャープに調整し、明瞭な稜有り。脚部は、意識的折損か。

106・107は、甕116が図版42-1で示したように調査区西壁に接して出土したため、これを掘り上げる際に、その西壁内床面から出土。106・107は、前者が器周残1/1・後者が同3/8であるが、残余の破片の発掘は、西壁外の農業用水路のために断念したもの。共に八の字状に開く脚柱部と裾部との屈折稜が器内面で顕著。後者は、ハケを一部残し、裾内端面にはヨコナデ後に新たな胎土の付着を認める。

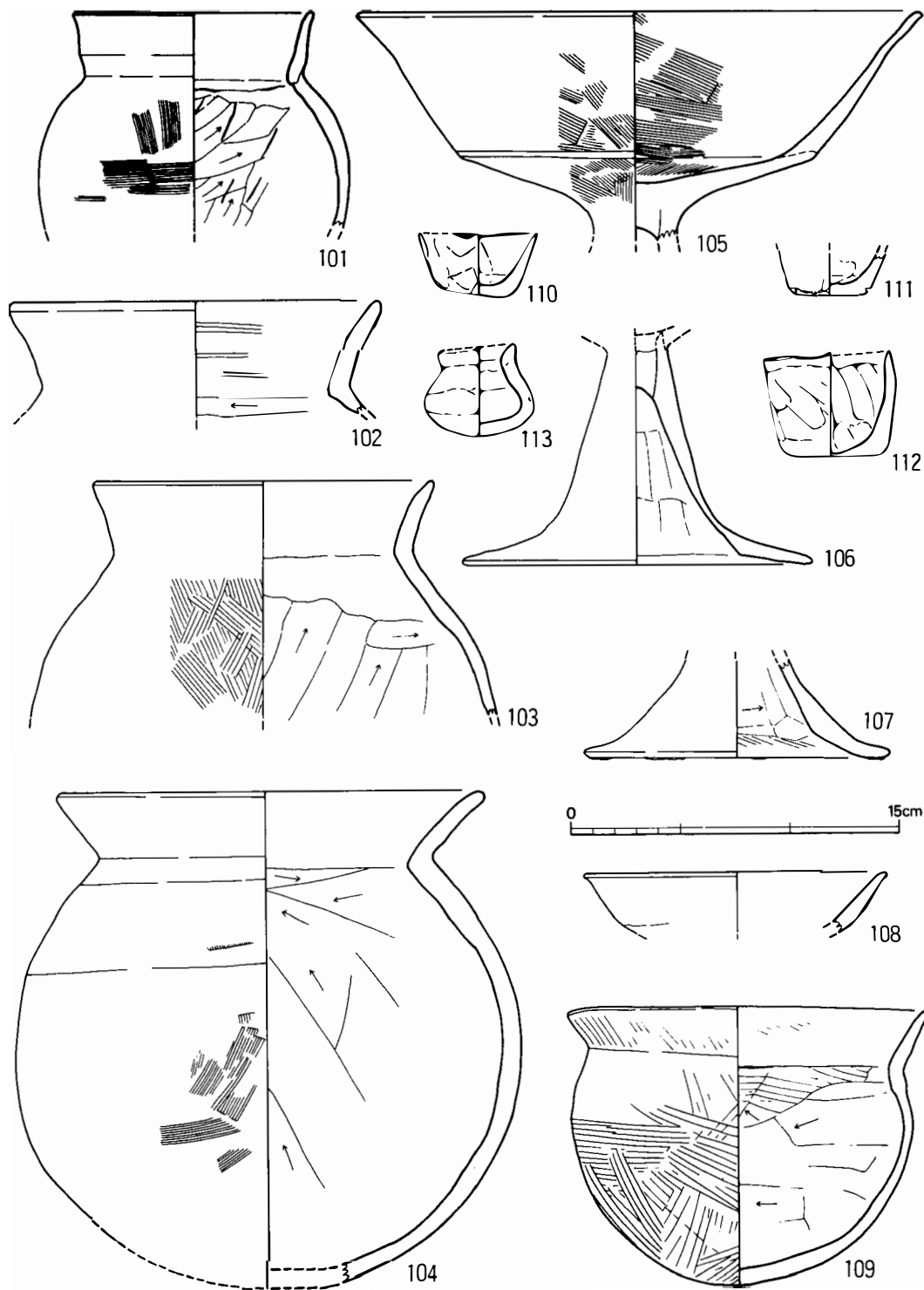
杯 (108) 体部器外は磨滅するが、ヘラ削りを認める。

鉢 (109) 器外胴上位のみナデを施したため、わずかの稜有り。口縁部は、頸肩部からシャープに屈折して外傾。

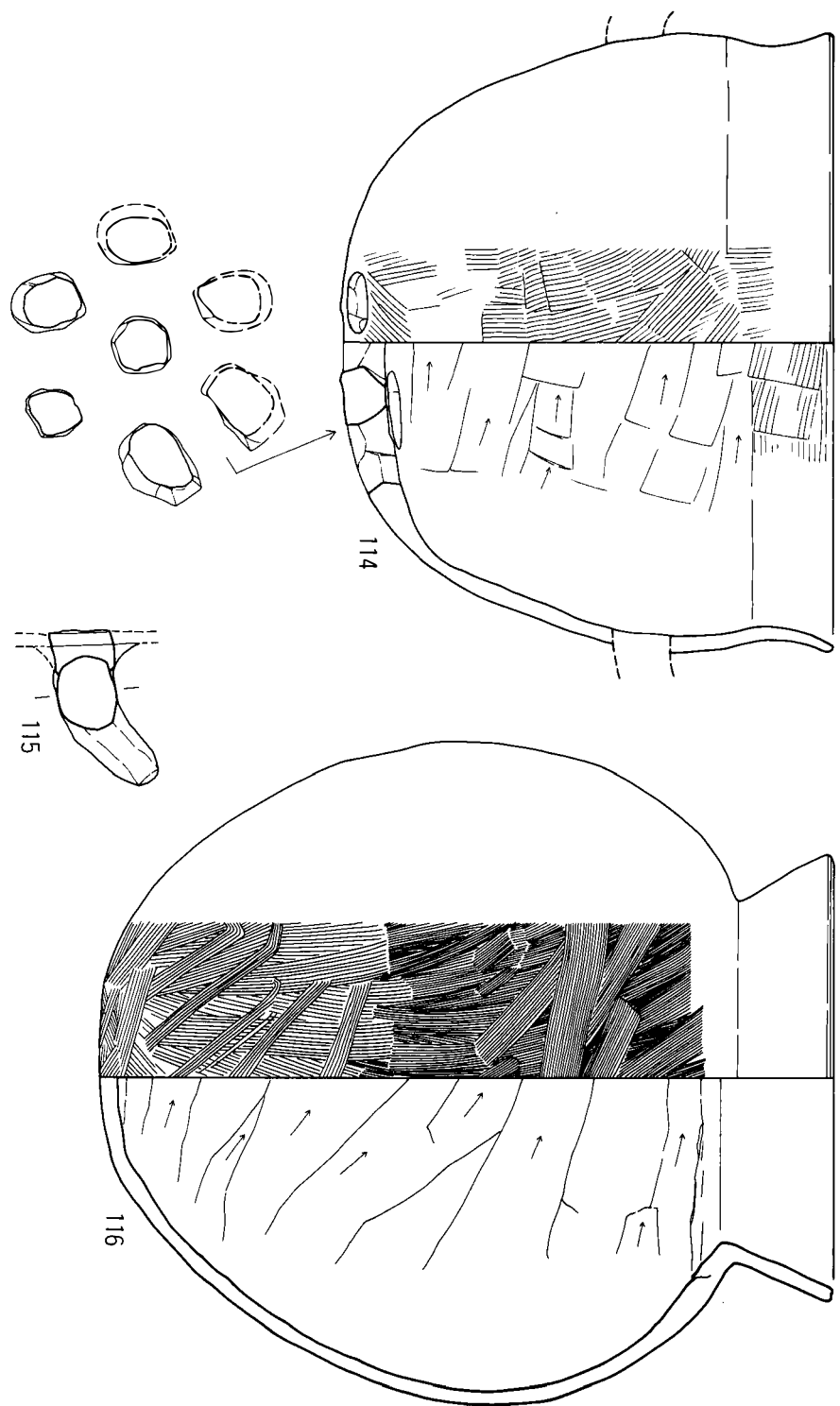
甕 (114～115) 114は、既述のように水田床土下、カマド上からの出土であるため、器周残は3/8であるが、剝平による結果であり、完形であった可能性が強い。やや異った形状を呈し、鉢に近い器形。器外は、胴部最下位近くが一部ヘラ削り、底部は、ハケ目のまま。底部の器壁は厚手で、穿孔に対して強度を増す造作と考えられる。

手捏土器 (110～113) 110～112は、共にナデが丁寧で、底部は平坦。113は甕104の器形のミニチュアか。

以上のなかで、甕104・116、高杯105～107、甕114、鉢109のカマド上・南・西出土の土器群がいずれもカマド祭祀に関する好資料と言えよう。手捏土器110はカマド構築時の埋納祭祀の好資料で、111・112も同様の器形を呈すことから、弥生期の6号B（古）住居の後世の流入とせずともよい。図示した土器のなかで、杯108は器周残1/4の破片で混入を考慮すべきであるが、その他の破片も著しく新出の資料ではない。



第 27 图 6号 A (新) 住居跡出土土器実測图① (1/3)



第 28 图 6号 A (新) 住居跡出土土器素描图② (1/3)

6号B（古）住居跡（図版39-1，第25図，表11）

前述のように，6号A（新）住居が，床中央部の大半と南壁を切るため，遺存状態は不良。
B P 11・12・51・52，B D 21などを確認し，張り床を検出。

支柱穴配置は，B P 11・12を確認。西側が未調査であるが，4本ではなく，2本の支柱を東西両壁からほぼ等距離に配したものと考えられ，このときの床面プランは，同じ弥生期の10・16号住居に類似。

壁柱穴B P 51は，図版39-1に示すように，発掘前に，調査区壁に沿って排水路を設定したために，住居との切り合い関係は未確認である。これに加えて，プラン・レベル共に実測することを忘れてしまった。第25図のB P 51は，その大略の位置を，図版39-1によって，その南側10cm程に打っていた割り付け杭の位置等から推定して，図示したものであるが，B P 52と共に住居に伴うものであろう。

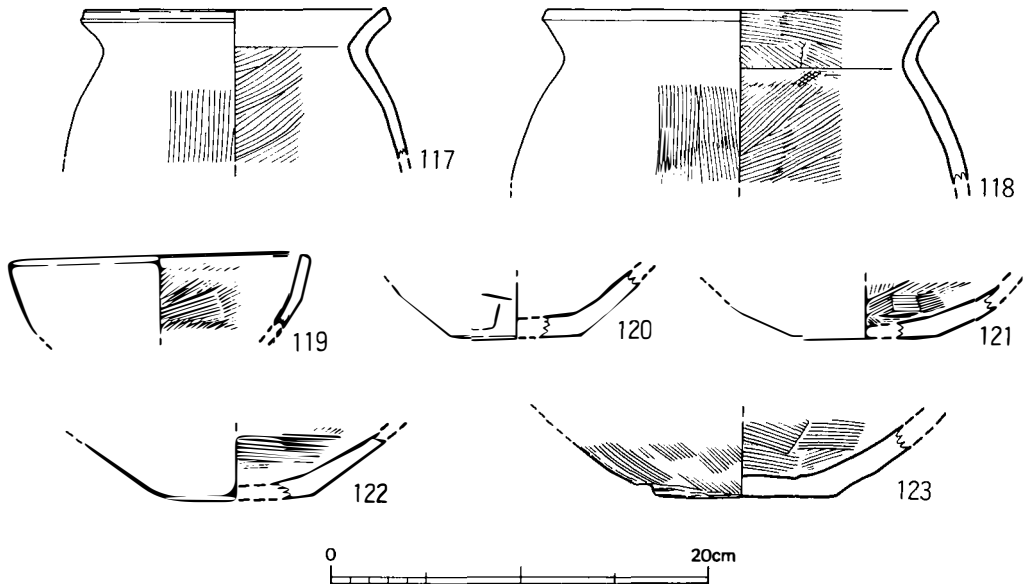
B P 52は，約15cmほど東壁から離れ，B P 11-12中心を通る中軸南北O上に位置。

壁土壇は，南壁側でのされた張り出し部であるが，大半をカマドが切るため，その詳細は不明。

しかし，壁土壇は壁中央部に配される例が多いなかで，同じ弥生期のなかにはA地区6号住居例のように柱列上に接して設ける例もあることから，B D 21も，B P 11・12柱列上に東接して設けられたものであろう。
(註「II」)

溝状遺構は，張り床除去後に，北壁側でM12を検出。埋土は，張り床土と同じ。

なお，東壁南半部から南壁部にかけては，壁に接して，地山が幅15~20cm・高さ10cmで段状に掘り残されていた。この掘り残された地山上面のレベルは張り床上面レベルと等しい。発掘



第 29 図 6号B（古）住居跡出土土器実測図（1/4）

時には、住居の重複を示すような状態ではなかったもので、当初から掘り残され、M12を埋めもどして張り床を施したものとも考えられる。

床面積の復原は、主軸東半部面積を2倍して算出。

出土遺物（図版159、第29、表35）

西側に末調査区を残し、残存壁高も悪い。破片のみが、わずかに出土。

甕(117～118) 117は、肩部から器内口縁部までをヨコナデ、端部上面は凹む。118は、口縁部器内をヨコナデ後に更にハケ目調整、端部はシャープな稜有り。

杯(119) 器外は、口縁部がヨコナデ、体部がナデ。

底部では、120は甕・121～123は壺。123は、器重のため胴最下位で歪む。

以上のなかで、張床内からの出土は120のみだが、図示し得た他の土器の特徴との時期的差位はほとんどなく、住居の時期を考える参考資料と言えよう。

7号A（新）住居跡（図版43～51、第30図、表12）

調査区の南西隅部で検出。北壁中央部に、北向きのカマド付設。多くの遺構と重複。4号溝状遺構→7号B（古）住居→7号A（新）住居→20号住居→4号住居の順に新しい。

A P 11～14・21・31・42・51～53・61～63・65・66・81～85およびA D 21・A M 21～24を検出。南壁部中央に、方形区画A S 11を確認。

主柱穴配置は、各柱列と各壁方向は、A P 11～12と東壁方向を除いてほぼ一致。

主軸柱穴は、カマドと反対側の南壁側・A D 21前面に配し、南北O下の位置。A P 81も、東西O下に位置することから、これを主軸柱穴として、東西主軸とすることも一部可能であるが、他の住居でも南北主軸例が多いことなどから、A P 21を主軸柱穴とする、南北主軸と判断。

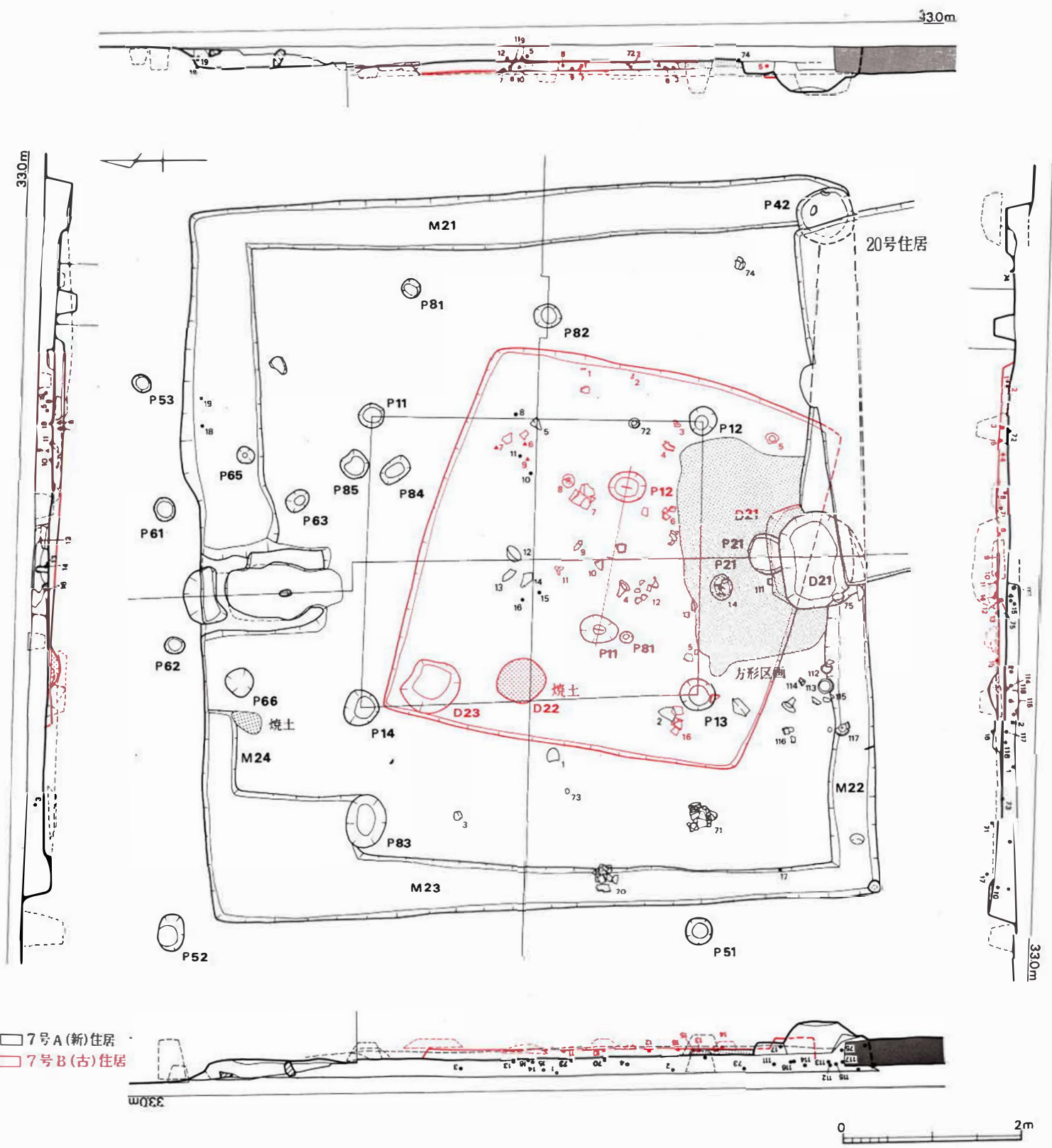
なお、このA P 82は、埋土による確認ができなかったため、一応その他の柱穴としたが、7B住に属する壁柱穴の可能性が強い。

対角柱穴は、南東壁隅部にA P 42を配すが、径・深さ共に、他の柱穴よりも大きく、あるいは壁隅土壇であるかも知れぬが、A P 52が北西隅壁外で検出されたことから、対角柱穴とし、A P 41・43・44は配されなかったものとした。

壁柱穴配置は、前述のA P 52の他に、西壁側でA P 51が、北壁側でA P 53を配す。

A P 51はA P 12～13の南側柱列方向と一致し、A P 53もA P 11～12の東側柱列方向とほぼ一致。また、A P 51～東西O間は1.98m、A P 53～南北O間は1.94mで、両者ほぼ一致。

施設柱穴配置は、いずれも北壁側。A P 61・62・65・66は第2図の柱穴名称に従えば壁柱穴であるが、いずれもカマドの北側および東・西側に整然と配しており、カマドの施設柱穴と判断。P 63も、同様に柱穴名称に従えば主軸間柱穴A P 31となるが、カマド西袖側にA P 32となるべき柱穴が配されていない。加えて、A P 61～南北O間が0.61m、A P 63～南北O間が0.69mと近似し、またA P 61～62間が1.50m、A P 61～63間が1.48mとほぼ一致するに等しく、A P 61～63とA P 61～63は直交することから、A P 63もカマドの施設柱穴と判断。なおA P 66の埋土は焼土で、その西側に近接した床面からも焼土を検出。



第 30 图 7号A(新)·B(古)住居跡実测图 (1/60)

その他の柱穴配置は、前述のA P82以外では、A P83がA P11-14の北側柱列方向と一致し、A P81も同方向にほぼ一致して配す。

A P84は7 B住の南北Oに近接しており、あるいは7 B住の壁柱穴か。A P85はA P65との関係で設けられたものか。

中央土壇は、南北O直下の南壁側に整然と配されている。

溝状遺構は、幅広で、所謂、壁下の周溝とは異なり、M24東半部は一部カマド東袖下まで配すが、同西半部は同西袖にまでは至っていない。これらのことに加えて、溝状遺構内の埋土は中央部床埋土と大差なく、人為的に埋めた状態ではなかったことから、7 A住が改築されていると考えるより、7 A住構築当初からM21~24を配していたと考える方がよいであろう。

方形区画は、図版43-1に示すように、A D21・A P21を囲む黄褐色粘質土による張り床部。

上面レベルは、周辺の床面レベルと差位はなく平坦。7 B住と重複する範囲は、7 B住床面まで埋り下げて張り床するが、7 A住床面部分（A D21西側）では、この黄褐色は粘質土を薄く散布するだけで、掘り込んではいない。

カマド（図版44~46-1、第32図、表12）

住居北壁中央部で、南北Oに西接する位置に付設。

なお、カマドの実測・発掘に際しては、カマド検出面での煙出部の中心を支脚頂部を結んだ中軸線N-2.5°-Wをカマド実測主軸として使用。

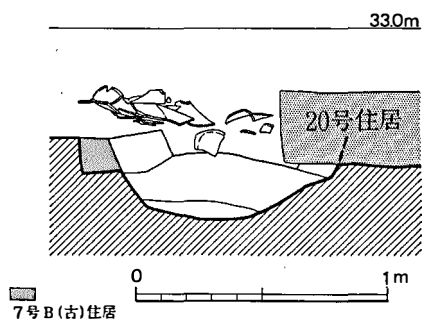
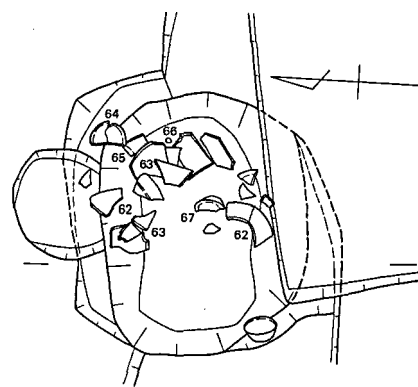
前庭部・焚口室 前庭部は若干の凹みを検出したが、袖は検出されていない。

焚口室は、袖上半部と天井部は遺存しないが、床面プランは良好に確認。

燃烧室 支脚は、若干前方に傾いて、袖・天井残滓の3層および灰残滓の2層中から出土。明確な掘り方は検出されていない。また、その形状は、図版45-2に示すように、縦方向の径は下方よりも上方が著しく大きくて不安定な状態であった。

以上のことから、カマド使用時の支脚は、出土状態とは天地を逆にして床面に置き、周囲を粘質土などで根固めして、安定させる方法が採られたものか。

燃烧室はC-D断面の東袖で焼土化した内壁の6層が検出されたが、西袖およびE-F・G-H断面の両袖では検出せず。内壁下半のカーブは、埋設以降に土圧で多少より内傾することも考えられるが、E-F~M-N断面の袖内壁の床面からのカーブは、このことを考慮しても、やはり内傾度が著しい。



第31図 7号A(新)住居跡
南壁中央土壇実測図(1/30)

以上のことから、6層は内壁崩落を補修したものと考えてよいであろう。

室内からは、第42図233の大形の鉢と第39図213のミニチュア土器が出土。鉢は破片で、いずれも5層中から出土し、完形のほぼ1/2まで接合でき、その遺存残周率の内訳は、口縁部が1/8、体部が5/8、底部が1/2弱である。(図版44-1)。

手捏土器は、床面にほぼ接して、伏せた状態で出土した完形品(図版45)。

なお、G-H断面～I-J断面間で、東袖下から15×30cm大のピットを検出。埋土は袖基部の4層と同じ。

炎口室 炎口室天井は、北半部が良好に遺存したが、炎焼部側の南半部が、後述するように、意識的に除去されており、遺存せず。炎焼部と炎口室との境は、縦断面図に見透しで示した、東袖遺存上面レベルに著しい段差を認める、I-J断面近くと判断。

炎口室天井の床面からの高さは、断面設定を今少し北へズラせばよかったが、G-H断面に一部見透しで示したように、18cmを測る。

煙口室・煙出部 煙口室幅は、O-P断面に示すように、炎口室幅に比べて著しく大きいことが、このことは後述するように、意識的に破壊されたため。

煙出部は、煙口室奥壁床から住居外に、21cmの長さまで遺存。埋土は5層で、壁面に熱変部は観察されず、また径も大きいことから、煙口室同様に破壊を受けたものか。

土層観察・カマド祭祀 灰残滓の2層は、縦断面図に示すように、焚口室～支脚部間よりも支脚部～炎口室間の方が厚く堆積し、特に炎口室内が顕著。また、E-F断面に示したように、堆積の状態は西袖側で厚い。

また、焼土小ブロック混りの1層は、焚口室～燃焼室間では、両袖壁近くで堆積するのみで、室中央部では認めず。これに対して炎口室では、縦断面図に示すように、天井部まで堆積。

以上のことに加えて、支脚・遺物の出土状態や、袖・天井の遺存状態などを考慮するとき、以下のカマド遺棄時における祭祀行為が十分に指摘されよう。

① 2層の灰残滓を炎口室へ、また袖側へ移動させて、燃焼室内の清掃をする(室内浄化行為)。

② 支脚を抜去し、2層中にミニチュア土器を伏せて埋置し、炎口室天井南半部を除去し、同北半部室内を1層で埋める(カマド機能停止行為)。

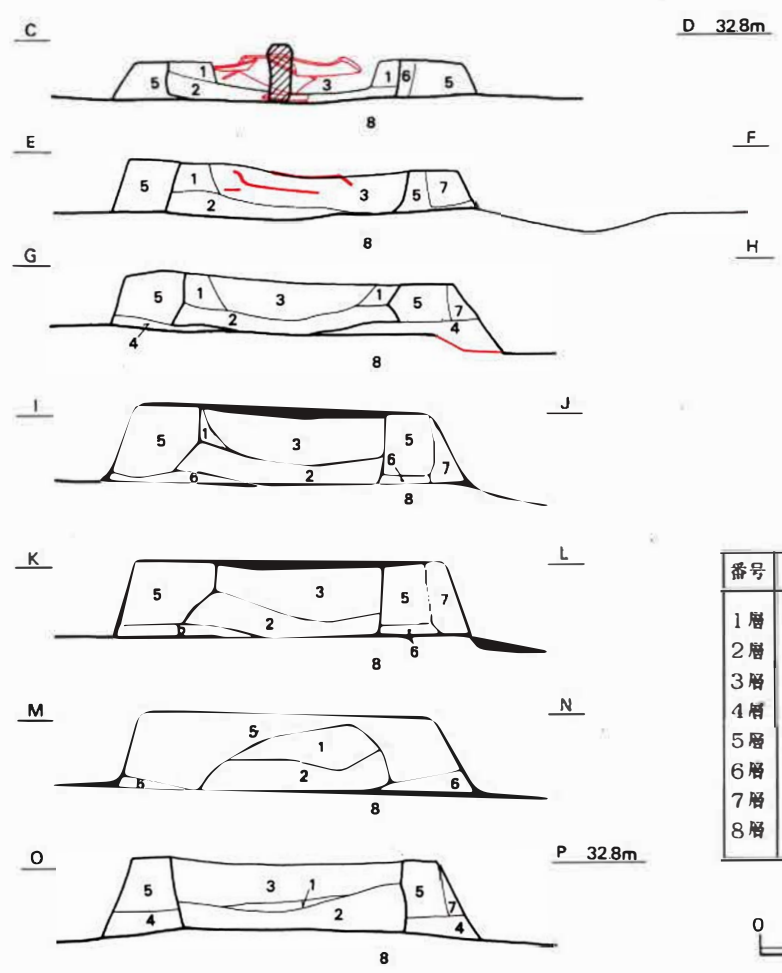
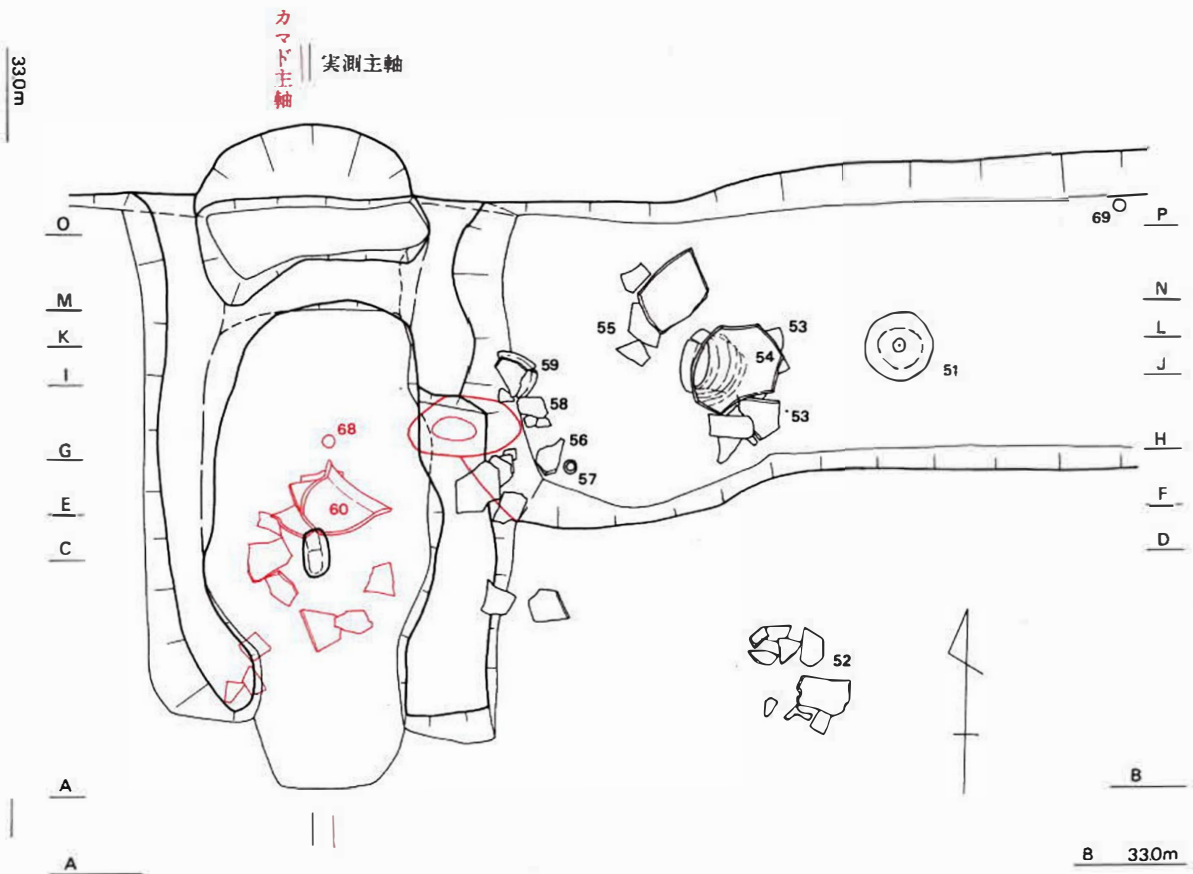
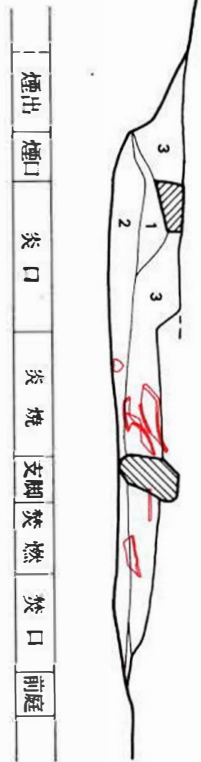
③ 燃焼室・焚口室の天井・袖を破壊する(同)。

④ 支脚を使用時とは天地を逆にして再配置し、鉢を破碎して3層中に埋める(カマド破棄確認行為)。

なお、東袖外で出土した土器群についても、住居遺棄およびカマド破棄に伴う祭祀行為との関連は、深いものと考えられよう。

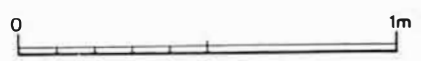
出土遺物(図版159～167, 第33～42・143図, 表35)

住居上面プラン検出作業の結果、4・6号A(新)・14号住居と近接し、5・20号住居と重複することが明かとなった時点で、重複関係では最も古く・規模も大きいことから、これらの住居の関係遺物の7号A(新)住居への破棄および、より古い住居が7号A(新)住居下から出土することも考慮して、遺物の出土状態の確認と床面の検出を、以下の方法で行った。



- - - 床面プラン
 - - - 最大径プラン
 □ カマド外遺物とカマド
 □ カマド内遺物とカマド下遺構

番号	状態	特徴
1層	灰・カマド残滓	焼土小ブロック混りの暗褐色粘質灰
2層	灰残滓	暗灰色粘質灰
3層	袖・天井残滓	暗褐色灰混土
4層	袖基部	暗褐色砂質土
5層	袖・天井	黄褐色粘質地山混りの暗褐色粘質土
6層	袖内壁	赤褐色砂質焼土
7層	袖	暗灰色粘質土
8層	地山	黄褐色粘質土



第 32 図 7号A (新) 住居跡カマド実測図 (1/20)

①上面プラン検出面から5cm間の出土遺物は、いずれも器周残1/8～1/4の小破片であったため、出土位置を実測せずに収納。

②更に15cmまでを、遺物を除去せずに掘り下げたが、器周残1/4前後の破片が大半を占めたので、一部を例外として、出土位置を実測せずに収納。

③更に10cmまでを、遺物を除去せずに掘り下げたところ、器周残1/2前後の破片や完形に近い土器が中央部付近で多く出土したため、前述②で除去しなかった例を含めて、出土位置と出土状態を縮尺1/40の平板で実測し、収納。

④更に20cm前後までを掘り下げて、7号A（新）住居の床面と、7号B（古）住居を確認したため、7号B（古）住居の発掘に進んだが、図版43-1は作業中途を示したものである。

第30図には、平板実測の断面図を省略し、●印で位置だけを示したが、表35では前述①の段階までの例を最上層・同②まで例を埋土・同③までの土器を下層と表記。

以上の作業のなかで、カマド周辺・南壁中央土壇周辺の遺物は、当初から多量の完形・略完形のものが出土することを考慮して、第32図だけでなく、第31図も縮尺1/10で実測。

完形を含む多量の土器が出土し、最上層から縄蓆タタキ目土器片などの遺物も出土。

埴 (124～126) 124は、口縁部がやや厚手、端部がやや丸い。126は、胴部器内のヘラ削りはやや雑で、胎土接合部の凹みを残し、器外は、ハケ目の後で胴部最大径位のみ横ナデを施したため、若干の稜有り。なお、器内頸部は、肩部のヘラ削りの当りによって器壁が0.3mmと薄い。

壺 (127) 胴部器内の頸肩部にもヘラ削りを施すが、胎土接合部の凹みを残す。器外のヘラ削りは胴下位以下に施し、中位はハケ目、上位はヨコナデと調整が異なるため、それぞれで稜有り。埴の器制を残すと共に、甕の器形の影響下で成立した小形壺。

甕 (128～140) 128・129・137は小形。128は、頸肩部から直線的にわずかに外傾し、広口で短口の壺に近い。137は口径よりやや大きいだけで、器外胴部の上位はヘラ削り後にナデ。

130の胴部器内は、器周の1/4のヘラ削りが雑で、胎土接合部の凹みを残し、口縁部は器内外共にヨコナデ。131は、口縁部をヨコナデ後、器内に一部ハケ目。

両者は、共に口縁部は直線的に外傾。胴部器外はハケ目後に、肩部はヨコナデ・以下はナデ。

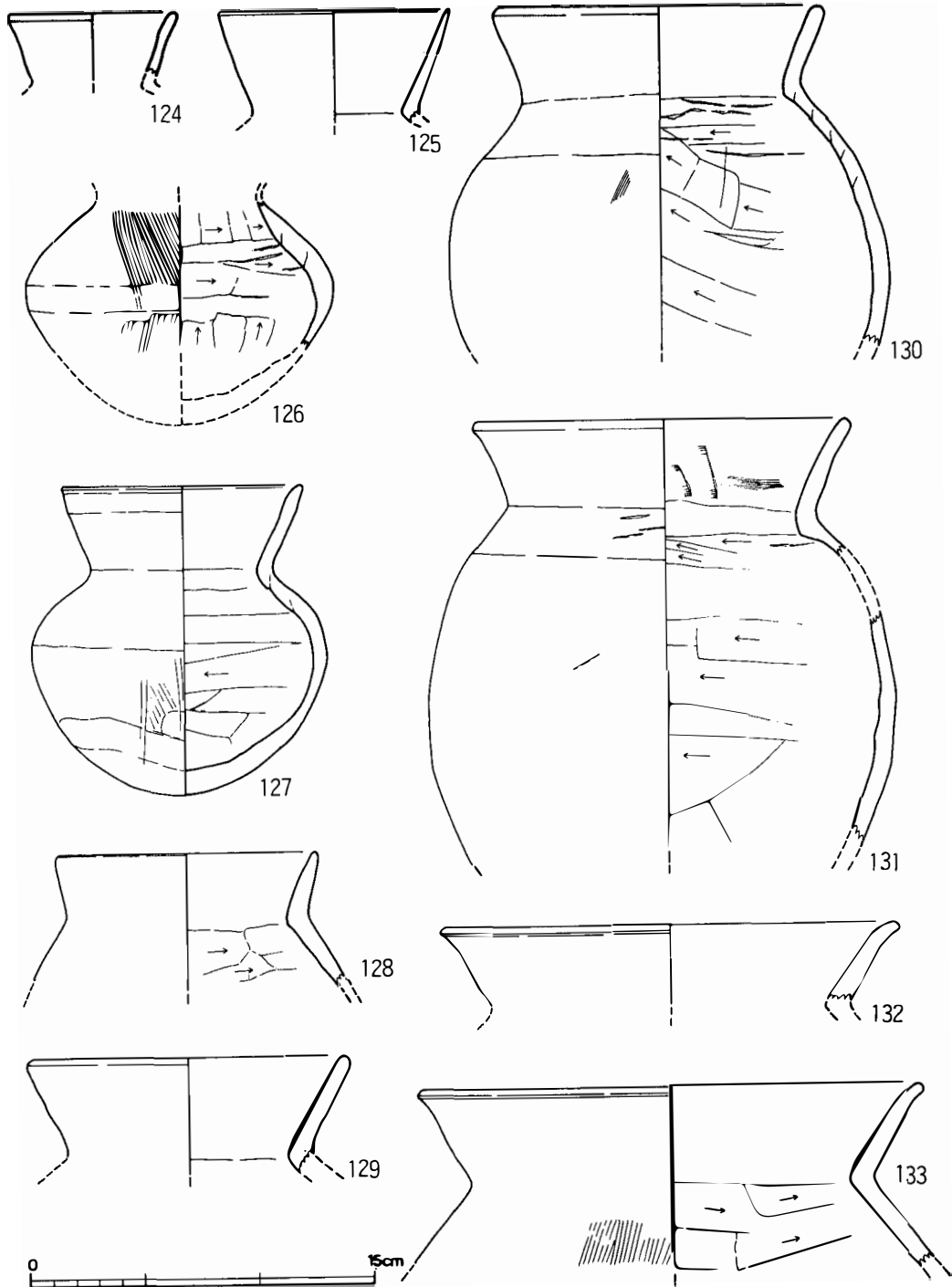
なお、130は、カマド東のNo55-2の胴部片とD21西床面の口縁から胴中位まで略完形の一括出土の例が接合。

132は、胴部器内は丁寧なヘラ削り・器外はハケ目。頸部からシャープに屈折した口縁部は、下半で内弯・上半で外弯するが、共にわずかで、端部は更に外反あるいは外傾し、上面が外方に突出。133・134の口縁部も同様。

135は、口縁部が著しく直線的に外傾し、端部はヨコナデによって上面が凹む。器内外共にハケ目のまま。

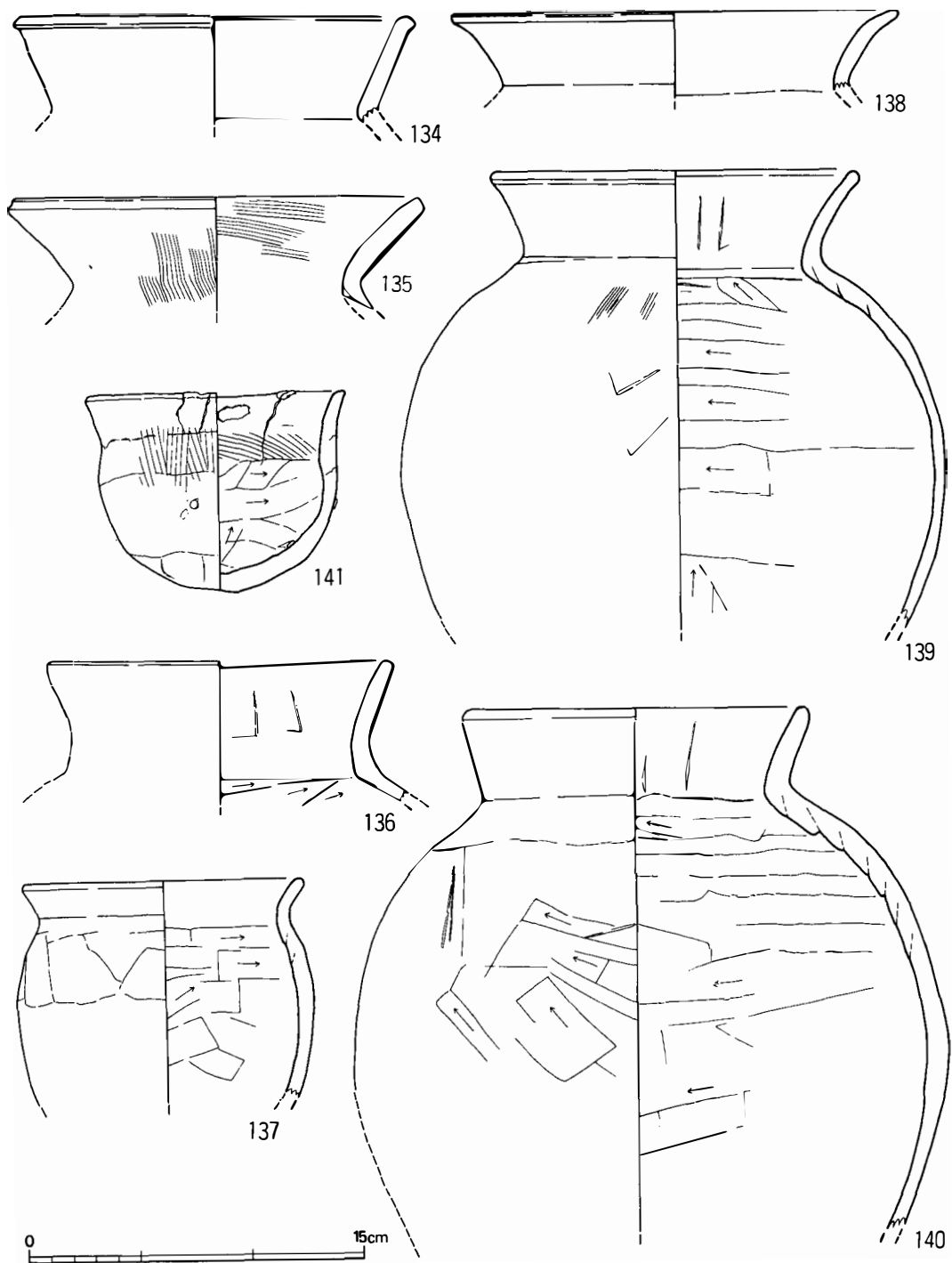
139の器内は、口縁部を横ハケ後にヨコナデし、胴部は中位まではヘラ削り後に強く横方向にナデ、下位はヘラ削りのまま。器外は、肩部が細ハケ目・ナデ、胴部がヘラナデ。

ヨコナデ・指先ナデ・ナデ・ヘラナデ調整はいずれも丁寧で、器壁も薄手の造作。球形の胴部で、外反する口縁部の端部は丸い。138の口縁部のも同様である。



第 33 図 7号A(新)住居跡出土土器実測図①(1/3)

140の器内は、頸部から胴中位までのヘラ削りが雑で、胎土接合痕をそのまま残し、器壁も厚



第 34 図 7号A (新) 住居跡出土土器実測図② (1/3)

い。器外胴部は、ヘラナデが丁寧。

高杯 (142~175) 145は、D21西のNo102-2 (杯底部片・床面から3.7cm上位) に、床面一括 (脚部器周残7/8) と最上層 (杯部上半同1/8) 出土のものが接合。杯部下半の底部と上半の屈折はシャープで、わずかの段を有し、上半は直線的に外傾し、口縁部は更にわずかに外傾。脚部は、脚柱部高がやや小さく、直線的に八の字状に開き、裾部は更に大きく屈折して開く。杯・脚部共に器壁は薄手で、接合時の中央栓の、脚柱部器内は挿入時のままで、脚柱部のヘラ削りは最上位にまで施す。穿孔は2孔。

146は大形で杯部が深い。杯部は146と同様の器形だが、脚部は異なる。脚部は、脚柱部の器壁が厚く、エンタシス状を呈し、裾部が大きく開く。接合時の中央栓の脚柱部器内は、挿入後に下端を、指先でナデ、ヘラ削りは脚柱下半のみに施し、上半はシボリ目のまま。

142・143の杯部は145の特徴を、147~149の脚部は146の特徴をとり、150・151は後者か。

152の脚部は、7号B (古) 住居出土の第44図253の特徴に近い。

157は、カマドの東のNo53 (杯部片) とD21西のNo116 (杯部器周残1/4) が接合したことから、同No53 (脚部器周残3/8) も同一個体で、全体で器周残5/8となったもの。杯部は器内外共に、下半から上半へ内湾して開き、口縁端部上面は平坦で、ヨコナデによって側面がわずかに突出。脚部は大きく直線的に八の字状に開き、裾部で更に大きく開く。

153~156の杯部も157に類似するが、156の下半は器内外共に平坦で、上半のみが内湾して開く。このことは、下半の胎土の乾燥がやや進行した段階で上半を接合したことに起因するもので、この特徴をとる高杯の製作実験でも確認し得た。

167は、口径20.6cmを測り、杯部下半の器外をヘラでシャープに切る。所謂、ヘラ記号とも考えられるが、前述の156の上半・下半の接合の仕方を考慮すれば、下半の胎土乾燥状態を知る際の仕業の可能性も加味すべきか。杯部の器壁は厚手で、器外の底部との屈折段を明瞭に残し、上半から口縁部にかけてわずかに内湾気味に外傾し、端部は丸い。

168~170の杯部も同様の特徴で、169は器内外共にハケ目を残す。170は、床面 (口縁器周残1/4) ・西側M23 (破片) ・下層 (杯上半同1/8弱) ・最上層 (杯下半同1/8強) の破片が接合し、器周残5/8まで復原された。

171は、器外の杯底部との屈折段は前述の167と同様で、上半も同様に器壁は厚手で内湾するが、口縁部は既述の157よりも更に外反するなど、両者の特徴の一部を共有する。

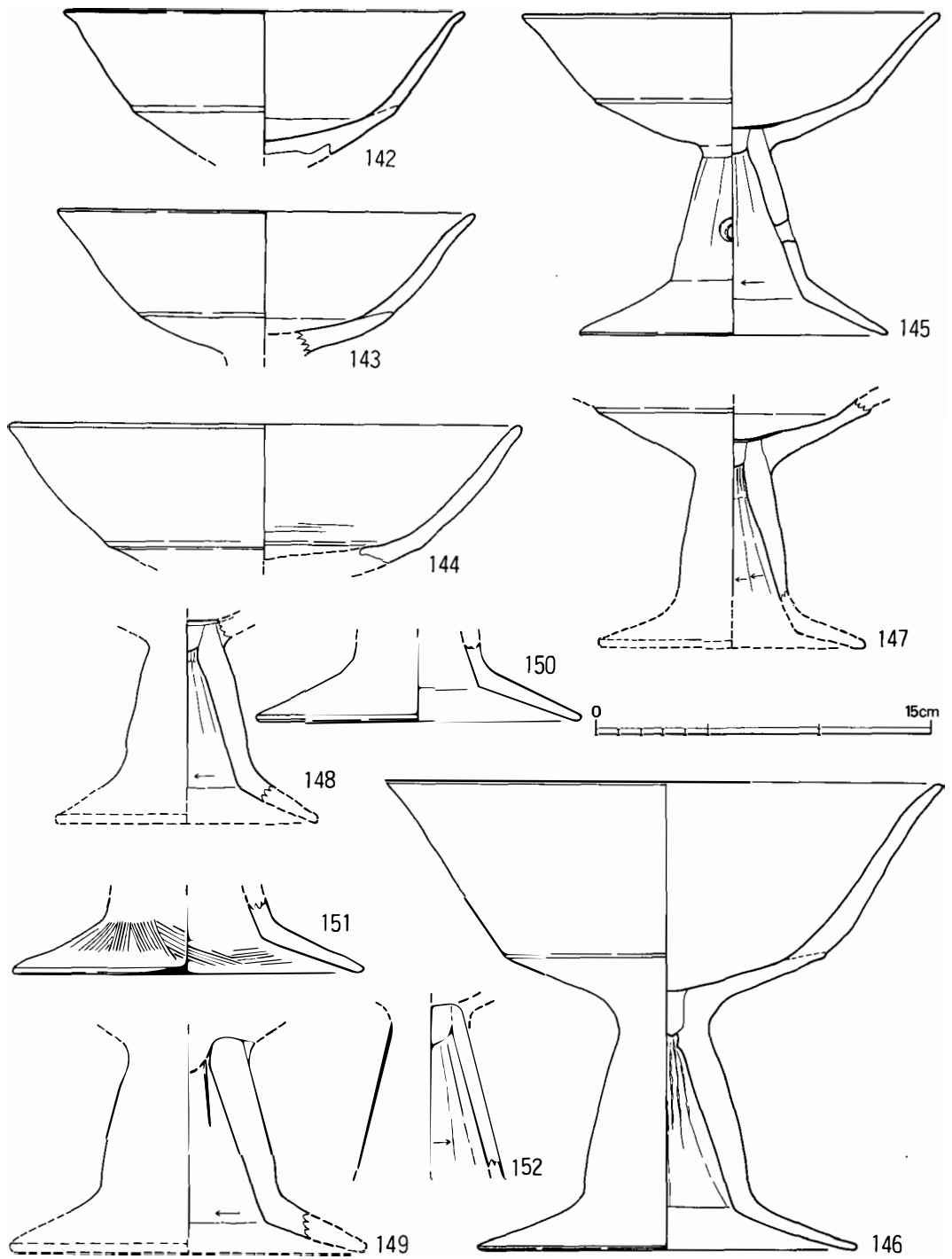
172~174の杯部も同様の特徴。

162は、南東隅P42 (器周残3/8) と20号住居 (同1/4) が接合し、器周残5/8まで復原。脚部部のヨコナデが強く、端部を更にヨコナデしたため、著しく屈曲。

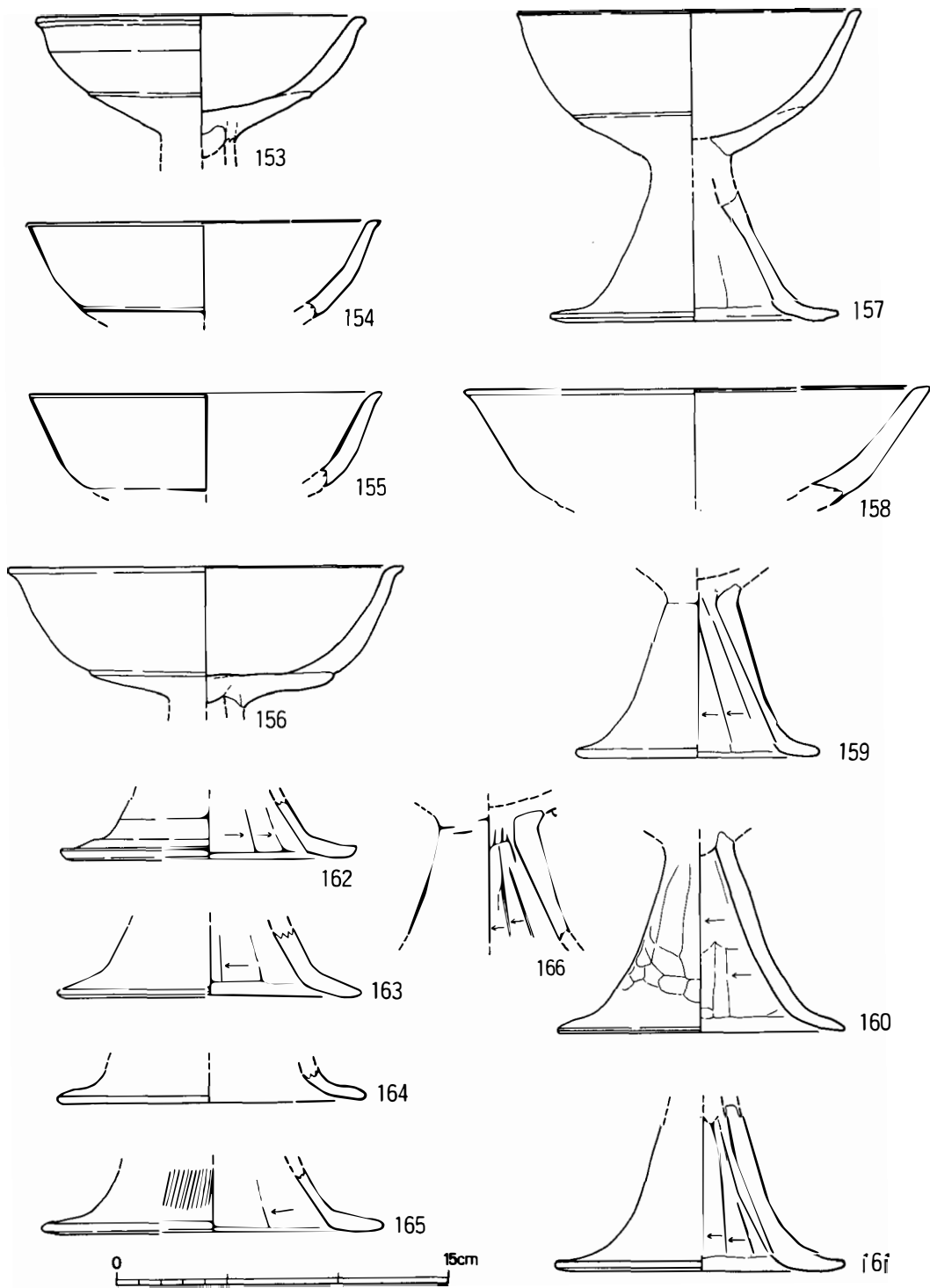
164は、裾内面は、脚柱部近くがハケ目のままで、以下のヨコナデ強く、やや屈曲。

175は最上層・234は下層出土の破片で、後者は古い時期のもの of 明らかな混入例。

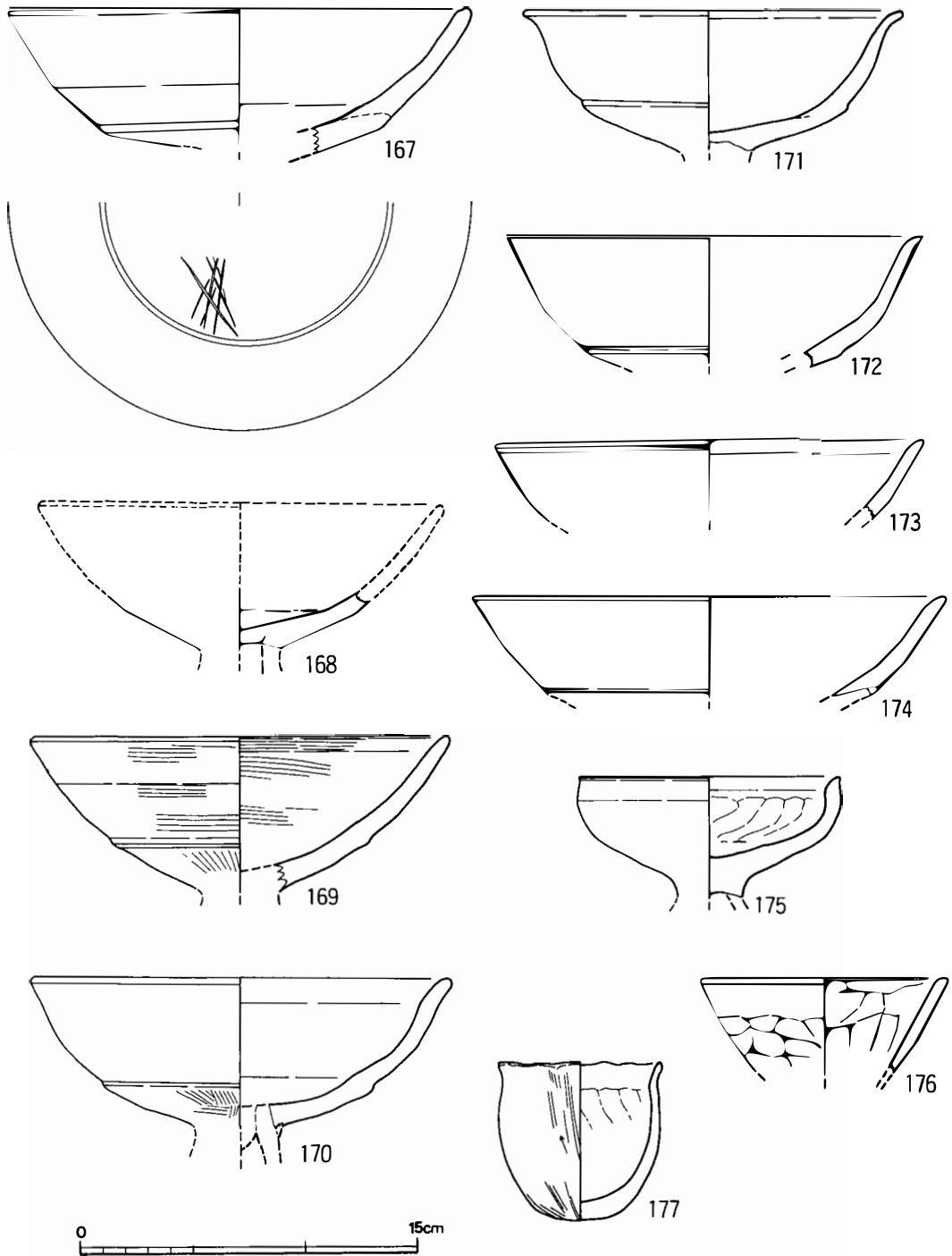
杯 (178~220) 179は、体部の器内は丁寧なヘラナデし、器外はヘラ削り後に底部のみナデ。口縁部はヨコナデを施すが、端部下0.8cmで、端部上面と平行に、幅・深さ共に0.1cm以下の条痕が一周し、更に端部へと抜ける。このことは、ロクロ使用による水引き調整痕とも一致し、



第 35 图 7 号 A (新) 住居跡出土土器実測图③ (1/3)

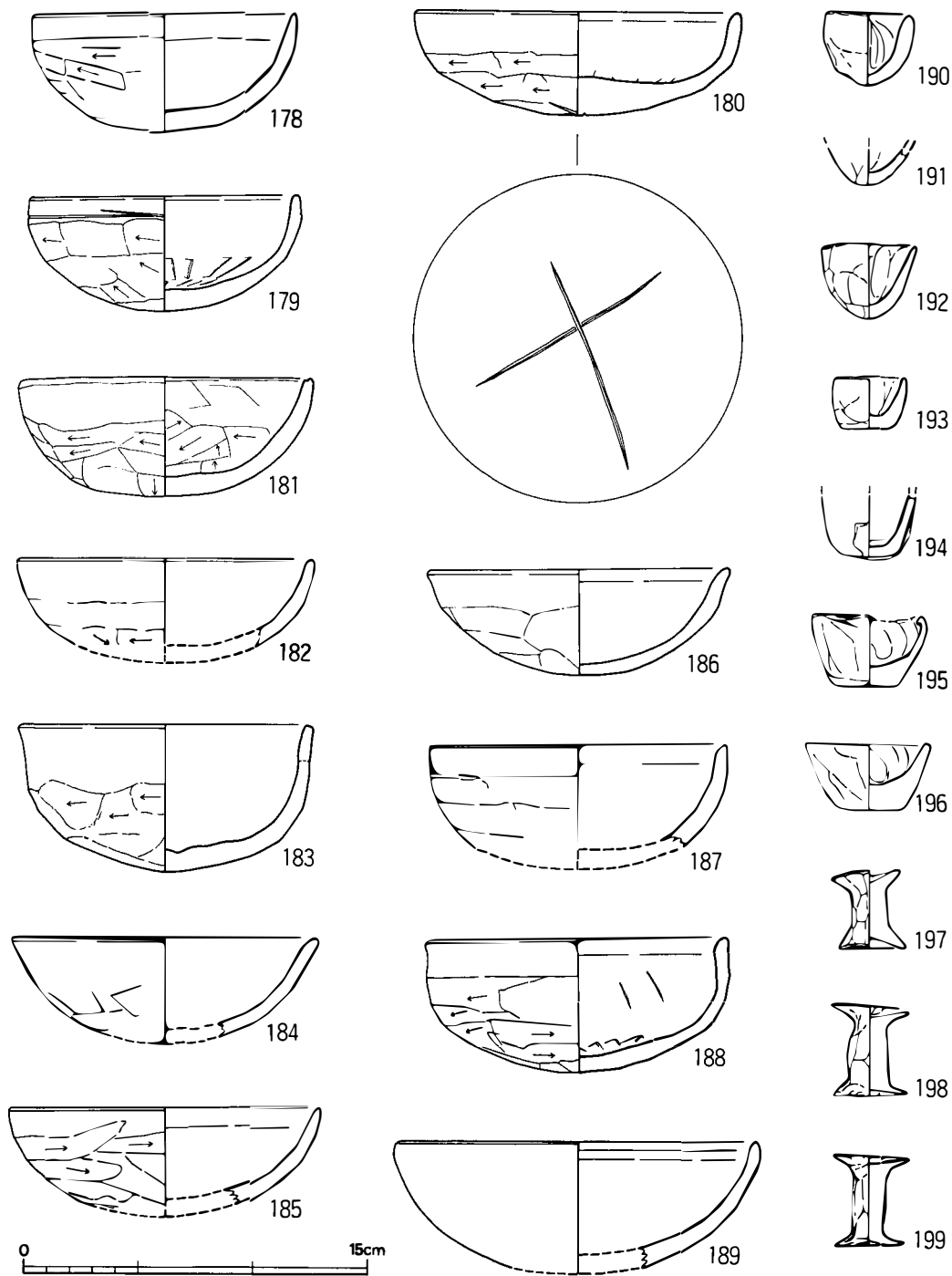


第 36 图 7号A(新)住居跡出土土器実測図④(1/3)



第 37 図 7号A (新) 住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)

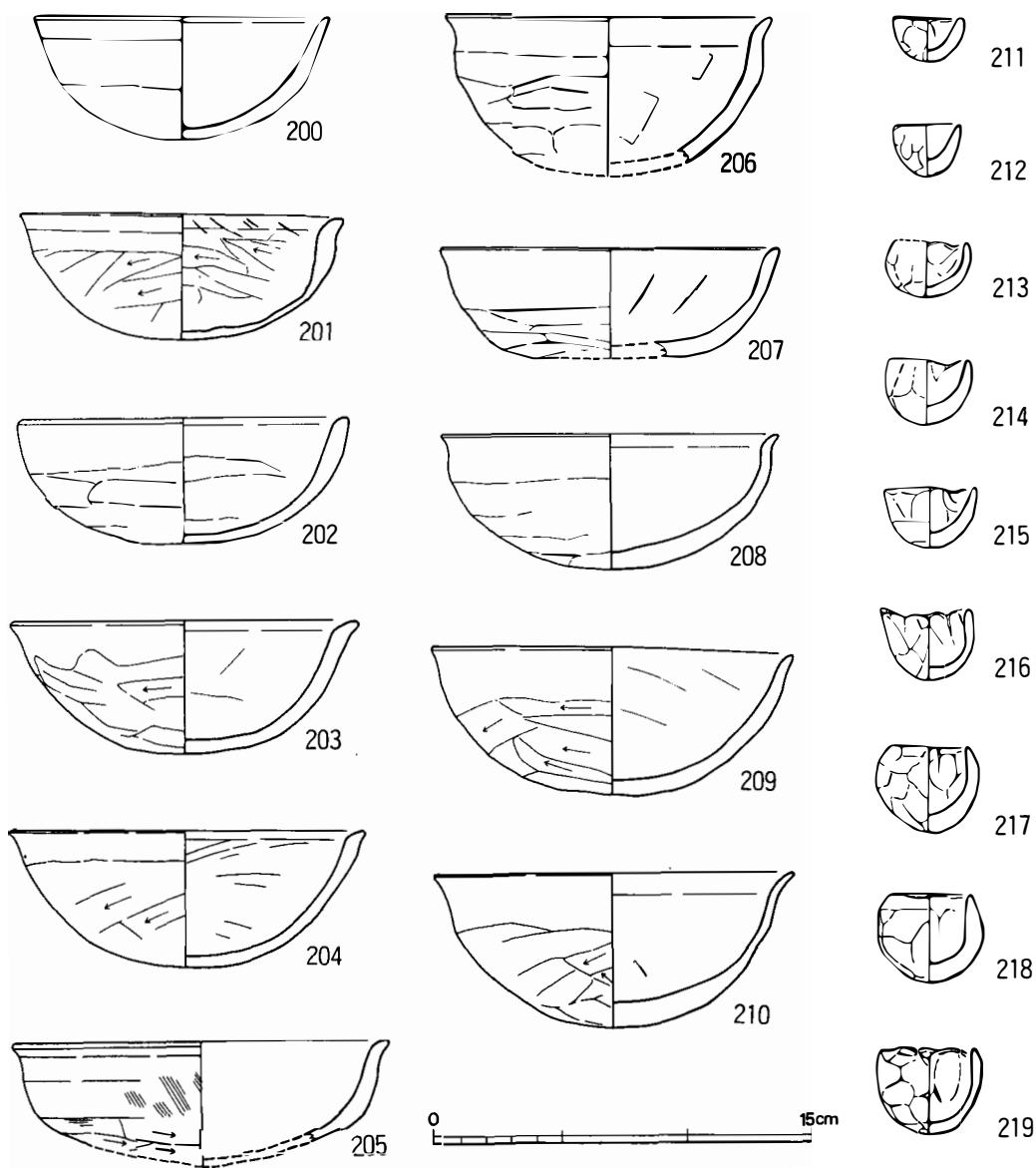
既に我が国における須恵器製産の傍証ともなり得る。内弯する体部から、口縁部はわずかに内傾して立ち上がり、全体に器壁が厚手であるが、特に底部が著しい。



第 38 図 7号 A (新) 住居跡出土土器実測図⑥ (1/3)

178は、口径11.6cm・器高5.2cmを測り、179に似る。

180は、底部内面にヘラナデ痕を整然と残し、体部外面はヘラ削りのままで、底部から体部に



第 39 図 7号A (新) 住居跡出土土器実測図⑦ (1/3)

かけて、×字形のシャープなヘラ切りを施す。所謂、須恵器のヘラ記号に類似し、前述の179同様に考えてよいか。内湾する体部から、口縁部はわずかに内湾気味でやや外傾し、全体に器壁が厚手であるが、特に底部が著しく、厚さ1.7cm。

181・182は、180に類似する。183は、底部内面の凹凸はヘラナデによるもので、体部器外はヘラ削りのまま。器高が著しく大きいのは、口縁部が端部から1.5cmの部位で更に胎土を接合しているためである。器壁は厚い。

185は、体部の内面がヘラナデ・外面がヘラ削りであるが、ヘラ削りは口縁部にまで及び、体

部は内弯し、口縁部は外傾。184も類似。

186～188では、三者の口縁部は外傾・内傾・直立とわずかに異なるが、端部内側はいずれも外傾し、上面は丸味を呈するなどが類似。

189は、底部から口縁端部にかけて内弯し、端部内側のみが内傾。

201は、体部の内面がヘラナデ後ヘラ削り、外面がヘラ削り後にナデ。器壁は体部下半では著しく薄手だが、上半および口縁部は厚手のまま。口縁部は直立し、端部は内外面共に外傾。

200・203～205の口縁部は直立せずに外傾し、体部内面はヘラナデ痕のみを認めるが、その他の特徴は201同様。202の口縁端部は、むしろ既述の186に類似するが、体部下半のみが薄手であることから、この類に含めた。203の体部が、ヘラ削りのままであるのは、器周の1/4のみで、その他は後でナデを施す。

210は、口縁部が大きく外弯し、体部の内面はヘラナデが丁寧で、外面はヘラ削りの後で、一部ナデ。器壁は、体部の下半が厚手、上半から口縁部にかけてが著しく薄手で、前述の201と逆。

206～209も、210と同類。

鉢 (141・176・233) 141は、体部の器内と器外底部のヘラ削りは雑で、削り取った残余の胎土が、底部外面と体部内面に付着したまま。なお、焼成前の口縁部のヒビ割れが2箇所認められ、器内外から補修を雑に施す。

176は口径11.0cmを測り、器内外共にヘラ削りを施す。

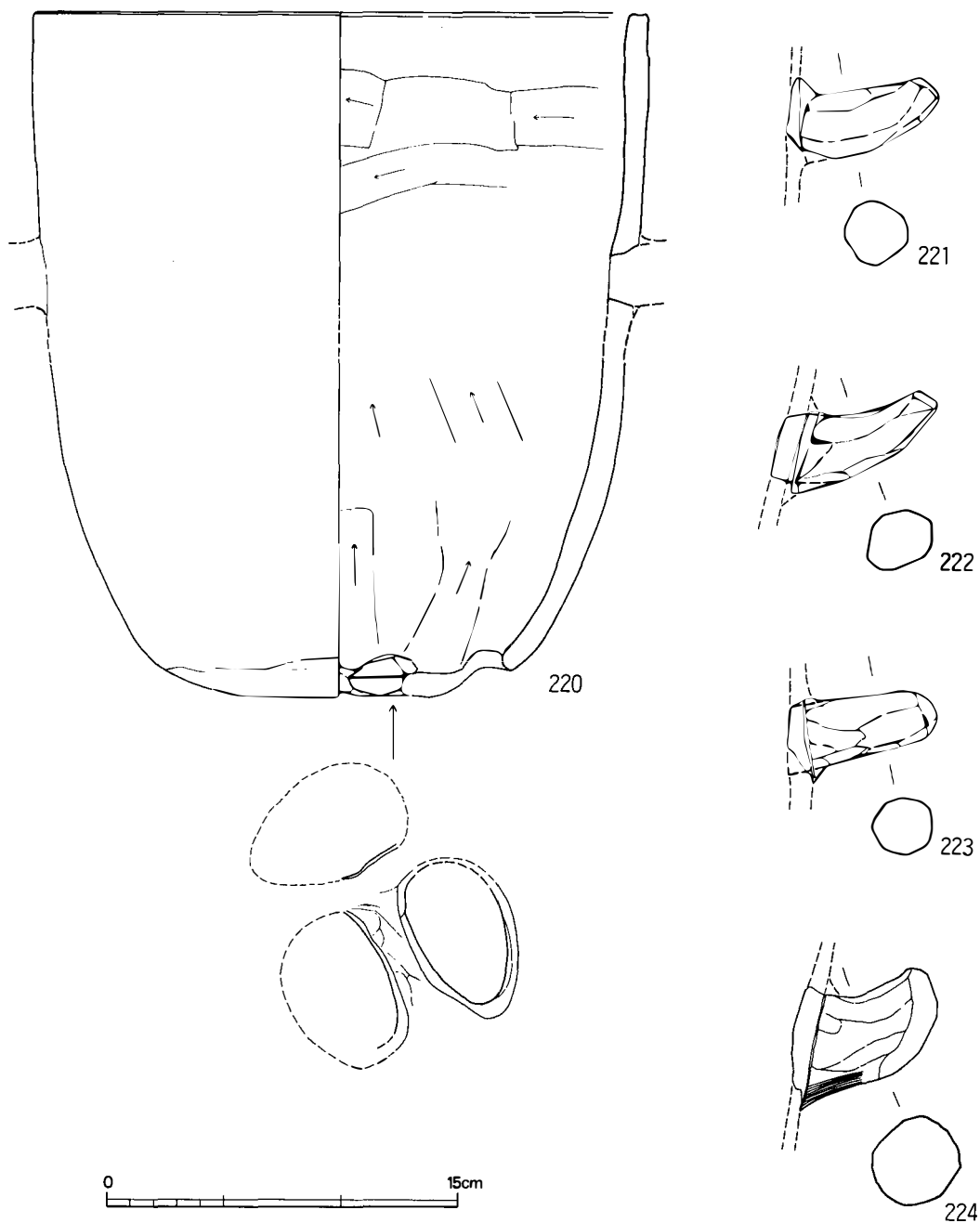
233は、口径40.2cm・底径13.8cm・器高24.6cmを測り、大形。口縁部から体部下半に至るまで、焼成前にヒビ割れた部位での補修が3ヶ所認められ、口縁端部の歪みも著しく、盛り上がりを見せる。なお、接合する破片間に、焼成の差位による色調差が内外面共に認められ、69うす橙色5.0YR7.5/6.5 76暗い黄茶色7.0YR4.0/2.0 83にお橙色8.0YR5.5/6.0の3者有り。器内は、底部をナデ・体部をヘラ削り、器外は体部から底部までをヘラ削り、口縁部をヨコナデ。器壁は全体に厚手で、底部で2.0cm・体部で1.0cm。

甗 (220～232) 232は、中央部No11(床面から1.9cm上位)・下層(口縁片)・埋土(口縁・胴下半片)が接合し、器周残1/4まで復原。器外は、体部にヘラ削り、下位はハケ目のままで、底部は穿孔後にナデ。口縁部はヨコナデし、端部上面は凹む。弾頭形、穿孔は1個であることから、把手は付さないものであろう。

226は、D21西(床面)・D21西(M22内)・床面・埋土からの破片が、器周残1/4弱まで接合したが、把手の挿着痕は認められない。体部外面は丁寧なハケ目のまま。口縁部はヨコナデにより、端部上面は凹む。体部最大径は口径と同じで、体部の形状は227と似るものか。

227は、略完形であるが、把手の挿着痕がなく、把手は付さぬ。体部の器内は中位まではヘラ削りのままで、下位から底部にかけては丁寧なナデ。器外は、口縁部から体部および底部まで、丁寧にヘラナデし、底部と体部に明瞭な稜有り。口縁部はヨコナデ、端部は丸い。

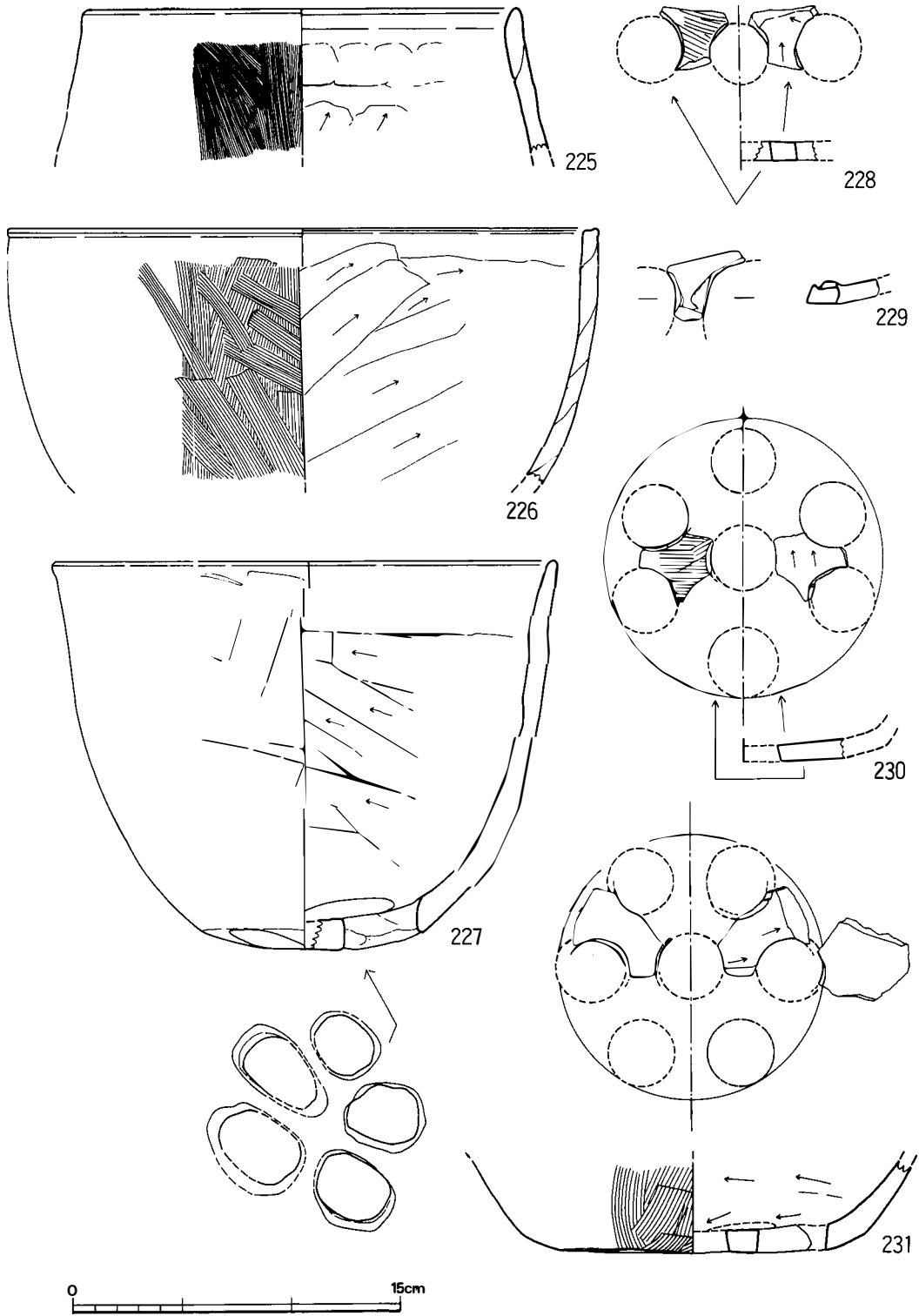
225はD21西(M22内、口縁片)・西壁(M23内、胴片)・埋土(口縁片)出土の破片が接合し、器周残1/4まで復原したが、把手の挿着痕はない。口径より著しく体部径が大きいことから、あるいは把手を付さないものか。他に同一個体片もある。器内は、端部から1.5～4.5cm間は指押



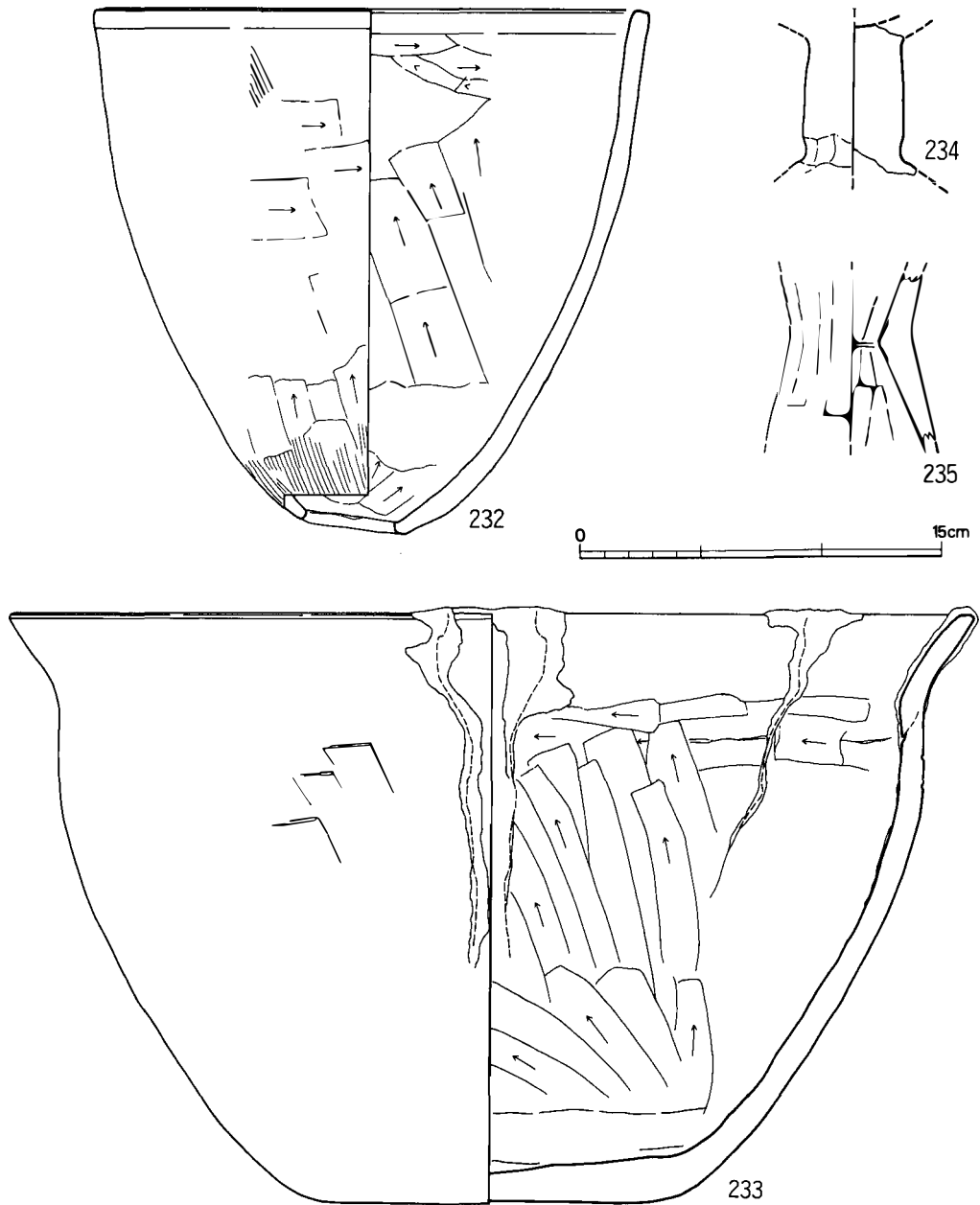
第 40 図 7号A(新)住居跡出土土器実測図⑧(1/3)

え後に横方向にナデを施すが、胎土接合痕を残し、同4.5cm以下をヘラ削り。器外は、極めて細い(幅1.0cm間で14条)ハケ目。口縁部はヨコナデ、端部は丸い。

220は、体部の器内は、ヘラ削りを施すが、一部上半と下半でナデを認め、器外は丁寧なヘラナデ。底部外面は、丁寧なナデ、体部と稜有り。口縁部のヨコナデも丁寧で、端部上面は凹む。



第 41 图 7号A(新)住居跡出土土器実測図㊸(1/3)



第 42 図 7号 A (新) 住居跡出土土器実測図⑩ (1/3)

なお、口縁～体部～底部まで、器壁は大形にしては薄手で1.0cmだが、穿孔径が大きいので、穿孔後に器内から補強したため、サナ部のみやや厚手となっている。

以上のような220の特徴は、既に須恵器製甑の土師器化を示すものと言える。

231は、底径12.0cmを測り、底部はヘラナデを施し、220との特徴と同じ。

221～224は把手片で、いずれも丁寧に指先でナデを施すと共に、先端部側面はシャープに面

取りのナデを加える。221・223は、水平に体部に挿着し、222・224は、水平に挿着後に中位あるいは先端を上方向に屈折させる。

228～230は、共に底部孔破片であるが、穿孔はいずれもシャープ。228・230の外面はハケ目・229はナデを施して、共に平底に調整。

手捏土器（177・190～199・211～219） 壺・甕（217～219）、高杯（197～199）、杯（190・212・213）、鉢（177）、甑（213～216・191～196）とすべての器種のミニチュアが出土。

217～219は、いずれも口縁部が内弯し、底部は丸底であることから壺あるいは甕のミニチュアと言えよう。共にカマド東からの出土。

197～199は、いずれも杯部は脚裾より丁寧に仕上げ、脚裾部も脚柱部が正位直立するように調整していることから、高杯のミニチュアと言えよう。同種を出土した報告のなかで、器台のミニチュアとする例があるが、当該期の日常土器のなかで、器台の使用例が皆無に近い状態になって既に久しい。他に図示し得ない破片が1例あり、D21・中央部・埋土と出土位置が多様なことも、高杯の出土例と類似するものか。

190・211・212は、いずれも器壁は厚手であるが、器内外のナデは丁寧に、後者は端部下1.2cm前後と器高の割りには顕著な口縁部を有していることから、杯のミニチュアとしたが、213～216同様に甑とすべきか。

177は、器内はナデ、器外は体部下位はハケ目のままで、上位から中位にかけては丁寧にヘラナデを施し、平底。日常土器233などからも、鉢のミニチュアと言えよう。

191・192のなかで、192は口径4.2cm・器高3.3cmを測るが、器壁が均一で丁寧にナデを施して弾頭形に仕上げている。日常土器232などからも、甑のミニチュアと言えよう。

193～196は、いずれも底部を平底に・口縁部上面を平坦に丁寧にナデ仕上げすることに留意しており、日常土器220などからも、甑のミニチュアと言えよう。

213～216は、丸底で、口縁部のナデが丁寧に。日常土器225～227から、甑のミニチュアと言えよう。なお、213はカマド内石製支脚後方の最下層からの出土であることから、カマドと甑の密接な点を考慮しての配置と言える。

7号B（古）住居跡（図版49-2～51, 第30図, 表13）

カマドは確認されていないが、後述するように、西壁に設けられていたと考えられる。

B P 11・12・21・81および南壁B D 21, 西壁B D 22, 北西隅壁B D 23を検出。

主柱穴配置は、住居中央部に2個の柱穴を東・西に配し、南壁側に主軸間柱穴を設け、B P 11・12・21の平面プランはほぼ正三角形を呈す。

主軸は、B P 11-12間中心とB P 21心心を通る南北Oで計測したものである。

南壁中央土壇B D 21は、前述の南北Oに東接して配すが、B D 21の大半は、7 A 住の南壁中央土壇A D 21に切られる。

西壁土壇B D 22は、北寄りに配され、0.30m離れて北西隅壁土壇を検出。B D 22の埋土は赤褐色焼土で、B D 23の埋土は床埋土と同じであった。中央土壇（中央炉）が設けられていないこ

とから、BD22内の焼土はカマド残滓で、BD23はカマドの痕跡を示すものと判断。

出土遺物（図版168～171，第43～46図，表35）

出土遺物はやや少ないが，7号A（新）住居の項で既述したような調査で，縄蓆・平行タタキ目の須恵器も出土（後述）。

埴（237～241・243） 238の器内は，中位をへら削りし，上位と下位は丁寧なナデを施す。器外は下位にハケ目を一部残すが，上位はヨコナデ・他はナデを施す。

239～241・243のなかで，239は口径9.0cm・胴部最大径8.6cm，241は同10.8cm・14.2cmを測る。241の胴部の器内は，最大径部は指押えのままで，他はへら削りを丁寧に施すが，頸部に胎土接合痕を残す。器外はヨコナデ・ナデが丁寧に，器壁は口縁部も含めて著しく薄手。

壺（236） 236は，口径16.0cm・胴部最大径27.6cm。球形の胴部器内は，頸部下1.5cmまでをへらナデ，中位は指先によるナデ，中位以下はへら削り。器外は，磨滅のため不明瞭であるが，へらナデ痕を残すことから，丁寧にへらナデ・ナデを施したもの。口頸部のヨコナデは丁寧に，頸部は器外で胴部からシャープに屈折し，口縁部下半に外傾するが，器内では頸部は直立気味で口縁部下半に外傾。口縁中位には，ヨコナデによって小さい突帯を造作し，上半は直立し，端部上面は平坦でシャープな稜有り。二重口縁の退化した残影を器形に多く認め，器壁も薄手。

甕（242・244） 埴の退化した特徴が，やや中形の甕の器形に残影化していることを多く認め，器壁も薄手で，丁寧なヨコナデ・へら削り。

244は，器内が頸部以下へら削り，口縁部が一部にハケ目を残すが，丁寧にヨコナデし，端部はシャープな稜有り。

高杯（245～264） 249の口径は19.4cmを測り，杯底部と口縁部の屈折部は，器内にシャープな稜を認め，器外にはわずかの段差を有し，口縁部は直線的に外傾。杯部は浅い。

250～254のなかで，253は口径17.0cm・脚裾径13.5cm前後・器高約13.5cmを測る。平板実測No.7（杯器周残1/4弱，7号B住居埋土中）・7号A（新）住居下層（脚器周残1/4弱）・同最上層（脚器周残1/4）が接合し，器周残5/8に復原された。杯下半と上半の屈折部は，器内にわずかの稜を有し，器外は明瞭な段を認める。上半は直線的に外傾し，端部は丸い。脚部は，脚柱部径が小さく，ハの字状に開き，裾部で更に大きく開く。154は，下半の底部を欠失するが，上半がやや内弯気味に外傾するのは，上半下位のヨコナデが強いためである。

255～258のなかで，257は口径19.4cmを測り，杯上半はやや内弯し，口縁部は外傾。

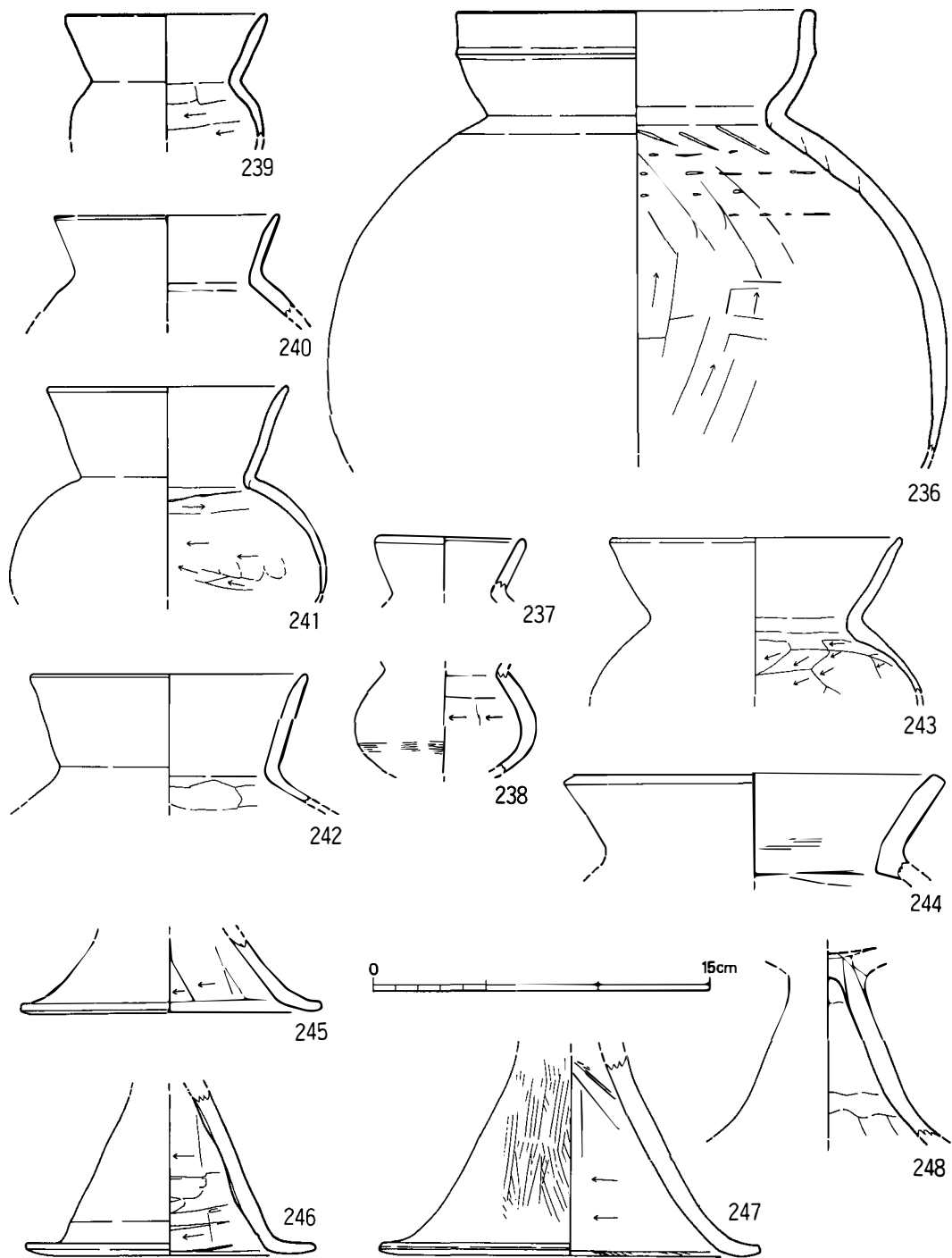
259は，器周残1/8の破片であるが，良好に径の復原ができたが，口径27.6cmを測り，大形。同様に大形の甕の口縁部片とも考えられるが，外傾度および胎土から高杯であろう。

260～264は253同様の特徴。

245～248は，脚柱部は大きくハの字状に開き，裾部で更に開くが，その屈折稜は器外ではほとんど認めない。

杯（265～267） 265は，磨滅のため調整不明。体部は，平底気味で器壁は厚手。口縁部は，直線的に外傾し，器壁は薄手。

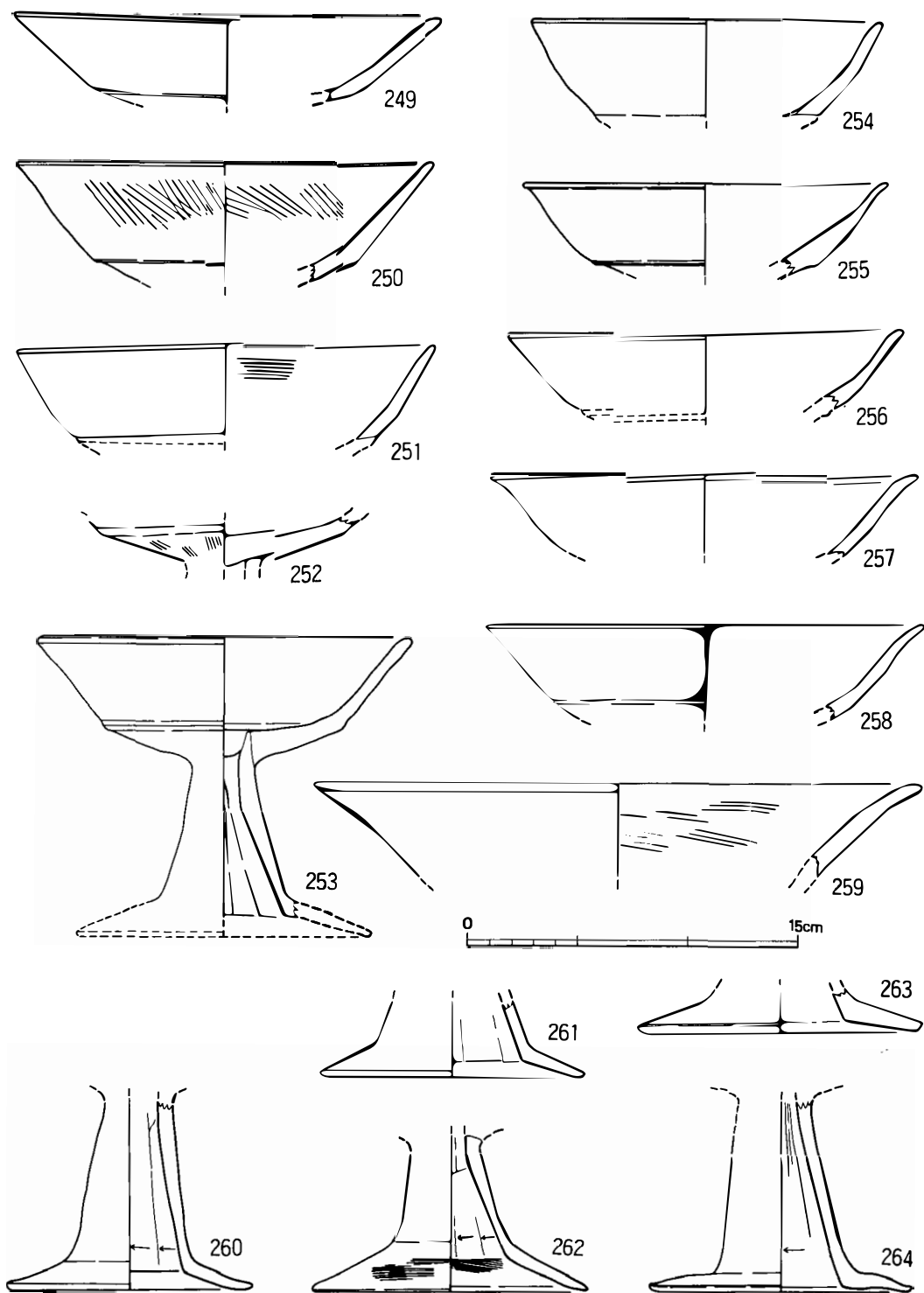
266の口縁部は，器内で外反・器外で外傾。端部はわずかに突出気味。体部上半から口縁部ま



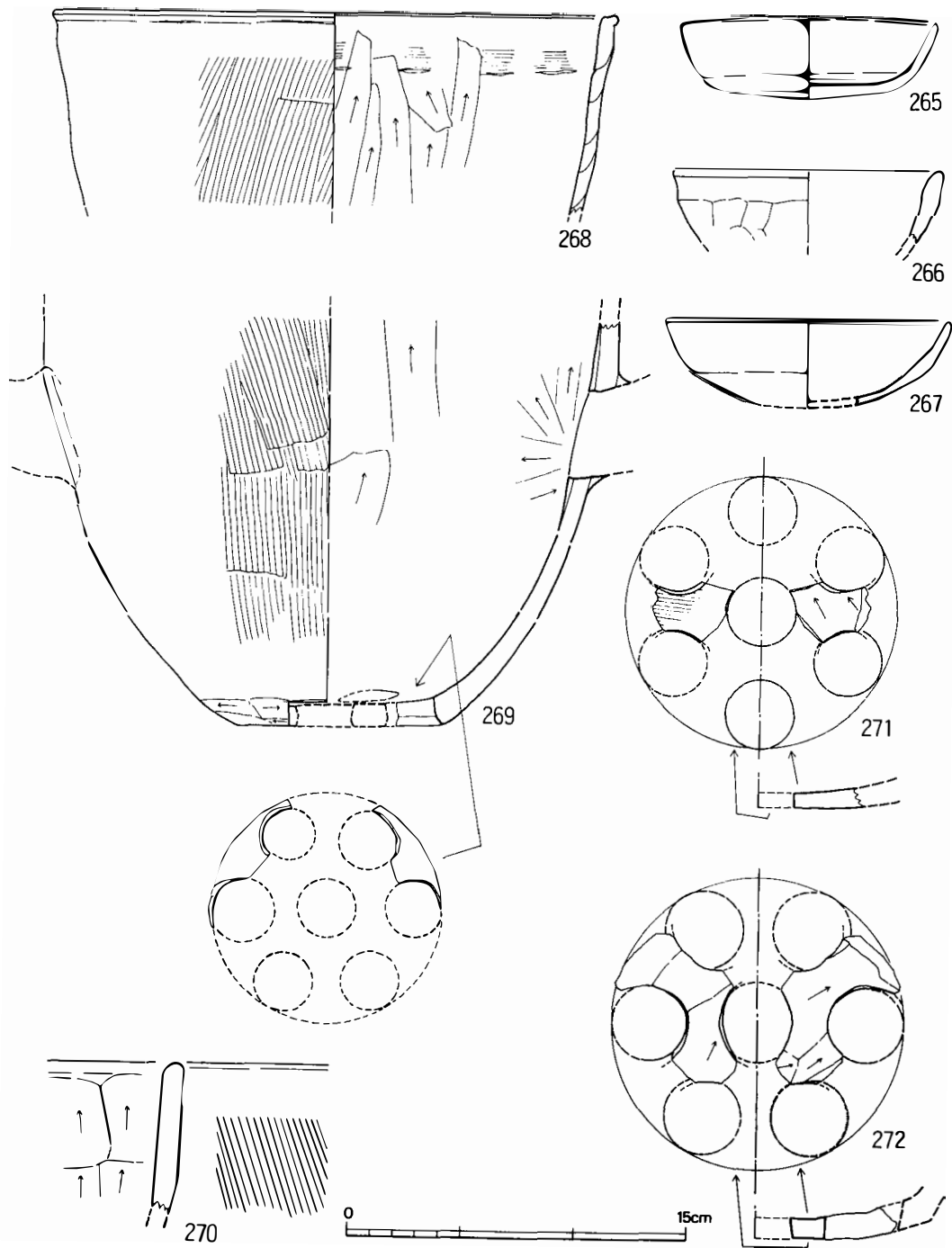
第 43 図 7号B (古) 住居跡出土土器実測図① (1/3)

での器壁は厚手。

甗 (268~277) 268の口径は28.0cmを測り、口縁下1.5~2.5cm間はハケ目後に一部ナデを施す

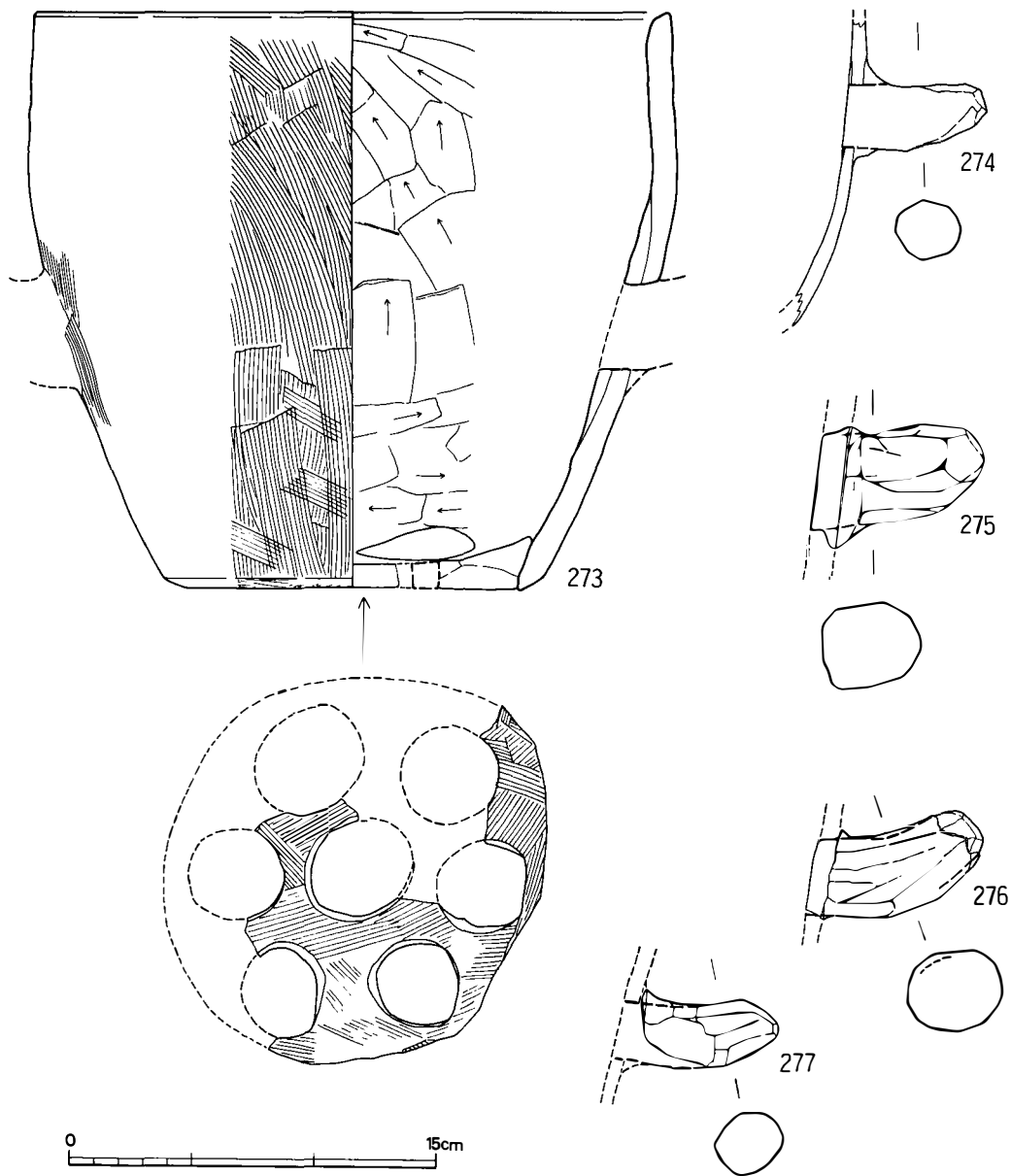


第 44 图 7 号 B (古) 住居跡出土土器実測图② (1/3)



第 45 図 7号B (古) 住居跡出土土器実測図③ (1/3)

が、胎土接合痕を明瞭に残し、ヘラ削りはこの間にも及ぶ。口縁部は、ヨコナデがシャープで、端部上面は凹み、外面は突出。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾。口縁部や体部の胎土



第 46 図 7号B (古) 住居跡出土土器実測図④ (1/3)

接合の特徴は、既述の壺236に類似するなど、古い形態の残影が大きいなかでの、須恵器製の甑の土師器化と言えよう。B D22焼土内・B D23内の破片が接合し、No.16-3 (床面)と埋土の破片が接合し、両接合破片は同一個体で、器周残1/2に復原し得た。

269は、体部現存最大径25.4cm・底径9.4cmを測る。No.16-4 (床面から0.7cm)・7号A (新)住居南側方形区画張床内 (把手部孔片)・埋土からの出土体部破片が接合し、7号B (古)住居埋土の2片と7号A (新)住居最上層の1片のいずれも孔片が接合。また、7号B (古)住居

埋土出土の把手孔2片と底部孔1片も同一個体。器内は、体部中位をヘラ削りし、把手挿着部も更にヘラ削りを施す。下位から底部はナデを丁寧に施す。器外は、下位をハケ目後にナデ、更に最下位はヘラ削りを施して面取りをする。底部はナデを丁寧に施し、平底に仕上げる。ヘラ削りによる面取りや平底化などの特徴も、前述268同様に、既に須恵器製甗が土師器化されたものと言えよう。

271・272は、底部孔片であるが、269の底部同様に平底化するため、器内は共にヘラ削りを丁寧に施す。器外は、271ではハケ目を施し、272では周辺部をヘラ削りし、中央部はナデを施す。穿孔は269を含めて、いずれもシャープ。

273は、口径26.0cm・体部最大径26.6cm・器高23.5cmを測る。No16-2（把手孔部・体部下半片）・7号B（古）住居埋土（体部・口縁部片）・7号A（新）住居南側方形区画張床下（底部孔片）・7号A（新）住居No106-2（把手孔片）・20号住居カマド内（底部孔片）・20号住居埋土（底部孔片）が接合し、器周残は口縁部1/2・体部1/4・底部3/4まで復原。体部の器内は、把手挿入部の中位に他の器周部よりも更に胎土を補強し、器外は最下位をハケ目で面取りをする。底部孔は、シャープに器外から切り取るが、周辺部の6孔は、体部にも切り込み部が及ぶ。

270も273に類似し、共に須恵器製甗の土師器化が器形として既に完成したものと言える。

274～277は把手片で、274は7号A（新）住居の埋土（体部・把手片・体部片）の3片と南側方形区画張床下埋土（把手片）の1片がいずれも接合。277は、体部挿着後のナデの後で、片手でグリップして握りしめたままの調整痕をそのまま認め得る。図上上面の3ヶ所の凹みは、体部に近い方から小指・薬指・中指痕で、下面の2ヶ所の凹みは、同じように掌・親指腹痕である。276は、体部との挿着部への補強胎土が先端近くまでナデられている。いずれの把手の先端側面は、シャープに面取りされ、古出の外來系・須恵器製の把手の特徴そのままと言えるが、上面の切り込みは認められない。

9号住居跡（図版52～64，第47図，表14）

調査区の東半部中央で検出。北壁中央部やや西寄りに、北向きのカマド付設。弥生時代の11号円形周溝・4号溝状遺構を切る。

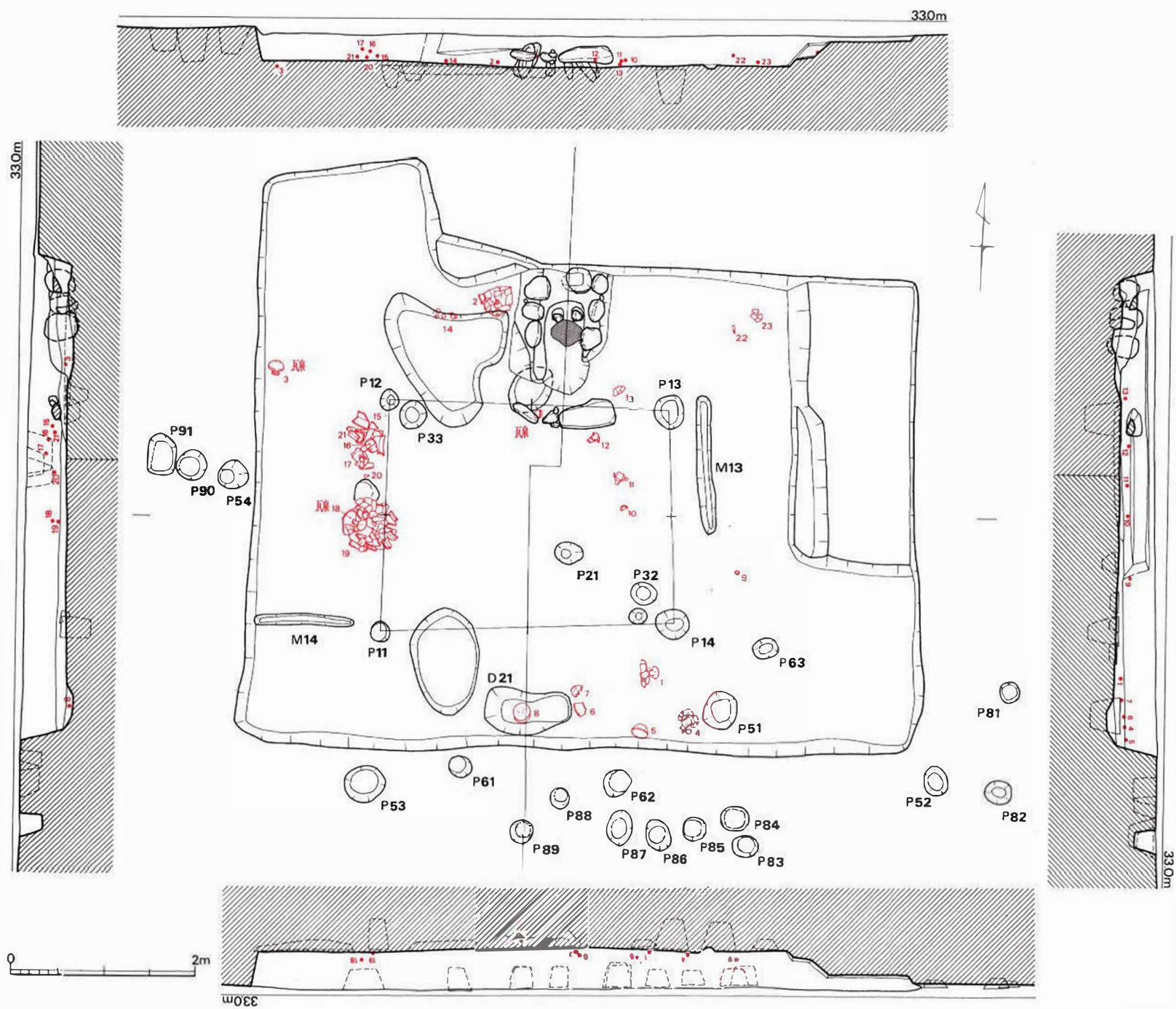
住居は、P11～14・21・32・33・51～53・61～63および、その他の柱穴を配し、南壁中央D21，M13・14を設け、東壁側にベット状遺構、北壁側に張り出し部を付す。

支柱穴配置は、東側柱列～ベッド状遺構西縁間に西側柱列～西壁間・南側柱列～南壁間がほぼ一致し、北側柱列～北壁間はこれらよりわずかに大きいだけ。

これに対して、東側柱列～東壁（ベッド状遺構東縁）間は前述の距離の2倍を測り、北側柱列～北壁側張り出し部北側壁間とほぼ一致すると共に、ベッド状遺構南縁以南でP61以東の床面積は、北壁側張り出し部床面積にほぼ一致。

以上のことから、支柱穴配置は住居床面中央部に整然と配され、北壁側・東壁側に同様の張り出し部を、また東壁側張り出し部北側にベッド遺構を設けた住居と言えよう。

主軸柱穴配置は、支柱穴間内床面のほぼ中央のやや東・南寄りに設けられているが、東寄りに



第 47 图 9号住居跡实测图 (1/60)

位置するのは北壁側張り出し部も含めた住居西半部の床面を、また、南寄りに位置するのは北壁側に設けたカマド前面（南面）の床面を、それぞれより広く活用するためか。

主軸間柱穴配置は、東側張り出し部側のP14と北側張り出し部側のP12に近接してP32・33が設けられ、P11・13に近接するようなP31・34は設けられていない。このことから、当初に示した柱穴名称に従って両柱穴を主軸間柱穴P32・33としたが、両柱穴は通例の主軸間柱穴のように主軸柱穴の機能に近い用途で設けられたものではなく、以下のように考えてよいだろう。

P32に関しては、P21とベッド状遺構南縁を結ぶ線（東西O方向と一致）に南接することから、東壁側張り出し部配置に関連するもの。

P33に関しては、P33と北壁側張り出し部東側壁を結ぶ線が南北O方向と一致することから、同張り出し部配置に関連するもの。

壁柱穴配置は、P51がM13延長線上で南壁に近接して設けられているが、P63と共にP12とP14を結ぶ対角線上およびベッド状遺構西縁延長線上近くに位置しており、対角柱穴の機能に加えて東壁側施設配置とも関連する柱穴であろう。

P52も各壁隅のなかで東壁側張り出し部の配されている南東壁隅部だけに設けられており、同張り出し部施設配置に特に関連するものか。

P53は西側柱列延長線上に位置し、M14東端はP11近くまで設けられていることから、特にP11とP12を結ぶ線の延長線以西の住居設備に関連するものか。

P54は東西Oに近接する。

施設柱穴配置は、P63が東壁側張り出し部前面（西面）の位置で、P61・62が南北Oに対峙する位置で設けられている。

P63は、南東壁隅（東側張り出し部南東側壁隅）と北西壁隅（北壁側張り出し部北西側壁隅）を結ぶ対角線上にも位置しており、また前述のように、ベッド状遺構西縁延長線上および南側柱列線上にも位置することから、P51・52と共に、東壁側張り出し部・ベッド状遺構の施設柱と言える。

その他の柱穴P81～91のなかには、おそらく住居に伴う柵列などの杭に属するものもあろう。

南壁中央土壇は、南北O直下に整然と配され、その直下の中央には第49図280（出土番号No.8）の甕が完形のまま倒立して据え置いた状態で出土している。

ベッド状遺構は、西縁南半部が段状を呈し、その前面に溝状遺構M13が配されていることから、M13はこの施設およびその西面床と中央部床とを画す施設で、M13南端～P14間はベッド状遺構・東壁側張り出し部への出入と考えるとよいだろう。また、M13北端はP13近くまでであるのは、カマド東袖～ベッド状遺構北半部西縁間に薪、糞等の燃料の保存床面を確保するためであろうか。

溝状遺構M14は、南西壁床面（M14以南でP11～53以西床面）を他の床面と画するために配されたと言ってよい。

カマド（図版52-1～59-1，第48図，表14）

カマドは、支脚石3個（No.7～9）を使用し、袖石6個（No.1～6）・天井石1個（No.10）を

組み合わせて、その間隙を土で埋めたもので、袖内からは袖擬石 2 個 (No.11・12) も検出。

なお、カマド祭祀行為を示すものとして、前述の袖擬石 2 個の検出、支脚・天井石の除去、ミニチュア土器の一括出土等などがあったので、このことについても説明する。

前庭部前面 縦断土層図に示すように、カマド内のカマド残滓 2 層は、前庭部南端から 60cm ほど更に南方へ広がるが、その南端のすぐ前面の 2 層上面で、支脚石 No.7・天井石 No.10 が第 53 図 314 の甕と共に出土。この 2 層は燃焼室以北の 2 層に比べると炭・灰をやや多く含むもので、カマド内の灰残滓が、カマド残滓 (袖・天井土) と共に、前庭部以南に掻き出されたものであろう。

支脚石 No.7 は、加熱によって焼けて赤変している面を南面にして出土し、天井石 No.10 との間には甕と数個の河原石があり、A-B 断面に見透し図で示すように、支脚～天井石は、カマド前面でカマドを印封するような配置であった。このことは 5 号住居カマド前面での天井焼土塊による印封同様のカマド破棄行為と判断される (図版 52-2・56-2)。

前庭部・焚口室 焚口室は、支脚石 No.8・9 前面の焼土 3 層が、支脚石 No.7 の抜去痕であることから、袖石 No.1・4 が、焚口室袖石であるとは考えられない。このことに加えて、No.1・4 の南面を結ぶ線に 7 層南端がほぼ一致することから、この南端を焚口・燃焼両室の境と判断し、天井石 No.10 の縦幅 32cm 間を焚口室長とした。

ところで、この No.10 は、17・20 号住居カマド天井石とは比較にならないほど大形で、重量もあることから、焚口室袖前面にも前庭部袖を設けて、天井石を前面 (南面) から押えて安定させる必要はない。実際に、西袖南端～No.1 南面間は 37cm を測り、前述の 32cm より 5cm 大きいだけ。このことから、前庭部には 4 号住居カマドのような袖は、当初から設けられておらず、東袖は焚口室袖南半部が除去されたもので、前庭部は袖を設けない床面の凹み南端までと判断。

燃焼室 支脚石は No.8・9 が検出されたが、M-N 断面に示すように、使用時のままの状態であるのは No.9 で、No.8 は掘り方埋土がカマド残滓の 2 層であることから、カマド破棄時に抜去され、その後で再配置されたものである。

なお、縦断土層図に見透し図で示すように、再配置に際しては、使用時の状態とは逆に倒立させている (図版 55-1)。

ところで、前述のように No.8・9 の前面には、縦 28cm・横 39cm・深さ 7cm のピットが検出され、埋土は焼土を主とする 3 層であった。この 3 層はカマド基盤土 6 層が熱変焼土化したものではないことや、東・西に並立する No.8・9 に加えて、更に今一つの支脚石 No.7 が実際に前庭部南面で出土していることから、このピットは No.7 の抜去痕と判断される (図版 55-2)。

なお、表 14 の支脚部長は No.8 の西面～No.9 東面間が現況で 30cm を測ることから、No.8・9 北面～No.7 南面間も 30cm となる位置に No.7 が配されていたものとして推定した。No.7 の縦長は 16cm で、このときの No.7 の中心はピットの中心とほぼ一致。

また、このように使用時に配していた支脚部を意識して、この 3 層上部の 2 層中に、第 49 図 281・282 の罫や第 52 図 310 の鉢が、カマド破棄行為によって配されたものであろう (図版 53-1)。

つぎに、燃焼室と炎口室の境は、炎口室天井南面が、擬袖石 No.11 北面まで遺存することから、

No.11がその境石と判断される。その理由や、No.11・12が共に擬袖石であるとの理由は以下のとおり。

表13に示すように、東側袖石3個の縦方向の長さの合計は73cmで、西側袖石3個の縦方向の長さの合計は74cmと一致するに等しい。

このことから、単絡的計算では

- ①袖石間に間隙を設けることなく接して配する。
- ②適当に間隙を設けて配する。

上記①・②いずれの場合でも、No.1～3・No.4～6内での前後の配列の組み合わせ方を変化させることも含めて、両側袖石の最南端（前庭部側）と最北端（奥壁側）での両側袖石面を整えることは可能で、より立派なカマドが構築可能と考えられる。

ところが、相対峙する袖石のなかで、それぞれの南面間、あるいは北面間を結ぶ線が、カマド主軸と直交する（整う）のは、

- ③No.1とNo.4のそれぞれの南面を結ぶ線
- ④No.2とNo.5のそれぞれの南面を結ぶ線

の2例のみで、例えばNo.1とNo.4の北面やNo.3とNo.6の南面をそれぞれ結ぶ線とカマド主軸は直交しない（整わない）。

今少し、各袖石配置プランの特徴を指摘すれば、

⑤上記①・②の直交例は、東袖でNo.4とNo.5の間に7cmの間隙を設け、西袖でNo.1とNo.2を接することで生じたものであり、

⑥上記2例以外が直交しない（整わない）のは、東袖ではNo.5・6・No.12を接して、西袖ではNo.2・3・No.11を接して配したために生じたものである。

このように、実際の袖石配置は、①・②の方法ではなく、③～⑥が採用されている。

また、No.11・12については、

⑦共に袖構築上からは、袖石の間隙を埋めて袖体の一部とするには何の用もなさないことは明らかで、袖石の安定を保つ根固め石の用もなさず、単に袖石間に外側から配されているだけである（図版57・58）。

以上①～⑦のことに加えて、

- ⑧No.11以西の西袖に接して、第54図316の甗が出土。
- ⑨支脚部以西の西袖近くで、第55図324～327他合計7個のミニチュア土器が一括出土。
- ⑩住居内出土の一括土器群は、図版59-2に示すようにカマド以西で大半が出土。
- ⑪袖石材は、西袖使用のものが東袖使用のものよりいずれも大形である（図版56-1）。

これらのことから、カマドの構築～使用～破棄の一連の行為には常に西側（左袖側）重視の姿勢が看取され、カマド構築の作業工程は第1～6段階が考えられる。

[カマド構築作業の復原]

第1段階

(a) カマド構築前の祭祀行為（未確認）

- b カマド基盤を掘り下げる。
- c 住居張り床7層を設ける。

第2段階

- (a) 袖構築前の祭祀行為（A地区1号B(古)住居カマド例）
(註「II」)
- b 基盤土6層を配しつつ、西袖石No.3→東袖石No.6を設ける。
- c No.3・6以北の袖を構築する。
- d 同以北の炎口室北半部天井を構築する。
- e 基盤土6層を配しつつ、西袖石No.2→東袖石No.5を設ける。

第3段階

- a 炎口室と燃烧室の境石である西擬袖石No.11を配する、両室天井構築前の祭祀行為。
- b No.11を印封して、No.2以北の袖を構築する。

第4段階

- a 炎口室東袖儀仗袖石No.12を配する、炎口室南半部天井構築前の祭祀行為。
- b No.12を印封して、No.5以北の袖を構築する。
- c 炎口室天井を完成させる。

第5段階

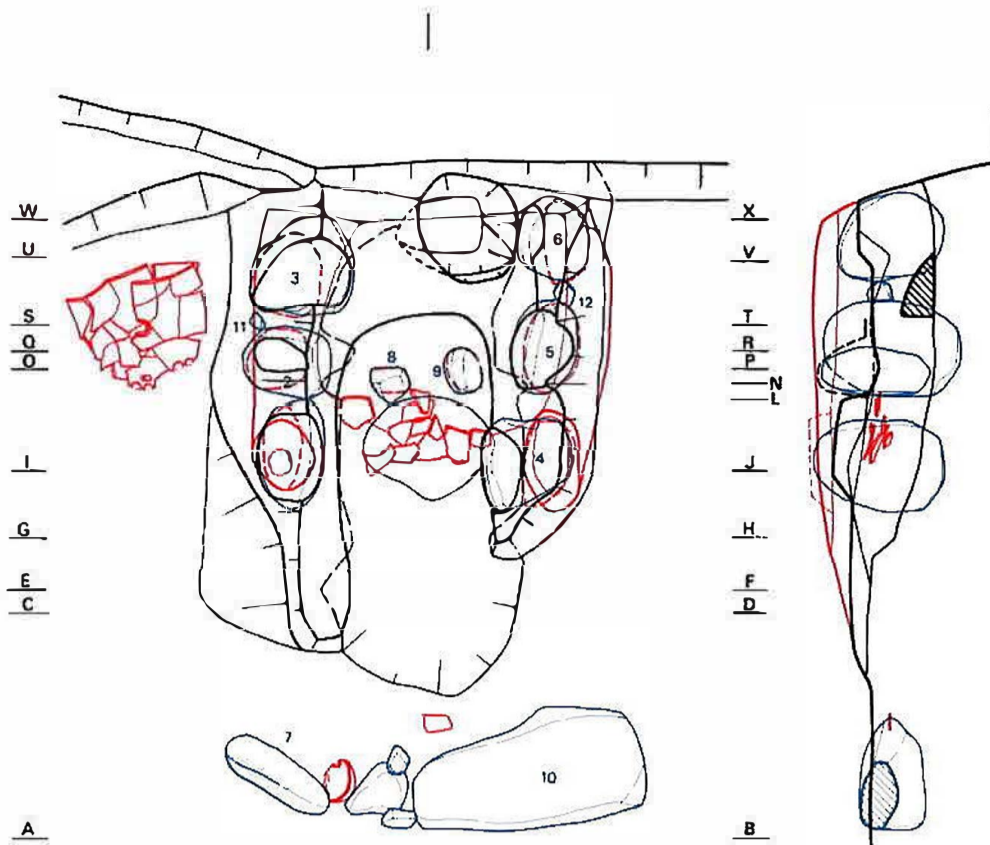
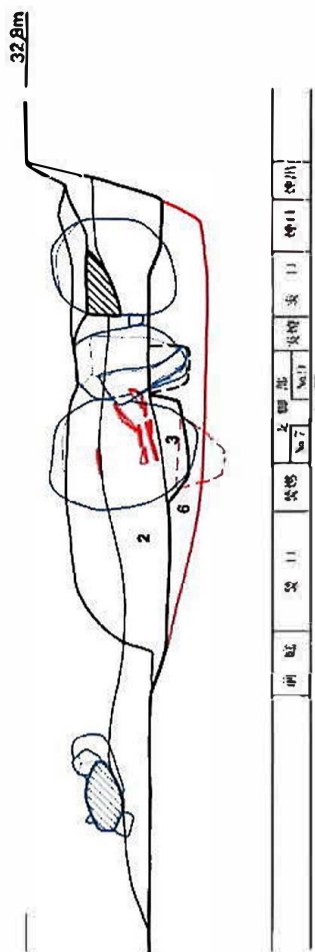
- (a) 支脚石配置・燃烧室北半部天井構築前の祭祀行為（6A号住左袖内ミニチュア土器）。
(註「II」)
- b 基盤整備を終了する。
- c 燃烧室北半部天井を構築する。
- d 基盤土に支脚掘り方を設け、西支脚石No.8→東支脚石No.9を埋置する。
- e 同様に掘り方を設け、西袖石No.1を埋置する。
- f 同様に東袖石No.4を埋置する。
- g 同様に南支脚石No.7を埋置する。
- h 西袖→東袖を構築する。

第6段階

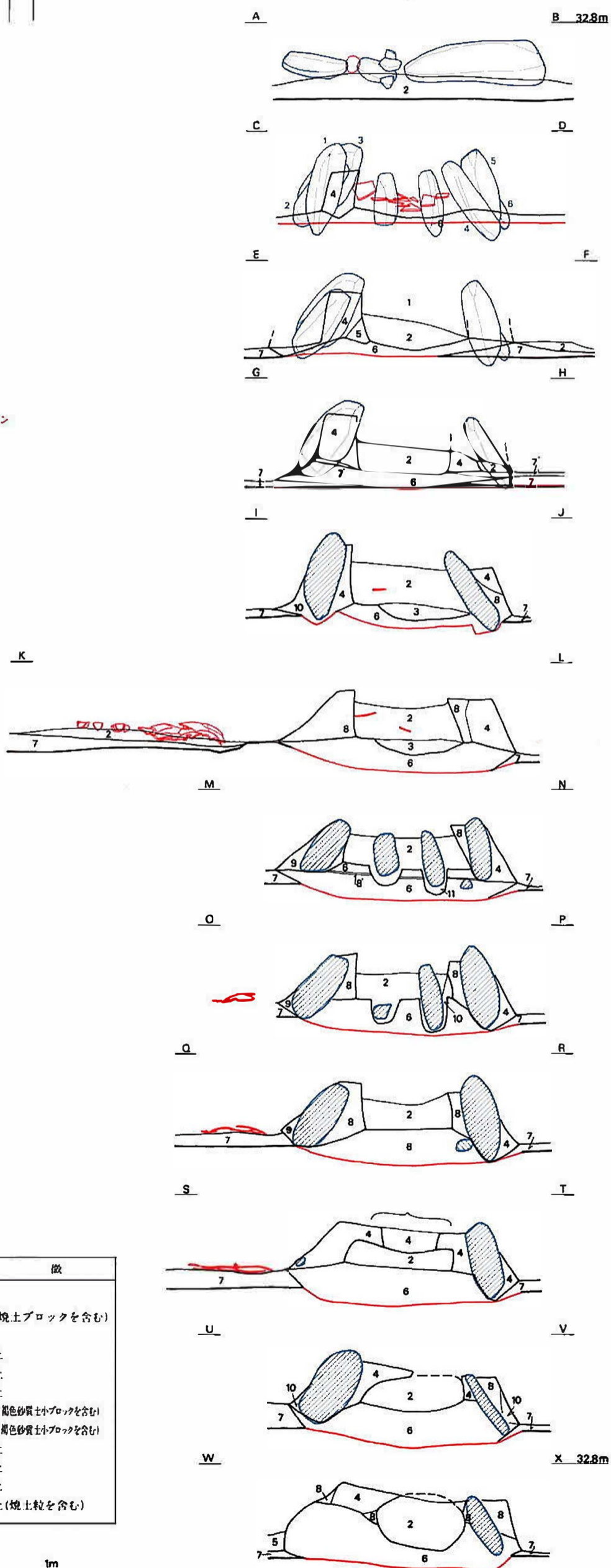
- (a) 焚口室天井石配置・燃烧室南半部天井構築前の祭祀行為（20号住カマド袖内高杯）
- b 焚口室の西袖→東袖を構築する。
- c 焚口室天井石No.10を架す。
- d 燃烧室天井南半部を構築する。
- e 焚口室南面を完成する。
- (f) カマド全体に化粧土を配する。

炎口室 以上、やや炎口室と燃烧室の境が擬袖石No.11であるとの説明が長くなったが、炎口室と煙口室との境は、縦断土層図に示す炎口室天井の現存北端部と考えられ、平坦な燃烧室～炎口室床面は煙口室部分で一段深くなる。

煙口・煙出 No.6は奥壁に接して、煙出部東袖の一部の用もなしているが、No.3は奥壁から8cm離れており、煙出部西袖はすべて土造りである。



- カマド袖
- 土器・掘り方
- 支脚・袖・天井石
- 焼けている部分
- 支脚・袖石・床面プラン



番号	状態	特徴
1層	住居埋土	暗褐色土
2層	カマド残滓	褐色砂質土(焼土ブロックを含む)
3層	焼土残滓	赤褐色焼土
4層	袖・天井	暗褐色砂質土
5層	袖	黄褐色粘質土
6層	カマド基盤土	暗褐色粘質土
7層	住居張り床	暗褐色砂質土(黄褐色砂質土ブロックを含む)
7層	袖間層	暗褐色砂質土(黄褐色砂質土ブロックを含む)
8層	袖	黄褐色砂質土
8層	カマド基盤間層	黄褐色砂質土
9層	袖	暗褐色粘質土
10層	支脚埋土	暗褐色砂質土(焼土粒を含む)



第 48 図 9号住居跡カマド実測図 (1/20)

出土遺物（図版171～176・208・209，第49～56・144・145図，表35）

埋土中からの土器破片は多いが，①カマド内・南・西・東側，②溝状遺構M14北（西壁寄り），③南壁土壇D21内・東では，床面・床面近くから多くの完形・略完形の土器が一括出土。

また，土器に限らず鉄製品のミニチュアと共に，外来系土器の出土もあるが，これらは前述土器群と共に，意識的に再配置された状態での出土であり，なかでも甕の器制別の再配置が留意される（器制については，後述）。

埴（281～283） 281は，胴部の器内へラ削りが雑で，胎土接合痕を残し，器外は接合面からの剝離が著しいが，煤はその剝離面にも認める。

282は，胴部器外がハケ目のまま。283は，更にナデを加えるが，ハケ目は部分的に残る。

以上の土器は，281・282がカマド内からの破片で，283はカマド南から口唇部のみを欠いてそれぞれ出土しており，共に意識的破砕・欠損による再配置と言えよう。

壺（285～287） 286・287は，M14北の一括土器群のなかで，P12寄りの北群で出土したため，同一個体としてNo15を付して収納したが，別個体であった。

287は，球形胴部の器内をへラ削りし，器外は粗なハケ目のままで，ヨコナデ後の口縁部器外にもハケ目を残す。頸部はわずかに直立，下半の口縁部は外傾，上半の口縁部は直立して，端部が更に外反。所謂，二重口縁壺の残影を認め，器壁も薄手ではあるが，調整が雑で，頸部～口縁部の屈折にシャープな稜無し。

286も，287に類似するが，285は口縁部器内にもハケ目を残し，上半の口縁も既に外傾し，端部も丸いなど，より退化した器形。

以上のなかで，286・287は，後述するM14北のP11寄りの南群の甕328を意識しての，再配置がなされている。328も古い特徴の甕であり，南群で甕328を意識的に破砕し，北群で同じく286・287を破砕して，再配置したものと言えよう。

甕（278～280・284・311・312・320・328） 280は，器内のへラ削りと器外のハケ目は整然と施すが，調整は雑で，器内外に補修痕・胎土接合痕を認める。底部の器外は，ハケ目後にナデを施し，やや平底気味に調整。胴部最大径は中位にあり，口縁部は外反し，端部上面は平坦で外傾し，側面が突出。なお，この甕は，D21内で伏せた状態での出土（図版64-2）。

278・284は，共に280に類似。

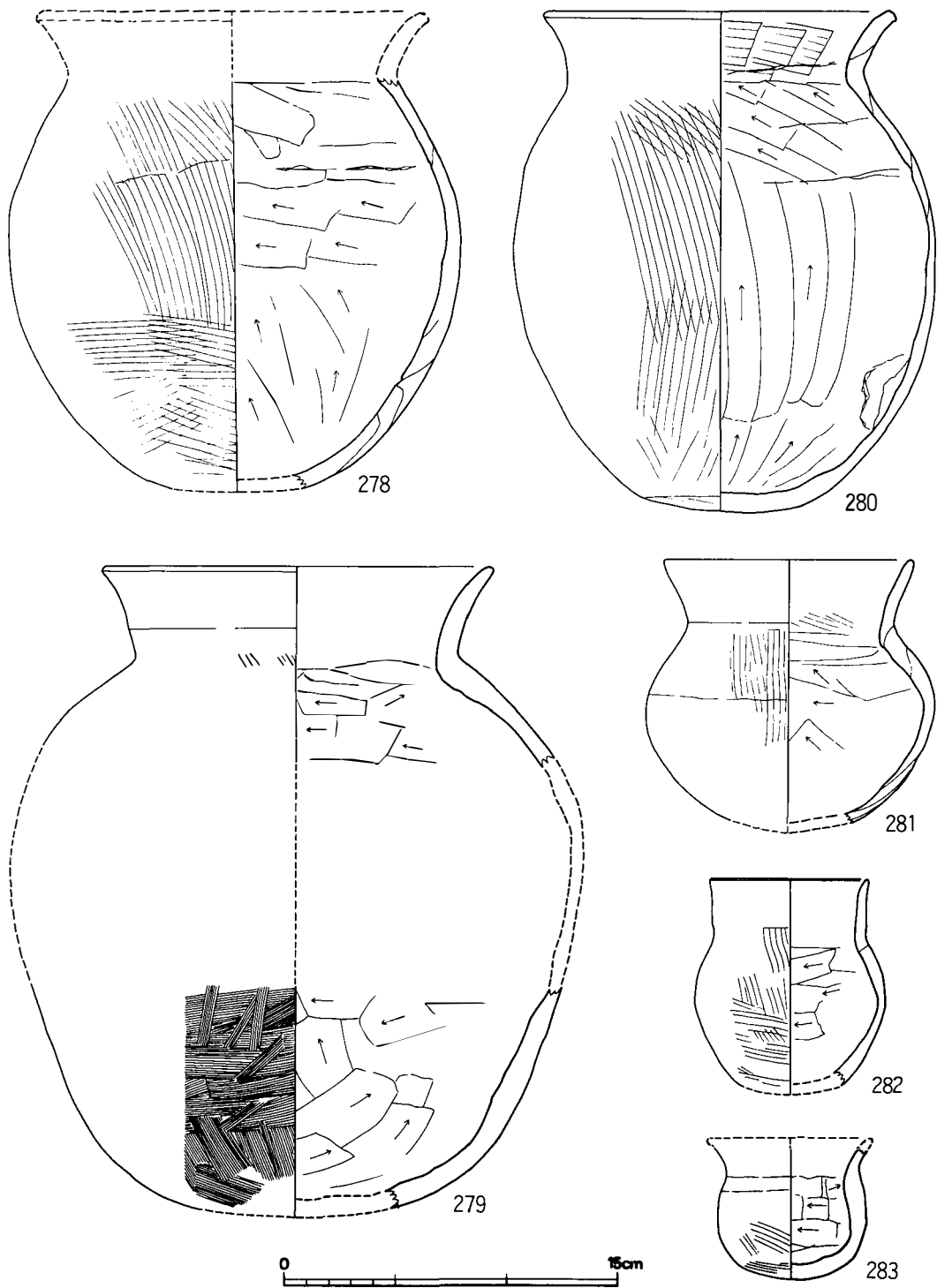
279の胴部器外は，中位までを丁寧にナデ，下位以下を極めて細かいハケ目で調整。胴部最大径は中位にあり，口縁部は外反し，端部はやや丸い。

311・312は，279に類似。311は，胴部最大径がやや下位にあり，312は，住居中央部で南北方向に設定したセクションの下層で出土し，胴部器周残3/8・口縁部同3/4まで接合。

320は，胴部器外のナデは丁寧に，ナデ後のハケ目を一部に加え，頸部の屈折にシャープさはなく，口縁部はほとんど直立・端部はシャープ。器内外に，ヨコナデ前のハケ目圧痕を残す。

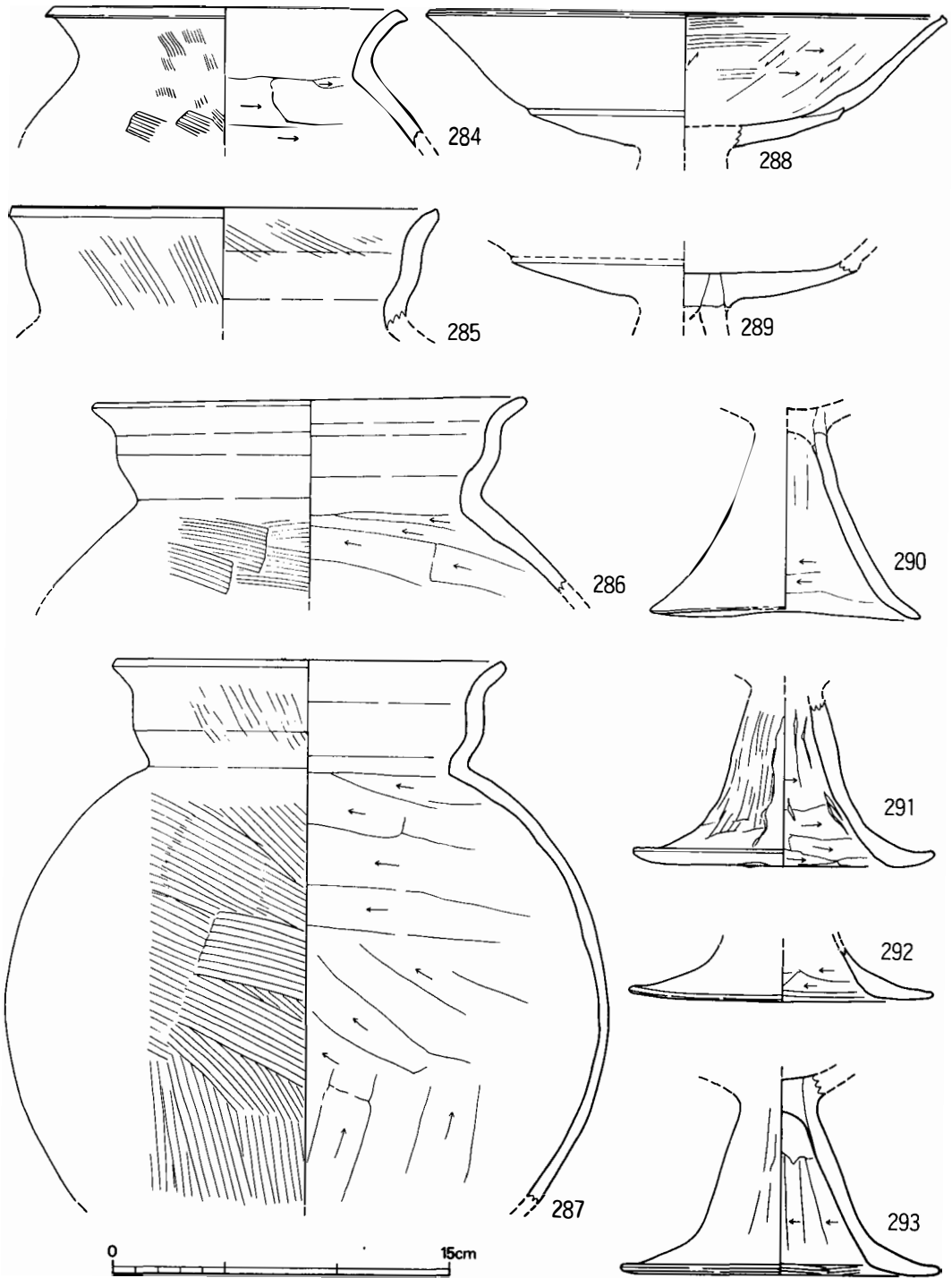
328は，大形。器内外共にハケ目のままで，底部の器内のみへラ削りを施し，同じく底部の器外のみナデを一部施す。

高杯（288～301） 288は，器内に一部ハケ目を残すが，内外共にヨコナデ。器内は，更に下半



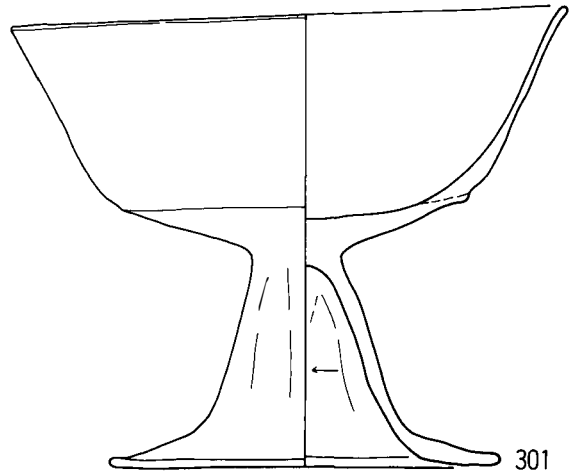
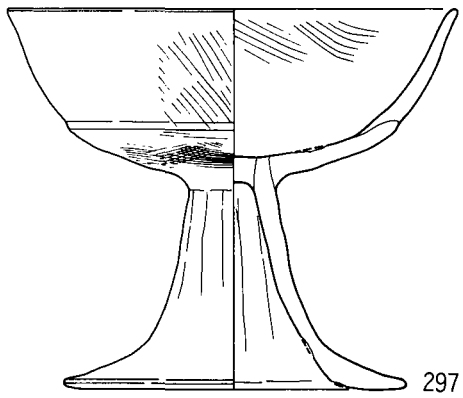
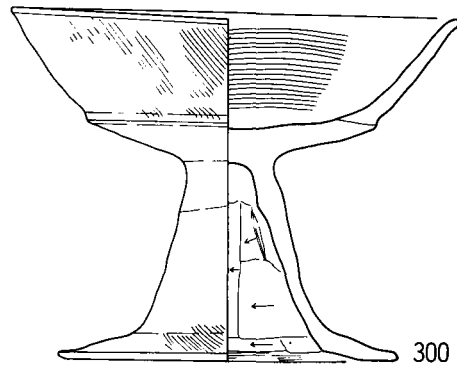
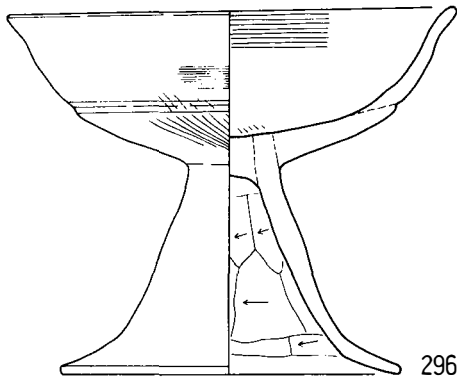
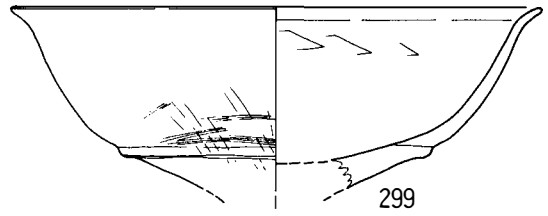
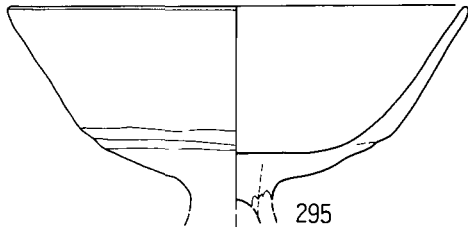
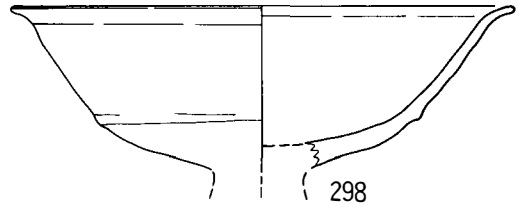
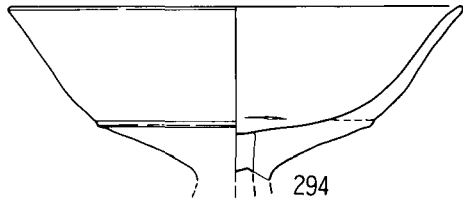
第 49 図 9号住居跡出土土器実測図① (1/3)

は横方向ナデ・上半は放射状ナデを加える。下半器内は平坦で、上半は直線的に外傾し、端部

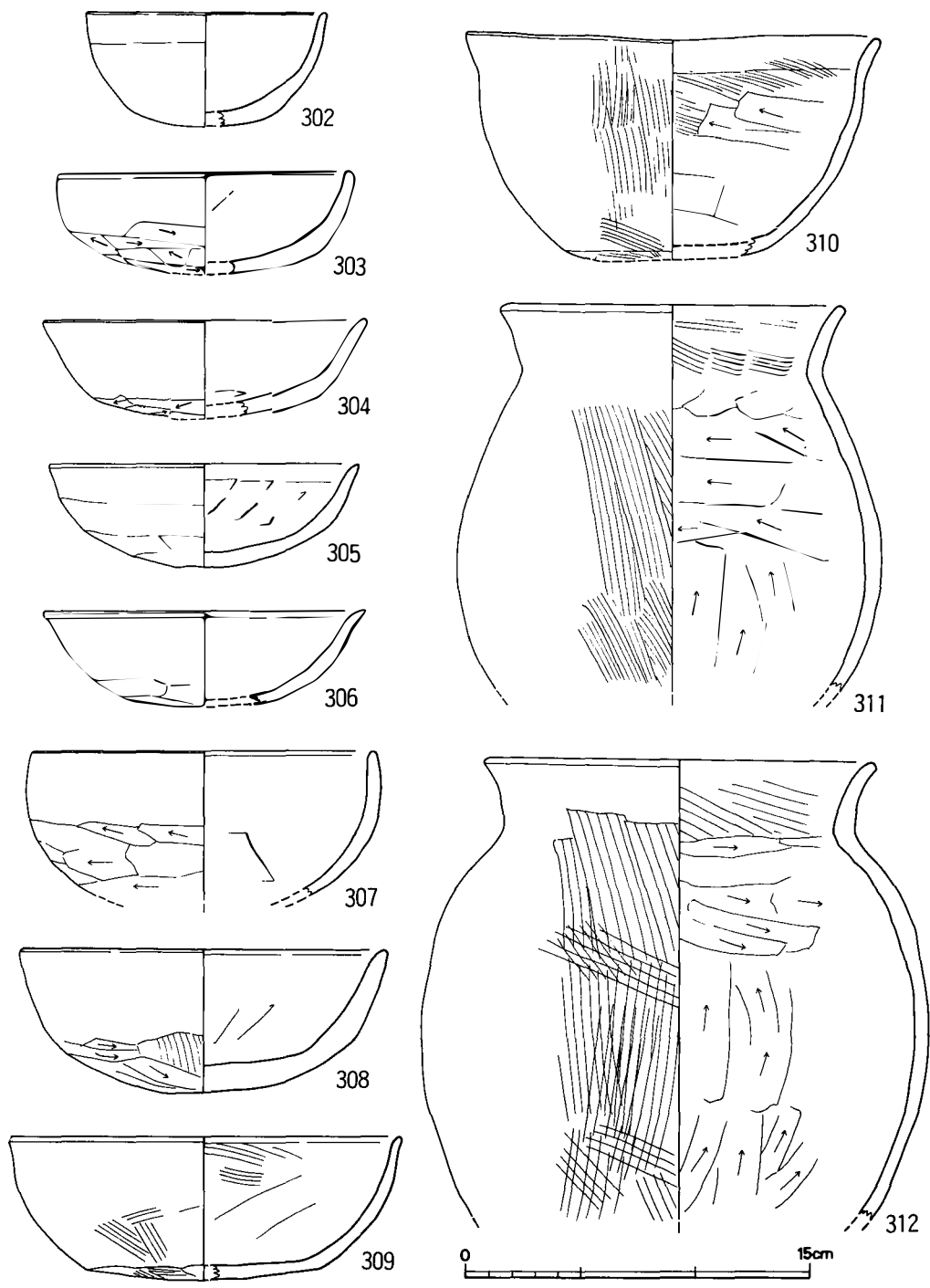


第 50 図 9号住居跡出土土器実測図② (1/3)

は上方に突出・側面が凹む。器壁は薄手・全体にシャープな稜有り。



第 51 图 9号住居跡出土土器実測図③ (1/3)



第 52 図 9号住居跡出土土器実測図④ (1/3)

296は、杯部の、器内口縁部と器外下半はハケ目のまま。他はハケ目に、ヨコナデ・ナデを施す。脚部は、器内の杯部との接合挿入栓を指先でナデ、器外の脚柱部は横方向に磨く。杯部器

外の上半・下半の屈折部には、明瞭な段を有し、上半は内弯気味で、口縁部は大きく外傾・端部は丸い。

299は、器周残 $3/8 \cdot 1/4$ の2片が同一個体であるが、接合しない。296と同じ特徴をとる。

301は、大形。杯部は磨滅が著しく、詳細は不明。杯部器外に、ヘラ磨きによる稜有り。杯部は深く、下半の器内は平坦で、器外は直線的に外傾し、上・下半の屈折は明瞭な段を有し、口縁部まで直線的に外傾。脚部は、脚柱部の径が大きく、わずかにエンタシス状を呈して、大きく開き、裾部で更に開く。器壁は、全体的に薄手。

294・295・297も、301に類似。

300は、杯部の器内は上半がハケ目のままで、下半部をナデ。器外はハケ目を一部に残す。脚部の器内は、杯部からの挿入栓を指先で丁寧なナデ、脚柱最下位は再度ヘラ削りで面取り。器外は、脚柱部にヘラ磨きによる稜を認め、裾部はヨコナデ後にハケ目。289と共に、301に類似。

290～293のなかで、290は脚柱部と裾部との屈折が明瞭でなく、やや内弯気味に大きく開く。

以上のなかで、290は主軸柱穴P21、281は主軸間柱穴P33、298は対角柱穴P44、293はカマド南、296・300は南壁中央土壇D21東、293はM14北の南群、301は同北群から出土。いずれも、各柱穴・カマド・D21・西壁寄りM14北の、機能を考慮しての再配置である。

硬質竹管文土器（巻頭図版1・2、図版174、第53図、表35）

315は、口径8.7cm・頸部最小径4.25cm・胴部最大径13.3cm・器高12.5cmを測る。

胎土は、黒色微粒・白色粒を多く含むと共に、0.1～0.5cm大の砂も若干含む。

焼成は良く、口縁部内面と胴部外面上半に薄い自然灰釉が生じ、その色調は 100 にぶ黄色 2.5Y7.0/7.5（所謂、灰黄色）を呈す。

器表面の色調は、器内外共に 113 暗いオリーブ灰色 5.0Y 3.5/0.5（同、暗青灰褐色）、底部器外はわずかに焼成が悪くて31 灰味赤茶色 8.5R 4.5/4.5（同、淡赤茶灰色）を呈す。

器内の調整は、端部下2.5cm（口縁部）までにヨコナデ、同2.5～4.4cm間（頸部）にヨコナデ後にナデ、同4.4～5.1cm間（肩部）に指ナデ、同5.1～5.9cm間（胴上位）に指押え、同5.9～10.9cm間（胴中位～下位）にヨコナデ、同10.9～6.8cm間（底部）にナデを施す。

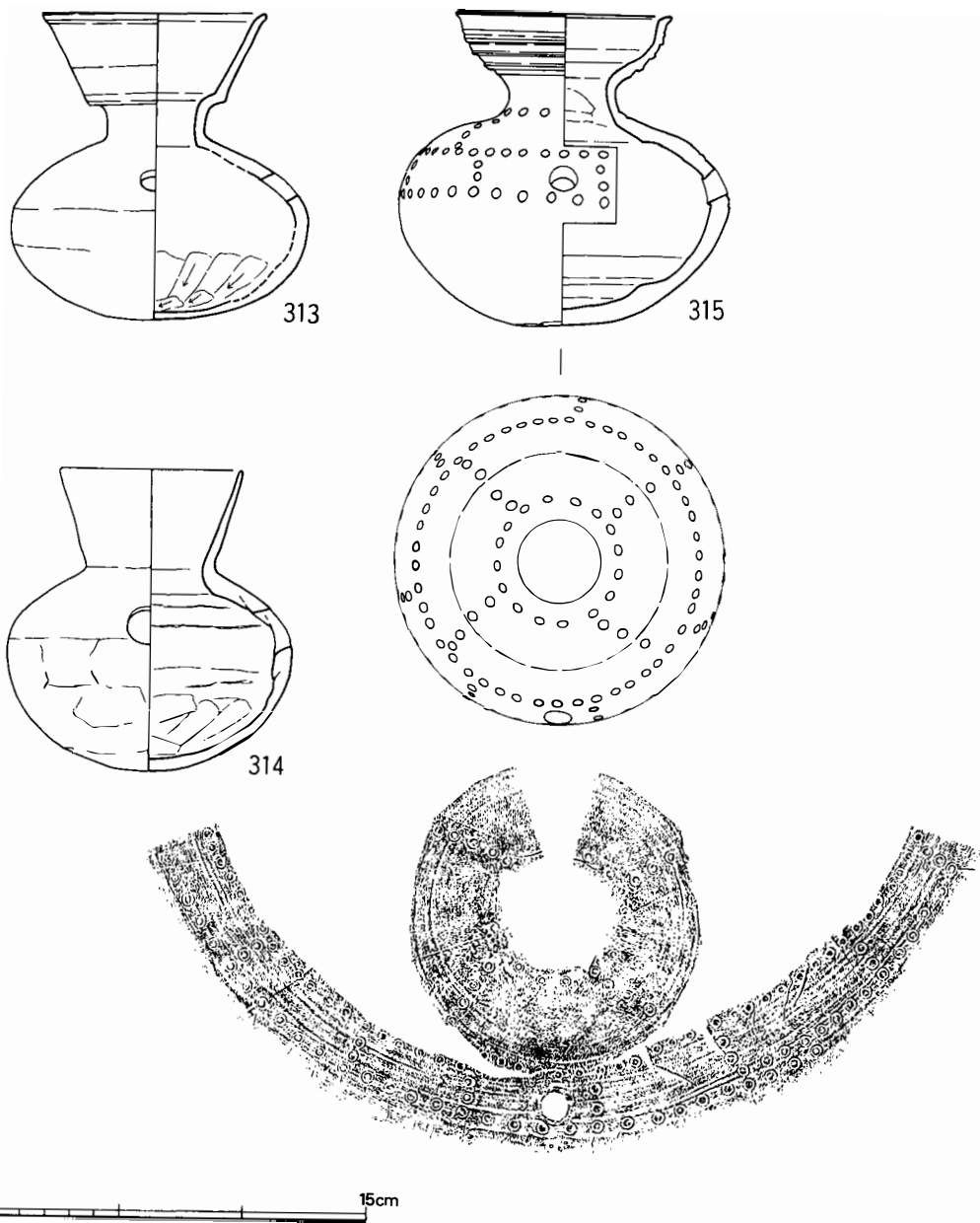
器外の調整は、端部下4.3cm（口・頸・肩部）までにヨコナデ、同4.3～7.7cm間（胴上位～最大径位）にカキ目状のヨコナデ、同7.7～12.3cm間（胴下半）に横方向ナデに近い雑なヨコナデを施し、同12.3～12.5cm間（底部）は不定方向に軽くヘラ削りするが、明瞭な削り面の稜は有さない。

以上のように、器内外の調整は丁寧で、丸底を呈すが、図に示した状態で正立し、口縁端部上面での水平差はわずか0.1cmしかない。

穿孔は、胴部最大径位直上に、竹管文以前に施す。

口縁部の器外は、ヨコナデによって3条の断面三角状凸帯を造作するが、シャープな稜を有し、その間隔・形状に差位がない。

頸肩部の屈折部から胴部最大径部にかけての器外は、外径0.4～0.45cmの竹管文を配すが、径



第 53 図 9号住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)

の差位は刺突の深度差によるもので、同一原体を使用したものである。0.4cm例では深さ約0.1cm, 0.45cmでは同約0.15cmを測る。

以下、上述の竹管文の観察をA～E列と仮称して説明する。

A列は、穿孔部直上に横列するものである。孔中軸上の1個と左・右の1個ずつのみが浅く、それ以外は深い。このことから、中軸上の1個を孔を配慮して当初に配し、つぎに左・右と配

し、この3個を例として以下を配したものであろう。

B列は、頸肩部に横列するものである。孔中軸上の1個のみが丁寧で深い。このことから、中軸上の1個を孔を配慮して当初に配し、次に右方向へ順次配したものであろう。

C列は、穿孔部直下に横列するものである。孔中軸を界しての左・右の1個ずつと他とは深さに差がないことと、拓図に示すように、一部では横列が二段に施されている部位があることから、この部位の上位の1個から右方向に順次配し、孔部に至って孔を配慮して、孔下に前述の2個を配して帰周した結果、段差が生じたためにそのまま下段に重複して4個までを配したものであろう。

D列は、A・B列間に縦列するものである。平面プランに図示したように、器周を整然と4分割し、孔から等分の距離に位置するのは、孔側でA列に近接した下位のもの左・右の1個のみである。しかし、中軸左の2例は4孔を配すが下位の1個とA列の1個との間隔が他と不等分で、中軸右の2例は3孔を配してA列の1個との間隔も他と等分である。

このことから、孔を配慮して中軸左の孔側でA列上に1個を配して、上方のB列方向へと配し、中軸右で孔後に、次に中軸左で孔後に、最後に中軸左で孔前に帰結したもので、この移動の間で3個縦列が4個縦列へと乱れたものであろう。

E列は、A・C列間に縦列するものである。D列4例のほぼ中間に配された3例の他に、D列4例のほぼ直下近くに配された4例の計7例が配されているが整然とした7分割ではない。このことから、孔右列をaとし以下逆時計回りにb～gとすれば、当初はD列の中間に配することとしてd→f→aを配し、次にはD列下に配することとしてc→eを配し、最後にこの間を等分すべくb→gと帰結したものであろう。

ところで、玉葱形の胴部から頸部は内傾し、口縁下半は大きく内湾し、口縁上半はわずかに外傾気味に直立し、端部上面はほぼ平坦で、外面は突出するが、以上説明してきた器制に加えて、胎土に赤褐色粒を含まないことなどからも、須恵器ではなく外来土器と言える。

甕(313～315) 313は、口径9.1cm・頸部最小径4.0cm・胴部最大径12.0cm・器高12.2cmを測る。胴部の器内は、中位までをナデ、下位から底部をヘラ削りする。頸部の器内は、横方向のナデを施す。口縁部から頸部器外まではヨコナデ、胴上位は横方向ナデ、最大径部から底部にかけてはヘラ削り後ナデを施す。なお、最大径部にわずかな稜を有すが、これは胴上・下半の接合部を示すものであろう。ヨコナデ・ナデ・ヘラ削りは、いずれも丁寧である。なお、器内の胴下半に、焼成前穿孔の残土が付着する。

胴部は玉葱状を呈し 頸部はわずかに外傾するがほぼ直立気味で、下半の口縁部は外反、上半の口縁部は直線的に大きく外傾、端部は更に外傾。この特徴は、所謂、二重口縁の壺と類似する点も多い。しかし、壺285～287で既述したように、285～287は、既にその器形の残影をわずかに認めるだけのものであることから、後述する、外来土器315との関係に留意すべきである。313と315とは、胴部の形が類似するだけでなく、法量までが著しく類似することから、口縁部～頸部の形状も、315からの影響を指摘すべきで、315の器形を模した土師器と言える。加えて、

315そのものを模した可能性が強い。ヘラ研磨の有無は、磨滅が著しくて不明であるが、胴部器外の最大径位下に径2.5×3.0cmの赤褐色斑を1ヶ所認める。

314は、口径7.4cm・頸部径5.2cm・胴部最大径11.5cm・器高12.1cmを測る。胴部の器内はヘラ削りを施すが、上半は胎土接合痕を明瞭に残す。器外は、上位にナデ、中位から底部までにヘラ削り後にナデを施す。口縁部は丁寧なヨコナデを施す。胴部からシャープに屈折した口縁部は、直線的に外傾し、端部は丸く、器壁は著しく薄手。穿孔は焼成前に施されたもので、孔を有すことから甗としたが、それ以外の器形は埴。

ところで、313・314は後述する315の出土から、314は須恵器製作の技法で・314は土師器製作の技法で、それぞれ製作されたものと言える。

この三者の同一住居内からの出土した点は重要であり、既に須恵器製産が開始されていたことの証差となる。

なお、この三者は、313が西壁寄りのM14北の南群で完形で、315が同北群で完形で、314が第48図A-B断面に示すように破碎されてそれぞれ出土している(図版59-1~60, 61-1~62, 56-2)。いずれも、三者の入手~使用~遺棄に至るまでの当時の人々の思慮が顕著に示された再配置と言える。この、入手~再配置に至るまでの器種・器形に対する思慮を、器制と呼んで、11号住居で後述する。

杯 (302~309) 302は、体部の器内が丁寧なナデ、器外がヘラ削り後を丁寧にナデ。

303は、体部の器内はヘラナデ後に丁寧なヨコナデ、器外下半はヘラ削り。

304は、体部器内のヘラナデが丁寧で、器外ヘラ削りは下位のみ・他はヨコナデ。

306は、口径14.0cm・器高約4.2cmを測る。

309は、体部に器内外共にヨコナデ・ナデ・横方向ナデを施すが、ハケ目を一部に残す。ヘラ削りは底部器外にのみ施して平底とし、雑なナデ後にハケ目。

その他の杯も含めて、いずれもヘラ削りは体部下位あるいは底部のみに施すという特徴有り。

また、302・308・309は、いずれも破片で、意識的破碎後に再配置されたものである。

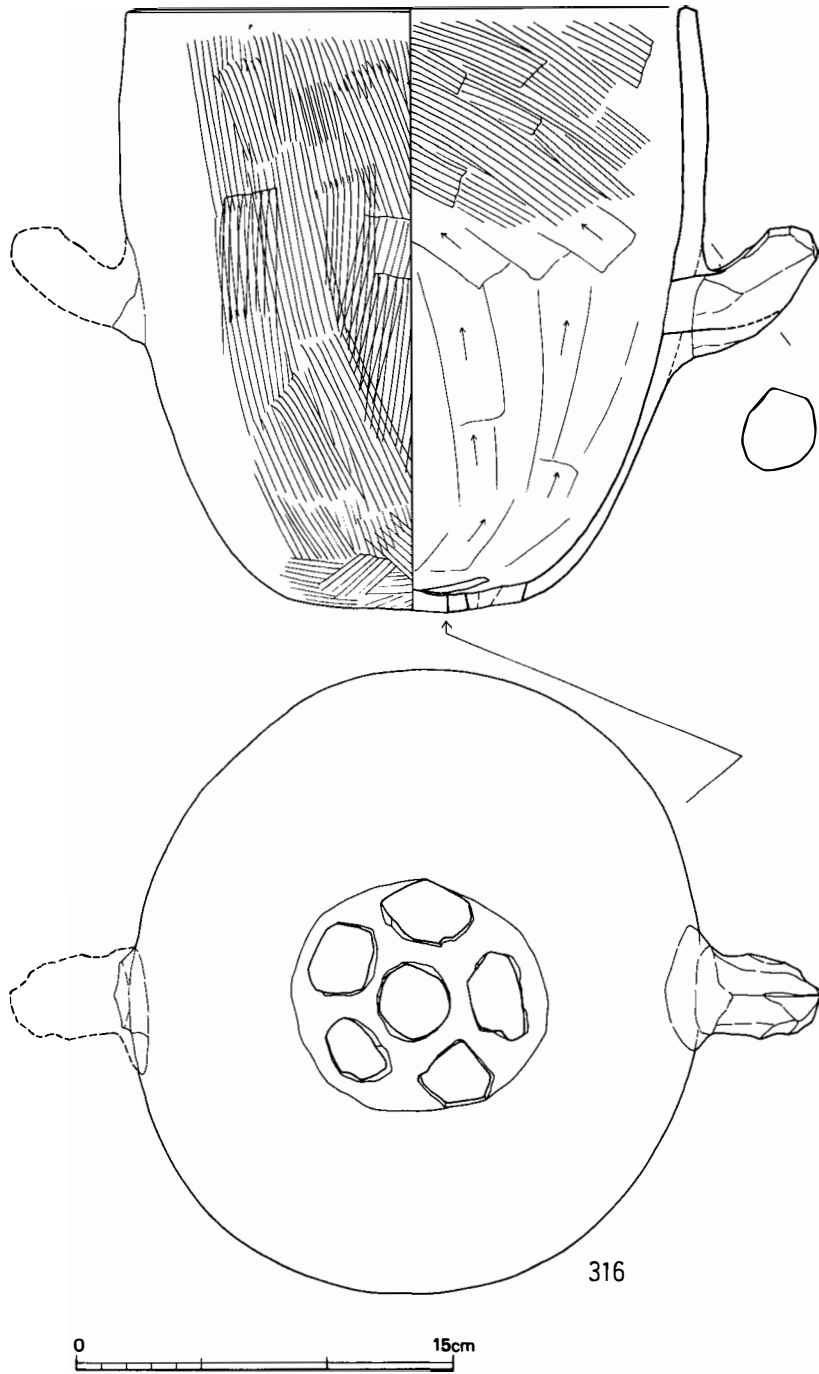
鉢 (310) 体部の器内はハケ目後をヘラ削りし、器外はヘラ削り後にハケ目。器内外からのヘラ削りにより、器壁は薄手。杯の309も、この技法に左右されたものであろう。

なお、310はカマド内(体部器周残1/8)とカマド東で東壁寄りのNo.23(口縁~体部同3/8)が接合し、器周残1/2強まで復原。意識的に破碎され、両者に分けて再配置されたものである。

甗 (316~319) 316は、口径22.7~25.1cm、体部最大径23.4~24.6cm・器高24.1cmを測る。器内の上半はハケ目のままで、下半をヘラ削りし、器壁を著しく薄手に調整。器外は、ハケ目のままで、底部は不定方向ハケ目で体部との稜を有し、平底気味に調整。孔は6孔を穿ち、当初の中心部孔は円形に近いが、次の周辺部孔を穿つ際は、5個配列を考慮しつつ穿孔したためか、多角形状。口縁部から胴下半にかけて、器外に大きな焼成時の黒斑が2個対峙し、把手下面にのみ煤が付着。

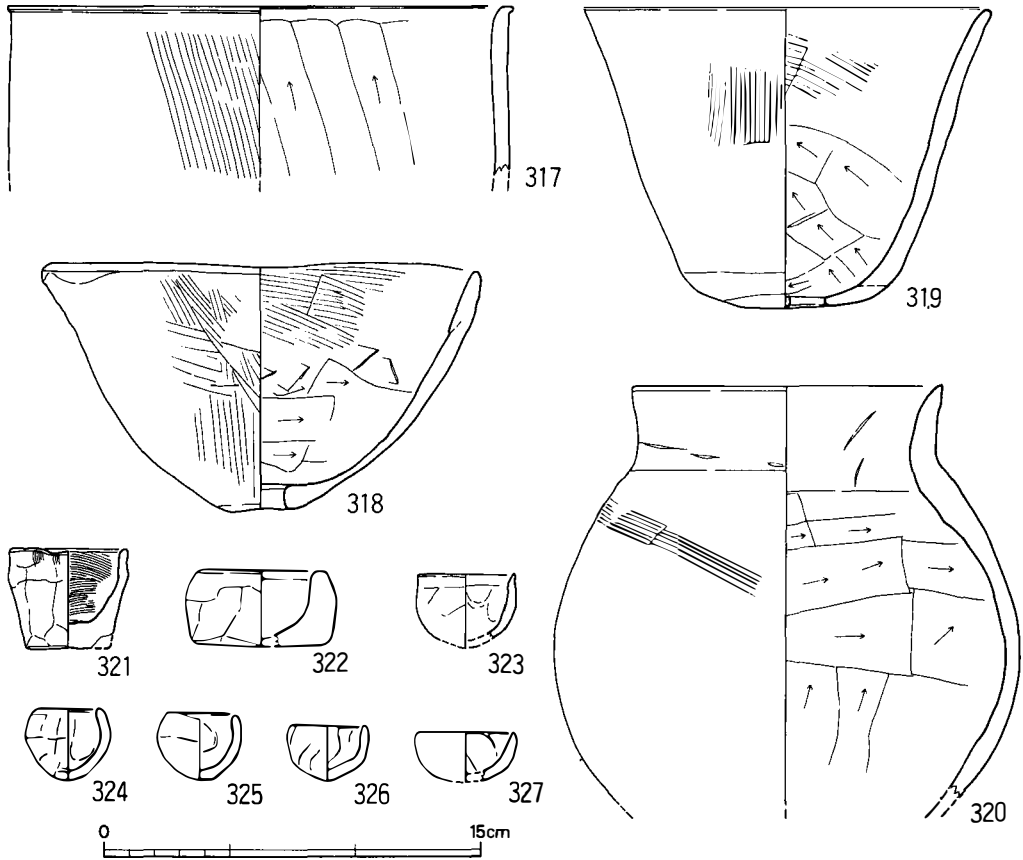
317は、口径40.0cmを測り、器内のヘラ削りのままで、端部のみをヨコナデする。

318は、器内は口縁部はハケ目だけで、以下をヘラ削りし、ヘラ削り後に端部から3.0~5.0cm



第 54 図 9号住居跡出土土器実測図⑥ (1/3)

間を更にヘラナデし、底部はナデ。器外は、口縁端部をヨコナデ、体部下位をハケ目後にナデる。穿孔は焼成前に1孔を施すが、円形を呈さず、やや丸味のある正六角形状となっている。



第 55 図 9号住居跡出土土器実測図⑦ (1/3)

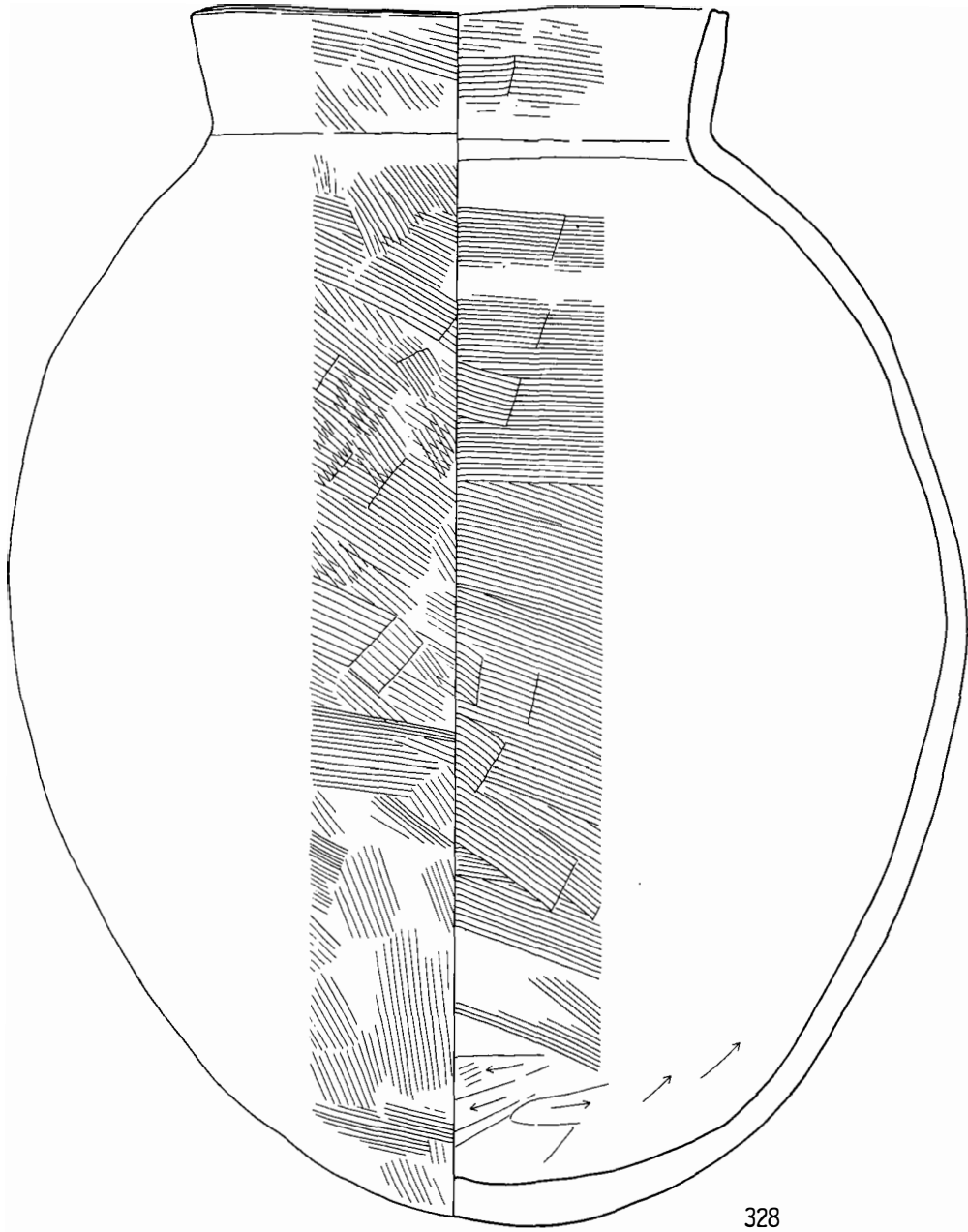
319は、器内は下半に浅いへら削り、器外は下半にナデ。底部の胎土接合痕を残したまま。焼成前に1孔を穿つが、底部中心から大きくズれる。胴下半には、焼成前のヒビ割れが器外に多く生じているが、器内にまでは及ばぬ。

以上のなかで、316はカマド西焼土残滓上・318は南壁土塚D21東・317は西壁寄りM14北の北群から、把手1個欠損・完形・略完形(破碎)された状態で出土しており、いずれも器形が異なり、後者は古い器形をとるもの。3例共に、意識的再配置がなされている。

手捏土器(321~327)壺(324・325)、甕(324)、杯(327)、甌(321・322・326)と、ほぼミニチュアの器種が出土しており、高杯・甌を欠く。甌を欠くことは、既述の甌が高杯と共に、日常的な祭器として思慮されていたことによるものであるか。

なお、カマド西から一括して出土したミニチュアは、図示できぬ破片が他に4個体分あるが、324~327で大半の器種が認められ、第48図に示すように積み上げた状態で出土したものもある(図版54-2)。いずれも、意識的な再配置と言えよう。

以上のなかで、意識的に再配置されたものとして説明した土器については、いずれも一括資料と言え、住居破棄時およびわずかに埋土が流入した段階の土器群で、住居の時期を知る好資



第 56 図 9号住居跡出土土器実測図⑧ (1/3)

料である(再配置が、数次にわたることも検討しなければならないが、残余頁数がなく、省略)。

10号住居跡 (図版65～67-1, 第57図, 表15)

1979年9月～12月にかけての、塚堂古墳前方部周溝調査の際、古墳東側(D地区)設定の遺構確認トレンチで確認。塚堂遺跡発見・調査の端緒となった住居。今度報告するD地区中央部に相当。住居の南西隅壁が、4号溝状遺構を切る(図版9)。

P11～14・61・62, D11・21・22を検出。

主柱穴配置は、柱列を南・東壁寄りに設け、残存壁高が5cm前後であることから、検出床面は、中央部の低床面部の方であって、南側の一段高いベッド状遺構部が削平されたものかも知れぬ。あるいは東側も同様に削平されたものか。

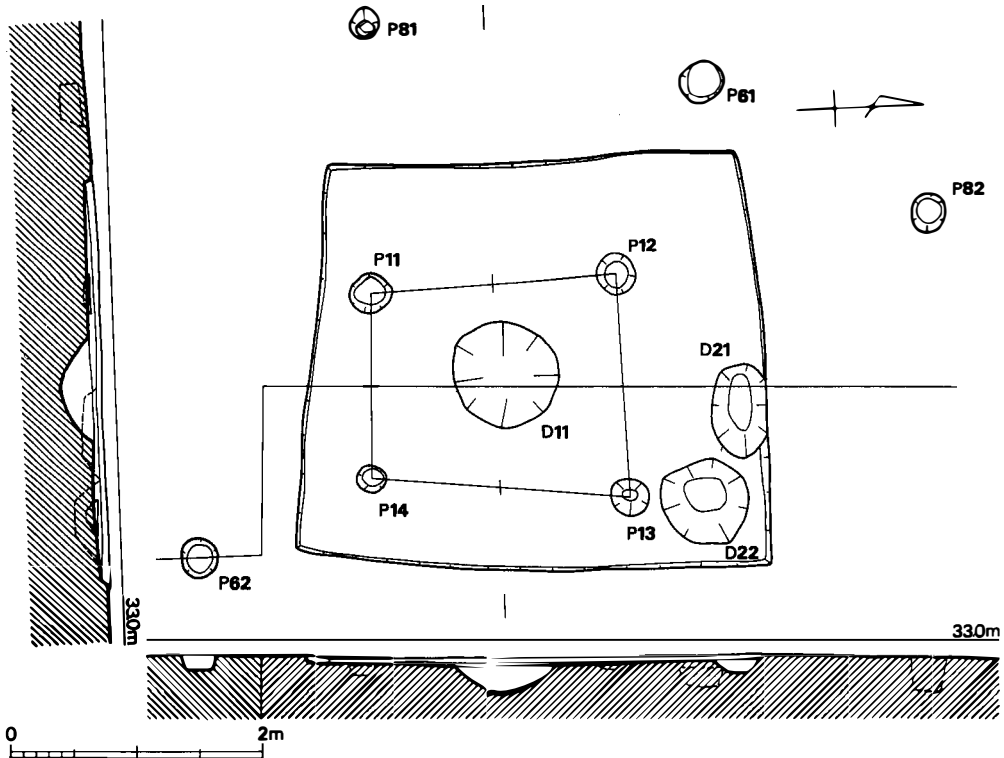
施設柱配置は、北壁延長線上の西側でP61が・西壁延長線上の南側でP62を検出。表15に示すように、P61-南北O間とP62-東西O間は共に2.40mで一致。P81・82もほぼ壁延長線上に位置するので、あるいは住居に伴うものか。

中央土壇配置は、主柱穴配置同様に床中央から南・東壁に若干片寄り、D21同様に主軸下。

壁土壇は、北壁に接してD21が・東壁に接してD22を配し、後者は東側柱列方向下。

C地区4号住居でも、2基の壁中央土壇を検出しているが、この例では2個の主軸柱も検出し、明らかに改築された際に新たに壁土壇が設けられたことが確認されている。

しかし、10号住居では、主柱穴・土壇の埋土に差位は認めぬから、当初から2基設けたものか。



第57図 10号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物（図版176～179，第58～61図，表35）

図版65・66に示すように，住居中央部の床面から多くの土器が出土。これを表35の出土位置の項では一括と表記。

壺（329～336・356・358） 329は，無頸の壺。器内の上半は，ナデ後に一部をヘラナデ様に削り，下半はナデ。器外の上半はハケ目を残すがナデ・下半はヘラナデ。胴上半はわずかに内反するが，口縁部までほぼ直線的で，端部はやや丸味のある平坦面有り。胴中位で，上半と稜を有して屈曲した下半は，やや内弯し，平底気味の底部に至る。

330は，器内が，頸部を縦指先ナデ・肩部を横方向ヘラナデ・胴上位以下を縦方向ヘラナデ。器外は，胴部上半がハケ目のまま・下半はヘラナデ。頸肩部の突帯が1条であることから，第130図714のような長頸壺よりも，むしろ袋状口縁壺であろう。

331・332は共に，広口の壺。口縁部は外反し，端部は稜を有し，上面は凹む。

333は，頸肩部と胴中位に突帯を付す。頸部の突帯は，顕著なものではなく低く，胴部の突帯も，断面コの字状を呈するが，ヨコナデ・刻み目が粗雑。器内はハケ目のままであるが，ハケ目に二者を使用。新しく施した最上位・中位・最下位のハケ目の方が荒い。器外は，胴最下位と底部にナデを施し，ほぼ平底気味に調整。

335は，器内に幅広の条痕・ヘラナデ痕。器外の胴最下位から底部はナデ。平底に調整。

336は，器形の歪みが顕著。胴部の器内は，中位までをヘラナデ，最下位はハケ目のまま，底部はナデ。器外は，ナデを施すが，一部ハケ目を残す。球形に近い胴部から，やや外傾した口縁部は短く，厚手の平底。

334は，甕とするより336に類似するものか。

甕（337～342・355・357・359・343～350）

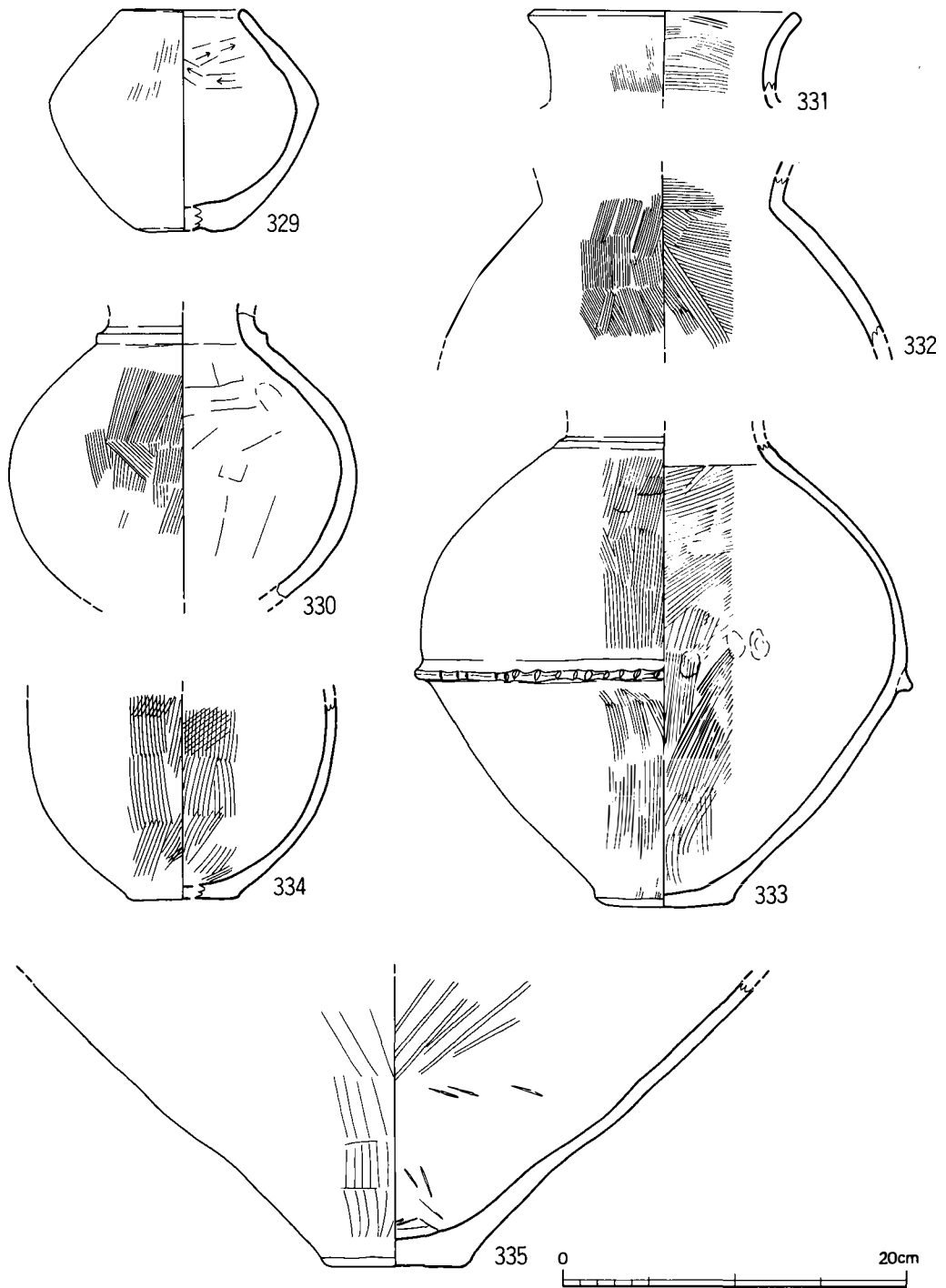
出土量が多く，以下の説明では仮に，法量差でⅠ（小形）・Ⅱ（中形）・Ⅲ（大形）に区分し，口径と胴部最大径の比較で1（胴部最大径が口径に比べて著しく大きい）・2（胴部最大径が口径より小さいか，わずかに大きい）の二者に，口縁部の特徴でa（外傾する）・b（大きく外傾する）・c（外反する）の三者に分類。後三者は端部がシャープで稜を有すもので，その他に端部が丸味を呈するa'～c'がある。

Ⅰ－1 a'は339で，口径13.0cm・胴部最大口径16.9cm。小形。胴部最大径の方が口径より大きく・外傾する口縁部の端部は丸い。口頸部の屈折稜も，器外では明瞭ではない。

Ⅰ－2 a'は341で，口径15.8cm・胴部最大径16.4cm。小形。胴部最大径が口径よりわずかに大きく・外傾する口縁端部は丸い。口頸部の屈折稜も，器外では認めぬ。胴部器内は，ヘラナデ様のナデ。口頸部の屈折稜は，器外では明瞭でない。

Ⅰ－2 c'は340で，口径17.1cm・胴部最大径16.5cm・器高14.0cm。小形。胴部最大径が口径よりわずかに小さく・外反する口縁部の端部は丸い。口頸部の屈折稜も，器外では認めず。器内は，胴部に丁寧なヘラナデ，底部にナデ。器外は，胴部最下位にヘラ削り，底部にナデを丁寧に施し，平底と胴部の屈折稜はシャープ。口頸部の屈折稜は，器外では明瞭でない。

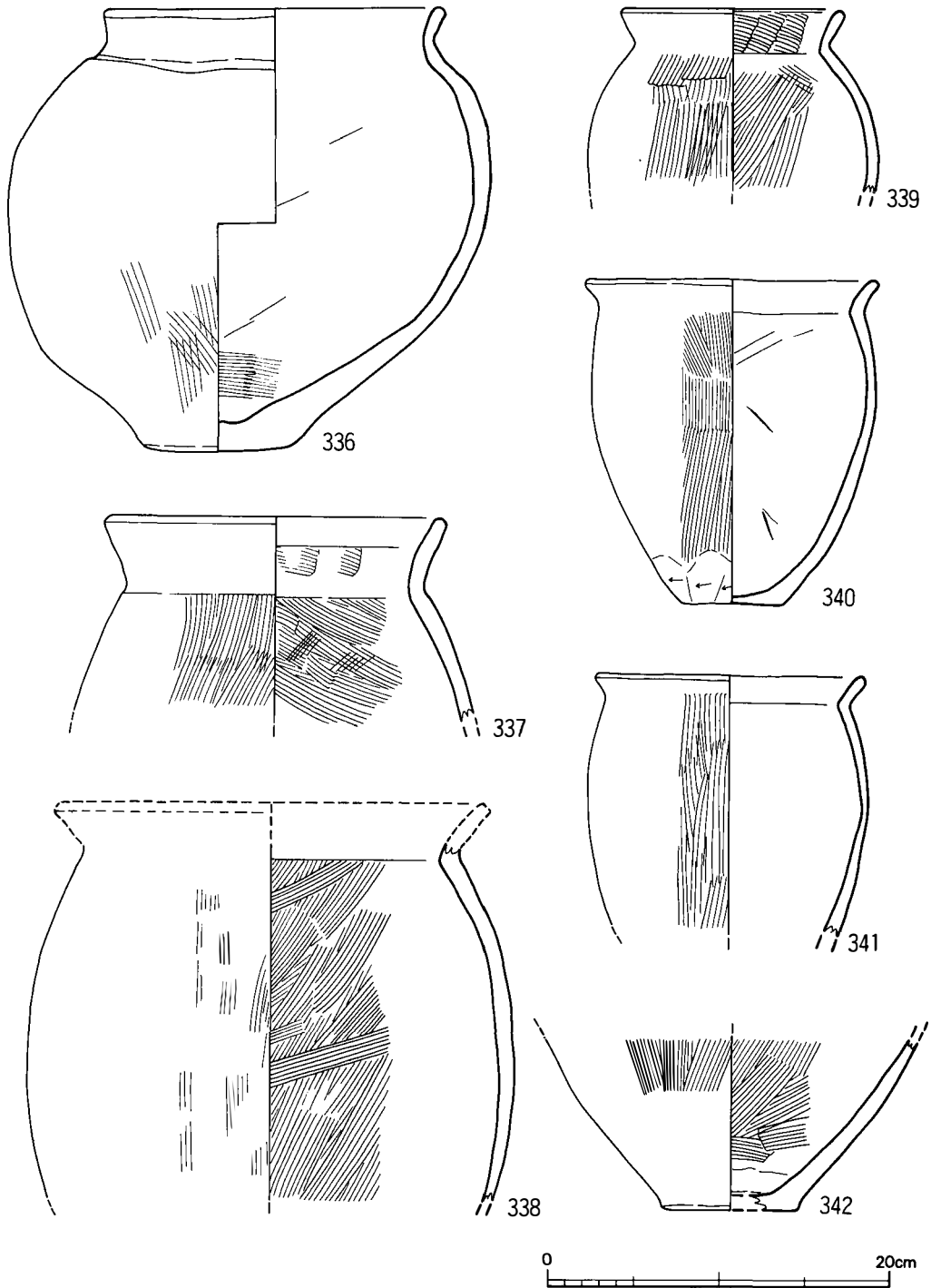
Ⅱ－1 aは337で，口径20.0cm・胴部最大径約24.2cm。中形。胴部最大径が口径より大きく・



第 58 図 10号住居跡出土土器実測図① (1/4)

外傾する口縁部の端部はシャープ。頸肩部の器外の屈折稜も、シャープ。

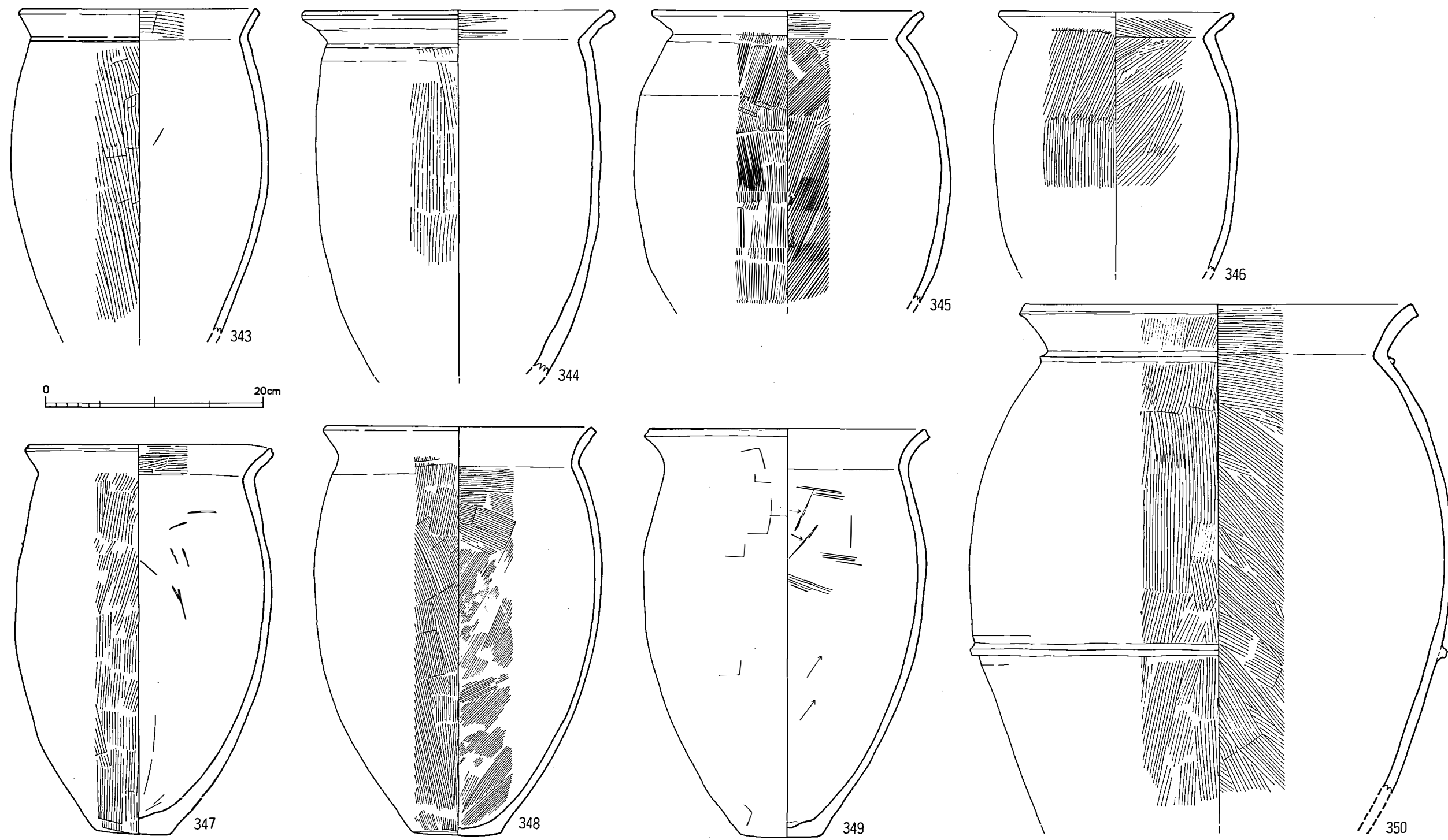
II-1 b は345で、口径24.7cm・胴部最大径28.9cm。中形。胴部最大径が口径より大きく・大



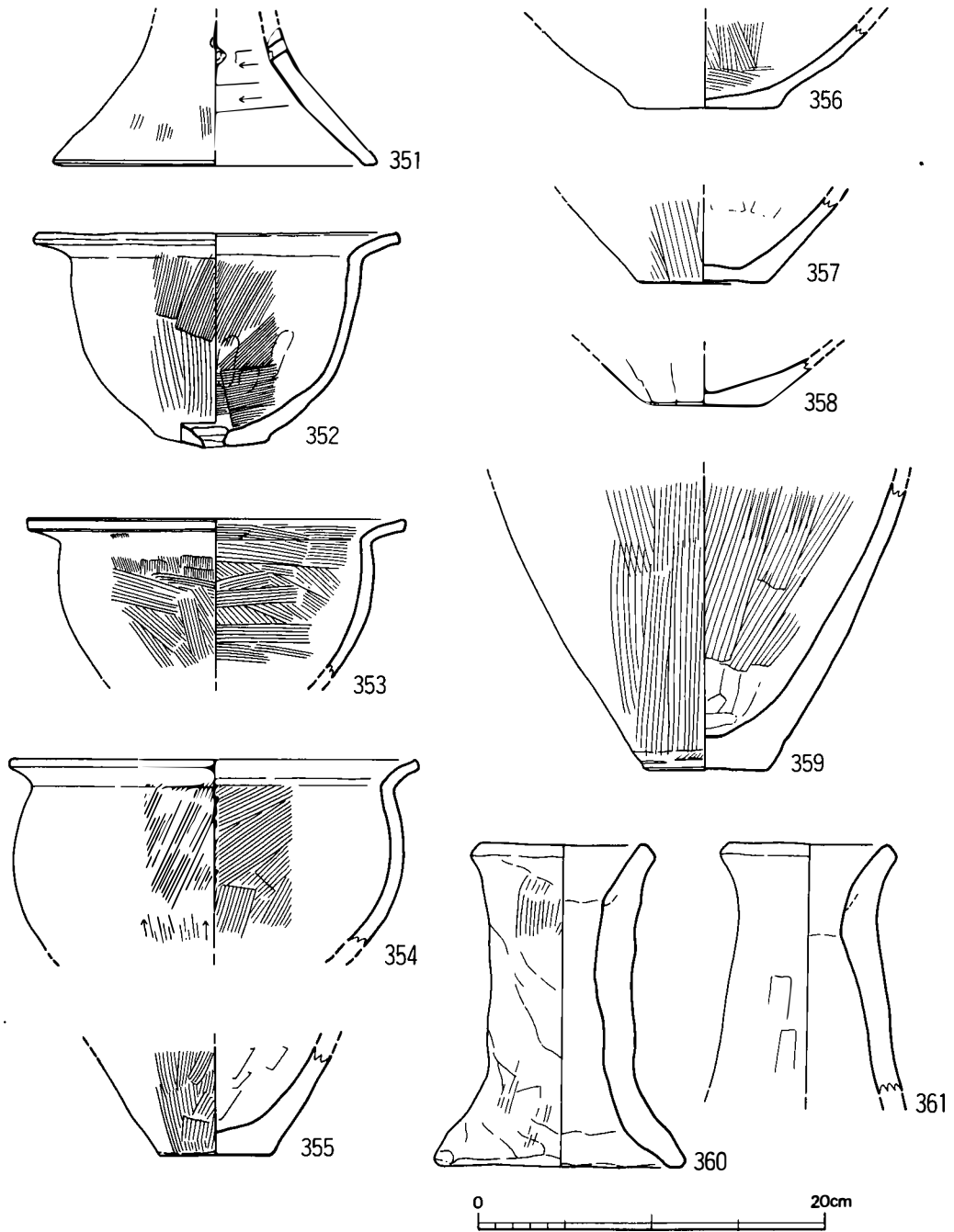
第 59 図 10号住居跡出土土器実測図② (1/4)

きく外傾する口縁部の端部はシャープ。頸部の屈折稜も，器内外共にシャープ。

II-2 a は343で，口径22.0cm・胴部最大径23.4cm。中形。胴部最大径が口径よりわずかに大



第 60 图 10号住居跡出土土器実測図③ (1/4)



第 61 図 10号住居跡出土土器実測図④ (1/4)

きく・外傾する口縁部の端部はシャープで、頸部の器内外の屈折稜も明瞭。なお、肩部器外の沈線はヨコナデによって生じたもの。胴部器内は丁寧なヘラ削り。一括出土のNo.6(胴部片)・No.7(口縁部片)・No.14(胴下半片)が接合し、上半器周残1/4・下半同1/2まで復原し得た。

II-2 bは、あるいは338か。

II-2 b'は344・346で、344は口径28.5cm・胴部最大径26.0cm。中形。胴部最大径が口径より小さく・大きく外傾する口縁部の端部は丸い。しかし、頸部の器内外の屈折稜は、明瞭。胴部器内は磨滅のため不明瞭であるが、346ではハケ目のまま。

II-2 c類は347~349で、347は口径22.8cm・胴部最大径23.4cm・器高35.7cm、348は口径25.0cm・胴部最大径26.3cm・器高37.4cm、349は口径26.0cm・胴部最大径25.8cm・器高37.4cm。中形。胴部最大径が口径よりわずかに大きいか小さく、外反する口縁部の端部はシャープで上面が凹む。しかし、頸部器外の屈折稜は、明瞭でない。胴部は、348では器内外共にハケ目、347では器内のみ丁寧なヘラナデ。349では器内外共にナデ・ヘラナデ。調整は多様。底部はいずれもナデを施し、平底に近い。

III-2 cは350で、口径36.4cm・胴部最大径44.3cm。大形。胴部最大径が口径よりやや大きく・外反する口縁部の端部はシャープ。頸肩部と胴部最大径より下位で胴部中位に、シャープな稜の突帯を付す。

以下の甕の説明は、省略。図参照。

高杯 (351) 器内の上半は穿孔後にヘラ削りを施したため、孔内に削りの残余胎土が付着し、通孔が不完全となっている。下半はヨコナデ。器外は、縦方向ヘラナデと思われるが、ハケ目を一部残す。器周残1/4弱の破片のため、穿孔数は不明。

鉢 (352・354) 353は、体部上位は直線的に立ち上がるが、354は内弯。

支脚 (360・361) 360は、器内外共にナデを施す。

11号A(新)・B(古)住居跡 (図版67-1~80~1, 第62図, 表16)

調査区北西隅部で検出。北壁中央やや西寄りに、北向きのカマド付設。弥生時代の10号円形周溝→19号住居→5号溝状遺構→古墳時代の11号住居→歴史時代の北西壁隅土壇の順に新しい(図版21)。

住居内からは、多量の遺物が炭化材と共に出土したが、遺物の再配置と火放ちについては後述。

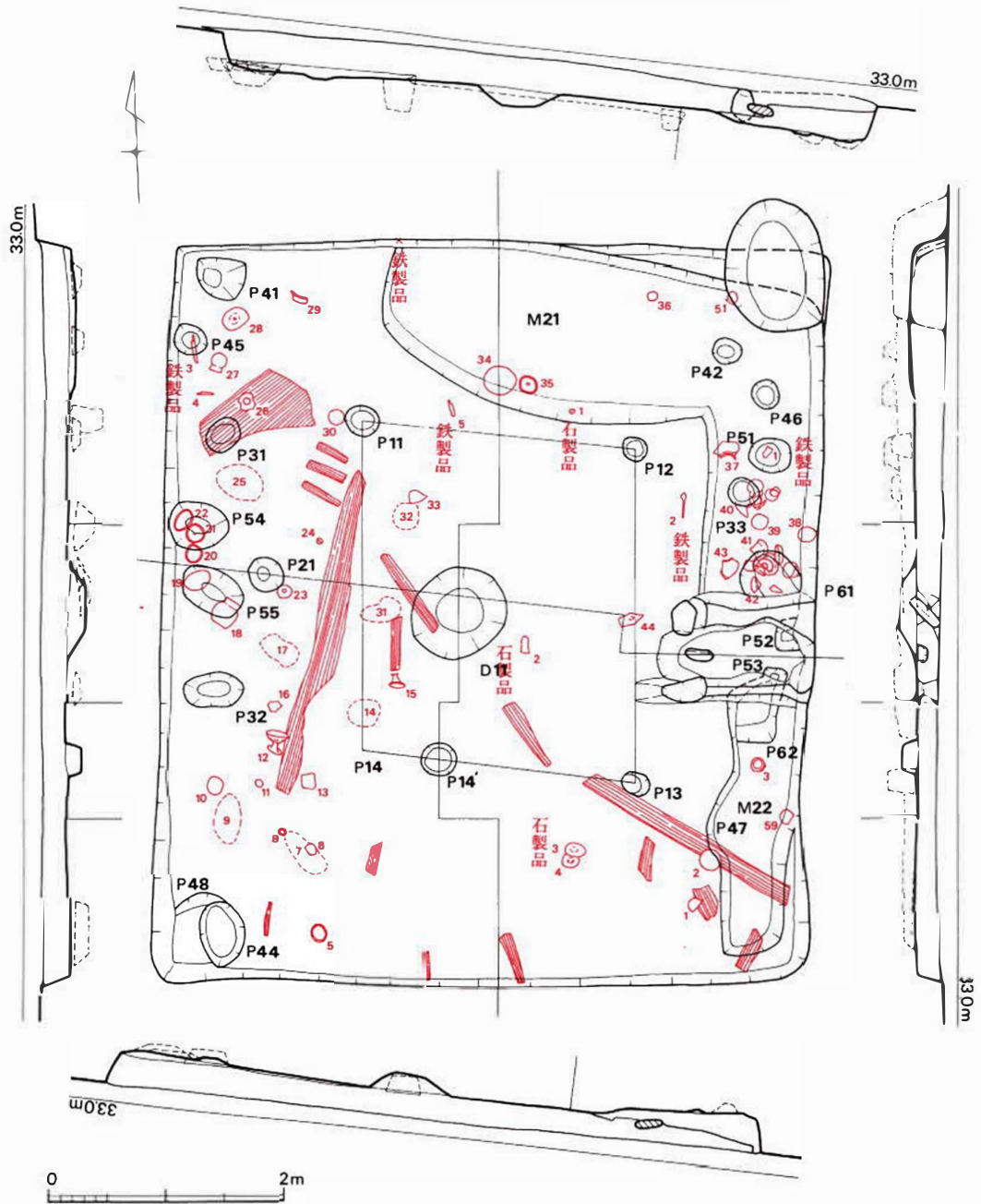
なお、他のカマド付設住居例と異なって、床中央部に炉を併設し、カマド下からも壁柱穴が検出されたことなどから、この住居は重複して改築されたものと判断。新期のものを11号A住居(以下11A住と略)、古期のものを11号B住居(同11B住と略)と区別。

住居内からは、P11~13・14'・21・31~33・41・42・44~48・51~55・61・62, およびD11, M21・22を検出。

主柱穴配置は、東柱列間が他の柱列間に比べて著しく小さい。しかし、P21の検出から、本来配されるべき柱穴をP14, 実際に設けられた柱穴をP14'として、P14の位置を図上推定。

P11-12・P13-14'と西壁方向、P12-13と北壁・南壁方向はそれぞれほぼ一致することから、P12-13にP11-14はほぼ平行で、P14はP13-14'柱列上にあるものと推定。

このとき、P12-13間とP11-14間の中軸線はP21の中心を通り、P11-12・P14-13間は2.36mで、一致。また、P11-14間は2.84m・P12-13間は2.89mで、ほぼ一致するに等しい。



第 62 図 11号 A・B住居跡実測図 (1/60)

以上のことから、P11~14の配置を当初から整然と計画しつつも、敢えてP14を配さず、P14'を支柱穴として設けたと判断。また、P11~13・14'は重複しないことから、17B住のものを17A住でもそのまま再使用したのとも判断。なお、P14とP14'については後で今少し説明。

主軸柱穴・主軸間柱穴は、南壁側でP21・31・32が、北壁側でP33を検出。主軸間柱穴間で検出した壁柱穴は、南壁側ではP54・55、北壁側ではカマド下からP52・53がある。P21・31・32・54・55が整然と配されており、17A住に属するものと判断。17B住でも整然と配されていたものと考えられ、P33・52・53と共に北壁側に主軸柱穴P21・主軸間柱穴P34も設けられていたものが、カマド構築によってP21は削平されたものであろう。P34は確認されていない。

対角柱穴配置は、P41がP11・13の対角線下で、P42・44がP12・P14の対角線下に有り。P43は北東隅部に配されていたと考えられるが、M12東端との区別ができなかった。P45～47は第2図の柱穴名称に従えば壁柱穴としてもよいが、P41にP45が、P42にP46が近接すること、住居に改築が認められることから、対角柱穴とし、P41～44が11A住に、P45～48が17B柱に属するものと一応判断。

壁柱穴は、P52～55以外に、P51が西側柱列に一致して配されている。

施設柱穴は、カマド袖に接して、P61・62が配されており、煙出施設などに関しての11A住に属するものと考えられるが、P62の一部は東袖下に及ぶことから、あるいはP61と共に11B住に属するものか。

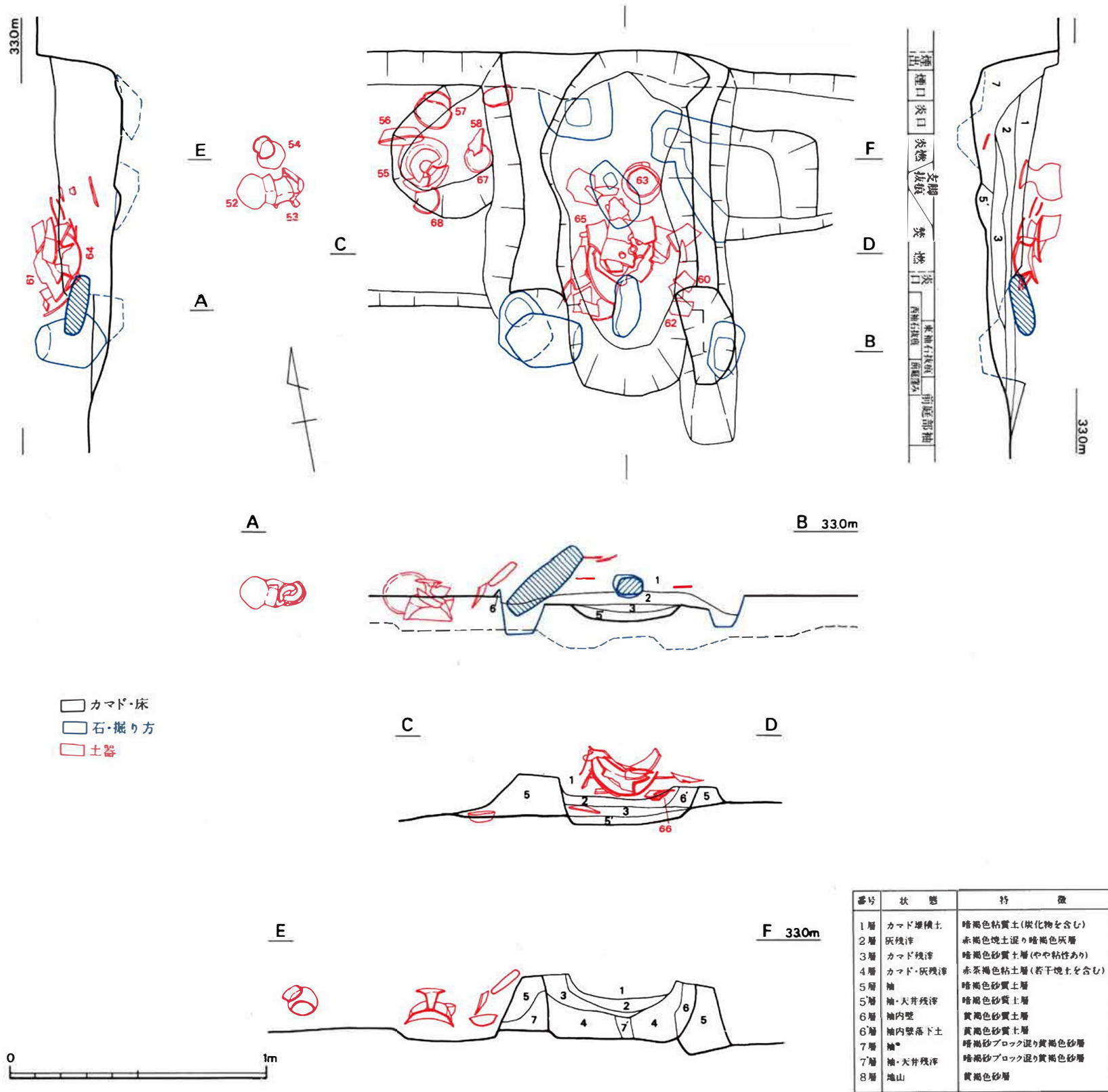
中央土壇配置は、南北O下で東西Oに南接して設けられている。埋土は弥生時代の10号住居等の中央土壇と同様に黒灰色の灰層で、焼土をあまり含まず、壁も著しい熱変焼土化していない。また、灰層上面中央部は、周辺の床面レベルより若干低くて凹んでいたが、灰層上位の埋土は床面埋土と同じもので、埋めもどされた状態ではない。したがって、D11は炉として、カマドと共に併用されたものであることは明らかだが、他のカマド付設の住居での、中央土壇の出土例はない。このことから、D11は11B住で配されたものであるが、11A住でカマドが配されても、炉として共に使用されたものと判断。

溝状遺構配置は、西壁側でM21が、北壁側でM22を設けているが、所謂、壁下の周溝に比べて幅広で浅く、むしろ中央部の床が壁寄りの床よりも一段高いという状態である。なお、M21の北半部とM22の東端部では、溝壁外で住居壁が検出されており、このことから住居の改築が指摘できよう。なお、M21・22の埋土は、地山に類似し、炭化物なども含まない。溝底のヨゴレもなく、掘削直後に埋めたと判断。

南壁中央土壇D21は確認されていないが、断面図に示すようにP21以南の床面レベルは同以北のそれより若干低い。カマドを付設する住居例のなかで、13号住居のように規模の小さいものでは壁土壇を配さぬ例もあるが、15・20号住居では配されており、11号住居同様の規模の例では4・17号住居他いずれの住居でも配している。このことから、P54・55付近に11B住では壁土壇D21が配され、11A住への改築の際にP54・55で消滅したのと考えた方がよいだろう。

しかし、11B住時に配されたD21は、11A住への改築で土壇としては消滅したが、その空間への強い意識は11A住破棄時に至るまで継続したことは、遺物の出土状態から明らかに確認された。このことについては、出土遺物の項で後述する。

最後に、P14の位置に主柱穴を配さずに、P14'を設けたことは、東壁側を出入り口施設としたものか。また、M21南端が、P11-14柱列上に位置するのは、M11以南でP11-31以西の床



第 63 図 11号 A (新) 住居跡カマド実測図 (1/20)

面の機能が、他の床面とは異なっていたことを十分に示唆すると判断。

カマド (図版73-1~79, 第63図, 表16)

既述のように、住居破棄行為として住居への火放ち祭祀が行われているが、カマド内出土の甑・台付壺や東袖外出土の高杯などはこの行為に伴って配置されたもので、また、支脚・袖石の抜去は、この行為以前のカマド破棄行為に伴う祭祀によるものであることが確認されたので、このことについても説明。

前庭部 西袖からは、前庭部袖石が出土したが、袖検出上面は袖石までは至っておらず、前庭部袖石抜去痕が袖石化北側を検出。抜去痕の埋土は、カマド・住居流入堆積土の1層で、1層除去後に袖石掘り方が検出されたが、その埋土は灰残滓を主とする2層であった。この掘り方と袖石の出土位置は一致せず、袖石は著しくカマド内に傾いていることから、抜去後に再配置された袖石であることは明らか。

東袖からは袖石は出土せず、西袖石と対峙する位置で、前庭部袖石抜去痕が検出されたが、東袖はこの抜去痕南端から更に南へ19cmまで遺存。抜去痕の埋土は、西袖同様に1層で、1層除去後に袖石掘り方を検出。掘り方内の埋土も、西袖同様に2層であったが、掘り方の位置は西袖のそれに対峙せず、若しく南へズレている(図版78-2)。

ところで、調査時の両袖石抜去痕未掘の段階では、図版79-1に示した柱状の河原石(第62図, 出土番号No.3・4とNo.6の中間の河原石, 図版68-2)を両袖間の焚口室天井石と考えて、図版79-2のように示したが、袖石がやや内傾して据えられていたとしても、寸法不足で架すことが出来ないのも、むしろこの石は、袖石と考えるべきであろう。ここで訂正しておく。西袖石は、基部が突出した形状で、この石よりも幅広。このことで、先述した両袖石掘り方が、対峙する位置になく、ズレていることの問題点は解決。

なお、天井石は、図版69-1に示した左・右に割れたより大きく、扁平に近い河原石(第62図出土番号No.8南接の河原石とNo.13・14中間の河原石, 図版68-2)が考えられる。半折した天井石と東袖石を結ぶ線は正三角形をなし、出土番号No.8の土器は第66図380に示すミニチュア土器。また、東袖石出土位置は、支柱穴P14'に近い。いずれも意識的再配置と考えてよい。

前庭部の凹み南端は、両袖石掘り方南端よりも、やや南まで検出したが、既述のように、東袖が掘り方以南にまで遺存することから、前庭部は、焚口室南面に前庭部両袖石を配し、更にその南側にも、前庭部袖を東袖同様に設けていたものと考えられる。

焚口室 焚口室は、再配置された支脚北端付近~前庭部東袖石掘り方南端間で、焚口天井石を袖石に架す形式ではなく、焚口室袖は、石を使用せず5層で構築したのと考えてよい。仮りに、袖石掘り方が焚口室袖用のものとするとき、支脚掘り方~袖口掘り方南端間は75cm強を測り、支脚上位にかけられた甕などに焚口室前面から両手はとどかない。

燃烧室 室内からは抜去後に再配置された支脚と共に、474(出土番号No.60・62)・473の甑、384(同No.61・64)・367(同No.65)の甕、381の台付埴(同No.63)や379のミニチュア土器等が一括出土。このなかで、384の甕は底部の一部も出土したが復原できなかったもので、この甕に474の甑があたかもセットされていたものが共にツブレた状態で出土し、縦断土層図に示すように

甕底部下に支脚端部は至っていた。381の台付埴は水田床土直下で検出しており、口縁部の欠失は開田時の削平によるものと考えられる。

また、カマド外では西袖以西の溝状遺構上位（図版75）でも、完形を含む一群の土器が出土し、その他住居内からも図版68に示すように多くの遺物が、炭化材と共に出土。

以上の遺物のなかで、カマド内の遺物は473の甕口縁部片が7'層内で出土しただけで、他はいずれも灰残滓を主とした2層上面に接しているが、2層の下位がカマド袖・天井残滓の3・5'・7'層で、2層の上位がカマド・住居埋土（下半部層）の1層である。また、カマド外の遺物では床面出土のものは少なく、大半が住居埋土（下半部層上面）の1層出土で、炭化材と混在（図版68～71）。

以上のことから、下記の一連の祭祀行為が指摘できる。

- ①住居遺棄に伴い、支脚・前庭部両袖石を抜去（カマド機能の停止）。
- ②カマド内の灰・炭残滓の2層をカマド外に搬出（カマド内の浄化）
- ③カマド（燃烧室南半部？）の破棄（5'層の落下堆積）。
- ④同（燃烧室北半部～煙口室？）の破棄（7'層の落下堆積）。
- ⑤同（煙出部？）の破棄（3層の堆積）。
- ⑥2層をカマド内に再搬入（2層の堆積）。
- ⑦支脚・西袖石の再配置，土器群のカマド内への配置（カマド祭祀Aの終了）。
- ⑧カマド・住居の下部埋没（1層下半部の堆積）。
- ⑨東袖石・天井石の住居内への再配置（1層下半部上面～炭化材間にて出土）。
- ⑩家屋残滓への火放ち（1層下半部上位に炭化材堆積）。
- ⑪出土遺物の大半を折損・破砕。完形例と共に再配置。
- ⑫カマド西袖外に土器群配置（409高杯が伏せた状態で出土他。カマド祭祀Bの終了）。

なお、カマド主軸は前庭部袖石掘り方の中央部のそれぞれの外縁の中心と、支脚掘り方底中心間を結ぶ線を計測。

出土遺物（図版179～188・209～211，第64～75・145・146・148図，表35）

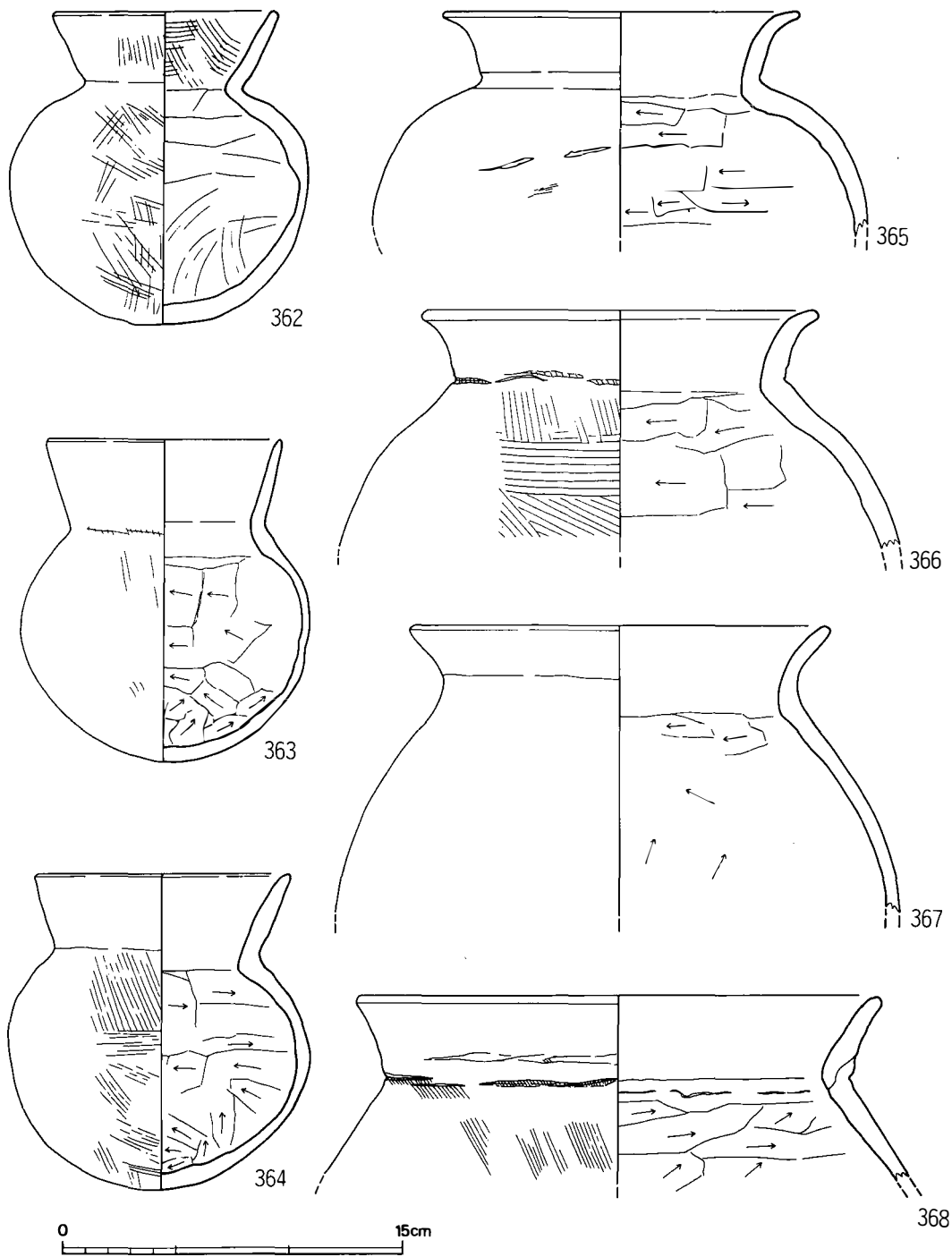
埋土の下層から床面までは、図版62に示すように炭化材と共に多量の土器が出土し、図版70～72-1に示すように鉄製品・石製品も出土。図示した遺物は、すべてこの埋土下層出土のもので、上層のものを含まない。

これらの遺物は、いずれも単に投棄されたものではなく、カマド内出土の土器を含めて、いずれも器制を意識して再配置したもの。

埴（362～364・381・382） 362と364は、脚台付埴382と共に、三者が接して出土（図版75-2左側）。363はP54西の南壁西端部で一括出土（図版70）。382はカマド内で出土（図版74）。

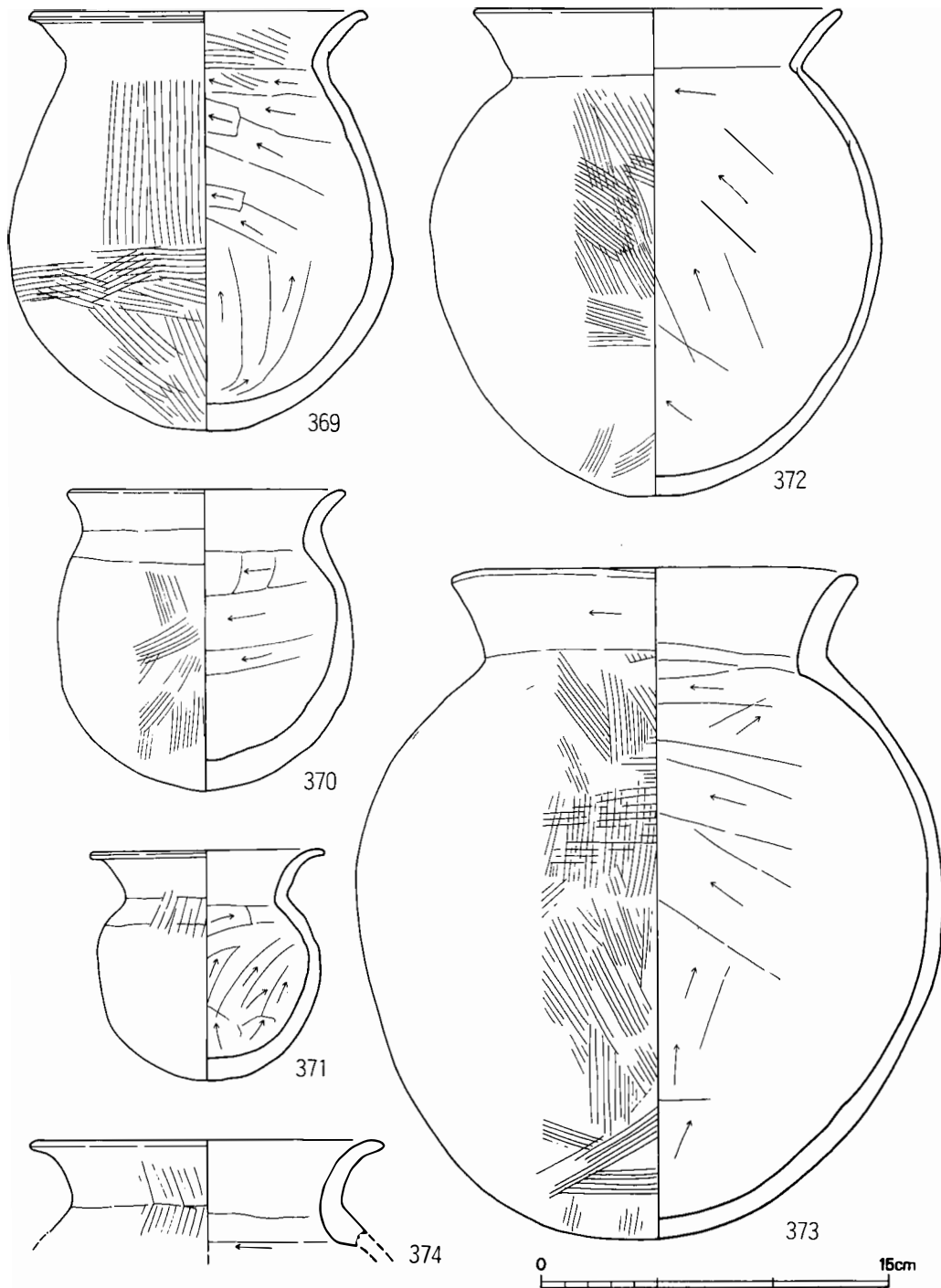
以上の土器の法量・出土状態の特徴は、各器形の特徴にも顕著に示されており、362・364は同じ器形をとり、北壁カマド西からの出であるが、363は前二者に比べて器壁が薄手で、器内頸部が外弯し、直線的な外傾度も小さく、器内外の調整も丁寧で、南壁のP54西からの出土。

また、同じ北壁側で、カマド内・外から出土した381・382は同じ器形をとると共に、362・364



第 64 図 11号住居跡出土土器実測図① (1/3)

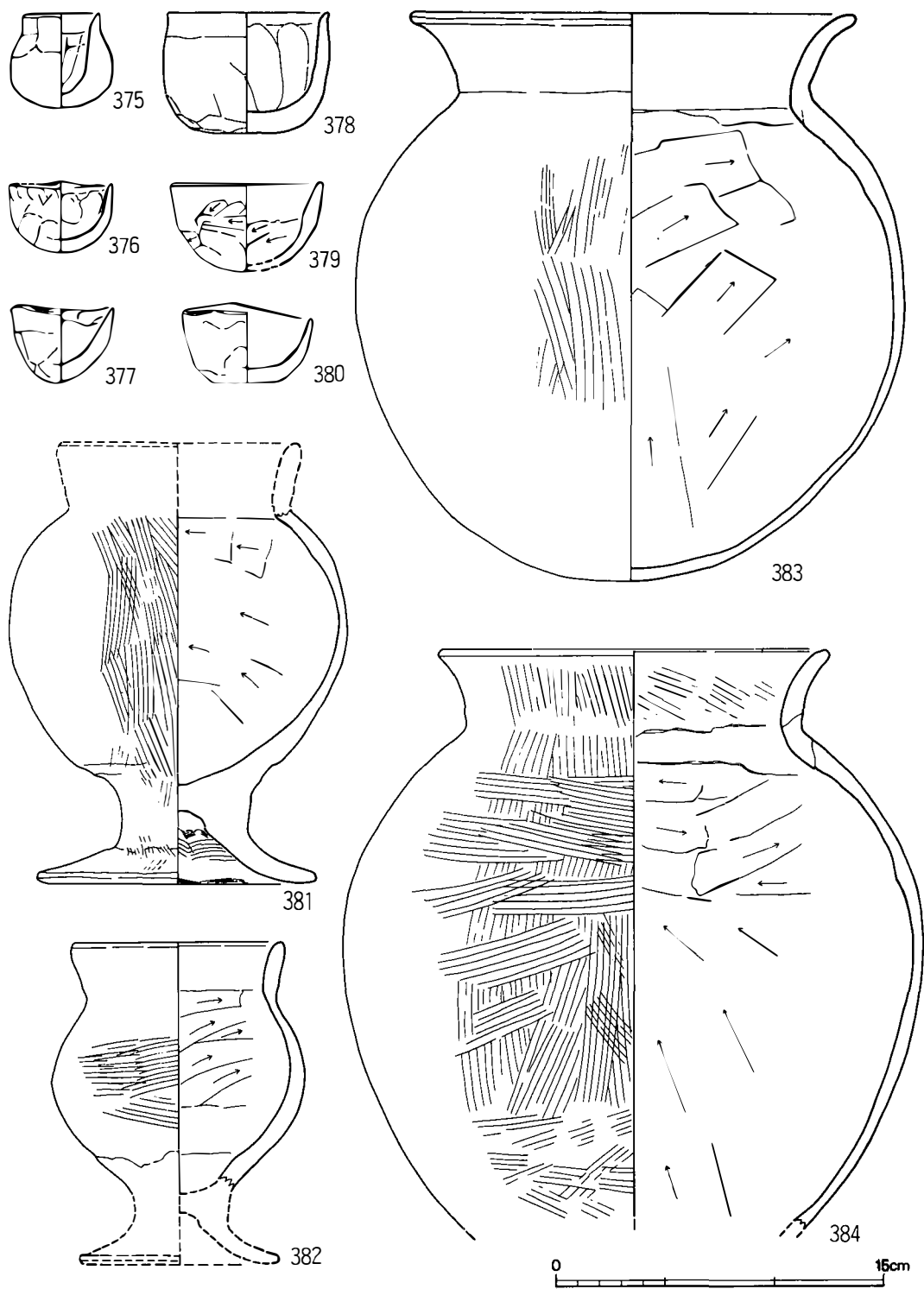
とも類似し、脚台付埴という器種を意識し、382では脚台部の欠損行為を施している（381は、水田床土下の出土で、削平されており、本来は完形で配されていたものと言える）。



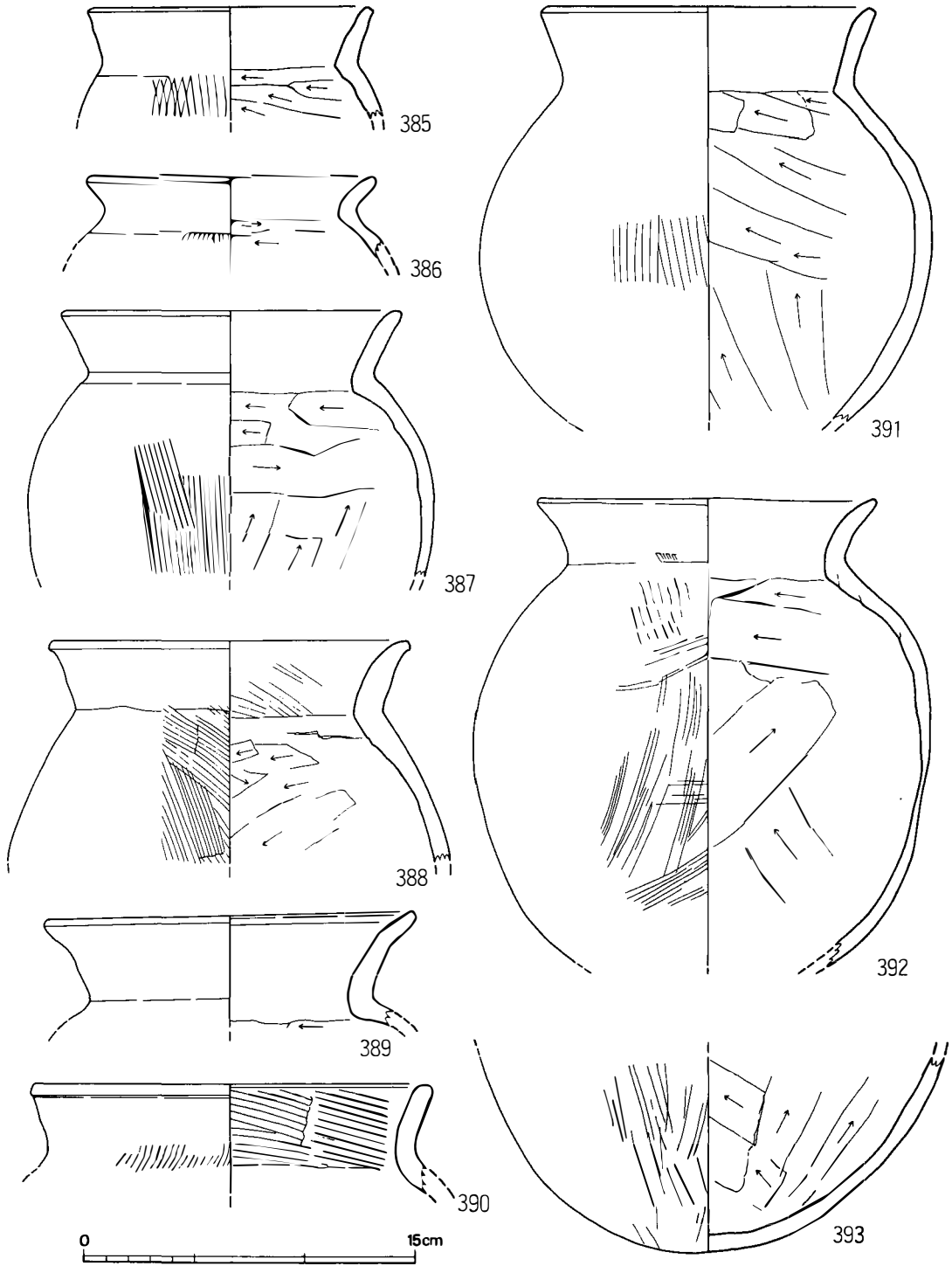
第 65 図 11号住居跡出土土器実測図② (1/3)

甕 (365~373・383~394)

以下の説明では、仮に、法量差で I (小形)・II (中形)・III (大形) に区分し、胴部最大径



第 66 图 11号住居跡出土土器実測図③ (1/3)



第 67 図 11号住居跡出土土器実測図④ (1/3)

と頸部高の比較で1（球形，胴部最大径の方が大きい）・2（倒卵形，頸部高の方が大きい）の

二者に、口縁部の特徴で a（口縁部下半外傾・上半外反）・b（口縁部外傾）・c（口縁部外反）の三者に分類。

I-1 a は371で、頸肩部の屈折は、器内外共にシャープな稜を有し、薄手の端部側面も稜有り。器内の胴部は、いずれもナデを施すが、最上位はナデがやや雑でハケ目を残し、以下の胴部とにわずかな稜を認める。精製された胎土で、細砂・赤褐色粒・角閃石は少なく、微粒の砂・金雲母を多く含み、焼成は堅緻で、黒斑・赤褐色斑を認めず、色調は所謂、赤褐色を呈し、口縁部は水引き調整する。

以上のことから、甕371は、通例の土師器とは異なる、**硬質赤褐色土器**と言える。

II-1 a は374・389。374の頸部器内はナデを施し、371に比べて、頸部の屈折に器内外共にシャープさがなく、薄手の端部は丸い。389の上縁部上半から端部が、外反ではなく、内反気味であるのは、端部をシャープにヨコナデする際に生じたもので、この I-1 a 類に含めてよく、側面はシャープな稜有り。

III-1 a は365・366・383。365は、端部が薄手で丸い。胴部の器外下位は、ハケ目後ナデ。366・383の口縁端部も薄手で、366はシャープな稜有り。

I-1 b は385・386。385は、端部はシャープな稜を有し、外面はわずかに突出気味。386の端部はやや丸い。

II-1 b は、369・372・387・388・391。369は、器外の中位までが縦方向のハケ目のみを施し、他例と異って横・斜方向のハケ目を施さない調整であるため、著しく胴部最大径が下位に位置する器形となるが、頸部高よりも、やはり胴部最大径の方が大きい。端部上面はシャープに下傾し、突出。

372の胴部器外は、ハケ目後にナデを施し、薄手の端部はやや丸く、器壁も薄手。

387の端部上面は、平坦面を有す。

388は、器外上位に、斜方向のハケ目を施すので、口縁部は、372に類似するが、胴部最大径は中位にくるものであろう。

391の胴部器外は、上位が横方向ナデ・下位がナデ。端部はシャープな稜有り。

III-b は368・390。

I-1 c は370。底部器外はハケ後にナデを施し、端部は丸い。

II-2 c は392。器内のヘラ削りは雑で、器外は上位をハケ目後に一部ナデ・中位以下はハケ目後にナデを施すが、更にハケ目を一部に施す。端部は丸い。

III-2 c は367・384・394。384は、器内のヘラ削りは雑で、器外は縦方向ハケ目後に、雑に横方向ハケ目。端部は丸い。

以上のように仮分類した甕を、以下では出土状態を含めて説明。

a 類のなかで、371は、胎土・色調・焼成が他の例と異なると共に、出土状態も異なり、他の例が下層～住居床面から出土したのに対して、西壁M21床面から完形で出土。M21の埋土は、地山とほとんど差位がなく、11号A（新）住居時よりもむしろ11号B（古）住居時に、しかもM21を掘った直後に埋め返されたように観察された。

このことから、371は意識的に埋納したものであり、明らかに11号A（新）住居破棄時（後）に関係の深い他の例よりも、古い。

383も、完形で、床面から倒立した状態で、西壁M21上面（住居床面）から、完形で、焼成後穿孔の杯445に近接して、出土。杯445も床面まで至る炭化材上にある（図版71）。

365は、胴中位以下を欠き、M21と続く北壁M22上（住居埋土下層）から出土。（図版73-1右端）。

以上のことから、a類は、M21・22あるいは西壁側・北壁側を意識しての再配置と言え、11号A（新）住居時には、371は埋納されていることで、a類に対する強い配慮がなされている。このとき、a類は11号B（古）住居以来使用されてきたもの（器制a類）と言える。

このことは、371が初期須恵器に類するものとして特別視して埋納すべき器制であり、365・383もその器制の影響下で製作された土師器であることを、思慮しての再配置といえよう。

b類のなかで、369・372・373は完形で、南壁側のP54・55を弧状に囲んで、等距離間で出土（図版68-2左側）。

同様にb類のなかで、387・391は胴部下位を欠失し、中央土壇D11北側で器周残3/4の甑470を介して、南壁と同方向に、等距離間で出土（図版68）。

これらのことは、b類に、完形と胴下位欠損の二者の思慮をしたもので、意識的なP54・55の周囲への再配置と言えよう。

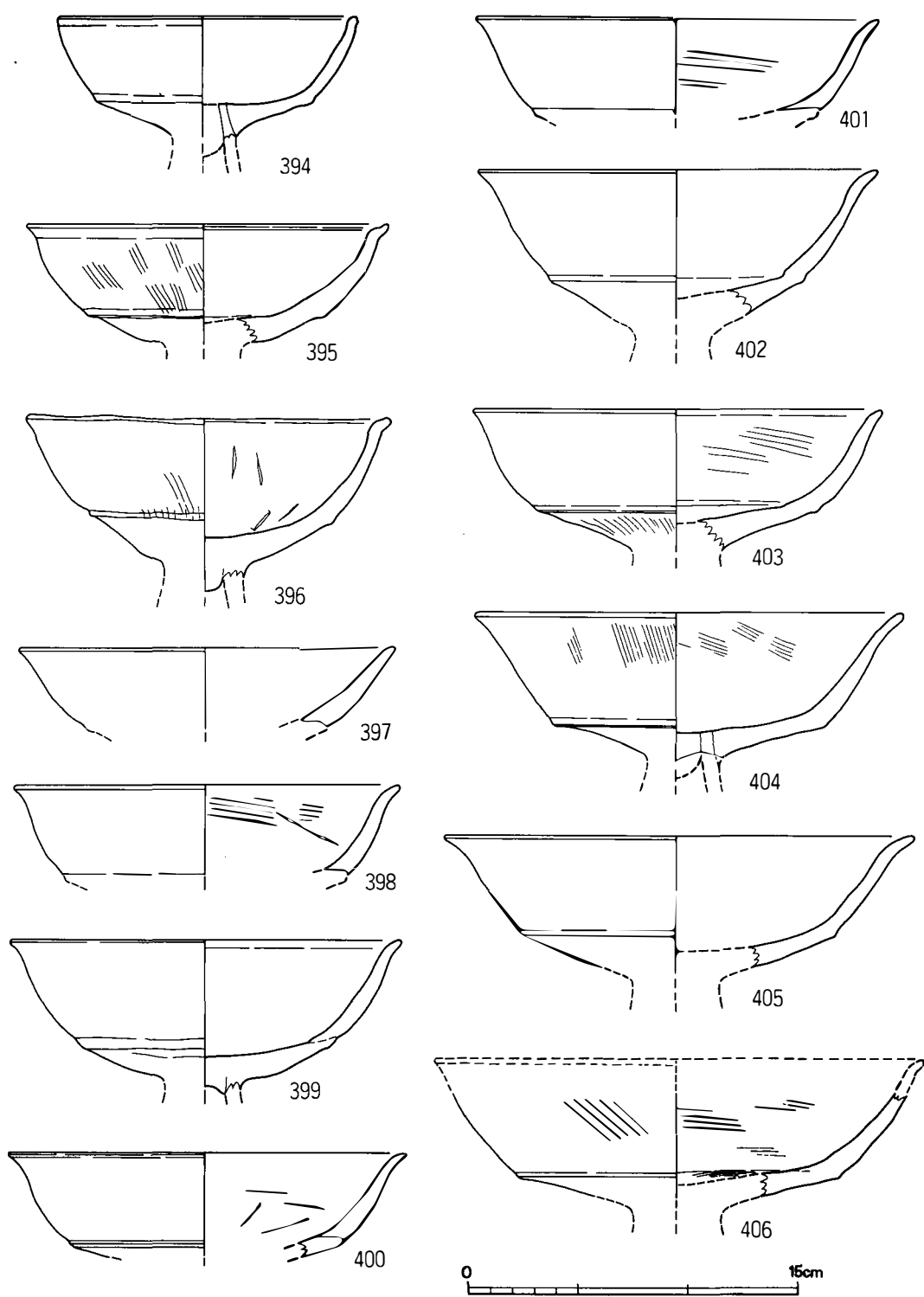
また、D11が7号B（古）住居以来の、カマド発生前の形態をとる中央土壇であり、同様にカマド発生前の器形・器制をとる甑（あるいは定着時の甑ミニチュア？）469も、387に近接して出土していることから、387・391はD11をも配慮しての再配置とも言えよう。このとき、b類は、11号B（古）住居以来使用されてきた器制B類と言える。

C類のなかで、370はカマド東から完形で、367はカマド内から破片で、384はカマド内から胴下位欠失で出土している（図版72-2）。

また、C類のなかで胴部下位を欠失する392は南壁P55、胴部中位以上を欠失する393は同P54で出土し、392の西でP55からは、脚部欠失の高杯412が、393の東でP54からも、脚部欠失の高杯394が共に出土しており、両高杯間から杯438が完形で出土（図版69-2）。

これらのことから、C類は、北壁のカマドと南壁のP54・55の両者への配慮から、完形で、あるいは欠損行為後に再配置されていると言えよう。このとき、C類はD11周辺では出土せず、カマド内外から出土していることから、11号A（新）住居になって使用された器種器制（土器）と言える。

加えてこのことは、古い器制（思慮）をとる埴363が、同様に古い器制（思慮）の甑472と共に、南壁P54西から完形で出土し（図版70-1）、新しい器制（思慮）をとる埴362・364が、完形で口縁部欠失の381・脚部欠失の382と共に、北壁のカマド内・外から出土していることから言えることで、前者は11号B（古）住居以来使用してきた器制（思慮の土器）、後者は11号A（新）住居で使用した器制（思慮の土器）と言える。



第 68 图 11号住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)

高杯 (394~432)

出土量が著しいが、器形の全様が明らかなものは3例のみであるので、以下の説明では、仮に、杯部の法量でI（小形。口径15.0cm未満）・II（中形。同15.0~20.0cm未満）・III（同20.0cm以上）に区分し、杯上半の形状で1（内弯）・2（内反）・3（直線）・4（外反）に、また口縁部・端部の特徴でa（端部稜有）・b（口縁部突出）・c（口縁部外反）・d（口縁部外傾）のそれぞれ四者に分類。

同様に脚部を、仮に、脚柱部径の比較でI（細身。脚柱部のヘラ削り器内下位径/同上位径が2.0）・II（中細身。同3.5）・III（太身。同5.0）に区分し、脚柱部の開き方の形状で1（直線）・2（内反）・3（外反）に、また裾部・端部の特徴でa（長外傾。裾幅が長く外傾する）・b（短外傾。同短く外傾する）・c（外反）・d（外弯）に分類。

〔杯部〕

I-1 a は394。口径は短径13.7cm・長径は13.9cm。正円形に近い。杯部の器外下半はヨコナデが丁寧で、同上半と器内は端部も含めて明瞭な水引き調整痕を残す。水引き幅は4.9cmで、口縁端部の水引き離し部位は、内外面で一致し、左回転。精製された胎土に、微粒の砂・赤褐色粒・金雲母を含み、角閃石もやや多い。色調は、所謂赤褐色を呈し、焼成は堅緻で、黒斑・赤褐色斑を認めないなど、他の土師器とは著しく異なる、**硬質赤褐色土器**である。

なお、脚柱部器内の挿入栓は、欠失するが、この剝離面も、丁寧なヨコナデ。

II-1 b は395・396。396は口径16.5cm。杯部の器内は、ヘラナデ痕を残し、器外はナデを施し、端部のヨコナデは不安定。

II-1 c は397~403。399は口径17.6cm。器内外共に下半をナデ・上半に横方向ナデを加える。401は、器内にハケ目を一部に残すが、内外共にヨコナデ。398・403は器内にハケ目を一部残すが器内ヘラナデ・器外ヨコナデ。400は器内ヘラナデ・器外ヨコナデ。

II-2 d は404・416・417。416は口径18.0cm、端部器内は磨滅気味であるが、横方向ハケ目。

III-2 d は405・406・418。418は口径24.8cm、器外はナデを施すがハケ目を残す。器外は上半のヨコナデは丁寧であるが、下半は雑でハケ目を残す。

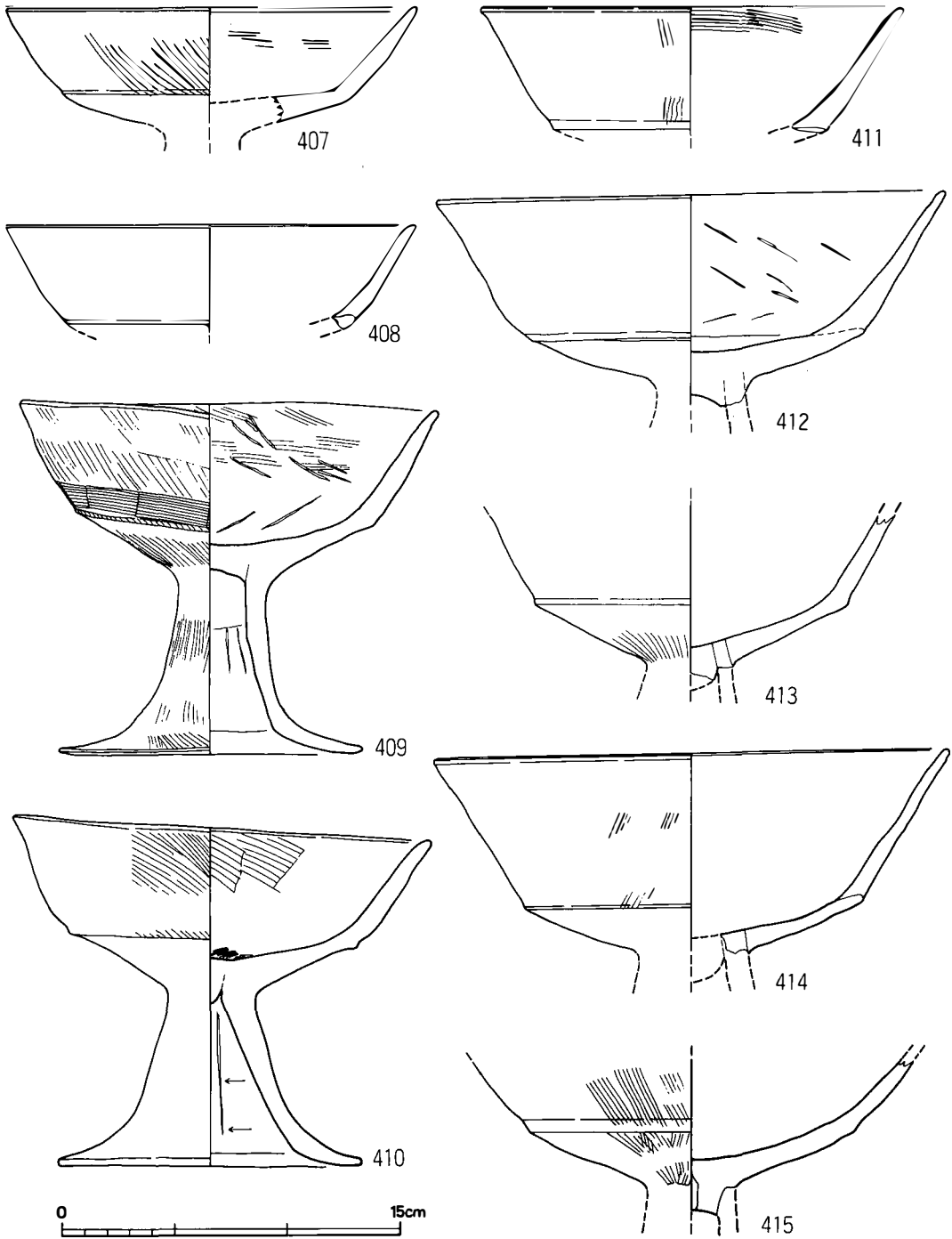
II-3 a は407~411。409は口径18.4cm・脚裾径13.4cm 器高15.2~15.7cmを測る。杯部の器外上半に黒斑を1個認め、これを同一側の脚部の器内外に赤褐色斑1個を看取し、その焼成法を示す。端部のヨコナデは不安定。器内は上半部にハケ目を残すが、上・下半共にヘラナデを施し、器外は上半部を雑にヨコナデし、上半下位は横方向ハケ目を加えて調整。

410は、口径18.8cm・脚裾径13.4cm・器高14.4~15.5cm。器内は、下半下位の挿入栓上面の凹みにハケ目を残し、中位~下半はナデ・上半は端部近くまでを斜方向ハケ目で調整。

III-3 a は412~415。412は口径22.4cm、器内のヘラナデ・器外のヨコナデは丁寧。

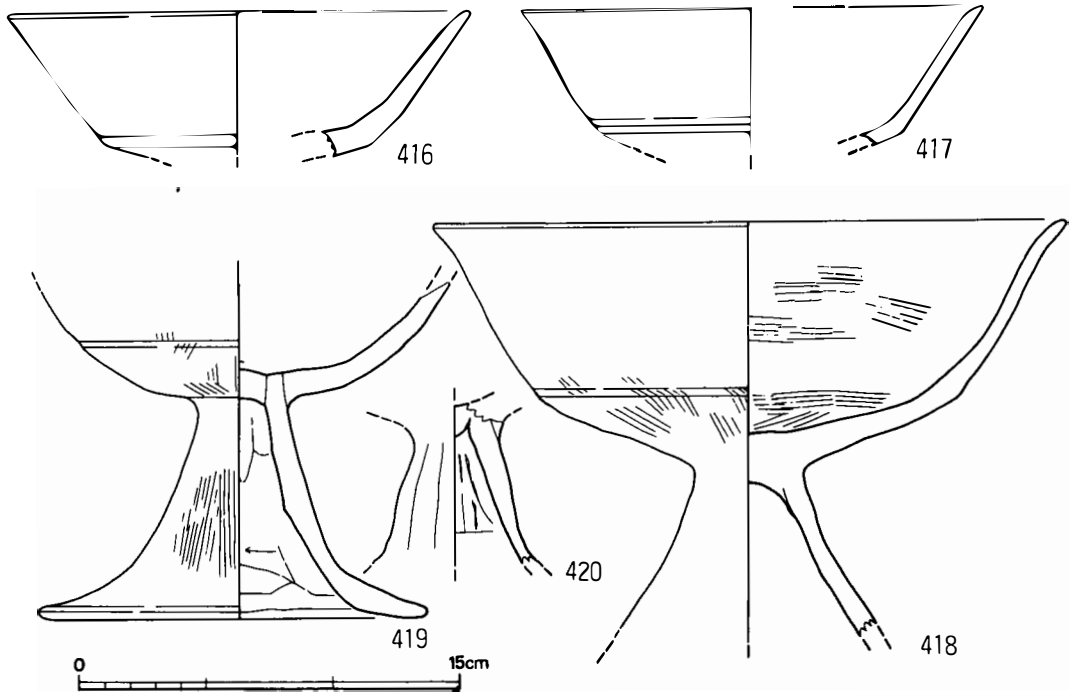
〔脚部〕

II-1 b は429~431。431は脚裾径約12.5cm、脚柱部は、器内のヘラ削りも直線的に丁寧にヘラ削りされており、器壁も薄い。脚高が低い、器内のヘラ削りは丁寧で、器外のヘラ磨き面を残す。



第 69 図 11号住居跡出土土器実測図⑥ (1/3)

I-1cは409。脚柱部の器内の上位は、ヘラ削りをせずに、挿入栓と共にナデるだけで、器壁は厚い。中位以下はヘラ削りで、薄手。器外は、脚柱部を縦方向にナデ、裾部をヨコナデす



第 70 図 11号住居跡出土土器実測図⑦ (1/3)

るが、ハケ目の大半を残す。端部はシャープ。

II-1cは432。脚裾径13.9cm，器内挿入栓はナデ，脚柱部はヘラ削りによって薄手。

II-2cは410・419・425。410の器内は，挿入栓はそのまま，ヘラ削りは丁寧に施すが，厚手。裾部内面は，磨滅気味であるが，ハケ目を施し，端部はシャープで平坦に近い。器外は丁寧にナデ。

425は，脚裾径11.4cm。脚部上位の器壁は厚手であるが，裾内面はハケ目を施し，端部のヨコナデはシャープで，薄手。

II-2dは420・427・428。420は脚部高約7.0cmの小形のもので，ヘラ削りは脚柱部の中位まで，下位はナデを施す。器外のヘラ磨き面を認める。

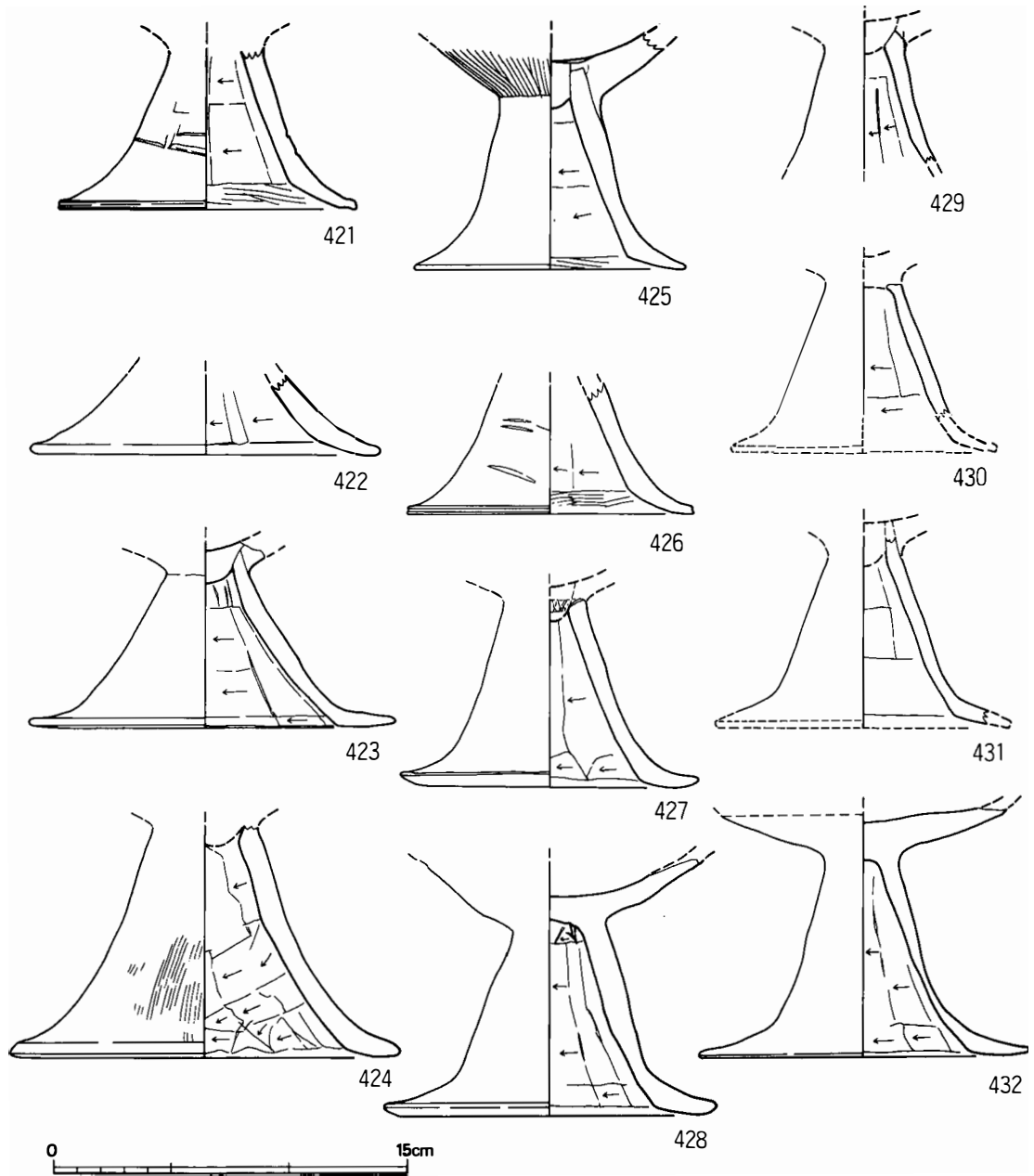
427は，脚裾径12.6cm。ヘラ削りは下位を更に面取り様に施す。杯部を欠失するが，脚柱上面には杯部接合のための刻み目を施す。器壁は，厚手。

428は，脚裾径14.0cm。脚柱部の器外のヘラナデは丁寧。器壁は，著しく厚手。

III-1cは421・423・426。423は脚裾径16.0cm，器内のヘラ削り・器外のヘラナデ共に丁寧に，裾部内面は水平に近い。

426は脚裾径12.0cm。器内のヘラ削りは丁寧であるが，厚手で，裾部は横方向ハケ目で調整し，端部はヨコナデがシャープで凹み，薄手。

III-3bは418・422・424。424は脚裾径16.4cm。器内のヘラ削りは雑で，器外はナデを施すが，ハケ目を残し，脚柱・裾部共に厚手。



第 71 図 11号住居跡出土土器実測図⑧ (1/3)

以上のように、仮分類した高杯を、以下では出土状態を含めて説明。

〔杯部〕

a 類の土器は、いずれも出土状態が特異である。

394は、胎土・色調・焼成・調整技法が他の例と異なる、371と同じ硬質赤褐色土器であるが、南壁 P54から出土。412は、杯部の下半・上半が器内外共に直線的で、シャープに屈折するなど、

古出の特徴を有するものであるが、同じ南壁P55から出土(甕c類の出土状態で詳述)。共に杯部のみの出土。

このことは対称的に、409は北壁カマド西(P61)から、410は南壁P55東から、共に完形での出土。脚部は、前者がI-1c・後者がII-2c類で、共に7号B(古)住居出土の253・256・264(I-1a類)・246(II-3c類)に類似する古い特徴を残すもの。

以上のことから、a類は古くて大事な土器であるという思慮を、この4例の高杯の完形・脚部折損状態での再配置で以って再確認したものと言えよう。このとき、a類は、11号B(古)住居以来使用されてきた器制と言える。

b類の395・396は、a類の394を土師器化したもので、端部が突出するのは須恵器の水引き調整と異なる、ヨコナデ調整からくる差位か。あるいは、a類の端部側面もわずかに突出気味であることから、これを意識してヨコナデしたものか。395は、394と同様に脚部を欠損するが、出土位置は逆で、南壁カマド西(P61)から出土しており、既述の埴363(北壁P54西。古い器制)と362・364(カマド西。新しい器制)や、甕c類などの出土状態とも共通しており、新しい器制(認識)と言える。このとき、b類は、11号(A(新)住居で使用されてきた器制と言える。

c類の399は、b類と端部の特徴がわずかに異なるだけで、396同様に脚部を欠損する。しかし、出土位置は大きく異なっており、再配置土器群の集中する南壁・北壁、あるいは西壁ではなく、東壁からの出土。近接しては、杯461が、器周残1/4の破片でやや離れて脚部d類の428が出土しただけ。

c類は、いずれも破片で出土。土器の特徴では最も新しいもので、11号A(新)住居から、新しい住居に転出後で主に使用した器制(当時の事実認識)の土器の一部を、破片で散布し、杯部完存の399のみを、再配置したものと言えよう。

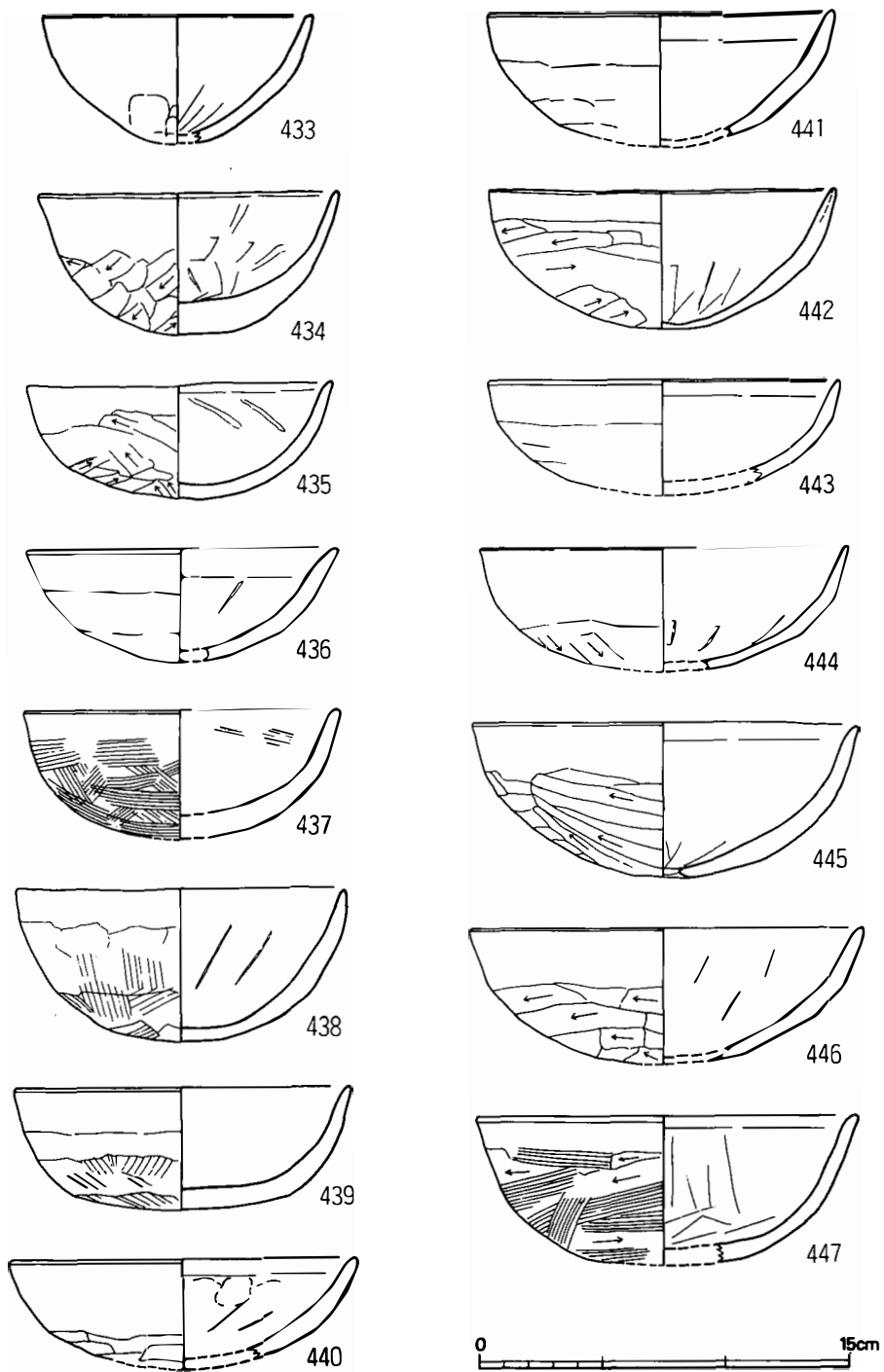
〔脚部〕

b類のなかで、I-1b類は、脚部のなかでは最も古出のもので、既述の7号B(古)住居出土のI-1a類(253・256・264)の古い特徴を残すもので、いずれも破片で出土。このことは、新出の土器の出土が集中する北壁カマド内・西からは出土していないこととも一致しており、11号B(古)住居で主に使用していたもの(と言う認識=器制)を散布したものであろう。

III-3b類の422・424は、新出の特徴を示すものであるが、前述のように、カマド西(P61)から破片で出土していることとも一致しており、11号A(新)住居で主に使用していたもの(同器制)を散布したものであろう。

III-1c類の423は、北壁P54西から杯部を欠失して、埴363などの古出の土器群と、硬質赤褐色土器である394間で出土。在地系の高杯ではなく、3孔を有する17号A(新)住居出土の第97図559~562と類似するが、孔を有さない。しかし、この類似から、在地系でないことを器制として配慮し、394同様に南壁側に、脚部を折損して、配置したものであろう。

d類の427は、P55北で出土しており、P54・55出土土器群を配慮しての、脚部折損後の再配置であろう。



第 72 図 11号住居跡出土土器実測図⑨ (1/3)

なお、このことは南壁西から東へ、高杯423(脚部折損)～甕373(完形)～高杯427(脚部折損)～甕369(完形)～高杯412(完形)～甕372(完形)と順以に等間隔で出土していることか

らも言える。

なお、高杯は西壁では出土せず、南壁では破砕破片が集中。

杯 (433~464)

出土量が著しく多く、完形・略完形の例も多数出土。以下の説明では、仮に、口縁部・端部の特徴で、a (口縁部外傾)・b (口縁部直立, 内反, 口縁部外傾・端部直立)・c (口縁部外反)・d (口縁部直立気味・端部突出)の四者に分類。

なお、口径・ヘラ削り上位径・器高・ヘラ削り上位高などの法量による区分、器外のヘラ削り、ハケ目や、器内のハケ目・ナデ・ヘラナデなどの特徴による分類は、頁数の関係でその多くを省略。

a 類 (433~447)

434は、口径12.3cm・器高5.8cm。器外のヘラ削りは、器高の中位までを短面形に施すが、器壁は体部下半が厚手で、器内に乱れたヘラナデ痕を残す。

435は、口径12.4cm・器高4.2cm。器外のヘラ削り高は、器高の上位までを、長面形に施し、器壁は薄手。器内に整然としたヘラナデ痕を残す。

438は、口径13.4cm・器高6.2cm。ヘラ削りは、器高の上位までで、更に中位以下を、部分的にハケ目で強く調整するが、器壁は体部上半が厚手。器内に整然としたヘラナデ痕を残す。

439は、口径13.6cm・器高5.0cm。ヘラ削りは、器高の上位までで、ヘラ削り部の上位にナデ・中位以下にハケ目を加えるが、器壁は厚手。

445は、口径16.3cm・器高6.3cm。ヘラ削りは、器高の上位までを長面形に施すが、器壁は厚手で、器内は丁寧にヘラナデし、底部に、焼成後に穿孔。

b 類 (448~450)

器壁は、448が底部・449が上半部・450が下半部が厚手と、それぞれ異なるが、448は口径13.4cm・450は同14.2cmで、いずれもほぼ等しく、ヘラ削り後のナデ・ハケ目を施さない。

c 類 (451~456・463・464)

451は、口径12.3cm・器高4.9cm。器外のヘラ削りは中位以下に施し、他はヨコナデであるが、器壁は薄手。

452は、口径12.8cm・器高4.7cm。ヘラ削りを短面形に施すが、中位の器壁は厚手。

464は、口径16.5cm・器高5.6cm。ヘラ削りを長面形に中位以下に施し、器壁は薄手。

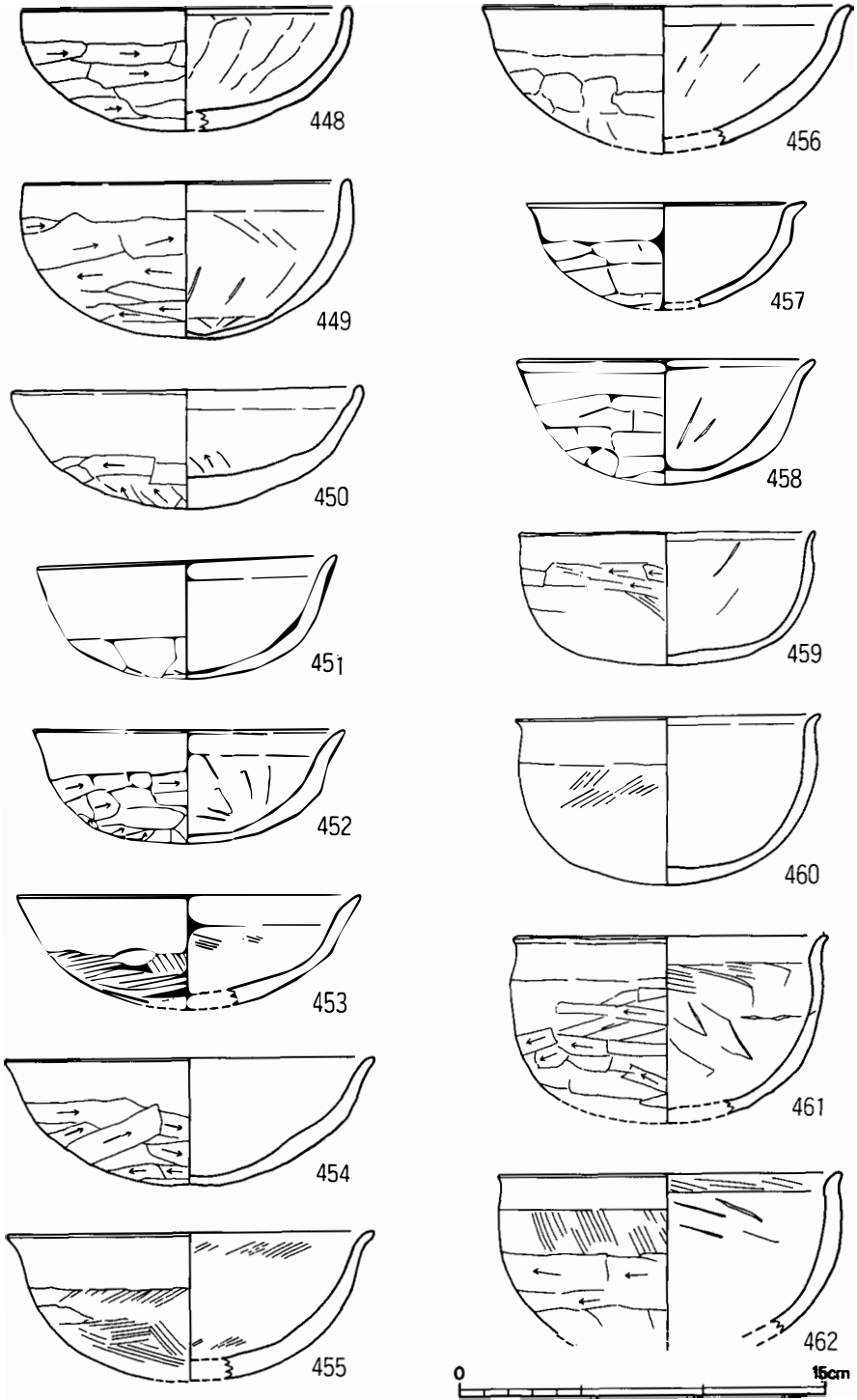
d 類 (457~462)

458は口径12.2cm・器高5.1cm, 459は同12.0cm・5.5cm, 461は同12.7cm・約7.6cm。

以上のなかで、a 類は器壁厚の部位による差位が最も著しく、なかでも433~442 (口径11.0~14.0cm) まだが顕著で、法量でも区分できる。b 類も同様に差位が著しい。c 類は、差位が最も少なく、均一。d 類は差位の著しい457・458と、均一な459~462に、法量で区分し得る。

以上のように仮分類した杯を、以下では出土状態を含めて説明。

a 類では、器壁厚の差位の著しい例と、均一な例とが、法量差で区分し得ると前述したが、



第 73 図 11号住居跡出土土器実測図⑩ (1/3)

口径の小さい434・438～440はいずれも南壁側で、440を除き完形で出土。

また、完形例は、同様に法量が小さく、器壁厚の差位が著しいd類458を加えて、434・438・439・458の4例は、この順で等間隔で配され、しかも南壁からの距離は西の434・東の458および中央の438・439がそれぞれ等間隔。さらにまた、口径は西の434が最も小さく、東の439が最も大きい。458が439よりわずかに小さいのに、東から出土したのは、a類ではなくd類であるからで、434・438・439は、再配置直前まで重ね入れしていたものと言え、その後の整然とした再配置が如実に示されている。いずれも11号A（新）で使用されていたものと言える。

これに対して、北壁からは、435・442・444が出土しているが、435はカマド西M22埋土出土の破片で、古出の特徴を示し、11号B（古）住居に使用された器制を、M22を埋めもどす際に、破砕して埋納したものか。435は、法量が小さいが、器壁は例外的に薄手均一の例である。442は器壁が不均一の例で最も口径の大きい例である。

この二者が、共にカマド西M61から出土している。北壁群とは異なる配慮での再配置がなされており、北壁群より少ない2例であることや、共に古出の特徴を示していることから、11号B（古）で主に使用されていた器制と言えよう。

b類では、径の小さい448が、北壁P55東で破片で出土し、449・450は、完形でカマド西・カマド東（M22）から出土している。448は破砕して北壁に、449は一部破砕後にカマド東に、450は完形でカマド西へ、それぞれ再配置したものと言える。

c類では、452がカマド西（P61）から、d類では、459がカマド西（M22）から、449と共に完形で出土している。3例は重ね入れる事ができる。順次に再配置したもので、既述した罎・甕・高杯などの例から、11号A（新）住居で主に使用された器制と言えるか。

d類では、461が東壁で破片で出土している。新出の器制と言えるか。

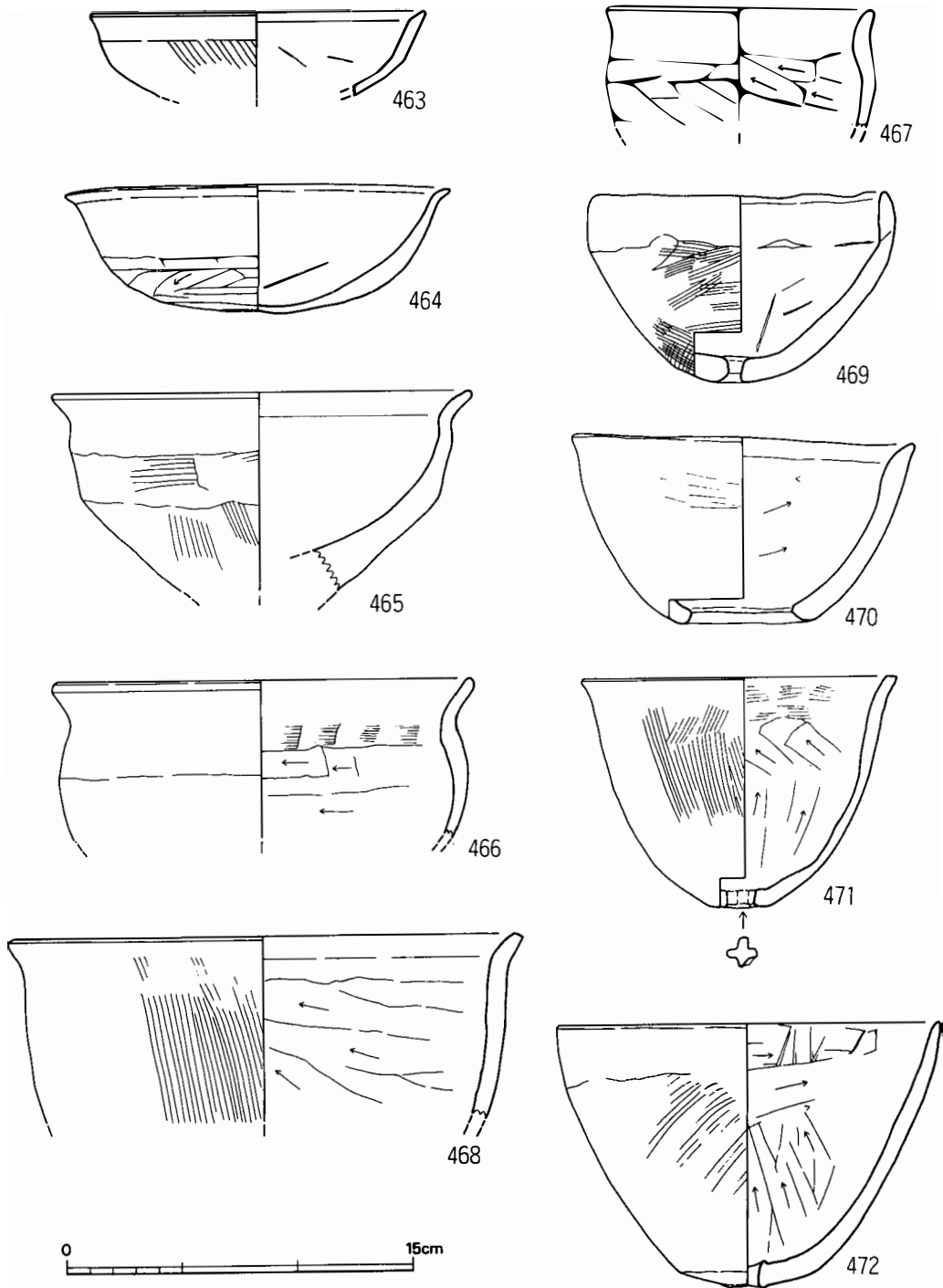
なお、これ以上の説明は蛇足になるが、杯類の、ヨコナデ調整に左右されることの大きい口縁部・端部の特徴は、高杯口縁部・端部の特徴とほぼ一致するようである。

鉢（465～467） 465は、高杯・杯の口縁部に類似する例有り。脚台を付すものか。466も、甕の器形に類似する例有り。467も同様。

甕（468～474） 470～472は小形。いずれも焼成前の穿孔。471は十字状に・472は円形状に、共にシャープに穿孔・底部に稜有り。丁寧なハケ・ヘラナデ・ヘラ削りを施すものである。

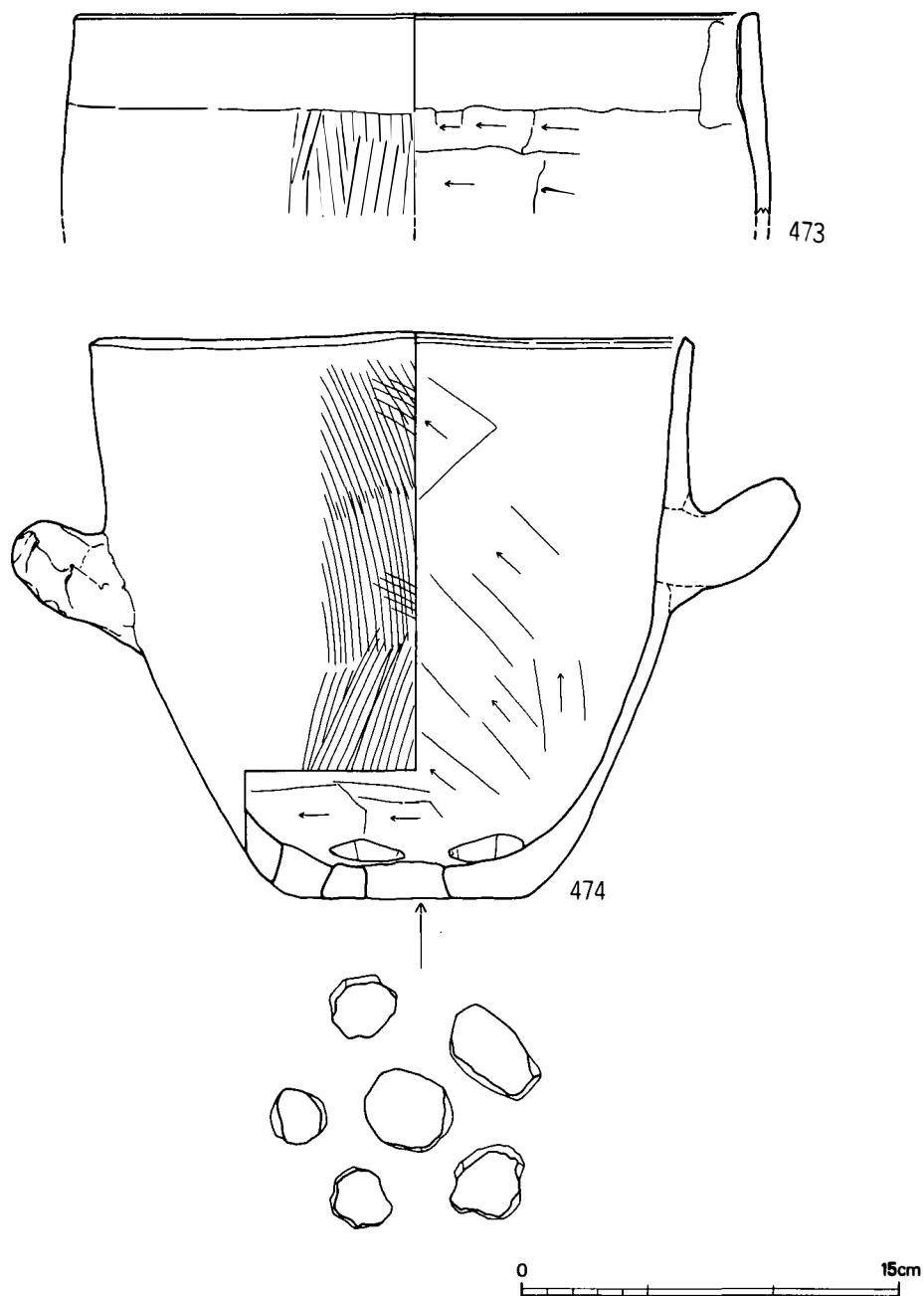
469・470は、既述のように、中央土壇D11周辺から、完形・略完形で出土し、472は、完形で北壁P54西で古出の罎363の一群と出土したものである。D11は、11号B（古）住居以来使用されたもので、469・470も古出の特徴を示すものである。いずれも、11号B（古）住居以来使用されてきた古い器制であることを考慮しての、再配置と言え、ミニチュアに類するものとも言える。

474は、口径24.0cm・底径9.1cm・器高22.5cm。体部がやや内反気味であるが、逆梯形に近い形状で、底部外面は丁寧にナデを施し、平底に調整。器壁は、底部が厚手。底部の穿孔を考慮したものか。体部は、器内にヘラ削りを施して、薄手に調整。器外の縦方向のみの整然としたハケ目は、体部を逆梯形に近い形状に調整するため、平底と共に、既に須恵器製甕の土師器化が、顕著に指摘できる。口縁部の端部も、ヨコナデを施して、シャープな平坦面に調整する



第 74 図 11号住居跡出土土器実測図⑪ (1/3)

ことも同様のことで、凹む。把手も古出の特徴を示す。



第 75 図 11号住居跡出土土器実測図⑫ (1/3)

なお、474は略完形で出土しているが、水田床土下で出土したもので、本来は完形にまで復原されるものであろう。しかし、第63図に示すように、破碎された状態でカマド内から出土しているが、カマド最下層から出土した473の破片を再配置後に、破碎したものと言え、この際に、

台付埴381を完形で、共に再配置したものと言える。

手捏土器(375～380) 各器種のミニチュアが出土。詳細は省くが、いずれも再配置されたもので、南壁と西壁のみで出土。

以上のことで明らかなように、11号住居内出土で、図示した土器は、別項で後述する鉄製品・石製品と共に、住居遺棄時か、あるいは極めて近い時期に、意識的に再配置されたものであり、単なる遺棄・投棄ではない。カマド西・南壁西での、再配置土器数が著しいことは、西壁寄り中央部での再配置土器数では意図的に多くないことと連関している。また、東壁側での再配置土器数が、わずか数個体であることも、単なる偶然ではない。9号住居でも、西壁での遺物の再配置の際での、特別の配慮がなされていることについては、既述したとおりである。

ところで、高杯の項で、特に再三使用した、『器制』について、最後に、今少し補足する。

土器器制とは、出土位置＋出土状態＝入手経緯＋使用経緯＋遺棄（破棄）経緯＝土器への再配置者（集団）の思慮＝土器の新・古・器種・質（硬質赤褐色土器・須恵器製器種の土器器化器種・土師器など）として、使用した概念ものである。

上述のことから、土器器制は、再配置に際しては、住居内施設の機能（使用・思慮）への配慮との連関のなかでなされていることも明かである。

上述のことを、11号住居出土の高杯で示せば、新・古に限った（前述のように、土器器制は新・古だけではない）器制の特徴では、分類した1・2・a～c類は、土器編年上の新・古関係とほぼ一致はする。しかし、以上の出土状態は、通例では「住居への単なる投入」、「故に、新・古の時期差有り」とされ、「住居に伴う一括資料ではあり得ない」、「いや、だからこそ、住居の時期に近接する資料と、その後の投入遺棄の資料に分別できる」などと、机上で帰納される。再配置であること（再配置回数の検討も必要であるが）と、その際には遺物への器制（思慮）と共に、住居内外施設の機能（使用・思慮）の二者を無視しての、単絡的土器編年論は、机上の空論でしかない。

このことは、既に『塚堂遺跡 I』で、塚堂遺跡A～E地区担当者として、また同書編集者として、同書「第8章 第1節 塚堂遺跡（A～E）地区出土の遺物」で明らかにしたところであり、同書、「第8章 第3節 B・B北地区出土の溝状遺構と遺物」（小池史哲氏報告）執筆の有無の際にも、氏に明らかにしたところである。氏の「塚堂遺跡 溝I～III期（土器）編年」に、敬意を表したいが、氏の編年作業の中で、溝状遺構（大溝支流1・2、B北溝2・3トレンチ）という施設の機能と、出土土器群の器制の無視からくる、器種・器形の共伴関係確認の錯誤は著しい。氏の述べるところの、I期（庄内式新段階併行）、II期（布留式古段階併行）、III期（典型布留式併行期）の前述編年図中の、特にII・III期高杯A1～A4類・Aa～d類で、その例を示せば、Aa類以外の大半の土器は、今回報告のD地区住居内からは、氏の典型布留式併行期の壺・甕などの他の器種とは無縁で、5世紀中頃前後の壺・甕などの器種と共に、再配置された状態で出土している。編年作業の必要性は認めるが、その際には、当時の人々の遺構・遺物への思慮を無視することはできないであろう。

12号住居跡

(図版80-2・81-1,
第76図, 表17)

調査区北西隅部で検出。2号掘立柱建物のP7(第112図)を切り、壁南西隅部の土壇も切る(図版21)。住居は、大半が調査区外にあり、その南西隅部を調査しただけで、全様は不明。

しかし、調査区内東隅部で、第77図485の高杯・同488の杯など、完形・完形に近い土器

が、集中出土(図版81-1)。カマド付設の住居では、既述のように、壁土壇およびその周辺での集中出土が通例。12号住居でも、今少し、住居南壁を調査区外に掘り進めば、南壁中央土壇を検出し得たものと考えられることから、北壁中央部にカマドを付設するものであろう。

このことは、後述の出土遺物からしても、問題はない。

住居内の柱穴は、検出していないが、これは地山が砂であるため、柱穴の埋土砂との識別が困難で、確認できなかったもの。

住居外の、P9・10は2号掘立柱建物の柱穴。その他の柱穴P81は、あるいは住居と関係あるものか。

出土遺物(図版188・189, 第77・78図, 表35)

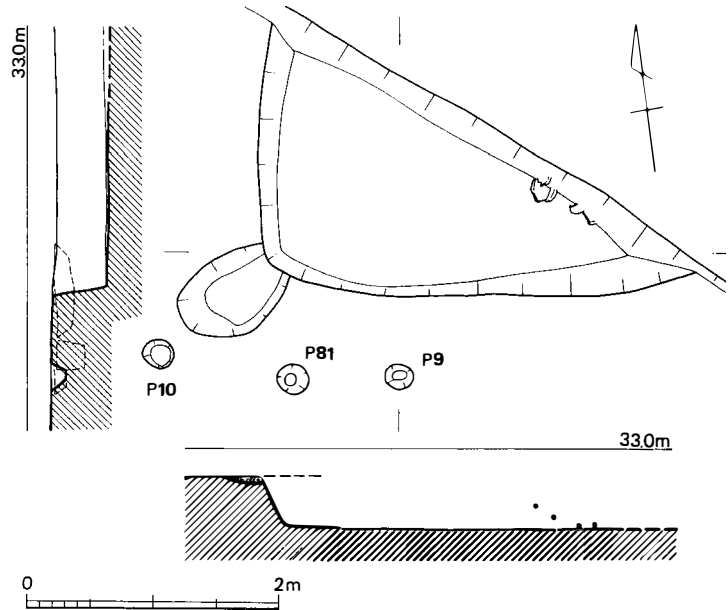
前述のように、住居はその一部を調査したのみで、遺物の出土量は少ない。

しかし、南壁の調査区東端で完形を含む土器群が出土し、この土器群は、既述のように南壁中央土壇の西側に位置している。この土器群は、図版80-1・81-1に示すように、調査区北壁中にも認めためたので、壁内から一部を収納。完形に接合できなかった土器のなかには、未掘部に破片が存在する例もあるものと思われる。

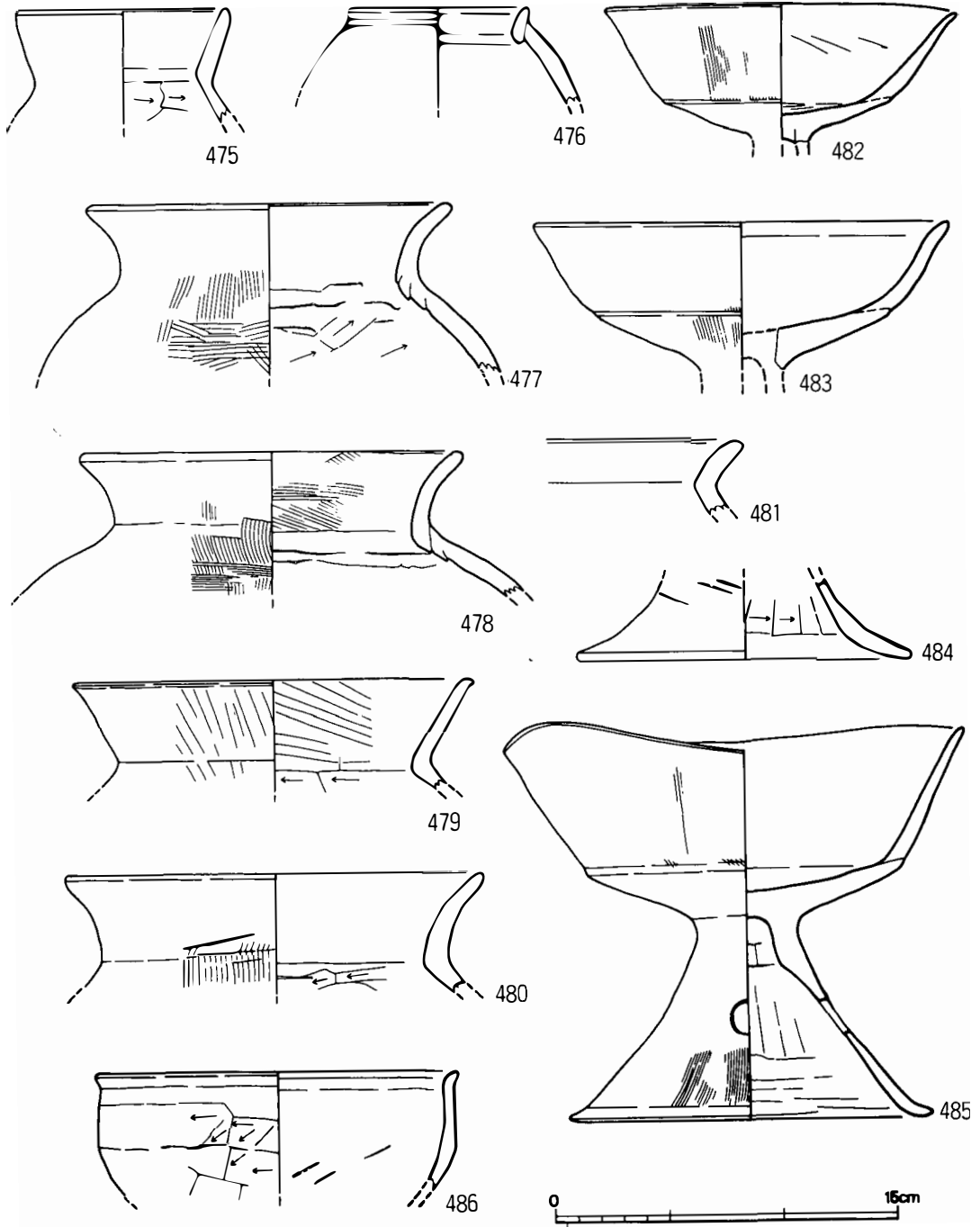
表35に、調査区北壁あるいは調査区北壁寄りとして記したものが、この土器群。その他の図示した土器は、図版80-2に示すような住居埋土のなかで、土器群を出土した層位と同じ層内から出土したもの。

埴(475) ヨコナデされた口縁部は、厚手。

壺(476) 胴部の器外は、磨滅のため不明。器内はナデが丁寧。口縁部は、胴部に胎土紐を単に押し当てただけの状態のまま、ヨコナデを加えただけ。

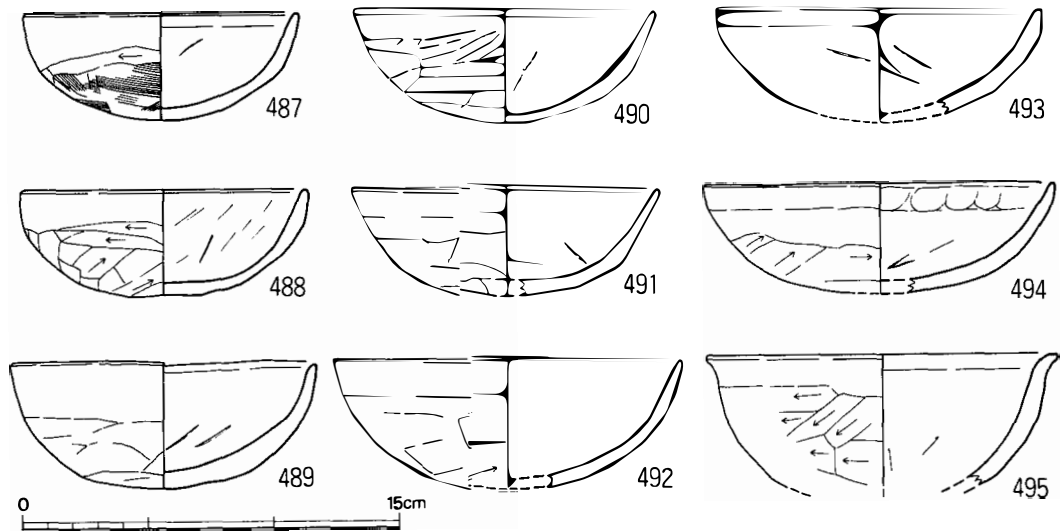


第76図 12号住居跡実測図(1/60)



第 77 図 12号住居跡出土土器実測図① (1/3)

器形の全様は不明で、ヘラ削り痕を認めないが、土器群に伴うもので、弥生期のものではないであろう。



第 78 図 12号住居跡出土土器実測図② (1/3)

甕 (477~481) 479は、口縁部が、ヘラ削りされた頸部で屈折し、ほぼ直線的に外傾し、端部のヨコナデもシャープで、わずかに突出。

478は、口縁部の器内下半がハケ目のままで外傾、上半はヨコナデで更に大きく外傾。端部は丸い。胴部器内は、ヘラ削りだが、頸部近くでは胎土接合痕を明瞭に残す。477も同様。

480は、478に類似するが、ヨコナデ・ヘラ削りが丁寧。

高杯 (482~485) 482は、小形。器壁も薄手。器内は、下半がナデ・上半がヘラナデ、器外はヨコナデだが、いずれも丁寧。口縁部は、わずかに外傾し、端部はシャープ。

483は、器壁が厚手。器内外の磨滅が著しいが、杯部の器外下半に、ハケ目が残る。内反した杯部上半から、口縁部はやや外傾。

485は、杯部の歪みが著しい。杯部上半の一部を欠失。脚部の器周残は、1/8で、他は完存。黒斑は、器外で杯部上半と脚裾に1個づつが同じ側にあり、反対側の杯部上半で器内外に、赤褐色斑が1個。

杯部は、磨滅のため不明であるが、脚部の器内は、挿入栓を丁寧にナデ、中位までは縦方向・下位は横方向にヘラ削りし、裾部をヨコナデ。器形の歪みは著しいが、調整は丁寧で、脚部に2孔を穿ち、器壁は薄手。

なお、脚柱部の最上位の器壁のみが著しく厚手であることから、脚部全体も、当初は同様に厚手であったものを、このように大きく八の字状に開く例では、ヘラ削りで薄手に仕上げたものと言える。

杯 (486~495) 487は、口径11.0cm・器高4.3cm、488は同11.5cm・4.2cmを測る。この2例は共に、ヘラ削りの体部とヨコナデの口縁部にシャープな稜を有し、薄手の口縁部は直線的に外傾し、口径は小さい。

489~491は共に、ヘラ削りの体部とヨコナデの口縁部との稜が著しくなく、体部と共に、薄

手の口縁部は、直線的に外傾し、口径は前者より大きい。

493は、486・494と共に、口径は前二者より大きく、口縁部は直立気味で、486は内傾・493は外反・494は内反・495は外傾するが、いずれもわずか。端部は、493・495が更に突出・外傾し、口縁部が厚手。495は、口縁部のヨコナデが雑で、器内に指押え痕を残したまま。

490は、外傾する口縁部から端部は更に外傾し、器壁は全体に薄手。

なお、487～493は、ヨコナデ・ナデ・ヘラナデ・ヘラ削り・ハケ目はいずれも丁寧。

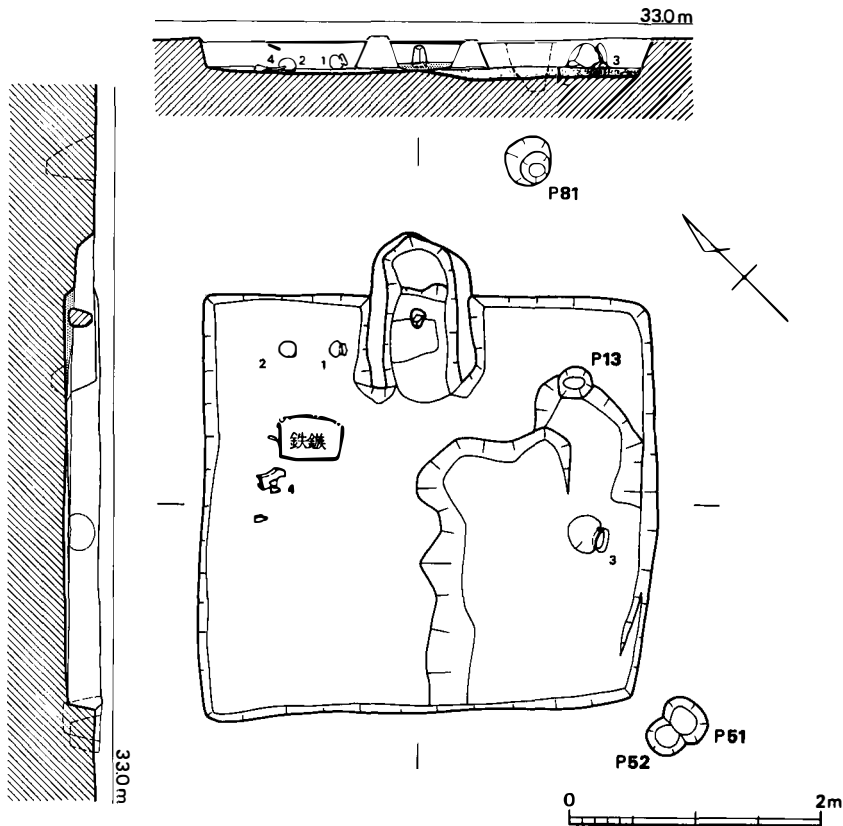
13号住居跡 (図版81-2~88, 第79図, 表18)

調査区北西隅部で検出。東壁中央部に、東向きのカマド付設。弥生時代の5号溝状遺構を切る (図版9)。

主柱穴は、カマド南袖～南壁間のほぼ中央でP13を検出したのみ。

住居北半部を5号溝状遺構埋土中に設けているためか、5cm前後の張り床をほぼ全体に施していたので、張り床除去後に、再度の柱穴確認を試みたが、新たな柱穴検出には至らなかった。

中央土壇や壁土壇も検出されていないが、張り床除去後に、カマド以東の住居南半部で大きな土壇を検出。張り床上面レベルからの深さは10cm前後を測る。埋土は張り床土と同じもので



第79図 13号住居跡実測図 (1/60)

あることから、張り床前に掘られた土壇である。土壇内外の張り床上面レベルに差位はなく、一段と他の張り床面から高くなる、所謂、ベッド状遺構ではない。しかし、土壇北縁が5号溝状遺構南縁にほぼ一致することから、特別にこの部分の除湿を考慮して、地山をより深く掘り込んだ後で張り床したもので、土壇の大きさ（範囲）から、おそらく寝起きの場所で、その面積から1人用と考えられないこともないが。

P14については、上述の土壇内の南西隅部に設けられていたために、検出し得なかったものかも知れない。

壁柱穴は、南西壁隅外でP51・52を検出。柱穴の新旧関係は、確認できず。

その他の柱穴は、東壁外で、P81を検出。東壁中央部カマドの配置と、関係あるものか。

以上のように、支柱穴の配置には不明な点も多い。このことは同様の面積規模を有して近接する14号住居にも共通しており、共に中央土壇・壁土壇も有しない。あるいは、後述するように、13号住居の機能も、14号住居と同様に考えるべきか。

カマド（図版84-1～88，第80図，表18）

煙口・炎口室が、住居壁外に大きく張り出し、燃烧室内からは、甕3個体分の破片が出土。

前庭部・焚口室 前庭部は、明確な床面の窪みとしては確認されていないが、焚口室以西には、炎口室から続くカマド残滓の4層が検出され、A-B断面に示すように、この部分は住居張り床は施されずに、張り床上面レベルまで地山が削り残されている。

焚口室は、両袖西端～住居東壁間がほぼ等しく、またカマド床基盤土の4層西端の位置も、ほぼ一致することなどから、焚口室袖西面の位置は、現存する両袖西端と考えられる。

燃烧室 支脚は、カマド床基盤土の5層内に据えたままで検出され、前面の床熱変焼土の5'層に攪乱は認められなかったことから、使用時の原状を保つものと判断。

焚燃焼部南端は、前述の5'層の分布から、その西端までと判断。

炎焼部は、カマド基盤掘り方東側上端、あるいは下端近くまでで、カマドの位置が、5号溝状遺構埋土上に位置することから、燃烧室内の除湿を考慮して、この部分までを5層にて基盤整備したものと考えられる。

炎口・煙口室、煙出部 炎口・煙口室間の床面に変化が認められず、両室の袖の一部も、天井と共に破壊されているために、両室の境は明確にし得ない。煙出部は、前述の破壊に加えて、削平も受けているが、縦断面に示すように、ほぼ5層下端と考えてよいだろう。

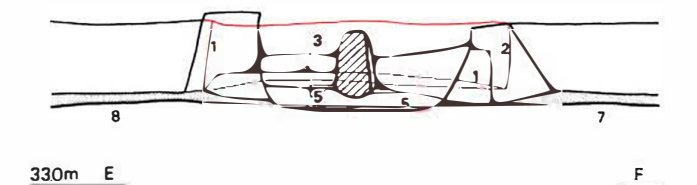
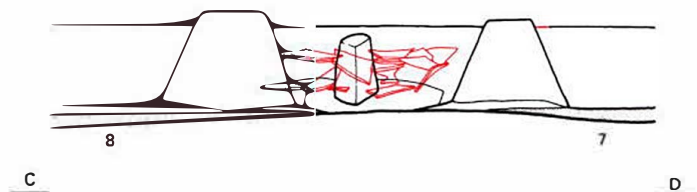
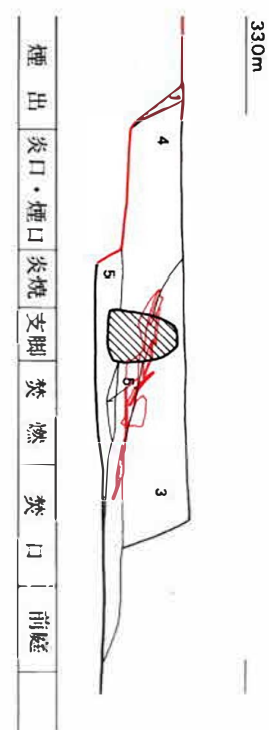
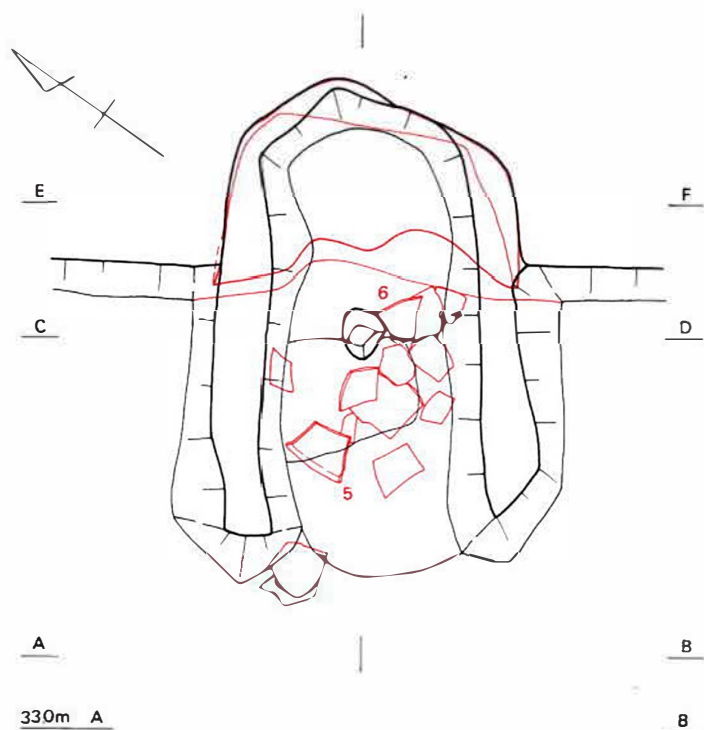
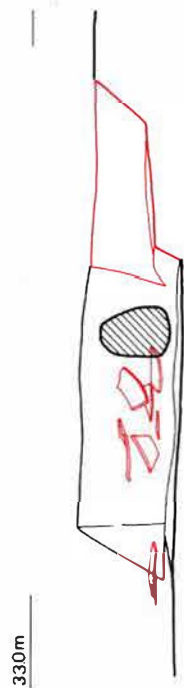
土層観察 C-D断面に示すように、カマド袖基部は、住居張り床の6層と同じもので、張り床後に、カマド基盤掘り方を設けたもの。

なお、基盤土の5層は、袖内には及んでいないことから、また南壁内壁の1層上部は、外壁2層が覆うことから、カマドの袖構築終了後に、カマド床基盤の整備を行ったものと判断できよう。

この床基盤上面は、縦断面に示すように、炎焼部東端に向けて緩傾斜で上昇し、炎口・煙口室床面と同レベルとなる。

また、図版35-1にも示すように、燃烧室内からは、3個体（第81図498・499，第82図502）

番号	状態	特徴
1層	袖内壁	黄褐色細砂質土
2層	袖外壁	暗黄褐色細砂質土
3層	カマド・住居埋土	暗褐色粘質土
4層	袖・天井・灰残滓	1・2層混りの粘質土
5層	カマド床基盤土	暗茶褐色細砂質土
5層	5層焼土化床	赤茶色砂質焼土
6層	住居張床・袖基部	暗茶褐色砂質土
7層	地山	黄褐色細砂質土
8層	5号溝状遺構埋土	暗褐色砂質土



カマド
 6層
 カマド掘方・土器

0 m

第 80 図 13号住居跡カマド実測図 (1/20)

分の甕破片が出土したが、いずれも6層上半部で検出されており、カマド破棄時に、一括して再配置されたものと判断。

なお、図版85-1に示すように、北袖外床面からは、横転した状態で、完形の罌(第81図496)・伏せた状態で口縁部欠損の罌(同497)が出土し、図版82-1に示すように、住居南壁近くの床面からは、肩部に穿孔された甕(図版84-1、第83図)が出土。カマド内出土の土器群は、カマド外出土の土器群と共に、住居遺棄・カマド破棄に伴う祭祀行為に関する資料と言えよう。

出土遺物(図版190、第81~83図、表35)

出土遺物の量は少ないが、杯・鉢を除いてほぼ器種が揃っており、このことが、格子目タタキの甕の出土や住居の規模と共に留意される。

罌(496・497・503) 496は、胴部の器内は、種々の方向のハケ目を施しており、その差位で、各部位に稜をわずかに有す。器内は、指ナデ・指押えナデのみで、ヘラ削りを施さないため、器壁は厚い。口縁部は、ヨコナデが丁寧で、器壁も薄く、やや内弯し、端部は外反。

497は胴部が球形で、器内はヘラ削り後に、下位から丁部にナデを加え、器外のハケ目も丁寧。器壁は、極めて薄い。

503は、脚台付罌の下位部で、脚台部は、器内上位にナデ・器外胴部との屈折部に横方向ナデを施し、裾部をヨコナデするが、ハケ目を多く残す。器壁は、薄手。

甕(498・499・502) 498は、北壁のNo.4(口縁~胴上半器周残3/8)とカマド内の肩部片が接合し、頸部器周残1/2弱まで復原。磨滅が著しいが、胴部の器内は、上位が横方向・中位が斜方向のヘラ削りを施し、上位に胎土接合痕を認める。器外は、ハケの当り痕を屈折部に認める。

499は、498とは別個体。磨滅が著しいが、器外にハケ目を認める。

502は、497のような罌の口縁部であるかも知れない。

高杯(504・505) 505は、大形。杯部の上半は、直線的に外傾し、口縁部は、更に大きく外傾。ハケ目のままであるが、器壁は薄い。

504は、11号住居の高杯脚部の仮分類の、I-1a。

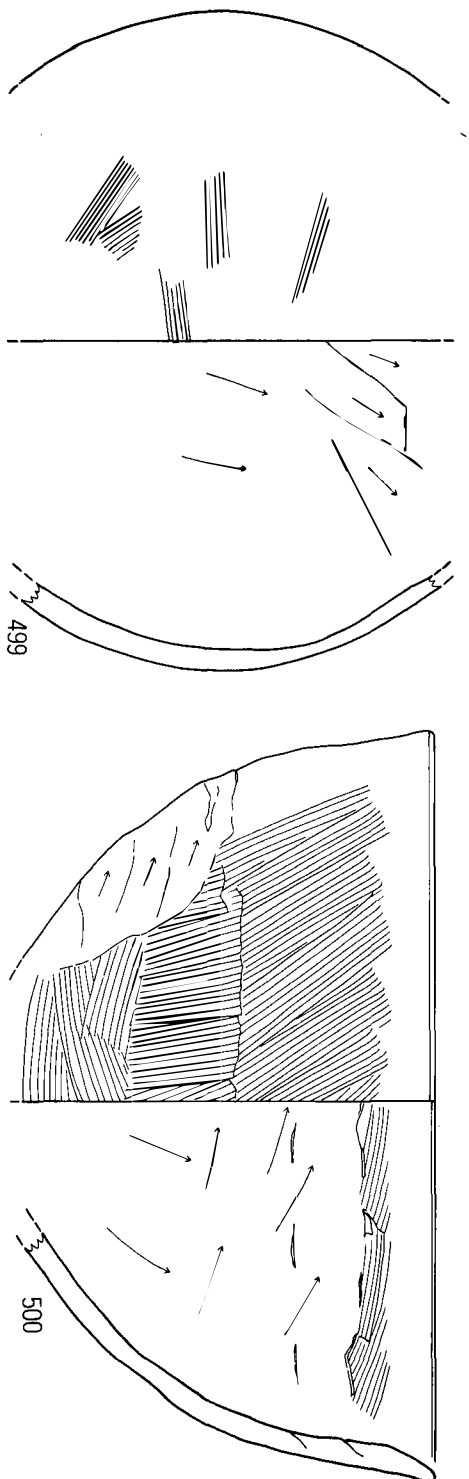
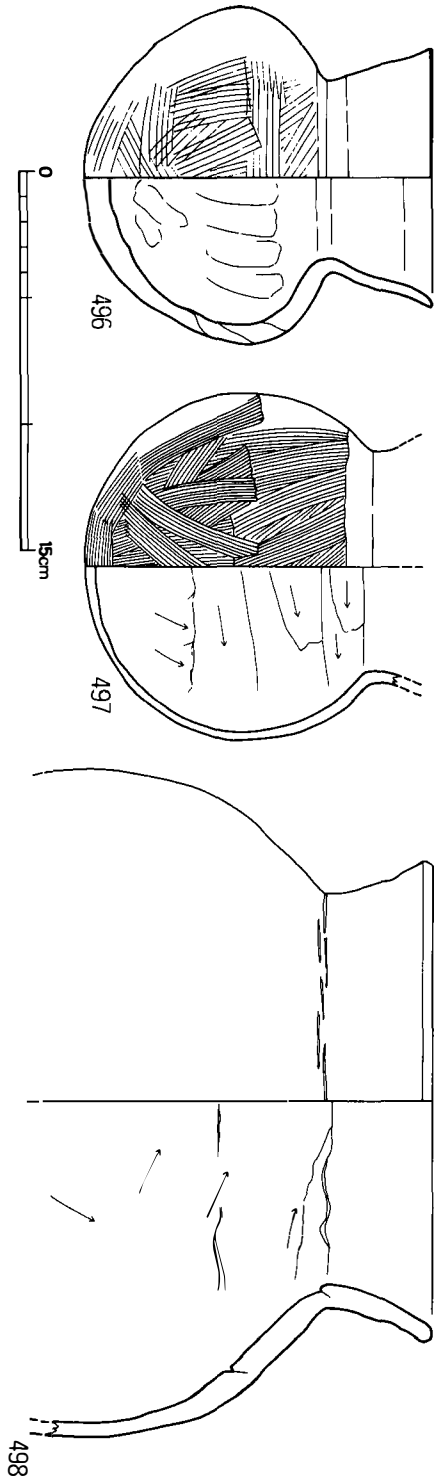
甗(500) 把部を認めないが、鉢ではなく、甗としてよい。体部の器内は、最上位のみはハケ目のままで、以下をヘラ削りするが、胎土接合痕を残す。器外は、整然としたハケ目のままであるが、下半部に、ハケ目後、補修胎土を0.2~0.4cmの厚さで施した部分には、ヘラ削りを施す。

なお、501は、小破片で、磨滅するが、器内外共にヨコナデを施したものであると思われる。通例なら、二重口縁の壺片かとすべきであろうが、後述する506の出土例から、外来の陶質土器、あるいは須恵器の壺・甗を、土師器化したものであることも十分に考えられる。

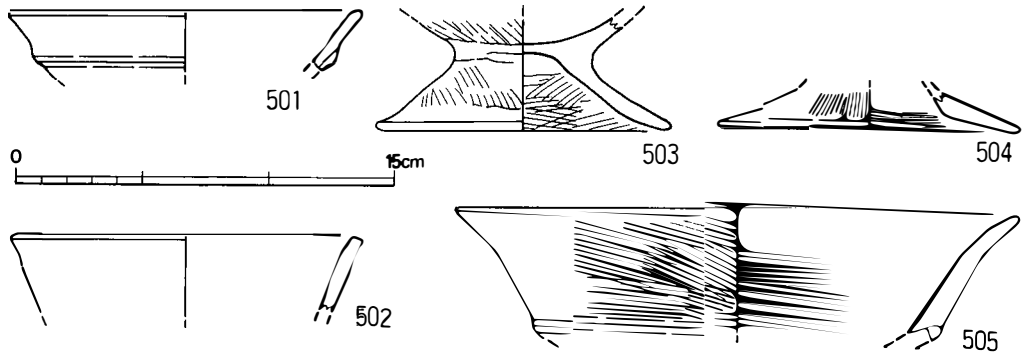
斜格子タタキ目土器(巻頭図版1・3、506)

口径18.4~19.0cm・胴部最大径29.5~30.1cm・器高約31.0cm。口縁部完形、頸部器周残7/8(穿孔部器周1/8)、胴中部同3/4、胴下半部完形まで接合し、底部も径3.7cmの正円形に近い穿孔を施す。

なお、14号住居の床面から、9cm上位で出土した胴中部破片(図版89-2)は、506と同一個



第 81 图 13号住居跡出土土器実測图① (1/3)



第 82 図 13号住居跡出土土器実測図② (1/3)

体片である (図版190)。

また、7号A (新) 住居下層出土の胴部小破片 1個が、この506と接合。

以上の他に、13号住居出土の506の小破片が若干あることから、本来は穿孔部を除いて、完形に接合できるものであろうと思い、D地区出土の全破片を再度手にして観察したが、新たに検出できなかった。

しかし、後述する17号住居出土の須恵器破片の、9号住居出土破片との接合例や、11号A (新) 住居他多数の再配置例などがあることから、この506についても、頸肩部・底部への穿孔と共に、胴部へも大きく穿孔し、その破片を14号住居や未調査区住居に意識的に散布 (分散配置) したものと見えよう。

胎土は、微砂・細砂と共に、0.05~0.15cm大の砂も多く、金雲母細片を多量に含むが、赤褐色粒はわずかしき含まない。角閃石はやや多い。

なお、補修に使用した胎土は、精製されたもので、微砂を多く含む。

焼成は、胴上位の器周1/4の部分に大きな赤褐色斑が1個、これと反対側で胴部下半に更に大きな黒斑が1個認められることから、これを土器の焼成とすれば、良好と言える。このことについては、後述。

色調は、器内外共に 83 にお橙色 8.0YR5.5/6.0, 所謂、褐色を呈し、補修部は 31 灰味赤茶色 8.5R4.5/4.5。

胴部の器内は、肩部は当て具痕を丁寧な指押えナデでほとんど消すが、わずかに横方向下弦で、弧状の当て具痕を認める。胴部最上位は、当て具痕を深く残したままで、ナデを施さない。器外からのタタキが強く施されたことから、器壁が一周して薄いですが、このことで、胴上位はなで肩ではなく、球形へと調整されている。胴部最大径より上位では、左縦弦で弧状の、当て具痕をやや浅く残し、ナデはやや雑。同下位では、ナデが丁寧で、当て具痕はほとんど残さない。底部近くでは、左上-右下の、斜弦の弧状の当て具痕をやや深く残したままで、ナデを施さない。底部は、器壁が薄く、当て具痕を残さず、ナデが丁寧であるが、この器外部では、タタキ斜格子目が潰れていることから、タタキが強いために器壁が薄くなったものではなく、ナデを強く施すことで、器外の底部を極めてわずかではあるが、平底気味へと調整したためである。

頸部の器内は、ヨコナデ後に、横方向ナデを加えるが、わずかに指押え痕を残す。

口縁部の器内は、下半のヨコナデが弱く、指押え痕をわずかに、ハケ目を明瞭に、残す。上から端部および器外肩部までのヨコナデは丁寧で強い。

胴部の器外から底部にかけては、斜格子タタキ目のままであるが、最大径位からやや下位では、タタキ後のヒビ割れ部を、器外にのみ補修し、これは器周の1/2にも及ぶ。この補修胎土は0.2cm以下と薄手で、補強と言うより、ヒビ割れ目を、補修胎土で詰めただけで、出土時にはこの部分で割れていた。しかし、補修部へのタタキは施しておらず、ヒビ割れが器内にも及んでいる部位で、補修していない部分も認められる。

斜格子タタキ目は、それぞれの部位で整然と一周し、胴部下でも同様で、所謂、底部から胴部下半にかけての、放射状のタタキではない。タタキは、右→左方向へと一周する。肩部から底部まで（断面図）のタタキ面数は16を数え、最大径位の上・下が、上・下方向でのタタキ面の重複部が最も少なく、幅広いタタキ面を残す。この部分で、タタキ面1個の最大のものは、縦（上～下）方向4.1cm・横（左～右）方向3.9cmを測り、2.0cm間の斜格子目数は7個を数える。

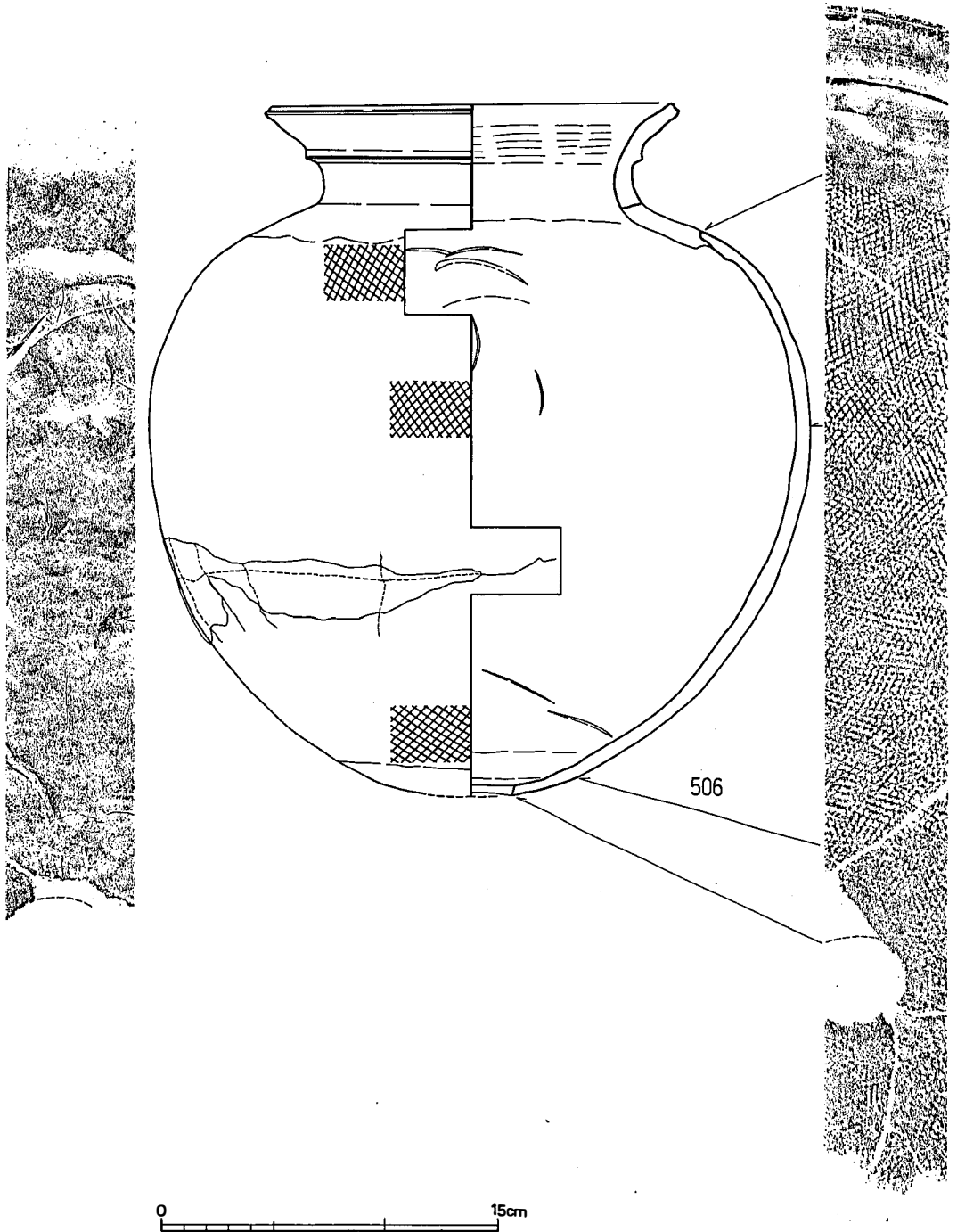
第83図には、口縁部～底部までの一連の拓影を、右側に示したが、斜格子目の方向の歪みがどうしても生じるので、同左側にその方向のモデルを部位別に示す。タタキ工具面での斜格子目列は、本来直線であろうが、斜格子タタキ目列は、最上位のものは、わずかに左上～右下の上弦弧で観察され、その弦と水平との角度は約45°を測る。1個の格子目は、水平方向より上下方向に長い。最大径位直上の斜格子タタキ目列も同様であるが、その弦と水平との角度は約60°を測る。1個の斜格子目は、同様に上下方向に長い。胴部下位の斜格子タタキ目列も、同様であるが、その弦と水平との角度は約20°を測り、1個の斜格子目は上下方向より水平方向に長い。

ところで以上のようなタタキ・ハケ目・ナデ・ヨコナデを施された506は、胴部は球形に近く、胴部最大径は、器高の中位にあるが、胴部全体では、器外の肩部の強いヨコナデと、直下の胴部最上位の強いタタキにも因り、やや上位に位置する。この胴部から肩部は、器周の1/2では内反し同1/2では直立気味であるが、これはヨコナデの強弱の差位である。口縁部の下半は外傾し、上半は更に直線的に大きく外傾し、端部はシャープで、上面がわずかに凹む。断面三角形の突帯も、シャープ。

以上のことから、この土器は、外来の陶質土器ではなく、その陶質土器が、既に須恵器として我が国で生産され、その影響下で製作された、斜格子タタキ目（須恵器製作技法）を有する、土師器甕と言える。

このことの理由を列記すれば、以下のとおり。（順不同）

- ①胎土が、土師器に使用しているものと同類で、外来の陶質土器や須恵器の胎土とは異なる。
- ②このことは、補修胎土でも言え、土師器のヒビ割れ補修に使用する胎土と、同類である。
- ③補修によって、斜格子タタキ目が消失するのを、最小限にする細心の注意がされている。
- ④このことは、器形・焼成による再度のヒビ割れへの配慮よりもむしろ、斜格子タタキ目およびその技法重視への配慮の方が大きい。
- ⑤焼成による、黒斑・赤褐色斑は土師器に認めるものと同類・同位置にある。



第 83 图 13号住居跡出土土器実測図③ (1/3)

⑥このことは、色調についても言え、土師器と同類である。

⑦口縁部の器内に、土師器と同類のハケ目を施す。

⑧胴部の器内に、タタキ当て具痕を残すが、外来の陶質土器や須恵器では、ほとんど丁寧にナデ消している。

⑨このことは、土師器で、甕の器内のヘラ削り痕を明瞭に残すことと同類であり、ヘラ削りによる器壁の薄手化とタタキによる器壁の薄手化(タタキにはこれ以外の目的があるに反して)を同一視したものと言える。

⑩口縁部ヨコナデによる外傾の調整、同端部の調整は、土師器の甕の技法で可能であること。

⑪このことは、断面三角形の突帯についても言えること。

⑫接合できない破片での観察で、胎土接合法が、土師器と同類であること。

⑬胴部の器形も、口縁部同様に土師器と同類であること。

⑭頸肩部・底部への穿孔行為が、土師器と同類であること。

⑮このことは、胎土の接合部位・接合法を既知のこととして施しているとも言える。

⑯須恵器の第144図832～834同様に複数住居間、同一個体破片の散布が認められること。

⑰このことは、赤褐色土器である11号B(古)住居出土の甕371(第65図)や、外来の陶質土器である9号住居出土の甕315(第53図)が、破碎・穿孔せずに、完形で単一住居内から出土していることと著しく異なること。

⑱縄蓆文・格子目文の須恵器窯が、既に知られていること。
(註7)

⑲胴部の器外に、煤が付着し、使用されていること。

以上のことなどから、506は土師器甕と言えることは明らかであるが、カマド内あるいは北壁の土器群とは異って、南壁の張り床部から穿孔・破片他住居配置の状態出土していることから、これを通例の土師器の甕とは異質の器制として配慮していることは確実である。このことは、住居規模やカマド主軸・住居主軸および遺物の出土量・出土状態などからも言え、近接する14号住居との関係も含めて、今少し検討すべきであろう。

以上の出土遺物は、すべて住居内に再配置された共伴資料と言える。なお、14号住居と共に、杯の出土がない。

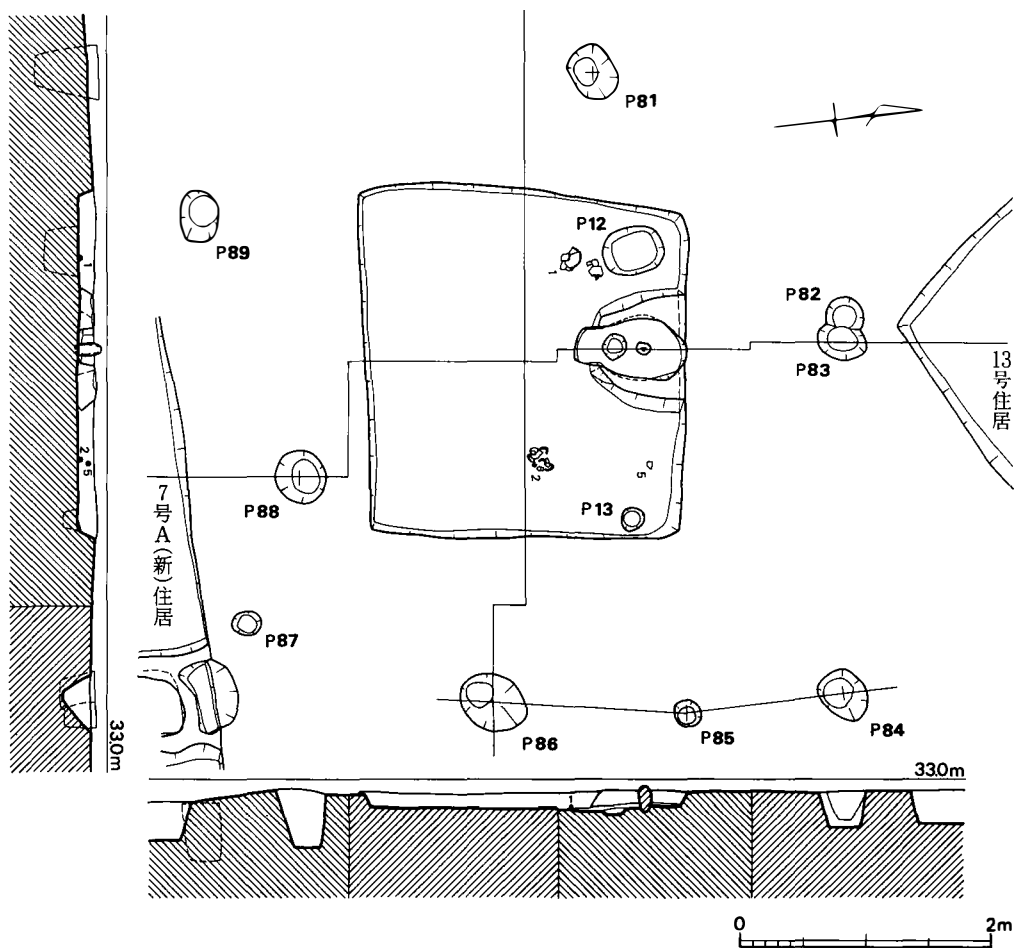
14号住居跡(図版89～92-1, 第84図, 表19)

調査区北西隅部で検出。北壁中央部やや西寄りに、北向きのカマド付設。7号A(新)・13号住居に近接(図版19)。

柱穴は、北西隅と北東壁から、2個を検出したが、前者は後者に比べて、径が大きくて深い。

第2図の模式図の柱穴名称に従えば、対角柱穴P41・42となるが、他に柱穴を検出していないことから、支柱穴P12・13とする。

支柱穴配置は、P12・13・カマドを北壁側に配することで、他に比べて床面積が小さい、当住居床面の効率的使用を計ったとも考えられるが、配置例の多い壁土壇を、設けないことなどから、後述するように、住居の使用目的(機能)の差位にあるものとも考えることもできよう。



第 84 図 14号住居跡実測図 (1/60)

P12-13柱列方向は、南・北壁方向と等しく、東壁方向とは直交関係にある。

また、P12-13の南北中軸線は、住居を東西に二分すると共に、その方向はカマド主軸方向と一致し、この中軸線下の南壁～北壁間の中心Oを通る東西中軸線も、住居を南北に二分する。これらのことから、南北中軸線を南北O・東西中軸線を東西Oとし、前者を住居主軸とすればN-6.5Eを測る。

その他の柱穴P81～89のなかで、P82・83は切り合うが、新旧関係の確認にまでは至らなかった。P82を、P83の柱抜去時の掘り方とすることもできるが、ここではP82を、近接する13号住居に属する壁柱穴P51として、除外。(第79図)。

同様に、P87は、近接する7号A(新)住居に属する一連の壁柱穴であることから、P89と共に除外。(第30図)。

P87については、前述P87・89同様に、7号A(新)住居に伴うものであるかも知れないが、14号住居に、より近接することなどから、当住居に属するものと判断。

なお、P83～86の柱穴群についても、P83-84柱列とP85-86柱列はほぼ直交し、P86は他の柱穴に比べて径が小さく、深さも若干ではあるが浅いことから、P86を主軸柱穴P21、P83・84・86を支柱穴P11・12・13、P14は14号住居構築によって消滅したものとして、14号住居よりも古い、全く別の、床面の遺存しない住居あるいは掘立柱建物の柱穴の一部とすることもできるかも知れない。

しかし、全く別な住居跡とするには、柱穴群はいずれも深さが25cm前後と深く遺存するのに対して、中央土壇あるいは壁土壇が遺存していないなどの理由から、積極的な根拠にはなり得ない。また掘立柱建物とするには、他の柱穴群の深さからして、14号住居床面で検出されていないことから、やはり積極的な根拠とはなり得ないであろう。

これらのことから、P83も、13号住居に属する壁柱穴P52として除外するが、あるいは後述する柵列がP83まで続くものか。

さて、P85は北壁の延長上に位置し、P86は東西Oに南接し、P84-85-86柱列方向は南北O方向とほぼ一致することから、P84～86は、14号住居に伴う柵列と判断。

P88は、柱穴群のなかにあつては、壁に最も近接し、ほぼ東壁延長線にも近いことから、あるいは出入り口施設に関連するものか。

P81については不明である。

ところで、北壁に設けられたカマド奥壁（住居北壁）～焚口室南面間は86cm、住居南壁～同間は160cmを測る。住居全床面積は約6.97㎡である。カマド東袖～P13間に、薪・藁などの燃料や若干の土器類を配し、カマド前庭部の灰残滓などの存在（当時の）を考慮すれば、おそらく、自由に寝起き可能な床面は、住居南半部に限られ、常時2人以上の居住空間には不足すると考える。

また、住居内からの遺物の出土は、著しく少なく、床面からは第86図507・508（出土番号No1・2）の甕（器周残は共に約3/4）が出土したのみで、他には埋土中から図版39の506大破片（同No5）の斜格子土土器片を含めて、若干の破片が出土しただけである。

以上のことに加えて、明確な支柱穴P11・14を欠くことなどから、この14号住居の使用目的（機能）を、南側の戸外に、前述の柵列あるいは目隠堀的な施設を設けて、一般の住居とは区別された、女性の出産などに関係する特別なものと考えられることもできよう。

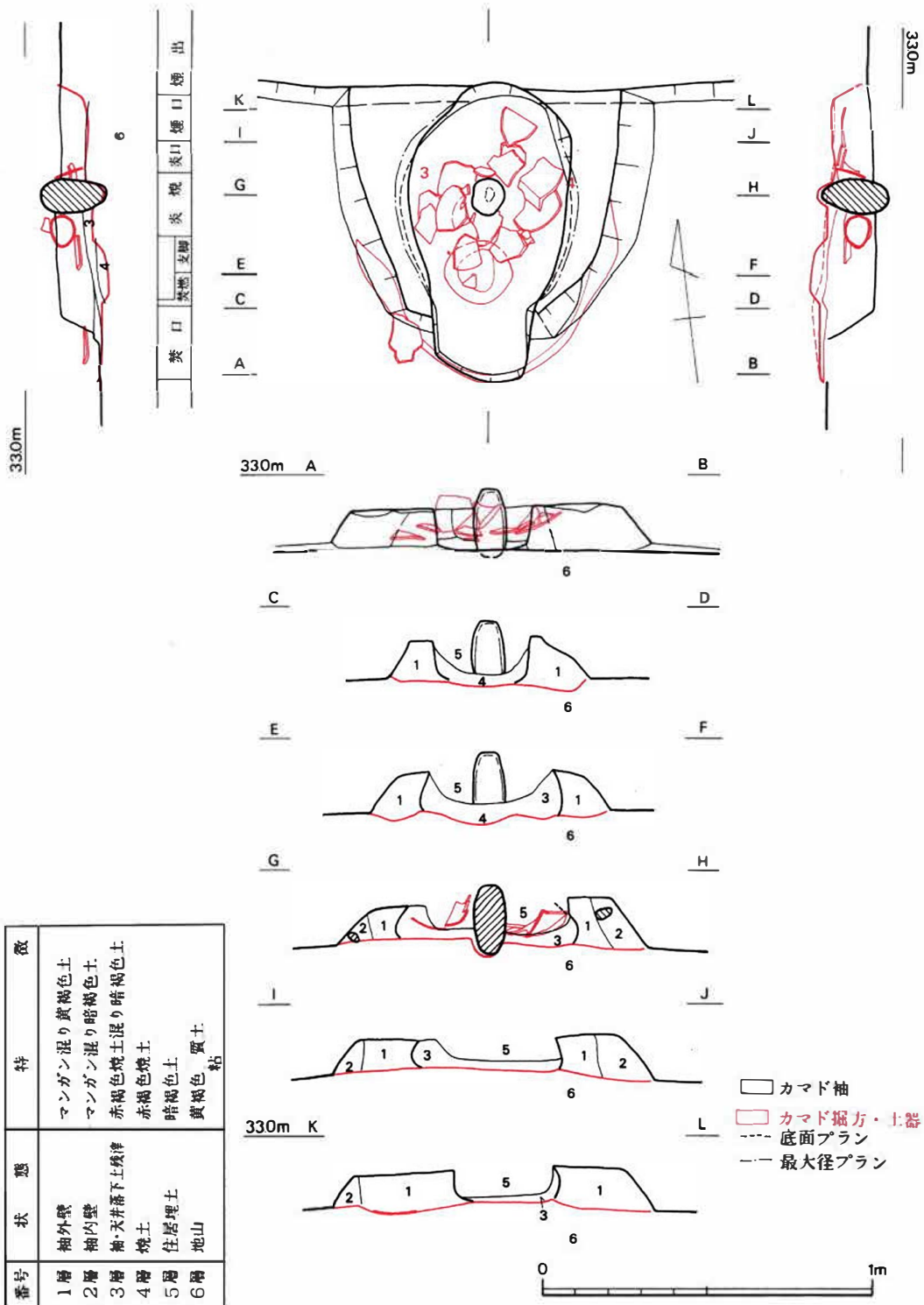
カマド（図版91・92-1、第88図、表19）

支脚は、抜去されて再配置し、その周辺から高杯などの出土があり、カマド破棄に伴う祭祀行為を確認。

前庭部・焚口室 前庭部は、明確な床面の窪みとしては確認されず、また灰・焼土などの残滓の堆積も検出せず。

焚口室は、袖下部は若干遺存するのみで、袖の大半は、天井と共に検出せず。

燃焼室 支脚は、土層縦断面図に示すように、下方径よりも上方径の方が大きい、不安定な状態で出土し、支脚中心～焚口前面（南面）間の距離は56.5cm・同～奥壁床間の距離は35.5cmを測り、焚口前面から著しく離れた位置で検出。



番号	状態	特徴
1層	袖外壁	マンガン混り黄褐色土
2層	袖内壁	マンガン混り暗褐色土
3層	袖・天井落下土残滓	赤褐色焼土混り暗褐色土
4層	焼土	赤褐色焼土
5層	住居埋土	暗褐色土
6層	地山	黄褐色質土 粘

第 85 図 14号住居跡カマド実測図 (1/20)

また、E-F断面に示すように、支脚前方で、縦19cm・横16cm・深さ5cmの円形ピットを検出。その埋土は、赤褐色焼土の4層であったが中央部が若干盛り上がっていた。

なお、支脚周辺からは、第86図510の高杯と509の甕が、袖・天井落下土残滓の3層内、あるいはその直上から出土。

以上のことから、支脚の抜痕が円形ピットであり、カマド破棄時に支脚を抜去し、抜去痕を焼土で埋めもどし、炎口室前面の炎焼部に再配置し、カマドを遺棄したものと判断。高杯などは、このカマド破棄に伴う祭祀行為に関するものと考えられよう。

焚燃部は、既述の、支脚抜痕とした円形ピット南端～焚口室後面（北端）間が2cmとわずかであることから、支脚は、本来円形ピット内の北寄りの位置に出土状態とは逆で、径の大きい方を下にして安定よく据えられていたものであろう。

炎焼部は、支脚の出土位置での北面までと考えられ、既述のように、支脚はカマド機能の停止行為として抜去し、炎口室前面（南面）に使用時とは逆位で再配置したものである。この再配置は、炎口室の印封行為と考えられ、以後のカマド破棄の前段の祭祀であろう。

炎口・煙口室、煙出部 炎口・煙口室の境は、I-J断面～K-L断面間で、最大内径が小さくなり、また縦断面に示すように、焚口から北方へ向って緩傾斜して上昇する床面が、やはりこの断面間では一段低く平坦となることなどから、I-J断面部と考えられる。

煙出部は、検出していない。削平されたものであろう。

出土土器（図版190・191、第86図、表35）

調査した住居のなかで、最も出土量が少なく、図示し得るものは4個だけ。他に破片がわずかに出土。

図版89-2に示す、No.5の斜格子タタキ目土器片は、既述のとおり、13号住居出土の甕506の破片のものと接合。

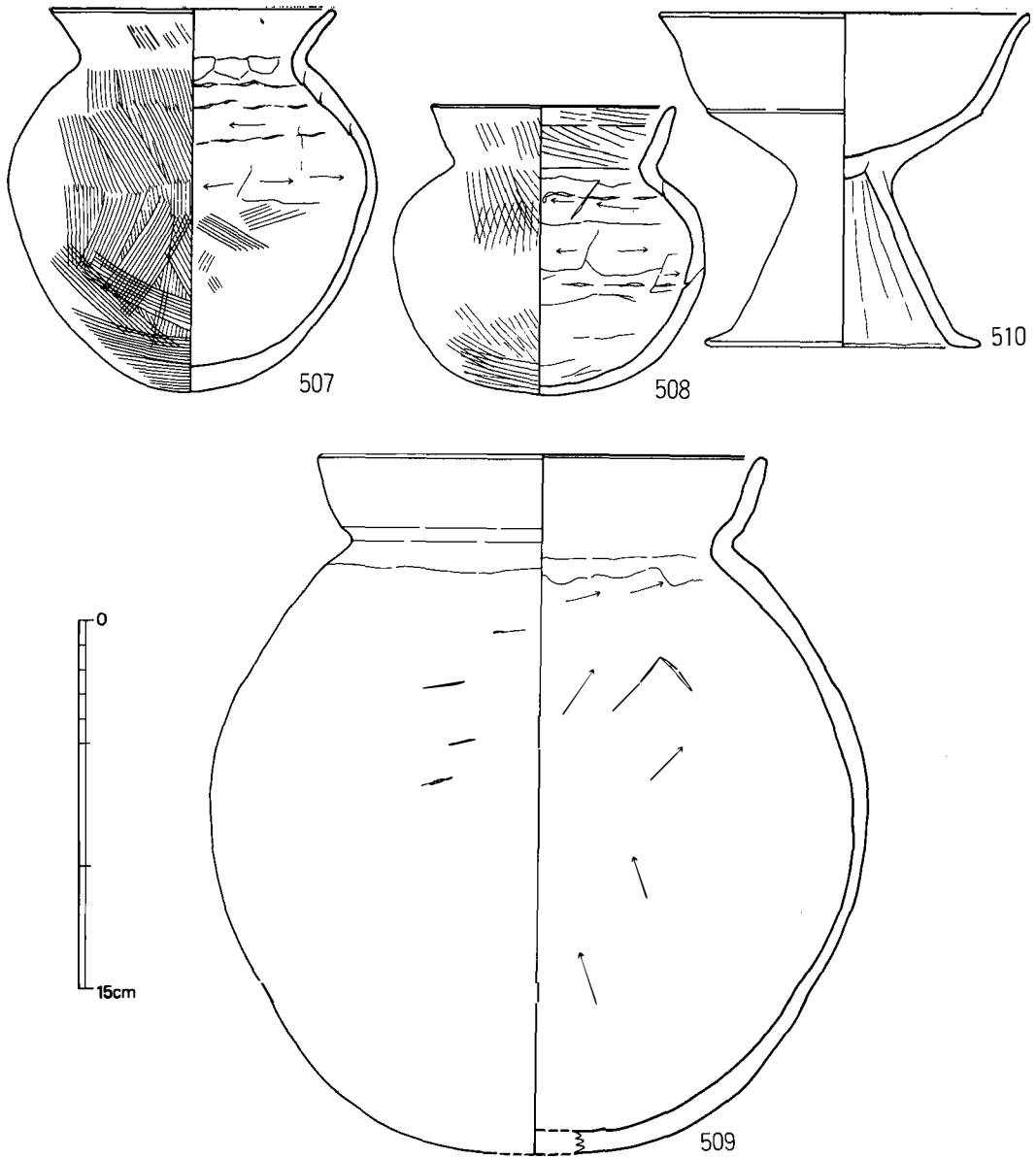
甕（507～509） 507はカマド西のNo.1に、P12内の口肩部器周残1/8の破片が接合し、口縁部器周残1/4・胴部上半同3/4・同下半同1/1までが復原できた。器内は、頸部を指で押えてナデ、胴部上半はへら削りのままで、胎土接合痕も明瞭に認める。下半は、へら削り後に一部を指ナデし、更に一部ハケ目。底部は、へら削りを施さずにナデ。器外の胴部は、ハケ目のまま。口縁部は、ヨコナデするが、器外にハケ目を残し、端部は丸い。

508は、胴部の器内は、へら削りが雑で、上半に胎土接合痕を残し、下半は更にナデ。器外は、中位をハケ目後にナデ。

509は、カマド内のNo.4（口縁～胴下位器周残1/4・胴下半同1/4強）とカマド西袖南の胴部同1/8の破片が接合し、器周残1/2弱までが復原された。器内は、頸部下の胴部最上位はナデを施し、以下をへら削りするが磨減が著しい。胴部の器外は、丁寧に縦方向へらナデ。

高杯（510） カマド内のNo.3（杯部器周残1/2強、脚部完形）と同最上層（杯部下半片）と同下層（同下半片）とが接合し、杯部上半同1/2強・同下半同3/4・脚部完形まで復原された。

杯部の器内は、上半にナデを施すが、へらナデ痕は認められず、上半から器外下半まではヨコナデ。器外は、脚部との接合部を横方向ナデ。脚部は、脚柱部器外を縦方向へらナデするが、



第 86 図 14号住居跡出土土器実測図 (1/3)

同最下位から裾部の器内までをヨコナデ。器内の脚柱部のヘラ削りは、丁寧。器壁は薄手で、丁寧に調整。

以上の土器は、近接する13号住居との関係で、その出土状態・器制を考慮しなければならぬだろう。

13号住居は、②規模が小さく柱穴が不明で、⑥東壁にカマドを設けるが、③西壁に中央土壇を配さない。また、④遺物の出土量は少ないが、完形・完形に近い土器が出土しており、①カ

マド内から脚台付埴 1 個体・甕 2 個体・甗 1 個体の、いずれも破片の状態で、②カマド北（袖左外）から埴 2 個体が完形・完形に近い状態で、③カマド南（袖右側）から甕 1 個体が完形に近い状態でそれぞれ出土している。しかし、④カマドを配した東壁とは逆の、西壁からの出土はない。

14号住居は、①規模が小さく柱穴が不明瞭で、②北壁にカマドを設けるが、③南壁に中央土壇を配さない。また、④遺物の出土量は少ないが、完形・完形に近い土器が出土しており、⑤カマド内から甕 1 個体が破片で、⑥カマド西（袖左側）から甕 2 個体が完形に近い状態で、⑦カマド東（右袖側から高杯 1 個体が完形に近い状態で、それぞれ出土している。しかし、⑧カマドを配した北壁とは逆の、南壁からの出土はない。

以上のなかで、13号住居の⑨～⑫・⑬・⑭と、14号住居の①～③・④・⑤とは、同じ一致する特徴としてよい。しかし、⑥と⑭では破片でという出土状態が一致し、個体数が一致せず、器種で一致するのは甕のみで、他の器種は一致しない。同様に、⑨と⑫では完形に近い状態・個体数が一致し、器種で一致しない。同様に、⑩と⑬では完形に近い状態が一致し、器種が一致せず、同一個体である甕506の出土ということでは一致し、13号住居ではその大半が略完形で・14号住居ではその破片 1 個のみが破片という出土状態では一致しない。

以上のことから、13号・14号住居間には、住居の集落における機能において一致し、この一致するが故に近接し、住居・カマドの主軸を意識的に異らせたことは明らかである。

また、その住居の機能が一致するが故に、住居遺棄・カマド破棄時の土器群の再配置には、細心の配慮がなされたことも明らかである。

更に加えて、⑥と⑭、⑨と⑫、⑩と⑬は相互に器種・出土状態で一致・不一致（許容・非許容）と相互補完の関係にあり、すべてが相互関連のなかで意識されていることも明らかである。

杯が、共に出土していないことや、甕506の出土などがいないことなども、以上のことを含めて、検討すべきであろう。

なお、同様の住居に、5号住居と6号A（新）住居があり、これらを含めて、あるいは15号住居も含めての再検討が必要であろうが、紙数の関係で、これを省略するが、これらのことによって、他の同時期の集落と、塚堂遺跡（集落）との著しい差位（遺物に関しては外来土器・硬質赤褐色土器・須恵器の出土と再配置祭祀行為など、遺構に関しては住居内外各種施設の配置など）も明らかにし得るであろう。

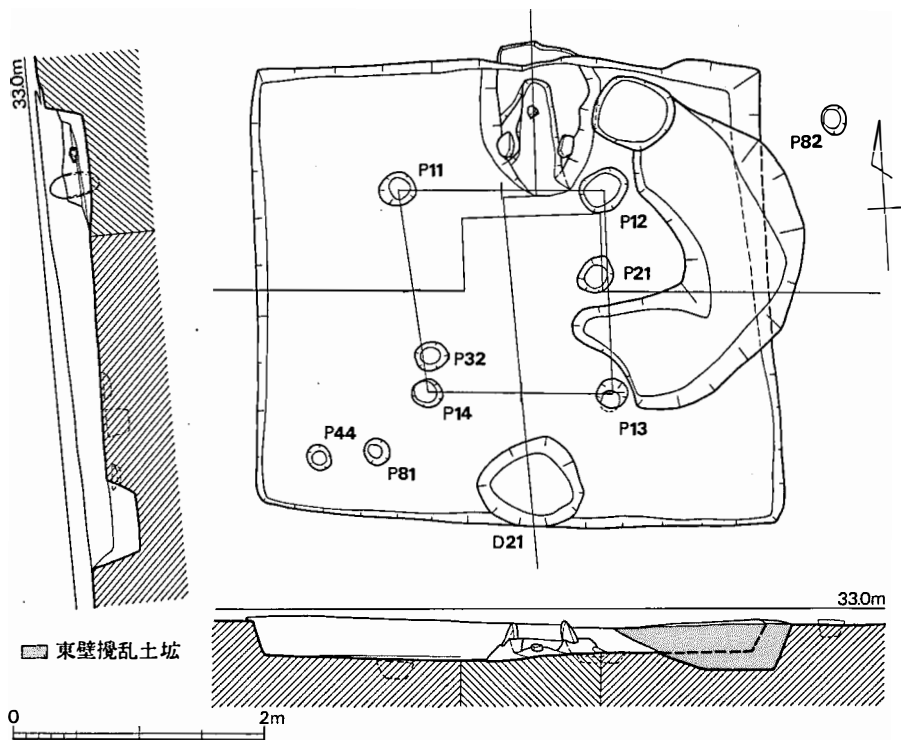
15号住居跡（図版92-1～98，第87図，表20）

調査区北半部中央で検出。北壁中央部やや東寄りに、北向きのカマド付設・弥生時代の9号溝状遺構を切り、東壁攪乱土壇に切られる（図版9）。

住居内からは、P11～14・21・32・44およびD21などを検出。

主柱穴配置は、ほぼ住居中央部に整然と設け、主柱穴間は、P14-13だけがやや小さく、他の3主柱間はほぼ一致するに等しい。

主軸柱穴は、東西主軸に北接し、ほぼP12-13柱列下に配す。



第 87 図 15号住居跡実測図 (1/60)

主軸間柱穴は、P31が未検出で、P32はP14に近接し、ほぼP11-14柱列下に配す。

対角柱穴は、P44のみを検出。北東壁隅部のP42は、新しい土坑によって消滅したのか。

その他の柱穴は、P81がP12-14を結ぶ対角線上に配され、P82は住居外で検出。

南壁中央土坑は、南北O直下に整然と配す。

なお、住居を切る東壁側の大きい土坑は、住居検出面ではプランを確認できず、図版93・94に示すように多量の河原石が群在していた。これらの河原石群を除去後に、住居床面レベルまで掘り下げて土坑プランが確認できたものであるが、石群の範囲と確認プランはほぼ一致し、住居埋没後に掘られた土坑内から石群が出土したと判断してよいだろう。

石群はその大部分が土坑底から浮いており、石群に混在した土器は、大半が弥生時代のものであるが、第142図816~819の弥生土器片他も含まれることから、15号住居の埋没が進んで、若干凹地状を呈していた段階で、攪乱土坑が設けられ、石群を土器と共に遺棄したものであろう。

カマド (図版93, 94-1, 95-2~98, 第88図, 表20)

前庭部・焚口室 焚口室の両袖石は、良く旧状を残し、共に82°で若干内傾。袖石の径に比べて、掘り方の径は大きく、底部から5cmほど浮いている。袖石が、9号円形周溝埋土内に配されているため、やや大きく・深い掘り方を設けて、4層で埋めたものであろう。C-d断面に示すように、掘り方はカマド床基盤土の6層から掘り込む。

前庭部の基盤も掘られているが、前庭部床面の6層上面は平坦。A-C断面・縦断面の見透

しに示すように、前庭部にも両袖を設ける。

燃烧室 燃烧室～煙口室にかけて、住居埋土の、1層中から第89図515の高杯片が出土したが、いずれも袖遺存上面レベルよりも若干であった（図版95-1）。

支脚部と考えられる室内中央部の床面からは、軽石が出土したが、現存床面高は6cmで、支脚としての実用性は疑わしい。支脚の掘り方が検出されていないことから、安定のある大きめの河原石を支脚として使用し、これをカマド破棄に伴って除去した後で、カマド残滓の3層中に別途軽石を、凝制的に再配置したもののか。

炎焼室と炎口室の界は、不明瞭。

炎口・煙口室 縦断土層図に示すように、炎口室は、前庭部から緩傾斜してきた床面が、急激に傾斜を変えるG-H断面部までと思われる。

煙出部 煙出部は北壁外に17cmの張り出し部を検出したが、幅は約60cmと著しく広い。9号円形周溝埋土中であるため、大きく掘り方を設けた後で、煙出部を構築したもののか。

出土遺物（図版191・192，第89図，表35）

住居に関係する土器の出土量はわずかで、東壁攪乱土壇内からの弥生土器の方がより多く出土。図示したものは、513がその東壁攪乱土壇内出土のもので、これ以外のものは、すべて攪乱土壇以外の住居内出土のもの。

甕（511～514） 512は、胴部器内のヘラ削りは上位以下で、最上位はナデを施しただけで、胎土接合痕の大半を残す。ヘラ削りの位置が最上位に及ばないことと共に、ヘラ削りの方向なども、他の例と著しく異なる。球形の胴部から外反する口縁部の、端部は丸い。

513は、既述の東壁攪乱土壇から、多数の石群と共に出土（図版94-2）。やや広口で、短口縁。

514は、倒卵形状の胴部で、器外のハケ目は整然とは施されていない。

高杯（515・516） 515は、大形。器内外共に磨滅気味であるが、器内の杯上半はハケ目のままで、ヘラナデは施さず。器外の上半・下半の屈折部の段は、あまり明瞭ではなく、下半から口縁部まで内弯し、端部が外傾。端部上面は、平坦でわずかに凹む。

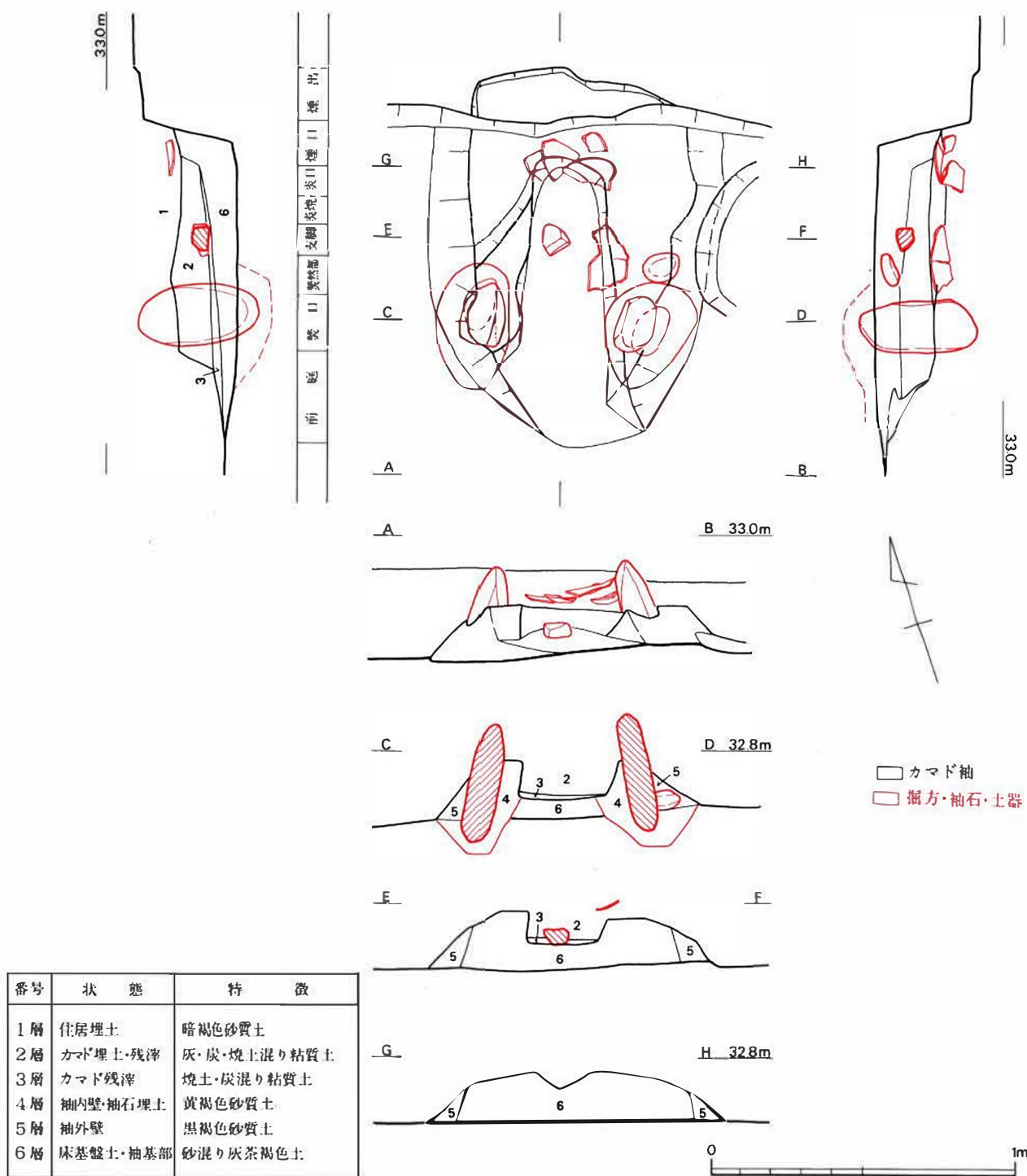
516は、大形に近い。器壁は厚手で、端部が突出。

杯（518） 器内のヘラナデが丁寧で、底部は焼成後に穿孔。体部中位から口縁部にかけて、器壁が著しく厚手で、端部は更に外傾。

手捏土器（517・519） 517は、器内は、体部から口縁部までヘラ削りを施し、器外は体部をヘラ削り後、その一部をナデ。端部から口縁部の器外までは、ヨコナデではなく、ナデのみで、端部の歪みは著しいが、上面は平坦で下傾。杯と異って、器内にもヘラ削りを施すこと、端部含形状、器外のヘラ削り部の一部をナデることなどの特徴と、他の住居と異って、カマド内をめて住居からの甗の出土がないことなどから、この土器は甗のミニチュアか。前述の特徴も、むしろ甗の調整法と一致。

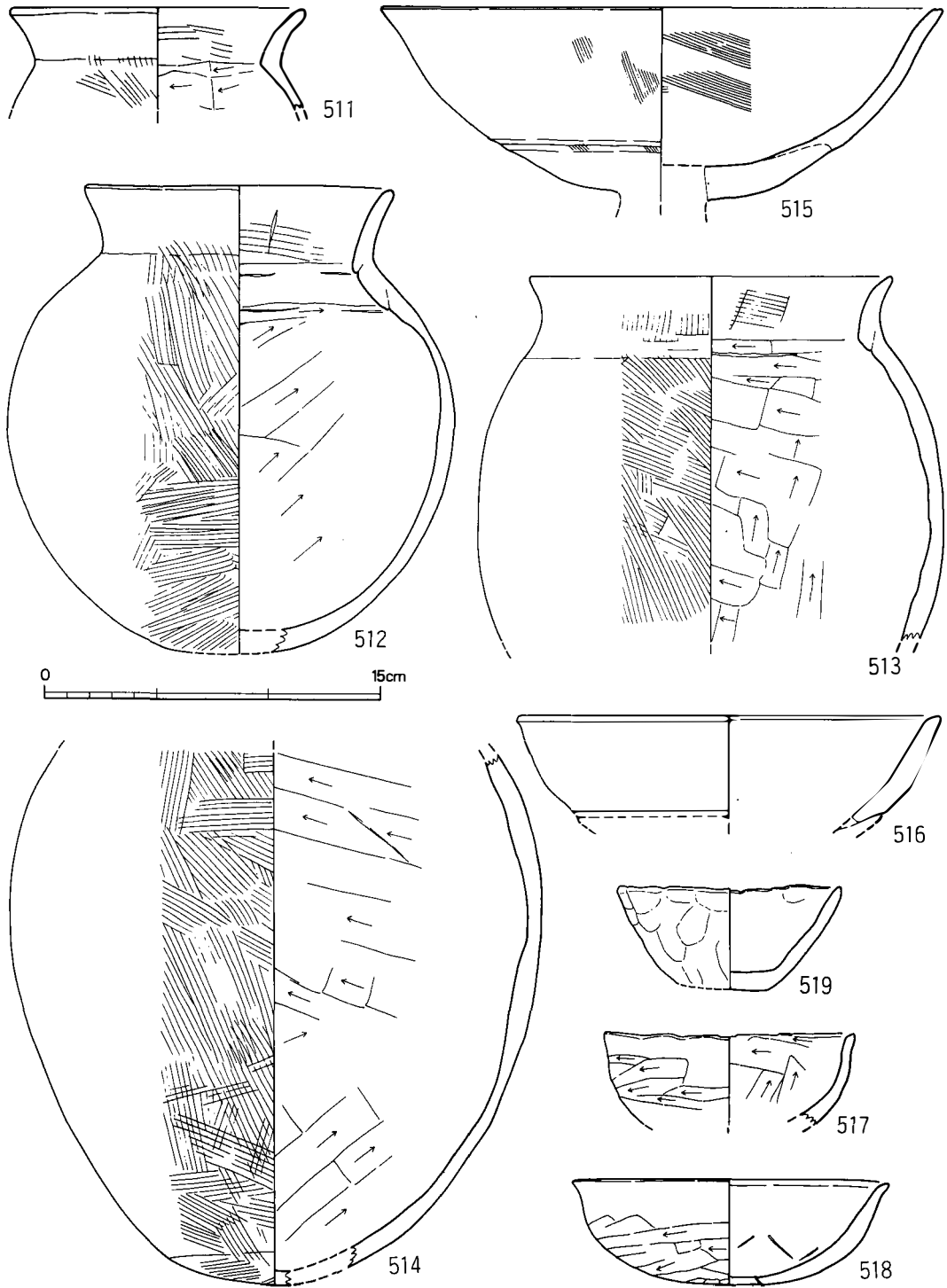
519は、口径11.0cmを測り、甗のミニチュアか。

以上のなかで、513は既述のように東壁攪乱土壇から、石群・弥生土器片群と共に出土したものの。この石群は、11号B（古）住居構築の際に、10号円形周溝内の石群（図版67-2）が出土



番号	状態	特徴
1層	住居埋土	暗褐色砂質土
2層	カマド埋土・残滓	灰・炭・焼土混り粘質土
3層	カマド残滓	焼土・炭混り粘質土
4層	袖内壁・袖石埋土	黄褐色砂質土
5層	袖外壁	黒褐色砂質土
6層	床基盤土・袖基部	砂混り灰茶褐色土

第 88 図 15号住居跡カマド実測図 (1/20)



第 89 図 15号住居跡出土土器実測図 (1/3)

したために、一括して、この15号住居内に投棄した可能性が強い。このことは、513が、11号住

居出土の384などに類似することからも言える。

しかし、その他の土器も11号住居出土のものと類似する。甕 511は370・386に、512は391・392に、高杯 515は399に、516は395に、杯 518は464にそれぞれ類似する。

これらのことから、11号住居と15号住居は、単に出土遺物が時期的に近いと言うだけでなく、住居相互の機能も含めた関係も密接なものがあると言えよう。このとき、両者間の遺物出土量・出土状態・住居規模の著しい差異の実態が明らかになる。このことは5・6 A (新)・13・14号住居についても言えることで、今後の検討課題である。

16号住居跡 (図版99・100, 第90図, 表21)

調査区北半部で検出。9号円形周溝を切る (図版9)。

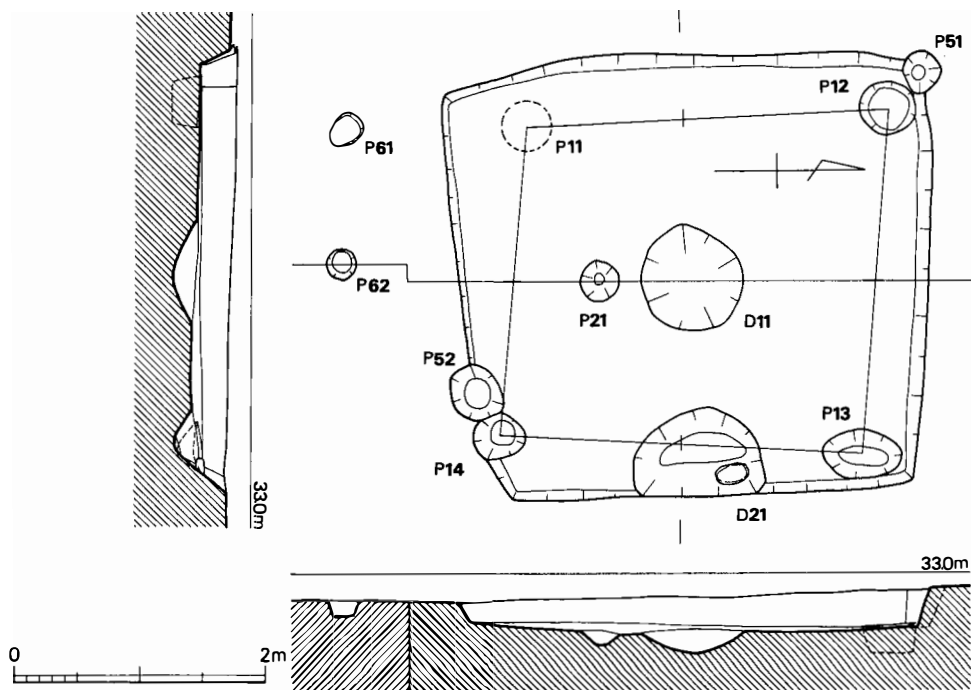
住居内から、P12~14・21・51・52・61・62および、D21を検出。

主柱穴配置は、P11が確認できなかったが、P11-12間がP14-P13間と等しく、また南北主軸~P11間が、同~P14間と等しいとして、一応のP11の位置を復原した。

P11の位置を、このように復原するとき、東・西両壁方向と主軸方向は一致し、北壁方向と東西O方向は一致するが、南壁方向と東西O方向とは一致せず、南壁方向のみ特異である。

主軸柱穴配置は、D11の南側で、床中央よりも南半部に設ける。

施設柱穴配置は、P61-62とP11-14方向が一致し、西壁は、全長の1/4ほどの南側寄り部が、他の3/4の北側方向に対して、若干屈折するが、この1/4の屈折方向の延長線上に、P



第 90 図 16号住居跡実測図 (1/60)

62が位置し、P61は主軸に西接。

これらのことと、前述の南壁の特異性・P21の位置などから、P61・62は住居出入口の施設柱と判断してよいと考えられる。

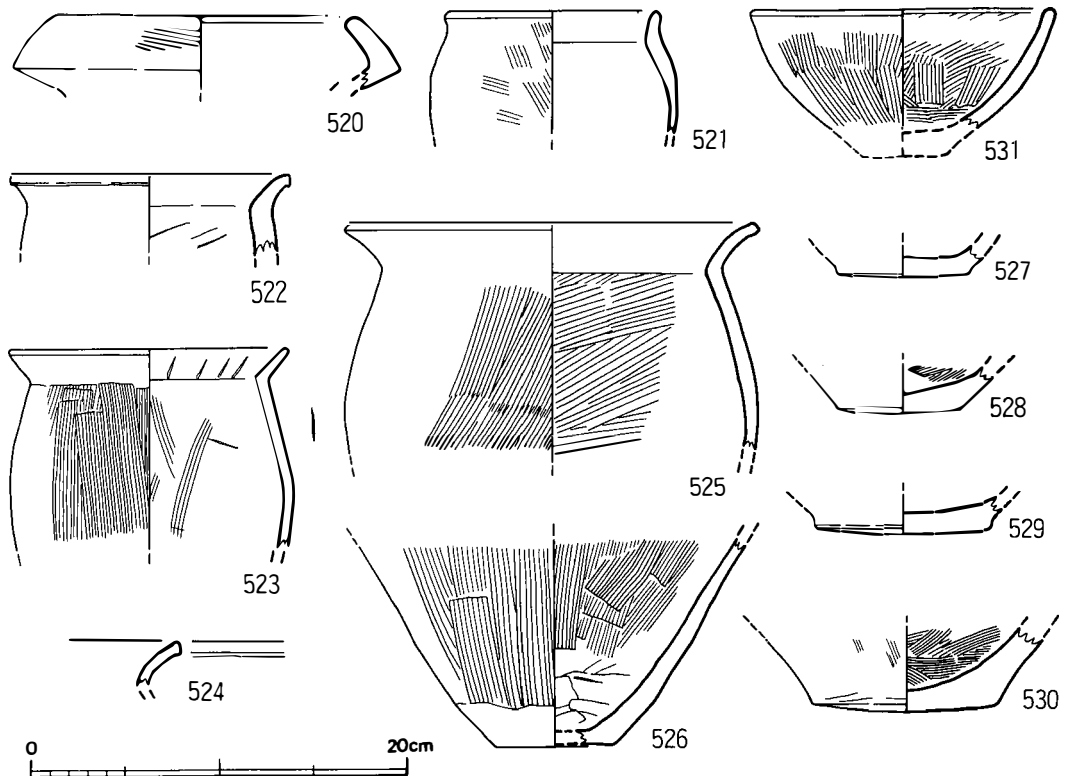
土壇配置は、D11が住居中心に、D21は東壁中央の東西O下に、設けられる。D11内の埋土は、黒色灰層。

出土遺物（図版192、第91図、表35）

出土遺物は少なく、完形にまで接合された土器はない。表35で、下層と表記したものは、住居検出上面から、-15cm～床面までに出土したもの。他は同0～15cmまでに出土したもので、床面からの出土はない。

壺（520・527・529） 520は、所謂、袋状口縁の壺。口縁部下半から上半、および器外端部にかけての、ヨコナデは丁寧で、器内の上・下半の屈折部の、指押え痕も残さぬ。器外上半はハケ目のままで、上・下半の屈折部のヨコナデは丁寧。シャープな稜有り。口縁部の下半は、頸部から大きく外傾し、上半はわずかに内反。

甕（521～526・528・530） 521の胴部器内は、丁寧にナデを施し、最大径位以下の器壁が、著しく薄い。



第 91 図 16号住居跡出土土器実測図（1/4）

523の器内は、胴部のヘラナデが丁寧で、凹凸がなく、一部にハケ目を加え、口縁部はヨコナデを施すが、ハケ目木口痕を残す。

526の器内は、胴部最下位にヘラナデを加え、底部は更に指ナデ。器外は、胴部最下位を更にヘラ削り様に強くヘラナデし、平底。

鉢 (531) 口径16.2cm・器高約7.8cm。端部は丸い。

以上のなかで、甕の口縁部は、521・523は共に直線的に外傾し、端部は丸い。522・524・525は、共に大きく外反し、端部はシャープな稜有り。また、口径と胴部最大径では、522では前者が大きく、523・525では一致し、521では後者が大きい。これらのことから、甕には各種のタイプが併存使用され、平底でも526のように胴部をヘラ削り様にヘラナデし、壺・甕の底部には、既にやや凸レンズ状のものが多く認められるようになった時期の資料と言え、住居の時期もこれに近いものであろう。

17号 A (新)・B (古) 住居跡 (図版100～110, 第92図, 表22・23)

調査区北半部の中央北端で検出。北壁中央部に、北向きのカマド付設。弥生時代の9号円形周溝を切る (図版9)。

住居は、主柱穴が4個、カマドが北壁中央部に1基しか検出しなかったが、その他に、南壁を除く各壁に近接して、溝状遺構を検出し、南壁中央土壇が2段に掘られていることなどから、カマド遺存住居は、古い住居の主柱穴を再使用して、規模を拡大・改築したものと判断。

以下の説明では、新期のものを17号A住居跡 (17A住と略)、古期のものを13号B住居跡 (17B住と略)とし、検出した柱穴・土壇なども、17A住に属するものをAP・AD、17B住に属するものをBP・BDなどを区別。

17A住では、AP11～14・AD21とカマドを検出。AP61は、BP61を重複使用、AD21と共に、BD21も埋めることなく再使用したもので、AP81・82も住居に関係あるものと判断。

17B住では、BP51～54・BD21・BM21～23を検出。BP11～14・61は、前述のように、AP11～14・61として、再使用されたと判断。

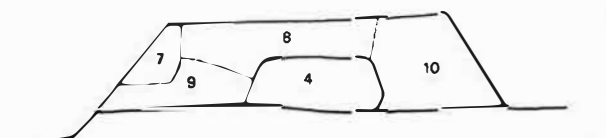
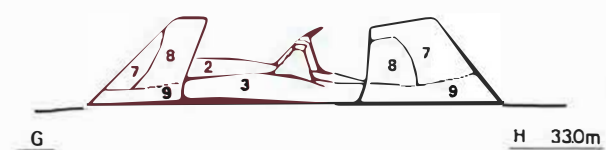
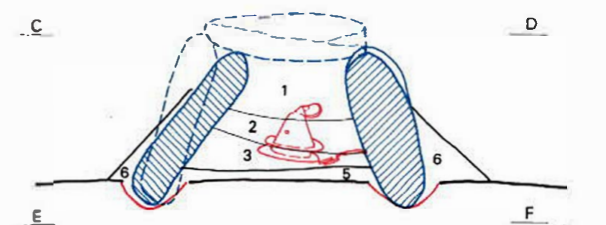
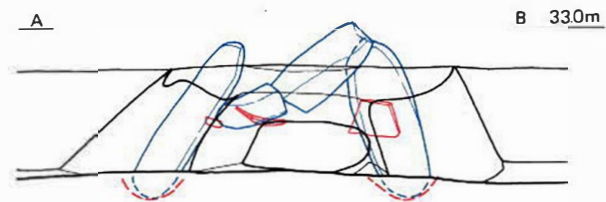
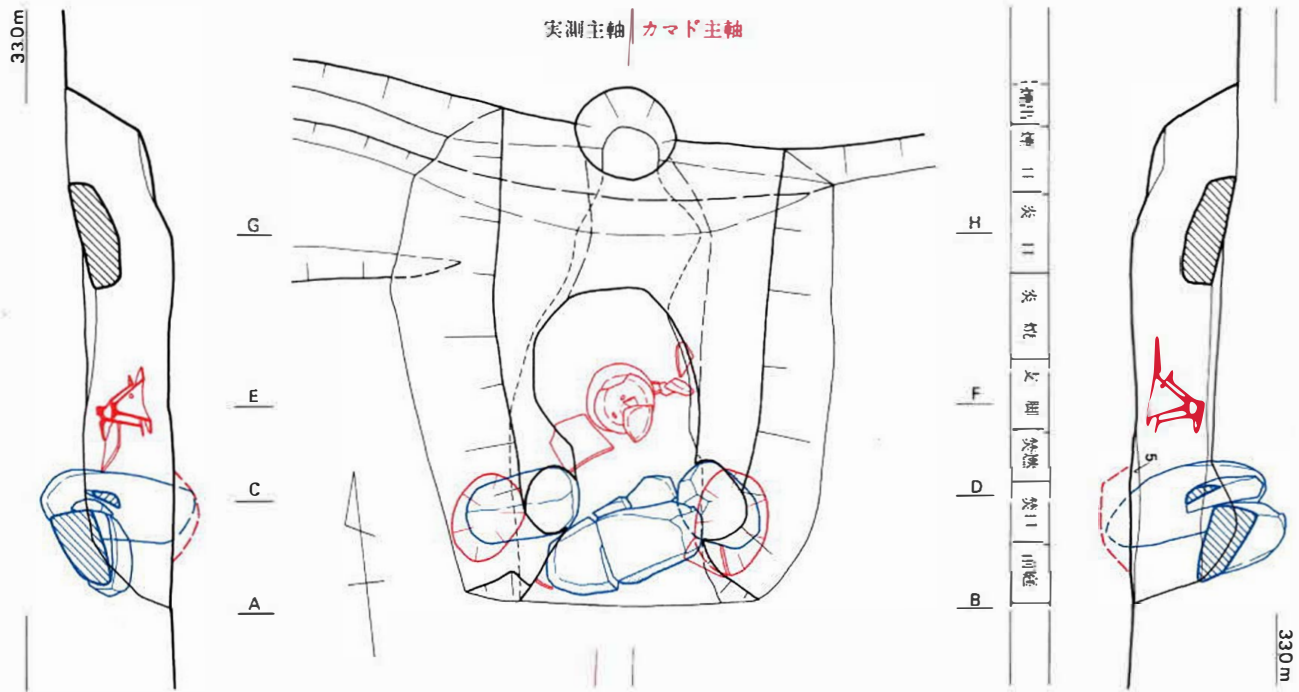
以上の判断は、主に埋土の相違からのものであるが、その新・古関係は、以下のことからも言える。

主柱穴 配置は、南北Oを主軸(長軸)とする平行四辺形を呈し、南側柱列と南壁方向は一致。しかし、他の柱列と、それぞれに近接する壁方向とは一致せず、むしろ近接する溝状遺構方向とが一致。

このことを表22・23の計測値で示せば、つぎのとおり。

南壁とBP11・14間は1.31m・1.28mで、一致するに等しく、BM22とBP12・13間は1.50m・1.40mで、近似。同様にGM23とBP13・14間は1.70m・1.83mで、ほぼ等しく、BM21とBP11・12間は1.98m・2.05mで、ほぼ等しい。

また、PB11～12間とBP51～東西O間が共に3.30mで、一致し、BP14～13間とBP52～南北O間・BP52～東西OとBP53～南北Oが、一致するに等しく、BP54は南側柱列上に・



- 袖・天井
- 袖・天井石
- 掘方・土器
- 赤変部

番号	状態	特徴
1層	カマド・住居埋土	暗褐色砂質土
2層	灰・カマド残滓	灰褐色土(焼土ブロック・灰混り)
3層	灰カマド残滓	茶褐色土(焼土ブロック・炭化物混り)
4層	灰残滓	暗灰黄色粘質土
5層	カマド床基盤土	黒褐色土(焼土ブロック・炭混り)
6層	袖	黒褐色土(灰混り)
7層	袖	暗黄褐色粘質土
8層	袖・天井	暗茶褐色土(焼土ブロック混り)
9層	袖基部	黒茶褐色砂質土(灰混り)
10層	袖	暗黄褐色粘質土(焼土ブロック混り)



第 93 図 17号 住居跡カマド実測図 (1/20)

B P 61は東側柱列上に、配されている。

加えて、B D 21は南北主軸直下に配されている。

以上のように、17A住は、極めて整然としたプランを呈しており、南壁以外の各壁下に、B M 21～23を配していたものと言えるが、支柱穴配置は、住居中央部には設けられていない。南側柱列～南壁間よりも、北側柱列～北壁（B M 22）間が0.15cm前後大きく、東側柱列～東壁（B M 23）間よりも、西側柱列～西壁（B M 21）間が0.25cm前後大きい。このことは、後述するように、カマドに改築が認められないことから、17B住以来のカマドを、17A住でも使用したものと判断され、17B住構築時に東袖を南北主軸直下に配することで、B D 21配置への規制（南北主軸直下の配置）に代えたものとする。このことによって、東袖南端～B P 13間がより大きくなり、カマド以東～東壁間の、床面使用空間の拡大を意図したものであろう。また、このようにカマドが北壁部で南北主軸以西に配されたことと、前述したように、北側柱列～北壁（B M 22）間・西側柱列～西壁（B M 21）間が大きいこととの関連も深いものと思われる。

17A住では、A D 21がB D 21同様の規制で配されるが、17B住以上にカマド配置を考慮した住居の拡張が行なわれており、整然とした支柱穴配置と合致しない壁プランである。

東壁では、東壁とA P 13・14間は2.04m・2.02mで、特に北側柱列延長以北の拡張が著しい。北壁では、カマド以東では報拡張はされず、同以西での拡張が著しい。この以西でのみの拡張は、東壁よりも西壁側が著しく拡張されていることと無関係ではないであろう。

以上のような、17B住から17A住への南壁を除く拡大は、単なる床面の拡大ではなく、あくまでも、南壁中央土壇の配置に留意しながらも、既にカマドの使用が定着し、換言すれば、カマド配置が住居構造を規制する段階に一部至ったものと言えよう。このことは、後述するように、出土した遺物のなかに、古式須恵器の特徴を認める土師器の甑（第100図597）や古式須恵器破片（第144図830・832～834）があることや、カマド破棄祭祀が認められることから肯首される。と同時に、弥生以来の砲弾型のミニチュア土師器の甑の出土や、南壁土壇部の一括出土土器群のあり方などは、その段階の過渡期が、17B住～17A住の段階であることを示唆している。

カマド（図版106～110、第93図、表22）

前庭部・焚口室 焚口袖石以南の前庭部でも、東西両袖を検出し、東袖部で出土した甑上半部片（図版107-1）は、出土番号No.58-2の破片と接合（第100図597）。

焚口室は、袖・天井共にほぼ同形大の河原石を使用。天井石は中央で半折し、東袖側は袖石頂部に接していたが、西袖側は袖石南面に落下した状態で出土。また、天井石南面（焚口室南面）と北面（焚燃部南面）は、石の表面が加熱によって赤変し、特に北面は図版108-1に示すように剝離していた。

袖石は、C-D断面図に示すように、両袖石共に内傾した状態で検出され、傾斜角は東袖石で72.5°・西袖石で52.5°。天井石東端は5cm前後欠損し、その欠損部は未検出であるが、当初の全長（天井石横幅）は、約45cmと考えられ、両袖石を正立させた状態での両袖石内側間はこれよりも大きく、天井石を架すことはできない。C-D断面図には、青の破線で、両袖石共に

傾斜角72.5°での焚口室構築状態を復原して示したが、石組みの東←→西方向の安定はこの状態で最も安定し、南←→北方向の安定は前庭部両袖と焚燃部袖・天井の構築で保たれると考えてよいだろう。このことは、袖石・天井石が検出されない例でも、支脚から袖先端までの距離が著しく大きい場合、焚口室の構築に際し、天井部だけ石を使用して架した例もある可能性を示唆するものである。

燃烧室 石製支脚は、カマド内および住居内からも出土せず、また、燃烧室内床面の支脚掘り方も検出されていないが、室中央部で高杯が2個体重なった状態で、若干南東方向に傾いて出土（図版108・109）。

下段の高杯（第97図560）は、図版110-2に示すように脚部が完存し、杯部を欠くもので、脚裾部は床面（5層上面）から5cm浮いて、灰・カマド残滓の3層上面からの検出。

上段の高杯（第97図559）は、図版108-2に示すように、脚部が完存すると共に、杯下半部も器周5/8までが遺存し、杯上半部を欠くもので、脚裾部は灰・カマド残滓の2層上面からの検出。

焚燃部の南面（焚口側）天井土は、焚口室天井石北面が加熱によって剝離はしていたが、その剝離外面部は天井石南面のように赤変はしていないことから、天井石上面だけでなく、その北面にも接着させて架したものと判断。

炎熱部の北面（炎口室側）天井土は、縦断図に示すように、わずかに遺存するだけ。

炎口室 袖・天井共に旧状のまま、室高は13cm。住居北壁側の周溝北壁下までを、炎口室として計測。

煙口室・煙出部 住居北壁下（カマド奥壁下）までを煙口室、それ以北を煙出部として計測。煙口室の埋土は、下半部が炎口室埋土と同じ灰残滓の4層で、上半部埋土は住居埋土と同じ1層であった。このことから、炎口室内だけでなく煙口室内の下半部までを、燃烧室内の灰残滓を意識的に移動させて印封したものと判断。

出土遺物（図版192～198、第94～101図、表35）

住居上面プラン検出レベルから、南壁中央土壇A D21付近では5～6cm下で（図版101）、北壁カマド東では10cm下で（同105）、それぞれ完形の土器が集中して出土し始めたので、両土器群はそのままにし、前述レベルから15cmまでに出土した破片だけを上層として収納し、以下床面検出までに出土した破片で、第92図に出土状態を図示した遺物以外のものを下層として若干収納した。

したがって、上層出土とした破片のなかで、一部が前述の両土器群中のものと接合し、完形・完形近くにまで復原された例が若干ある。

ところで、土器群は、前述の南壁A D21群（図版102-2）・カマド東群（同104-1）の他に、住居中央西半部群（同103-2）・西壁側群（同104-1）があり、東壁B M23周辺からも若干の遺物が出土している。

各土器群からは、完形・完形に近い多量の土器が出土したため、以下の説明では11号住居出土土器の仮分類を借用。

なお、表35では西壁側群も中央群として記入しているので、詳細は第92図の出土番号から判断されたい。

甕 (532~545・598)

I-1 bは532で、器内の頸部直下はナデのみで、器外は口縁部から胴上位までをヨコナデするが、ハケ目を残す。11号住居出土の埴362~364などの器形の特徴の残影下で、法量的に、小形の甕としての器形への移行期の特徴をよく示しており、器制的には埴とすべきかも知れない。

I-1 cは533。器内の頸部~胴部最上位まではナデのまま、器外の胴部最大径位直上では、ハケ目方向の差異によって、わずかな稜を認める。C類としたが、口縁部の下半は直立気味で、b類に類似する特徴もあり。

III-1 cは543。口縁部の器壁は、著しく薄手である。器外のハケ目は細く、丁寧に施す。

III-2 bは544。器内の胴部は、ヘラ削り後に、最上位に指先によるナデを加える。器外の胴部は、最大径位以下に細いハケ目を加え、わずかな稜を認める。

III-aの538は、器内は、口縁部にヨコナデするが、ハケ目木口痕を残す。胴部は、最上位にはヘラ削りを施さず、一部をナデるのみで、胎土接合痕をそのまま残す。

III-aの539は、口縁部の下半が外傾せずに内反し、上半が外反。所謂、二重口縁の特徴の残影がわずかに認められる例で、上層から出土。

II-bは534。器内の胴部は、最上位はナデのみで、ヘラ削りを施さない。

III-bは535~537・541・542。541・542は上層出土。

II-cは540。上層出土。

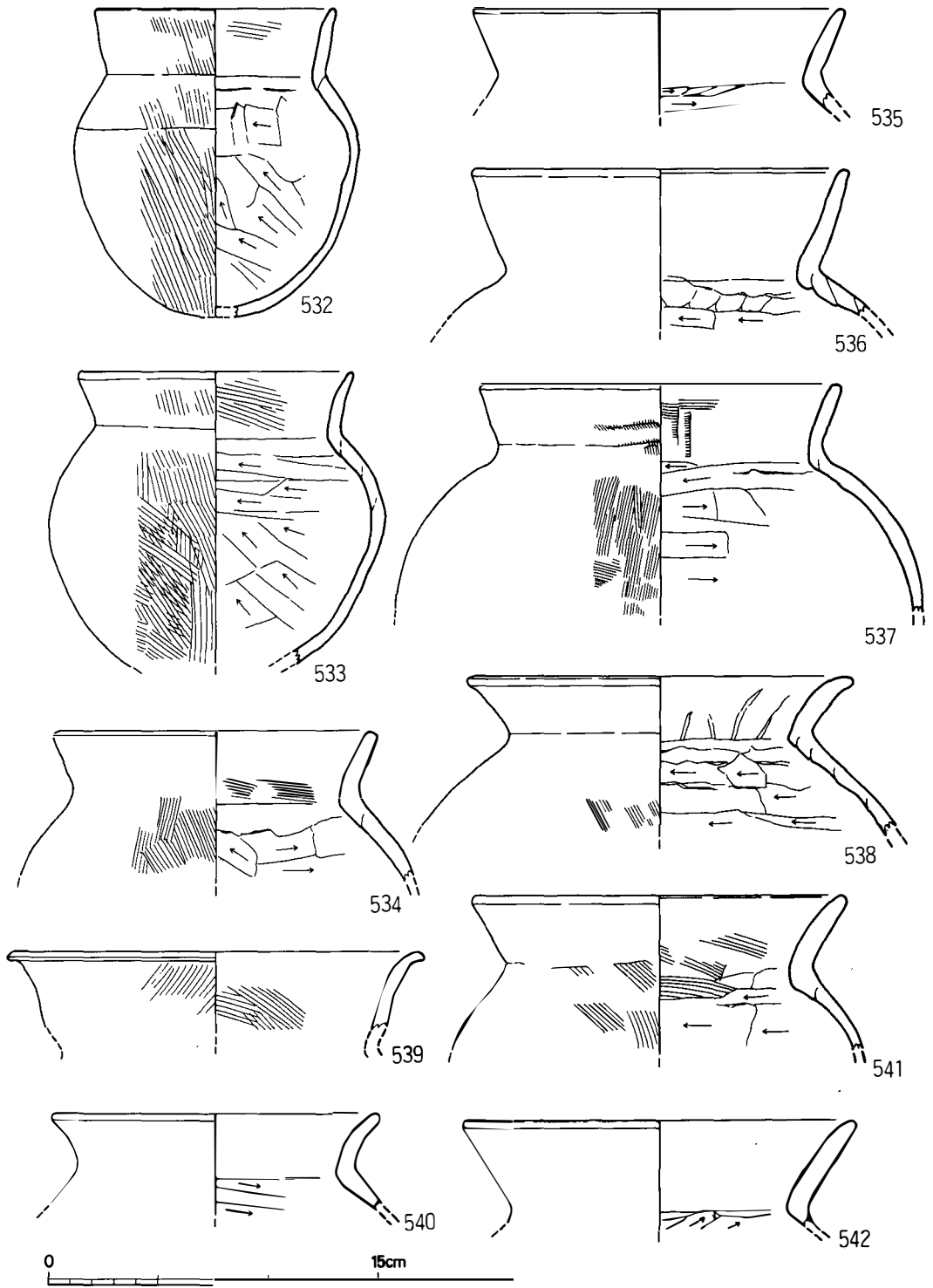
以上のように仮分類した甕を、以下では出土状態を含めて説明。

a類の538とb類の536は、共に胴中位以下を欠失・口縁~胴上位完形の状態で、カマド東袖近くで出土し、袖からの距離も等しい。Na18は図示しなかったが、甕の口縁部片で、近接して、床面から出土。この3例の甕以外で、同じカマド東群で出土したものは、杯のみで、いずれも完形(図版105)。カマド東群では、538を伏せた状態で、536を据えた状態で、共に胴中位以下を欠損し、完形の杯群・杯部のみ完形で脚部の欠損の高杯と共に、意識的に再配置したもの。この際には、甕・高杯は欠損・杯は完形でという、両群内での明瞭な器種間の補完関係も配慮されている。加えて、538と536が逆位で出土したことは、a類は伏せた状態で・b類は正位の状態という配慮もされており、これは器制間の補完関係と言え、17号A(新)住居で主に使用した器制と、17号B(古)住居以来使用してきた器制との認識がなされたうえでの再配置。

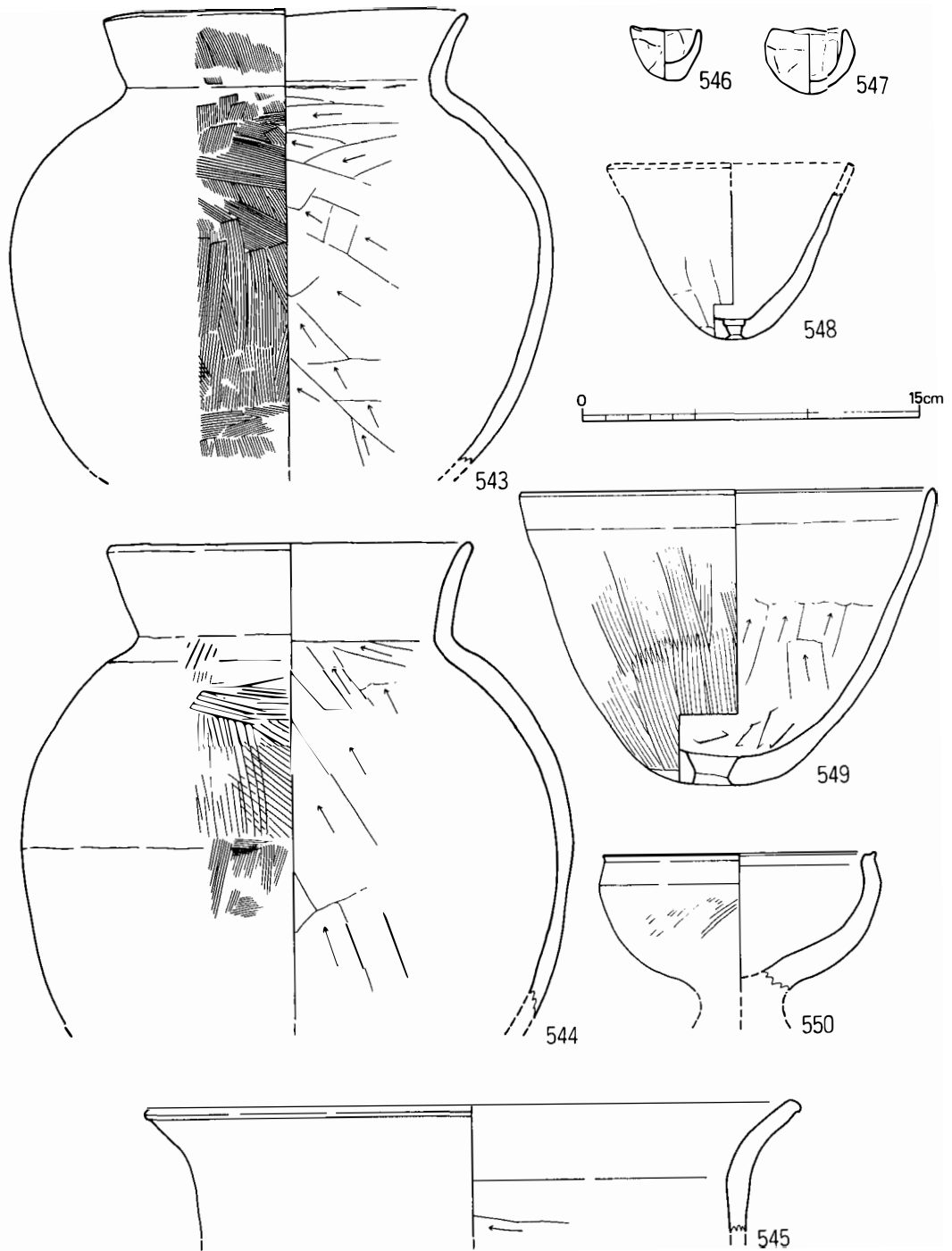
その他のb類では、532と537が中央から、544が中央とM23北から、いずれも破片で出土。c類も含めて、甕では完形・完形に近い状態での出土例はないことから、甕は破碎後に散布(再配置)。

c類の544は、肩部破片のみをBM23北に、その他の破片を中央へと散布。

以上のことから、甕は欠損・破碎後に再配置され、この際には器制への配慮がなされ、それは土器編年上での新・旧の差異とほぼ一致。また、後述する須恵器甕も、破碎小破片が再配置されているが、南壁土壇AD21群からの出土。



第 94 图 17号住居跡出土土器実測図① (1/3)



第 95 図 17号住居跡出土土器実測図② (1/3)

しかし、このAD21群からの土師器甕は、1片も出土していない。土師器と須恵器の両甕が、

いずれも欠損・破碎された状態で再配置されていることは、共に甕であるという器制に対する許容行為で、土師器甕と須恵器甕が出土群を異にすることは、同様に非許容行為であろう。

上述のことは、甕と杯をカマド東群でみると、甕は欠損でという非許容行為・杯は完形でという許容行為と換言することもできる。

高杯 (550～564) 550は、上層出土の破片で、混入として除去すべきであろう。

〔杯部〕

II-1 a は551。杯部と脚部との挿入栓に、図示したように脚柱部器内の刻み目が転写されているのが観察される。

II-1 b は554。

II-1 c は552・553。553は1 bにも似る。

III-1 c は561。口径23.0cm・脚裾径17.4cm・器高約15.9cm。器内から器外の上半部上位までは、ヨコナデを丁寧に施すが、器内にハケ目を残す。器外は、上半中位が横方向にナデ、下位が横方向のヘラ研磨。

II-2 d は557。

II-3 d は555・556。556は3 bにも似る。

III-2 d は558。

〔脚部〕

II-2 a は564で、杯部下半の器内はナデ、器外はハケ目のまま。杯部と脚部の接合部は、器外では横方向に雑にナデだけ。脚柱部の器内は、上位がシボリ目のままで、器外はヘラナデ痕を残す。

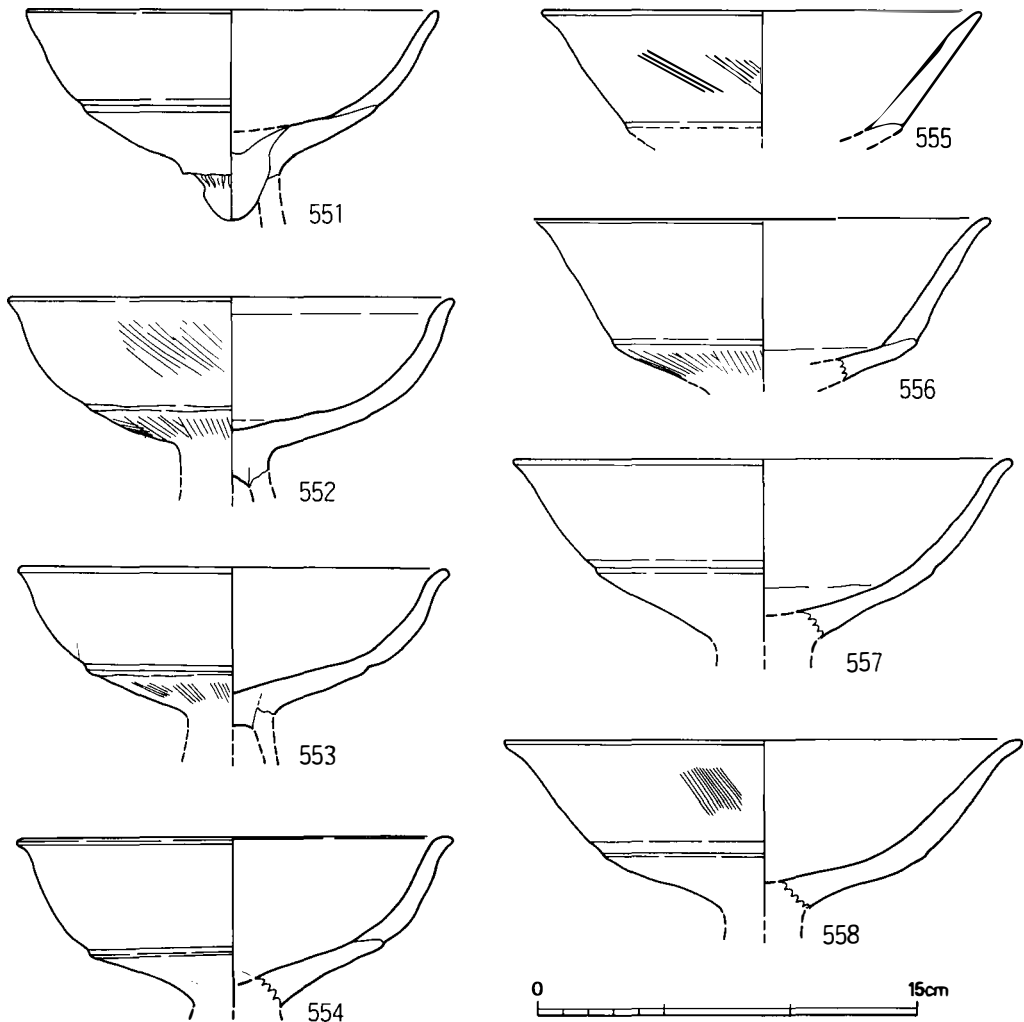
II-2 d は563。器内は、挿入栓をナデ、以下をヘラ削り。器外は、ヘラナデし、ヘラ記号様に線刻。裾部はヨコナデ。

III-1 a は560。脚柱部の器内は、中位までを器周8分割で、下位を同7分割でヘラ削りを丁寧に施すため、中位までは正8面体・下位は正7面体に近い。器外は、整然としたハケ目調整。裾部は、器内外共に丁寧にヨコナデし、端部もシャープであるが、やや外反気味で、c類にも似る。

裾部は、ヒビ割れのため、器内外から補修している部位が1ヶ所あるが、焼成時に器内外共に再度ヒビ割れしている。黒斑はない。

なお、脚柱部のハケ目には、裾部のヨコナデ前のものと、後のものの二者があり、杯部との接合部の横方向ナデは、後のハケ目を施した後で行う。脚部は完形で、杯部は出土していない。

III-2 a は562。杯部下半の器内は丁寧にヘラナデ、器外は横方向ナデ。上・下半部の接合時に、下半部に刻み目を施す。杯部と脚部の接合部の器外は、横方向ナデではなく、ヨコナデが最終的に観察されることから、杯上半接合前に、下半部と脚部を接合したものである。脚柱部の器内は、器周7分割でヘラ削りを丁寧に施すため、正7面体に近い。器外は、ナデ後に一部ハケ目を加える。裾部は、器内外共に丁寧にヨコナデし、端部もシャープであるが、やや外反気味でc類にも近い。脚裾の一部を欠失するが、脚柱部・杯部下半は完存し、杯部上半は出土



第 96 図 17号住居跡出土土器実測図③ (1/3)

していない。

Ⅲ-2 bは559。 杯部下半の器内は丁寧なナデ，器外は脚部との屈折部にまでヨコナデ。脚柱部の器内は，中位までを器周8分割で，下位を同7分割でヘラ削りを丁寧に施すため，中位までは正8面体・下位は正7面体に近い。器外は，ハケ後にナデを施す。裾部は，器内外共に丁寧にヨコナデし，端部もシャープ。杯部下半の一部を欠失するが，脚部は完形で，杯部上半は出土していない。

Ⅲ-1 cは561。 杯部下半径14.0cm・脚高9.4cm。脚柱部の器内は，最下位のみを器周7分割でヘラ削りを丁寧に施すため，正7面体に近いが，その他は短面状に5段に分けてヘラ削りを施すため，多面体を呈す。器外は，縦方向ヘラナデを研磨風に施す。裾部は，器内外共にヨコナデするが，端部はやや丸い。穿孔は，ヘラ削り後のやや乾燥した段階で施したため，工具での切り込みが胎土の抵抗に遇い，正円形に穿たれず，扁平な7多角形ほどに，3孔ともなって

いる。黒斑は、脚裾部に、1ヶ所わずかに認める。焼成は良好で、堅緻。脚裾形は正円形に近く、ロクロの使用も考慮すべきである。

以上のように仮分類した高杯を、以下では出土状態を含めて説明。

〔杯部〕

Ⅰ類のなかで、aの551とcの552は、中央群のなかでも西壁側群に属し、共に完形・完形に近い状態で、甗597を中心として、両者は等距離で対峙して出土（図版104-1）。

bの554は、カマド東から完形の杯と共に出土し、No.17の高杯は図示しなかったが、Ⅱ-1 b類である。高杯・杯の出土状態は、図版105に示すように、西から順に杯568・高杯554・杯569・No.17高杯といずれも接し、レベルでは杯下位・高杯上位で出土。

cの553と561は、共にD21群に属し、553はD東・561の脚部はD21上・561の杯部はその中間から出土。なお、561の杯部下半は一括して出土しているが接合し得なかった（破片一部不足）。脚部の562もD21から出土している。これらの出土状態は、東から順に杯部完形・脚部欠失の553、561の杯部破片、561の脚部、562の脚部と、ほぼ等間隔で出土し、553には扁平な河原石が接していた（図版101～102-1）。

Ⅱ-3 d類では、555・556が共に中央群から破片で出土し、その出土状態は、556を中心にして、その南側に555から始って時計回りに西側にNo.6（甗胴部破片）～ガラス小玉1個～砥石破片～甗532口縁部片、北側に杯565破片、東側にNo.37（甗破片）～杯586片と、いずれも破片である。556は、ほぼ住居の中央部の位置で、既述の552と共に南北O軸直下であるが、この高杯556破片上で、甗532胴部片・甗543胴部片・甗胴下半片が出土（図版103）。

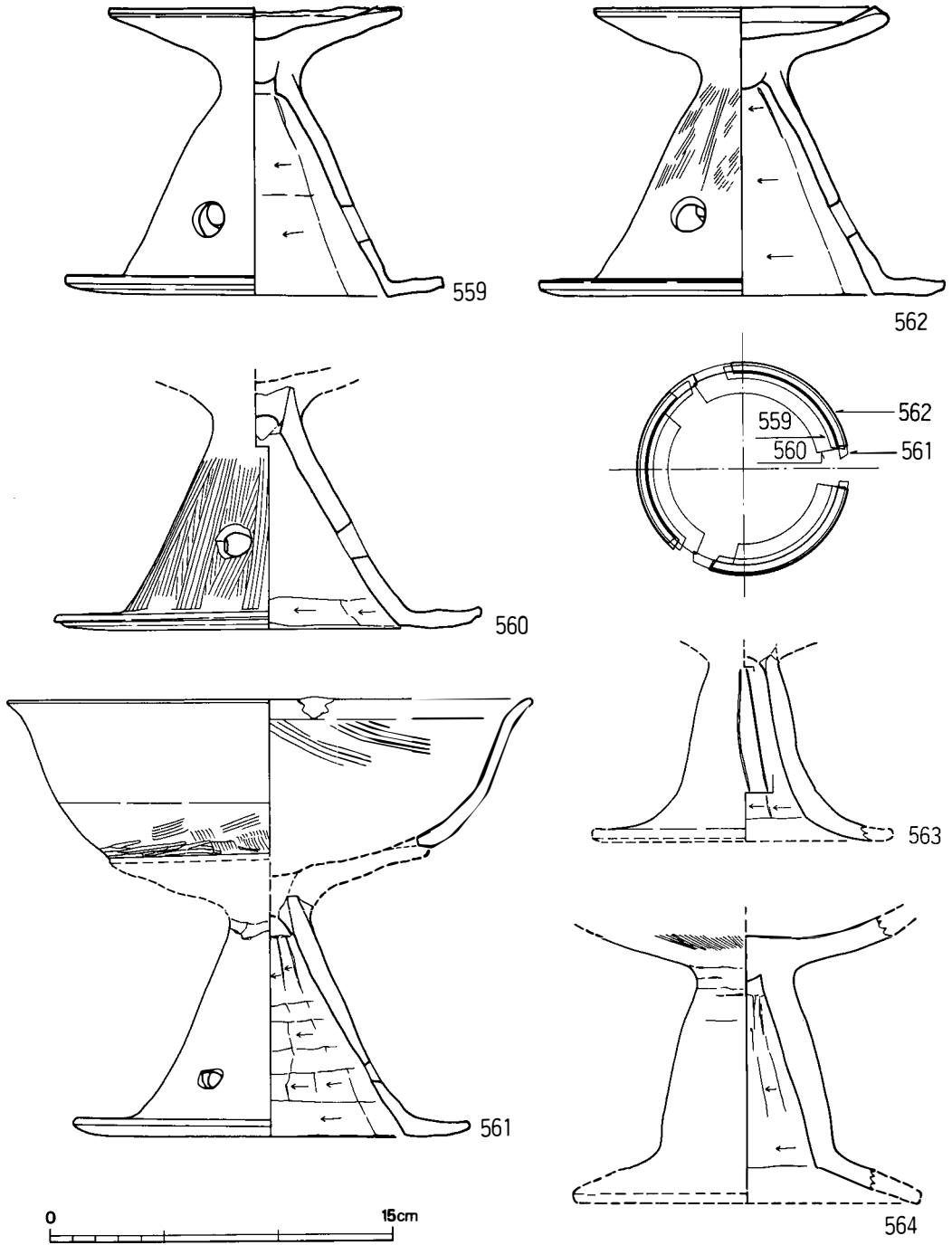
以上のことから、高杯は杯部と脚部に折損され、カマド東に杯部完形の554とNo.17を、住居中央に杯部破砕の556・南接して555を、西壁側群に杯部完形の552・杯部破砕の551を、D21に脚部完形・杯部破砕の561・杯部完形の553・杯部上半欠失の562を、それぞれの状態（杯部・脚部の折損、杯部の破砕）で再配置したものと見える。また、それぞれの状態の差位についての、器制上の配慮もなされているものである。

なお、杯部上半欠失の562については、後述のように支脚として使用されていたものである。

〔脚部〕

脚部のなかで、破片を含めて図示し得たものは6例のみで、下層出土の263・264を除けば、いずれもⅢ類で3孔を有す完形の4例のみである。この4例中の259・260は支脚としてカマド内から、261・262はD21群から出土し、262は支脚としての使用痕があり、262のみが再配置の際に杯部と脚部が折損されたものである。その他の脚部は、どの土器群からも出土していない。脚部折損後に、図示し得ぬほどに細片に破砕されたものであろうか。脚柱部上位も含めて。しかし、発掘に際しては、脚部破片は検出していない。杯部551～558の脚部片は、未調査区を含む住居内へ再配置されたものと言えよう。

今回の報告で、1住居内床面出土完形・略完形土器（杯部あるいは脚部完形の高杯を含めて）を、その出居に伴う一括資料として、土器遍年図を示し得なかった事由の一理である。今少しの器制を含めた検討を必要とする。



第 97 図 17号住居跡出土土器実測図④ (1/3)

ところで、559はカマド内で支脚の状態で、後述560の上段で出土した脚部完形のものである。しかし、杯部下半は図版108に示すように、器周残5/8が脚部から打ち欠かれずに出土し、同

1/8強の破片はカマド内から出土し、同1/8弱の破片はカマド外の住居埋土下層から出土。残りの同1/8弱は出土していない。杯部下半の器外に煤が付着すること・石製支脚抜痕が認められないことから、杯部上半を打ち欠いた状態で支脚として使用されたことは明かであるが、住居カマド遺棄（破棄）に伴う祭祀行為として、カマド支脚としての559の杯部下半（甕受け部）の破砕破片の再配置がなされている。このことは、559自体が、カマド使用時のままではなく、カマド内に他の再配置土器群同様に再配置されたものと換言することができる。

560は、カマド内で支脚の状態、前述559の下段で出土し、脚部完形のも（図版110-2）。脚裾部が長く（幅広）外傾するa類であることから、下段として使用するには559よりも安定することと、杯下半部が出土がしていないことから、再配置に際しては杯部の破砕行為は行われず、上段の559のみを破砕したものと言え、この脚部完形（使用時のまま）の560と杯部下半破砕（使用時のままでない）の559の差異は、許容・非許容の補完的器制行為である。

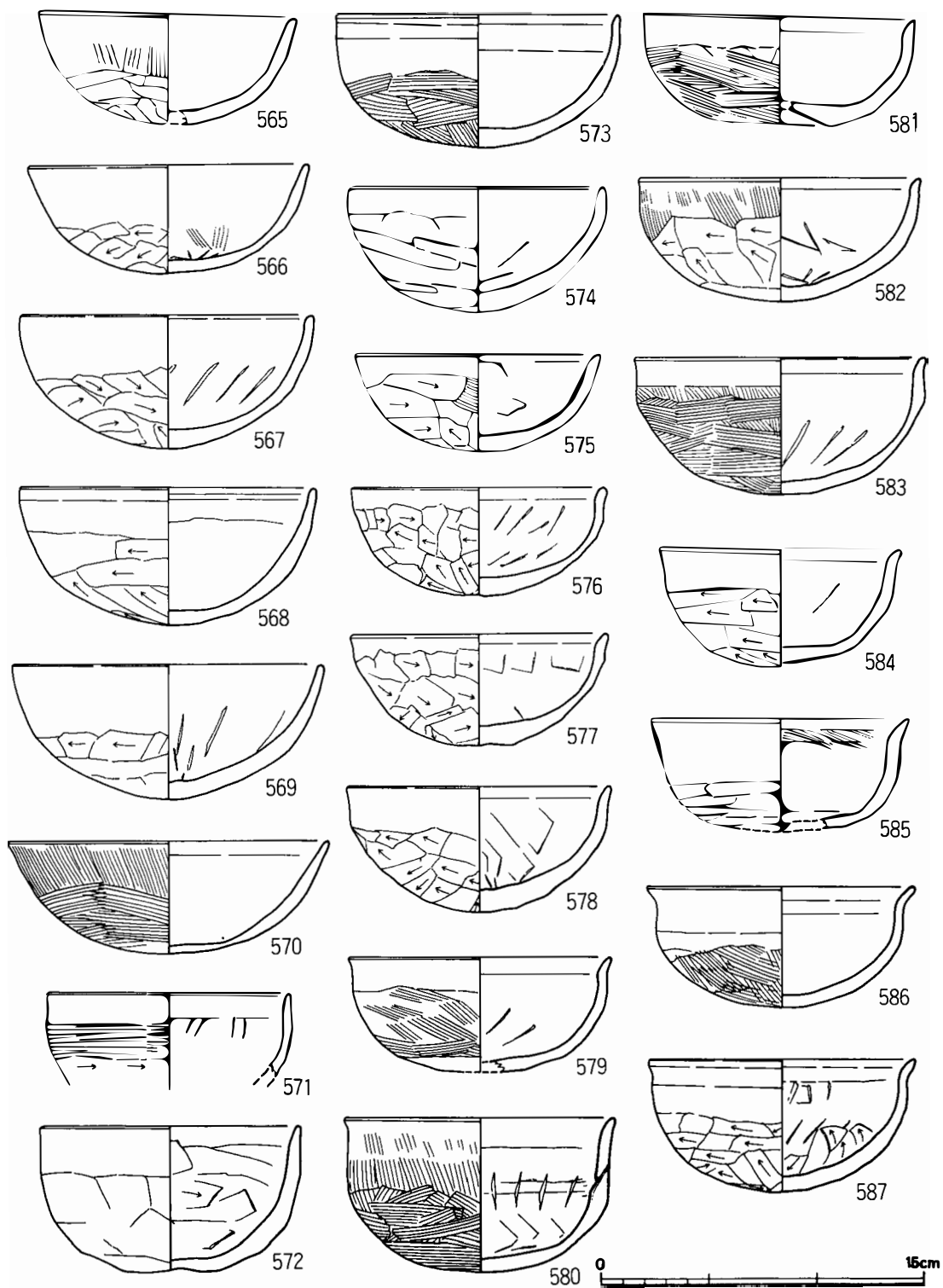
なお、カマドの項で既述したように、下段の560は、カマド床面から5cm浮いて、灰・カマド残滓（カマド破棄土）の3層上面からの出土で、図版110-2に示すように、1孔がカマド南（前面）に正面し、上段の559は同109-2に示すように1孔がカマド北（後面）に正面する状態で出土。このことから、559・560はカマドの一部を意識的に碎壊後に、整然と再配置されたものと言える。

562は、D21上面で検出された、杯部下半～脚柱部までが完形・脚裾部器周残7/8のもので、器外は全面煤が付着する。一部のみの付着である559がカマド内から・全面付着の562がカマドと反対側のD21上で出土したことは、再配置の際の通常使用の562の非許容（カマド内には配さない）と一時使用の559の許容（カマド内に配す）の関係にあり、補完行為と言える。562の脚裾部器周1/8が欠損されて、出土していないことも、このことと関連しよう。

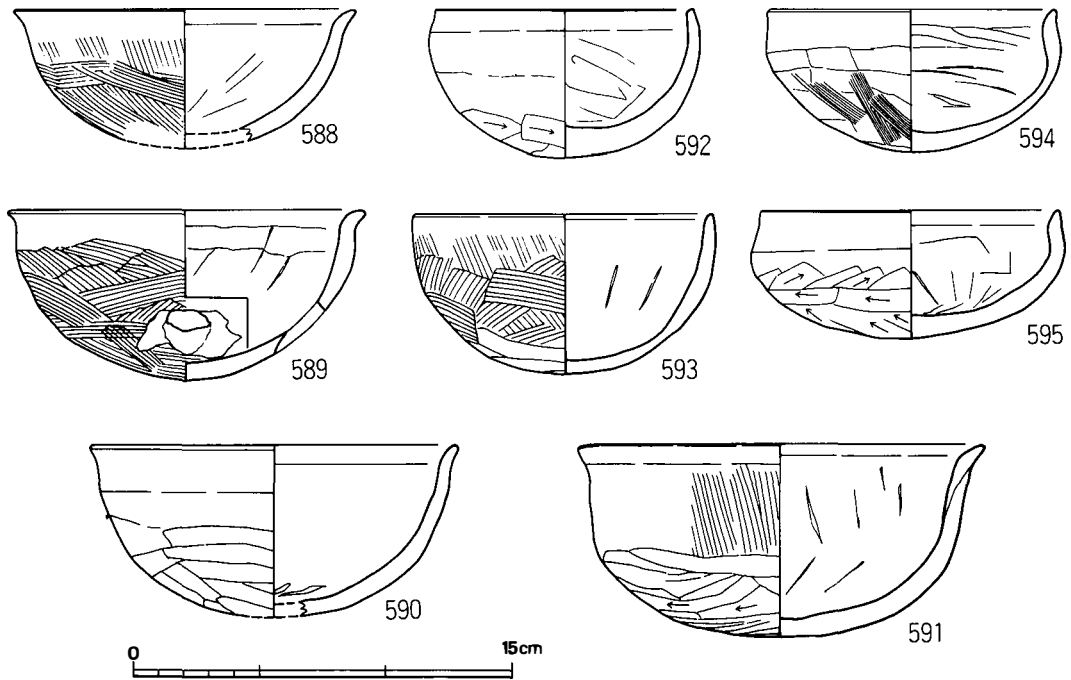
なお、D21が埋没した段階で562は配されているが、甕597も西壁土器群で床面から12cm上位で出土したNo58-2（体部下半器周残1/4強。図版104-2左）・カマド内で559上位から出土した破片（同上半1/4）と接合することなどから、同様に西壁側の床面も埋土下層が流入堆積した段階で再配置されている。カマド東群も同様。これらのことから、通例の他の遺跡で土器編年図が示される際に、カマド内出土土器を、詳細に（一部では無益と言う助言を受けたが）観察することなしに、その住居使用時の共伴資料として採用することの危険性が指摘できよう。もちろん、出土した住居に関係の深い資料とは言える。しかし、既述のように、住居に関係が深い故に、その住居内に投棄・再配置されないという非許容の遺物が、他住居へ投棄・再配置（床面も含めて）される例も多いことを忘れてはなるまい。

561は、他の3例と類似する唯一の器形の全様が明かな例であるが、カマド使用時に主にカマド祭祀に使用された器制と言え、他の551～558と異なった配慮で、D21埋土上から杯部と脚部が近接して配されたもので、カマド破棄に伴い、カマド内への完形での配置が、許されなかった（非許容）ものであろう。

最後に、III類の4例は1・2類、a～c類と異なるが、これは器内外の調整法からくるものであることは明かである。しかし、法量は一致するに等しく、このことは562の下に示した、4



第 98 图 17号住居跡出土土器実測図⑤ (1/3)



第 99 図 17号住居跡出土土器実測図⑥ (1/3)

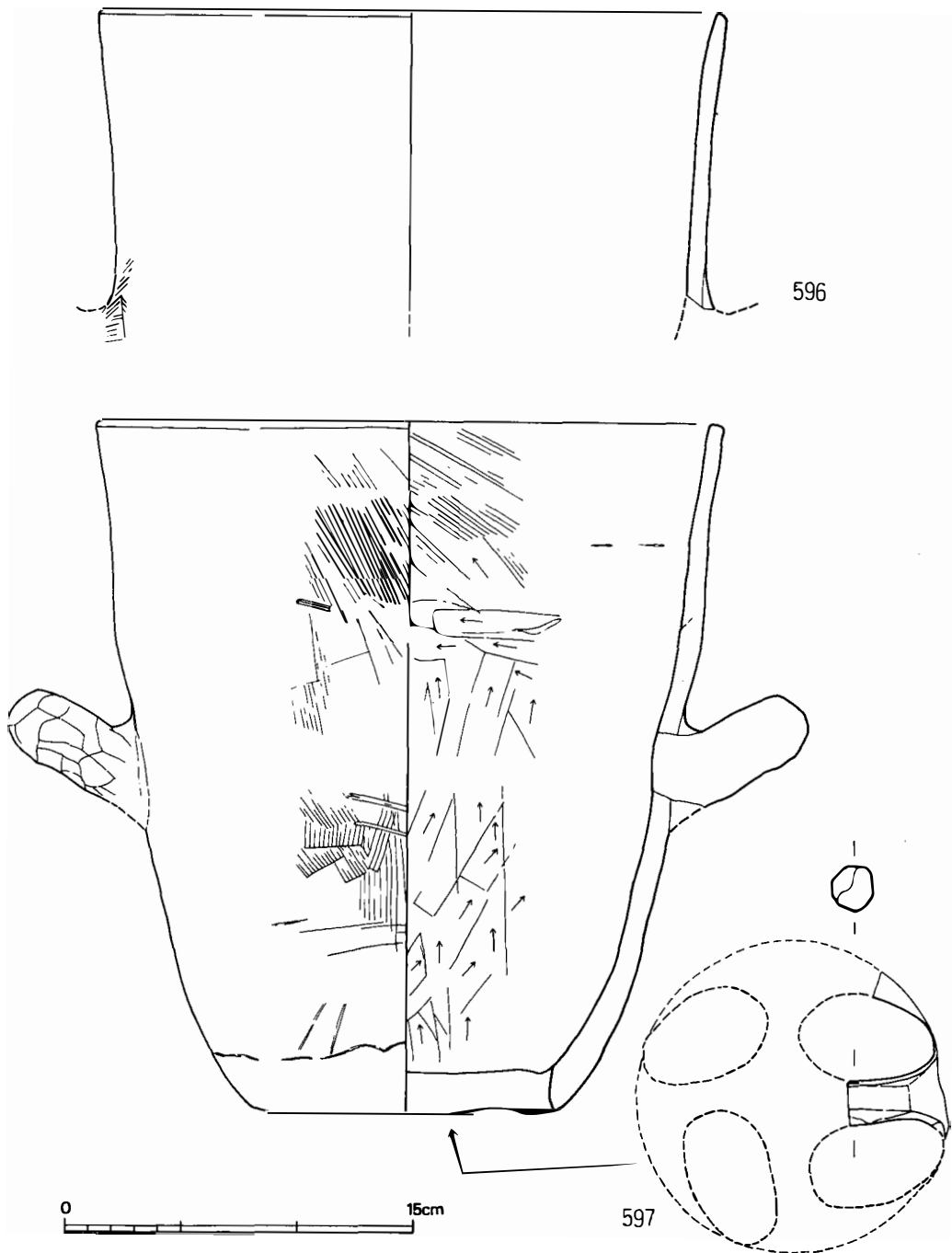
例の穿孔中心部での横断合成図からも言え、極めて丁寧に、正確に穿孔されている。このことは、器内のヘラ削りの器周分割にも言え、559・560では中位まで7面体・下位8面体と一致し、561は7面体、562は8面体である。時期的差位はほとんどないと言えよう。なお、561がc類で、裾部が外反気味で、やや丸いことから、17号A（新）住居で主に使用され、他の3例が17号B（古）以来使用された器制である可能性は強い。また、このことから、17号住居では出土していないが、11号住居で出土した421~428・432とも時期的差位はほとんどないと言える。このことは、他の器種間でも同様で、11号住居出土の高杯と17号住居出土の高杯間に、同一個体がある可能性が強く、17号住居の脚部は、11号住居に再配置されたものか（このことを確認する作業は、それこそ、昨今の文化財行政上では、非許容の事実。しかも、この非許容の事実は、既述の非許容の事実とは、質的に大きく異なる。）

杯（565~591） 出土量が多いこと、前述までの駄文で紙数がないことから、一切を省略。仮分類だけを示すが、ヘラ削り後の丁寧なハケ目の例がやや多く出土し、c類の出土は1例のみ。

a類は565・566・569・570、b類は567・568・571~574・592~595、c類は588、d類は575~587・589~591で、588はややc類に似る。

甑（596・597） 596は、器内が、体部ヘラ削り・口縁部ヨコナデ後に、丁寧なナデを加え、削り痕を残さない。器外も、同様に丁寧なナデを加え、ハケ目を残さない。口縁端部は、ヨコナデが丁寧にシャープな稜有り。

597は、器内を、体部に縦・斜方向のヘラ削りを施すが、上位の胎土接合痕を消すために、

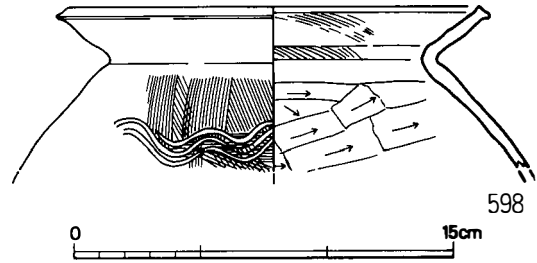


第100図 17号住居跡出土土器実測図⑦(1/3)

一部横方向ヘラ削りを加える。口縁部の器内外には、ヨコナデを軽く施し、ハケ目を残す。器外は、ハケ目後をヘラナデし、底部も同様。底部の穿孔数は、4孔に復原される。穿孔部は、別断面図に示したように、穿孔後に新たな胎土を付して補強し、器内外面を削り、両側面をナ

デる。黒斑は、底部全体に認められ、所謂、暗青灰色。

以上の甑は、後述する須恵器の出土からしても、須恵器甑の土師器化されたものであることは明かで、口縁部・体部の技法や器形も一致する点が多い。胎土も、土師器の甕とは異質で、精製胎土を使用し、焼成も良好で、堅緻。



第101図 17号住居跡出土土器実測図⑧ (1/3)

以上の土器のなかで、再配置された土器については、これを17号住居に関係の深い、再配置資料としてよいだろうが、後述する須恵器の9号住居出土例との接合関係から、今少しの検討を要する。

なお、598は古い時期の資料の混入したもので、所謂、布留式とすれば古い特徴。

18号住居跡 (図版112・113, 第102図, 表24)

調査区東半部の北端で検出。おそらく、調査区外の、北壁中央部にカマド付設と思われる。弥生時代の8号円形周溝を、1号掘立柱建物の柱穴P26が切り、この建物のP23と周溝の両者を、18号住居が切る。

住居内から、P11~14 (P12は調査区外で、未確認)・51と、D21, M12・14などを検出。

主柱穴配置は、P11・13・14が、いずれも近接する各住居壁からほぼ等しい位置にあるが、北壁とP11の距離はやや大きい。このP11の配置は調査区外なため未確認のP12と共に、おそらく北壁中央部に設けられたカマドの所在を考慮し、北壁から離れた配置としたものと言えよう。

壁土壇配置は、P11-P12・P14-P13の、各東西主柱間の中軸線上の、南壁中央に設ける。

溝状遺構は、溝底の幅・床面からの深さは、M13が40cm・4.5cm, M14が30cm・0.5cmで、共に通常の周溝よりも幅広で浅い。7号A(新)号・17号住居の例からして、北壁側にもM11を配したことも考えられる。

対角柱穴は、P44を検出したが、M13のように、M14も南壁まで続いていたものを、深さが浅いために、P44として掘り下げてしまった可能性が強い。

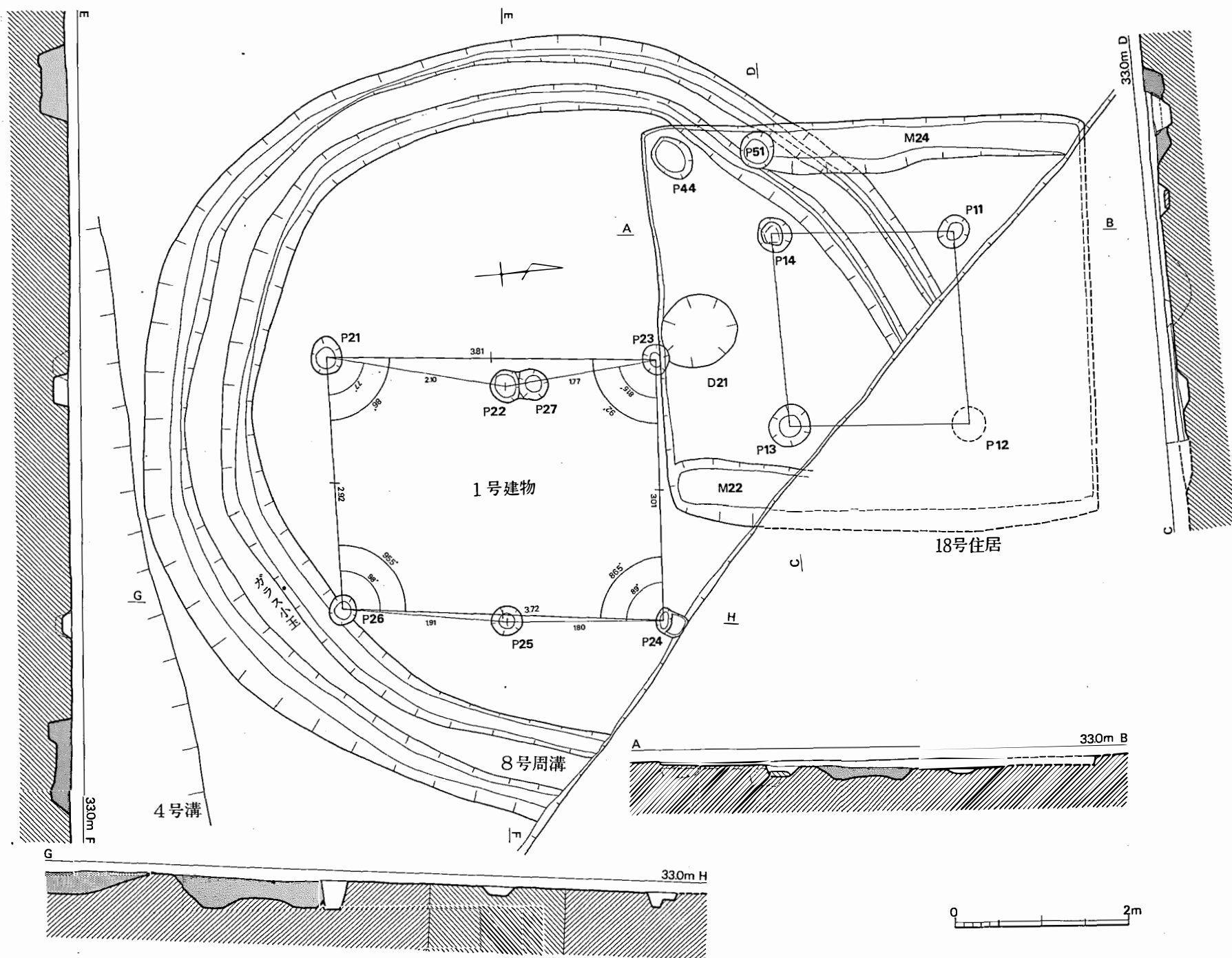
壁柱穴は、P51を検出したが、主柱穴よりやや深く、南側柱列上に位置することから、同様にP13の東側で、M12中にも配されたものか。

出土遺物 (図版198, 第103図, 表35)

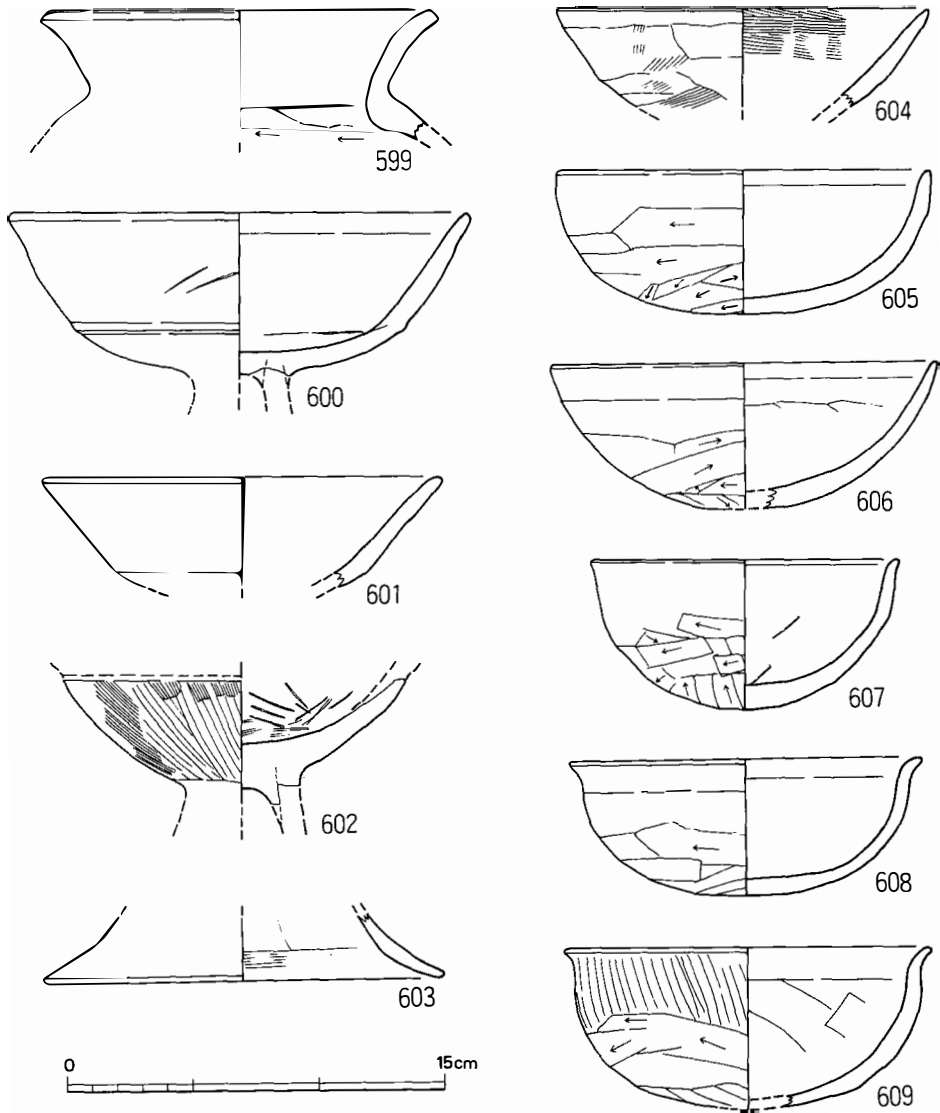
カマドを含めて、住居の1/2が未調査であること、残存壁高が10cm以下と削平が著しいことなどから、出土遺物はわずか。南壁土壇D21周辺で出土した土器を含めて、床面出土の例もない(図版112)。出土位置を表35で示したものは、床面直上からの出土。

図示したものは、甕 (599)・高杯 (600~603)・杯 (604~609) である。

高杯600は南壁に接して、同605は西壁M14上(床面と同じレベル)からの出土。これらは、



第 102 图 18号住居跡・1号掘立柱建物・8号円形周溝実測图 (1/60)



第103図 18号住居跡出土土器実測図 (1/3)

所謂、住居に伴う一括資料と言える。再配置されたものであるかどうかは、未調査部が多いため、不明であるが、その可能性は強い。杯604が、明らかな混入であるかどうかは、検討すべきであろう。604を除いたものに、著しい新・古の差異は認められない。

19号住居跡 (図版21・131, 第105図)

調査区北西隅部で検出。弥生時代の10号円形周溝を切るが、同5号溝状遺構および古墳時代の11号住居に切られているので、10号周溝→19号住居→5号溝→11号住居の順に新しい(図版21)。

住居は、大半を11号住居と5号溝に切られているため、その詳細は不明で、P12・81とD11

を検出し、東壁北端部・西壁北半部・北壁を確認したのみ。

なお、東壁の5号溝近くは、溝の影響で10号周溝・19号住居埋土および地山の識別が困難であった。

支柱穴配置は、P11・12の2個のみと考えられ、南側のP11は5号溝に切られたものか。

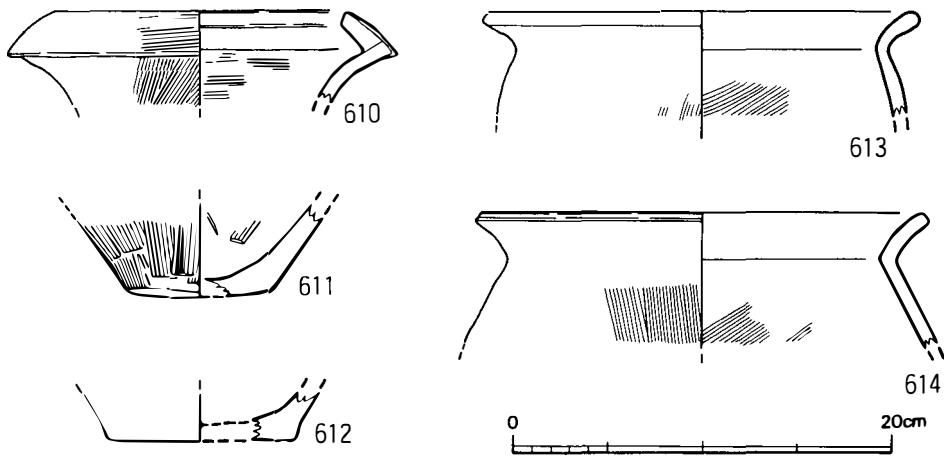
中央土壇は、西・北壁からほぼ等距離に配しているが、住居中心Oからやや東壁寄り。

P12・D11西端の接線方向と西壁方向とがほぼ一致することから、支柱穴を住居中央南北O下に設け、中央土壇は東西O下で南北Oに東接させて、やや東壁寄りに配したものであろう。

以上のことから、主軸方向N-0°-Eを測る、東壁側に壁土壇D21を配した住居であったと考えられ、南北O軸長が(北壁～O)×2=2.35m×2=4.70mで、東西O軸長が(西壁～O)×2=2.08m×2=4.16mの規模の、若干南北方向に長い平面プランを有した住居であったと復原。4.70m×4.16m=19.552㎡を得た。

出土遺物(第104図、表35)

土器破片が若干出土しただけで、図示し得たのは、壺(610・612)と甕(611・613・614)。



第104図 19号住居跡出土土器実測図(1/4)

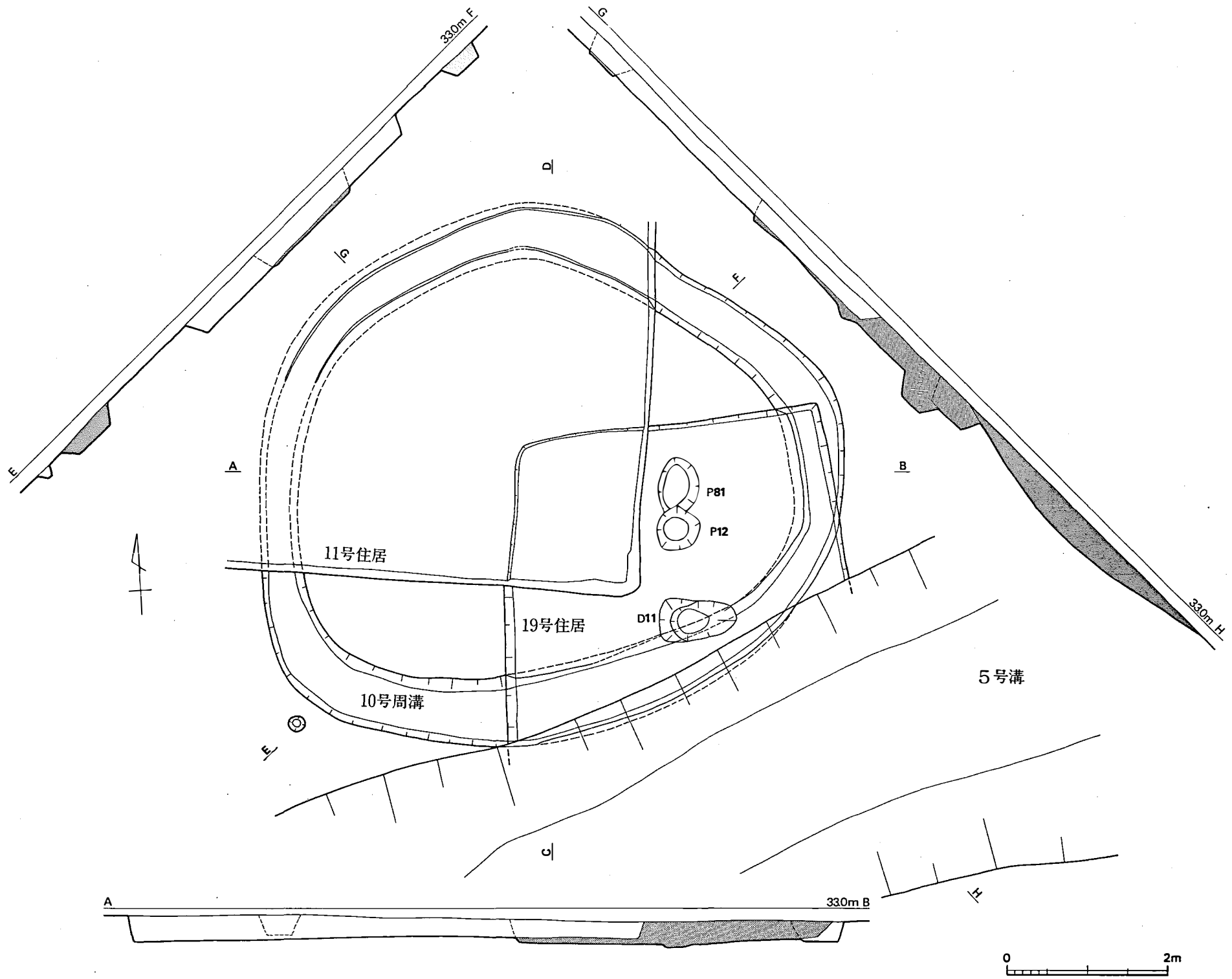
20号住居跡(図版113～122、第106図、表26)

調査区南西隅部で検出。北壁中央わずかに東寄りに、北向きのカマド付設。7号A・B住居を切り、5号住居に切られるので、7号B(古)→7号A(新)→20号→5号住居の順に新しい(図版14・15)。

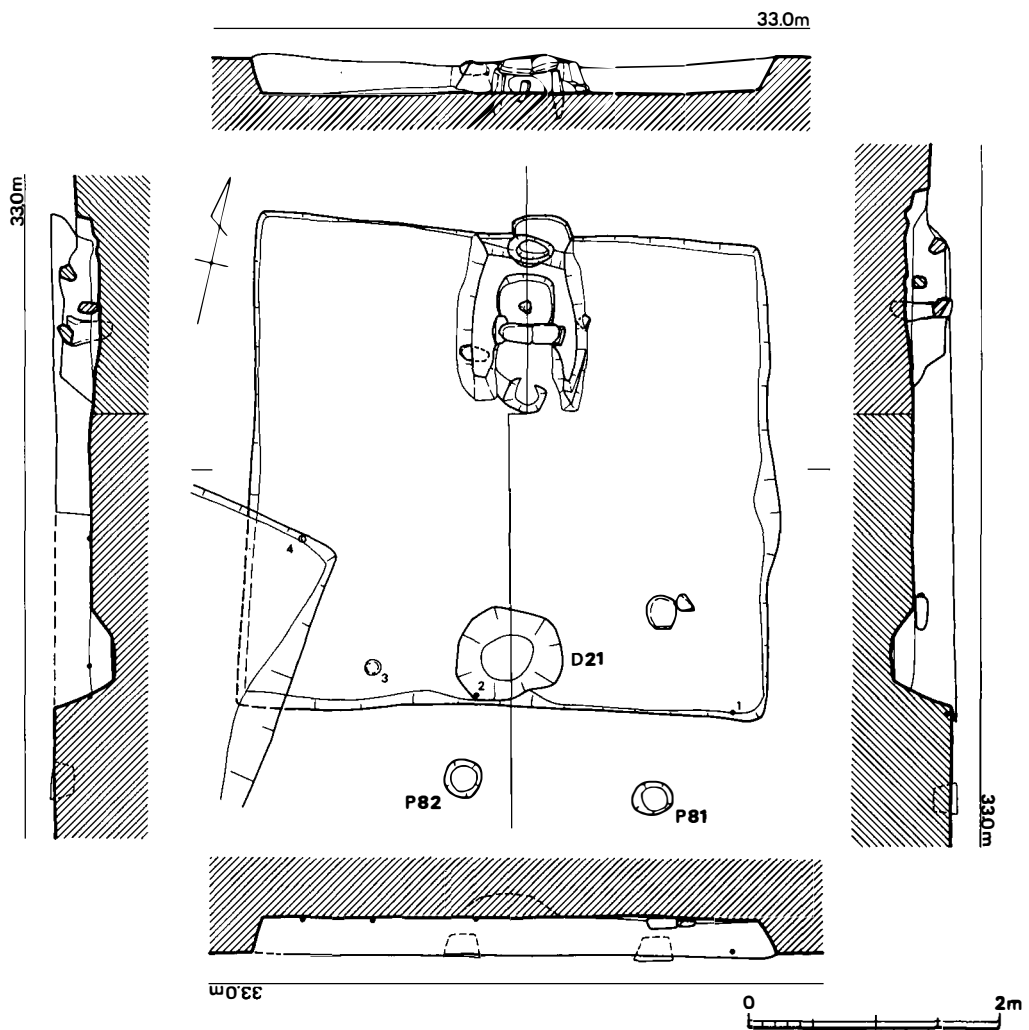
住居内からは、南壁中央土壇D21を検出しただけで、柱穴はない。

住居プランはほぼ正方形を呈するが、柱穴がないので、以下の方法で主軸を求めた。

D21中心を通る東・西壁間中軸線を南北Oとし、南・北壁間中軸線を東西Oとする。このとき、南北Oと東西Oは直交し、南北Oとカマド主軸は平行する。また、各壁隅を結ぶ対角線も住居Oを通り、直交する。



第 105 図 19号住居跡・10号円形周溝・5号溝状遺構実測図 (1/60)



第106図 20号住居跡実測図 (1/60)

表26に示すように、住居プランは南北Oの長さが3.66m・東西Oの長さが3.97mで、南北Oの方が0.31m短い。ここでは、短い南北Oを主軸としてN-12.5°-Wを計測。

なお、南北Oにカマド西袖石東面が接し、カマド主軸～南北O間は0.14mで、カマドは北壁中央からわずかに東寄りに設ける。

ところで、住居内から床面に接して、D21の東側で出土した扁平な河原石は、その中心—南北O間1.20m・同一東西O間1.15mで、その距離がほぼ等しいことから、あるいは主柱の位置を示す礎石の可能性も強い。柱穴を設けずに4主柱を配したものか。

その他の柱穴は住居に属するかどうかは不明。

また、636(出土番号No.4)のミニチュア土器については、床面出土で、5号住居に伴うものではなく、断面図に示すように他の土器と共に20号住居に伴うもの。

カマド(図版114~122-1, 第107図, 表26)

焚口室は3個の河原石を組み合わせたもので、炎口室と共に良好に遺存しており、燃烧室東

袖内には、構築時の祭祀行為を示す高杯が埋納されていた。

なお、カマドの実測・発掘に際しては、カマド検出面の燃焼室最大上面幅と東西両袖南端内側間のそれぞれの中心を結んだ中軸線を実測主軸としたが、これがカマド主軸でもある。

前庭部 焚口室両袖以南の前庭部にも、長大な袖を付設。袖長は、東袖石前面～東袖南端間52cm、西袖石前面～西袖南端間48cmで、この長さは焚口前面～前庭部凹み間南端間（前庭部長）54cmとほぼ一致することなどから、両袖南端は袖の旧位置をほぼ保つものと考え、表26のカマド規模の縦長は、煙口室奥壁～前庭部南端間の137cmで示した。

なお、C-D断面に示すように、西袖内から横幅25cmの河原石を袖1層中から検出。袖体の一部として、当初から埋め込まれていたことを確認（図版115-1）。燃焼室東袖外から、床面に接して出土した15cm大の川原石については、東袖南半上部が欠損することから、この欠損部に袖体として埋め込まれていた石と考えることも十分に可能で、カマド破棄によって、除去されたものとする 것도できよう。

焚口室 表26に示した袖石・天井石の計測値は、縦断面方向を縦、横断面方向を横、上下方向を長さとして、それぞれの最大値を示したもの。

両袖石は、E-F断面に示すように、ほぼ同規模のものを使用。やや内傾させて長さの1/2、近い20cmほどを、床面下に埋め込む。天井石は、両袖石外側間よりも若干小さいが、丸味を呈する河原石3個を使用しての焚口室の構築には、単に天井石を架すだけでなく、やや寸足らずな天井石を両袖石に框せる方法で、より室の堅固・安定を計ったものと判断。

このことは、図版122-1の状態、図版139-1のような降雪にも遭遇し、その間には、保護シートを覆せる間もない降雪時もあったが、図版140-1に示すように、石組みには歪みすら生じなかった。

なお、西袖石は、縦断図見透しに示すように、大きい方を上位に使用しているが、これは焚燃部天井をより大きい面積で支えて安定させる配慮によるものであろう（図版118-2・121-2）。

このことは、天井石の使用の際にも考慮されており、天井石縦断形状は、焚燃部面では下端から上端に向けてわずかに外傾し、この面で焚燃部天井を安定して支えたものであろう。この際には、天井石は前庭部の方向への力が強く働くと考えられるが、前庭部にも両袖を設けることによって、補強したものと考えられる（図版115-1）。

燃焼室 支脚は、南側に傾いて出土したが、抜去後に再埋置された状況ではなく、掘り方床に支脚下端は接していた。

支脚周辺からは、C-H断面の見透し図などに示すように、高杯の口縁部片や脚部片が床面から浮いて、5層中から出土（図版117-2）。

また、G-H断面に示すように、東袖内の2層中からも、高杯の口縁部・杯下半部・脚部片が出土（図版116-2）。

これらの高杯は第109図 626・628に示した2個体であるが、その接合状態は、つぎのとおり。626は、いずれも支脚前面出土で、杯部はほぼ完形に接合できたが、脚部を欠失。

628は、東袖内で、杯下半部が残周1/1で出土し、脚部は5/8周が支脚東側から、1/8周が東袖内から出土したもので、杯上半部を欠失する。

これらのことから、628の支脚東側出土の脚部片は東袖の2層中か、1層の袖上部あるいは天井壁内に構築時から埋置されていたことは明らかである。A地区1号B（古）住居跡の北向きのカマドでは、同様に西袖下に埋置した脚部欠損の高杯杯部が伏せた状態で出土しており、628もおそらく1層による天井部構築前に2層の袖内に伏せた状態で埋納されたものと考えられる（出土遺物の項で、再述）。

これに対して、626の高杯杯部は後述する煙出部への石込め封印を伴うカマド破棄時の祭祀行為に係るものと考えられる。

なお、焚燃部東袖基部で、10cm大の河原石が検出されたが、構築時は1層の袖内に埋め込まれていたものと判断（図版117-1）。

炎口室 良好に遺存。M-N断面に示すように、その構築時の作業段階は、以下のように観察。

- ① 3層の粘質土で、床基盤・袖基部を造作する。
- ② 1層で天井を架し、その下半部を6層で補強。共に砂質土を使用。
- ③ 袖と天井を、更に2層で補強し、3層で両袖を完成。

なお、燃焼室の天井は遺存せず、いずれも袖上部は砂質土の1層であることから、炎口室同様に、袖外部を3層の粘質土で補強すると共に、燃焼室天井も3層で構築したことが十分に考えられ、5層はその落下土であろう。

煙口室・煙出部 カマド上面検出時には、縦断面図にアミ部で示すように、10～20cm大の河原石が3個ほど確認されたが、石周辺の土が袖上面（断面図の1層）や燃焼室上層（同5層）と異なっており、住居の埋土である暗褐色粘質土であったため、不用意に除去してしまい、その後で、5層で埋まっている煙口室上面プランを確認（図版114-2）。カマドの検出～発掘に際しては、特にカマドの構造とカマド祭祀の把握を念頭に置いて、細心の注意を払っていたつもりであったが、これら石群がカマド遺棄に伴う煙口室上部の破棄後の、煙口室の印封祭祀行為の証左であったことに気付いたのは、5号住居カマドの発掘で、焚口印封祭祀行為を知った時点で、この時には既に石群を除去してしまっていた。調査担当者の責任を深く感じる。

煙出部は、住居北壁が張り出し、その埋土が3層の粘質土であることから、所謂、煙道が設けられたものと考えられる。

カマド祭祀 前述のように、袖構築時に高杯を折損して埋納し、カマド遺棄時には煙出部上部を破棄して、河原石で印封。また前庭部東袖の一部・燃焼室天井を破棄し、室内に脚部を折損した高杯杯部を配する祭祀行為を指摘することができよう。カマド西袖外方の、住居北壁部の床面出土のミニチュア土器も、カマド祭祀に関連するものであろう。

出土遺物（図版199・200、第108・109図、表35）

出土した土器の量は多くないが、器種がほぼ揃い、完形・完形に近い状態で、床面・D21内から出土しているのが特徴。

壺(615) 器内は、胴部が指押えのまま、口縁部の胎土も頸部に単に押し当てただけ。頸部

にシボリ目を残す。器外は、胴部下半をハケ目後にナデ。

甕 (616~618) 617の器内は、頸部までヘラ削り。

618は、口径17.2cm・胴部最大径24.1cm・器高27.5cm。南壁D21一括出土の破片に、南壁西半部D21西床面出土の胴部器周残1/4の破片が接合し、完形に復原。器内の頸部と器外の胴部下半に、ナデ。

高杯 (619・626~632) 619は、器内外共に、ヘラナデ痕を残し、器内上位は指押えま。

626は、カマド前庭部の窪みから杯上半片（器周残1/8）・カマド支脚に南接して上半片（同1/4）・カマド内から上半片（同3/8）と下半片（完形）が出土（図版110-2）して、接合したが、上半の器周1/4が出土していない。器内は、上位に横・斜方向のハケ目、下半にヘラナデし、器外はヨコナデ。

628は、カマド東袖内から杯部下半（図版116-2, 117-1）・カマド支脚に東接して器周残5/8の脚部片（同117-2）・カマド内から同1/8の脚部片が出土して、接合し、脚裾の一部を欠くが、杯部下半以下は完形。杯部上半は出土せず。

630は、D21西の南壁寄り床面で、倒立して出土。杯部完形・脚部器周残5/8。杯部の器内で、上半・下半の接合部にハケ目を残すが、器内外共にヨコナデが丁寧。脚部の器外は、丁寧にヘラナデ。

632は、D21西の南壁寄り床面で、631と共に杯部器周残1/4弱・脚部同1/2が、南壁寄り埋土下層から杯部同3/4強が、同最上層から脚部同1/4弱が出土し、脚部の器周1/4を欠く以外は完形に接合。

杯 (620~623) 623は、器内の体部はヘラナデし、器外の底部にヘラ切りを施す。カマド西袖外に接して出土（図版114）。

鉢 (633) 器内は、ハケ目後に中位以下をヘラ削りし、更に、下位は指ナデを加える。器外は、下位にヘラナデ様のナデを加える。口縁部は、ヨコナデを弱く施し、ハケ目を残す。

甗 (624・625・634) 634は、器内のヘラ削りは、口縁部まで施したため、ヘラ削り前のヨコナデを施したままの口縁部は、やや波状を呈す。底部には、焼成前に、1孔をシャープに穿ち、把手を付さぬ。

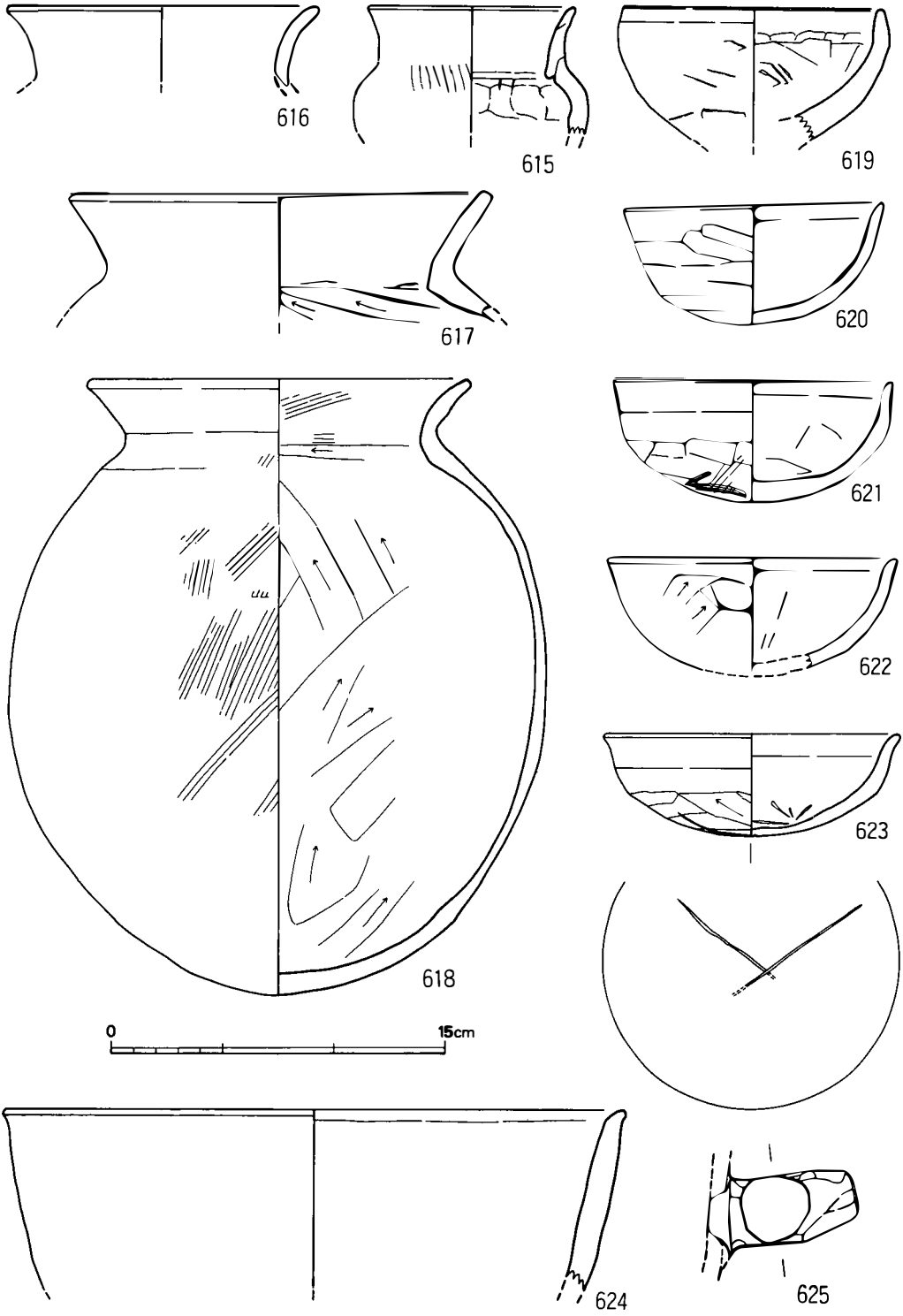
手捏土器 (635~637) 636・637の器外上半部は、指ナデ痕を明瞭に観察。

ところで、既述のように、切り合い関係による住居構築の新旧関係を、古→新で示せば、7号B→7号A→20号→5号住居であることを確認している。以下では、前述した土器のなかで、出土位置・出土状態を示した例を中心に、7号A・B、5号住居出土土器の、出土状態にみる器制を、それぞれ比較検討をする。

① 埴について

所謂、小型丸底壺が、どの住居からも出土していないことは、他の出土した器種の土器編年上の位置からしても帰納されるところである。

小形埴は、7号B住から237・238の2例、7号A住から124の1例が出土し、20号・5号住からは出土していない。このことは、住居の古・新関係に一致する。



第108图 20号住居跡出土土器実測図① (1/3)

②壺について

中形壺は、7号B住から239～241・243の4例、7号A住から127の1例が出土し、20号・5号住からは出土していない。127は、甕の器形の影響下で、埴の器制を残した壺。

大形壺は、7号B住から236が1例出土し、7号A住からは出土していない。236は床面から、脚部完形で床面から1cm上位の262に近接して、出土している。262は、杯部から折損されたもので、236は胴部下半を欠失した破片。このことから、236は、所謂、二重口縁壺の器制を配慮し、意識的に欠損し、同様に杯部を折損した高杯262と共に、再配置されたもの。7号A住埋土出土の甕132は、この器制の残影が、甕の器形に影響したものである。

以上のことは、7号B・A住居の古・新関係に一致。

小形壺は、5号住からカマド南床面で完形の088が1例、20号住から埋土中で破片の615が1例出土。7号B・A住からは出土していない。088は、11号B(古)住居西壁M21内に埋置された、完形の硬質赤褐色土器371との類似点が多い。088は、371にみるような器制を配慮して、再配置されたものか。20号住の615については、出土位置を発掘中に記録していないため、不明。

③甕について

小形甕は、7号B住から242の1例、7号A住から128・129(137は器形が異なるので除外)の2例、20号住では616の1例、5号住からは出土していない。7号B住242は、既述の中形壺239～241・243の器制上の技法(薄手の器壁に代表される)が、小形甕に受容されて成立した器形(出土位置を記録していないので、器制の語句は使用できない)である。7号A住129は、242より器壁が厚手で、端部の特徴なども、新出の様相を示す。このことは、7号B・Aの古・新関係にも一致。

中形甕は、7号B住から244の1例、7号A住から134～136の3例が出土しているが、後者3例の出土位置を記録していないので、検討し得ない。20号住の616は、完形に接合された大形甕618の口縁部の特徴に、類似。

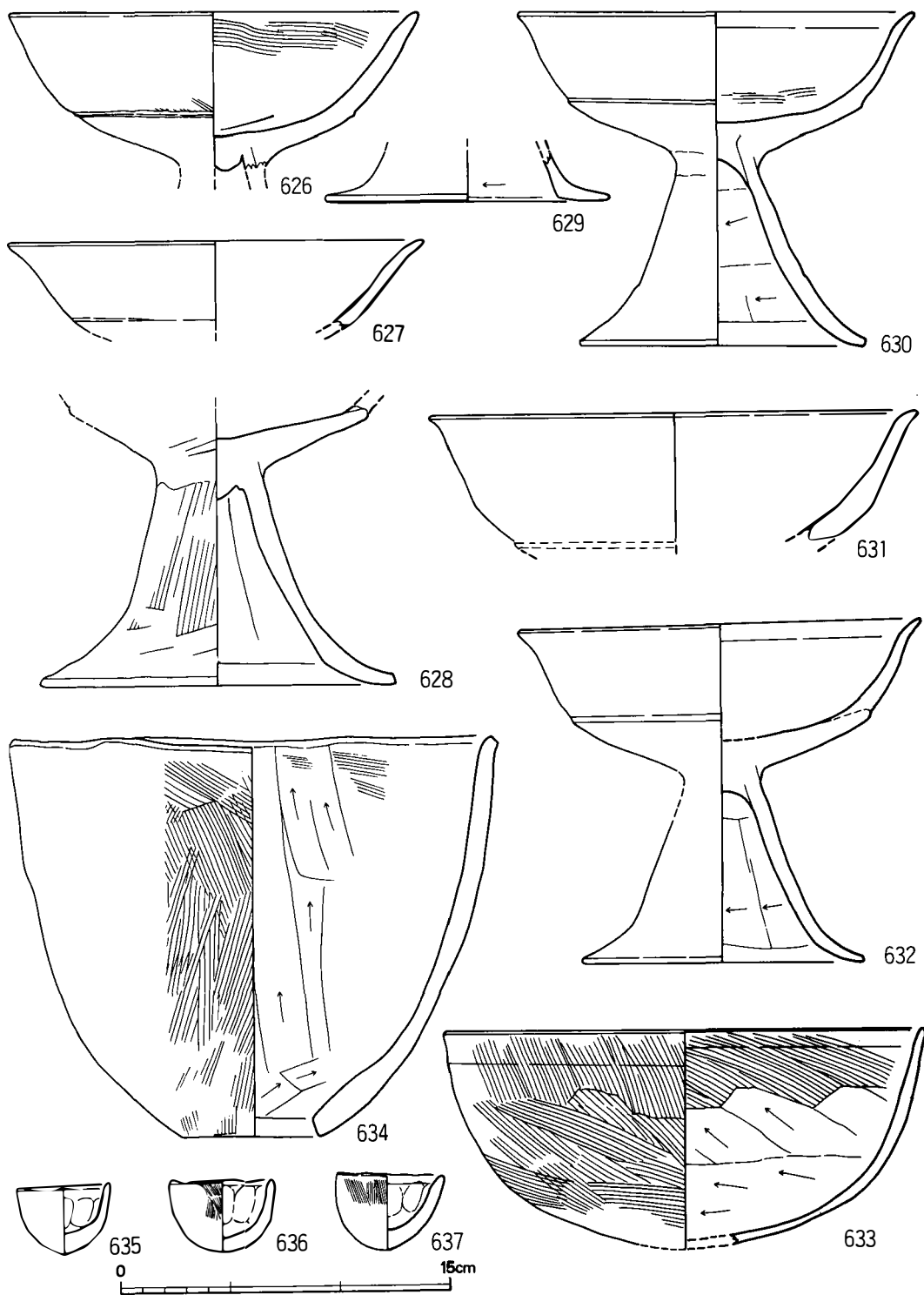
なお、7号A住の130・131の2例は、上述の7号B244の直線的に外傾する口縁部・端部稜のシャープさ・頸部下の丁寧なヘラ削りに対して、やや外反気味の口縁部・端部の丸味・頸部下の雑なヘラ削りなど新出の様相を示している。このことは、7号B・Aの古・新関係にも一致。

大形甕は、7号A住埋土から破片133の1例、20号住からカマド内破片617・D21他完形618の2例、5号住からカマド内破片096の1例が出土。7号A住133は、既述132に類似。20号住617は、既述の7号A住135と同様の特徴を有すが、後者の端部稜の方がシャープで凹むのに対して、ややシャープさがなく、新出の様相を示す。また、617は618にも類似。

しかし、617は頸部下からヘラ削りし、口縁部は直線的に外傾するのに対し、618は頸部下はナデのみで、口縁部は外反し、端部は丸いなど、より新出の様相を示す。

以上のことから、617は、618よりも古いこと(器制)を配慮して、破碎後にカマド内に再配置したものと言えるか。5号住096も、同じくカマド内へ配置したものと言えるか。これらのことは、7号A・20号・5号の古・中・新関係に一致。

④高杯について



第 109 图 20号住居跡出土土器実測图② (1/3)

11号住居で使用した杯部・脚部の仮分類を使用すると、形式的には㉔〔杯部〕3(上半直線)a(端部稜有),〔脚部〕I(脚柱細身)1(脚柱直線)a(裾長外傾)の7号B住253→㉕〔杯部〕3d(口縁部外傾),〔脚部〕II(脚柱中細身)1aの7号A住145→㉖〔杯部〕3d,〔脚部II〕2(内反)aの7号A住146→㉗〔杯部〕2(上半内反)d,〔脚部〕III(脚柱太身)1b(裾短外傾)の20号住630→㉘〔杯部〕1(上半内弯)b(端部突出),〔脚部〕II 2c(裾外反)の7号A住157となり、7号B住→7号A住→20号住の、古→新関係と一致。

しかし、最も新しい5号住居出土の高杯杯部は、上述の7号B住253と20号住079・080が、7号A住156・157と5号住077が、20号住630と5号住081がそれぞれ形式的に一致し、特異である。このことは脚部でも同様で、7号B住261や7号A住145と5号住085が、7号A住159と5号住083が、20号住628・630と5号住084・087がそれぞれ形式的に一致する。

以上のことを、各住居での出土状態について、詳細に再検討。

㉔〔杯部〕3(上半直線)a(端部稜有),〔脚部〕I(脚柱細身)1(脚柱直線)a(裾長傾)類は、7号B住から253・260・262~264の5例、7号A住から152の1例が出土し、後者は破片。5号住を例外として、20号住からの出土はなく、7号B→7号A→20号住の、古→新関係に一致。ヘラ削りが丁寧で、脚柱部全体が薄い。

㉕〔杯部〕3d(口縁部外傾),〔脚部〕II(脚柱中細身)1a類は、7号B住から261の1例、7号A住から145・150・151の3例が出土。5号住を例外として、20号からの出土はなく、7号B→7号A→20号住の古→新関係に一致し、㉔→㉕と言える。ヘラ削りは丁寧であるが、上位はシボリ目のままで、器壁は上位が厚く・下位が薄い。

㉖〔杯部〕3d,〔脚部〕III 2(内反)a類は、7号A住から146・149の2例が出土し、他の住居からの出土はない。7号B→7号Aの古→新関係に一致し、㉕→㉖と言える。ヘラ削りが雑で、脚柱部全体が厚い。

なお、〔脚部〕II 2aも、7号A住埋土からではあるが、147・148の2例が出土し、他の住居からの出土はなく、㉕→II 2a→II 2c 7号A住161としてよいだろう。

㉗〔杯部〕2(上半内反)d,〔脚部〕III(脚柱太身)1b(裾短外傾)類は、7号B住から脚部片247が1例、7号A住から脚部略完形160が1例、20号住から完形630・632・脚部628の3例がそれぞれ出土し、5号住から脚部完形084が1例出土。5号住084は、ややc(裾部外反)気味で、7号A・20号住よりも新出である。

これに対して、20号住628は、明らかにカマド構築時に袖内に埋納されたものであり、接合破片であるカマド支脚に東接したものとカマド内出土のものも、同様に埋納されていたもので、構築時は杯部下半～脚裾までは完形であったと言える。埋納は、北向きカマド東袖・天井部の強化の目的のためとも考えられるが、A地区1号B(古)住居の北向き東袖下ピットでは、脚部折損の完形杯部を伏せて埋納した例であった。この1号B(古)住居出土土器は7号B(古)住居出土土器の特徴に各器種が一致し、改築された1号A(新)住居出土土器は、7号A(新)住居出土土器の特徴に、各器種(器制もほぼ一致)が一致。このことから、構築時のカマド袖埋納祭祀に関するものと言える。なお、20号住628は、杯部下半の器内に、全面にわたって煤が付

着する。このことから、20号住カマド東袖内埋納前（構築前）に、支脚として使用されていたものである。カマド破棄に際し、古くは支脚としての器制・新しくは埋納祭祀用としての器制、その二者を配慮して、一部を破碎し、その破片をカマド内に入れ、あるいは石製支脚に東接して再配置したものと言える。

上述のことから、20号住628は20号住以前の7号A住で、使用されていたものとするができる。

しかし、7号A住は、石製支脚を使用。7号B住では、既述のようにカマドの痕跡が確認されているが、支脚痕は検出されていない。このことから、より古い7号B住のカマドで支脚として使用されていたという器制上の配慮で、埋納されたものと考えらるべきであろう。7号B住247の出土とも矛盾しない。

以上のことから、また、5号住084が杯部折損・脚部完形で、D11東から出土したことに対して、混入ではなく、7号B住以来の器制を配慮して、再配置されたものと言える。

上述の点は、留意すべきことで、7号B→7号A→20号→5号住と単に切り合うだけでなく、時間的経過のなかで、構築（空間的＝機能的構築については後述）されていったものと言え、当初に指摘した最も新しい5号住出土の高杯の、形式的な例外的特異性が理解でき、いずれも混入ではない再配置であると言える。

㊤ 杯部1（上半内弯）b（端部突出）、脚部II（脚柱中細身）2（脚柱内反）c（裾外反）類は、7号B住から脚部片246の1例、7号A住から153～158・171～173の9例、5号住から076・077の2例が出土し、20号住からは出土していない。このことから、7号B住で既に使用されていたが、7号A住で主に使用され、20号住でも一部使用されたという器制上の配慮で、20号住077は再配置されたものと言える。

今まで詳細に述べたことから、7号B住出土例、7号A・20号・5号住で出土位置を記録した例は、いずれも再配置されたもので、土器編年上の形式変化・住居間の切り合い関係・器制の三者が、ほぼ一致する。

つぎに、7号A住からのみ出土した杯部1（上半内弯）a（端部稜有）類の167～170について補足する。

器壁は厚手である点は、杯部1（上半内弯）b（端部突出）類の7号A住156などに類似し、杯部3（直線）a（端部稜有）類の20号住626に類似し、7号B住253にも似る。このことから、7号A住167などは、7号A住156と土器編年上は共伴するものと言え、20号626より古出のもので、脚部は20号628と同類であろう。

このことは、後述する7号A住出土の器壁が厚手で、ヘラ切りを施す杯180との土器編年上での共伴関係をも示す。床面から16.9cm上位からの出土であるが、南西壁隅部での出土で、壁寄り部に埋土が流入しつつも、中央部床面には至らない段階での、完形再配置と言える。20号住出土杯632もカマド西袖外に接して出土し、器形の特徴は、20号住630・632の杯部に一致し、共にヘラ切りであるという、器制を考慮しての再配置と言える。加えて、高杯杯部の特徴と杯の特徴は、土器形式・器制・住居間の切り合いでも一致するとも言える。

最後に、5号住出土の高杯の特異性について今少し補足する。

カマド内では、古出の特徴を示す3（上半直線）a（端部稜有）の079が西側で、新出の特徴を示す1（上半内弯）c（口縁部外反）類の081が東側で、それぞれ出土。南壁でも同様で、古出の特徴を示す3 a類の080が西側で、新出の特徴を示す1（上半内弯）b（端部突出）類の077が東側でそれぞれ出土。中央部出土の脚部でも同様で、古出の特徴を示すII（脚柱中細）2（脚柱内反）b（裾短外傾）類の083が西側で、新出の特徴を示すIII（脚柱太身）1（脚柱直線）b（裾短外傾）類の084が、東側でそれぞれ出土。カマド内の土製手捏鏡（第145図837）の出土も西袖側である。

9号住居出土の外来硬質竹管文壺315、同土師器壺313なども西壁土器群である。

11号住居出土の硬質赤褐色壺371も西壁M21内埋納で、同赤褐色高杯394も南壁P54西からの出土である。その他、11号住居出土で再配置された土器群が住居西側に器制的配慮で再配置されていることについては、既述のとおり。

17号住居での、住居西半部での再配置についても既述のとおり。

甗の出土は、いずれも北向きカマドでは西側（左袖側）で、A地区22号A（新）住居の西向きカマドでも南側（左袖側）である。A地区1号A・B住居の主柱穴・主軸間柱穴埋納高杯3例・張床内同2例を含めて、いずれも西側である。

これ以上の多言を必要としない。遺物の再配置に際しては、住居機能の西壁重視、これから帰納する西側への再配置の際の遺物の器制上の思慮は明らかである。このことから、7号B住出土の須恵器破片822が西側ではなく東側に、13号住出土の土師器甕506が東向きカマド右側に、埴496が左側に、14号住出土の土師器甕506の破片が北向きカマド東側（右側）にそれぞれ再配置されたことの内実が理解できよう。破片822・甕506が外来土器としての器制ではなく、須恵器・土師器としての器制でしかなかったからと言える。

⑤杯・⑥甗について

残余の頁数がないので省略する。

21号住居跡（図版123，第110図，表27）

調査区北西隅部で検出。住居の北半部は調査区外のため、また西半部は農業用水路のために調査を断念（図版21）。

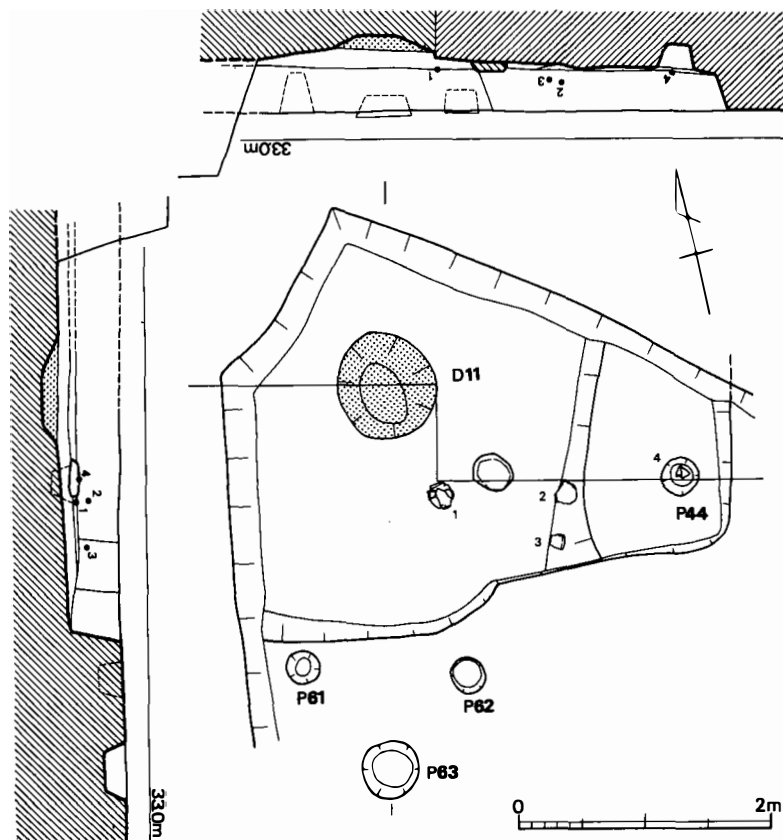
住居内外から、P14・61～63，およびD11・ベッド状遺構を検出。

主柱穴配置は、南東壁隅部位のベッド状遺構上で、P14のみを検出。

主軸間柱穴は検出されていないが、南東隅近くで低床面に接して出土した扁平な河原石は、主軸間柱穴P32に代わる、主軸間柱敷石と考えられる。P31も設けられていないことから、同様に敷石を使用したものか。P14—石列方向は南壁方向と一致し、南北主軸・東壁方向と直交。

施設柱穴配置は、南壁外の中央部に設けられ、南壁中央張り出し部の存在から、P61～63は住居出入口施設に関するものと判断してよいであろう。

なお、P63とD11の中軸を南北主軸としたが、この主軸はP61—62間のほぼ中心を通る。ま



第110図 21号住居跡実測図 (1/60)

た、この南北主軸P62間と同河原石間は、ほぼ等しいことから、主軸間柱は出入り口施設柱としても利用されたものと考えられる。

中央土壇配置は、住居北半部が未調査ではあるが、南北主軸下で、住居中央からやや南側に片寄せて、また壁土壇D21は北壁側に設けられたものか。D11内の埋土は、黒色灰層。

出土遺物 (図版201, 第111図, 表35)

残存壁高は、0.42mと良好であるが、住居の一部を調査したのみで、床面近くで出土したのは、Na 1～4例のみで、Na 1とNa 3が接合したので、3個だけ (図版123)。

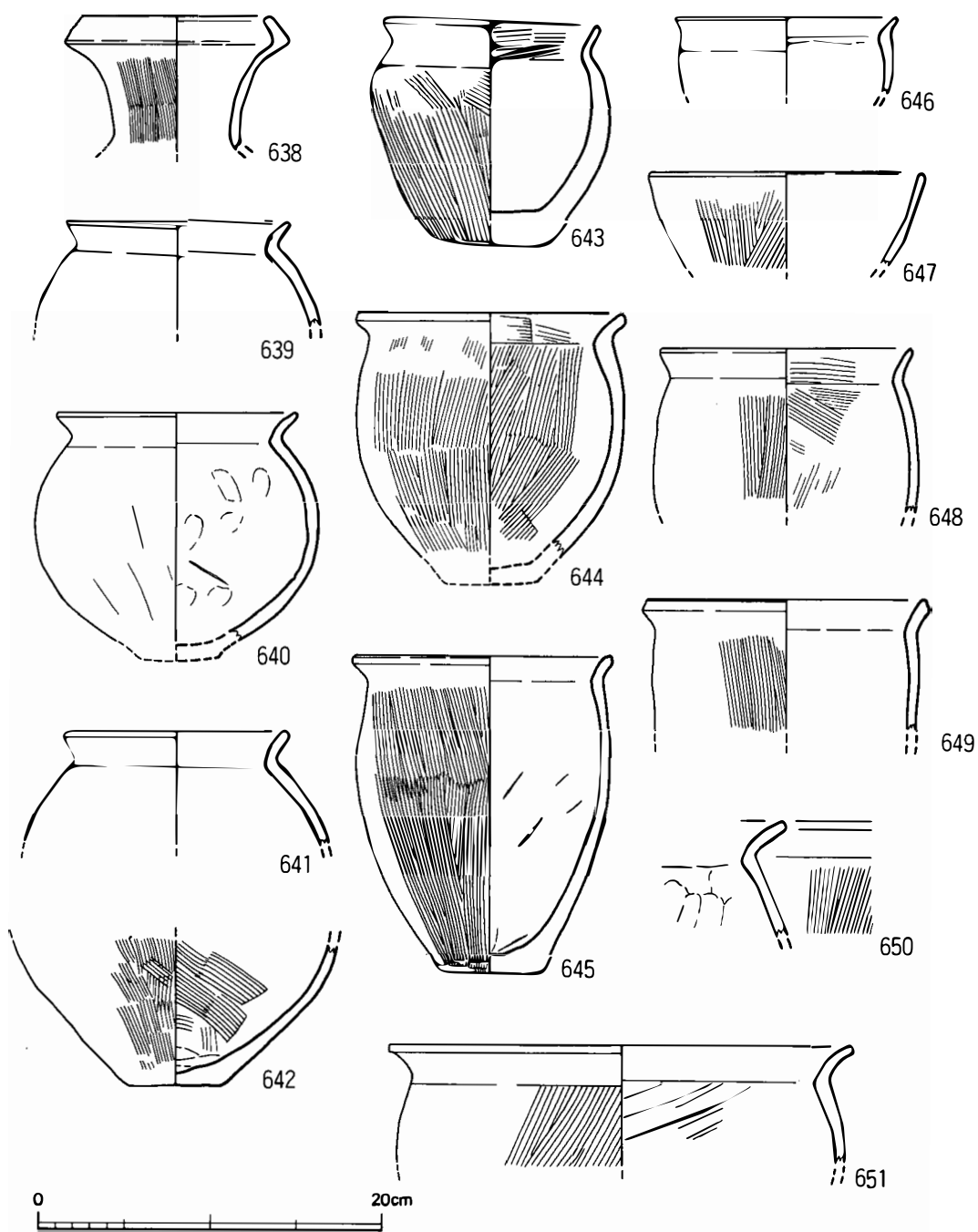
住居が、細砂質土の地山に設けられているため、埋土も暗褐色細砂質土で、土層の変化も著しいものではなく、住居の埋没は短期間であったと言える。

図示した土器にも、時期的に著しい差位は認められない。残余の頁数の関係で詳細を省く。

壺 (638) 小形で、器壁も薄い。頸部径よりも大きく外弯した口縁部下半と、上半との屈折はシャープで、端部もシャープな稜有り。

甕 (639～646・648～651) 643～645の器壁は、いずれも厚い。

鉢 (647) 器内のナデ・器外のハケ目は丁寧に施し、器壁も薄い。



第 111 图 21号住居跡出土土器実測図 (1/4)

2. 掘立柱建物

掘立柱建物は、1～7号の7軒を検出。1・2号建物は、住居・円形周溝と重複。3～7号建物は、これら建物間ですべてが重複（図版11・124）。

1号掘立柱建物（図版124-1，第102図，表28）

調査区東半部北端で検出。P26が8号円形周溝を切り、P23が18号住居から切られているので、8号円形周溝→1号建物→18号住居の順に新しい。

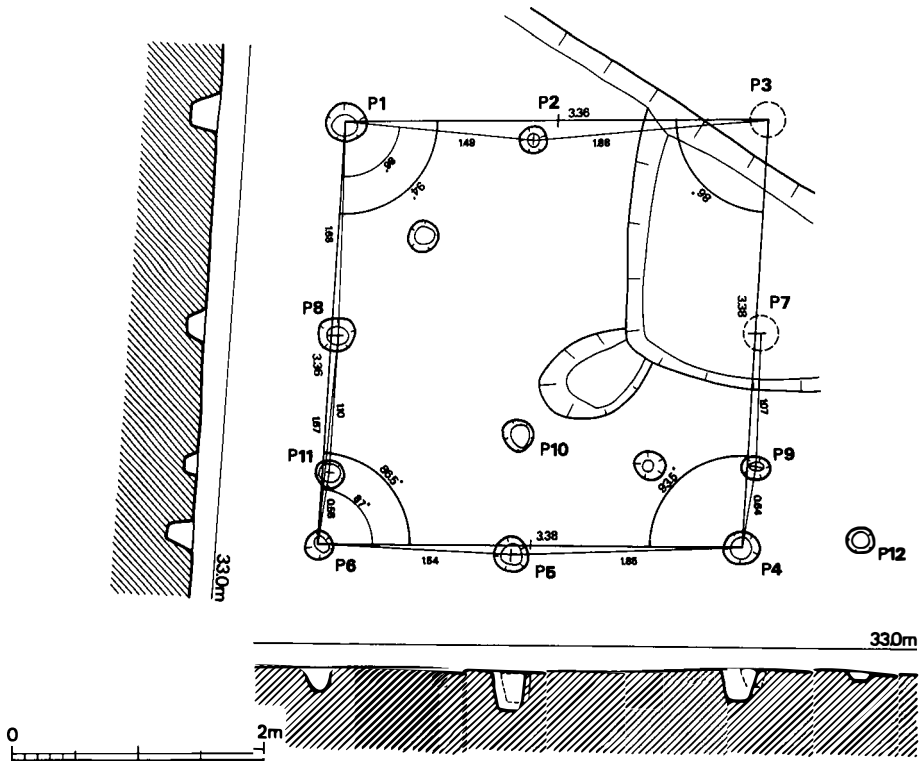
東桁行柱列は整然と通るが、西桁行柱列ではP22が内側に位置し、北接してP17を検出。

P17も、同様に柱列内側に設けられていることから、桁材はP11・13に東接し、P12あるいはP17に西接する位置で架したものか。

P26は、他の柱穴に比べてより深く設けられているが、このことは8号円形周溝埋土中に設けたためと思われる。

2号掘立柱建物（図版124-2，第112図）

P7が12号住居に切られており、2号建物の方が古い。P3は調査区外に位置すると考えられるが、確認せず。西側梁行柱間P1-P8・P8-P6とP1-P2・P6-P5の桁行柱



第112図 2号掘立柱建物実測図 (1/60)

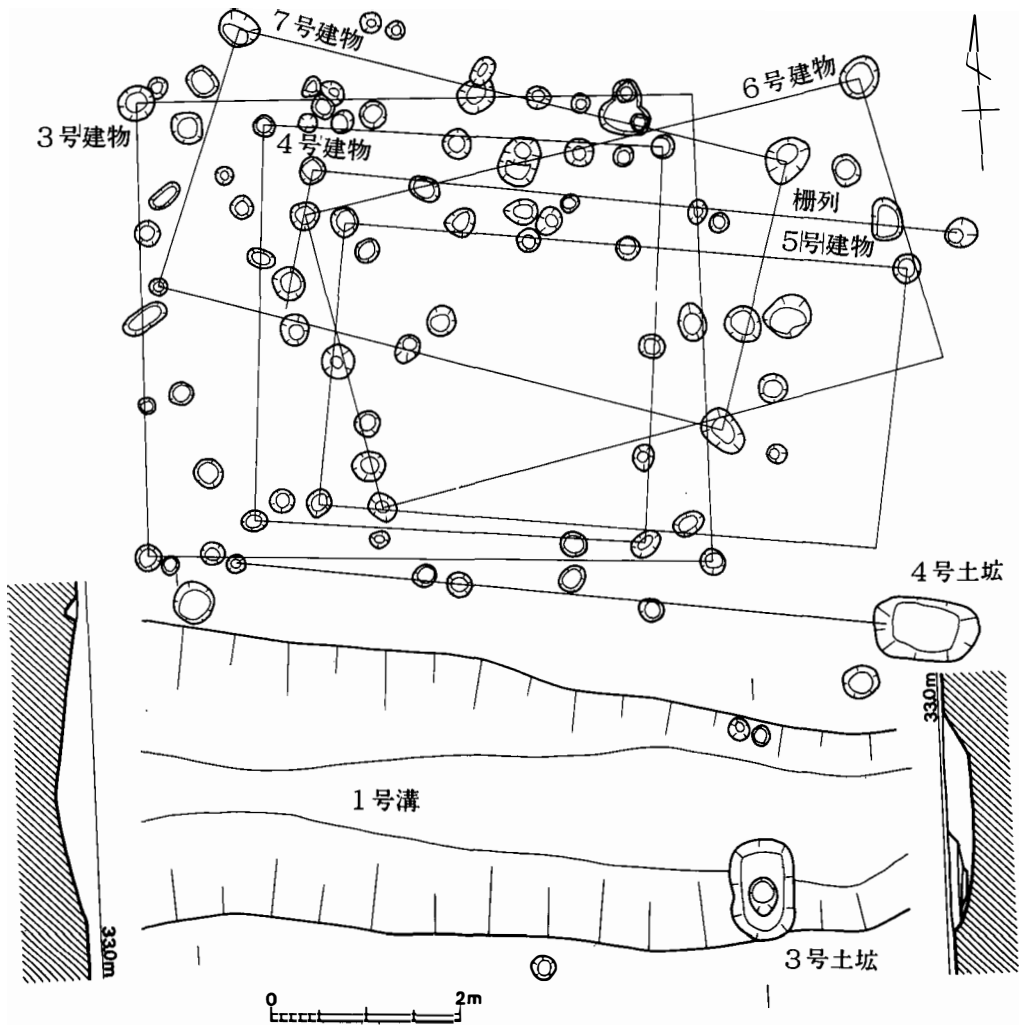
間はほぼ等しく、西側梁行と東側桁行はほぼ一致することから、梁・桁行間が共に等しい2×2間の規模と考えられる。

なお、P9・11は位置・深さがほぼ等しく、他の柱穴よりも浅いなどの類似から、建物に属する柱穴と考えられる。P10も建物に属すと考えられ、P12は南側柱列が一致。

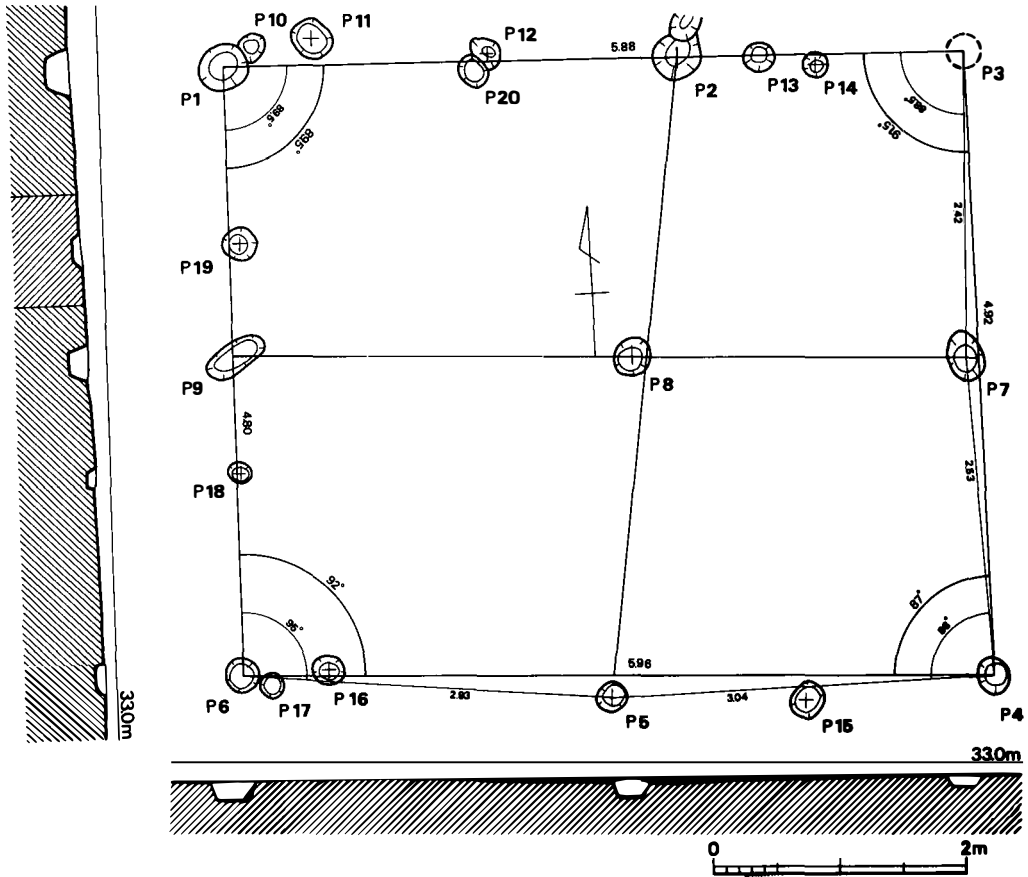
3号掘立柱建物 (図版11, 第113・114図, 表30)

P3の位置では柱穴は確認していないが、2間×2間の総柱建物と考えられる。

表30に示すように、桁行柱間平均は2.94mで、P1-P2間3.58m≒柱間(2A+B)3.65m、P2-P3間2.28m≒柱間C2.27m≒柱間2D2.28mが指摘でき、P6-P5間2.93m≒柱間(B+C)2.96m、P5-P4間3.04m≒柱間2A2.96mも指摘できる。



第113図 3～7号掘立柱建物, 3・4号土坑, 1号溝状遺構実測図 (1/80)



第114図 3号掘立柱建物実測図 (1/60)

同様に、梁行柱間平均は2.47mで、P1-P9間2.30m≒柱間(A+E)2.40m≒P9-P6間2.50mが指摘できる。

また、P1に接してP10が、P6に接してP17が、それぞれ同様に位置している。

以上のことから、P10~20の柱穴も3号建物に属するものとしてよいだろう。

4号掘立柱建物 (図版11, 第113・115図, 表31)

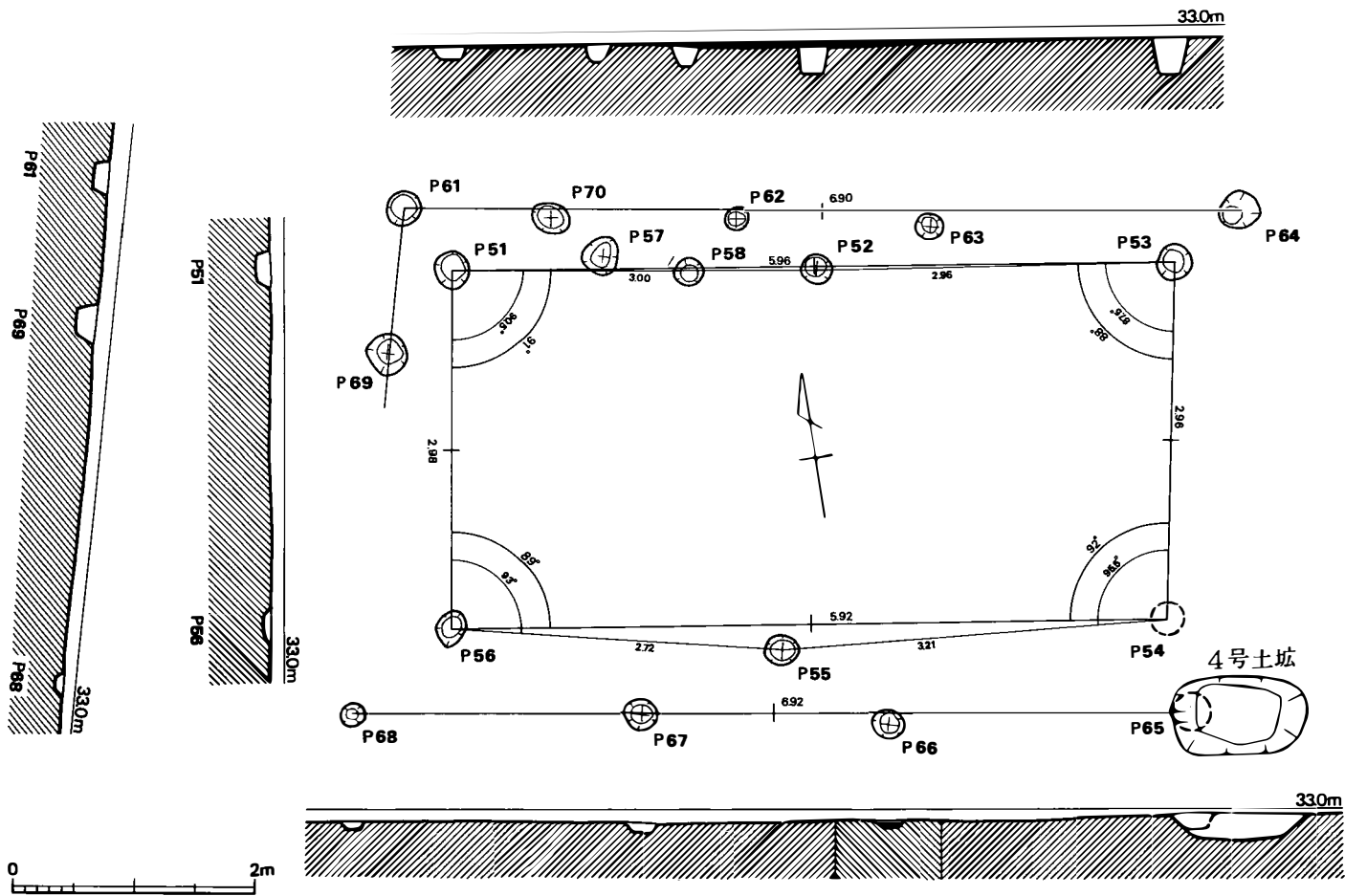
P26-P24間中心のP25の位置では、柱穴は検出していないが、2間×2間の建物で、P25(P26-P24間中心の位置)は、後述するように、当初から設けられていなかった可能性が強い。

なお、P29-P27間中心のP28の位置でも、柱穴は検出していないが、P28は当初から設けられなかったものか。

表31に示すように、桁行・梁行間平均は4.18m・4.19mとほぼ一致するに等しく、桁行・梁行柱間平均は共に2.11mと一致し、極めて整然とした建物。

表31に示すように、

P21-P22間2.04m≒柱間(C+D)2.16m≒P21-P29間2.18mが指摘でき、桁行・梁行



第116图 5号掘立柱建物实测图 (1/60)

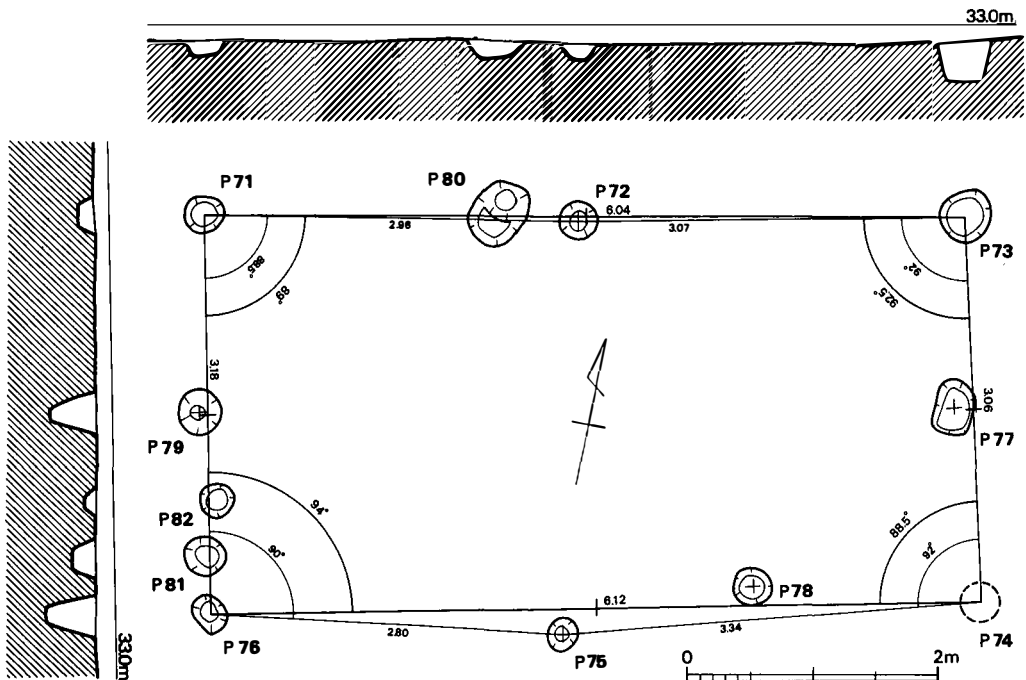
に近似することから、両者も共に柱間Eと言えるが、柱間E 3.08m ≒ 柱間 2 D 3.14m, 柱間 B 2.65m ≒ 柱間 (C + D) 2.79m, 柱間 A 4.31m ≒ 柱間 (C + E) 4.30m ≒ 柱間 (B + D) 4.22m が指摘でき、柱間 A' 4.19m ≒ 柱間 (C + E) 4.30m, 柱間 A 4.30m ≒ 柱間 (B' + D') 4.47m が指摘できる。

以上のように、建物の P51~58・周囲の P61~70 については、柱間 E・C が両者に含まれ、P58 - P53 間 4.02m も柱間 A' 4.19m に近いことや、P62 - P63・P67 - P66 の中軸に、P52・55 が位置すること、両者の主軸がほぼ一致することなどから、P61~70 は、5号建物に属する廂あるいは柵列と考えられる。なお、柱間 B 2.65m と柱間 B' 2.44m が一致しないことから、あるいは柱間 P67 - P66 間は、建物の出入口口部を考慮して配されたものか。

6号掘立柱建物 (図版11, 第113・117図, 表33)

P74の位置では柱穴は確認していないが、1間×2間の建物と考えられる。

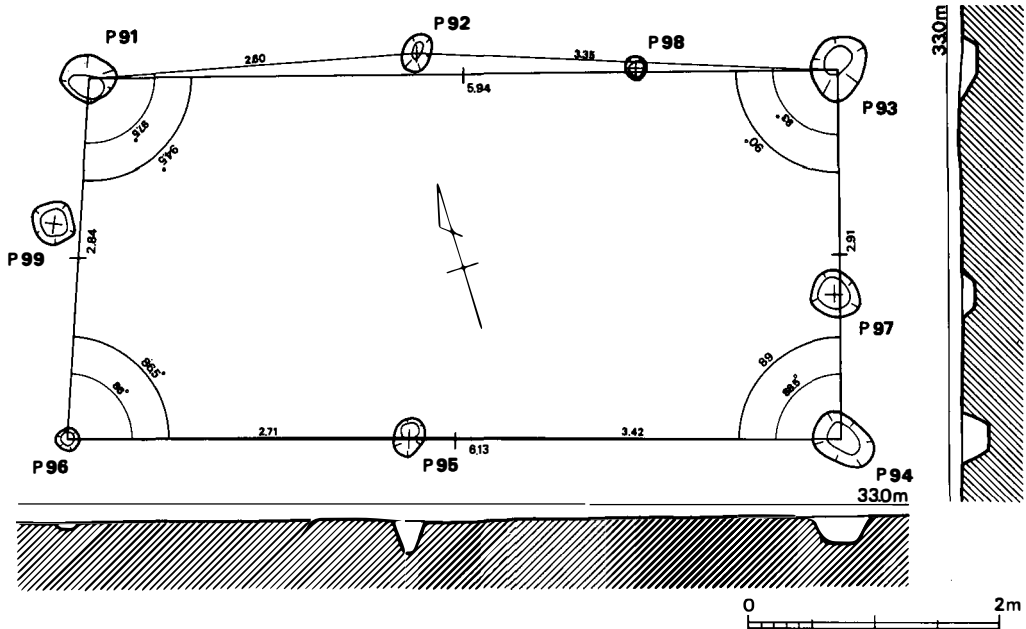
表33に示すように、きわめて整然とした建物で、梁行間に P79・77 を配す。また、南側桁行間の P78 は出入口施設に関するものか。



第117図 6号掘立柱建物実測図 (1/60)

7号掘立柱建物 (図版11, 第113・118図, 表34)

1間×2間の建物で、梁行間に P99・87 を配すが、共に梁行間の中央にはなく、P99は北側に・P97は南側に同様の配置で片寄っている。



第118図 7号掘立柱建物実測図 (1/60)

梁行2.93m≒柱間(A+B)2.88mが指摘あることから、P98も建物に属するものとしてよいだろう。

3. 土 塚

土塚は、1～9号の7基を検出。

1～4号土塚は、いずれも、調査区南西隅部で、近接した位置で検出。埋土も類似し、1号土塚から、13世紀前半～中頃の土師器(第120図652・653)が出土していることなどから、2～4号土塚も、ほぼこの時期であろう。

5～9号土塚は、いずれも、調査区南東隅部で、近接した位置で検出。平面プラン・埋土も類似し、8号土塚から鉄釘(第146図848)が出土していることなどから、5～7・9号土塚も、ほぼ中世の時期か。

1号土塚(図版2, 第119図)

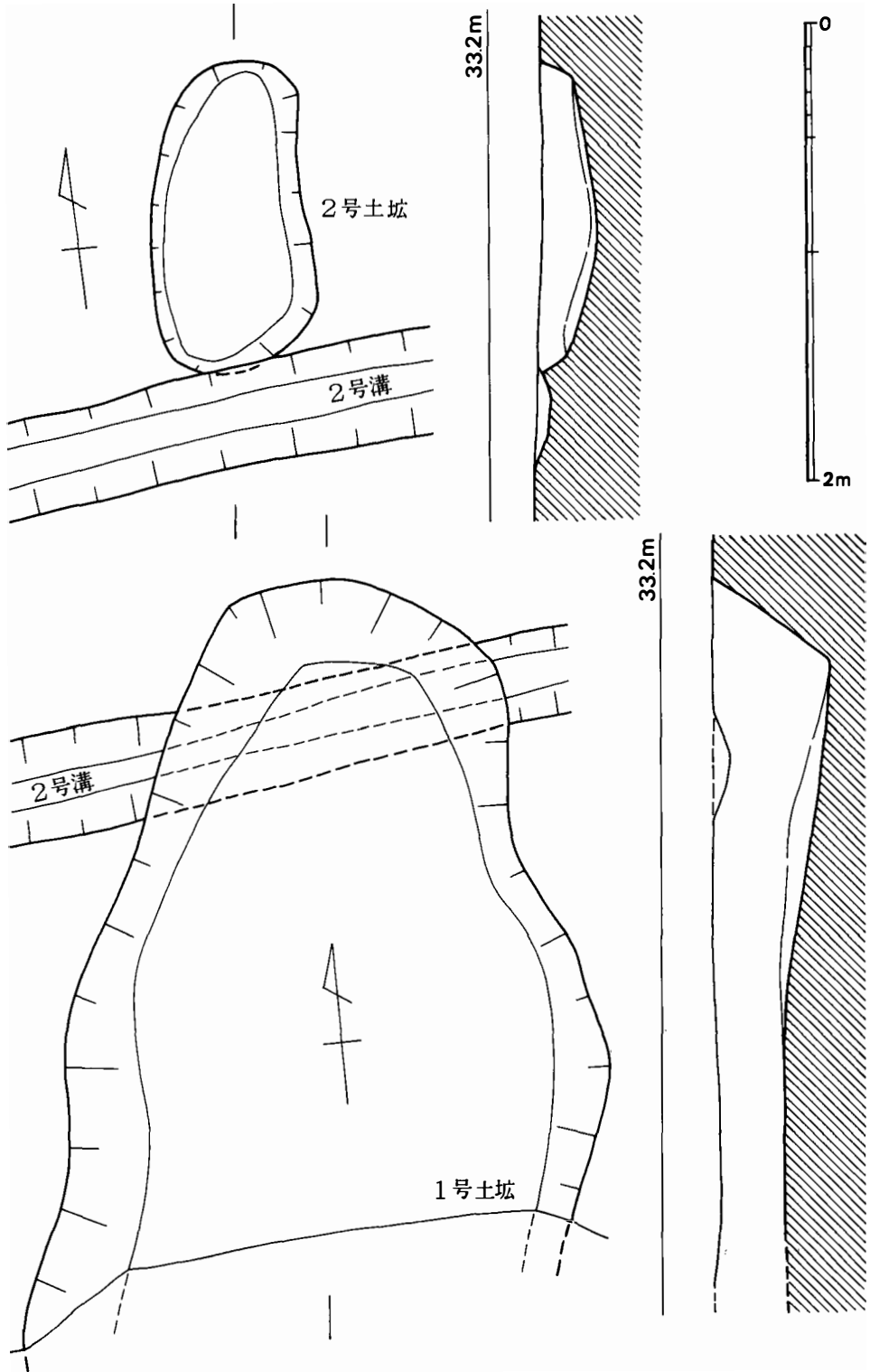
調査区南西隅部で検出。2号溝状遺構を切る。

土塚南半部は、調査区外で未調査であるため、土塚の平面プランの全様は不明である。

計測値は、遺構検出上面の長軸長が3.04m以上で・同短軸長1.38m、深さは南側が0.31m・北端が0.50m、長軸方向はN-0°-E。

出土遺物 (第120図, 表35)

土塚の埋土は、暗褐色粘質土で、最下層までほとんど変化はなく、床面から3cm上位と床面



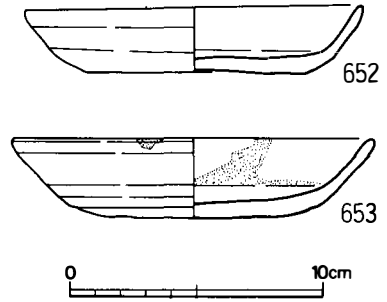
第119图 1·2号土坛，2号溝状遺構実測図 (1/30)

から、杯2個体を破片で出土した以外は、ほとんど遺物の出土はない。

杯 (652・653) 652は、器内の底部は不定方向のナデ、器外の底部は糸切りのまま。

653は、器内の底部が不定方向のナデ、器外の底部は糸切りのままで、板目状圧痕を認める。また、器内の体部から器外の口縁部にかけて、油煙痕を認める。

以上の杯は、13世紀前半～中頃か。



第120図 1号土壇出土土器
実測図 (1/3)

2号土壇 (図版2, 第119図)

2号土壇は、2号溝状遺構に切られており、土壇が古い。

土壇の埋土は、1号土壇に似た暗灰色粘質土であるが、2～5mm大の砂を多く含んでおり、出土遺物はない。

計測値は、遺構検出上面の復原長軸長が1.37m・短軸長が0.66mで、深さは0.28m・長軸方向はN-7°-E。

3号土壇 (第121図)

3号土壇は、1号溝状遺構を切る。

土壇の埋土は、2号土壇と同じであるが、床面に掘られた柱穴様小ピット中の埋土は、暗灰色粘質土でわずかに砂を含み、出土遺物はない。

計測値は、遺構検出上面の長軸長が1.07m・短軸長が0.67mで、深さは0.17m・長軸方向はN-0°-E。

4号土壇 (図版2, 第121図)

4号土壇が、5号掘立柱建物のP65を切る。4号土壇の埋土は、2号土壇と同じで、出土遺物はない。

計測値は、遺構検出上面の長軸長が1.10m・短軸長が0.65mで、深さは0.15m・長軸方向はN-82.0°-W。

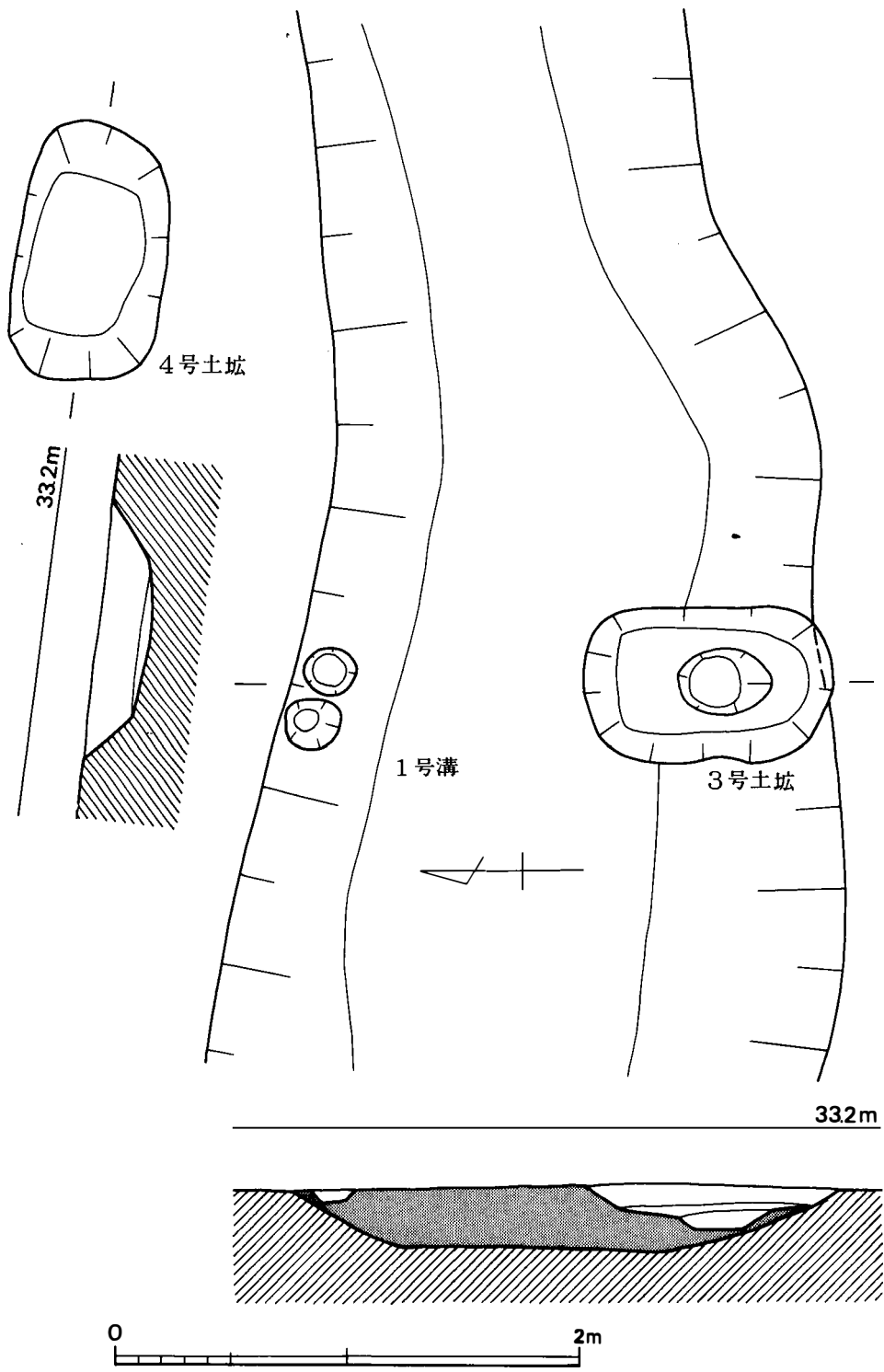
5号土壇 (図版125-2・137-1, 付図3)

5号土壇が4号円形周溝を切る。

土壇の床面は数cmの暗灰色粘土が堆積し、この直上および周壁には、細砂がわずかに付着し、その上部の埋土は灰褐色粘質土で、出土遺物はない。

以上のことは、6・7・9号土壇にも共通し、その平面プランも、隅丸方形あるいは隅丸長方形を呈していることから、ほぼ同時期と考えられる。

計測値は、遺構検出上面幅0.41×0.95m・深さ0.17m・長軸方向N-76.5°-E。



第121图 3·4号土坛，1号溝状遺構実測図 (1/30)

6号土壇（図版125-2・137-1，付図3）

6号土壇が，3号円形周溝を切る。

既述のように，5号土壇と諸特徴が共通するが，平面プランは隅丸方形に近い。

計測値は，遺構検出上面幅0.96×1.12m・深さ0.45m・長軸方向N-82.0°-W。

7号土壇（図版125-2・137-1，付図3）

7号土壇が，7号円形周溝を切る。

既述のように，5号土壇と諸特徴が共通する。

計測値は，遺構検出上面幅0.54×0.78m・深さ0.19m・長軸方向N-8.0°-E。6号土壇短軸方向とは一致。

8号土壇（図版10，付図3）

8号土壇が，1号溝状遺構を切る。出土遺物の鉄釘は，後述（第146図848）。

計測値は，遺構検出上面幅0.78×0.85m・深さ0.15m・長軸方向N-4.5°-E。

9号土壇（図版125-1・137-2，付図3）

9号土壇が，2号土壇を切る。

既述のように，5号土壇と諸特徴が共通するが，平面プランはやや隅丸方形に近い。

計測値は，遺構検出上面幅0.98×1.31m・深さ0.19m・長軸方向N-23.5°-W。

4. 円形周溝

円形周溝は，1～11号の11基を検出。いずれも住居・土壇・溝状遺構などの他の遺構と重複し，調査区の南西部を除く全域で出土（図版2・7）。

また，これら11基の円形周溝のなかで，南東部の1～7号は，重複関係にあつて連続しているが，8～11号は，ほぼ等間隔で個別に出土（図版125-1・128～133）。

以上のような円形周溝間，あるいは他の遺構との，切り合い関係による新・旧は，弥生期に限れば以下の5例を確認。

1号円形周溝→2号円形周溝

4号円形周溝→6号円形周溝

4号溝状遺構→5号円形周溝→3号円形周溝→6・7号円形周溝

↙
11号円形周溝

9号円形周溝→10号住居

10号円形周溝→19号住居→5号溝状遺構

なお，以下の説明では各円形周溝・住居・溝状遺構を，単にそれぞれ1号周溝・1号住・1号溝などと略す。

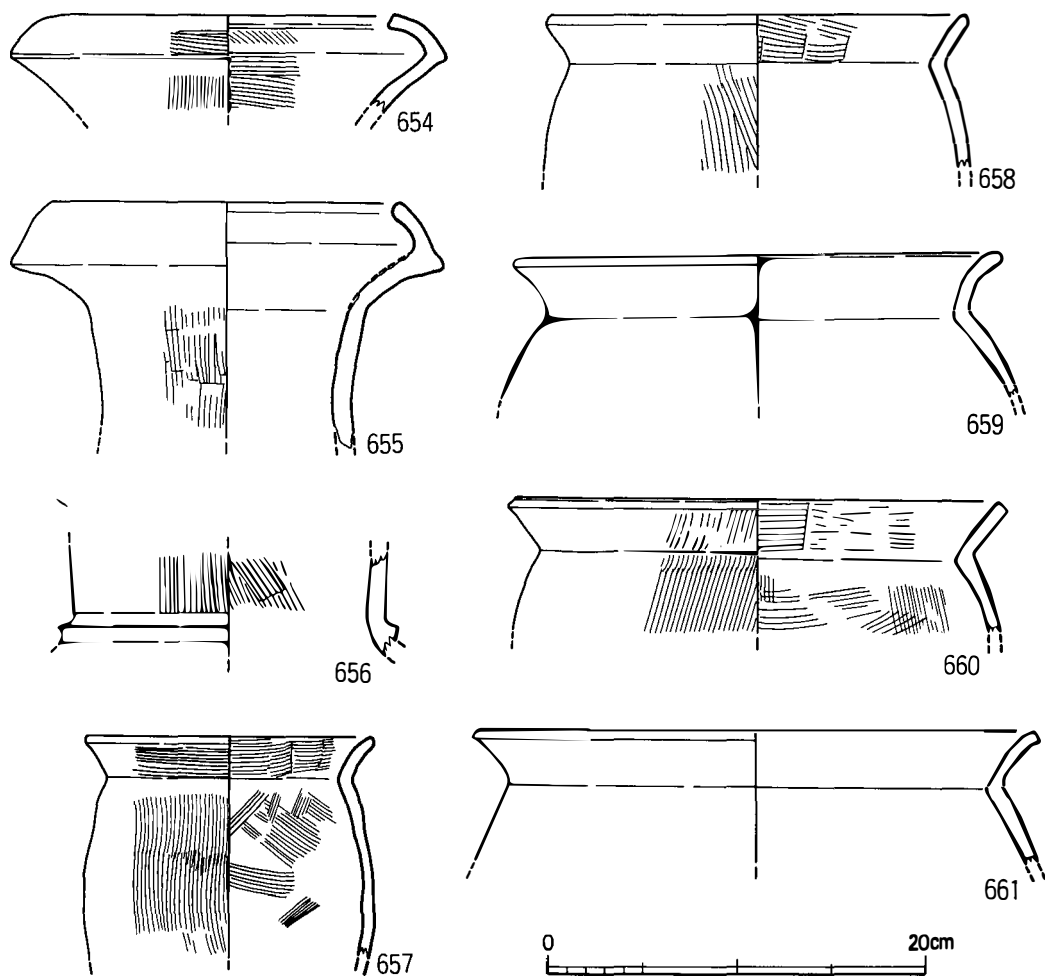
出土遺物は、11号円形周溝を除いていずれもわずかで、図示し得るすべての遺物を第132～136図に示している。

1号円形周溝（図版125-1，付図3）

1号周溝と他の遺構との、切り合い関係による新・旧は、1号周溝→2号周溝→3号住（古墳時代）→2号住→2号溝の順で新しいことを、プラン検出時に確認。

以上のように、多くの遺構に切られているため、平面プランの全様は明らかではないが、南・北両端は円形ではなく隅丸L字形。この隅丸L字形部で屈折する周溝は、南端部では同以東が直線状・以西が曲線状をなし、北端部では同以東・以西共に直線状をなす。

周溝の幅は、検出上面では、南半部側で最小0.88m・最大1.18m，同北半部側で最小0.78m・最大0.90m。前者が後者に比べて幅広い。



第122図 1号円形周溝出土土器実測図①（1/4）

周溝の床面標高は、南半部側で最低32.764m・最高32.874m、北半部で最低32.749m・最高32.794m。両者に著しい差位はない。陸橋部下の周溝の床面標高は、南側で32.819m・北側で32.794m。同様に著しい差位はない。

以上のことから、西側に、検出面で幅0.60mを測る陸橋部は、当初から設けられていた可能性が強く、その平面プランの全様は、付図3に破線で復原。このようにして復原した周溝外縁による計測値は、陸橋部を通る短軸径（I-I'）が4.82m・これと直交する長軸径（J-J'）が5.13m（長・短軸と断面図軸は45°で交差する）。

出土遺物（図版202，第122・123図，表35）

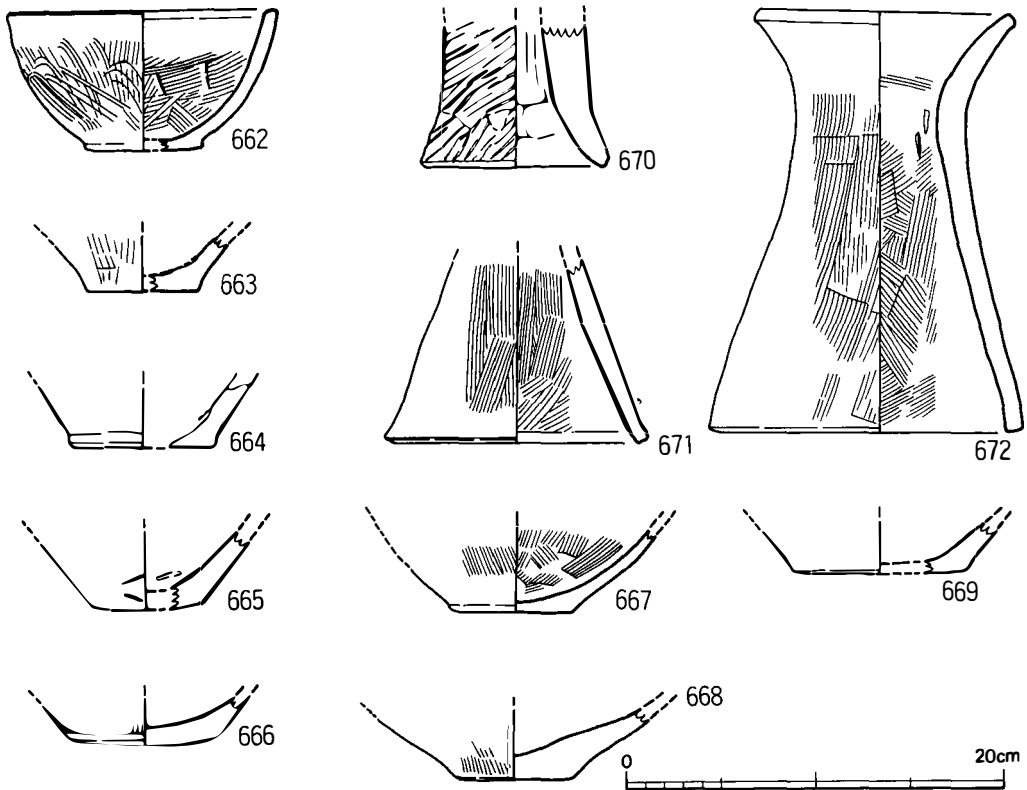
壺（654～656・667～669） 656は、頸部突帯がシャープ。

甕（657～661・663～666） 657は、器外の口縁部以下に、煤が付着。胴部の器内は、ナデ後に部分的にハケ目を加え、他はハケ目のまま。

鉢（662） 器内外のハケ目は、ナデに近い。

器台（671・672） 672は、口縁部の器内は、ハケ目木口痕を残すが、ヨコナデは丁寧。器外中位に、煤が全周にわたって付着。

支脚（670） 器外のタタキ痕は、柱状部が浅く、裾部が深い。



第123図 1号円形周溝出土土器実測図②（1/4）

2号円形周溝（図版126-1，付図3）

2号周溝と他の遺構との、切り合い関係による新・旧は、1号周溝→2号周溝→9号土壇（中世）の順で新しいことを、プラン検出時に確認。

しかし、2・3・6・7号周溝間の埋土の差位による切り合い関係は、プラン検出時には一部を除き、できなかった。

このことは、4基の周溝が同時に設けられたものとも考えることも一部可能であろうが、以下では、付図3に破線で復元したように、各周溝間に重複があるものとして説明するが、この重複部の0.70×0.98mの径の大きい隅丸長方形のピットは、いずれの周溝よりも古いものであることは、検出時の埋土の差位から確認。

平面プランは、東半部が曲線状・西半部がほぼ直線状をなし、後者は隅丸L字形部で屈折。

周溝の幅は、検出上面では最小0.46m・最大0.66mだが、全体的には著しい差位はない。

周溝の床面標高は、最低32.834m・最高32.879mで、ほぼ同じ。4基の周溝による重複部の床面標高は、各周溝間に差位はなく、いずれも同じ深さとなっている。

周溝外縁による計測値は、長軸径（K-K'）が4.60m・これと直交する短軸径（L-L'）が4.15m（長・短軸と断面図軸は45°で交差する）。

出土遺物（第124図，表35）

甕（673） 器内のヘラナデが丁寧で、器壁は薄い。器外の胴部下位と底部は丁寧なナデを施し、シャープな平底。11号円形周溝出土甕758と同類の破片。

支脚（674） 器内は、柱部に縦方向ナデ・裾部に横方向ナデ。器外は、縦方向ハケ目後にナデを加え、裾部は雑なナデを施すが、タタキ痕を残す。

3号円形周溝（図版126-1，付図3）

3号周溝と他の遺構との、切り合い関係による新・旧は、4号溝→5号周溝→3号周溝→7号周溝→6・7号土壇（中世）の順で新しいことを、検出時に確認。

しかし、3・6号周溝間の埋土の差位による切り合い関係は、プラン検出時には確認できなかった。このことは、両周溝が同時に設けられたものとも考えることも一部可能であろうが、以下では、付図3に破線で復元したように重複しているものとして説明するが、周溝西側内縁に接する0.52×0.61mの径の柱穴様ピットは、周溝よりも古いものであることが、検出時の埋土の差異によって確認。

平面プランは長円形状を呈し、周溝の幅は検出上面では最小0.46m・最大0.65m。全体的には著しい差位はない。

周溝の床面標高は、最低32.849m・最高32.889mで、著しい差位はない。3・7号周溝の重複部の床面標高は、前者が32.889m・後者が32.844mで、やや7号周溝が深い。

周溝外縁による計測値は、長軸径（M-M'）が5.77m・これと直交する短軸径（N-N'）が4.62m（短軸と断面図軸は直交する）。

出土遺物（第124図，表35）

壺(675・676) 675は、器内はナデ、器外の胴部はヘラナデ、底部はナデ。676は、器外のナデが丁寧で、シャープな平底。

4号円形周溝(図版127-1, 付図3)

4号周溝と他の遺構との、切り合い関係による新・旧は、4号周溝→6号周溝→5号土壇(中世)の順で新しいことを、プラン検出時に確認。

しかし、周溝西側内縁と同北側外縁部出土の2個の柱穴様ピットは、周溝検出上面では確認されていないことから、4号周溝よりも前者は古く、6号周溝よりも後者は古いことは明らかであるが、4号周溝と後者との新・旧は確認できなかった。

平面プランは、一部やや直線的な部分もあるが、1号周溝のような著しい屈折部は認められず、ほぼ曲線状。

周溝の幅は、検出上面では最小0.40m・最大0.66mで、全体的には著しい差位はない。

周溝の床面標高は、最低32.789m・最高32.884mで、ほぼ同じ。同様に周溝の南東先端部では32.884m・北東先端部では32.814mで、ほぼ同じ。

以上のことから、東側に、検出面で幅1.34mを測る陸橋部は、当初から設けられていた可能性が強い。

周溝外縁による計測値は、短軸径(O-O')が3.86m・これと直交する長軸径(P-P')が3.78m(短・長軸と断面図軸は直交=一致する)。

出土遺物(第124図, 表35)

壺(677) 突帯のヨコナデはシャープで、端部は凹む。

甕(678・679) 679は、ヨコナデが丁寧で、端部は凹む。

5号円形周溝(図版127-2, 付図3)

既述のように、周溝南側を3・6号周溝に切られているが、遺存状態は最も良好で、平面プランはほぼ正円形に近く、屈折部はない。

周溝の幅は、検出上面では最小0.46m・最大0.80m。後者は3号周溝床面での幅計測値であるから、全体的には著しい差位はない。

周溝の床面標高は、最低32.379m・最高32.619mで、その差位が著しい。前者は3号周溝と重複する断面図R部で、後者は4号溝と重複する断面図R'部である。この著しい差位は、周溝構築当初に、前者は地山に直接掘り込まれた部位であるが、後者は4号溝埋土中に掘り込まれた部位によることに起因するものと考えられる。断面図Q部は32.459m・同Q'部は32.517m。

周溝外縁による計測値は、長軸径(Q-Q')が4.66m・短軸径(R-R')が4.58m(短・長軸と断面図軸は直交=一致する)。

出土遺物(第124図, 表35)

壺(680) ハケ目は密で、器内は一部ナデも加える。突帯の刻み目は、整然と施す。

甕(681) 端部はやや厚く、わずかに内側に跳ね気味。

鉢 (682・683) 683は、器内外共に、ナデを丁寧にし、ハケ目は一部に残す。端部のヨコナデも丁寧で、シャープな稜有り。

器台 (684) 器内のナデ器外のヨコナデは、共に丁寧。

6・7号円形周溝 (図版125-2, 付図3)

6・7号周溝と他の遺構との、切り合い関係による新・旧は、

4号周溝→6号周溝→1号住居

5号周溝↗

3号周溝→ { 7号周溝 } → 7号土壇
 { 1号溝 }

の順で新しいことを、検出時に確認。

しかし、既述のように2・3号周溝と6・7号周溝との重複部での新・旧関係が確認できなかったため、6号周溝と7号周溝とは連続した同一の周溝であるとの認識は堅持しつつも、周溝の詳細説明上、以下では一応別の号数呼称とする。

6号周溝で、4・5号周溝間検出の2個の柱穴様ピットのうち、6号周溝外縁に接したピットは、周溝に切られていることをプラン検出時に確認したので新しいが、同周溝内のピットは、埋土に著しい差位はなく、プラン検出上面での切り合い関係は確認されていないことから、後者のピットとの新・旧関係は不明としておく。

6号周溝のなかで、2・5号周溝間の検出上面での幅は0.50m・床面標高は32.849m～32.864m、同様に5号周溝内では幅0.44～0.58m・標高33.701～33.704m、同様に4・5号周溝間では幅0.50～0.64m・標高32.664～32.719m、同様に4号周溝内では幅0.48～0.66m・南端では幅0.36m。4号周溝と共に重複した部分の床面標高は32.705～32.713m、この部分より以南では一段と深くなり、同32.654～32.674m、南端では32.759m。

7号周溝のなかで、3号周溝内の検出上面での幅は0.34～0.65m・標高32.834～32.834m、3号周溝以南での幅と標高は北端で0.53mと32.894m・南端で0.28mと32.849m。

以上のように、6・7号周溝の幅は共に南端部が著しく小さく、それ以外の部分では差位がほとんどない。標高は、2・3号周溝との重複部から、共に南端部に向って、わずかではあるが低くなっている。

これらのことから、6・7号周溝は、同一の周溝であり、1～5号周溝すべてを切って、1号溝(上層)に両南端部が連続する、不整円形プランの周溝と言えよう。

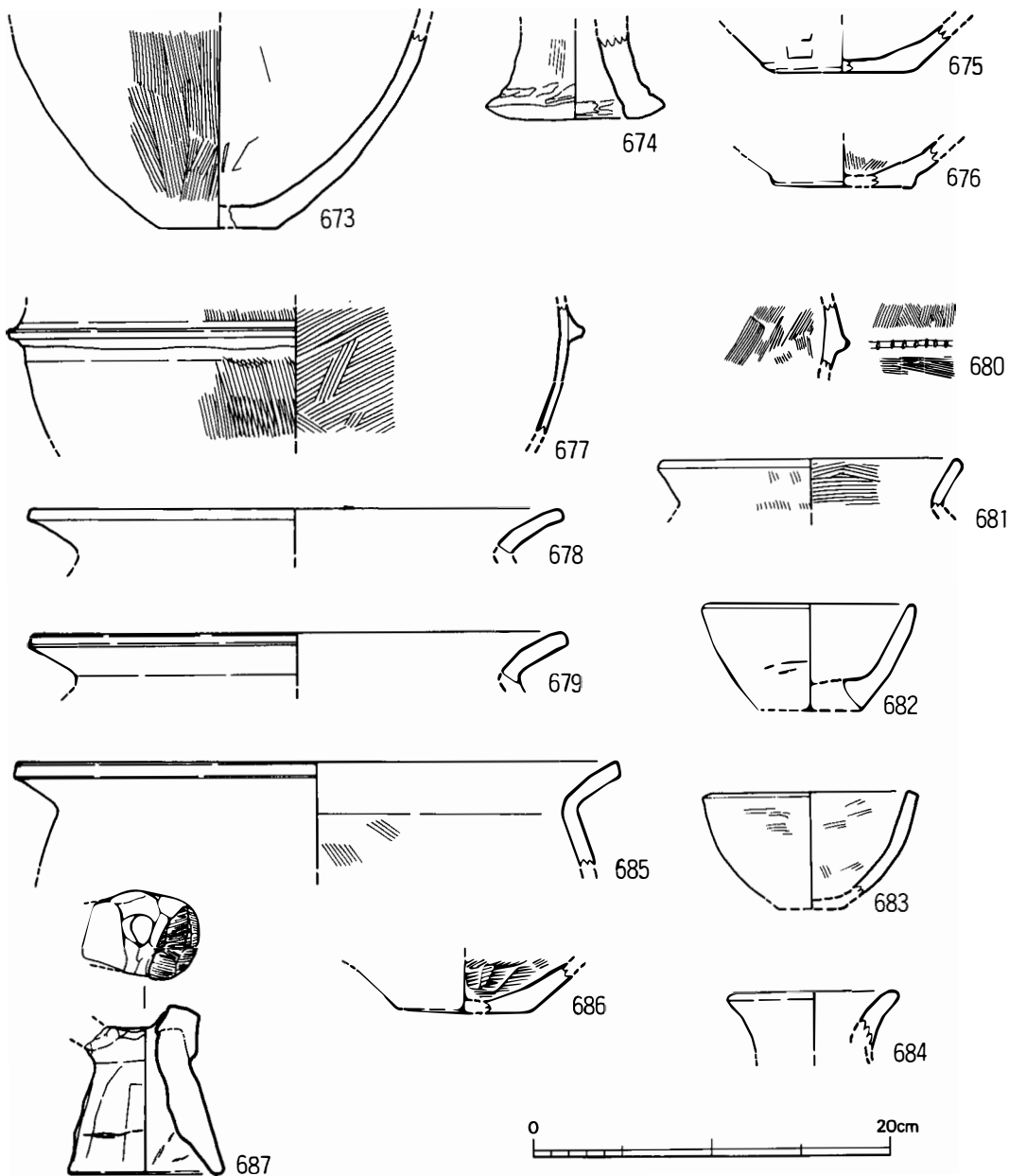
出土遺物 (図版202, 第124図, 表35)

壺 (686) 器外の胴部は、磨滅気味で、ナデ・ヘラナデの区別がつかない。

甕 (685) 胴部の器外は、磨滅。端部は、シャープで、凹む。

支脚 (687) 底径8.7cm・器高9.4cm。所謂、杓形部先端を欠失。同部器外の上面は、細いハケ目で面取りし、側面はナデ。胴部器外は、ヘラナデ後にナデを加え、裾部のヨコナデも丁寧。

以上のなかで、685・686は6号円形周溝から、687は7号円形周溝から出土。



第124図 2～7号円形周溝出土土器実測図(1/4)

8号円形周溝(図版128・129, 第102図)

既述のように, 8号周溝→1号掘立柱建物→18号住の順に新しくなることを確認。

なお, 周溝の内側に, 何らかの施設が存在するのではないかと留意したが, 1号建物以外は検出されなかった。この1号建物は, 第102図P16が, 明らかに周溝埋土を意識して, 他の柱穴より一段と深く掘られていることに加えて, 周溝内側でも東半部に偏在していること等から, 周溝との関係はないものと判断。

周溝は、検出上面の規模で、外径は南北方向約9.6m・東西方向9.08m、内径は同約7.6m・7.20m。若干南北方向に長いが、ほぼ正円形状。

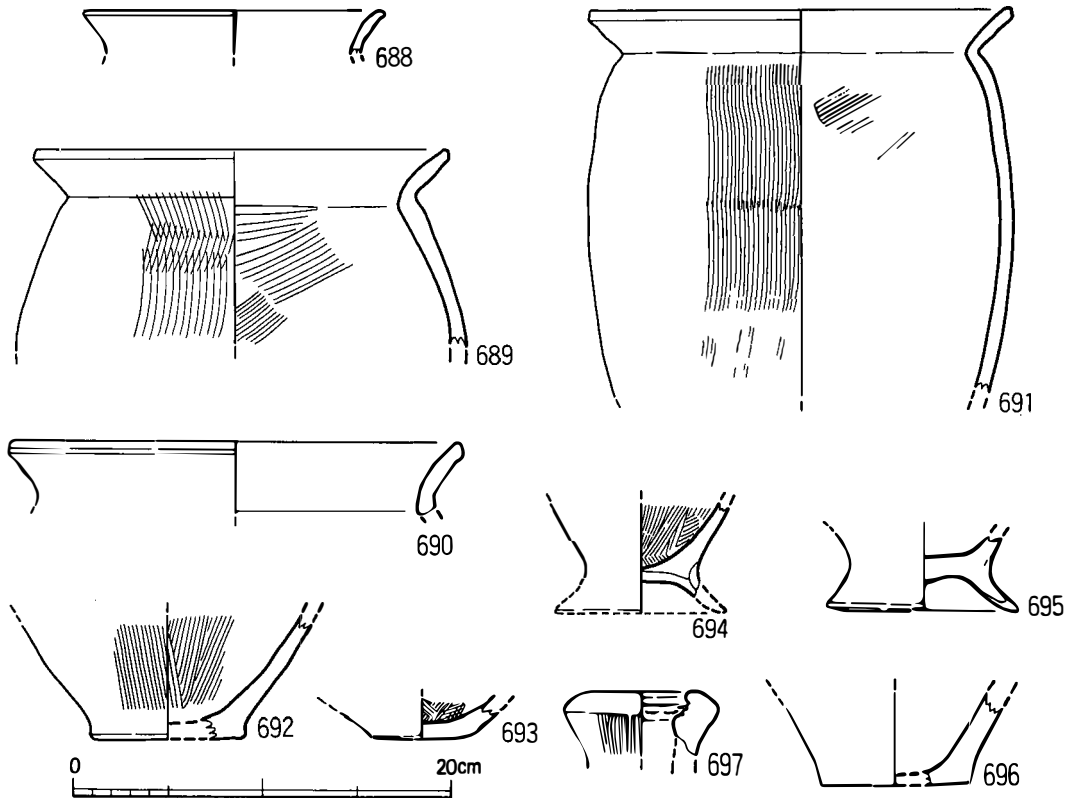
周溝床面は、内・外壁側共に、更に小溝が設けられ、中央部が土堤状に一段高くなっているが、図版128に示した以外にも、各所で土層断面の観察を行ったが、小溝と周溝との埋土に、切り合い関係を示すような埋土の変化はみなかった。

周溝の溝幅などの規模は、東西方向断面図近くで、東側が周溝検出上面幅110cm・床面幅70cm・外側小溝底までの深さ31cm・内側小溝底までの深さ25cm・中央部高床までの深さ17cm、西側が同88cm・67cm・30cm・29cm・26cmだが、P21南側では同130cm・86cm・36cm・37cm・27cm、P26の南側では同146cm・98cm・29cm・28cm・21cm。

このように周溝の南側が、溝の上面・床幅共に最も大きいのが、小溝の規模に著しい差位は認められず、レベル差もほとんどない。

遺物は、P26の南側付近で、上面プラン検出時に、ガラス小玉を1個検出したが、遺構に伴うものであるかどうかは不明。土器の出土量はわずかで、西半部内側小溝底で、甕の破片が出土（図版129-2）した以外は、いずれも床面から浮いた状態で出土（図版128-2・129-1）。

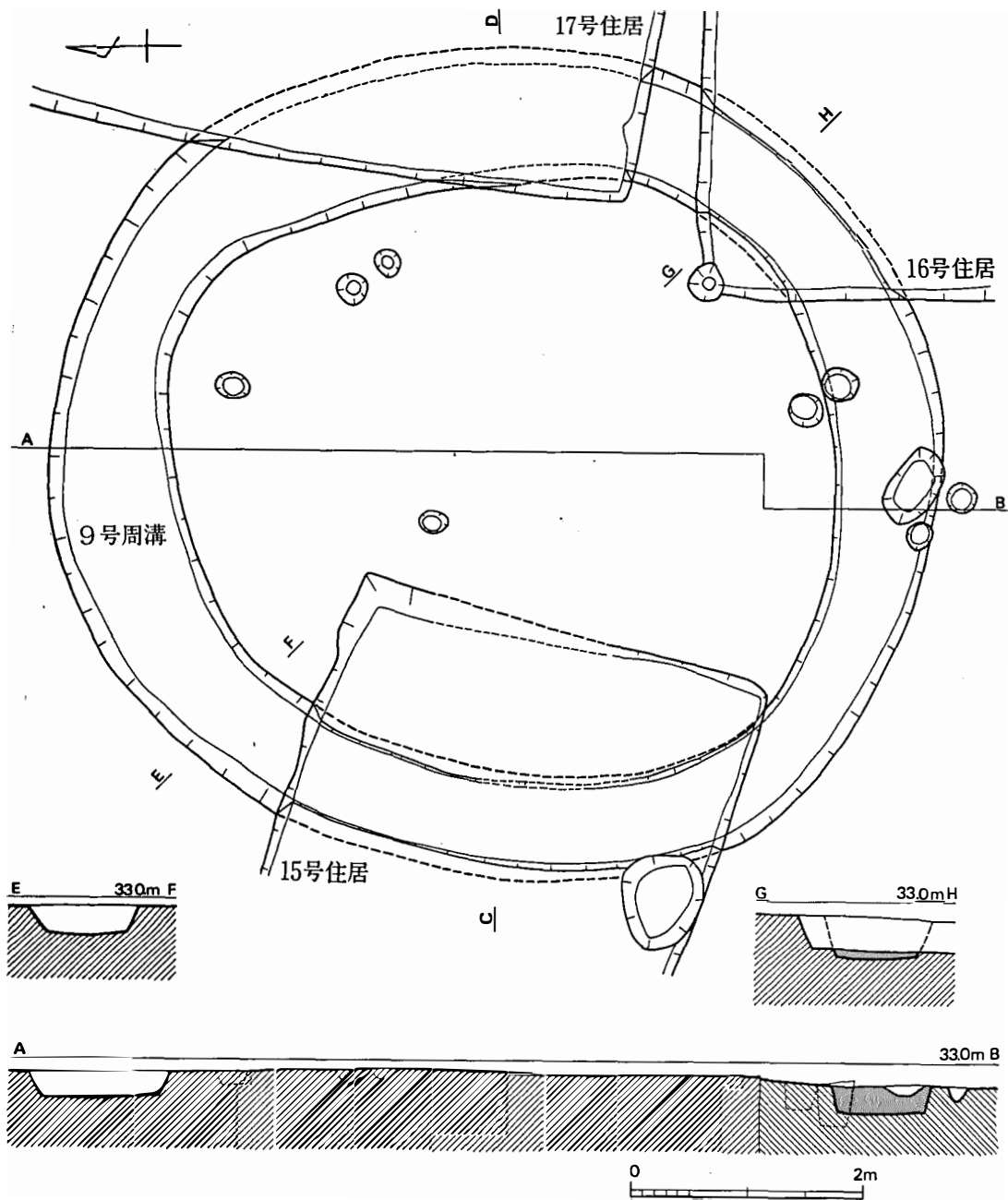
出土遺物（図版202，第125図，表35）



第125図 8号円形周溝出土土器実測図(1/4)

壺 (693) 器外の胴部は、横方向ナデを施し、底部はナデを加えるが、ハケ目を一部に残す。
 甕 (688~692・694・695・696) 691は器内は、ナデが丁寧で、一部のみハケ目を認める。口縁部は凹む。

694は、器内はハケ目のままで、胴部は縦方向ナデ。脚台部の器外はヨコナデし、器内はナデ。



第 126 図 9号円形周溝実測図 (1/60)

696の底部は、中期の甕で、流入混在したもの。

なお、688・690・691の器外には、煤が付着する。

支脚（697） 口縁部のナデ・器外脚部のハケ目は丁寧。器内には、指爪先痕を認める。

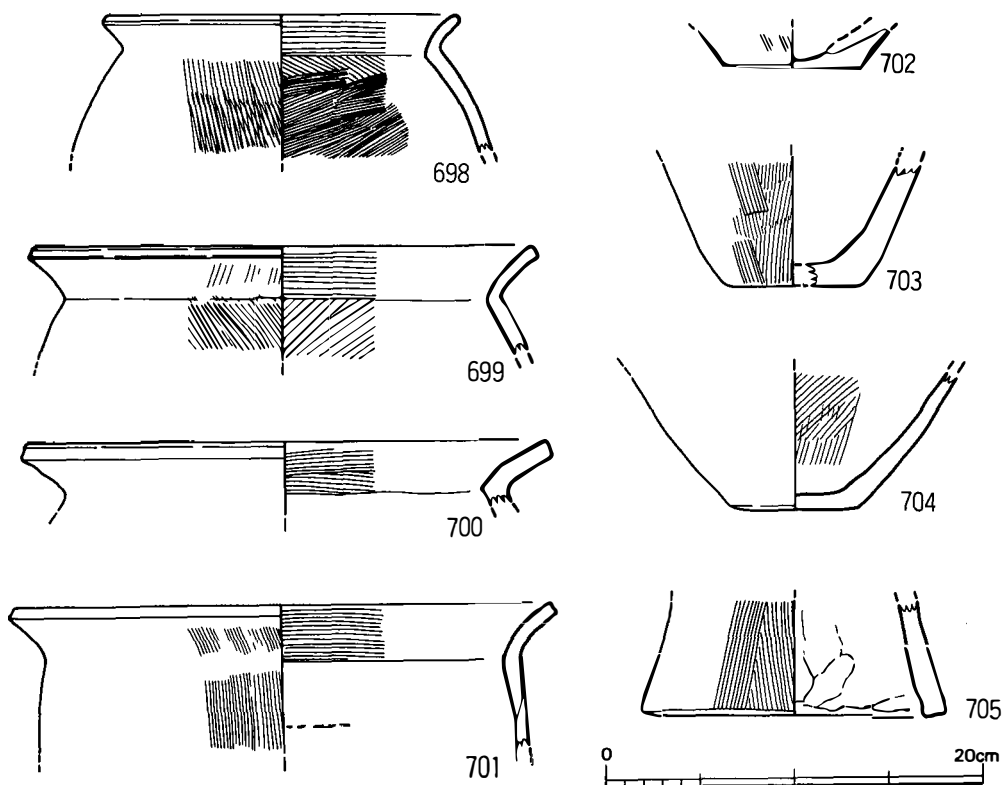
9号円形周溝（図版100-1・130-1，第126図）

9号周溝と他の遺構との、切り合い関係による新・旧は、9号周溝→16号住→15・17号住（古墳時代）の順で新しいことを、プラン検出時に確認。また、周溝の内外縁に接する柱穴様小ピットは、いずれも周溝を切っており、新しい。

平面プランのなかで、15号住内では、住居床面の南半部で周溝プランを検出し、同北半部で周溝底の痕跡を確認。16号住内では、住居床面で周溝プランを確認したが、17号住内では、住居床に切られて周溝底は遺存しなかった（図版130-1）。

しかし、周溝内縁が17号住に切られている部位は0.90mのみであることと、プランが正円形状を呈して5・9・11号周溝に類似することなどから、この部位に陸橋部が設けられていたと考えるより、当初から陸橋部は設けられていなかったとしてよいだろう。

以上のことから、平面プランは、わずかに長円形状で、周溝の幅は、検出上面では最小0.70



第127図 9号円形周溝出土土器実測図（1/4）

m・最大1.10mを測り、やや差位が認められる。

周溝の床面標高は、最低32.484m・最高32.694m。前者は南半部で、後者は北半部での計測値で、前者が著しく深い。

周溝外縁による計測値は、長軸径（A-B）が7.86m・これと直交する短軸復原径（C-D）が7.10mで、長軸方向はN-1°-E（短軸方向は、付図3の東西断面軸に一致する）。

出土遺物（図版202、第127図、表35）

壺（702） 底部の器外は、浅く粗なハケ目で、平底に調整。

甕（698～701・703・704） 701は、胴部器内のナデが丁寧。

器台（705） 裾端部のヨコナデは丁寧で、器内は指先ナデ痕を残す。

10号円形周溝（図版21・131・132、第105図）

10号周溝と他の遺構との、切り合い関係による新・旧は、10号周溝→19号住→5号溝→11号住（古墳時代）の順で新しいことを、プラン検出時に確認。

平面プランのなかで、19号住と5号溝埋土下面で周溝遺存プランを検出したが、11号住内では、住居西半部では周溝残存プランを検出していないので、この部分に陸橋が当初から設けられていたかどうかは不明。

しかし、断面図に示すように、周溝底面標高に著しい差位はないが、11号住床面標高は、床面全体のなかで南西部が若干低い（深い）ことから、11号住構築の際に削平されてしまったことが、充分に考えられる。また、等距離的に出土した8・9号周溝の平面プランなどの類似からも、当初は完周する周溝であったものとして、第105図では復原。

以上のことから、平面プランは、やや長円形状に近いもので、周溝外縁による計測値は、長軸径（A-B）が7.20m・これと直交する短軸径（C-D）が6.50mで、長軸方向はN-1°-E（長軸方向は、付図3の東西断面軸に一致する）。

ところで、11号住以南～19号住以西の周溝内からは、図版132に示すように、周溝底から若干浮いた状態で、拳大前後の河原石が多量に出土。この河原石群中からの土器片は、わずかであった。この石群は、図版132-1に示すように、5号溝との重複部でも若干出土したが、11号住内～同東壁間・同東壁～19号住北壁間・19号住東壁北半部では、出土していない。

上記のことから、この石群は、周溝南半部にのみ群在していたものが、19号住・5号溝・11号住と順時構築する段階で除去されたものとすべきで、19号住・5号溝・11号住構築の際の掘土中の河原石を周溝内に投棄したものではない（周辺の地山は細砂質土～細砂で、河原石を含まない）。

また、仮りに、これら後代の遺構に使用された石群の投棄であれば、11号住東壁～19号住東壁北半部の周溝内からの、出土があつてよいはず。

以上のことから、石群は周溝に何らかの関連があるものか、あるいは上記後代の遺構以外の構築・破棄による投棄かの、いずれかであろうが、ここでは前者の関連性が強いという指摘にとどめる。

出土遺物

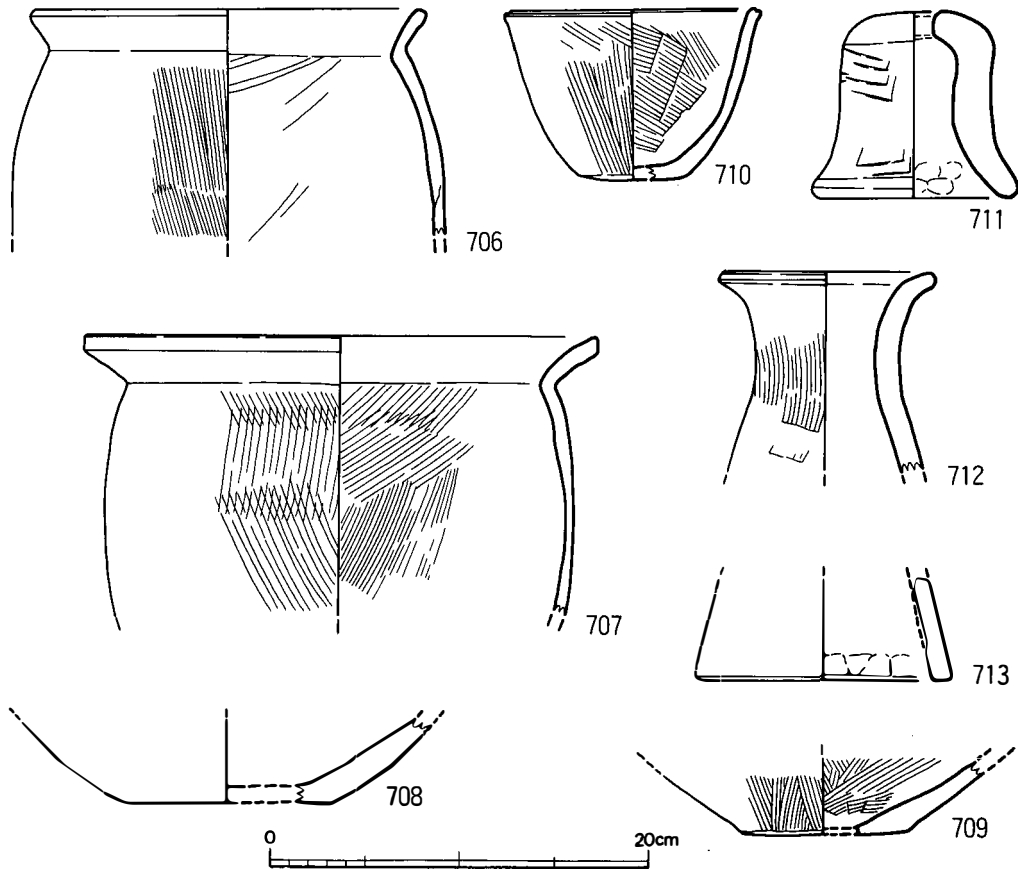
壺 (709) 底部の器外は丁寧にナデを施し、平底に近い。

甕 (706~708) 707は口縁部は肥厚し、端部はシャープで凹む。708は、11号円形周溝出土の大形甕758に類似するもので、器内は磨滅するが、器外のナデは丁寧に、シャープな平底。器壁は厚い。

鉢 (710) 器周残1/4の破片部での、体部の外傾は図のとおりで、底部の特徴からこの器形でよい。口縁部のヨコナデが強く、端部は大きく凹む。底部は、器内外共にナデを施し、やや凸レンズ状。

器台 (712・713) 713のナデは、丁寧に。

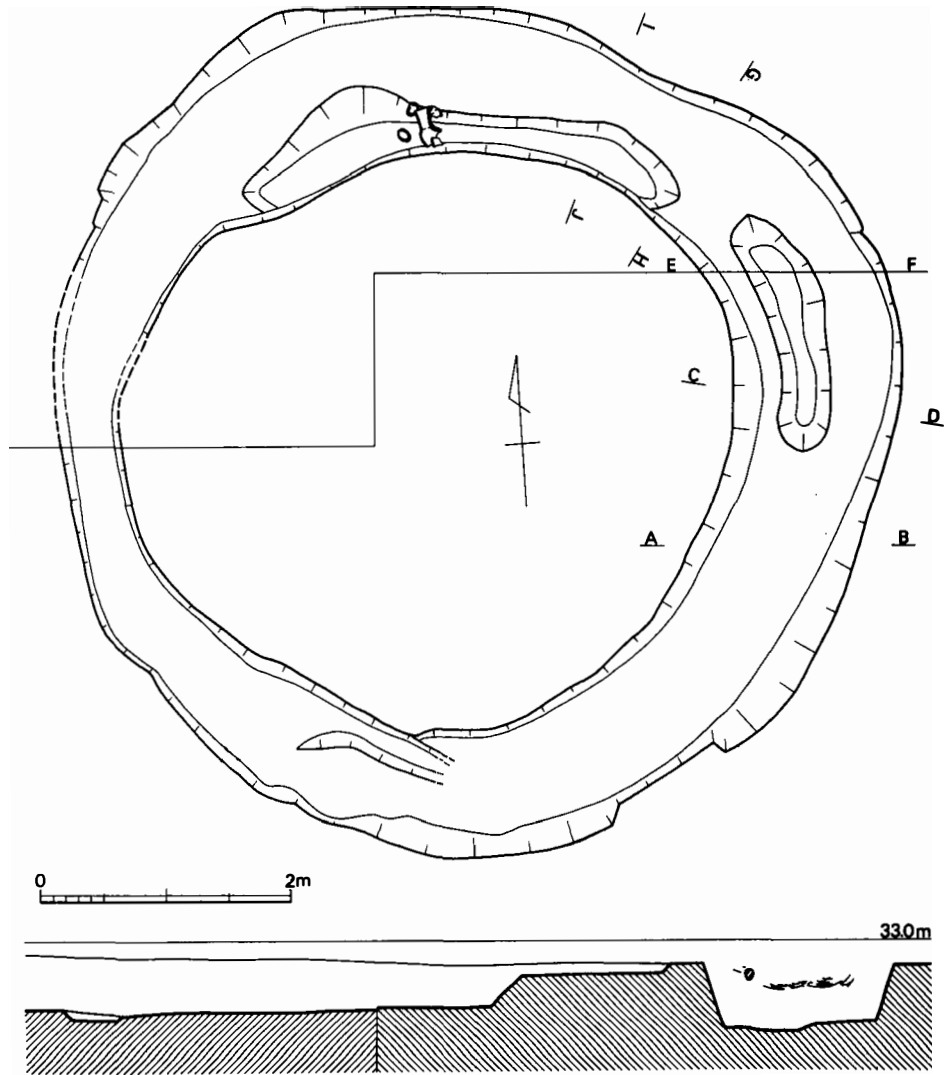
支脚 (711) 穿孔・ナデが丁寧に、器壁は著しく厚い。



第128図 10号円形周溝出土土器実測図 (1/4)

11号円形周溝 (図版133~136, 第129~131図)

11号周溝と他の遺構との、切り合い関係による新・旧は、4号溝→11号周溝→1号住(古墳時代)の順で新しいことを、プラン検出時に確認。

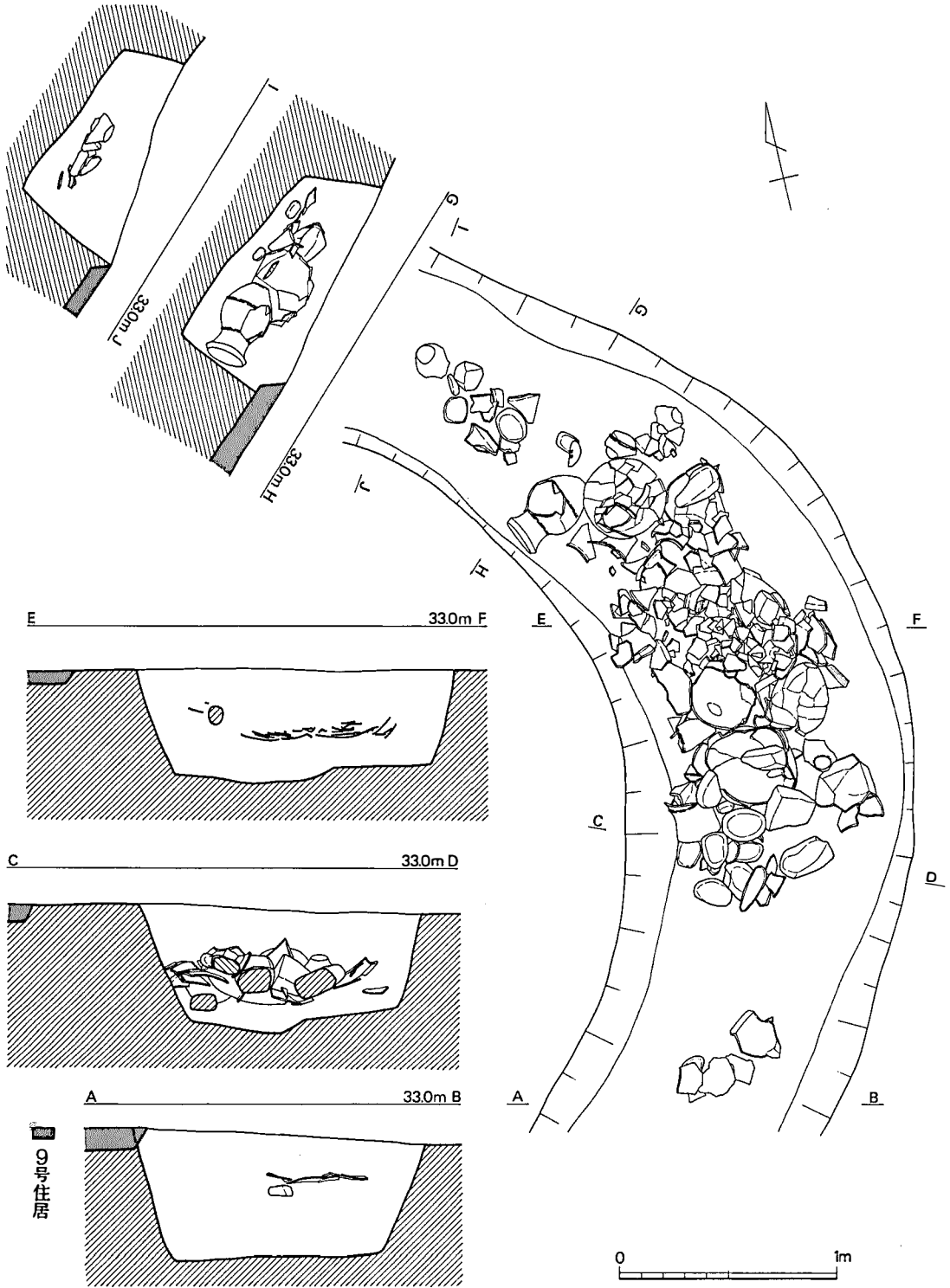


第129図 11号円形周溝実測図 (1/60)

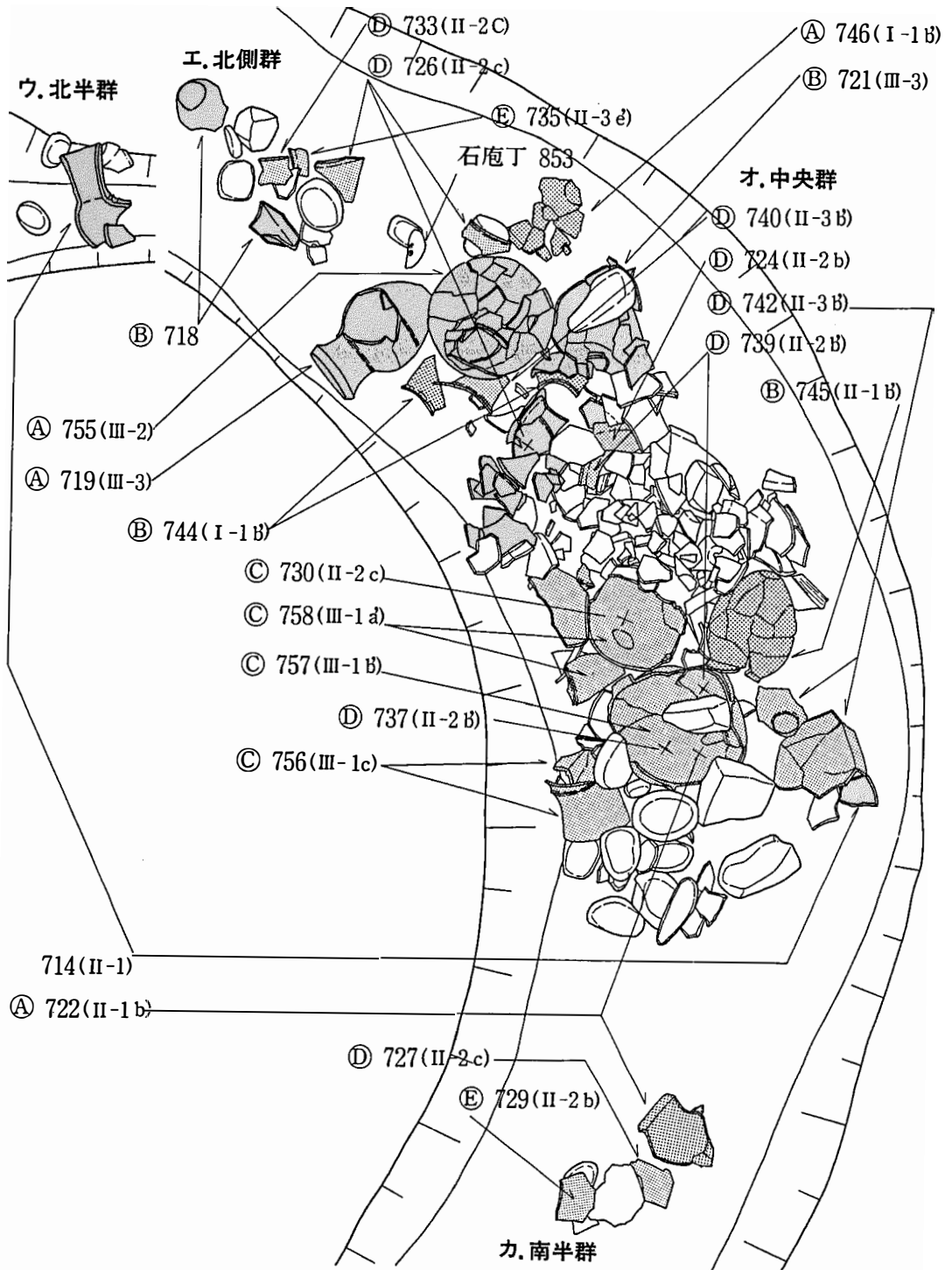
周溝の西半部の大半を、9号住に切られているが、平面プランは正円形に近く、陸橋部を設けずに完周。

周溝の幅は、検出上面では内縁と9号住東壁とが接する部分で1.27m、断面C-D部分で1.20m、内縁と9号住北壁とが接する部分では1.41mで、周溝北半部がやや大きい(第129図の周溝北東部幅がやや小さいのは、4号溝との重複部のプランが、4号溝埋土最上面で内縁は容易に確認できたが、外縁で一部不明確であったため、図版133に示すように、0.20mほど下位で確認したときのプランを図示したため)。溝底の幅は、前述の部分で、0.82m、0.96m、1.15mで、同様に北半部が大きい。

なお、9号住内の溝底の幅が、他の部分に比べて小さいのは、9号住に大きく削平されて、溝底プランの一部のみが遺存したことによるものと考えられる(9号住床面から周溝底までの



第130图 11号円形周溝遺物出土状態実測図① (1/30)



第 131 図 11号円形周溝遺物出土状態実測図② (1/20)

深さは0.05m前後を測る)。

周溝の底面標高は、前述の部分で32.352m、32.298m、32.309mで、4号溝と重複しない前者のみがわずかではあるが高い。また、9号住内でも同様で、32.431～32.386mを測り、わずかではあるが高い(浅い)。このことは、4号溝埋土中に、周溝北半部を設けたためにやや周溝底を深くしたものか。

ところで、周溝北半部の底面は内縁近くが若干深く掘られており、この部分から、第129図に示すように、多量の土器群・石群および石庖丁が出土。

周溝内の埋土に、上・下層で著しい差位はなく、また、人為的に埋めもどしたようなものでもなかったが、断面図に示すように、溝底から0.05～0.30m前後上位からの出土。

土器群の出土状態は、断面図C-D以南とG-H以西では破片で出土し、同断面間では完形に近い状態、あるいはその状態にまで復原接合されるものが集中。

石群の出土状態は、断面図C-D付近と同G-HからI-J付近にのみ集中。

遺物の収納に際しては、出土番号を付し、出土レベルを記入したが、復原接合の結果では、大形の甕が断面図C-DからE-F間で、中形～小形の甕が同E-F以北で、袋状口縁の壺が同G-H以南で、いずれも集中して出土した。

以上のことから、出土遺物はいずれも溝底からは浮いているが、その出土範囲と、内縁近くの溝底が若干深く掘られて小溝状を呈する範囲が一致することから、単に周溝埋土中に投棄されたものではないであろう。むしろ、一部周溝が埋没した段階で、意識的にこの範囲に整然と器種別に配置し、その両端近くに石群、あるいは破片群も配されたものと言え、周溝に伴なう祭祀的行為の所産と解され、10号周溝内出土の石群の性格も、あるいは11号周溝例に近いものであろう(このことについては、遺物の項で詳述)。

周溝外縁による計測値は、東西および南北方向共に、検出上面で6.74mだが、西半部が9号住に削平されており、当初は東西方向の径がやや大きいものであったと考えられ、後者を長軸とすれば、この長軸方向は付図3東西断面軸に一致し、短軸方向はN-1°-E。

出土遺物 (図版202～205, 第132～136図, 表35)

既述のように、周溝プランの1/3を9号住居が破壊しているが、多量の遺物が集中して出土(図版133-1)。

出土した土器群のなかで、口頸部・底部破片は器周残1/8弱のものも含めて図示したが、接合できなかった体部(胴部)破片が多数ある。後者の破片の多数は、上述の口頸部・底部破片や略完形例の破片と思われ、出土器種・個体数は、図示した例でほぼ把握できよう。

壺 (714～721・755・761・765・766)

法量差で、I(小形)・II(中形)・III(大形)に区分し、口縁部の特徴で、1(長外反)・2(短外反)・3(袋状)の三者に分類する。

II-1類は714。ヨコナデは、突帯部と端部のみに施し、共にシャープな稜を有し、他はハケ目のまま。器壁は厚手であるが、丁寧なヨコナデ・ハケ目調整。

II I-類は755。口縁部のヨコナデは軽いが、端部はシャープな稜有り。器外は、胴部最下位・

底部にハケ目後のナデを加え、底部は凸レンズ状。器壁は薄い。

I-3類は715。器内は、口縁部下半がナデ。端部は、ヨコナデが丁寧で、シャープな稜を有すが、屈折部は丸い。器外は、ハケ目のままに近く、一部がナデ。

III-3類は717~721。4例は、共に法量がほぼ等しく、口縁部・胴部突帯・底部などの特徴もほぼ同じで、後述する719とは明らかに異なり、最大径位の断面コの字状突帯に、太目の刻み目を整然と施す。仮に㊸グループとする。

717は、口縁部の上半をヨコナデするが、器外にハケ目を残す。器内は、口縁部下半の下位をナデるが、一部にハケ目を残し、胴部は、上半が横方向ヘラナデ・下半が縦方向ヘラナデ。

718は、口縁部の上半をヨコナデするが、器内に指押え痕を残す。同下半の下位は、ナデを施し、一部にハケ目木口痕を残す。仮に㊹グループとする。

720は、口縁部の上半を丁寧にヨコナデし、器外に一部ハケ目を残すが、屈折部・端部は、4例のなかでは最もシャープな稜有り。器外は、胴下位・底部にナデを加え、底部は凸レンズ状を呈すが、屈折部はシャープ。

721は、端部のみヨコナデし、シャープな稜を有すが、器内の指押え痕はそのまま。器外は、胴部下位・底部にナデを加え、底部はやや突レンズ状。胴最上位に、2個の円形浮文を付す。

719は、全体に磨滅気味であるが、口縁部の上半のヨコナデは丁寧で、端部はシャープな稜を有すが、下半との器外屈折部はやや丸い。口縁部の下半は、器内にナデを加える。胴部の器外は、ナデるが、ハケ目木口痕を残し、器外下位は、ヘラ様ナデ。既述のように、他の4例との差が多い。胴部最大径が小さく、その下方に付す断面三角形の突帯に刻み目を施さない。口縁部の下半は、直線的にわずかに外傾し、上半の内傾も小さい。器壁は厚い。

716は、鉢の体部とも考えられるが、I-3類・II-1類の胴部であろう。

761は、小形の甕の底部とも考えられるが、I類のものであろう。

765は、出土した甕の器内にハケ目を残す例がないことから、III-3類か。

甕 (722~746・749~754・756~758・762~764・767)

法量差で、I (小形)・II (中形)・III (大形) に区分し、口径と胴部最大径の差で、1 (後者が前者より著しく大きい。以下、著胴径大と略)・2 (後者が前者より小さい~やや大きい。同、口・胴径近似)・3 (後者が前者より大きい。同、胴径大) の三者に、口縁部の特徴で、a (直線的に外傾する。同、外傾)・b (直線的に著しく外傾する。同、著外傾)・c (外反する。同外反)・d (外弯する。同、外弯)・e (下半が外傾し、上半は更に外傾か内反する。同、下外傾・上外傾、下外傾・上内反) の五者に分類する。

なお、後五者は口縁端部がシャープな稜を有し、凹むもので、その他に端部が丸味を呈する a'~e'がある。

I-1 (著胴径大) b (著外傾、端部稜有、凹む) 類は722。胴部の器内は、磨滅気味であるが、ハケ目を残し、頸部下に指押え痕を明瞭に認める。器外は、ハケ目のまま。底部の器外はナデを施し、凸レンズ状。器壁は、胴下位~底部を除き、薄い。

I-1 (著胴径大) b' (著外傾、端部丸) 類の746は、胴部の器内はハケ目後にナデを加え、

下半のナデは丁寧。器外は、磨滅するがハケ目を認める。口縁部は、ヨコナデするが、一部にハケ目を残し、器外は磨滅。凸レンズ状の底部以外の器壁は薄い。

以上の土器は、口縁～胴下位までの器壁が著しく薄く、既述の壺Ⅲ-1 C類755との類似点も多い。これらを、仮に㊸グループとする。

I-1 b'類の744は、胴部の器内外のヘラナデが丁寧。口縁部は、ヨコナデが雑で歪み、肥厚した端部も、シャープに凹む部位は一部のみ。器壁は厚い。

同類の745は、胴部は器内外共に丁寧にナデるが、一部にハケ目を残す。口縁部は、ヨコナデが雑で歪み、肥厚した端部の凹みにシャープさが無い。器壁は厚い。

同類の750は、胴部の器内をヘラナデし、器外は磨滅気味であるが、ハケ目のまま。口縁部は、ヨコナデするが、横方向ナデに近く、肥厚した端部もほとんど凹まない。器壁は厚い。

同類の749は、胴部の器内の、ヘラナデが、丁寧であるが、器外は下半のみをヘラナデ。器壁は厚い。

以上の土器は、いずれも b'類で、器壁も厚く、仮に㊹グループとする。

Ⅲ-1 a' (外傾、端部丸)類は758。胴部の器内は、頸部下と下位をナデ、器外は最下位を強くヘラナデ様に面取りする。口縁部はヨコナデするが、器内にハケ目を残し、肥厚した端部はほとんど凹まない。胴部最大径は上位に認められ、突帯は下位に付す。胴部下位～底部は厚く、平底。

Ⅲ-1 b' (著外傾、端部丸)類は757。胴部の器内は、丁寧にヘラナデし、器外はハケ目のまま。口縁部はヨコナデするが、器内に一部ハケ目を残し、端部は丸い。突帯は、胴部最大径位の中位に付す。器壁は、胴上位以下がやや厚く、平底。

Ⅲ-1 C (外反。端部稜有、凹む)類は756。下半は一周して欠失するため不明。口縁部は、器内下半をナデ、他はヨコナデし、肥厚しない端部はシャープな稜を呈し、凹む。胴部最大径は、中位よりやや上方で認められ、中位に突帯を付す。器壁は薄い。

以上の土器は、いずれもⅢ(大形)類にしては、器壁が薄い。突帯も付すので、仮に㊺グループとする。

Ⅱ-2 (口・胴径近似) b (著外傾。凹む)類は724・738。

Ⅱ-2 b' (著外傾。丸い)類は723・737・739。739は、胴部の器内のヘラナデが丁寧で、一部のみしかハケ目を残さない。

Ⅱ-2 C (外反。凹む)類は725～727・730・733。726は口縁部は、下半より上半がやや肥厚する。

Ⅱ-3 (胴径大) b' (著外傾。丸い)は740～742。741・742の口縁部は、上半が肥厚し、器壁は薄い。

以上の土器は、端部は著しく外傾するか外反するが、外弯することはない。端部が肥厚せず、上半がやや厚い程度で、その他の器壁は薄い。平底か、平底に近い。これらを仮に㊻グループとする。

Ⅱ-2 (口・胴径近似) d (外弯。ほとんど凹まない)類は728・729・731。729は口縁部が

肥厚せず、728・729は胴部の器壁が、著しく薄い。

II-3 (胴径大) e (下半外傾・上半外傾。端部凹む) 類は732。

II-3 e' (下半外傾, 上半内反・外傾。丸い) 類は734・735。

以上の土器は、いずれも e・e'類で、器壁の厚さは、上・下半で変化がない。仮に㊦グループとする。

高杯 (759) 器内外共にナデを施すが、脚部の外面は更にヘラナデし、一部にハケ目を残す。

杯 (748) 器内は、ナデかヘラナデか不明であるが、器外のハケ目と共に丁寧に施す。

手捏土器 (747) 口径8.0cm・底径4.8cm・器高約3.1cmを測る。杯のミニチュアである。

出土した土器の、器種別の特徴は以上のとおりである。

以下では、その出土状態の特徴を補足する。

ア. 9号住内で遺存した周溝部溝底から、出土した鉢748を除き、土器・石庖丁853・河原石は、すべて著しく溝底から上位で出土。

イ. 鉢748を除き、出土・石庖丁853・河原石は、北半部の壺714 (図版136-2, 第129図) 周辺群, 北側のNo.1~No.9土器周辺群, 中央部のNo.1~21・23~29周辺群, 南側のNo.22周辺群の4群に顕著に区分できる。

このことから、鉢748を除いた4群を、北半群, 北側群, 中央群, 南側群とし、各群での出土状態を列記する。

ウ. 北半群

① 破片壺II-1類714が、周溝内側・河原石群上で、縦方向に割れて、1個体だけ出土。

エ. 北側群

② 破片㊦グループ壺II-3類718が、周溝内側南端と北端・河原石外から胴下位~底部と口縁部と分散して出土。

③ 破片㊦グループ甕II-2C類733と、破片㊦II-3e'類735が、共に、周溝内側・周溝中側から、口縁部のみ3個の河原石間で出土。

④ 破片㊦グループ甕II-2C類726, 周溝内側・南端・河原石外側から、口縁部片のみ出土。

オ. 中央群

㊦ 北端ブロック

⑤ 一部破損石庖丁853が、周溝内側・河原石上から出土。

⑥ 完形㊦グループ壺III-3類719が、周溝内側から出土。

⑦ 完形㊦グループ壺III-2類755が、周溝中側から出土。

⑧ 破片㊦グループ甕II-2C類726が、周溝中側・北端・河原石上から、口縁部片のみ出土。

⑨ 完形㊦グループ甕I-1b'類746が、周溝外側・北端・河原石外から出土。

⑩ 破片㊦グループ甕I-1b'類744が、周溝内側と外側・壺755外から、口縁部片のみ出土。

⑪ 破片㊦グループ甕II-3b'類740が、甕744間から、口縁部片のみ出土。

⑫ 略完形㊦グループ壺III-3類721が、周溝外側から、壺722破砕片・河原石内蔵で出土。

㊦ 中間ブロック

⑬ 完形㊸グループ壺Ⅲ-3類720が、破片壺Ⅰ-3類718と共に、周溝内外～外側から、破砕されて出土。

⑭ 破片㊸グループ甕Ⅱ-2 C類726が、口縁部破砕で出土。

⑮ 破片㊸グループ甕724が、周溝内側から、口縁部破砕で出土。

⑯ 完形㊸グループ甕Ⅱ-2 b'類739が、周溝内側から、口縁部破砕片で出土し、甕757内からその他の破砕破片が出土。

⑰南端ブロック

⑰ 完形㊸グループ甕Ⅲ-1 a'758が、周溝内側から、潰れた状態で出土。

⑱ 完形㊸グループ甕Ⅱ-1 b'745が、周溝外側から出土。

⑲ 完形㊸グループ甕Ⅲ-1 b'757が、周溝内外から、甕722・737・739・破砕片・河原石を内蔵して出土。

⑳ 胴部打欠㊸グループ甕Ⅲ-1 C類756が、周溝内側・河原石間から、破砕片で出土。

㉑ 完形㊸グループ甕Ⅱ-3 b'類742が、周溝外側・壺714破片上から、破砕されて出土。

カ 南側群

㉒ 完形㊸グループ甕Ⅱ-1 b類722が、周溝内側・北端と甕757内から、破砕されて出土。

㉓ 破片㊸グループ甕Ⅱ-2 c類727が、周溝内側から、破砕されて出土。

㉔ 破片㊸グループ甕Ⅱ-2 d類729が、周溝内側・河原石上から、破砕されて出土。

以上の、①～㉔項の詳細な出土状態から、器制を配慮した、意識的再配置は、以下のように指摘できる。

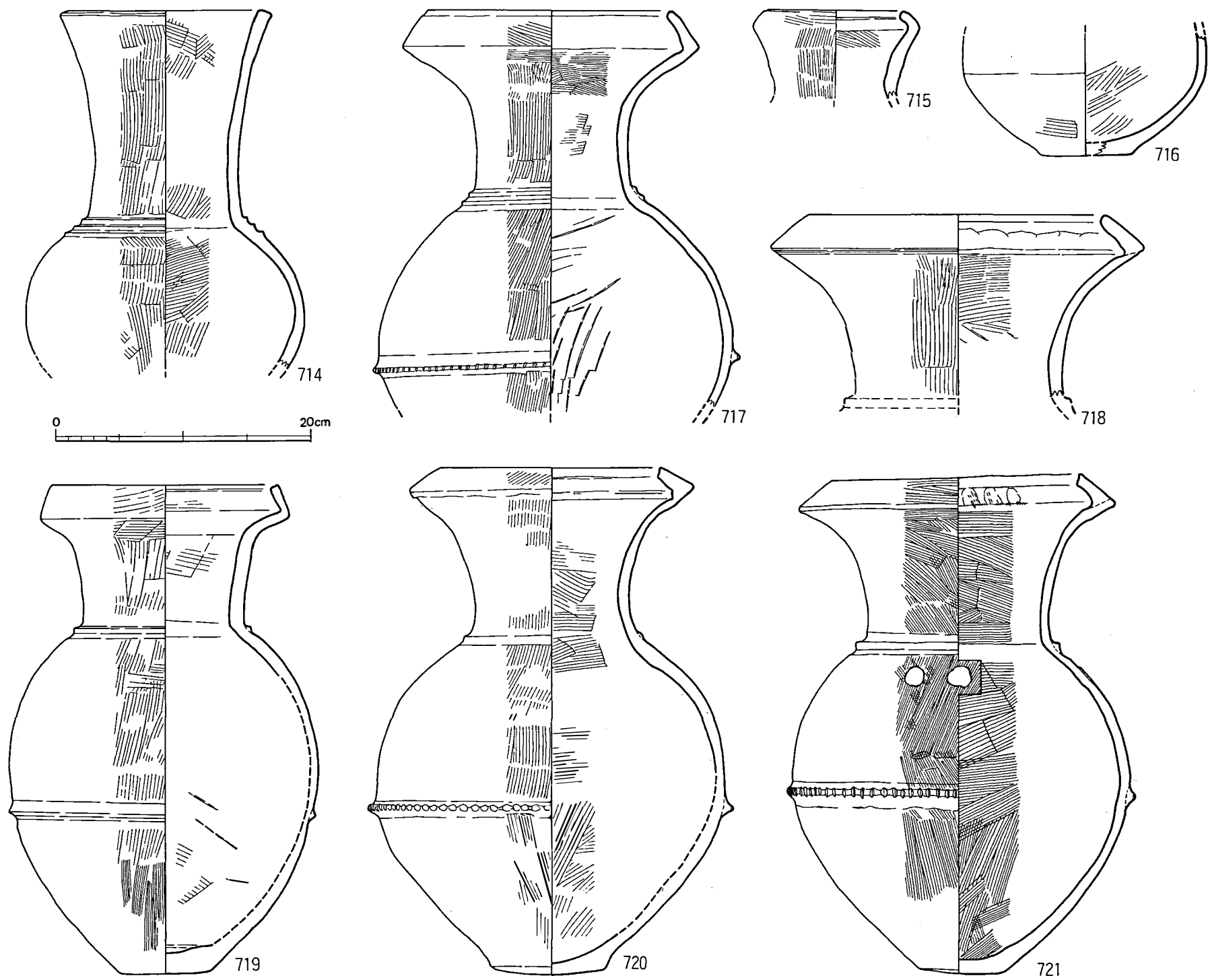
A……北半群①、北側群②～④、中央群㊸北端ブロック⑤・⑧・⑨・⑫、⑰南端ブロック⑱・㉑、南側群㉒の各項から、4群すべてに、河原石が配されている（河原石に対しても、土器・石庖丁と同等に、単に石コロとしてではなく、再配置前の河原石の用途を忘れる（無視する）ことなく、配慮したものと言える）。

B……上記各項のなかで、北半群①、中央群㊸北端ブロック⑤・⑧、同⑰南端ブロック㉑、南側群㉒の各項から、3群での口縁部破砕片は、共に、群端の河原石上に1例ずつ配されている。このことから、北側群④項の甕726口縁部破片も、旧状は、河原石上に配されていたものが、落下したものであろう。（共に口縁部破片であるから、破片と言うことでは器制は同じである）

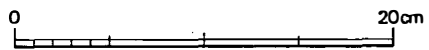
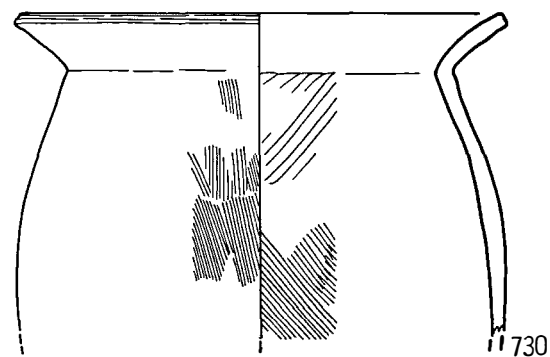
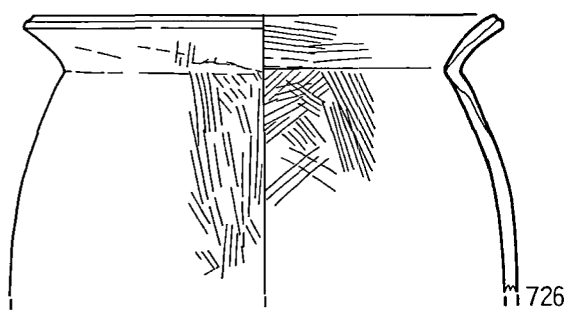
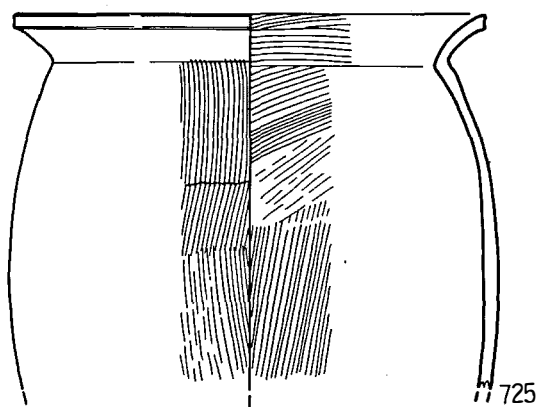
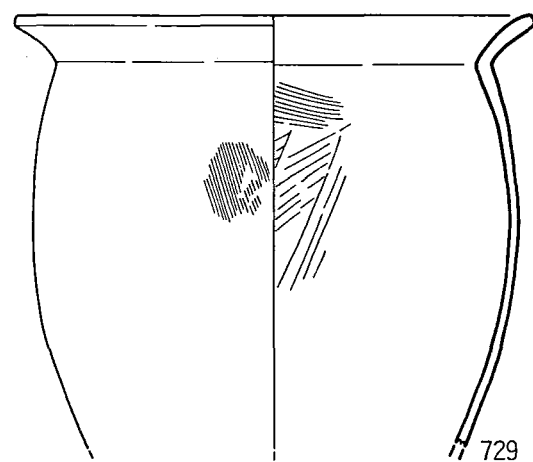
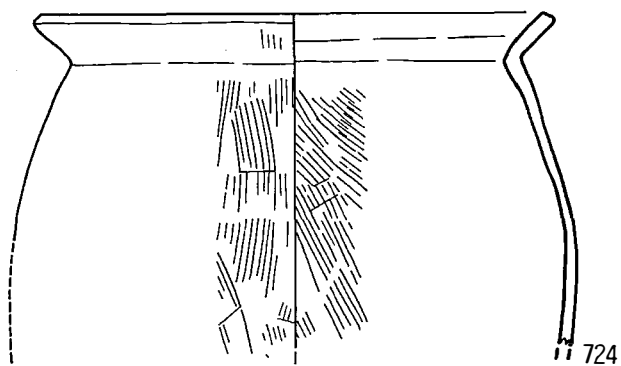
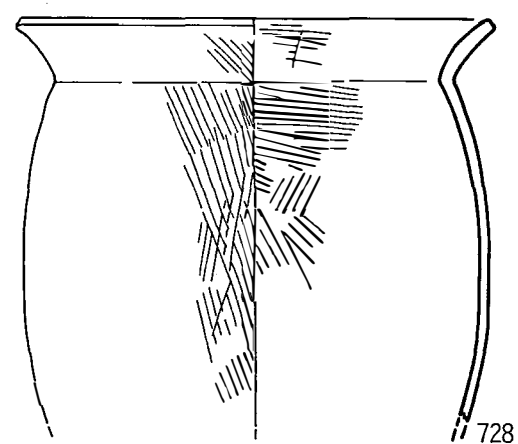
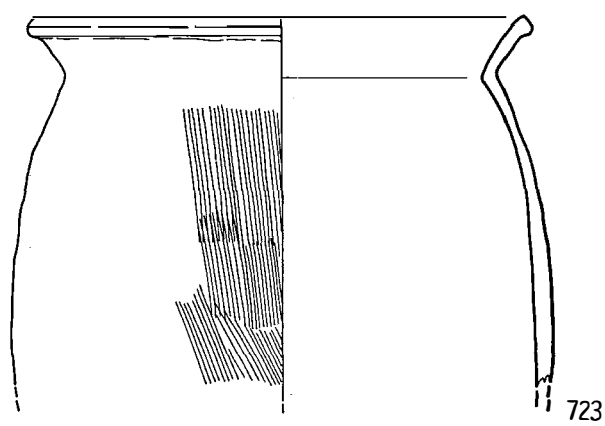
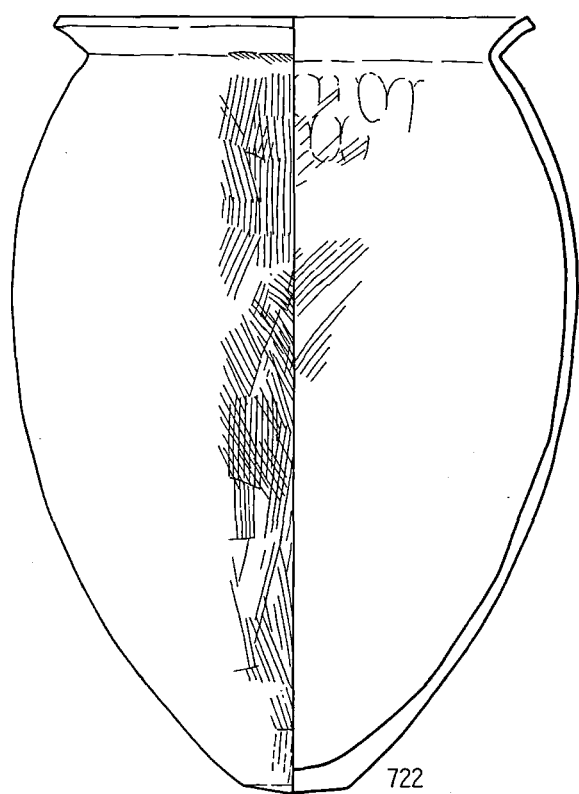
また、㊸北端ブロック⑤項の石庖丁851も、群端に一部碎損して配されている。（土器・石庖丁は共に、等しい器制として配慮されている）

C……中央群㊸北端ブロック⑫項と⑰南端ブロック⑱項から、北端ブロックでは壺Ⅲ-3類懐石・南端ブロックでは甕Ⅲ-1b'類懐石が、対峙している。（共にⅢ類ということでは同器制間対峙で、壺・甕ということでは異器制間対峙という配慮がされている）

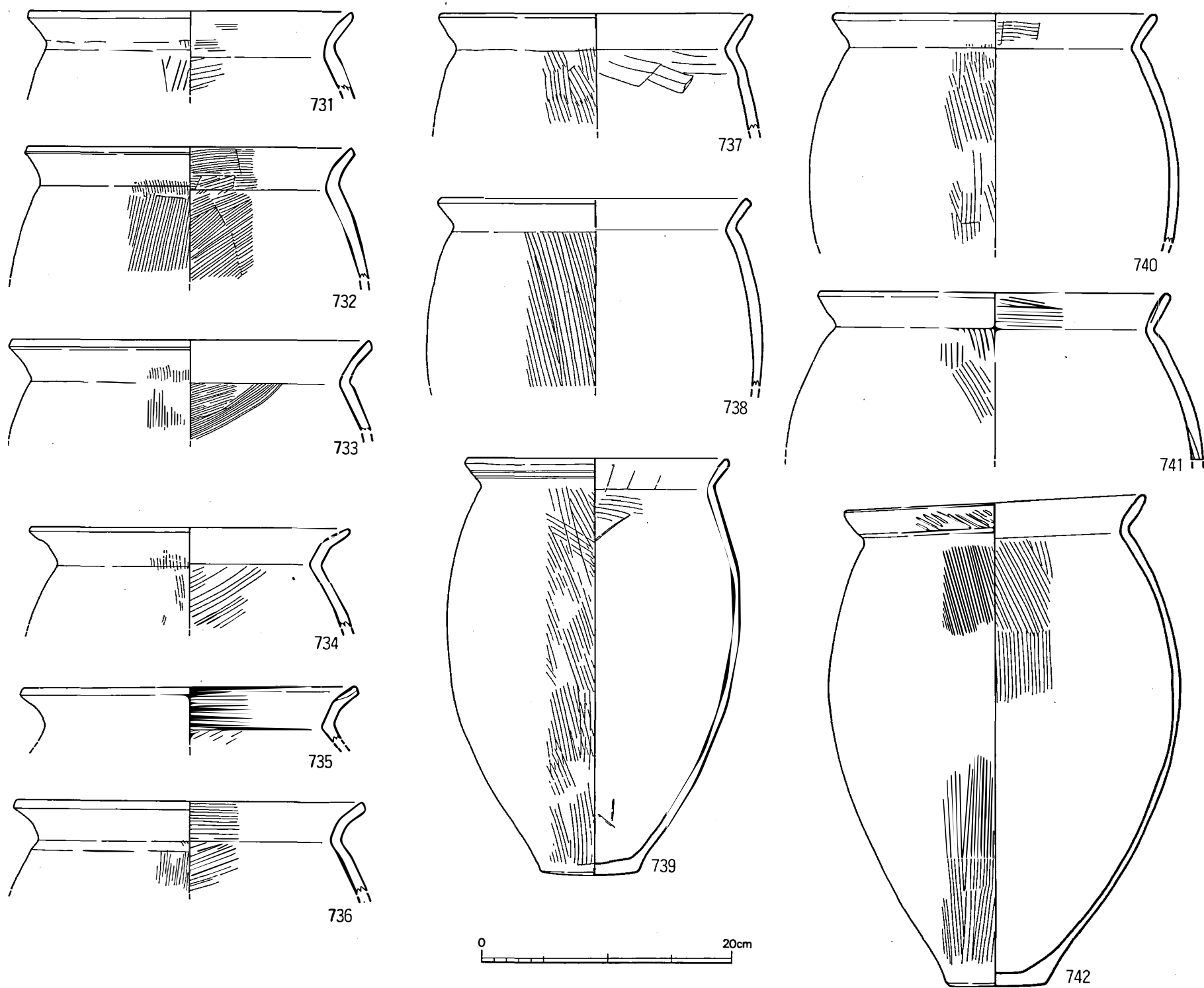
D……上記のブロック間対峙は、㊸北端ブロック⑨項の完形㊸グループ甕Ⅰ-1 b'と、⑰南端ブロック⑱項完形㊸グループ甕Ⅱ-1 b'の対峙でも認められる。（共に完形・甕・1 b'類ということでは、同器制間対峙で、㊸・㊸、Ⅰ・Ⅱ類ということでは、異器制間対峙と言う配慮がなされている）



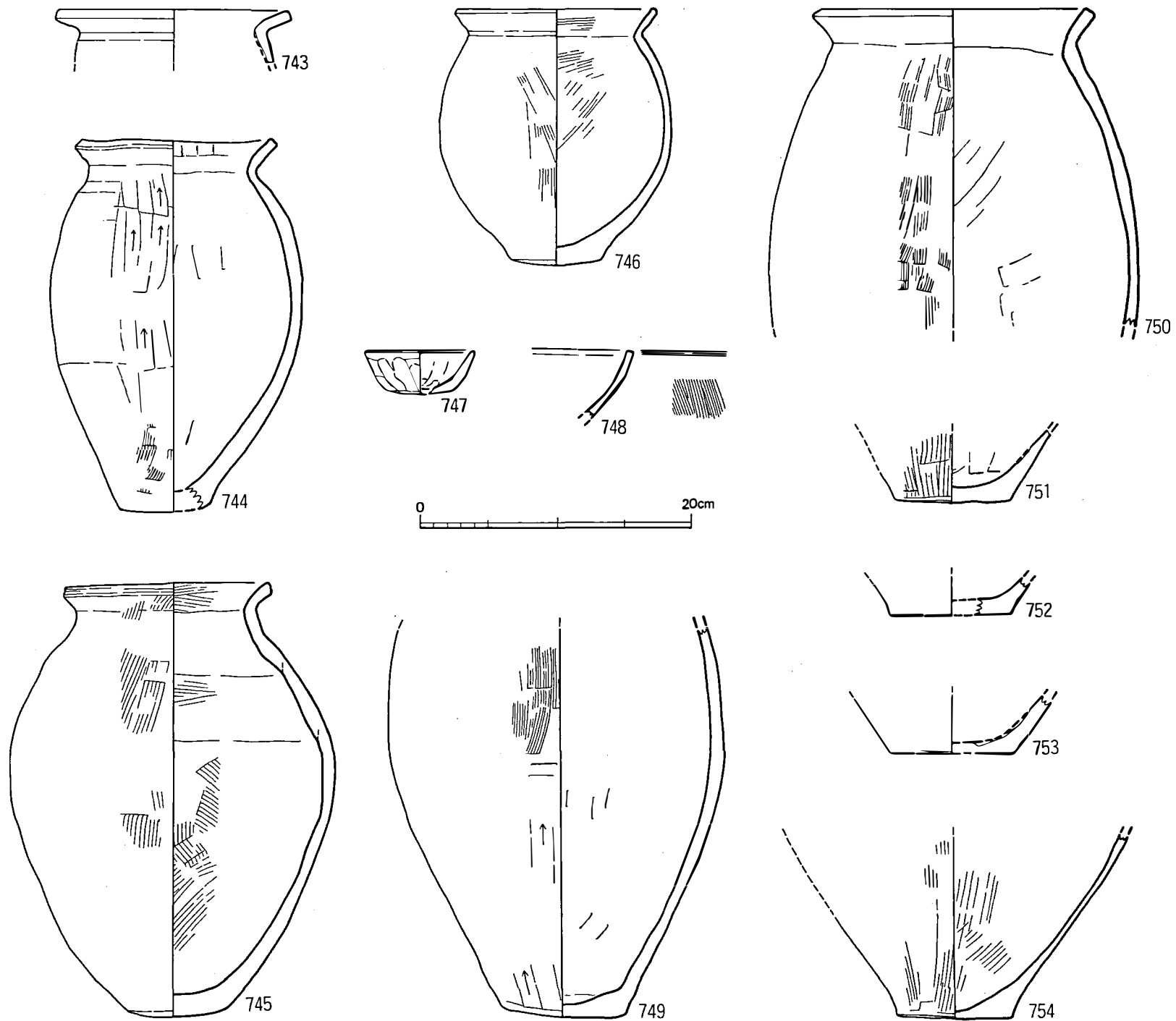
第 132 图 11号円形周溝出土土器実測図① (1/4)



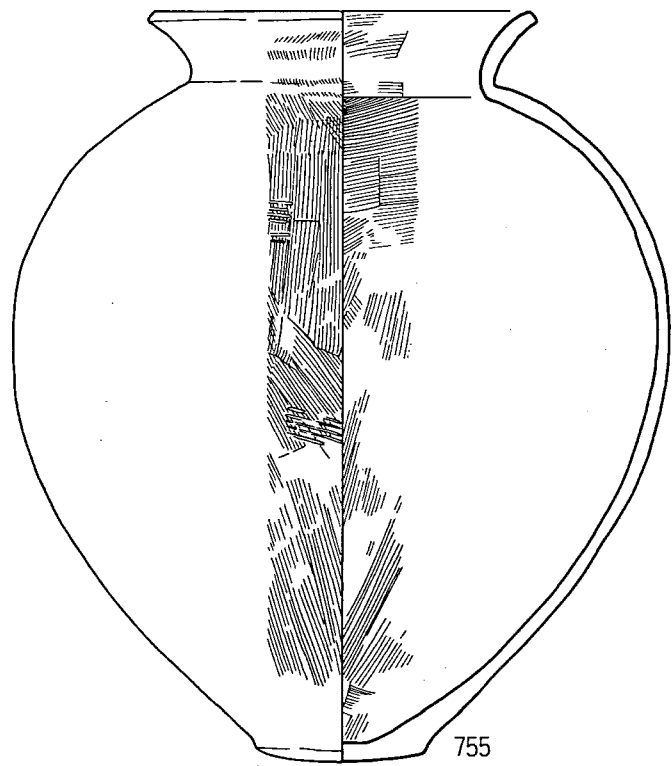
第 133 图 11号円形周溝出土土器実測図② (1/4)



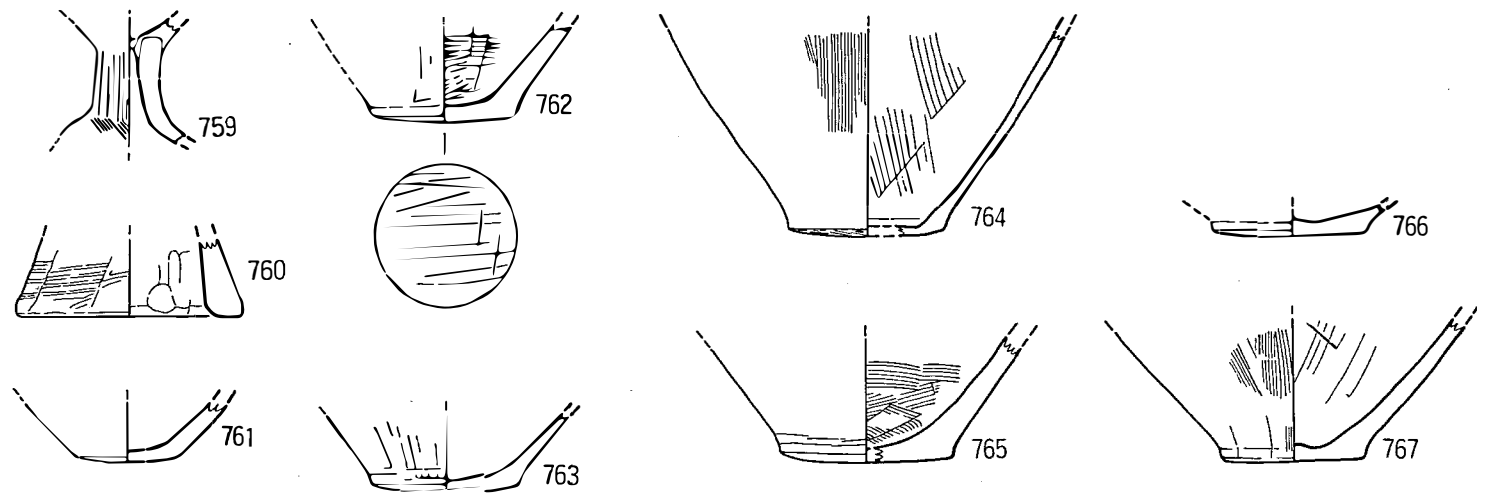
第 134 图 11号円形周溝出土土器実測図③ (1/4)



第 135 图 11号円形周溝出土土器実測図④ (1/4)



755



759

762

764

766

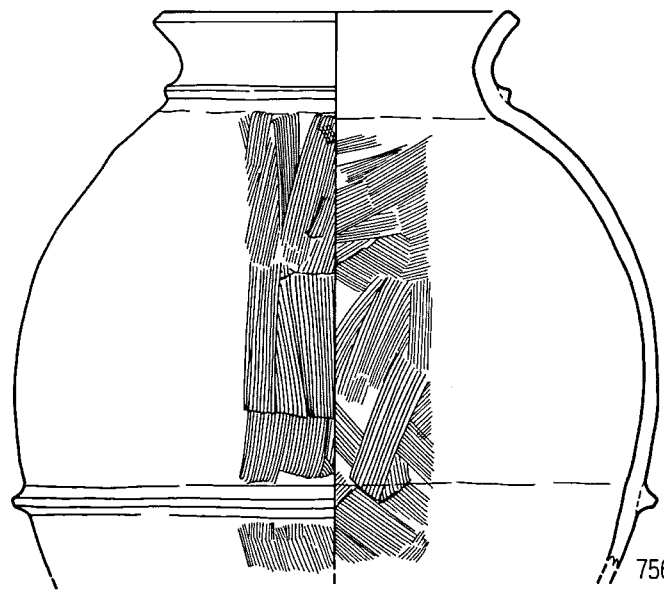
760

761

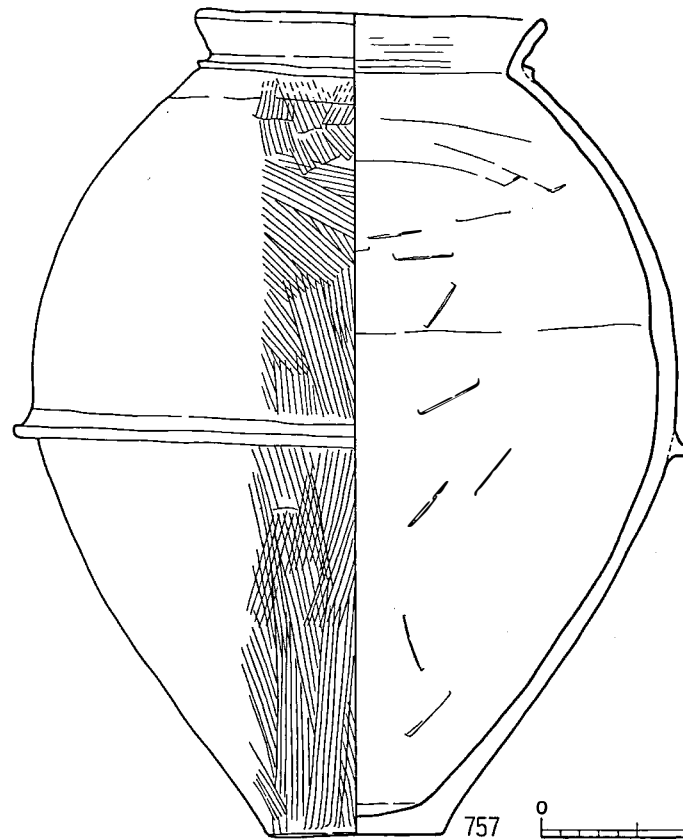
763

765

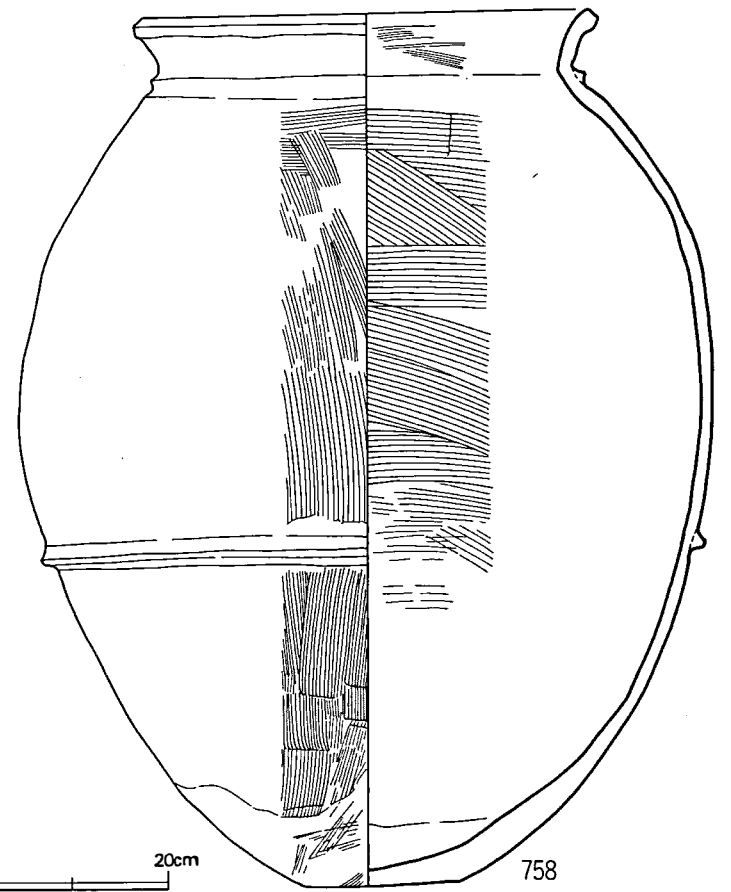
767



756



757



758



第136图 11号円形周溝出土土器実測図⑤ (1/4)

E……上記のブロック間対峙は、また、㉑北端ブロック⑥項の完形㉒グループ壺III-3類内側と⑦項の完形㉓グループ壺III-2類内側、南端ブロック⑳項の胴部打欠㉔グループ甕III-1C類内側と㉕項の完形㉖グループ甕III-1a'類内側の対峙でも認められる。(⑥・㉔項では、共にIII類・内側ということでは、同器制間対峙で、完形・胴部打欠、㉒・㉖グループ、壺・甕ということでは、異器制間対峙という配慮がなされている。

F……上記のブロック間対峙は、更に、中間ブロック㉗～㉘項からも言え、㉙中間ブロック破砕破片の集積・散布の再配置を介して、㉑北端群・㉓南端群の、完形・略完形・懐石ということでは、同じ器制間対峙と言える。

G……北半群①項と㉓南端ブロック㉔項の破砕破片714、北側群④項と㉑北端ブロック⑧項の破砕破片726、南側群㉕項と南端ブロック㉗項の破砕破片722が、共に中央群南・北ブロックに破砕破片・分散配置されていることは、中央群への特別な配慮がなされていると言える。石庖丁853が1例のみ、中央群に再配置されていることの内実も、ここに示されている。

以下、残余頁数の関係で、その他の指摘は、一切を省く。

以上のことから、今少しの検討をすれば、遺跡出土のすべての円形周溝の内実も明らかになるが、方形住居とは異質の、非日常的空間としての機能が考えられる。同出土の溝状遺構の機能も、方形住居・円形周溝との関係で検討すべきであろう。

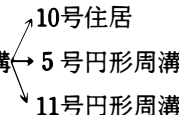
その内実については、㉒既述した各円形周溝内外から、同時期に属す明確な柱穴が検出されないこと、㉑断面が溝状遺構と異ってシャープな逆梯形を呈し、㉓溝底に更に小溝が設けられている例があること、㉔プランに、著しく大きい例と小さい例の二者があること、㉕遺物を河原石と共に多量に再配置する11号例や、石群を多量・土器片を少量再配置する10号例、およびほとんど遺物を出土しない多くの例などの、著しい差位が認められること、㉖円形周溝・溝状遺構・方形住居間に整然としたプランが考慮されていることなどについての、検討から明らかになるであろう。

5. 溝状遺構

溝状遺構は、1～5号の5条が、いずれも他の遺構と重複して検出されたが、溝状遺構相互の重複は調査区内ではない。

遺構間の、切り合い関係による新・旧は、弥生期に限れば、以下の3例を確認。

1号溝状遺構→6(7)号円形周溝

4号溝状遺構→10号住居
5号円形周溝
11号円形周溝

10号円形周溝→19号住居→5号溝状遺構

なお、以下の説明では、各溝状遺構・住居・円形周溝を、単にそれぞれ1号溝・1号住・1号周溝などと略す。

1号溝状遺構（図版2・8，第113図）

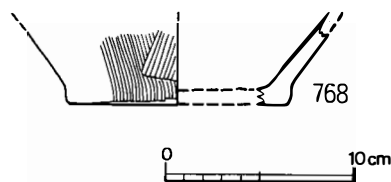
調査区南側で検出。1号溝と他の遺構との，切り合い関係による新・旧は，

1号溝→2号溝 1号溝→1～3号住 1号溝→3・8号土塚

の順で新しく，土器の出土はわずかである。

溝の方向は，付図3の1～7号周溝東西断面方向と一致し， $N-1^{\circ}-E$ を測り，わずかに屈曲する部分も認められるが，全体では直線的である。

溝の検出上面の幅・溝底の幅・溝底の標高は，東端部で $2.04m \cdot 0.90m \cdot 32.504m$ ，3号住西壁との重複部で $2.07m \cdot 1.06m \cdot 32.524m$ ，1号住西壁との重複部で $2.38m \cdot 1.12m \cdot 32.644m$ ，西端部で $3.33m \cdot 0.84m \cdot 32.629m$ を測り，溝底標高は東側に向けてやや低くなる傾向はある。



第137図

1号溝状遺構出土土器実測図（1/4）

出土遺物（第137図，表35）

出土遺物はわずかで，図示し得たものは1例。

甕（768） ハケ目と器内・底部のナデは丁寧で，平底。

2号溝状遺構（図版2，第119図）

調査区南側で検出。2号溝と他の遺構との，切り合い関係による新・旧は，

1号周溝→2号住 1号溝→1号住→2号溝

1・2号土塚→2号溝

の順で新しく，土器の出土はない。

溝の方向は，東端～2号住西壁間が $N-68^{\circ}-E$ ・同～9号住南西隅壁間が $N-76^{\circ}-E$ ・同～西端間が $N-85.5^{\circ}-E$ 。

溝の検出上面の幅・溝底の幅・溝底の標高は，上述の4点付近で順次に， $0.50m \cdot 0.35m \cdot 32.87m$ ， $0.43m \cdot 0.26m \cdot 32.89m$ ， $0.38m \cdot 0.16m \cdot 32.92m$ ， $0.42m \cdot 0.22m \cdot 32.93m$ を測り，溝底標高は，わずかではあるが南端に向けて低くなっている。

3号溝状遺構（図版27-2，付図3）

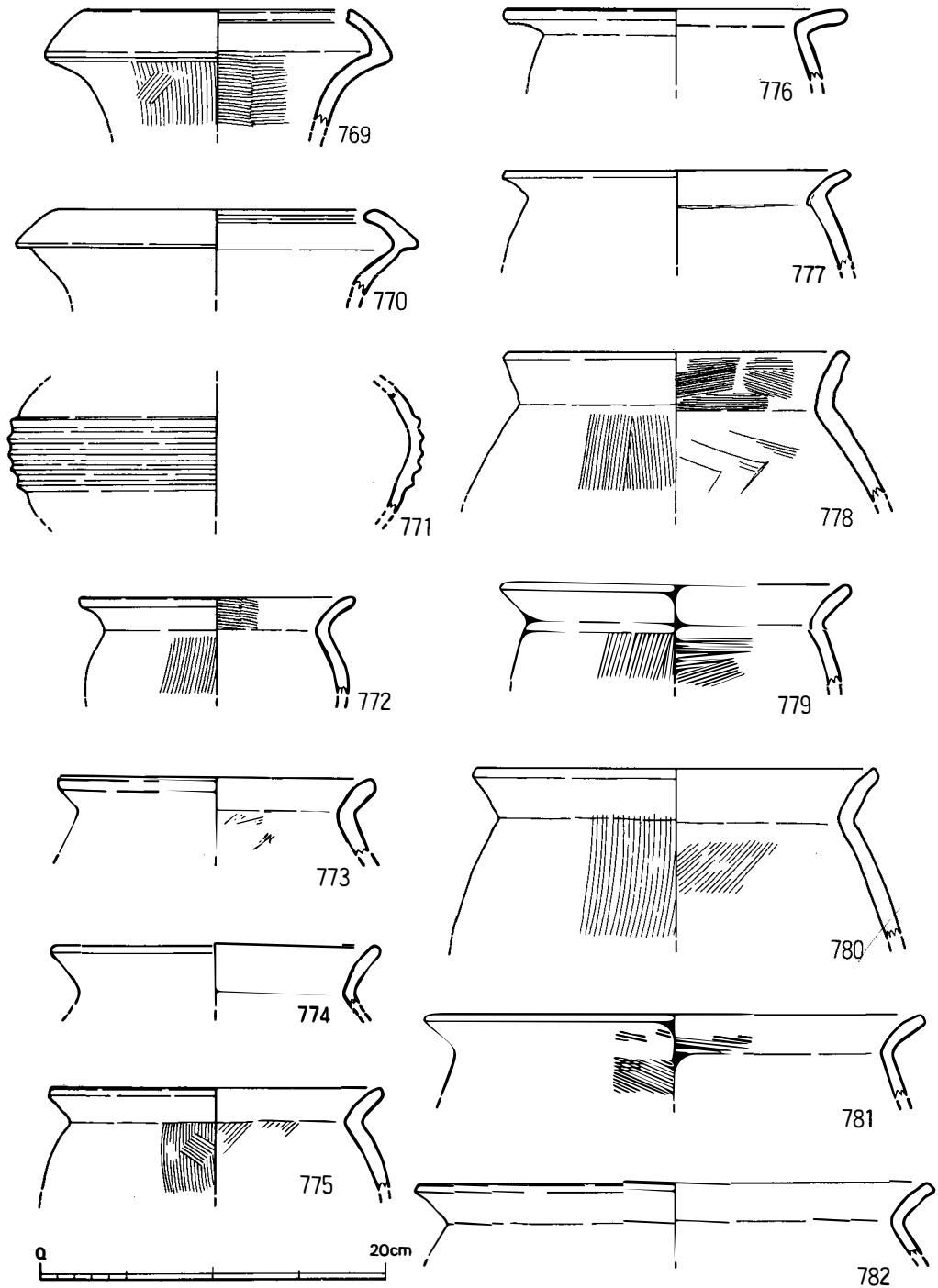
調査区南東隅部で検出。1号溝を切る。出土遺物はない。

調査区に南接して西流する，農業用水路関連の，近年の溝とも考えられるが，現水田耕作土床土下からの検出であることや，1982年度に調査した，E地区出土の大溝1～3（6世紀以降の土器片出土）にも近接することから，時期は不明であるが，3号溝として報告。

溝の検出上面の幅・溝底幅・溝底の標高は，調査区北端で $0.40m \cdot 0.15m \cdot 32.825m$ ，1号溝近くで $0.35m \cdot 0.17m \cdot 32.815m$ 。検出面から溝底までの深さは $0.05 \sim 0.07m$ で，溝の方向は $N-57.5^{\circ}-E$ 。

4号溝状遺構 (図版3・17, 付図3)

調査区中央部で検出。4号溝と他の遺構との, 切り合い関係による新・旧は, 当初に示した



第138図 4号溝状遺構出土土器実測図① (1/4)

ように、どの遺構からも切られており、最も古い。

溝の方向は、中央の10号住付近では大きく屈曲するが、これより以東・以西では直線的。

遺構検出上面の東半部、および西半部両南端縁を結んだ接線方向は、付図3の1～7号周溝東西断面方向と一致し、 $N-1^{\circ}-E$ 。

溝の検出面上面の幅・溝底の幅・溝底の標高は、東端部で $4.96\text{m} \cdot 3.00\text{m} \cdot 32.569\text{m}$ 、5号周溝西端部との重複部で $3.68\text{m} \cdot 2.58\text{m} \cdot 32.544\text{m}$ 、9号住西壁との重複部で $6.04\text{m} \cdot 3.14\text{m} \cdot 32.394\text{m}$ 、20号住東壁との重複部で $6.80\text{m} \cdot 3.80\text{m} \cdot 32.346\text{m}$ を測り、西側の標高が低い。

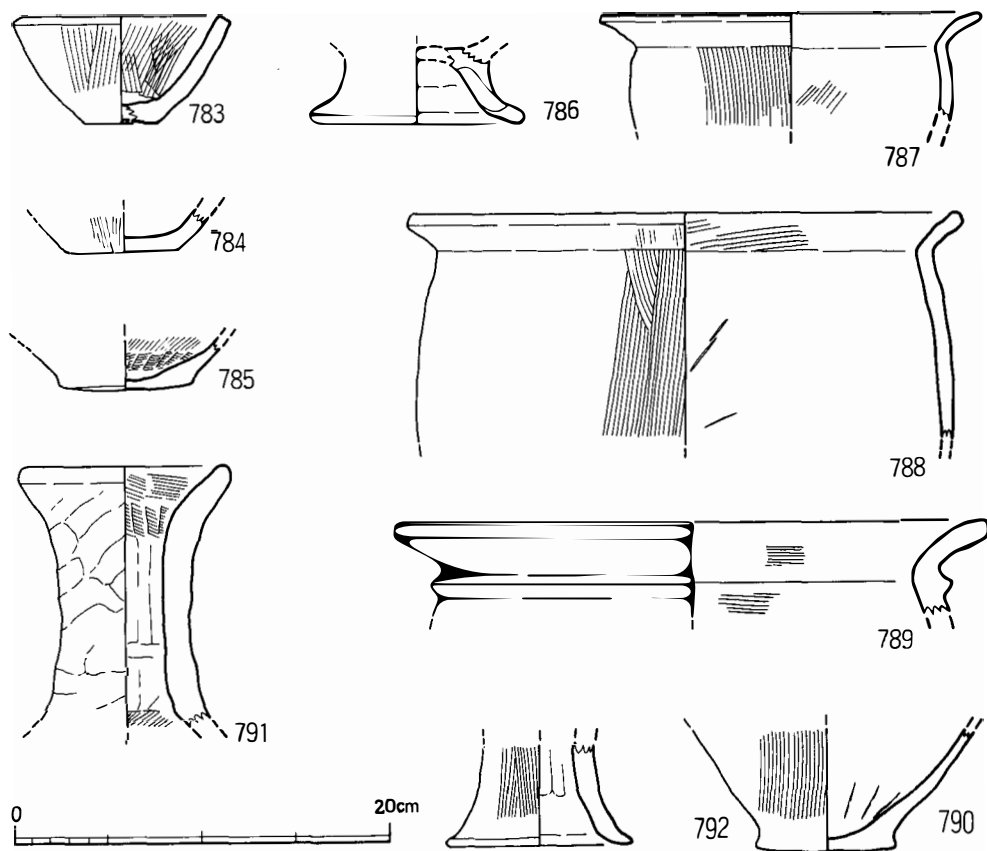
出土遺物（第138～140図、表35）

出土遺物はやや多いが、いずれも破片で、器形の全様を示すものはない。

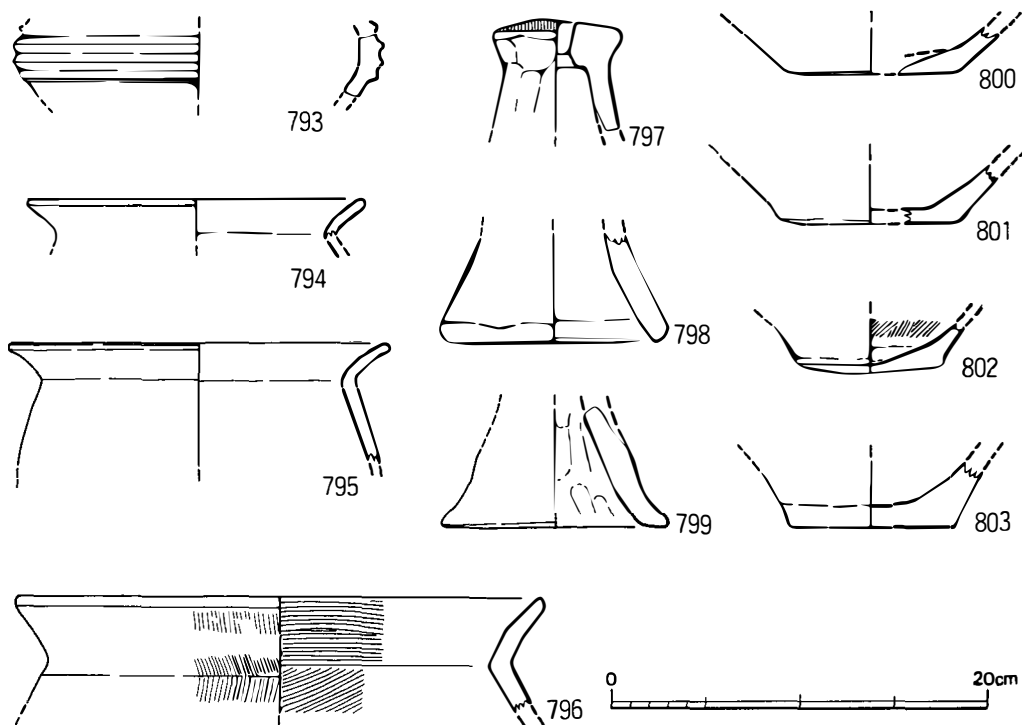
表中に、トレンチと記した土器は、図版55に示すように、9号住居カマド縦断面を溝部まで延長した際に出土したもので、グリッドと記した土器は、そのトレンチ東・西部で出土したもので、埋土出土の土器と共に、第138・139図に示す。

また、埋土の最上層で出土した土器は、第140図に示す。

壺（769～771・793・800・801） 769・770は、共に二重口縁部片。



第139図 4号溝状遺構出土土器実測図②（1/4）



第140図 4号溝状遺構出土土器実測図③ (1/4)

771・793は、共に玉葱状の胴部片で、在地系ではない。遺跡の位地・環境の特質をよく示唆するもので、東九州を介しての外来系土器の影響が強い例。

甕 (772~782・784~790) 786は、脚台部片。

789は、古い時期の混入例である。

鉢 (783) ハケ目・ヨコナデなど丁寧。

器台 (792) 裾径9.9cmを測る。

支脚 (791・797~799) 791は筒部片で、器外は指先で強くナデる。797は、上面の器周の一部を欠失することから、側面が突出する例であろう。

5号溝状遺構 (図版16・20, 第105図)

5号溝と他の遺構との、切り合い関係による新・旧は、

10号周溝→19号住→5号溝→13号住 (古墳時代) の順で新しい。

溝の方向は、遺構検出上面の東半部、および西半部の両北端縁を結ぶ接線、 $N-67.5^{\circ}-E$ 。

溝の断面形状は、壁面から底面にかけて緩傾斜をなし、両者の境界が判然としない字形。

溝の検出上面の幅・溝底の幅・溝底の標高は、東端部で5.26m・1.87m・32.519m, 第105図断面G-H付近で3.75m・1.70m・32.514m, 13号住東壁との重複部で3.26m・1.02m・32.467mを測る。上面幅は西端部にむけて小さくなるが、このことは、既述のように壁面が緩傾斜を

呈し、検出上面標高に東端部と西端部で若干の差位が認められるためであり、実際の上面幅の差位はない。

しかし、溝面の幅は、西端部にむけて著しく小さくなるようである。溝底の標高差はわずか。

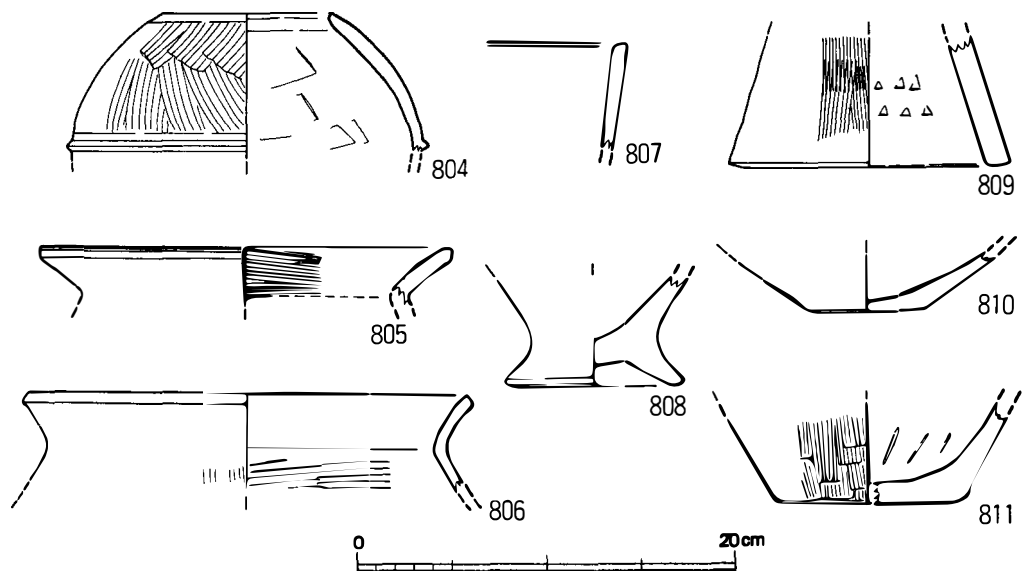
出土遺物（第141図、表35）

出土遺物はわずかで、器形の全様を図示し得るものもなく、破片のみ。

壺（804・810） 804は、器内のヘラナデ、口縁部・突帯のヨコナデも丁寧で、器壁は薄い。

甕（805・806・808・811） 805は、口径22.0cm前後、808は、裾径9.6cmを測る。

鉢（807） 口径が大きい破片で、器内はヘラ削りではなく、丁寧にナデ。



第141図 5号溝状遺構出土土器実測図（1/4）

6. その他の遺物

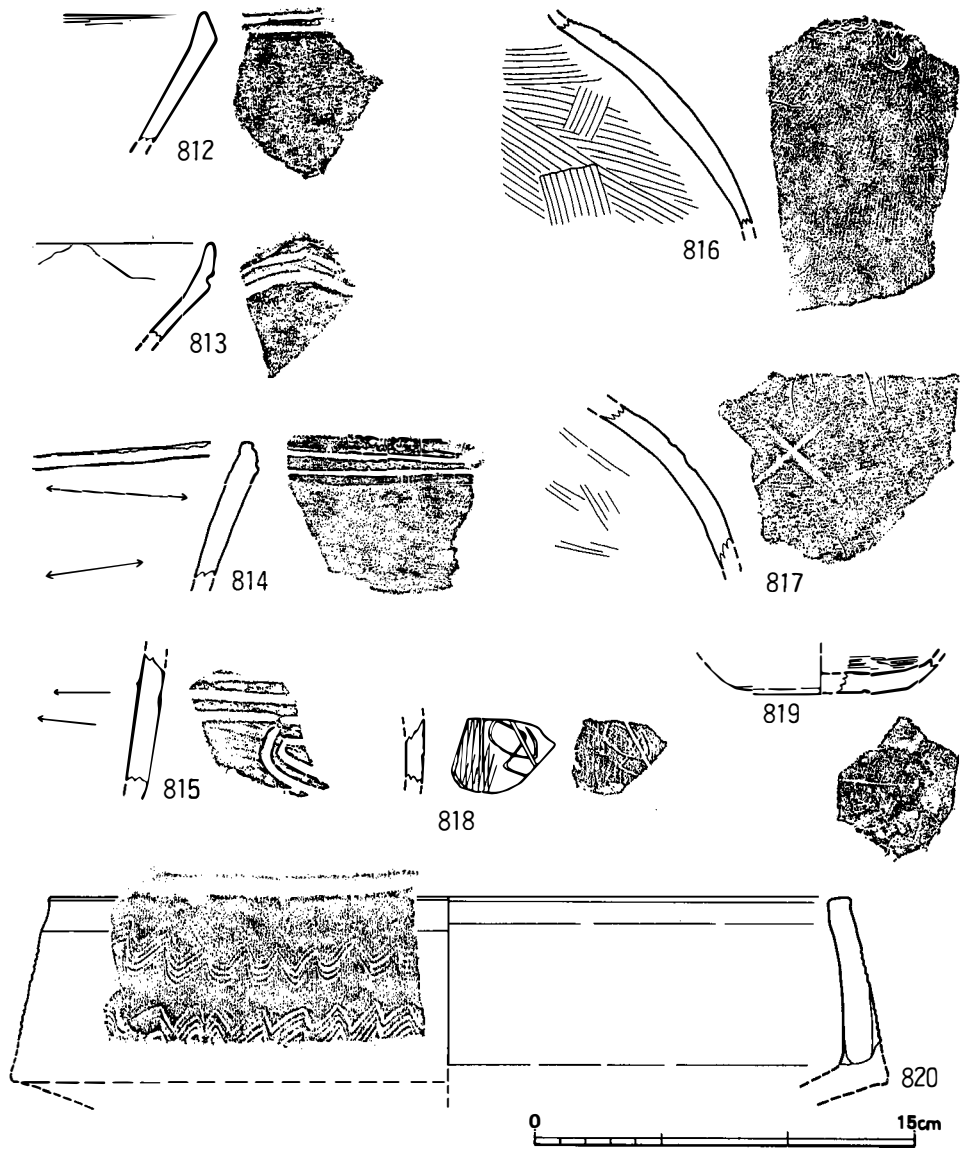
縄文土器（図版206、第142図、表35）

813は、浅鉢の口縁隆起部片で、器壁は、4.5mmと薄い。器内は磨滅し、器外は磨滅気味だが、器外の条痕をわずかに認められない。沈線は、ヘラ様工具でシャープな沈線が2条で、図示したように、沈線側縁部が稜を有して隆起。

815は、甕の体部上半片で、器壁は、9.0mmと厚い。器内は、浅くて幅広（7.0mm）の横方向条痕を認める。器外は、浅くて幅狭（2.5mm）の横方向に近い条痕のままで、沈線文。沈線文は、横平行例が3条と2条の曲線が遺存。前者の最下位例は、一部連続しない。沈線はシャープだが、813例のように、隆起はしない。沈線の幅は、3.5mm。

以上の2例は、共に中期の所産。813は、所謂、精製磨研土器ではない。

812は、浅鉢か。破片は、わずかな隆起部片で、器壁は5mmと薄い。器内外共に、磨滅気味で



第 142 図 縄文・弥生土器，土師器実測図（1/3）

あるが、条痕というよりは研磨に近い。沈線 2 条を施した後で、ナデを加え、図示したように、沈線側縁が下傾する。

814 は、甕の口縁部片で、わずかに隆起する例か。器壁は、8.0mm と厚い。器内外共に、横方向に近い条痕は浅くて、シャープな稜もない。あるいは、軽くナデを加えたものか。2 条の平行沈線は、丁寧に施こし、端部上面の稜もシャープ。

以上の 2 例は、共に後期の所産。

弥生土器 (図版206, 第142図, 表35)

816は、器内の頸部下がナデ、他は幅広のハケ目のまま。器外は、縦方向のハケ目後に、櫛描波状文。波状文はやや雑で、深さは0.5mm弱と浅く、上段では3条・下段では4条の凹部を確認。上段は、一周するものであろう。下段は、単独で弧文様に1個だけで、連続しない。壺の肩胴部破片。

817は、器内に強いナデを施すが、一部にハケ目を残す。器外に軽いナデを加えるが、横方向に近いハケ目の大半を残し、ハケ目木口でX字状文を施す。X字状文の凹部の幅は、4mm弱と幅広で、深さは1mm強。連続して一周するものではなく、単独で1個を施したものであろう。壺の胴上半部片。

818は、器内外共にハケ目のままで、器外にシャープなヘラ描き文を施す。凹部の幅は1mm前後で、深さは1.5mm前後。甕の胴部破片。

819は、壺の底部破片で、器内外共にナデを施すが、器外はナデ後に木葉文様が付着。器内をナデる際に敷いた木葉の葉脈が転写されたもの。

軟質沈線文土器 (図版207, 第143図, 表35)

825は、A地区11号土塚に伴う埋土出土の、壺の頸胴部破片。器内外共に磨滅気味であるが、器内にタタキ当て具痕を残し、器外はナデが丁寧で、^(註8)沈線を施す。凹部の幅は2mm・深さは約0.5mmで、器壁の厚さは5.0~5.5mm。

なお、11号土塚は、A地区6号住居よりも古い同1号円形周溝に切られ、11号土塚周辺のA地区13号土塚からは、^(註9)所謂、弥生時代後期の丹塗り・袋状口縁長頸壺や、同中期の丹塗り・短頸壺が出土。^(註10)

以上のことから、半島外来の、所謂、瓦質土器であり、時期的には、弥生時代後期中頃の明確な資料として、ここに報告させて頂いた。

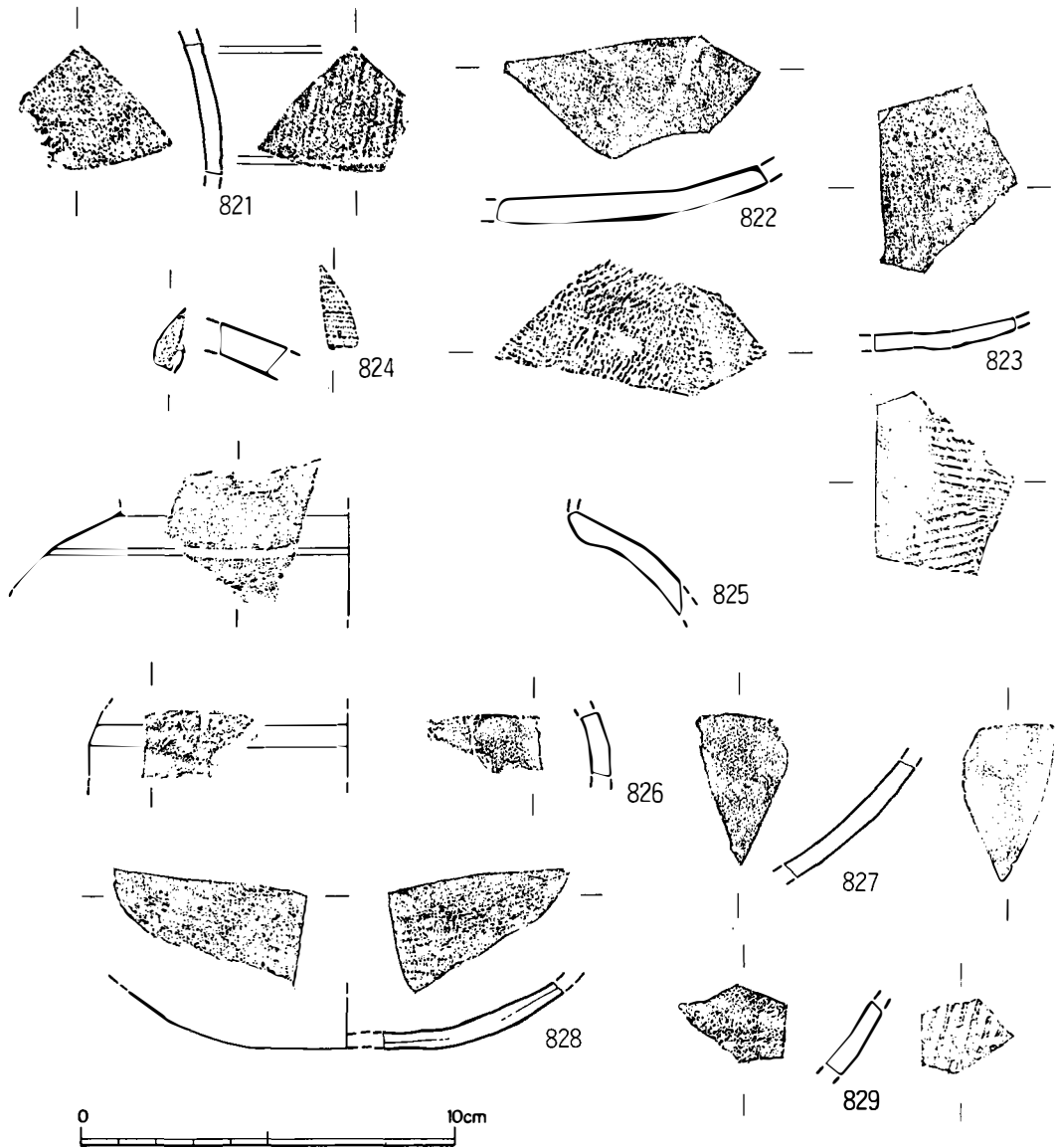
土師器 (図版206, 第142図, 表35)

820は、大形甕の口縁部上半片。器内外共に、ヨコナデが丁寧で、シャープな端部の上面もほとんど凹まない。なお、上半部接合前の、下半部の端部のヨコナデも丁寧であることが、その剝離面への転写で確認できる。

器外には、上・下段に櫛描波状文を丁寧に施す。波状凹部は、上段が7条であるが、下段は5条までが遺存。凹部の深さは1mm以下で、櫛目の移動は、上・下段共に整然としており、波頂部はシャープな逆V字形・波谷部はU字形。

軟質縄帯タタキ目土器 (図版207, 第143図, 表35)

821は、器内外共にやや磨滅するが、器内のナデが丁寧で、タタキ当て具痕は残さない。器外は、縦方向の整然とした縄帯タタキ目後の沈線が、2条遺存。タタキ目の凹部は、1.0cm間で、縄帯5条を数え深さは0.5mm以下と浅い。沈線の凹部の幅は、2.0mm弱で、深さは約0.5mmと浅い。



第 143 図 軟質・硬質土器，須恵器実測図（1/2）

器壁の厚さは5.0mm。

半島外来の，所謂，瓦質土器の甕胴部破片。

須恵器（図版207・208，第143・144図，表35）

硬質縄蓑タタキ目土器（822・823）

822は，器内を丁寧になでた後で，不定方向に指先でもナデるが，タタキ当て具痕（所謂，青海波文ではなく，単なる緩味な凹み）を，わずかに残す。器外は，整然とした放射状の交差で

はなく、雑然と交差した縄蓆タタキ目を施し、一部のみをヘラ削り（削り痕幅3～8mm、深さ0.5mm以下）するが、そのヘラ当たり痕（遺存の長さ9.5mm）を一ヶ所認める。タタキ目の凹部は、10mm間で縄蓆8条を数え、深さは約0.5mmとやや浅い。器壁の厚さは5.5～6.5mm。

823は、A地区3号A（新）住居出土の破片。器内を丁寧（註11）にナデた後で、不定方向に指先でもナデるが、822同様のタタキ当て具痕を、わずかに残す。器外は、タタキ目の重複部が一ヶ所であるため、断定はできないが、整然とした放射状の交差様の縄蓆タタキ目を施し、大きくヘラ削りする。タタキ目の凹部は、10mm間で縄蓆8条4条を数え、深さは約1mmと深い。器壁の厚さは3.5～5mm。なお、タタキ目部に、指紋の転写を2ヶ所に認める。

硬質交差タタキ目土器（829～834）

829は、器内外に極めて薄い自然釉を認める。器内はこの自然釉・器壁の剝離が著しいが、当て具痕の凹凸は認め難く、丁寧にナデる。器外は、2回のタタキによる交差が認められ、軽くナデを施し、タタキの凹凸にシャープさがなく、光沢を認める。タタキ目の凹部は、10mm間で3条を数え、深さは0.5mm以下で浅い。器壁の厚さは、4mm弱～4.5mm。

以上のことから、829は後述する830～834とは、明かに別個体の破片で、壺か。

830は、小破片のため、器内は不定方向の指ナデのみを認める。器外は、3回のタタキが交差し、軽くナデを加える。凹部1個の幅は2～3mmで、深さは1mm弱と深い。器壁の厚さは、4～6.5mm。

831は、器内を丁寧なナデ後に、指先ナデを加え、器外は3回のタタキが交差し、軽くナデを加えたようにも観察される。凹部1個の幅は、2～3mmで、深さは約0.5mmとやや深い。器壁の厚さは、3.5～4.5mm。

832は、器内のすべてが、不定方向の指先ナデで、器外は縦方向タタキ目が交差する。凹部1個の幅は、1mm弱～3mm弱で、凹部は10mm間で約4条を数え、深さは約0.5mmとやや深い。器壁の厚さは、3.5～4.5mm。

823・824は、器内に丁寧なナデ部を認めず、不定方向の指先ナデのみを施し、一部に、所謂、青灰波文様の凹凸を、わずかに残すと共に、タタキ当て具痕全体の凹凸を明瞭に残す。器外は、タタキ後のナデを、わずかに軽く加える。凹部1個の幅は、1mm弱～2.5mmで、10mm間に約3条を数え、深さは約0.5mm以下と、やや浅く、これは830～832と異なって軽くタタいたと言うより、底部片であることから、その器重による差違であることも考慮すべきであろう。

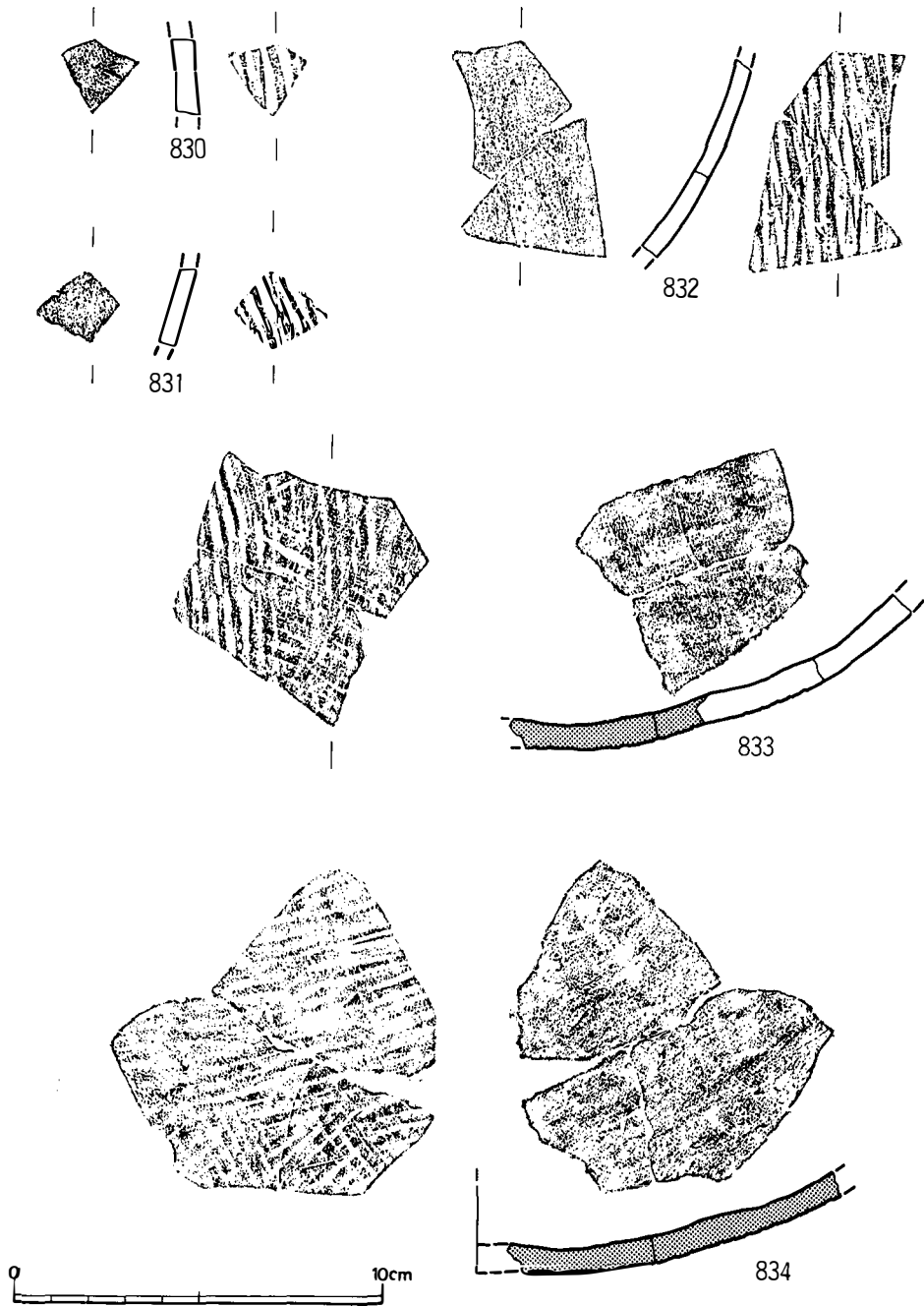
以上のことと、表記した胎土・色調・焼成などの特徴や、接合関係などから、830～834は、同一の甕破片。

硬質ヘラ削り・ナデ土器（826～828）

826は、器内のヨコナデが丁寧で、器外は図上位がヘラ削り・下位がヨコナデ。削り幅は約7mmで、ヘラ当たり痕を認める。器壁の厚さは、4.5～5.0mm。杯蓋・身あるいは壺胴部の破片。

827は、器内のナデが丁寧で凹凸は認め難く、器外のヘラ削り後のナデも丁寧で、シャープな稜ではないが、多面形を呈す。器壁の厚さは、4～4.5mm。

828は、器内の指先ナデが丁寧で、タタキ当て具痕（単なる凹凸）様よりもむしろ、指先押え



第 144 図 須恵器実測図 (1/2)

痕様の凹みをわずかに認める。器外は、ヘラ削り後に、丁寧なナデを加え、稜はほとんど認め難い。器内には、極めて薄手の自然釉を、器外には同様の自然釉・光沢を認める。器壁の厚さは 3mm弱～4.5mmである。

以上の827・828は、両者のヘラ削り後のナデの差異から、827は甕・828は壺の破片か。

硬質ハケ目土器 (824)

器内は、ヨコナデが丁寧。器外は、横方向ハケ目。凹部は、10mm間で8条を数え、深さは約0.5mmとやや浅い。器壁の厚さは、7.5～8.5mm。

土製品 (図版209, 第145図)

勾玉 (837) 7号A (新) 住居南壁土壇AD21～西壁間のほぼ中央で、南壁近くから出土。

勾玉は、頭・背部と両側面は研磨するが、腹・尾部は削りのままに近い。孔径は1mm弱～1mmで、一方孔から穿ち、紐による磨滅は認められない。硬い良質の滑石製で、色調は195オリーブ色 (うぐいす色) 4.0Y4.0/2.0。出土地点は、土器の項で既述したAD21西土器群であり、土器群と共に再配置されたものと言える。

841は、6号A (新) 住居床面近くから出土。欠損しており、その全様は不明。焼成が悪く、磨滅も著しいが、欠損面の稜はシャープ。

これを、半島外来の影響をうけた土器の把手残欠と考えるよりも、前述837の出土例から、頭部折損後に、住居内に再配置された、土製勾玉下半部残欠とすべきであろう。

手捏鏡 (840) 5号住居カマド内の出土番号No.11の青銅鏡のミニチュア。

精良粘土で、微砂を少し・金雲母片を多量・赤褐色粒をわずかに含むが、角閃石は含まない。色調は、83にお橙色 8.0Y R5.5/6.0で、焼成は、背面が極めて悪く、検出時に泥化していたが、その他は普通。

造り方は、背面に掌文が認められることから、器表をナデ後に、片手腹上にのせ、他の手で鈕を摘み出し、図左→右に穿孔し、再度同行為をくり返したため、孔部は鍵穴状になっている。

ところで、この鏡は、通例、土製模造鏡と呼称されることが多い。また、第38・39図の190～199・211～219などの土器は、手捏 (ね)・ミニチュア土器などと呼称されることも多い。筆者も、この鏡を既刊の『塚堂遺跡 I』・『同 IV』(第1分冊)までは、土製模造鏡と呼称し、190～199・211～219などは、単に手捏土器として報告した。

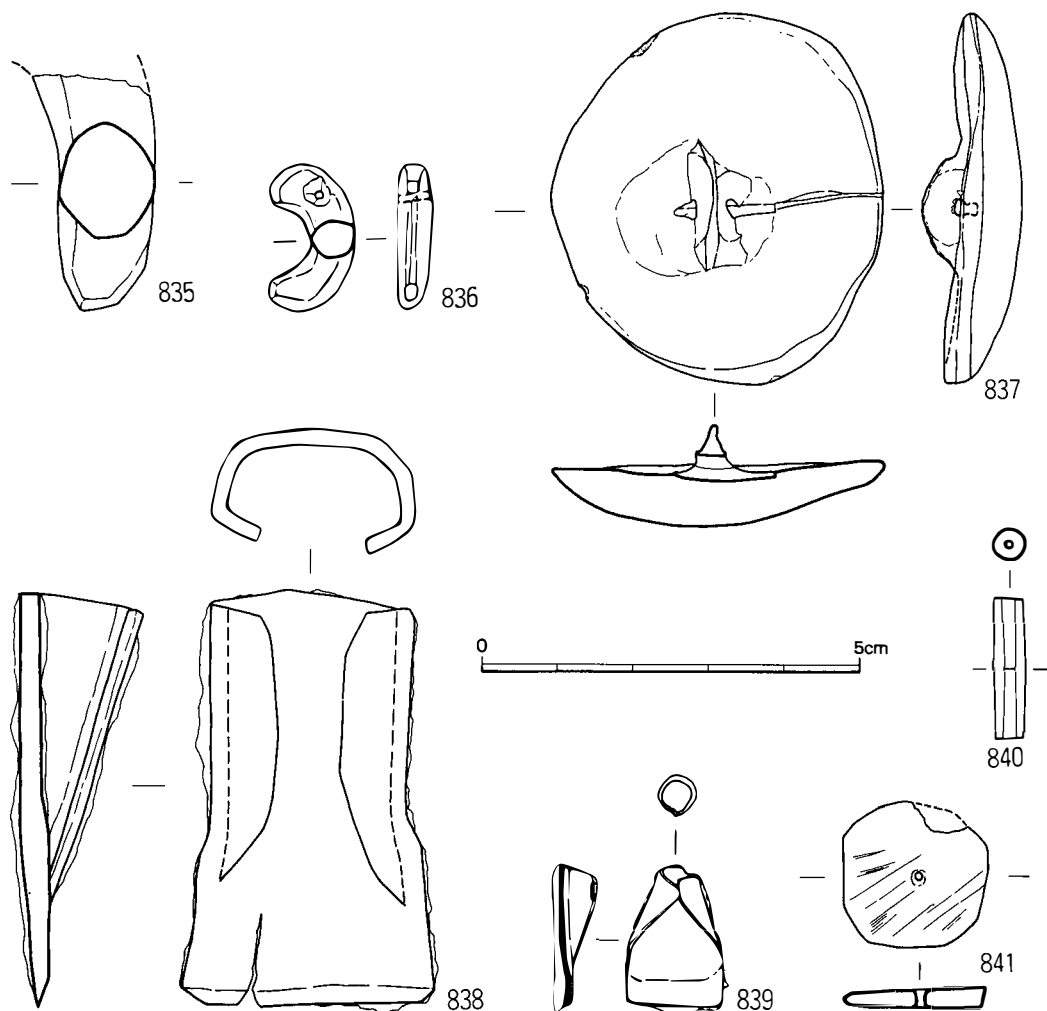
しかし、今回の報告では、その出土状態と器形から、190～199・211～219などを、甕・甗・甗などのミニチュアである、手捏土器として報告している。このことから、この鏡を、青銅鏡のミニチュアである手捏鏡土製品の名称で、報告する。

このことは、通例、土器のミニチュアを、模造土器と呼称しないことから帰納し、小型の青銅鏡を、通例、小型仿製鏡と呼称することには矛盾しない。

鉄製品 (図版209・210, 第145・146図)

鉄斧 (835・836) 835は、鉄斧の雛形 (ミニチュア) で、9号住居の南壁土壇D21～西壁間のほぼ中央で、南壁近くの埋土下層から出土。

鉄斧は、長さ20mm・幅13mm・厚さ1mm弱の鉄板を用いて、丁寧に造作。袋部は、鉄板の両隅を曲げたものであるが、左右対称の平面形で、頂部も正円形に近く、単なる手捏的手法ではな



第 145 図 土製・鉄製・石製品実測図 (1/1)

く、鉄鉗・鉄鎚を使用したものと考えられる。鉄板両隅は、図示するように、整接しており、段状に重複していない。刃部も、袋部先端で、左右対称形に、わずかに屈折させている。

銹化のため、明言できないが、刃部の研ぎはないようである。

土器の項で既述したように、土器群は、西壁寄りM14北南・南壁D21・D21東群などで集中するが、他の住居例のような、D21西からの土器群の出土はなかった。このことなどから、835は、D21西に単独で再配置されたものと言えよう。

なお、鉄板の計測値は、後述する手鎌様鉄器842・843との類似が多く、842のように残欠状態で出土した例もあることから、手鎌様鉄器を意識的に折損し（この折損行為も祭祀行為と言える）し、複数の鉄斧を造ったものであることが、充分に考えられる。

836は、16号住居から出土したもので、長さ55mm・柄着装部頂幅27mm・刃基部幅33.5mm・同先

端部幅28mm。刃部両側の面取りは、ほぼ左右対称形で、刃の屈曲も少ないことなどから、使用による刃部の磨滅も少ないと考えられる。刃部の研ぎも、シャープ。

鉄鏃 (844~847) 844は、1・2号周溝プラン確認中に出土。どちらの周溝からの出土であるかは不明。

鉄鏃は、厚さ2mmの鉄板を用いて、丁寧に造作。全長57mm・最大幅34mm。先端部から逆刺端まで、全体的に内弯するが、身上半・下半・逆刺の三者間で稜有り。内弯した逆刺部と、ほぼ直線的な腸袂り部にも、わずかな稜を認める。2孔は、図示面では共に肉眼視でき、裏面でも1孔はそれが可能であり、径2mm弱。弥生時代の後期中頃の資料で、2号円形周溝に伴うものであろう。

846・847は、11号住居から出土。846が出土番号鉄No.6で847が同鉄No.2（図版73-2中央）。

846の現存長は、10.4cmを測るが、先端部0.1cmと筥被部下半は、完形であったものを、発掘時に破損したもの。

847は、完形で、15.7cm。

845は、13号住居の東壁（北西-南東方向）カマド北~北壁（北東~南西方向）間で、やや北壁寄りの、床面から7cm上から、鋒が北東壁隅（北方向）に向けて出土した（図版82-2）。

鋒の先端と関近くを欠損し、欠損部も他の部位同様に銹化。全長は、約11.3cmに復原できる。

ところで、前述の鋒方向とは逆方向の南西側には、張り床部が設けられている。再配置の時期は異なるかも知れぬが、既述の土器同様に、再配置されたものであろう。

なお、鋒部方向には、11号住居が近接し、後述するように、鉄製品・石製品が再配置されているが、このことも含めて、今少し検討すべきであろう。

鉄刀子 (849) 11号住居から出土。出土番号鉄No.5。現存長は、11.5cmを測り、茎は一部を欠失するが、その折損部も他の部位同様に銹化が著しい。刃部は、使用・研ぎにより内弯。

手鎌様鉄器 (842・843) 842は、11号住居から出土。出土番号は鉄No.1（図版72-2左下）。

右袋部を欠失し、現存の刃部長（面取り部を含む）69mm・同背部長66.5mm・同身屈折部長67.5mm・鉄板厚1.5mm弱。身幅は、断面図付近・左袋部側端で、共に16mmで、刃部は、左端で面取りされており、後述843側から、右端も同様であったとしてよい。

背部は、左袋部端から16mmおよび右現存端から15mmまでが、共にわずかではあるが、直線的に内傾し、その間内の身中央部は直線的。

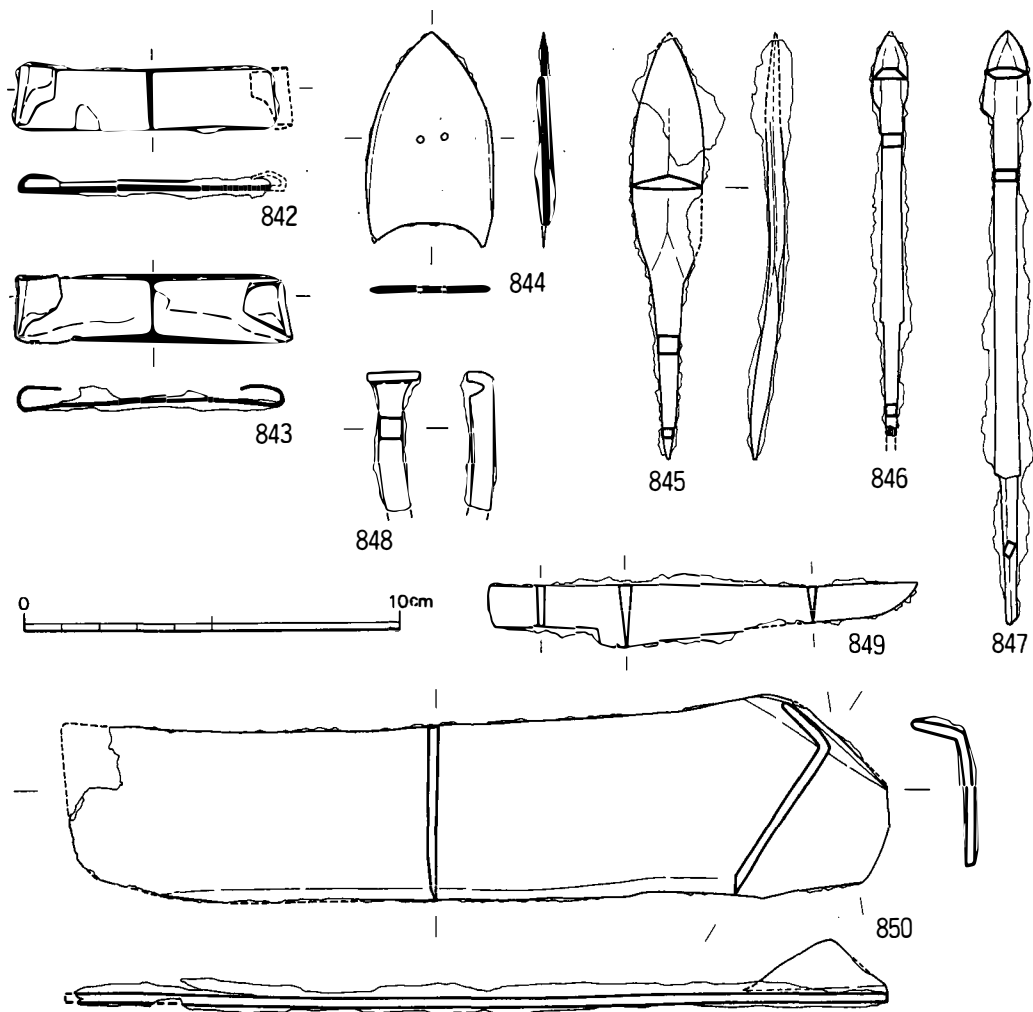
袋部は、側面では、面取り端から10mmまでが直線的に内傾し、ここで屈折し、背部まで直立。

なお、右袋折損部は、他の部位と同様に銹化する。図版210での、刃部中央の欠損は、発掘時のもの。

843は、17号A（新）住居から出土。出土位置は、17号A住西壁寄り南半部で、床面から3cm上位で、17号B（古）住居西側BM23東肩上位でもある。

右袋部内側上端のわずかな欠失部は、銹化消失部で、完形と言えよう。

刃部長（面取り部を含む）7.5mm・背部長71.5mm・身屈折部長71.5mm・鉄板厚1mm弱。身幅は、左・右面取り部で17mm・断面図付近で14.5mmを測り、使用・研ぎによる刃部の内弯が著しい。



第 146 図 鉄製品実測図 (1/2)

背部は、左袋部端から16.5mmおよび右袋部端から21mmまでが、共にわずかではあるが、直線的に内傾し、その間内の身中央部は直線的。

袋部は、側面では、面取り端から左袋部で11mmまで・右袋部では13mmまでが、共に直線的に内傾し、ここで屈折して、背部まで直立。

土器の項で既述したように、再配置された土器群からは、著しく離れて単独出土。

しかし、近接して杯584(第97図)が出土しており、西壁側ではBM21近くで、杯576・577(第97図)の2個が出土。多言しない。この4者は、17号B(古)住居時のBM21と23の位置・および17号A・BP11とA・BP14の位置の両者を配慮して、2者が対となり、対峙させて再配置されたものと言える。

鉄鎌(850) 5号溝状遺構の東半部の、埋土最上層から出土。

基部折り返し上端～先端までの、背部現存長は168.5mm・回復原長は131mmで、基部折り返し下端～先端現存部までの、身部中位長は218mmで、刃部研ぎ出し部長は161mm。

先端面取り部現存幅14mm・回復原幅38mmで、刃部先端面取り幅21mm・同基部側面取り幅27mmで、基部折り返し長45mm・同高14mmで、基部面取り幅17mmで、鉄板厚2～2.5mm弱。

身幅は、刃部研ぎ出し先端で44mm・同基部で53.5mm・断面図部で46mm。

身長方向と折り返し頂面方向との角度は41.5°・同折り返し下面との角度は32°で、基部断面図での身と折り返し部との角度は約108°。

背部は、基部折り返し先端から20mm・復原先端から40mmが直線的に内傾し、両者間はわずかに内弯。

刃部は、ほぼ直線的で、使用・研ぎによる磨滅はほとんどなく、刃部の基部寄りが、長さ37mmの間で内弯気味となっている。このことは、後者の内弯気味部が、使用・研ぎによるものではなく、当初から造作されたもので、大形で、身・刃部共に先端部寄りに反りを造作したことと関係があり、通例の鎌に斧の機能を付加したものと言えるか。

鉄釘 (848) 8号土塚の埋土中から出土。図示した特徴は、1号土塚出土の土師器の時期に通有の例で、他の土塚の時期を検討する際の参考となろう。

なお、土塚の埋土中での、木棺様の痕跡は検出されていないこと、土塚の平面プラン・断面形状は、通例の土塚墓状形を呈していないことなどから、8号土塚などが、土塚墓である可能性は少ないであろう。

ガラス製品 (図版154・159・198・202・205)

いずれも小玉であるが、残余頁数が少ないので、列記。住居では、2号検出上面下10cmから1個。6号B(古)主柱穴埋土から1個。10号周辺から2個。17号検出上面下15cmとNo.5の2個。円形周溝では、11号北半部土器群中から2個。8号の南東部埋土上層から1個。

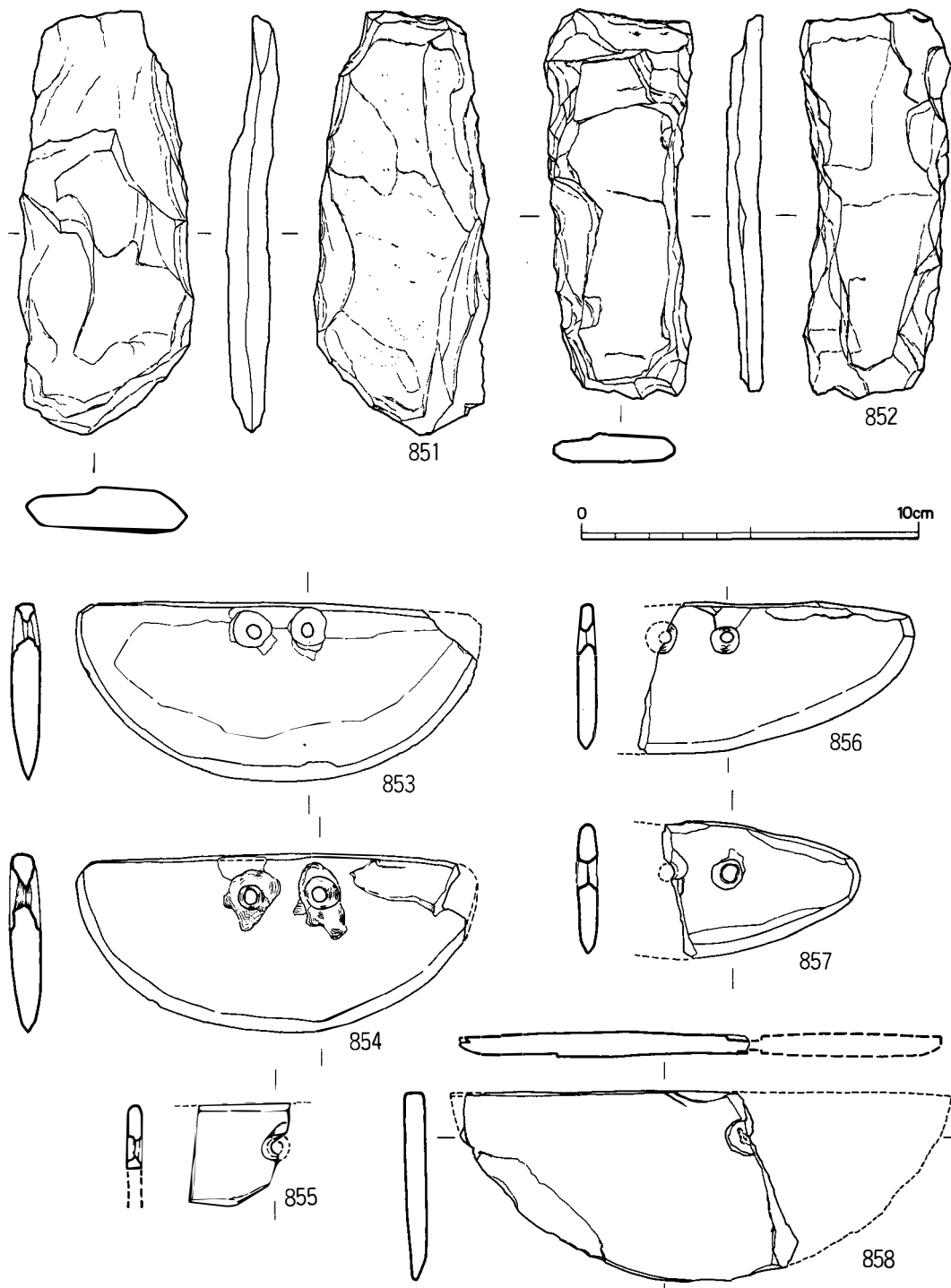
石製品 (図版209・211, 第145・147・148図)

石斧 (851) 7号A(新)住居混入例。縄文時代の緑泥片岩打製石斧。長さ12.5cm・最小幅3.0cm・最大幅5.2cm・横断面部位厚1.2cm。色調 153灰味黄緑色 2.0G 5.0/1.0。図下半の側縁部は、使用によって著しく磨耗。

石鎌 (852) 4号住居混入例。縄文時代の緑泥片岩打製石鎌。身長11.2cm・刃部長11.0cm・身先端幅3.0cm・身最小幅3.6cm・身基部幅4.4cm・横断面部位厚1.0cm。色調 154 灰味黄緑色 2.0G 6.0/0.5。背部は内反・刃部は内弯。刃部は、使用による磨耗が著しい。

管玉 (838) 7号B(古)住居出土。両面穿孔(径1.75～1.95mm)。硬質滑石製。色調105オリブ色4.0Y4.0/2.0。長さ18.5mm, 径上・下面3.95mm, 中位4.2mmのエンタシス形。

有孔円板 (839) 11号A(新)住居の石 No.1。両面穿孔(径1.5mm)。軟質滑石製。色調119うすオリブ色 6.5Y7.0/2.0。1辺19mmの方形板(厚さ1.5～2.0mm)を面取りして、八面形にしたもの。



第 147 图 石斧·石鎌·石庖丁実測図 (1/2)

この円板と既述の鉄製鏃846・847、刀子849、手鎌様鉄器842、ガラス小玉2個、および後述の砥石859の11号A（新）住居の出土状態については、以下にやや詳述。

㊤南壁P54西……No.4刀子（西壁平行、鋒先方向北、刃部方向西）・No.3刀子（西壁直交、鋒先方向東、刃部方向南）。（図版70・188）。

㊦西壁M21周辺……鏃846（出土状態の平面図を記録していない。西壁に接して、西壁平行B M21肩上位）・刀子849（BM21上位・東肩近く、西壁直交、柄折損部西、鋒先方向東、刃部方向南）・円板839（BM21上位）

㊧北壁カマド西……手鎌様842（BM22内P33上位、袋部東側折損、刃部方向北、刃部下面）・鏃847（BM21南肩近く、床面上位、西壁直交、鋒先方向西）

㊨中央D11北東……砥石859（床上位、全面使用部上位、両短側面破損、西壁直交）

以上のことから、特別の配慮が西方向、西壁、M21に、また、カマドBM22、BP54・55にも配慮がなされて、既述土器群と共に、再配置されたものと言える。

石庖丁（851～856） 851は、11号円形周溝の中央群から出土したNo.10。硬質砂岩製。一部を折損する。

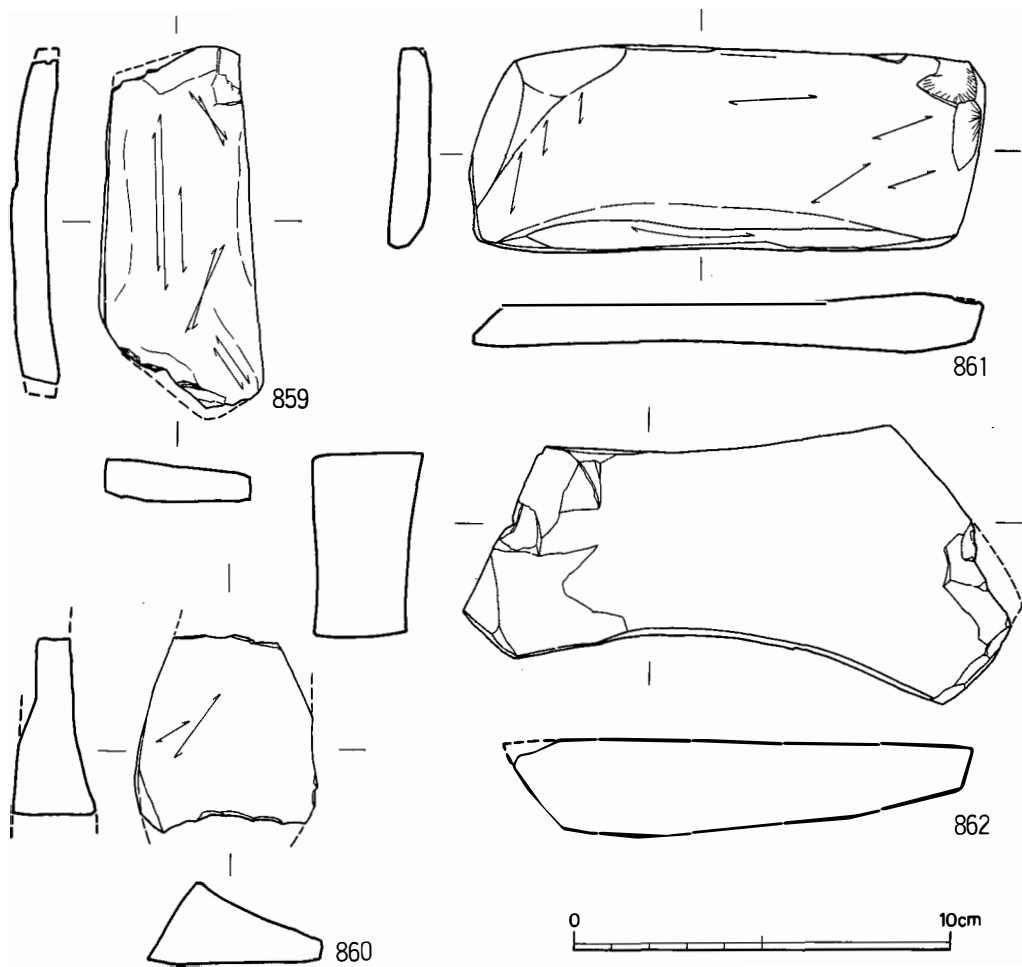
852は、4号溝状遺構の最上層出土。穿孔前の敲打痕を残す。硬質雲母片岩製。

853は、13号住居の埋土中出土の混入例。緑泥片岩製か。

854は、4～7号A（新）住居周辺からの表採遺物。16号住居出土の855と共に、硬質雲母片岩製。

856は、16号住居出土。硬質雲母片岩の材質を生かし、器表で直接穿孔工具を回転させる技法を採用したもので、内外面共に深さ1～1.5mmを剝離し、再度試みる中途の、折損品。

砥石（857～860） 857は、11号A（新）住居出土番号石No.2で、図裏面は一部も使用・側面未使用の、硬質粘板岩製上砥である。858は、20号住居出土で、図裏面の一部も使用・両側面未使用の、細砂岩製上～中砥である。859は、16号住居東壁D21出土で、図裏面・左側面も使用の、硬質頁岩製上砥である。860は、17号A（新）住居出土番号No.4で、図下面以外のすべての面を使用する、細砂岩製中砥である。



第 148 图 砥石実測図 (1/2)

第3章 おわりに

第1節	塚堂遺跡の調査・整理報告書について……………	215
第2節	D地区の遺構・遺物の出土状態……………	215～222

第3章 おわりに

第1節 塚堂遺跡の調査・整理報告書について

塚堂遺跡は、バイパス路線内でA～E地区、圃場整備事業に伴う路線外でB北・塚堂古墳東地区の調査を実施。A・E地区では、共に西側部が未調査。E地区東側部は、1984年度に調査を実施し、未報告(表1, 付図1)。各地区の調査時期と、その後の報告書刊行年度は、表1に示すように一致しない。以下、A～E地区では当初に調査を実施したD地区ではあるが、他の地区例を参考にしながら、D地区の問題点の指摘を若干(各地区例の引用は、表1報告による)。

第2節 D地区の遺構・遺物の出土状態

縄文時代 中期以降の遺物が、弥生時代以降の各種遺構埋土中から、混入の状態、既述収納箱1箱ほどの量で出土。明確な遺構は、確認できず。

しかし、A地区3号ピットからは、縄文時代晩期後半の土器・石鏃などがまとまって出土。

他の地区からは、D地区同様、混入の状態出土し、A地区南東部・E地区の弥生時代以降の遺構は、縄文時代遺物包含層中検出。C・D地区では、この包含層はなく、C地区の弥生・古墳時代の住居の残存壁高は、わずか数cm。

以上のことから、大略、A地区南東部～B地区南西部とE地区東半部を除く微高地上に、なかでもC・D地区を中心に住居などが設けられ、以後の削平などで消滅したものと考えられる。

弥生時代 11号円形周溝の時期を、後期中頃の特徴を示す第136図甕757を除き、いずれもやや新しい特徴を示す土器群から、一応後期後半まで下げるべきか。11号は、4号溝埋土中に設けられ、4号溝は他の溝同様に中期の遺物を含まぬ。

以上のことから、A地区は中期後半頃から、B地区は4号住居の出土により後期前半頃から、C地区は後期中頃を前後する頃から、D地区は後期中頃前後から、E地区は2号周溝の検出により後期後半頃から、各地区には住居などの遺構が立地し、A地区からE地区へと、遺構は順次新しくなると考えていいだろう。

なお、D地区では、住居(6B・10・16・19・21号)・円形周溝・溝状遺構の三者が、近接あるいは重複して出土。三者のあり方は、11号周溝の遺物出土状態の今後の検討によって、より明確な三者の機能把握へとせまることができるであろう。

古墳時代 7号B住居の時期は、7B→7A→20→5号の順に新しいことや、各住居のカマド・遺物などの出土状態から、大略的に5世紀初頭～前半。5号は、5世紀中頃前後か。

しかし、他の住居出土遺物も、上記住居の時期に近接したもので、カマドは未検出例も含めて、すべてに配されていたものと考えられるが、住居の規模に大・小の二者があり、11号のよ

うに中央土壇・カマド併設や9号のようにベッド状遺構配置などの例外もある。

また、カマドについては、9号では多数の石材を組み合わせ、支脚石も3個を設け、17号では焚口室のみを石組みとし、支脚には高杯脚部を配するなど、その形態差が著しい。

以上のように、遺構については多様性が指摘できるが、カマド・壁土壇などへの遺物の再配置での類似点は多く、カマド祭祀での共通点も多い。

上記の多様性と類似点・共通点を相互に検討することは、遺構・遺物の詳細な記録保存を前提とし、他の遺跡での同様な報告を参考とすることによって、「塚堂遺跡」の実像に一歩でもせまることが可能であろう。

最後に、「塚堂遺跡」の歴史時代～現在～今後については、本書で既述したような類例報告遺跡数の増加あるいは御批判を待って、今後の検討課題としたい。

- 註1 馬田弘稔編「塚堂遺跡Ⅰ」（『一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財関係調査報告』第1集，福岡県教育委員会，1983）なお，本書に関する註は，以下では省略し，（註『Ⅰ』）と示す。
- 2 副島邦弘編「塚堂遺跡Ⅱ A地区」（『一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集，福岡県教育委員会，1984）なお，本書に関する註は，以下では省略し，（註『Ⅱ』）と示す。
- 3 佐々木隆彦編「塚堂遺跡Ⅲ E地区」（『一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第3集，福岡県教育委員会，1984）なお，本書に関する註は，以下では省略し，（註『Ⅲ』）と示す。
- 4 馬田弘稔編「塚堂遺跡Ⅳ D地区（第1分冊）」（『一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集，1984）なお，本書に関する註は，以下では省略し，（註『Ⅳ-1』）と示す。
- 5 住居各部の面積の計測法については，註1所収の第161図 C地区6号住居跡面積計測例図に示したとおりである。
- 6 カマド天井石が意識的に除去・折損され，床面からやや上位の東壁中央土壇近くで同様に検出されたものに，A地区22号A（新）住居出土の西壁カマド例がある（註『Ⅱ』）。
- 7 平田定幸「朝倉の初期須恵器窯跡」（柳田康雄編『甘木市史資料』考古編，甘木市史編纂委員会，1984）
- 8 後述する「軟質縄蓆タタキ目土器（821）」との関連で，軟質で沈線が施された特徴の土器ということで，仮に「軟質沈線文土器（825）」として単に紹介するもので，名称などを含めて，今後の類例を加えて検討すべきであろう。
- 9 A地区6号住居および出土遺物については，D地区で同様にカマドを付設した古墳時代のすべての住居および出土遺物などから，この住居は5世紀中頃のものと考えている。
- 10 この土器に関しては，丹塗り痕が認められ，口頸部の屈折がシャープな逆L字状を呈することなどから，弥生時代中期末以前に特にその類例が多い，器外が丹塗り磨研の短頸壺との類似を，今後検討すべきであろう。
- 11 前述した「硬質縄蓆タタキ目土器（822）」との関連で，本書で図版・実測図を加えて紹介する。

※P217～222 データなし

遺構計測表・遺物一覧表

表 4～27 1～21号住居跡計測表（単位：柱穴と面積はm：カマドはcm）223～235

表28～34 1～7号掘立柱建物計測表（単位：m）…………… 235～238

表35 遺物（001～862）一覧表 $\left(\begin{array}{l} \text{(金)} : \text{金雲母片} \\ \text{(白)} : \text{白雲母片} \\ \text{(赤)} : \text{赤褐色粒} \\ \text{(角)} : \text{角閃石} \end{array} \right) \dots\dots\dots 239\sim 298$

表4 1号住居跡(南北軸)計測表

主軸方向	欠番	東西主柱間	南北主柱間	主軸柱間	番号	短径×長径	深さ
南北	P ₄₁ ・P ₄₃ ・P ₃₂	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂	P ₂₁ -東西O	P ₁₁	0.25 × 0.26	0.24
N-1°-E	M ₁₁ ・M ₁₃ ・M ₁₄	2.19	2.17	1.42	P ₁₂		
		P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₄ -P ₁₃	主軸間柱間	P ₁₃		
		2.46	2.08	P ₃₁ -P ₃₂	P ₁₄		
平均		2.33	2.13	(1.84)	平均		

※計測値はいずれも推定値

P ₂₁	0.22 × 0.25	
P ₃₁		
P ₄₄		
D ₂₁		

計測部	面積内訳
全床面	$(1^2 \times 16) + (0.2^2 \times 131) + (0.05^2 \times 591) + (0.05^2 \times 366) \frac{1}{2} = 23.1750$
P ₁₁ ~P ₁₄ 内	$(3.01 \times 1.51) \frac{1}{2} + (3.01 \times 1.76) \frac{1}{2} = 4.9214$
南壁D ₂₁	$(0.2^2 \times 5) + (0.05^2 \times 62) + (0.05^2 \times 45) \frac{1}{2} = 0.41125$

カマド主軸	実測主軸
北←南	N-2°-E
N-10°-E	

カマド規模		支脚(石製)					支脚中心の住居内位置		
縦	横	縦	横	長さ	床面高	重量	北壁床	東壁床	西壁床
		10	6	20	13				

計測項	部位名	煙道壁	煙道床	炎口	炎焼	支脚	焚燃	焚口	前庭
支脚中心からの距離		-85	-62	-48	-28	-5+5	+17	+37	+69
部位縦長		23	14	20	23	10	12	20	32
床幅			22	32	41	54	50	前面51 中央43 後面53	
最大内径		27							

表5 2号A(新)住居跡(南北軸)計測表

主軸方向	欠番	東西主軸間	南北主軸間	主軸柱間	主軸間柱間	番号	短径×長径	深さ	
南北	AP ₃₂ ・AM ₁₁	AP ₁₁ -AP ₁₄	AP ₁₁ -AP ₁₂	AP ₂₁ -東西O	AP ₃₁ -AP ₃₂	AP ₁₁	0.31 × 0.38	0.22	
N-12.5°-E	AM ₁₃ ・AM ₁₄	2.43	2.56	1.84	0.84※	AP ₁₂	0.33 × 0.36	0.19	
		AP ₁₂ -AP ₁₃	AP ₁₄ -AP ₁₃	測点間		AP ₁₃	0.34 × 0.38	0.21	
		2.64	2.50	P ₆₁ -南北O	P ₆₁ -東西O	AP ₁₄	0.36 × 0.38	0.28	
平均		2.54	2.53	1.55	3.66	平均	0.34 × 0.38	0.23	
		施設柱間		P ₆₂ -南北O	P ₆₂ -東西O	AP ₂₁	0.19 × 0.20	0.11	
		AP ₆₁ -AP ₆₂		0.68	3.88	AP ₃₁	0.17 × 0.18	0.02	
		2.25	平均	1.12	3.77	AP ₅₁	0.20 × 0.21	0.09	
番号	短径×長径	深さ	AD ₂₁		0.75 × 2.50	0.05	AP ₅₂	0.18 × ?	0.05
AM ₂₃ P ₁	0.06 × 0.07	0.03	AD ₂₂		1.04 × 1.36	0.08	AP ₅₃	0.18 × 0.23	0.08
AM ₂₃ P ₂	0.06 × 0.09	0.03	AD ₂₃		0.68 × 0.70	0.12	AP ₅₄	0.21 × 0.25	0.11
AM ₂₃ P ₃	0.05 × 0.08	0.03	※(AP ₃₁ -AP ₃₂) = (AP ₃₁ -南北O) × 2						
AM ₂₃ P ₄	0.06 × 0.08	0.02	= 0.42 × 2 = 0.84						
AM ₂₃ P ₅	0.05 × 0.06	0.03	平均						
AM ₂₃ P ₆	0.06 × 0.07	0.01	AP ₅₇						
平均	0.06 × 0.08	0.03	0.20 × 0.23						
			AP ₆₁						
			0.22 × 0.25						
			AP ₆₂						
			0.21 × 0.25						
			平均						
			0.22 × 0.25						

計測部	面積内訳
全床面	$(1^2 \times 16) + (0.2^2 \times 209) + (0.05^2 \times 504) + (0.05^2 \times 357) \frac{1}{2} = 26.06625$
AP ₁₁ ~AP ₁₄ 内	$(3.55 \times 1.89) \frac{1}{2} + (3.55 \times 1.70) \frac{1}{2} = 6.3722$
南壁 D ₂₁	$(0.2^2 \times 11) + (0.05^2 \times 142) + (0.05^2 \times 78) \frac{1}{2} = 0.8925$
北壁 D ₂₂	$(0.2^2 \times 19) + (0.05^2 \times 116) + (0.05^2 \times 78) \frac{1}{2} = 1.1475$
南壁 D ₂₃	$(0.2^2 \times 3) + (0.05^2 \times 83) + (0.05^2 \times 50) \frac{1}{2} = 0.39$

番号	短径 × 長径	深さ
AP _{s1}	0.12 × 0.14	0.05
AP _{s2}	0.10 × 0.15	0.10
AP _{s3}	0.17 × 0.18	0.05
AP _{s4}	0.16 × 0.17	0.04

カマド主軸	実測主軸
N-14.5°-E	N-9°-E

カマド規模		支脚 (石製)					支脚中心の住居内位置		
縦	横	縦	横	長さ	床面高	重量	北壁床	東壁床	西壁床
86	(86)	11	9	18	11		47		

計測項	部位名	煙道壁	煙道床	炎口	炎焼	支脚	焚燃	焚口	前庭
支脚中心からの距離		-152	-48	-35	-19	-6+6	+22	+38	
部位縦長		104	13	16	13	12	16	16	
床幅		9	35	35	35	38	34	?	
最大内径		27	37	38	42	44	42	?	

表6 2号B(古)住居跡(東西軸)計測表

主軸方向	欠番
東西	BP ₄₂
N-12.5°-W	

南北主柱間	東西主柱間	主軸柱間	測点間
BP ₁₁ -BP ₁₄	BP ₁₁ -BP ₁₂	BP ₂₁ -南北O	BP _{s1} -南北O
2.56	2.64	1.64	2.06
BP ₁₂ -BP ₁₃	BP ₁₄ -BP ₁₃		BP _{s5} -南北O
2.50	2.43		2.10
平均	2.53	2.54	2.08
対角柱間			
		BP ₄₁ -東西O	BP ₄₁ -南北O
		2.20	2.35
		BP ₄₃ -東西O	BP ₄₃ -南北O
		1.88	1.90
		BP ₄₄ -東西O	BP ₄₄ -南北O
		2.14	2.30

番号	短径 × 長径	深さ
BP ₁₁	0.33 × 0.36	0.19
BP ₁₂	0.34 × 0.38	0.21
BP ₁₃	0.36 × 0.38	0.28
BP ₁₄	0.31 × 0.38	0.22
平均	0.34 × 0.38	0.23
BF ₂₁	0.26 × 0.44	0.11
BP ₄₁	0.33 × 0.28	0.13
BP ₄₃	(0.33) × 0.42	0.10
BP ₄₄	0.24 × 0.26	0.10
平均	0.30 × 0.32	0.11
BP _{s1}	0.31 × 0.34	0.08
BP _{s2}	0.24 × 0.28	0.15
BP _{s3}	0.27 × 0.29	0.09
BP _{s4}	0.13 × 0.13	0.05
BD ₂₁	0.89 × 1.02	0.08

計測部	面積内訳
全床面	$(1^2 \times 12) + (0.2^2 \times 165) + (0.05^2 \times 485) + (0.05^2 \times 355) \frac{1}{2} = 20.25625$
BP ₁₁ ~BP ₁₄ 内	6.3722
東壁 BD ₂₁	$(0.2^2 \times 7) + (0.05^2 \times 124) + (0.05^2 \times 64) \frac{1}{2} = 0.67$

表7 3号住居跡(南北軸)計測表

主軸方向	
南北	
N-15.5°-E	

計測部	面積内訳
全床面(復原)	$\{(1^2 \times 3) + (0.2^2 \times 155) + (0.05^2 \times 526) + (0.05^2 \times 284) \frac{1}{2}\} \times 2 = 21.74$

表8 4号住居跡(東西軸)計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	主軸間柱間	番号	短径 × 長径	深さ
東西	P ₃₂	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂	P ₃₁ -P ₃₂	P ₁₁	0.24 × 0.30	0.17
N-86.5°-E		2.25	2.50	約1.40	P ₁₂	0.24 × 0.30	0.17
		P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₄ -P ₁₃		P ₁₃	0.25 × 0.30	0.18
		2.50	2.68		P ₁₄	0.32 × 0.40	0.18
		平均	2.38	2.59	平均	0.27 × 0.33	0.18
					P ₃₁	0.30 × 0.32	0.16
					P ₃₂		
					平均		
					D ₂₁	0.72 × 0.86	0.11
					D ₂₂	0.37 × 0.46	0.06

計測部	面積内訳
全床面(現存)	$(1^2 \times 18) + (0.2^2 \times 237) + (0.05^2 \times 633) + (0.05^2 \times 393) \times \frac{1}{2} = 29.55375$
全床面(復原)	
P ₁₁ ~P ₁₄ 内	$(3.46 \times 1.73) \times \frac{1}{2} + (3.46 \times 1.84) \times \frac{1}{2} = 6.1761$
南壁 D ₂₁	$(0.2^2 \times 8) + (0.05^2 \times 71) + (0.05^2 \times 44) \times \frac{1}{2} = 0.5525$
カマド袖外D ₂₂	

カマド主軸	実測主軸	カマド規模						支脚(石製)			支脚中心の住居内位置			
北 ← 南	カマド主軸	縦	横	縦	横	長さ	床面高	重量	北壁床	東壁床	西壁床			
N-1.5°-E	に一致	188	91	8	8	22	12		88	308				

計測項	部位名	煙道壁	煙道床	炎口	炎焼	支脚	焚燃	焚口	前庭
支脚中心からの距離		-117	-88	-70	-27	-4+4	+20	+40	+64
部位	縦長	29	18	43	23	8	16	20	24
床幅		34	31	44	41	40	47	48	46
最大内径		45	47	52	46	43			

表9 5号住居跡(東西軸)計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	主軸柱柱間	備考		番号	短径 × 長径	深さ
東西	P ₁₁ ・P ₁₄ ・P ₃₁	P ₁₂ -P ₁₃	P ₂₁ -P ₁₂	P ₃₂ -南北0	P ₃₁ -南北0	P ₁₂	0.40 × 0.56	0.36
N-76°-W		2.81	1.71	1.74	2.15	P ₁₃	0.22 × 0.23	0.06
		P ₃₂ -東西0	P ₂₁ -P ₁₃	P ₃₃ -東西0	P ₃₂ -南北0	P ₂₁	0.22 × 0.27	0.10
		0.50	2.05	1.78	2.10	P ₃₂	0.21 × 0.23	0.17
		平均	1.88	1.76	2.13	P ₃₁	0.30 × 0.36	0.10
						P ₃₂	0.20 × 0.20	0.07
						P ₃₃	0.20 × 0.36	0.07

施設柱壁柱間	施設柱間				
P ₆₇ -P ₅₃	P ₆₁ -P ₆₂	P ₆₃ -P ₆₄	P ₆₅ -P ₆₄	P ₆₈ -P ₆₇	P ₆₉ -P ₆₈
1.35	0.66	0.72	0.50	1.68	1.43
P ₆₆ -P ₅₃	P ₆₂ -P ₆₃	P ₆₇ -P ₆₅	P ₆₅ -P ₆₄		
1.40	0.62	0.78	0.40		
平均	1.38	0.64	0.75	0.45	

計測部	面積内訳
全床面	$(1^2 \times 4) + (0.2^2 \times 193) + (0.05^2 \times 461) + (0.05^2 \times 288) \times \frac{1}{2} = 13.2325$
P ₂₁ ~P ₁₂ ~P ₁₃ 内	$(0.281 \times 1.24) \times \frac{1}{2} = 0.1742$
中央 D ₁₁	$(0.2^2 \times 2) + (0.05^2 \times 66) + (0.05^2 \times 35) \times \frac{1}{2} = 0.28875$

番号	短径 × 長径	深さ
P ₆₁	0.20 × 0.21	0.07
P ₆₂	0.32 × 0.40	0.09
P ₆₃	0.16 × 0.19	0.09
P ₆₄	0.20 × 0.26	0.14
P ₆₅	0.18 × 0.22	0.09
P ₆₆	0.17 × 0.20	0.16
P ₆₇	0.27 × 0.28	0.43
P ₆₈	0.23 × 0.25	0.08
P ₆₉	0.21 × 0.22	0.09
D ₁₁	0.52 × 0.72	0.17

カマド主軸	実測主軸	カマド規模						支脚 (石製)			支脚中心の住居内位置		
北 ← 南	カマド主	縦	横	縦	横	長さ	床面高	重量	壁隅床	南壁床	東壁床		
N-28°-W	軸に一致	106	105	16	12	18.5	抜去		55				

計測項	部位名	煙出	煙口	炎口	炎焼	支脚	焚燃	焚口	前庭
支脚中心からの距離			-62	-46	-24	-3+3	+23	+44	+57
部位	縦長		16	22	21	6	20	21	13
床	幅		17	14	27	35	40	(37)	
最大	内径		18	20	31	44	44		

表10 6号A(新)住居跡(南北軸)計測表

主軸	欠番	主軸柱間				備考			番号	短径 × 長径	深さ
南北		AP ₂₁ -東西O	南北O-東壁	南壁~O~北壁	AP ₂₁ -北壁				AP ₂₁	0.38 × 0.49	0.08
N-8.0°-E		0.82	1.56	3.56	0.94						

計測部	面積	内訳
全床面(復原)	{(1 ² ×2)+(0.2 ² ×61)+(0.05 ² ×299)+(0.05 ² ×194)}½	×2=10.86

カマド主軸	実測主軸	カマド規模						支脚 (石製)			支脚中心の住居内位置		
北 → 南	カマド主	縦	横	縦	横	長さ	床面高	重量	壁隅床	東壁床	西壁床		
S-28°-E	S-20°-E												

計測項	部位名	煙出	煙口・炎口	炎焼	支脚	焚燃	焚口	前庭
支脚中心からの距離		-50	-40	-21	-8+8	+25	+43	+60
部位	縦長	10	19	13	16	17	18	17
床	幅	25	18	24	37	40	45	67
最大	内径	25	30	32	43	51	59	64

表11 6号B(古)住居跡(南北軸)計測表

主軸	欠番	南北主柱間		番号	短径 × 長径	深さ
南北	BD ₁₁ ・BM ₁₁	BP ₁₁ -BP ₁₂		BP ₁₁	0.41 × 0.54	0.28
N-6.5°-E	BM ₁₃ ・BM ₁₄	1.71		BP ₁₂	0.33 × 0.62	0.24

計測部	面積	内訳
全床面(復原)	{(1 ² ×4)+(0.2 ² ×65)+(0.05 ² ×231)+(0.05 ² ×143)}½	×2=14.7125
南壁BD ₂₁ (復原)	0.74 × (1.00) = (0.74)	

平均	0.37 × 0.58	0.26
BP ₅₁	(0.25 × 0.25)	
BP ₅₂	0.31 × 0.34	0.38
平均	0.74 × (1.00)	

表12 7号A(新)住居跡(南北軸)計測表

主軸方向		欠番		東西主柱間	南北主柱間	主軸柱間	施設柱間	番号	短径 × 長径	深さ
南北	N-1.5°-W	AP ₄₁ ・AP ₄₃		AP ₁₁ -AP ₁₄	AP ₁₁ -AP ₁₂	AP ₂₁ -東西O	AP ₆₁ -AP ₆₂	AP ₁₁	0.28 × 0.28	0.13
		AP ₄₄ ・AP ₆₄		3.27	3.70	2.62	1.50	AP ₁₂	0.30 × 0.30	0.34
				AP ₁₂ -AP ₁₃	AP ₁₄ -AP ₁₃	測点間	AP ₆₃ -AP ₆₄	AP ₁₃	0.37 × 0.40	0.21
				3.60	3.76	AP ₆₅ -東西O	(1.38) ※	AP ₁₄	0.37 × 0.42	0.20
				平均	3.17	3.73	2.66	平均	0.33 × 0.35	0.22
								AP ₂₁	0.42 × (0.42)	0.13
測点間		壁柱間		AP ₆₅ -AP ₆₆		2.54		AP ₄₂	0.60 × 0.65	0.22
AP ₆₁ -南北O	AP ₆₁ -東西O	AP ₆₁ -南北O	AP ₆₂ -南北O	AP ₆₁ -東西O	測点間			AP ₆₁	0.29 × 0.30	0.20
3.06	1.43	4.18	4.14	1.98				AP ₆₂	0.30 × 0.40	0.45
AP ₆₂ -南北O	AP ₆₂ -東西O	AP ₆₃ -東西O	AP ₆₂ -東西O	AP ₆₃ -南北O	AP ₆₁ -AP ₆₃			AP ₆₃	0.20 × 0.22	0.14
0.08	2.73	4.44	3.95	1.94	1.48			平均	0.26 × 0.31	0.26
AP ₆₃ -南北O	AP ₆₃ -東西O	平均	4.31	4.50	1.96	AP ₆₅ -東西O	3.24	AP ₆₁	0.22 × 0.27	0.22
2.90	1.76	平均	4.18		対角柱間			AP ₆₂	0.19 × 0.23	0.18
AP ₆₄ -南北O	AP ₆₄ -東西O				AP ₄₂ -南北O	AP ₆₆ -東西O	3.24	AP ₆₃	0.21 × 0.28	0.08
1.01	1.57				3.82	3.24		AP ₆₅	0.20 × 0.20	0.10
AP ₆₅ -南北O	AP ₆₅ -東西O				AP ₄₂ -東西O	AP ₆₅ -南北O	1.21	AP ₆₆	0.30 × 0.32	0.08
1.09	2.02				3.16	1.21		AP ₆₁	0.20 × 0.20	0.10
						AP ₆₆ -南北O	1.33	AP ₆₂	0.27 × 0.30	0.24

※AP₆₃-AP₆₄=(AP₆₃-南北O)×2=0.69×2=(1.38)

計測部	面積内訳	備考
全床面	$(1^2 \times 44) + (0.2^2 \times 285) + (0.05^2 \times 1001) + (0.05^2 \times 580) \div 2 = 58.6275$	(復原)
AP ₁₁ ~AP ₁₄ 内	$(4.80 \times 2.56) \div 2 + (4.80 \times 2.26) \div 2 = 11.568$	
南壁AD ₂₁	$(0.1^2 \times 77) + (0.025^2 \times 245) + (0.025^2 \times 151) \div 2 = 0.9403125$	
方形区画AH ₁₁	$2.05^2 = 4.2025$	(復原)
中央部床面	$(1^2 \times 30) + (0.2^2 \times 282) + (0.05^2 \times 887) + (0.05^2 \times 540) \div 2 = 44.1725$	(復原)

カマド主軸	実測主軸	カマド規模				支脚 (石製)		支脚中心の住居内位置			
		縦	横	縦	横	長さ	床面高	重量	北壁床	東壁床	西壁床
北 ← 南	N-2.5°-W	143	104	11	7	18	(14)		92		

計測項	部位名	煙出	煙口	炎口	炎焼	支脚	焚燃	焚口	前庭
支脚中心からの距離		-113	-92	-79	-39	-6+6	+25	+51	+63
部位縦長		21	13	40	33	12	19	26	12
床幅		57	56	51	61	60	52	36	
最大内径			61	51	61	62	56	40	

表13 7号B(古)住居跡(南北軸)計測表

主軸方向		欠番		東西主柱間	主軸柱間	測点間	番号	短径 × 長径	深さ	
南北	N-8.5°-E			BP ₁₁ -BP ₁₂	BP ₂₁ -東西O	BP ₂₁ -BP ₁₁	BP ₂₁ -BP ₁₂	BP ₁₁	0.33 × 0.42	0.13
				1.58	1.24	1.45	1.52	BP ₁₂	0.33 × 0.41	0.09
								平均	0.33 × 0.42	0.11
計測部		面積内訳						BP ₆₁	0.13 × 0.14	0.06
全床面(復原)		$(1^2 \times 8) + (0.2^2 \times 178) + (0.05^2 \times 573) + (0.05^2 \times 317) \div 2 = 16.94875$						BD ₂₁	0.45 × (1.13)	(0.12)
南壁BD ₂₁ (復原)		$(0.1^2 \times 53) + (0.025^2 \times 225) + (0.025^2 \times 128) \div 2 = 0.710625$						BD ₂₂	0.50 × 0.55	0.11
北西隅BD ₂₃		$(0.2^2 \times 3) + (0.05^2 \times 46) + (0.05^2 \times 43) \div 2 = 0.2888$						BD ₂₃	0.53 × 0.64	0.09
北西壁BD ₂₂		$(0.2^2 \times 1) + (0.05^2 \times 53) + (0.05^2 \times 33) \div 2 = 0.21$								

表14 9号住居跡（南北軸）計測表

主軸方向	欠番	東西主柱間	南北主柱間	測点間		番号	短径 × 長径	深さ
南 北 N-1.5°-W	P ₃₁ ・P ₃₄	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₄	P ₃₂ -南北O	P ₃₂ -東西O	P ₁₁	0.21 × 0.22	0.33
	M ₁₁ ・M ₁₂	3.20	2.53	2.58	0.83	P ₁₂	0.20 × 0.23	0.26
		P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₄ -P ₁₃	P ₃₃ -南北O	P ₃₃ -東西O	P ₁₃	0.32 × 0.36	0.37
		3.07	2.33	2.52	1.10	P ₁₄	0.32 × 0.37	0.32
平均		3.14	2.43	2.55	0.97	平均	0.26 × 0.30	0.32
		壁柱間		施設柱間		P ₂₁	0.24 × 0.29	0.16
		P ₅₁ -南北O	P ₅₂ -南北O	P ₆₁ -東西O	P ₆₁ -南北O	P ₃₂	0.24 × 0.28	0.07
		2.14	2.85	2.72	0.72	P ₃₃	0.29 × 0.30	0.18
		P ₅₁ -東西O	P ₅₂ -東西O	P ₆₂ -東西O	P ₆₂ -南北O	平均	0.27 × 0.29	0.13
		2.10	2.86	2.88	1.01	P ₅₁	0.36 × 0.42	0.32
平均		2.12	2.86	2.80	0.87	P ₅₂	0.25 × 0.32	0.08
		P ₅₃ -南北O	P ₅₃ -東西O	主軸柱間 測点間		P ₅₃	0.41 × 0.43	0.22
		1.76	2.93			P ₅₄	0.31 × 0.34	0.29
		P ₅₄ -南北O	P ₅₄ -東西O	P ₂₁ -東西O	P ₂₁ -南北O	P ₆₁	0.23 × 0.26	0.25
		3.23	0.44	0.40	0.42	P ₆₂	0.28 × 0.32	0.25
						D ₂₁	0.50 × 0.93	0.13

計測部	面積内訳
全床面	$(1^2 \times 23) + (0.2^2 \times 292) + (0.05^2 \times 890) + (0.05^2 \times 496) \frac{1}{2} = 37.525$
P ₁₁ ~P ₁₄ 内	$(3.94 \times 2.04) \frac{1}{2} + (3.94 \times 1.82) \frac{1}{2} = 7.6042$
西ベッド状遺構	$(0.2^2 \times 85) + (0.05^2 \times 248) + (0.05^2 \times 163) \frac{1}{2} = 4.22375$
南壁 D ₂₁	$(0.2^2 \times 3) + (0.05^2 \times 79) + (0.05^2 \times 54) \frac{1}{2} = 0.385$
北張り出し部	$(0.2^2 \times 47) + (0.05^2 \times 180) + (0.05^2 \times 141) \frac{1}{2} = 2.50625$
北ベッド状遺構	$(0.2^2 \times 3) + (0.05^2 \times 60) + (0.05^2 \times 56) \frac{1}{2} = 0.34$

カマド主軸	実測主軸	カマド規模		支脚 (石製)				番号
北 ← 南	カマド主軸	縦	横	縦	横	長さ	床面高	重量
N-0.5°-E	に一致	132	104	13	10	29	17	
				10	10	24	15	8
				16	10	32	(23)	7

支脚部中心の住居内位置			計測項	部位名	煙出	煙口	炎口	炎焼	支脚	焚燃	焚口	前庭
北壁床	東壁床	西壁床	支脚部中心からの距離		-65	-55	-41	-24	-15+15	+28	+60	+77
55			部位縦長		10	14	17	9	30	13	32	17
ベッド西側下縁床			床幅		22	$\frac{U-V}{44}$	$\frac{Q-R}{38}$		47	$\frac{I-J}{44}$	$\frac{G-H}{37}$	
			最大内径			37						

番号	部位名	計測項	縦	横	長さ	床面高	重量	番号	部位名	計測項	縦	横	長さ	床面高	重量
1	西袖石		30	14	40	$\frac{I-J}{29}$		4	東袖石		25	11	39	$\frac{I-J}{22(+)}$	
2	西袖石		18	14	34	$\frac{O-P}{20}$		5	東袖石		26	14	37	$\frac{O-P}{23}$	
3	西袖石		26	19	39	$\frac{U-V}{22}$		6	東袖石		22	9	34	$\frac{U-V}{12(+)}$	
								10	天井石		32	62	19	(32)	

() は復原 (+) は傾斜現状値

表15 10号住居跡（南北軸）計測表

主軸方向	欠番	東西主柱間	南北主柱間	備考		番号	短径 × 長径	深さ
南北 N-2.5°-E		P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂	P ₆₁ -東西O	P ₆₁ -南北O	P ₁₁	0.29 × 0.34	0.07
		1.48	1.94	1.71	2.40	P ₁₂	0.30 × 0.31	0.05
		P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₄ -P ₁₃	P ₆₂ -南北O	P ₆₂ -東西O	P ₁₃	0.29 × 0.30	約0.07
		1.77	2.06	1.36	2.40	P ₁₄	0.23 × 0.24	0.07
	平均	1.63	2.00	1.54	2.40	平均	0.28 × 0.30	0.07

計測部	面積内訳
全床面	$(1^2 \times 5) + (0.2^2 \times 89) + (0.05^2 \times 469) + (0.05^2 \times 244) \frac{1}{2} = 10.0375$
P ₁₁ ~P ₁₄ 内	$(2.52 \times 1.14) \frac{1}{2} + (2.52 \times 1.44) \frac{1}{2} = 3.2508$
中央 D ₁₁	$(0.2^2 \times 7) + (0.05^2 \times 79) + (0.05^2 \times 50) \frac{1}{2} = 0.54$
北壁 D ₂₁	$(0.2^2 \times 1) + (0.05^2 \times 64) + (0.05^2 \times 38) \frac{1}{2} = 0.2475$
北壁 D ₂₂	$(0.2^2 \times 3) + (0.05^2 \times 68) + (0.05^2 \times 44) \frac{1}{2} = 0.345$

番号	短径 × 長径	深さ
P ₆₁	0.30 × 0.32	0.17
P ₆₂	0.28 × 0.32	0.12
平均	0.29 × 0.32	0.15
D ₁₁	0.80 × 0.86	0.24
D ₂₁	0.43 × 0.74	0.14
D ₂₂	0.68 × 0.71	0.21

表16 11号住居跡（南北軸）計測表

主軸方向	欠番	東西主柱間	南北主柱間	主軸間柱間	主軸柱間	番号	短径 × 長径	深さ
南北 N-10.5°-E	P ₁₄ ・P ₃₄ ・P ₄₃ M ₁₃ ・M ₁₄	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂	P ₃₁ -P ₃₂	P ₂₁ -東西O	P ₁₁	0.26 × 0.28	0.27
		2.84	2.36	2.20	2.02	P ₁₂	0.20 × 0.22	0.23
		P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₄ -P ₁₃	P ₃₃ -P ₃₄	施設柱間 P ₆₁ -P ₆₂	P ₁₃	0.19 × 0.25	0.24
		2.89	2.36	(2.34)※		P _{14'}	0.28 × 0.30	0.14
	平均	2.87	2.36	2.27	1.18	平均	0.23 × 0.26	0.22
		対角柱		壁柱		P ₂₂	0.29 × 0.31	0.06
		P ₄₁ -東西O	P ₄₁ -南北O	P ₅₁ -東西O	P ₅₁ -南北O	P ₃₁	0.25 × 0.32	0.07
		2.38	2.49	2.33	1.51	P ₃₂	0.28 × 0.50	0.07
		P ₄₂ -東西O	P ₄₂ -南北O	P ₅₂ -東西O	P ₅₂ -南北O	P ₃₃	0.24 × 0.26	0.07
		1.97	2.36	2.48	0.01	P ₃₄		
		P ₄₃ -東西O	P ₄₃ -南北O	P ₅₃ -東西O	P ₅₃ -南北O	平均	0.26 × 0.36	0.07
				2.38	0.40	P ₄₁	0.32 × 0.45	0.09
		P ₄₄ -東西O	P ₄₄ -南北O	P ₅₄ -東西O	P ₅₄ -南北O	P ₄₂	0.21 × 0.25	0.10
		2.40	3.10	2.58	0.35	P ₄₃		
		P ₄₅ -東西O	P ₄₅ -南北O	P ₅₅ -東西O	P ₅₅ -南北O	P ₄₄	0.38 × 0.53	0.12
		2.66	1.94	2.46	0.19	P ₄₅	0.25 × 0.28	0.10
		P ₄₆ -東西O	P ₄₆ -南北O			P ₄₆	0.23 × 0.25	0.14
		2.30	2.04			平均	0.28 × 0.35	0.11

※P₃₃-P₃₄ = (P₃₃-南北O) × 2 = (2.34)

計測部	面積内訳
全床面	$(1^2 \times 20) + (0.2^2 \times 264) + (0.05^2 \times 653) + (0.05^2 \times 411) \frac{1}{2} = 32.70625$
P ₁₁ ~P _{14'} 内	$(3.16 \times 2.11) \frac{1}{2} + (3.16 \times 1.54) \frac{1}{2} = 5.767$
中央 D ₁₁	$(0.2^2 \times 6) + (0.05^2 \times 78) + (0.05^2 \times 52) \frac{1}{2} = 0.455$

カマド主軸	実測主軸	カマド規模		支 脚 (石製)				支脚中心の住居内位置			
北 ← 南	N-4.5°-E	縦	横	縦	横	長さ	床面高	重量	北壁床	東壁床	西壁床
N-1.0°-E	N-4.5°-E	147	102	10	8	24	(16)		43	276	303

計測項	部位名	煙出	煙口	炎口	炎焼	支脚	焚燃	焚口	前庭
支脚中心からの距離		-50	-43	-31	-18	-5+5	+36	+55	+104
部 位	縦 長	7	12	13	13	10	31	19	49
床	幅		17	45	45	42	42	36	
最 大	内 径								

表17 12号住居跡 (南北軸?) 計測表

主軸方向	欠 番	番号	短径 × 長径	深さ
南北?		P ₈₁	0.23 × 0.24	0.12
N-9°-E				

計 測 部	面 積 内 訳
現 存 床 面	$(0.2^2 \times 55) + (0.05^2 \times 268) + (0.05^2 \times 160) \div 2 = 3.07$

表18 13号住居跡 (東西軸) 計測表

主軸方向	欠 番	南北主柱間	東西主柱間	備 考		番号	短径 × 長径	深さ
東 西	P ₁₁ ・ P ₁₂	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂	P ₁₃ -東西O	P ₁₃ -南北O	P ₁₃	0.25 × 0.27	0.14
N-45.5°-E				1.25	0.96	P ₈₁	(0.28) × 0.39	0.29
		P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₄ -P ₁₃	P ₈₁ -東西O	P ₈₁ -南北O	P ₈₂	(0.30) × 0.30	0.24
				2.11	1.72	P ₈₁	0.36 × 0.38	0.39
				P ₈₂ -東西O	P ₈₂ -南北O			
				1.97	1.84			
				P ₈₁ -東西O	P ₈₁ -南北O			
				0.88	2.71			

計 測 部	面 積 内 訳
全 床 面	$(1^2 \times 4) + (0.2^2 \times 125) + (0.05^2 \times 531) + (0.05^2 \times 236) \div 2 = 10.6225$
掘り込み部	$(0.2^2 \times 68) + (0.05^2 \times 339) + (0.05^2 \times 158) \div 2 = 3.765$

カマド主軸	実測主軸	カマド規模		支 脚 (石製)				支脚中心の住居内位置			
東 ← 西	カマド主軸 に 一 致	縦	横	縦	横	長さ	床面高	重量	東壁床	南壁床	北壁床
N-45.5°-E		121	102	14	12	19	15		18		

計測項	部位名	煙出	煙口	炎口	炎焼	支脚	焚燃	焚口	前庭
支脚中心からの距離		-66	-54	-22	-7+7	+35	+67	+90	
部 位	縦 長	12	32	15	14	28	32	23	
床	幅		37	36	38	41	45	39	
最 大	内 径		53	54	54	56	58	58	

表19 14号住居跡(東西軸)計測表

主軸方向	欠番	東西主柱間	南北主柱間	柱穴-南北O	柱穴-東西O	番号	短径 × 長径	深さ
南北	P ₁₁ ・P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂	P ₈₃ -南北O	P ₈₃ -東西O	P ₁₂	0.37 × 0.47	0.27
N-6.5°-E				0.16	2.52	P ₁₃	0.17 × 0.19	0.11
		P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₄ -P ₁₃	P ₈₄ -南北O	P ₈₄ -東西O	P ₈₁	0.35 × 0.42	0.51
		2.12		2.63	2.53	P ₈₂	(0.30) × 0.30	0.24
	平均			P ₈₅ -南北O	P ₈₅ -東西O	P ₈₃	(0.28) × 0.39	0.29
				2.79	1.28	P ₈₄	0.34 × 0.43	0.27
				P ₈₆ -南北O	P ₈₆ -東西O	P ₈₅	0.21 × 0.22	0.24
				2.70	0.25	P ₈₆	0.44 × 0.55	0.23
				P ₈₇ -南北O	P ₈₇ -東西O	P ₈₈	0.39 × 0.42	0.47
				0.92	1.78			
				P ₈₁ -南北O	P ₈₁ -東西O			
				2.18	0.55			

備考	
P ₈₃ -P ₈₄	P ₈₅ -P ₈₄
2.79	1.26
P ₈₄ -P ₈₆	P ₈₅ -P ₈₈
2.58	1.54

計測部	面積内訳
全床面積	$(1^2 \times 4) + (0.2^2 \times 44) + (0.05^2 \times 389) + (0.05^2 \times 187) \frac{1}{2} = 6.96625$
P ₁₂ 面積	$(0.2^2 \times 1) + (0.05^2 \times 30) + (0.05^2 \times 29) \frac{1}{2} = 0.15125$

カマド主軸	実測主軸	カマド規模		支脚(石製)				支脚中心の住居内位置			
北 ← 南	カマド主軸に一致	縦	横	縦	横	長さ	床面高	重量	北壁床	東壁床	西壁床
N-6.5°-E		86	93	11	10	20	(15)		48.5		

計測項	部位名	煙出	煙口	炎口	炎焼	支脚	焚燃	焚口	前庭
支脚中心からの距離			-48.5	-34.5	-24.5	-5.5+5.5	+15.5	+37.5	
部位縦長			14	10	19	11	10	22	
床幅			32	44	51	44	34	27	
最大内径			38	49	55	47	37	30	

表20 15号住居跡(東西軸)計測表

主軸方向	欠番	南北主柱間	東西主柱間	測点間	主軸柱間	番号	短径 × 長径	深さ
東西	P ₃₂	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂	P ₈₁ -東西O	P ₂₁ -南北O	P ₁₁	0.27 × 0.28	0.14
N-70°-W	P ₄₁ ~P ₄₃	1.64	1.63	1.27	0.68	P ₁₂	0.32 × 0.40	0.08
		P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₄ -P ₁₃	P ₈₁ -南北O	測点間 P ₃₂ -南北O	P ₁₃	0.24 × 0.26	0.29
		1.62	1.47	1.18		P ₁₄	0.22 × 0.24	0.17
	平均	1.63	1.55	1.23	0.68	平均	0.26 × 0.30	0.17
			主軸間柱間	P ₈₂ -東西O	P ₄₄ -東西O	P ₂₁	0.27 × 0.32	0.03
			P ₃₁ -P ₃₂	1.38	1.33	P ₃₂	0.22 × 0.26	0.04
			※1.02	P ₈₂ -南北O	P ₄₄ -南北O	P ₄₄	0.19 × 0.20	0.06
				2.68	1.64	P ₈₁	0.20 × 0.21	0.06
						P ₈₂	0.20 × 0.24	0.13
						D ₂₁	0.72 × 0.85	0.23

※P₃₁-P₃₂=(P₃₂-東西O)×2=0.51×2=1.02

計測部	面積内訳
全床面(復原)	$(1^2 \times 5) + (0.2^2 \times 168) + (0.05^2 \times 543) + (0.05^2 \times 287) \div 2 = 13.43625$
P ₁₁ ~P ₁₄ 内	$(2.35 \times 1.01) \div 2 + (2.35 \times 1.12) \div 2 = 2.5028$
D ₂₁	$(0.2^2 \times 4) + (0.05^2 \times 93) + (0.05^2 \times 44) \div 2 = 0.4475$

カマド主軸	実測主軸	カマド規模		支脚(軽石製)				支脚中心の住居内位置			
		縦	横	縦	横	長さ	床面高	重量	北壁床	東壁床	西壁床
北 ← 南	カマド主軸に一致	105	97	10	9	6	6		39		
N-17.5°-E											

計測項	部位名	煙出	煙口	炎口	炎焼	支脚	焚燃	焚口	前庭
支脚中心からの距離		-56	-39	-24	-14	-5+5	+18	+36	+66
部位縦長		17	15	10	9	10	13	18	30
床幅				15	20	23	25	28	
最大内径				24	25	26	31	32	

部位名	計測項	縦	横	長さ	床面高	重量
東 燵 石		17	12	39	28	
西 燵 石		20	13	39	25	

表21 16号住居跡(南北軸)計測表

主軸方向	欠番	東西主柱間	南北主柱間	主軸柱間	備考	番号	短径 × 長径	深さ
南 ← 北 N-0.5°-E	P ₁₁	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂	P ₂₁ -東西O	東壁-南北O	P ₁₁		0
		2.46	(2.89)	0.73	1.64	P ₁₂	0.42 × 0.46	0.23
		P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₄ -P ₁₃		西壁-南北O	P ₁₃	0.40 × 0.62	0.20
		(2.75)	2.89		1.70	P ₁₄	0.34 × 0.41	0.09
	平均	2.61	2.89		1.67	平均	0.39 × 0.50	0.17
				施設柱間	南壁-東西O	P ₂₁	0.30 × 0.32	0.11
				P ₆₁ -P ₆₂	1.79	P ₆₁	0.30 × 0.30	0.29
				1.08	北壁-東西O	P ₆₂	0.40 × 0.44	0.30
					1.79	平均	0.35 × 0.37	0.30
				平均	1.79	P ₆₁	0.22 × 0.39	0.20
					P ₆₂ -南北O	P ₆₂	0.24 × 0.26	0.12
					0.88	平均	0.23 × 0.33	0.16
						D ₁₁	0.80 × 0.82	0.20
						D ₂₁	0.70 × 1.04	0.22

※P₅₁・52, P₆₁・62は検出面からの深さ

計測部	面積内訳
全床面	$(1^2 \times 5) + (0.2^2 \times 126) + (0.05^2 \times 469) + (0.05^2 \times 256) \div 2 = 11.5325$
P ₁₁ ~P ₁₄ 内	$(4.06 \times 1.74) \div 2 + (4.06 \times 1.96) \div 2 = 7.5110$
中央 D ₁₁	$(0.2^2 \times 7) + (0.05^2 \times 69) + (0.05^2 \times 57) \div 2 = 0.52375$
東壁 D ₂₁	$(0.2^2 \times 5) + (0.05^2 \times 99) + (0.05^2 \times 60) \div 2 = 0.5225$

表22 17号A(新)住居跡(南北軸)計測表

主軸方向	欠番	東西主柱間	南北主柱間	施設柱間	備考	番号	短径 × 長径	深さ
南北 N-12.5°-E		AP ₁₁ -AP ₁₄	AP ₁₁ -AP ₁₂	AP ₆₁ -南北O	AP ₆₁ -東西O	AP ₁₁	0.27 × 0.28	0.10
		2.68	3.30	1.28		AP ₁₂	0.39 × 0.42	0.20
		AP ₁₂ -AP ₁₃	AP ₁₄ -AP ₁₃		AP ₆₂ -東西O	AP ₁₃	0.36 × 0.40	0.20
		2.81	3.53			AP ₁₄	0.40 × 0.40	0.14
	平均	2.75	3.42			平均	0.36 × 0.38	0.16
主柱穴壁間	番号	東壁	西壁	南壁	北壁	AP ₆₁	0.28 × 0.36	0.22
	AP ₁₁		2.44	1.31		AP ₆₁	0.22 × 0.23	0.08
	AP ₁₂		2.48		1.73	AP ₆₂	0.26 × 0.27	0.12
	AP ₁₃	2.24			1.40	AD ₂₁	0.94 × 1.60	0.13
	AP ₁₄	2.02		1.28				

計測部	面積内訳
全床面(現存)	$(1^2 \times 31) + (0.2^2 \times 255) + (0.05^2 \times 889) + (0.05^2 \times 500) \frac{1}{2} = 44.0475$
全床面(復原)	$44.0475 + (0.2^2 \times 26) + (0.05^2 \times 219) + (0.05^2 \times 141) \frac{1}{2} = 45.81125$
AP ₁₁ ~AP ₁₄ 内	$(4.57 \times 2.02) \frac{1}{2} + (4.57 \times 2.05) \frac{1}{2} = 9.3000$
南壁AD ₂₁	$(0.2^2 \times 18) + (0.05^2 \times 133) + (0.05^2 \times 82) \frac{1}{2} = 1.155$

カマド主軸	実測主軸	カマド規模		支脚(高杯杯下半部)			支脚中心の住居内位置				
北 ← 南	N-6.5°-E	縦	横	縦	横	1段高	2段高	重量	北壁床	東壁床	西壁床
N-10.0°-E		111	117	18.5	18.5						

計測項	部位名	煙出	煙口	炎口	炎焼	支脚 ※1	焚燃	焚口	前庭
支脚中心からの距離		-82.5	-71.5	-53.5	-32.5	-9.5+9.5	+23.5	+39.5	+55.5
部位縦長		11	18	21	23	19	14	16	16
床幅			15	33	33	49	51	50	
最小内径(復原)									()

部位名	計測項	縦	横	長さ	床面高	重量
東袖石		19	16	44	32	
西袖石(復原)		18	11	48	(40)	
天井石(復原)		21	(46)	11 ※2	(32)	

※1 出土高杯の位置を一応、支脚部として計測
※2 厚さ

表23 17号B(古)住居跡(南北軸)計測表

主軸方向	欠番	東西主柱間	南北主柱間	壁柱間		番号	短径 × 長径	深さ
南北 N-12.5°-E	BM ₂₄	BP ₁₁ -BP ₁₄	BP ₁₁ -BP ₁₂	BP ₆₁ -東西O	BP ₆₂ -南北O	BP ₁₁	AP ₁₁ ~AP ₁₄ に同じ	同
		2.68	3.30	3.30	3.36	BP ₁₂		
BP ₁₂ -BP ₁₃	BP ₁₄ -BP ₁₃	BP ₆₁ -南西O	BP ₆₂ -東西O	BP ₁₃				
2.81	3.53	3.58	3.03	BP ₁₄				
	平均	2.75	3.42	BP ₆₄ -東西O	BP ₆₃ -南北O	平均	0.36 × 0.38	0.16
		施設柱間		1.64	3.00	BP ₆₁	0.30 × 0.33	0.11
		BP ₆₁ -南北O		BP ₆₄ -南北O	BP ₆₃ -東西O	BP ₆₂	0.27 × 0.28	0.14
		1.28		2.64	0.24	BP ₆₃	(0.34) × (0.40)	0.04
						BP ₆₄	0.24 × 0.25	0.04
						BP ₆₁	0.28 × 0.36	0.22
						BD ₂₁	0.72 × (1.24)	0.29

主柱穴溝間※	溝 番号	BM ₂₃	BM ₂₁	南 壁	BM ₂₂
	BP ₇		1.98	1.31	
	BP ₁₂		2.05		1.50
	BP ₁₃	(1.70)			1.40
	BP ₁₄	1.80		1.28	

※主柱穴～溝外縁下端間，BP₁₂～北壁間

計測部	面積	内 訳
全床面(復原)	$(1^2 \times 27) + (0.2^2 \times 248) + (0.05^2 \times 824) + (0.05^2 \times 475) \frac{1}{2} = 39.5738$	
BP ₁₁ ～BP ₁₄ 内	$(4.57 \times 2.02) \frac{1}{2} + (4.57 \times 2.05) \frac{1}{2} = 9.3000$	
南壁BD(現存)	$(0.2^2 \times 4) + (0.05^2 \times 76) + (0.05^2 \times 56) \frac{1}{2} = 0.42$	
南壁BD(復原)	$(0.2^2 \times 11) + (0.05^2 \times 82) + (0.05^2 \times 65) \frac{1}{2} = 0.72625$	

表24 18号住居跡(東西軸)計測表

主軸方向	欠 番	南北主柱間	東西主柱間		
東 西 N-5.0°-E	P ₁₂	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂		
	P ₄₁ ～P ₄₃	2.08	(2.24)		
		P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₄ -P ₁₃		
		(2.08)	2.24		
	平均	2.08	2.24		

番号	短径 × 長径	深さ
P ₁₁	0.34 × 0.40	0.06
P ₁₂		
P ₁₃	0.46 × 0.50	0.10
P ₁₄	0.40 × 0.40	0.12
平均		
P ₄₄	0.44 × 0.52	0.09
P ₅₁	0.39 × 0.42	0.22
D ₂₁	0.85 × 0.88	0.27

計測部	面積	内 訳
床面(調査部)	$(1^2 \times 10) + (0.2^2 \times 51) + (0.05^2 \times 323) + (0.05^2 \times 330) \frac{1}{2} = 13.26$	
床面(復原)	$(1^2 \times 16) + (0.2^2 \times 104) + (0.05^2 \times 334) + (0.05^2 \times 219) \frac{1}{2} = 21.34375$	
P ₁₁ ～P ₁₄ 内(復原)	$(2.94 \times 1.58) \frac{1}{2} + (2.94 \times 1.58) \frac{1}{2} = 4.6452$	
南壁 D ₂₁	$(0.2^2 \times 7) + (0.05^2 \times 84) + (0.05^2 \times 59) \frac{1}{2} = 0.56375$	

表25 19号住居跡(南北軸)計測表

主軸方向	欠 番	南北主柱間			
南 北 N-0°-E	P ₁₁	P ₁₁ -P ₁₂			
		2.20 ※			

※(P₅₁-東西O) × 2 = 1.10 × 2 = 2.20

番号	短径 × 長径	深さ
P ₁₁		
P ₁₂	0.48 × 0.54	0.04
P ₅₁	0.51 × 0.69	0.13
D ₁₁	0.45 × 0.96	0.12

計測部	面積	内 訳
床面(復原)	4.70 × 4.16 = 19.552	
中央 D ₁₁	$(0.2^2 \times 5) + (0.05^2 \times 48) + (0.05^2 \times 52) \frac{1}{2} = 0.3850$	

表26 20号住居跡(南北軸)計測表

主軸方向	欠 番	東壁-南北O	西壁-南北O	南壁-東西O	北壁-東西O
南 北 N-12.5°-W		1.99	1.98	1.83	1.83
				石-南北O	石-東西O
				1.20	1.15

番号	短径 × 長径	深さ
P ₅₁	0.25 × 0.31	0.18
P ₅₂	0.29 × 0.30	0.18
D ₂₁	0.74 × 0.84	0.21

計測部	面積内訳
床面(復原)	$(1^2 \times 7) + (0.2^2 \times 154) + (0.05^2 \times 509) + (0.05^2 \times 314) \frac{1}{2} = 14.825$
南壁 D ₂₁	$(0.2^2 \times 6) + (0.05^2 \times 73) + (0.05^2 \times 53) \frac{1}{2} = 0.48875$

カマド主軸 北 ← 南 N-12.5°-W	実測主軸 カマド主 軸に一致	カマド規模		支脚(石製)				支脚中心の住居内位置			
		縦	横	縦	横	長さ	床面高	重量	北壁床	東壁床	西壁床
		137	(110)	10	7	18	13		54		

計測項	部位名	煙出	煙口	炎口	炎焼	支脚	焚燃	焚口	前庭
支脚中心からの距離		-80	-54	-37	-22	-5+5	+14	+29	+83
部位縦長		26	17	15	17	10	9	15	54
床幅			22	25	42	41	39	40	45
最大内径			36	28	50	53	42	35*	61

※最小内径

部位名	計測項	縦	横	長さ	床面高	重量
東袖石		16	9	38	20	
西袖石		24	11	36	20	
天井石		17	10	48	22	

表27 21号住居跡(南北軸)計測表

主軸方向	欠番	東西主柱間	南北主柱間	柱間	施設柱間	番号	短径 × 長径	深さ
南 ← 北 N-13.5°-E	P ₁₁ ~P ₁₃ D ₂₁	P ₁₁ -P ₁₄	P ₁₁ -P ₁₂	P _{e1} -P _{e3} 1.08	P _{e1} -P _{e2} 1.31	P ₁₄	0.30 × 0.30	0.20
		P ₁₂ -P ₁₃	P ₁₄ -P ₁₁	P _{e2} -P _{e3} 0.96	備考 P ₁₄ -南北O	P _{e1}	0.25 × 0.27	0.32
				1.02	2.32	P _{e2}	0.26 × 0.28	0.18
平均						平均	0.26 × 0.28	0.25
					石-南北O 0.84	P _{e3}	0.45 × 0.46	0.19
						D ₁₁	0.76 × 0.86	0.13
						石	0.27 × 0.32	0.08

※石は深さではなく厚さ

計測部	面積内訳
全床面(調査部)	$(1^2 \times 1) + (0.2^2 \times 126) + (0.05^2 \times 442) + (0.05^2 \times 222) \frac{1}{2} = 7.4225$
ベッド(調査部)	$(0.2^2 \times 30) + (0.05^2 \times 182) + (0.05^2 \times 113) \frac{1}{2} = 1.7963$
中央 D ₁₁	$(0.2^2 \times 6) + (0.05^2 \times 83) + (0.05^2 \times 50) \frac{1}{2} = 0.51$

表28 1号掘立柱計測表

主軸方向	欠番	桁行	梁行	桁柱間	番号	短径 × 長径	深さ
南 北 N-7.0°-E		P ₂₁ -P ₂₃	P ₂₁ -P ₂₆	P ₂₁ -P ₂₂	P ₂₁	0.36 × 0.44	0.27
		3.81	2.92	2.10	P ₂₂	0.34 × 0.39	0.16
		P ₂₆ -P ₂₄	P ₂₂ -P ₂₅	P ₂₃ -P ₂₄	P ₂₃	0.32 × 0.36	0.17
		3.72	2.69	1.77	P ₂₄	0.20 × 0.28	0.16
平均		3.77			P ₂₅	0.34 × 0.37	0.10
			P ₂₃ -P ₂₄	P ₂₆ -P ₂₅	P ₂₆	0.31 × 0.35	0.33
			3.01	1.91	平均	0.31 × 0.37	0.17
		平均	2.87	P ₂₅ -P ₂₄	P ₁₇	0.34 × 0.38	0.14
				1.80			
			平均	1.90			

表29 2号掘立柱建物計測表

主軸方向		欠番	桁行	梁行	桁行柱間	梁行柱間	番号	短径 × 長径	深さ
東西		P ₃ ・P ₇	P ₁ -P ₃ (3.36)	P ₁ -P ₆ 3.36	P ₁ -P ₂ 1.49	P ₁ -P ₆ 1.68	P ₁	0.30 × 0.33	0.21
N-93.5°-W			P ₆ -P ₄ 3.38	P ₂ -P ₅ 3.28	P ₂ -P ₃ (1.88)	P ₆ -P ₆ 1.67	P ₂	0.20 × 0.22	0.12
備考			P ₆ -P ₇ (3.37)	P ₃ -P ₄ (3.38)	P ₆ -P ₆ 1.54	P ₃ -P ₇	P ₃		
P ₆ -P ₁₁ 1.10	P ₁₁ -P ₆ 0.58		平均	3.37	3.34	P ₆ -P ₄ 1.85	P ₄	0.27 × 0.29	0.26
P ₁₀ -P ₆ 0.95	P ₆ -P ₄ 0.64					P ₇ -P ₄ 1.69	P ₆	0.27 × 0.30	0.30
P ₇ -P ₉ (1.07)	0.61	平均			平均		P ₆	0.22 × 0.23	0.21
1.04							P ₇	0.26 × 0.29	0.13
P ₄ -P ₁₂ 0.96							平均	0.25 × 0.28	0.21
							P ₉	0.19 × 0.22	0.13
							P ₁₀	0.22 × 0.26	0.22
							P ₁₁	0.22 × 0.24	0.08
							平均	0.21 × 0.24	0.14
							P ₁₂	0.20 × 0.20	0.06

表30 3号掘立柱建物(東西軸)計測表

主軸方向		欠番	桁行	梁行	桁行柱間	梁行柱間	番号	短径 × 長径	深さ
東西		P ₃	P ₁ -P ₃ (5.88)	P ₁ -P ₆ 4.80	P ₁ -P ₂ 3.58	P ₁ -P ₆ 2.30	P ₁	0.36 × 0.38	0.19
N-87°-W			P ₉ -P ₇ 5.82	P ₂ -P ₅ 5.08	P ₂ -P ₃ 2.28	P ₉ -P ₆ 2.50	P ₂	0.38 × 0.39	0.11
柱間 A	柱間 B		P ₆ -P ₄ 5.96	P ₃ -P ₄ (4.94)	P ₆ -P ₅ 2.93	P ₃ -P ₇ 2.42	P ₃	0.26 × 0.30	0.20
P ₁₁ -P ₁₂ 1.38	P ₁ -P ₁₁ 0.74		平均	5.87	4.94	P ₆ -P ₄ 3.04	P ₄	0.22 × 0.25	0.18
P ₁₂ -P ₂ 1.50	P ₂ -P ₁₃ 0.66					P ₇ -P ₄ 2.53	P ₅	0.26 × 0.27	0.08
P ₆ -P ₁₅ 1.55	P ₆ -P ₁₆ 0.68					P ₉ -P ₆ 3.16	P ₆	0.28 × 0.39	0.08
P ₁₅ -P ₄ 1.49	0.69	平均	柱間 D			P ₆ -P ₇ 2.62	P ₇	0.29 × 0.32	0.14
	柱間 C		P ₂ -P ₁₄ 1.10			P ₈ -P ₅ 2.70	P ₈	0.22 × 0.51	0.06
P ₁ -P ₁₉ 1.38	P ₂ -P ₃ 2.28		平均	1.18	平均	2.94	2.47	平均	0.28 × 0.35
P ₁₈ -P ₆ 1.60	P ₁₆ -P ₅ 2.25			柱間 E				P ₁₀	0.20 × (0.22)
1.48	2.27	平均		P ₁₉ -P ₉ 0.92				P ₁₁	0.29 × 0.33
				P ₉ -P ₁₈ 0.91				P ₁₂	(0.22) × 0.28
			平均	平均	0.92			P ₁₃	0.23 × 0.25
								P ₁₄	0.19 × 0.20
								P ₁₅	0.24 × 0.30
								P ₁₆	0.24 × 0.25
								P ₁₇	0.19 × 0.20
								P ₁₈	0.17 × 0.20
								P ₁₉	0.27 × 0.27
								P ₂₀	0.22 × 0.26

表31 4号掘立柱建物（東西軸）計測表

主軸方向	欠番	桁行	梁行	桁行柱間	梁行柱間	番号	短径 × 長径	深さ
東西	P ₂₅ ・P ₂₈ ・P ₃₆	P ₂₁ -P ₂₃	P ₂₁ -P ₂₆	P ₂₁ -P ₂₂	P ₂₁ -P ₂₉	P ₂₁	0.23 × 0.24	0.08
N-84°-W	P ₃₆	4.24	4.18	2.04	2.18	P ₂₂	0.29 × 0.32	0.10
		P ₂₆ -P ₂₄	P ₂₃ -P ₂₄	P ₂₂ -P ₂₃	P ₂₉ -P ₂₆	P ₂₃	0.23 × 0.25	0.20
		4.12	4.19	2.18	2.06	P ₂₄	0.24 × 0.33	0.12
柱間 A	柱間 B	平均				P ₂₆	0.22 × 0.27	0.13
P ₃₁ -P ₂₁	P ₃₁ -P ₃₂					P ₂₇	0.25 × 0.28	0.19
0.66	3.31					P ₂₉	0.30 × 0.34	0.20
P ₃₂ -P ₂₃	P ₃₃ -P ₃₄					平均	0.25 × 0.29	0.15
0.70	3.28					P ₃₁	0.17 × 0.25	0.04
P ₃₃ -P ₂₃	P ₃₆ -P ₃₇	柱間 D	柱間 E	平均	2.11	P ₃₂	0.19 × 0.21	0.14
0.78	3.14	P ₄₀ -P ₂₁	P ₃₉ -P ₂₁			P ₃₃	0.20 × 0.25	0.08
P ₃₄ -P ₂₄	3.24	0.84	0.47			P ₃₄	0.24 × 0.34	0.12
0.50	柱間 C	P ₃₀ -P ₂₉	P ₄₁ -P ₂₃			P ₃₇	0.30 × 0.30	0.18
P ₃₇ -P ₂₆	P ₄₀ -P ₂₂	0.84	0.43	平均		P ₃₈	0.20 × 0.20	0.07
0.70	1.22	0.84	0.45			平均	0.22 × 0.26	0.11
P ₃₈ -P ₂₁	P ₂₁ -P ₃₀					P ₃₀	0.20 × 0.30	0.09
0.68	1.42					P ₃₉	0.19 × 0.19	0.06
0.67	1.32					P ₄₀	0.22 × 0.25	0.26
						P ₄₁	0.20 × 0.22	0.14

表32 5号掘立柱建物（東西軸）計測表

主軸方向	欠番	桁行	梁行	桁行柱間	番号	短径 × 長径	深さ
東西	P ₅₄ ・P ₅₉	P ₅₁ -P ₅₃	P ₅₁ -P ₅₆	P ₅₁ -P ₅₂	P ₅₁	0.28 × 0.32	0.11
N-82.5°-W	P ₆₀ ・P ₆₁	5.96	2.98	3.00	P ₅₂	0.25 × 0.27	0.23
		P ₅₆ -P ₅₄	P ₅₂ -P ₅₅	P ₅₂ -P ₅₃	P ₅₃	0.29 × 0.31	0.31
		(5.92)	3.16	2.96	P ₅₄		
柱間 A	柱間 A'	平均			P ₅₅	0.26 × 0.28	0.10
P ₆₁ -P ₆₃	P ₆₁ -P ₆₈				P ₅₆	0.25 × 0.31	0.07
4.35	4.22				平均	0.27 × 0.30	0.16
P ₆₂ -P ₆₄	P ₆₃ -P ₆₆				P ₅₇	0.29 × 0.32	0.17
4.18	4.15				P ₅₈	0.24 × 0.24	0.18
P ₆₈ -P ₆₆	P ₆₄ -P ₆₅	柱間 C	平均	2.97	平均	0.27 × 0.28	0.18
4.41	4.19	P ₆₁ -P ₇₀			P ₆₁	0.28 × 0.30	0.14
4.31	4.19	1.20	柱間 D	柱間 E	P ₆₂	0.18 × 0.19	0.14
柱間 B	柱間 B'	P ₆₁ -P ₆₉	P ₇₀ -P ₆₂	P ₇₀ -P ₆₃	P ₆₃	0.21 × 0.21	0.17
P ₆₁ -P ₆₂	P ₆₈ -P ₆₇	1.23	1.53	3.15	P ₆₄	0.30 × 0.33	0.29
2.73	2.37	P ₆₁ -P ₆₇	P ₆₂ -P ₆₃	P ₆₉ -P ₆₈	P ₆₅		
P ₆₃ -P ₆₄	P ₆₆ -P ₆₅	1.22	1.60	3.00	P ₆₆	0.24 × 0.26	0.06
2.57	2.50	平均			P ₆₇	0.26 × 0.26	0.08
2.65	2.44				P ₆₈	0.20 × 0.20	0.07
					P ₆₉	0.31 × 0.34	0.16
					P ₇₀	0.25 × 0.33	0.08

表33 6号掘立柱建物（東西軸）計測表

主軸方向	欠番	桁行	梁行	桁行柱間	梁行柱間	番号	短径 × 長径	深さ
東西 N-78.5°-E	P ₇₄ ・P ₇₆	P ₇₁ -P ₇₃	P ₇₁ -P ₇₆	P ₇₁ -P ₇₂	P ₇₁ -P ₇₆	P ₇₁	0.30 × 0.30	0.13
		6.04	3.18	2.96	1.57	P ₇₂	0.30 × 0.30	0.13
		P ₇₆ -P ₇₄	P ₇₂ -P ₇₆	P ₇₂ -P ₇₃	P ₇₆ -P ₇₆	P ₇₃	0.40 × 0.44	0.31
		5.99	3.29	3.07	1.61	P ₇₄		
		P ₇₆ -P ₇₇	P ₇₃ -P ₇₄	P ₇₆ -P ₇₆	P ₇₃ -P ₇₇	P ₇₆	0.23 × 0.27	0.07
		(6.12)	(3.06)	2.80	1.53	P ₇₆	0.24 × 0.32	0.34
平均		6.05	3.18	P ₇₆ -P ₇₄	P ₇₇ -P ₇₄	平均	0.29 × 0.33	0.20
				(3.34)	1.57	P ₇₇	0.31 × 0.44	0.26
			平均	3.04	1.57	P ₇₆	0.35 × 0.35	0.12
						P ₇₆	0.30 × 0.31	0.38
					柱間 A	平均	0.32 × 0.37	0.25
					P ₇₆ -P ₇₆	P ₆₀	(0.40) × 0.40	0.14
					1.56	P ₆₁	0.32 × 0.34	0.21
					P ₇₆ -P ₇₄	P ₆₁	0.26 × 0.28	0.09
					1.82			

表34 7号掘立柱建物（東西軸）計測表

主軸方向	欠番	桁行	梁行	桁行柱間	柱間 A	番号	短径 × 長径	深さ	
東西 N-73°-W		P ₆₁ -P ₆₃	P ₆₁ -P ₆₆	P ₆₁ -P ₆₂	P ₆₂ -P ₆₆	P ₆₁	0.36 × 0.42	0.19	
		5.94	2.84	2.60	1.75	P ₆₂	0.22 × 0.30	0.13	
		P ₆₆ -P ₆₄	P ₆₂ -P ₆₆	P ₆₂ -P ₆₃	P ₆₆ -P ₆₃	P ₆₃	0.42 × 0.51	0.14	
		6.13	3.03	3.35	1.60	P ₆₄	0.36 × 0.52	0.21	
柱間 B		平均	6.04	P ₆₃ -P ₆₄	P ₆₆ -P ₆₆	P ₆₆	0.24 × 0.31	0.25	
P ₆₁ -P ₆₆				2.91	2.71	1.77	P ₆₆	0.18 × 0.18	0.04
1.18				平均	2.93		平均	0.30 × 0.37	0.16
P ₆₇ -P ₆₄							P ₆₇	0.34 × 0.39	0.10
1.15							P ₆₆	0.32 × 0.32	0.12
1.17	平均			平均	3.02		平均	0.28 × 0.30	0.14
							P ₆₆	0.17 × 0.19	0.20

表35 遺物一覧表

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
第 6 図 001	(砂) 細砂~0.5mmが多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共 上半部 54 明るい茶(2.5YR 5.0/8.0) 下半部 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 口径13.8 胴部最大径15.8 器高17.5 (焼成) 不良	口縁 $\frac{3}{4}$ 胴部 $\frac{3}{4}$ 底部 $\frac{1}{4}$	カマド西	030153 (No52)
002	(砂) 細砂・0.5mmが多い。(雲) 多い。(赤・角) 若干。 器内 86 灰味黄茶(8.5YR 4.5/2.0) 器外 83 にお橙(8.0YR 5.5/6.0) 口径14.7 胴部最大径17.6 器高19.7 (焼成) 良	略完形	カマド西	029152 (No18-1)
003	(砂) 精胎に(赤) やや多い。 器内外共に 59 明るい茶(3.0YR 5.5/4.0) (焼成) 普通	$\frac{1}{2}$?	012512 (No?)
004	(砂) 細砂(金) かなり多い。 器内から器外肩部 54 明るい茶(3.0YR 5.5/4.0) 胴以下 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 口径18.5 胴部最大径23.5 器高25.3 (焼成) 良	完形	南東隅	020520 (No55)
005	(砂) 0.5mm大に(金) 多い。2mm大・(角) 若干。(赤) 含まず。 器内外上半部 83 にお橙(8.0YR 5.5/6.0) 器内下半部 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器外下半部 76 暗い黄茶(7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	略完形	南東隅	027543 (No56)
第 7 図 006	(砂) 精胎に細砂(金) 多い。(角) 若干。 器内外共に 59 明るい茶(3.0YR 5.5/4.0) 口径18.5 胴部最大径26.0 器高29.6 (焼成) 良	略完形	中央P14近く (床面)	021521 (No50-1)
007	(砂) 精胎に0.5mm大(金) かなり多い。(赤) やや多い。 器内外に 55 明るい茶(2.5YR 5.0/9.0) 口径20.0 器高19.1 (焼成) 良	完形	カマド西	024524 (No53-1)
第 8 図 008	(砂) 精胎に細砂多い。(金) 多い。(赤) 少し。 器内外共に 54 明るい茶(2.5YR 5.0/8.0) 口径17.0 (焼成) 良	杯下半 $\frac{1}{2}$	カマド西	008508 (No54)
009	(砂) 精胎に細砂多い。4mm大若干。(金) 多い。 器内外共に 83 にお橙(8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	$\frac{1}{4}$ 弱	中央	004504 (No50-2)
010	(砂) 細砂多い。(金・角) 多い。 器内外共に 59 明るい茶(3.0YR 5.5/4.0) (焼成) 良	$\frac{1}{2}$ 弱	中央 中央 北東隅	009509 (No11・ 12・34)
011	(砂) 精胎に(赤) 若干。(金) 多い。 器内 63 明るい茶(3.5YR 5.5/7.0) 器外 59 明るい茶(3.0YR 5.5/4.0) (焼成) 良	$\frac{1}{4}$ 強	中央	006506 (No41)
012	(砂) 精胎に細砂少し。(金) 多い。(赤) 少し。 器内外共に 63 明るい茶(3.5YR 5.5/7.0) (焼成) 良	$\frac{1}{4}$	南西隅	005505 (No1)
013	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内 86 灰味黄茶(8.5YR 4.5/2.0) 器外 83 にお橙(8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	杯部完 脚部 $\frac{1}{2}$	カマド西	028151 (No27・29)
014	(砂) 精胎に細砂(金) 多い。(赤・角) かなり含む。1~0.5mm大少し。 器内外共に 83 にお橙(8.0YR 5.5/6.0) 口径18.0 脚裾径14.0 器高14.0 (焼成) 普通	略完形	カマド西	022522 (No17-1)

挿 番 号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
015	(砂) 精胎に細砂(金・赤) かなり多い(角) 若干。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 口径21.6 (焼成) やや悪い	$\left(\begin{array}{l} \frac{3}{8} \text{強} \\ \frac{1}{8} \text{弱} \end{array} \right)$	カマド西	026542 (No16-1) (No17-3)
016	(砂) 精胎に(金) 多い。(赤・角) 若干。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 口径24.2 (焼成) 良	$\frac{1}{4}$	P11-12西	010510 (No 2)
017	(砂) 精胎に細砂多い。(金) 多い。(赤) 若干。 器内 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	$\frac{1}{2}$	P11-12西	007507 (No 6)
第 9 図 018	(砂) 精胎に(金・赤) 少し。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	$\frac{1}{4}$ 弱	中央	003503 (No40 1)
019	(砂) 精胎に(細・金) かなり多い。1.5~3mm大若干。 器内外共に 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) (焼成) 普通	$\left(\begin{array}{l} \frac{1}{2} \\ \frac{1}{4} \\ \frac{1}{4} \end{array} \right)$	$\left(\begin{array}{l} \text{中央} \\ \text{カマド南} \\ \text{カマド南} \end{array} \right)$	023523 (No40-2) (No43) (No44)
020	(砂) 精胎に(金・赤) 若干。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 良	$\left(\begin{array}{l} \frac{1}{4} \\ \frac{3}{8} \end{array} \right)$	$\left(\begin{array}{l} \text{カマド西} \\ \text{カマド西} \end{array} \right)$	001501 (No18-2) (No33)
021	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器内76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	$\frac{1}{4}$ 弱	カマド南	002502 (No13)
022	(砂) 細砂多い。(角) 多い。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	$\frac{1}{2}$	P11-12西	013513 (No 5)
023	(砂) 精胎に(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	略完形	カマド西	014514 (No 28)
024	(砂) 微砂多い。0.5~1.5mm大やや多い。(金) やや多い。(赤) わずか。(角) 若干。 器内 80 暗い黄茶 (7.5YR 3.0/1.0) 器外 83 にお橙(8.0YR 5.5/6.0) 煤は器外口唇部から胴部に付着。口径16.7 胴部最大径21.5 (焼成) 良	本文中	本文中	031154 (本文中)
025	(砂) 精胎に細砂多い。(金・角) 多い。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) (焼成) 良	$\frac{1}{8}$	中央 (+1cm)	011511 (No 7)
026	(砂) 精胎に(金) 多量。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 非常に良くかたい。	$\frac{1}{4}$	カマド西	015515 (No 26)
027	(砂) 精胎に(金) 多い。 器内外共に 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) (焼成) 普通	$\frac{1}{8}$	カマド西	016516 (No 20)
028	(砂) 精胎に(金) 若干。(赤) わずか含む。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 普通	$\left(\begin{array}{l} \frac{1}{8} \\ \frac{1}{4} \\ \frac{1}{8} \end{array} \right)$	$\left(\begin{array}{l} \text{P13-14東} \\ \text{P13-14東} \\ \text{中央} \end{array} \right)$	025541 (No40-48) (No41-2)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
029	(砂) 精胎に (金) 多い。(角) 少し。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 普通	$\left(\begin{array}{l} \frac{1}{4} \\ \frac{1}{4} \\ \frac{1}{2} \end{array} \right.$	$\left(\begin{array}{l} \text{カマド西} \\ \text{カマド東} \\ \text{カマド東} \end{array} \right.$	018518 (No35・36) (No17-2)
030	(砂) 精胎に (赤) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	本文中	本文中	017517 (本文中)
第 10 図 031	(砂) 精胎に微・細砂多い。1~3mm大若干。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	$\left(\begin{array}{l} \text{口縁} \frac{1}{4} \\ \text{上半} \frac{1}{2} \text{弱} \\ \text{底部片} \end{array} \right.$	カマド内	032402 (No57)
032	(砂) 精胎に微・細砂多い。1~3mm大若干。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径19.8 (焼成) 良		-15cm	033403
033	(砂) 精胎に細砂多い。(金) 多い。(赤) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径17.0 器高10.1 (焼成) 良	$\frac{1}{2}$ 弱	カマド西	019519 (No31)
第 13 図 034	(砂) 細砂中に3mm大若干。(雲) かなり含む。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 普通	$\frac{1}{8}$	埋土	010534
035	(砂) 精胎に細砂 (金) 多い。(赤) 少し。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器肉 120 灰味オリーブ (6.5YR 5.0/1.0) (焼成) 良	$\frac{1}{8}$	埋土	008532
036	(砂) 細砂多い。(角) 多い。 器内外共に 78 にお橙 (7.5YR 7.0/5.5) 器肉 74 茶 (5.0YR 4.5/5.5) (焼成) 良好	$\frac{1}{8}$	埋土	005529
037	(砂) 細砂 (金) かなり含む。 器内 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	破片	埋土	009533
038	(砂) 精胎に (金) 多い。(赤・角) 若干。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) (焼成) 普通	$\frac{1}{4}$ 弱	埋土	007531
039	(砂) 精胎に微砂やや多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 黒斑は器外杯上半にあり、これに対峙して器外に赤褐色斑有り。	杯部完	A D21北 埋土	013196
040	(砂) 精胎に (金) やや多い。(赤) 含まず。(角) 少し。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 良	$\frac{3}{8}$	A M12肩	012536
041	(砂) 精胎に0.5mm大多い。(金・赤) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	$\frac{1}{4}$ 弱	A P 12	003527
042	(砂) 精胎に微砂 (金) 多い。(赤) かなり含む。(角) 少し。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 普通	完形	A P 11西 (床面)	002526

6

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
043	(砂) 精胎に細砂(金)かなり含む。(角)も少し含む。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 良	完形	A D21北 埋土	001525
044	(砂) 精胎に1mmが多い。(金・赤・角)若干。 器内外共に 64 暗い橙 (3.5YR 5.0/9.5) (焼成) 普通	¾		004528
045	(砂) 精胎に(金)・0.5~1mmが多い。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 80 暗い黄茶 (7.5YR 3.0/1.0) (焼成) 良	¼	A P12	011535
第 14 図 046	(砂) 細砂(金)若干。(赤)ほとんど含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 普通	½	-10cm	002538
047	(砂) 細砂(金・赤)若干。 器内外共に 77 にお橙 (7.5YR 7.0/7.0) (焼成) やや悪い	¼	-10cm	001537
048	(砂) 精胎に(金・角)やや多い。 器内外共に 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) (焼成) 良	¼		003539
第 17 図 049	(砂) 精胎に(赤)多い。(金・角)やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径11.0 胴部最大径16.0 (焼成) 普通	(口~胴¼ 口~胴¼ 胴 ¼)	カマド西 カマド西 カマド西	005548 (Na11・15) (Na16) 5
050	(砂) 細砂・1.5mmが多い。(金)著しく多い。(赤・角)含まず。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 口径15.3 胴部最大径19.4 (焼成) 良	(口縁¼ 胴 ¾)	A D21 (東肩)	004547 (Na7)
051	(砂) 細砂・0.5mmが多い。1mm大若干。(金)多い。(赤)含まず。(角)若干。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 口径19.1 胴部最大径22.8 (焼成) 良	本文中	本文中	027570 (本文中)
052	(砂) 0.5mmが多い。(金)若干。(赤)含まず。(角)若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	½		025568
053	(砂) 精胎に細砂0.5mmが多い。(金・角)若干。(赤)含まず。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 90 明るい茶灰(10.0YR 6.0/2.0) 口径18.8 (焼成) 良	½	カマド内	017560
054	(砂) 精胎に細砂若干。(金)微片若干。(赤・角)含まず。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 普通	½		024567
055	(砂) 精胎に(金・赤・角)若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径14.1 (焼成) 普通	¼強	A D22 (カマド西)	014557 (Na14)
056	(砂) 精胎に細砂若干。(金)多い。(赤)含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 普通	½	最上層	019562

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
057	(砂) 精胎に微砂(金)多い。(赤・角)ほとんど含まず。 器内外共に 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) 口径14.0 器高4.4 (焼成) 良	3/4	A D21	006549 (No 4)
058	(砂) 精胎に細砂ほとんど含まず。(赤) やや多い。(角) ほとんど含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 口径14.3 器高4.4 (焼成) 焼成による体部のゆがみが若干認められる。	完形	A D21	008551 (No 3-1)
059	(砂) 精胎に微砂(金)多い。1mm大・(赤・角) やや多い。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径15.2 器高4.5 (焼成) 良	3/4	A D21	007550 (No 1)
第 18 図 060	(砂) 精胎に微砂やや多い。(金・赤・角) やや多い。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径17.0 脚裾径8.2 器高15.5。 (焼成) 良		A D22 (カマド西)	002545 (No 13)
061	(砂) 精胎に微砂・0.5mm大多い。(金) 多い。(赤) 若干。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径18.3 脚裾径8.8 器高14.7 器外杯口縁部から脚裾部にかけて1方のみ縦方向に黒斑有り。(焼成) 良好	本文中		001544 (本文中)
062	(砂) 精胎に微砂若干。(金・赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 55 明るい茶 (2.5YR 5.0/9.0) (焼成) 普通	1/8	最上層	020563
063	(砂) 精胎に細砂(金・角) 若干。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	(上半1/8 下半1/8)		018561
064	(砂) 精胎に微砂多い。(金・赤・角) 多い。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径21.7 (焼成) 普通	7/8	カマド内	010553
065	(砂) 精胎に細砂多い。1mm大・(金) やや多い。(赤・角) 多い。 器内 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 器外 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) 口径23.5 (焼成) 普通	(1/8 3/4)	(カマド東 カマド内)	009552 (No10 カマド内)
066	(砂) 精胎に1~2mm大多い。(金・赤) 若干。(角) 多い。 器内 34 赤味橙 (9.0R 5.5/11.0) 器外 77 にぶ橙 (7.5YR 7.0/7.0) (焼成) やや悪い	3/4		016559
067	(砂) 精胎に(赤・角) やや多い。(金) 少し。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良		脚柱1/8 脚裾1/8強	012555
068	(砂) 精胎に(赤) やや多い。細・(赤・角) 若干。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	1/4	カマド東	015558 (No 9)
第 19 図 069	(砂) 細砂やや多い。3mm大若干。(金) やや多い。 器内外共に 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) 口径16.7 器高13.2 (焼成) 良		(口縁5/8 底部1/8)	A D21 (東肩) 003546 (No 5)
070	(砂) 精胎に2~6mm大若干。(金・赤・角) やや多い。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 良	1/4	カマド東	013556 (No 8)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
071	(砂) 細砂多量。2～4mm大若干。(金・赤) 多量。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径24.2 (焼成) 良	1/4 口縁 把手他	カマド西 カマド内	029789 (Na11-2) カマド内
072	(砂) 精胎に (金・角) 若干。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 普通	1/2強	A D21	021564 (Na 2)
073	(砂) 1～3mmが多い。(金・赤・角) 少し。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径11.5 底径4.4 器高7.2 (焼成) 良	1/4弱	A D21	028788 (Na 4)
074	(砂) 精胎に細砂若干。0.5～1mm大やや多い。(金) 微片若干。(赤) 若干。 器内外共 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器肉 121 灰味黄茶 (6.5Y 4.5/1.0) (焼成) 良	1/2強	埋土	026569
075	(砂) 0.5～1mmが多い。(金・赤・角) 多い。 器内外共に 31 灰味赤茶 (8.5R 4.5/4.5) (焼成) やや悪い	本文中	本文中	011554 (本文中)
第 22 図 076	(砂) 精胎に細砂若干。(金・赤) 多い。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	1/8		008578
077	(砂) 精胎に細砂少し。(金・赤・角) 少し。 器内外共に 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) 口径17.9 (焼成) 良	杯部完	南壁東半 (+10cm)	004574 (Na 2)
078	(砂) 精胎に細砂ほとんど含まず。(金) 微片若干。(赤) ほとんど含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	1/4強		007577
079	(砂) 精胎に細砂少し。(金・赤) やや多い。(角) 少し。 器内外共に 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) 口径18.1 (焼成) 良	杯部完	カマド内	003573 (Na 9)
080	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 微片多い。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 内面黒色物付着。 口径18.5 (焼成) 良	杯部完	南壁東半 (床面)	024785 (Na 1)
081	(砂) 精胎に細砂多量。(金・赤) 多量。(角) 若干。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) 口径19.2 (焼成) 普通	杯部完	カマド内	002572 (Na10)
082	(砂) 精胎に細砂若干。(金) 微片若干。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	屈折部 %		006576
083	(砂) 精胎に微砂多量。(金) 微片多量。(赤) 多量。(角) 若干。 杯部 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0)。脚部 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 杯下半部のみ2次火熱により煤付着。 脚裾径11.7 (焼成) 普通	本文中	本文中	001571 (本文中)
084	(砂) 精胎に微砂多量。(金・赤) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) 脚裾径12.1 (焼成) 普通	脚完	D11東 (+7cm)	005575 (Na 5)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
085	(砂) 精胎に細砂若干。(金・赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) やや悪い	¼強		022592
086	(砂) 精胎に細砂若干。(金) 微片若干。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) やや悪い	¼強	(最上層)	014584
087	(砂) 精胎に微砂多い。(金・赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共 91 暗い黄茶 (10.0YR 3.5/3.0) 器肉 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	½	(最上層)	026364
第 23 図 088	(砂) 精胎に微砂多量。(金) 微片多量。(赤) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径9.5 胴部最大径9.6 器高7.2 (焼成) 良	完形	カマド南 (床面)	025786 (Na 7)
089	(砂) 精胎に細砂多い。(金) やや多い。(赤) ほとんど含まず。(角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径12.9 器高5.5 (焼成) 良	½強		011581
090	(砂) 精胎に微砂若干。(金・赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	⅙強		015585
091	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤・角) やや多い。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 口径15.0 器高4.3 (焼成) 普通	¼強	(最上層)	009579
092	(砂) 精胎に細砂若干。(金) 微片若干。(赤・角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	⅙強		012582
093	(砂) 細砂多い。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径10.0 (焼成) 良	¼弱	(最上層)	010580
094	(砂) 細砂・1~1.5mmが多い。(金・赤) 若干。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 普通	⅙弱		016586
095	(砂) 微砂多い。(雲) 多い。(赤・角) 含まず。 器内 81 茶灰 (7.5YR 2.5/0.5) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	⅙		013583
096	(砂) 細砂・2mmが多い。(金・赤) 若干。(角) 含まず。 器内 55 明るい茶 (2.5YR 5.0/9.0) 器外 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) 口径24.0 (焼成) やや悪い	⅙弱	カマド内	017587
097	(砂) 精胎に細砂多い。1mmが多い。(金) 多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅙		021591
098	(砂) 精胎に(金) 含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	本文中	本文中	019589 (本文中)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
098	(砂) 精胎に細砂・0.5mm大多量。(金) 多量。(赤) 1mm大多量。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径18.4 (焼成) 良	本文中	本文中	018588 (本文中)
099	(砂) 精胎に細砂あまり含まず。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) (焼成) 良	1/4		020590
第 24 図 100	(砂) 精胎に0.5~1mm大やや多い。(金) 微片やや多い。(赤・角) 若干。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 口径23.6 器高21.8 (焼成) 良	1/2強	カマド東・西 (床面灰上)	023593 (Na 8)
第 27 図 101	(砂) 精胎に微砂(金) 若干。(赤) やや多い。(角) ほとんど含まず。 器内 40 赤味橙 (10.0R 4.0/12.0) 器外 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 口径11.0 胴部最大径14.2 (焼成) やや悪い	1/4強		002595
102	(砂) 精胎に細砂(金) 多い。0.5mm大若干。(赤・角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/2強		010603
103	(砂) 細砂1mm大多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4弱		009602
104	(砂) 細砂多い。0.5~1mm大やや多い。(金・角) やや多い。(赤) ほとんど含ま ず。器内 91 暗い黄茶 (10.0YR 3.5/3.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 口径19.5 胴部最大径23.0 器高22.7 (焼成) 良	3/8	カマド西 (床面)	006599
105	(砂) 精胎に(金・赤) 多い。細・(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径25.8 (焼成) 良好	口縁一部欠	カマド内	001594
106	(砂) 精胎に細砂(金) 多い。1~2mm大の(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 器外 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) 脚裾径約16.0 (焼成) 普通	本文中	本文中	003596
107	(砂) 精胎に(金) 多い。(赤) 若干・細ほとんど含まず。(角) 含まず。 器内 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 脚裾径14.0 (焼成) 良	本文中	本文中	004597
108	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 少し。(赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径14.0 (焼成) 普通	1/4		012612
109	(砂) 微砂多い。0.5mm大やや多い。(金) やや多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 36 茶 (9.5R 4.5/7.0) 器外胴中位煤付着。口径16.4 体部最大径15.6 器高12.8 (焼成) 良	完形	カマド北 (床面)	016200
110	(砂) 精胎に細砂若干。(金・赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 良	口縁一部欠	カマド 東袖内	015828
111	(砂) 精胎に(金・赤) 若干。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 普通	底1/4	北壁	011604

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
112	(砂) 精胎に微砂やや多い。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) 若干。 器内 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器外 86 灰味黄茶(8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	口縁一部欠		014827 (No 1)
113	(砂) 精胎に細砂少し。(金) やや多い。(赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	略完形		013826 (No 4)
第 28 図 114	(砂) 精胎に0.5mm大やや多い。(金) やや多い。(角) 若干。(赤) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅔	カマド内	007600
115	(砂) 精胎に細砂若干。(金) やや多い。(赤) 含まず。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅓	カマド周辺	008601
116	(砂) 精胎に細砂多い。(金・赤) やや多い。(角) 若干。 器内 81 茶灰 (7.5YR 2.5/0.5) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器肉 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外煤付着。(焼成) 良	完形	カマド西	005598
第 29 図 117	(砂) 細砂・1.5mm大多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径11.4 胴部最大径約18.4 (焼成) 良	⅓		008365
118	(砂) 細砂0.5mm大多い。(金) 多い。(赤) ほとんど含まず。(角) 若干。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 口径21.0 胴部最大径約22.4 (焼成) 良	⅓		005609
119	(砂) 細砂多い。(金) やや多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径16.0 (焼成) 良	⅓		006610
120	(砂) 細砂・1mm大多い。(金・赤) 少し。(角) やや多い。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	⅓	張床内	001605
121	(砂) 精胎に細砂・1mm大若干。(金・赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	⅓		003607
122	(砂) 0.5~1.5mm大多い。(金・赤) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅓		004608
123	(砂) 精胎に0.5mm大多い。(金・赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅓		002606
第 33 図 124	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多量。(赤) やや多い。 器内 80 暗い黄茶 (7.5YR 3.0/1.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径3.7 (焼成) 良	⅓弱	南東隅 (P 42)	131390
125	(砂) 精胎に(金・赤) 若干。 器内 78 にお黄橙 (7.5YR 7.0/5.5) 器外 86 灰味黄茶(8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	⅓弱	(最上層)	134393

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
126	(砂) 精胎に微砂若干。(金) 若干。(赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 胴部最大径13.7 (焼成) 良	½弱		052664
127	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 微片多い。(赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 口径10.5 胴部最大径12.9 器高13.5 (焼成) 普通	口½欠のみ	中央(+11.5cm)	049661 (Na72)
128	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) 多量。(角) 含まず。 器内 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径11.5 (焼成) 良	¼弱	西溝 (M12内)	127386
129	(砂) 微・細砂多い。(金・角) 多い。(赤) 少し。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 口径14.1 (焼成) 良	½強		047659
130	(砂) 細砂・0.5~1.5mm大多い。(金・角) 多い。(赤) 含まず。 器内 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器外は口縁部まで煤付着。口径14.4 胴部最大径19.2 (焼成) 良	本文中	本文中	004616 (本文中)
131	(砂) 細砂・0.5mm大多い。(金・角) 多い。(赤) 含まず。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 口径16.5 胴部最大径20.4 (焼成) 良	略完 (下位欠)	西壁 (床面)	003615 (Na70)
132	(砂) 精胎に微砂・0.5mm大 (金) 多い。(赤) 含まず。(角) 少し。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 口径22.0 (焼成) 良	⅓		046658
133	(砂) 細砂・0.5~1mm大多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	¼		045657
第 34 図 134	(砂) 細砂多い。(金) 多い。(赤) ほとんど含まず。(角) 少し。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	⅓	(最上層)	048660
135	(砂) 細砂・0.5mm大多い。(金) 若干。(赤・角) ほとんど含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径18.6 (焼成) 良	¼強	(下層)	043655
136	(砂) 細砂・0.5~1mm大多い。(金・角) 多い。(赤) ほとんど含まず。 器内 95 明るい茶灰 (1.0Y 6.5/2.0) 器外 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) (焼成) 良	⅓	D21西 (+5.8cm)	036644 (別No.3)
137	(砂) 精胎に微砂・0.5mm大多い。(金) 多い。(赤・角) やや多い。 器内 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器外 39 にお赤味橙 (10.0R 4.5/ 4.5) 口径12.6 胴部最大径13.1 (焼成) 普通	½弱	D21	040652 (Na65)
138	(砂) 微砂・0.5mm大多い。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) 少し。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	⅓強	(下層)	044656
139	(砂) 細砂・0.5mm大多い。(金) 若干。(赤) やや多い。(角) 若干。 器内 91 暗い黄茶 (10.0YR 3.5/3.0) 器外 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 口径16.8 胴部最大径23.8 (焼成) 良	⅓	西壁 (床面)	051663 (Na71)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
140	(砂) 細砂多い。0.5~2mm大 (金) かなり含む。(赤・角) 少し。 器内 57 茶灰 (2.5YR 3.5/0.5) 器外 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) 口径15.5 胴部最大径26.5 (焼成) 普通	{ 口縁1/4 胴 3/4	カマド東	002614 (No54)
141	(砂) 微・細砂多い。(金・赤・角) 若干。 器内 57 茶灰 (2.5YR 3.5/0.5) 器外 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 黒斑は器内のみ全面。口径11.6 体部最大径10.6 器高8.9 (焼成) 良	完形	西壁(+24.7cm)	050662 (平No1)
第 35 図 142	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 微片多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 不良	本文中	(中央(床面) 中央(+2.4)	013678 (平No13) (平No1) 4
143	(砂) 精胎に微砂多い。(金・赤) かなり多い。(角) 含まず。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 17 黄味赤 (5.0R 4.0/8.0) (焼成) 悪い	3/4	中央 (+5.7cm)	012677 (平No12)
144	(砂) 精胎に細砂 (金) かなり含む。(赤・角) 少し。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8強	(最上層)	063695
145	(砂) 精胎に細砂少し。(金) 若干。(赤) かなり含む。(角) 含まず。 器内外共 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器肉 91 暗い黄茶 (10.0YR 3.5/ 3.0) 口径18.8 脚裾径13.8 器高14.4 (焼成) 良	本文中	本文中	016681 (本文中)
146	(砂) 精胎に微砂・0.5mmが多い。(金・角) ほとんど含まず。(赤) 多い。 器内外共に 32 にお赤味橙 (8.5R 4.0/6.0) 器肉 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 口径24.9 脚裾径17.0 器高21.1 (焼成) やや不良	略完形	中央 (+10.3cm)	001613 (平No2)
147	(砂) 精胎に細砂少し。(金) 少し。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 31 灰味赤茶 (8.5R 4.5/4.5) (焼成) やや悪い	(脚柱1/4 杯底3/4)	埋土	057689
148	(砂) 精胎に細砂少し。(金) ほとんど含まず。(赤・角) 含まず。 器内外共に 1 うす赤 (1.0R 5.5/6.0) 器肉 80 暗い黄茶 (7.5YR 3.0/1.0) (焼成) 悪い	(1/2 1/2	(埋土 最上層)	059691
149	(砂) 精胎に細砂少し。(金・赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	1/2弱	(下層)	017682
150	(砂) 細砂やや多い。(金・赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 15 黄味赤 (5.0R 4.5/8.0) (焼成) やや悪い	3/8	カマド東 (M24)	064696
151	(砂) 細砂少し。(金) 少し。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4弱	(最上層)	062694
152	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 少し。(赤) 多い。(角) 少し。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) (焼成) 普通	1/4	(床面)	018683
第 36 図 153	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 微片多い。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	杯部完	D21西 (+10.2cm)	010675 (別No7)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
154	(砂) 精胎に微砂多い。(金) やや多い。(赤) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8強	D21	132391
155	(砂) 精胎に微砂若干。(金) 多い。(赤) 若干。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	1/8強	南東隅 (P42)	129388
156	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 赤褐色斑は器外1/4周に1個有り。 (焼成) 良	杯部完	カマド東	106201 (No51)
157	(砂) 精胎に細砂ほとんど含まず。(金) 微片多い。(赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径15.6 脚裾径13.0 器高14.0 (焼成) 良	本文中	本文中	014679 (本文中)
158	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多量。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器外 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) (焼成) 良	1/8弱	中央 (+1.2cm)	107366 (平No16)
159	(砂) 精胎に細砂多い。(金) 微片多量。(赤) やや多い。(角) 若干。 器内 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	裾一部欠	(下層)	005669
160	(砂) 精胎に微砂若干。(金) 微片多い。(赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	脚柱1/8 裾 1/8	中央 (+4.2)	053673 (平No4)
161	(砂) 精胎に細砂ほとんど含まず。(金) 微片多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.0) (焼成) 良		(床面)	015680
162	(砂) 精胎に細砂ほとんど含まず。(金・赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) 脚裾径13.3 (焼成) 良	本文中	本文中	060692
163	(砂) 細砂多い。(金) 多い。(赤) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 良	5/8	(下層)	061693
164	(砂) 精胎に(金) 多い。(赤) 若干。(角) わずか含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 脚裾径15.4 (焼成) 良	1/8弱	南東隅 (P42)	126385
165	(砂) 精胎に細多い。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 少し。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8弱	南東隅 (P42)	066698
166	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) わずか含む。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	5/8弱	D21	133392
第 37 図 167	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 微片多い。(赤・角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	杯上半完 杯下半1/2	D21	011676 (No62)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
168	(砂) 精胎に細砂少し。(金) 少し。(赤・角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	5/8	D21	056688
169	(砂) 精胎に細砂ほとんど含まず。(金・赤・角) 少し。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8強 1/8弱	(埋 土 最上層)	058690
170	(砂) 精胎に細砂かなり含む。(金・赤) かなり含む。(角) 少し。 器内 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) 器外 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 普通	本文中	本文中	075707
171	(砂) 細砂・0.5mm大多量。(金) やや多い。(赤) 多量。(角) やや多い。 杯下半 32 にお赤味橙 (8.5Y R 4.0/6.0) 杯上半 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) 口径16.9 (焼成) 普通	1/2	D21 (上層)	102782
172	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) わずか含む。 器内 90 明るい茶灰 (10.0Y R 6.0/2.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5 器外 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.0) (焼成) 良	1/4強	(下層)	136395
173	(砂) 細砂ほとんど含まず。(金) 多い。(赤) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 普通	1/8	カマド東 (M24)	065697
174	(砂) 精胎に微砂多い。(金) やや多い。(赤) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4弱	埋土	128387
175	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 微片多い。(赤・角) やや多い。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5Y R 5.5/7.0) (焼成) 良	1/4強 1/4弱	(最上層)	007619
176	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内 78 にお黄橙 (7.5Y R 7.0/5.5) 器外 82 にお黄橙(8.0Y R 6.0/2.5) (焼成) 良	1/4強	カマド西 (焼土内)	125384
177	(砂) 精胎に細砂・0.5mm大多い。(金) 多い。(赤・角) やや多い。 器内外共に 59 明るい茶 (3.0Y R 5.5/4.0) 口径7.3 器高7.1 (焼成) 良	完形	西壁 (+17.1cm)	019631 (平No 3)
第 38 図 178	(砂) 精胎に微砂多い。(金・赤) 多い。(角) 若干。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5Y R 5.5/8.0) (焼成) 普通	3/8	(下層)	041653
179	(砂) 精胎に微砂含む。(金) 若干。(赤) 含む。(角) 含まず。 器内外共に 73 黄茶 (5.0Y R 5.0/5.0) 器内外共に大きい黒斑有り。口径11.9 器高5.0 (焼成) 良	略完形	(下層)	018630
180	(砂) 精胎に微砂多量。(金) 微片多量。(赤) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) 口径14.3 器高5.2 (焼成) 普通	完形	東西隅壁 (+16.9cm)	101781
181	(砂) 細砂・0.5~2mm大多量。(金・赤) 若干。(角) 多量。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径12.9 器高5.2 (焼成) 良	完形	(床面)	010622

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
182	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤・角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	¼	南東隅 (P42)	130389
183	(砂) 微砂多量。1mm大かなり含む。(金) 多量。(赤) わずか。(角) かなり含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径12.9 器高6.4 (焼成) 良	完形	D21	103783 (No75)
184	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 少し。(赤・角) 含まず。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 口径13.4 器高4.6 (焼成) 良	¼	(下層)	042654
185	(砂) 精胎に細砂かなり含む。(金) かなり含む。(赤・角) 少し。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径13.6 器高13.6 (焼成) 良	¼強	南東隅 (P42)	070702
186	(砂) 精胎に微砂多い。(金・角) やや多い。(赤) 多い。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 口径13.2 器高4.6 (焼成) 良	¾	(床面)	008620
187	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) 若干。 器内外共に 78 にお黄橙 (7.5YR 7.0/5.5) (焼成) 良	¼弱	(埋土)	123382
188	(砂) 精胎に細砂多い。(金・赤) ほとんど含まず。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 口径16.0 器高5.8 (焼成) やや悪い	¼弱	D21	068700 (No76)
189	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 微片多い。(赤) 多い。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 体部外面から底部に大きな黒斑有り。 (焼成) 良	¼弱	D21	012624 (No76)
190	(砂) 精胎に細砂多い。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) かなり多い。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 口径4.0 器高3.1 (焼成) 良	{ 口縁¼ 体部¼	東溝 (M21)	020632
191	(砂) 精胎に細砂・1mm大やや多い。(赤) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	下半¼	カマド東	029641 (No58)
192	(砂) 精胎に細砂多い。(金・赤) 少し。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 良	完形	西壁 (床面)	035648 (No73)
193	(砂) 精胎に微砂若干。(金・角) 若干。(赤) 含まず。 器内外共に 78 にお黄橙 (7.5YR 7.0/5.0) 口径3.2 器高2.3 (焼成) 良	{ 口一部残 体部¼	(床面)	027639
194	(砂) 精胎に細多い。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) 若干。 器内外共に 75 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	下半¼	南東隅 (P42)	022634
195	(砂) 精胎に細砂多い。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) 若干。 器内外共に 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) 器内口縁から底部にかけて黒斑有り。 (焼成) 良	口縁一部欠	北東隅 (M21・24)	024636

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
196	(砂) 精胎に細砂(金・赤)ほとんど含まず。 器内外共に 83 にお橙(8.0YR 5.5/6.0) 器外底部に黒斑有り。口径5.6 器高3.0 (焼成) 良	完形	(下層)	023635
197	(砂) 精胎に細砂多い。(金・赤)多い。(角)含まず。 器内外共に 54 明るい茶(2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 良	完形	中央 (+11cm)	038650 (平№15)
198	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 微片少し。(赤) 少し。 器内外共に 78 にお黄橙(7.5YR 7.0/5.5) (焼成) 普通	一部欠	D21西 (+18)	037649
199	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 微片少し。 器内外共に 78 にお黄橙(7.5YR 7.0/5.5) 口径3.4 脚裾径3.1 器高4.0 (焼成) 良	口縁一部欠	(埋土)	039651
第 39 図 200	(砂) 精胎に微砂多い。(金・赤)多い。(角)含まず。 器内外共に 54 明るい茶(2.5YR 5.0/8.0) 器外体部上位に1ヶ所赤褐色斑有り。 (焼成) 普通	⅝	D21西	017629 (別№2)
201	(砂) 精胎に細砂若干。(金・角)若干。(赤)多い。 器内外共に 83 にお橙(8.0YR 5.5/6.0) 口径12.8 器高5.0 (焼成) 良好	⅞	(床面)	011623
202	(砂) 精胎に微砂多い。(金・赤)多い。(角)若干。 器内外共に 54 明るい茶(2.5YR 5.0/8.0) 口縁部内外に1ヶ所黒斑有り。 (焼成) 良	¾	南東隅 (床面)	014626 (№74)
203	(砂) 精胎に微砂若干。(金)若干。(赤・角)ほとんど含まず。 器内外共に 101 黄茶(2.5Y 6.5/4.0) 口縁部内面に1ヶ所黒斑有り。 (焼成) 良	¾	D21	013625 (№64)
204	(砂) 精胎に微砂多い。(金)多い。(赤)若干。(角)ほとんど含まず。 器内外共に 83 にお橙(8.0YR 5.5/6.0) 器外上半部に黒斑1個有り。 (焼成) 良	(口縁⅓ 体部⅓)	D21	016628 (№67)
205	(砂) 精胎に0.5mm大やや多い。(金) 微片やや多い。(赤) わずか。 器内外共に 77 にお橙(7.5YR 7.0/7.0) (角) 含まず。 (焼成) 良	⅝	カマド東 (M24)	069701
206	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 82 にお黄橙(8.0YR 6.0/2.5) (焼成) 良	⅓弱	(埋土)	124383
207	(砂) 精胎に細砂少し。(金) やや多い。(赤) 少し。(角) 若干。 器内外共に 86 灰味黄茶(8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	⅓強	南西隅 (埋土)	104784
208	(砂) 精胎に細砂ほとんど含まず。(金・赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 101 黄茶(2.5YR 6.5/4.0) (焼成) 普通	⅓強	(埋土)	076708
209	(砂) 微砂・0.5~1.5mm大多い。(赤・角) かなり多い。 器内 83 にお橙(8.0YR 5.5/6.0) 器外 54 明るい茶(2.5YR 5.0/8.0) 体部外面に黒斑有り。 (焼成) 良	⅞	(床面)	009621

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
210	(砂) 精胎に微砂・0.5mm大若干。(金・角) 若干。(赤) 多量。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 黒斑は口縁部外面に1ヶ所有り。 口径9.4 器高6.2 (焼成)	⅔	カマド東	015627 (No59)
211	(砂) 精胎に細砂少し。(金・角) 少し。(赤) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 口径2.8 器高1.8 (焼成) 良	完形	D21西	032645
212	(砂) 精胎。微砂 (金) ほとんど含まず。(赤・角) 含まず。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) (焼成) 良	{ 口縁⅓ 体部⅓	D21	028640 (No66)
213	(砂) 細砂多い。(金・角) 若干。(赤) 含まず。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 口径3.1 器高2.3 (焼成) 良	略完形	カマド内 (最下層)	033646 (No68)
214	(砂) 精胎に微砂若干。(金) 若干。 器内外共に 95 明るい茶灰 (1.0Y 6.5/2.0) 器外胴下位に1部黒斑有り。(焼成) 良	口縁一部欠	(埋土)	031643
215	(砂) 精胎に微砂若干。(金・角) 若干。(赤) 含まず。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) (焼成) 良	完形	D21西 (床面)	021633 (平No17)
216	(砂) 精胎に細砂少し。(金・赤) 少し。(角) 含まず。 口径3.6・器高2.8。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 成形時の口縁部のヒビ割れが著しい。黒斑無し。(焼成) 良	完形	カマド東	030642 (No69)
217	(砂) 精胎に微砂若干。(金・赤・角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 黒斑無し。ヒビ割れのまま。(焼成) 良	完形	カマド東 (+0.7)	025637 (平No18)
218	(砂) 精胎に(赤) 多い。(金・角) 若干。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	完形	カマド東 (+3.7)	034647 (平No19)
219	(砂) 細砂・0.5mmが多い。(金・角) 若干。(赤) 含まず。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 口径3.8 胴部最大径4.2 器高3.4 (焼成) 良	完形	カマド東	026638 (No57)
第 40 図 220	(砂) 微砂・0.5~1mmが多い。(金・角) 多い。(赤) 含まず。 器内外共に 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) 口径26.3 底径14.8 器高29.4 (焼成) 良	{ 口縁⅓ 下半⅓強	{ D21東 D21東	006618 (No55-1) (No52)
221	(砂) 細砂多い。(金) 多い。(赤) 少し。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅓	(最上層)	094726
222	(砂) 細砂少し。(金) 多量。(赤) 少し。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅓	(埋土)	099731
223	(砂) 細砂少し。(金) 少し。(赤) 含まず。(角) やや多い。 器内外共に 82 にお橙 (8.0YR 6.0/2.0) (焼成) 良	⅓	(下層)	093725

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
224	(砂) 細砂多量。(金) 多量。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) 黒斑は把手下半部に有り。 (焼成) 良	1/4	(最上層)	097729
第 41 図 225	(砂) 細砂多量。(金) 0.5~1mm大多量。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 90 明るい茶灰 (10.0Y R 6.0/2.0) 口径20.0 体部現存最大径22.4 (焼成) 良	本文中	本文中	081713
226	(砂) 細砂やや多い。(金) 多量。(赤) 少し。(角) 含まず。 器内 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径27.0 (焼成) 良	本文中	本文中	084716
227	(砂) 細砂・0.5~2mm大多い。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) 特に多い。 器内外共に 59 明るい茶 (3.0Y R 5.5/4.0) 口径23.0 底径10.1 器高17.7 (焼成) 良	略完	D21	005617 (No63)
228	(砂) 細砂少し。(金) 少し。(赤) ほとんど含まず。(角) 少し。 器内外共に 83 にお橙 (8.5Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	孔片	(埋土)	087719
229	(砂) 細砂かなり含む。(金) 若干。(赤) 含まず。(角) 含む。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5Y R 5.5/7.0) 黒斑は器外に有り。 (焼成) 良	孔片	(下層)	091723
230	(砂) 細砂多い。(金) 微片やや多い。(赤) わずか含む。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.5Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	孔片	(埋土)	086718
231	(砂) 細砂あまり含まず。(金) 微片かなり含む。(赤) 若干。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.0) (焼成) 良	孔片	(埋土)	090722
第 42 図 232	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 微片多い。(赤・角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径23.0 器高21.7 (焼成) 良	本文中	本文中	079711 (本文中)
233	(砂) 細砂多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) かなり含む。 色調は本文に記載 黒斑は器外頸部から底部にかけて大きく有り。 (焼成) 普通	本文中	カマド内	100732 (No60)
234	(砂) 精胎に微砂若干。(金) わずか含む。(赤・角) 含まず。 器内 80 暗い黄茶 (7.5Y R 3.0/1.0) 器外 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) (焼成) 良	1/2	(下層)	135394
235	(砂) 精胎に細砂かなり含む。(金) かなり含む。(赤) 少し。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	1/3	D21西	072704 (別No4)
第 43 図 236	(砂) 精胎に微砂・0.5~2mm大多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) わずか含む。 器内 95 明るい茶灰 (1.0Y 6.5/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 普通	3/8	(床面)	001665 (No7)
237	(砂) 細砂多い。(金) 多い。(赤・角) かなり多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径6.2 (焼成) 良	口縁一部欠	(埋土)	077709

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
238	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多量。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 胴部最大径8.0 (焼成) 良	¼強	(埋土)	109368
239	(砂) 精胎に微砂多い。(金・赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	¼弱	(+ 5 cm)	110369 (Na 3)
240	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	½強	(埋土)	119378
241	(砂) 精胎に微砂・0.5mm大多し。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅔	(+0.7cm)	113372 (Na6-2)
242	(砂) 精胎に細砂ほとんど含まず。(金) ほとんど含まず。(赤) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径12.4 (焼成) やや悪い	¼強	(埋土)	071703
243	(砂) 精胎に微砂若干。(金) 若干。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内 77 にお橙 (7.5YR 7.0/7.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) やや悪い	⅔	(B P 21)	002666 (Na14)
244	(砂) 微・細砂多い。0.5mm大やや多い。(金) 多量。(赤) やや多い。(角) わずか 器内 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径17.5 (焼成) 良	½強	(+0.7cm)	114373 (Na6-3)
245	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) 多量。(角) わずか含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅔強	(+1.0cm)	116375
246	(砂) 精胎に細砂ほとんど含まず。(金) 微片若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	脚部完	(+0.3cm)	009674 (Na 5)
247	(砂) 精胎に細砂多い。(金) 微片多い。(赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	⅔ ¼ ⅓	{ (+0.6cm) { (+2.6cm) (7A往下層)	008672 (Na 4) (Na10)
248	(砂) 精胎に細砂多い。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) (焼成) やや悪い	⅔	(埋土)	019684
第 44 図 249	(砂) 精胎に細砂若干。(金) 若干。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	½強	(埋土)	055687
250	(砂) 精胎に微・細砂多い。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) わずか含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	¼	本文中	117376
251	(砂) 精胎に細砂ほとんど含まず。(金) ほとんど含まず。(赤) 少し。(角) 含まず。 器内外共に 77 にお橙 (7.5YR 7.0/7.0) (焼成) やや悪い	破片	(埋土)	020685

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
252	(砂) 精胎に (金) やや多い。(赤) 多量。(角) 含まず。 器内 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外 74 茶 (5.0Y R 4.5/4.5) (焼成) 普通	1/2強	西側 (焼土内)	108367
253	(砂) 精胎に 0.5mm大多量。(金) かなり含む。(赤) 多量。(角) 若干。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) (焼成) 普通	本文中	本文中	078710 (本文中)
254	(砂) 精胎に微砂少し。(金) やや多い。(赤・角) 含まず。 器内 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) (焼成) 良	1/4強	(B P11内)	115374
255	(砂) 精胎に細砂・0.5mm大少し。(金) 微片ほとんど含まず。(赤) かなり含む。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5Y R 5.5/7.0) (焼成) 普通	1/4	(埋土)	054686
256	(砂) 精胎に微砂多い。(金) やや多い。(赤) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 普通	1/8	(+0.8cm)	111370 (No16-4)
257	(砂) 精胎に (金・赤) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4弱	(埋土)	105818
258	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8弱	(埋土)	122381
259	(砂) 精胎に微砂やや多い。(金・赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 普通	1/8強	(床面)	112371 (No13)
260	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 微片多い。(赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) (焼成) 普通	(脚下半1/2 脚上半1/2)	((+0.7cm) (+0.8cm)	007671 (No 6-1 No16-1)
261	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤) かなり多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8弱	(埋土)	120379
262	(砂) 精胎に細砂多い。(金) 多い。(赤) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	脚完形	(+1.0cm)	006670 (No 8)
263	(砂) 精胎に微砂多い。(金・赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 普通	1/8強	(埋土)	121380
264	(砂) 細砂・0.5mm大多い。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 73 黄茶 (5.0Y R 5.0/5.0) (焼成) 良	(脚柱1/2 裾 1/2)		004668 (No11)
第 45 図 265	(砂) 精胎に細砂わずか含む。(金・赤) わずか含む。(角) 含まず。 器内外共に 77 にお橙 (7.5Y R 7.0/7.0) 口径11.4 器高3.6 (焼成) 普通	口縁 一部欠	(+1.0cm)	003667 (No12)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置	実 測 号 番 号
266	(砂) 精胎に微砂少し。(金・赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径12.0 (焼成) 良	1/8強	(埋土)	118377
267	(砂) 精胎に細砂ほとんど含まず。(金・赤) かなり含む。(角) 含まず。 器内外共に 77 にお橙 (7.5YR 7.0/7.0) (焼成) 普通	3/8	(埋土)	067699
268	(砂) 精胎に細砂多い。(金) 多量。(赤) 少し。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	本文中	本文中	082714
269	(砂) 精胎に細砂多量。(金) 多量。(赤) ほとんど含まず。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	本文中	本文中	083715
270	(砂) 細砂・0.5mmが多い。(金) やや多い。(赤) わずか含む。(角) 含まず。 器内 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) やや悪い	口縁片	(埋土)	085717
271	(砂) 細砂やや多い。(金) やや多い。(赤) 少し。(角) 含まず。 器内 80 暗い黄茶 (7.5YR 3.0/1.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	孔片	(埋土)	088720
272	(砂) 0.5mmが多い。(金) 若干。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) (焼成) やや悪い	孔片	(埋土)	089721
第 46 図 273	(砂) 細砂・0.5mmが多い。(金・角) 多い。(赤) 6mm大も含め多い。	本文中	本文中	080712 (本文中)
274	(砂) 細砂多い。(金) 多い。(赤) ほとんど含まず。(角) 若干 器内 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	本文中	本文中	092724
275	(砂) 細砂やや多い。(金) やや多い。(赤) 少し。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4	7A住 (張床下)	098730
276	(砂) 細砂あまり含まず。(金) 多量。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4	(埋土)	096728
277	(砂) 細砂多い。2mm大若干。(金) 多い。(赤・角) かなり含む。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	1/4	(埋土)	095727
第 49 図 278	(砂) 細砂・2~4mm大かなり。(金) 多い。(雲・赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器外胴部煤付着。口径約17.7 胴部最大径20.4 器高21.5 (焼成) 普通	3/8弱		046778
279	(砂) 細砂・0.5mmが多い。(金) やや多い。(赤) 含まず。(角) 若干。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器肉 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/ 2.5) 口径17.6 胴部最大径約25.8 器高約29.3 (焼成) 良	{ 上半1/4 下半1/4	M14北 (+7.1cm)	006738 (Na15-2)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
280	(砂) 細砂多い。2~4mm大含む。(金・赤) かなり。(角) やや多い。 口径15.9 胴部最大径19.1 器高22.4。 肩~胴にかけて大きな黒斑2ヶ所に対峙。器外胴部煤付着。(焼成) 普通	完形	D21	045777 (No 8)
281	(砂) 精胎に微砂多い。(金・角) やや多い。(赤) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径11.2 胴部最大径11.2 器外胴部は剥離面も含めて煤の付着。器高12.3 (焼成) 普通	口縁 $\frac{1}{2}$ 強 胴 $\frac{1}{4}$ 底欠	カマド内	021753
282	(砂) 細砂・0.5mm大多量。(金・角) やや多い。(赤) わずか。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器肉 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径7.2 胴部最大径8.6 器高約9.7 (焼成) 良	$\frac{3}{8}$	カマド内	022754
283	(砂) 精胎に極細砂多い。(金) 極細多い。(角) 極細を少し含む。 器内外共に 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) 器外 $\frac{1}{2}$ 周体部に大きな黒斑。(焼成) 良	口唇部欠	カマド南 (+8.6cm)	002734 (No10)
第 50 図 284	(砂) 精胎に0.5~2mm大やや多い。(金・赤・角) 含まない。 器内 78 にお黄橙 (7.5YR 7.0/5.5) 器外 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) (焼成) 普通	$\frac{1}{2}$ 強		043775
285	(砂) 細砂・1mm大やや多い。(金) 含む。(赤・角) 含まず。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) (焼成) 良	$\frac{1}{4}$ 弱		029761
286	(砂) 0.5mm以下の細砂多量。1~3mm大やや多い。(金) やや多い。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 一部 34 赤味橙 (9.0R 5.5/11.0) 口径17.6 胴部最大径26.4 (焼成) やや悪い	$\frac{1}{4}$	M14北 (+7.1cm)	005737 (No15-1)
287	(砂) 細砂・0.5~1mm大多い。2~3mm大かなり含む。(金・角) 少し。(赤) かなり。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 91 暗い黄茶 (10.0YR 3.5/3.0) 器外胴中位~下位にかけて煤付着。口径19.2 (焼成) 普通	口縁 $\frac{3}{4}$ 胴 $\frac{1}{2}$ 弱	M14北 (+7.1cm)	047779 (No15-3)
288	(砂) 精胎に細砂少し。(金) やや多い。(赤) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径23.0 (焼成) 良	$\frac{3}{8}$		013745
289	(砂) 精胎に0.5mm大やや多い。(金) 多量。(赤・角) わずか。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) (焼成) 良	$\frac{1}{4}$	P 33	017749
290	(砂) 精胎に細砂ほとんど含まない。(金・角) やや多い。(赤) 多量。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) 口径21.8 (焼成) 普通	$\frac{3}{4}$ $\frac{1}{4}$	$\left\{ \begin{array}{l} D21 \\ P21 \end{array} \right.$	019751 (No 7)
291	(砂) 精胎に細砂わずか。(金) 若干。(赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	$\frac{1}{2}$ 弱		030762
292	(砂) 精胎に細砂多量。(金) 若干。(赤) 多量。(角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	$\frac{1}{4}$		020752
293	(砂) 精胎に極細砂多い。(金) 多い。(赤・角) 少し含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 脚裾 $\frac{1}{2}$ 周内外共に黒斑。(焼成) 良	脚 $\frac{1}{4}$ 脚柱 $\frac{1}{4}$ 裾 $\frac{1}{2}$ 強	カマド南(+2.9cm) カマド南(+8.5cm)	004736 (No11-1) (No12)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
第 51 図 294	(砂) 精胎に細砂少し。(金) やや多い。(赤) わずか。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	½弱		014746
295	(砂) 精胎に細砂ほとんど含まず。(金・赤) 含まず。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) (焼成) 不良	{ 上半¼ 下半¼強		016748
296	(砂) 精胎にほとんど含まない。(金) 微片多量。(角) 含む。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) 口径17.8 脚裾径13.5 器高14.5 (焼成) 良	完形	D21東 (+2.0cm)	035767 (No 4)
297	(砂) 精胎に細砂わずか。(金・角) 若干。(赤) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 悪くて器表の剥落が著しい。	{ 杯部¼ 脚柱¼ 脚裾片	M14北	018750
298	(砂) 細砂多い。(金・赤) 多量。(角) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 普通	¾	P 44	044776
299	(砂) 精胎に細砂やや多い。(金・赤) やや多い。(角) 少し。 器内外共に 73 黄茶 (5.0Y R 5.0/5.0) 口径22.1 脚裾径15.5 器高18.0 (焼成) 普通	(本文中)		015747
300	(砂) 細砂多い。1~1.5mm大かなり含む。(金・角) かなり含む。(赤) 多い。 器内外共に 73 黄茶 (5.0Y R 5.0/5.0) 口径17.9 脚裾径13.5 器高13.9 (焼成) 普通	完形	D21東 (+1.5cm)	034766 (No 1)
301	(砂) 精胎に2~4mm大かなり多い。(赤) ほとんど含まず。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) * (焼成) やや悪い	口縁・脚 裾一部欠	M14北 (+ 5 cm)	052819 (No17)
第 52 図 302	(砂) 0.5~1mm大かなり多い。(金・赤・角) 少し。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) 口径10.5 器高約5.0 (焼成) 普通	略完形	カマド南 (+ 4 cm)	036768 (No13)
303	(砂) 精胎に微砂多い。(金・赤) 多い。(角) わずか含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径12.8 器高約4.5 (焼成) 良	一部欠		053362
304	(砂) 精胎に細砂やや多い。(金) 含む。(赤・角) 少し。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径14.0 器高約4.3 (焼成) 良	破片		031763
305	(砂) 精胎に細砂少し。(金・赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) 器外底部は大きな黒斑。 (焼成) 普通	½弱		012744
306	(砂) 細砂少し。(金) やや多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	破片		032764
307	(砂) 細砂・0.5mm大少し。(金) やや多い。(赤) 含まず。(角) わずか。 器内 76 暗い黄茶 (7.0Y R 4.0/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 体部外面に黒斑。 (焼成) 良	¼	(最下層)	041773

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
308	(砂) 細砂・0.5mmが多い。(金) 細多い。(赤) 含まず。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外口縁部に黒斑。口径約7.5 胴部最大径6.6 器高約6.4 (焼成) 良	口縁一部欠	M14北 (Na15上)	003735 (Na16)
309	(砂) 精胎に細砂少し。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 少し。 器内 73 黄茶 (5.0Y R 5.0/5.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0Y R 4.0/2.0) 口径17.0 器高6.4 (焼成) 良	本文中	本文中	011743 (本文中)
310	(砂) 微砂多い。(金・赤) 中量。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 外面胴部に黒斑。口径18.0 器高約9.9 (焼成) 良	体部 $\frac{1}{2}$ 口縁 $\frac{3}{8}$	カマド内 (カマド東)	023755 (Na23)
311	(砂) 0.5~1.5mm大多量。(金・赤) 若干。(角) やや多い。 器内 76 暗い黄茶 (7.0Y R 4.0/2.0) 器外 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) (焼成) 普通	本文中	本文中	039771
312	(砂) 細砂少し。1~5mmが多い。(金) やや多い。(赤) 含まず。(角) 少し。 器内 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外は肩部以下煤付着。(焼成) 良	本文中	本文中	042774
第 53 図 313	(砂) 細砂多いが1mm大もかなり含む。2~3mm大少し。(金・角) かなり。(赤) 少 少し。器内外共に 83 にお橙 (8.5Y R 5.5/6.0) 赤褐色斑が胴中位と同じ側の口縁部の2ヶ所。(焼成) 良	完形	M14北 (+ 8 cm)	009741 (Na18)
314	(砂) 精胎に細砂少し。(金・赤) 少し。(角) わずか。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5Y R 5.5/7.0) (焼成) 普通	口縁 $\frac{1}{2}$ 胴部 $\frac{7}{8}$	カマド南 (焼土 残滓上)	007739
315	本文中に記載。 (焼成) 良	完形	M14北 (床面)	010742 (Na 3)
第 54 図 316	(砂) 精胎に細砂若干。(金) 若干。(赤・角) ほとんど含まず。 器内外共に 91 暗い黄茶 (10.0Y R 3.5/3.0) 器内 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) 口縁部から胴下半にかけて大きな黒斑。(焼成) 良	把手1個欠	カマド西 (カマド 残滓上)	048780 (Na 2)
第 55 図 317	(砂) 細砂少し。(金) 多量。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0Y R 4.0/2.0) (焼成) 良	$\frac{1}{8}$		040772
318	(砂) 細砂・0.5mmが多い。(金) やや多い。(赤) 含まず。(角) 含む。口径17.4 口縁部 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) 体部 76 暗い黄茶 (7.0Y R 4.0/2.0) 口縁部内面から器外底部にかけて大きな黒斑1ヶ。器高9.9 (焼成) 良	完形	D21東 (+ 1 cm)	001733 (Na 5)
319	(砂) 精胎に細砂・0.5mmが多い。(金) やや多い。(赤・角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.5Y R 5.5/6.0) 口径16.1・器高12.0。 器外口縁部~胴下位まで $\frac{1}{4}$ 周の大きな黒斑。(焼成) 良	口縁 $\frac{1}{2}$ 体部 $\frac{1}{4}$	M14北 (+ 6 cm)	008740 (Na21)
320	(砂) 細砂・1mm大やや多い。2mm大若干。(金・角) 多い。(赤) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径12.2 胴部最大径18.4 (焼成) 良	$\frac{3}{8}$		054363
321	(砂) 細砂かなり含む。(金) かなり含む。(赤) ほとんど含まず。(角) 若干。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.0) (焼成) 良	$\frac{1}{2}$ 強	M12南 (+ 7 cm)	049787 (Na 9)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
322	(砂) 細砂多量。(金・赤) 少し。(角) かなり。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	¼	カマド内	033765
323	(砂) 微砂多い。(金) 微片多い。(赤) 含まず。(角) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	½弱	M14北 (+ 6 cm)	024756 (Na20)
324	(砂) 細砂ほとんど含まない。(金・角) 含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	⅝	カマド西 (焼土残滓上)	027759 (Na14-2)
325	(砂) 細砂ほとんど含まない。(金・角) 含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	完形	カマド西 (焼土残滓上)	028760 (Na14-1)
326	(砂) 細砂ほとんど含まず。(金・角) 含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	⅔強	カマド西 (焼土残滓上)	026758 (Na14-3)
327	(砂) 細砂あまり含まず。(金・角) 含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	½	カマド西 (焼土残滓上)	025757 (Na14-4)
第 56 図 328	(砂) 2～3mm大多い。(金) やや多い。(赤) わずか。(角) わずか。 器内 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) 器外 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径22.1 胴部最大径39.6 器高50.1 (焼成) 良	一部欠	M14北 (+1.0cm)	(Na19)
第 58 図 329	(砂) 細砂と共に2～5mm大多い。(金) 若干。(赤・角) やや多い。 器内 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) 器外 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) 胴下半器外に大きな黒斑。 口径7.4 胴部最大径15.6 底径5.9 器高12.9 (焼成) 良	胴⅔弱		002800
330	(砂) 細砂1mm大多量。(金) 多量。(赤・角) 若干。 器内 76 暗い黄茶 (7.0Y R 4.0/2.0) 器外 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) 頸部最小径8.5 胴部最大径20.2 (焼成) 良	⅔	D22	007805
331	(砂) 細砂多い。4mm大若干。(金) 多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径16.0 頸部径約15.2 (焼成) 良	⅓	一括	017815 (Na 6-2)
332	(砂) 細砂多量。(金) 多量。(赤) 含まず。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	¼	一括	016814 (Na 6-1)
333	(砂) 0.5～1mm大を多く含む。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 73 黄茶 (5.0Y R 5.0/5.0) 胴部最大径28.2 底径8.2 (焼成) 良	(胴⅝ 底⅓)	一括	022822 (Na 2)
334	(砂) 精胎にほとんど含まない。(金・赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	⅔	一括	005803
335	(砂) 微砂・細砂多い。1～3mm大かなり含む。(金) 多量。(角) 含まず。 器内 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0Y R 4.0/2.0) (焼成) 普通	(胴下半⅓ 底 ⅓)	一括	026930 (Na 8)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
第 59 図 336	(砂) 細砂・1.5~2mmが多い。(金) やや多い。(赤) 若干。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外底部~胴下位に黒斑。 口径20.0 胴部最大径38.1 器高25.6 (焼成) 普通	本文中	本文中	027931 (本文中)
337	(砂) 細砂多い。0.5mm大やや多い。(金) 多い。(赤・角) やや多い。 器内 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	⅝		019817
338	(砂) 0.5mm~細砂多い。1.5mm大若干。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) わずか。 器内 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	⅜	一括	012810 (No.9)
339	(砂) 細砂少し。(金・赤) 少し。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外口縁部以下に煤付着。(焼成) 良	¼	一括	006804
340	(砂) 精胎に細砂・1mm大やや多い。(金・角) 若干。(赤) 多量。 器内 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) 器外 31 灰味赤茶 (8.5YR 4.5/4.5) (焼成) 普通	{ 上半¼弱 下半¼	一括	020820
341	(砂) 細砂多い。(金) 若干。(赤・角) やや多い。 器内 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器外は口縁部以下煤付着。(焼成) 良	½	一括	021821 (No.12)
342	(砂) 細砂~0.5mm以下多い。(金) 多い。(赤) 少し。(角) 若干。 器内 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器外 31 灰味赤茶 (8.5YR 4.5/4.5) (焼成) 良	⅝	一括	018816 (No.9-2)
第 60 図 343	(砂) 細砂多い。(金・角) 多い。(赤) 含まず。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器外口縁部煤付着。(焼成) 良	本文中	本文中	032936 本文中
344	(砂) 1~3mm大多い。(金) やや多い。(赤) 少し。(角) 含まず。 器内 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 器外 32 にお赤味橙 (8.5R 4.0/6.0) (焼成) やや悪い	½弱	一括	023823 (No.11)
345	(砂) 0.5mm大多い。(金) 多い。(赤) わずか。(黒・角) 若干。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器外胴中に2ヶの黒斑対峙。(焼成) 普通	⅜	{ 胴上部 胴中部 口縁部	一括 028932 (No.5・6) (No.14)
346	(砂) 2~3mm大多量。(金) 多い。(赤・角) 含む。 器内 15 黄味赤 (5.0YR 4.5/8.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	½	一括	025825
347	(砂) 細砂・1.5~2mm大多い。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外胴上半部煤付着。(焼成) 普通	{ 口縁⅝ 胴 ⅝ 底 ⅜	一括	029933 (No.5)
348	(砂) 細砂多い。1~2mm大若干。(金) 若干。(赤・角) 多い。 器内外共に 82 にお橙 (8.0YR 6.0/2.5) 器外肩~胴下位に長い黒斑1個遺存。(焼成) 良	{ 底 ⅜ 胴上半¼ 胴下半¼	一括	031935 (No.4・10) (No.12)
349	(砂) 1~2mm大多量。(金) 多量。(赤・角) 含まず。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) (焼成) 良	略完	一括	030934

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
350	(砂) 細砂・1.5mm大多量。(金) 多量。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器外 82 にお橙 (8.0YR 6.0/2.5) 肩部～胴下半と胴中位～胴下半に対峙して大きな黒斑。 (焼成) 良	(胴片 口縁 $\frac{1}{2}$ 強 胴 $\frac{1}{2}$)	一括	033937 (No5・6)
第 61 図 351	(砂) 0.5mm大多量。1～2mm大かなり含む。(金) 少し。(赤・角) かなり含む 器内外共に 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) 脚裾径18.8 (焼成) 良	$\frac{1}{4}$	一括	008806 (No14)
352	(砂) 細砂多量。(金) 多い。(赤) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外の胴上半部と下半部の大きな黒斑が対峙する。 (焼成) 良	($\frac{3}{4}$ 胴破片)	一括	001799 (No 7) (No12)
353	(砂) 精胎に0.5mm大がやや多い。(金) 少し。(赤・角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径21.8 体部最大径18.1 (焼成) 良	$\frac{1}{4}$ 弱	一括	010808
354	(砂) 細砂・1mm大多い。(金・赤・角) やや多い。 器内外共に 74 茶 (5.0YR 4.5/5.5) (焼成) 良	$\frac{1}{4}$	一括	011809 (No3-1)
355	(砂) 精胎に0.5mm大含む。(黒) 含む。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 80 にお橙 (7.5YR 3.0/1.0) (焼成) 良	$\frac{1}{2}$ 弱	一括	009807 (No12-2)
356	(砂) 細砂・1～2mm大多い。(金) 多い。(赤・角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	$\frac{3}{8}$		014812
357	(砂) 細砂多い。(金・角) やや多い。(赤) 若干。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) (焼成) 良	$\frac{3}{8}$		015813
358	(砂) 細砂～1.5mm大多量。3～4mm大やや多い。(金) 多い。(赤) 多量。(角) 含まず。器内外共に 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) (焼成) 良	$\frac{1}{4}$		013811
359	(砂) 細砂・1.5mm大多い。(金・角) かなり含む。(赤) 若干。 器内 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器外 17 黄味赤 (5.0R 4.0/8.0) (焼成) 普通	$\frac{1}{4}$		024824
360	(砂) 精胎に細砂・2mm大少し。(金・赤・角) やや多い。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 口径10.6 脚裾径14.5 器高13.5 (焼成) やや悪い	$\frac{1}{2}$ 弱	一括	003801 (No1-2)
361	(砂) 細砂多量。2～4mm大やや多い。(金) 少し。(赤・角) 多量。 器内 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	$\frac{3}{4}$	一括	004802 (No1-1)
第 64 図 362	(砂) 精胎に細砂少し。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径9.8・胴部最大径12.8・器高13.8。 (焼成) 良	完形	カマド西	051879 (No53)
363	(砂) 精胎に微砂多量。(金・赤) 多量。(角) わずか。 口径10.4 器高14.1 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 胴部最大径12.8 黒斑は底部～胴部。器外に大きな赤斑。 (焼成) 良	完形	P 54西	053881 (No27)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
364	(砂) 細砂・0.5mmが多い。(金) 多い。(赤) 少し。(角) わずか。 器内外共に 73 黄茶 (5.5YR 5.5/5.5) 口径11.2 胴部最大径13.6 器高14.0 (焼成) 良	完形	カマド西	050878 (Na52)
365	(砂) 精胎に細砂・2～3mm大若干。(金) 多い。(赤) 若干。(角) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径20.3 胴部最大径25.1 器高26.0 (焼成) 良	7/8	カマド西	060888 (Na37)
366	胎土については本文に記載。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	3/8		097925
367	(砂) 細砂・1mmが多い。(金・赤・角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径18.4 胴部最大径約24.8 (焼成) やや悪い	1/4	カマド内	064892 (Na65)
368	(砂) 細砂多い。(金) やや多い。(赤) 若干。(角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径23.0 (焼成) やや悪い	1/4弱		096924
第 65 図 369	(砂) 細砂・0.5～1mmが多い。(金) やや多い。(赤) わずか。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器肉 31 灰味赤茶 (8.5R 4.5/4.5) 口径14.7 胴部最大径16.6 器高13.0 (焼成) 普通	略完形 (口縁%欠)	P 55東	058886 (Na17)
370	(砂) 細砂・0.5～2mmが多い。(金・赤・角) やや多い。 器内 81 茶灰 (7.5YR 2.5/0.5) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径12.0 胴部最大径12.8 器高12.9 (焼成) 良	完形	カマド東	049877 (Na 3)
371	(砂) 微砂多量。細若干。(金) 多量。(赤・角) 若干。 器内外共に 36 茶 (9.5R 4.5/7.0) 口径10.0 胴部最大径9.5 器高10.1 (焼成) 良	完形	西壁寄り (M21床)	052880 (Na51)
372	(砂) 3～4mmが多い。(角) やや多い。(雲) 多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径15.9 胴部最大径19.5 口縁器外～底部まで全面煤付着。器高20.9 (焼成) 良	完形	P 55東	055883 (Na 9)
373	(砂) 細砂・0.5mmが多い。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) 多量。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器肉 78 にお黄橙 (7.5YR 7.0/5.5) (焼成) 普通	完形	P 54西	109945 (Na25)
374	(砂) 細砂・1mmが多い。(金) 多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 62 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 口径15.4 (焼成) 良	1/8		112315
第 66 図 375	(砂) 細砂少し。(金・赤) わずか。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	3/8		044872
376	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) 若干。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	完形	P 55東	043871 (Na11)
377	(砂) 細砂多量。(金) 多量。(赤) 含まず。(角) 若干。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	完形	P 54北	040868 (Na24)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
378	(砂) 精胎に微砂少し。(金) やや多い。(赤) わずか。(角) 多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	略完形 (体部¼欠)	西壁 (M21)	042870 (No36)
379	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) 多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	¼強	カマド内	041869
380	(砂) 細砂多い。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) 多い。 器内外共に 90 明るい茶灰 (10.0Y R 6.0/2.0) (焼成) 良	略完形 (口縁一部欠)	P 55東	039867 (No 8)
381	(砂) 精胎に微砂わずか。2~5mm大多い。(金) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径約11.2 胴部最大径15.5 脚裾径12.8 器高約20.3 (焼成) 良	{口縁欠 脚裾½欠	カマド内	054882 (No63)
382	(砂) 細砂多い。0.5mm大もやや多い。(金) 多い。(赤) ほとんど含まず。(角) 若干。器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径9.8 胴部最大径11.6 脚裾径約9.2 器高約14.8 (焼成) 良	脚欠	カマド西	108944 (No54)
383	(砂) 2~4mm大多い。(金) 多量。(赤) やや多い。(角) 若干。(雲) 多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 普通	完形	西壁 (M21)	067895 (No34)
384	(砂) 精胎に微砂・1~5mm大多い。(金・赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径17.8 胴部最大径26.6 (焼成) 良	{口肩¼ 胴¼	{カマド内 カマド内	101929 (No61) (No64)
第 67 図 385	(砂) 細砂少し。(金) 多量。(赤・角) 含まず。 器内外共に 80 暗い黄茶 (7.5Y R 3.0/1.0) 口径12.8 胴部最大径約14.0 (焼成) 良	⅙		098926
386	(砂) 1~3mm大少し。(金) 多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	⅙		099927
387	(砂) 1~2mm大多い。(金) やや多い。(赤・角) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	¼	D11南	065893 (No32)
388	(砂) 精胎に0.5mm大多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径16.4 胴部最大径約20.0 (焼成) 良	⅔強	P 54西	061889 (No29)
389	(砂) 細砂・0.5mm大多い。(金) やや多い。(赤) 若干。(角) やや多い。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) 器肉 113 暗いオリーブ灰 (5.0Y 3.5/0.5) 口径16.6。 (焼成) 良	¼強		094922
390	(砂) 細砂多い。(金) 多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径18.0。 (焼成) 良	⅙強		095923
391	(砂) 精胎に微砂少し。2~4mm大やや多い。(金) 多い。(赤) 含まず(角)若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外肩部以下煤付着。口径15.2 胴部最大径20.5 (焼成) 良	(底部欠)	D11南	059887 (No14)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
392	(砂) 微砂多い。2～4mmが多い。(赤・角) わずか。 器内外共に 82 にぶ橙 (8.0YR 6.5/2.5) 口径15.4 胴部最大径20.6 器高約22.6 (焼成) 良	{口縁・脚 裾の一部欠	P 55	057885 (No18)
393	(砂) 0.5～1.5mmが多い。(金) やや多い。(赤) わずか。(角) 多い。 器内外共に 82 にぶ橙 (8.0YR 6.0/2.5) (焼成) 良	¼ (底部のみ)	P 55	062890 (No22)
第 68 図 394	(砂) 微砂多い。(金・赤) 多量。(角) やや多い。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) 器肉 78 にぶ黄橙 (7.5YR 7.0/5.0) (焼成) 良	杯部完		020848 (No21)
395	(砂) 精胎に微砂少し。(金・赤) 多い。(角) なし。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 良	¼弱		084912
396	(砂) 精胎に微砂かなり含む。(金・赤) かなり含む。(角) 含む。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	杯部完	カマド西 (P61南)	023851 (No43)
397	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤) 多量。(角) わずか。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	¾強		081909
398	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 若干。(赤) わずか。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外に大きな黒斑。 (焼成) 良	¼強		082910
399	(砂) 精胎に細砂多い。(金) 多い。(赤・角) わずか。 器内 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) 器外 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) (焼成) 普通	杯部完	東壁	024852 (No 2)
400	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	¼		033861
401	(砂) 精胎に微砂少し。(金) やや多い。(赤) 多い。(角) わずか。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	¼強		085913
402	(砂) 精胎に微砂少し。(金) やや多い。(赤) 多い。(角) 含まず。 器内 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) 器外 明るい茶 54 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) やや悪い	破片		080908
403	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤・角) 若干。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	¼		083911
404	(砂) 微砂多量。(金・赤) 多量。(角) 若干。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器肉 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 普通	{杯上半¼ 杯下半¼		028856
405	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 少し。(赤) 多い。(角) なし。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	¼弱		086914

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
406	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 若干。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 良	1/2弱		087915
第 69 図 407	(砂) 精胎に微砂若干。(金・赤・角) 若干。 器内外共に 78 にお橙 (7.5YR 7.0/5.5) (焼成) 良	1/4強		035863
408	(砂) 精胎に微砂少し。(金) やや多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 55 明るい茶 (2.5YR 5.0/9.0) (焼成) やや悪い	1/8強		034862
409	(砂) 精胎に微砂多い。(金・赤) 多い。(角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 黒斑については本文に記載。 (焼成) 良	完形	カマド西 (P61)	104940 (Na55)
410	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤・角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口縁部と脚裾部の内外面に同じ側1ヶづつの黒斑。 (焼成) 良	略完形	P55東	056884 (Na12)
411	(砂) 微砂多い。(金・赤) 多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	3/8		031859
412	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) わずか。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 普通	杯部完形	P55	105941 (Na19)
413	(砂) 精胎に微砂わずか。(金・赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4強		036864
414	(砂) 精胎に微砂若干。(金・赤) 若干。(角) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	3/8		029857
415	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 若干。(赤) 含まず。(角) わずか。 器内 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	1/4		037865
第 70 図 416	(砂) 精胎に細砂多い。(金・赤) 多い。(角) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 黒斑は口縁器外に現存1。 (焼成) 良	3/8	P55東	026854 (Na6-2)
417	(砂) 精胎に微砂わずか。(金) わずか。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内 77 にお橙 (7.5YR 7.0/7.0) 器外 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) (焼成) やや悪い	1/4		032860
418	(砂) 精胎に微砂多い。(金・赤) 多い。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	口縁 1/8 杯下半 3/8 脚 1/4		030858 (Na44)
419	(砂) 精胎に微砂若干。(金) 若干。(赤) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	杯部 1/8 脚部 1/4		113316

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
420	(砂) 精胎に微砂含む。(金・角) 若干。 器内 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) 器外 83 にお橙(8.0YR 3.5/6.0) (焼成) 良	1/4		093921
第 71 図 421	(砂) 精胎に微砂・細少し。(金) 若干。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内 81 茶灰 (7.5YR 2.5/0.5)	3/8		091919
422	(砂) 精胎に細砂やや多い。(金) 若干。(赤) やや多い。(角) わずか。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 黒斑は器内外脚裾部に現存1個。 対峙して赤斑1個。 (焼成) 普通	1/8	カマド西 (P61)	027855 (No42)
423	(砂) 精胎に細砂・1.5mm大少し。(金) 多い。(赤) わずか。(角) やや多い。 器内外共に 22 にお赤 (6.0R 6.0/6.0) (焼成) 普通	脚部完	P54西	102938 (No26)
424	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/2弱	カマド西 (P61)	021849 (No41)
425	(砂) 精胎に細砂少し。(金) 少し。(赤・角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4		092920
426	(砂) 精胎に微砂少し。(金) ほとんど含まず。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) (焼成) 良	3/8	カマド西 (P61)	110248 (No41-2)
427	(砂) 精胎に細砂多い。(金) やや多い。(赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	脚部完	P55北	022850 (No23)
428	(砂) 精胎に細砂多い。1mm大若干。(金) 多い。(赤) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	脚柱1/2強 脚裾3/8	東壁	103939 (No4)
429	(砂) 精胎に微砂少し。(金・赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 悪い	1/4		088916
430	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4		089917
431	(砂) 精胎に微砂・細少し。(金) やや多い。(赤) 多い。(角) 若干。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 良	1/4		090918
432	(砂) 精胎に細砂多い。(金・赤) 多い。(角) かなり含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	脚部完	D21北	025853
第 72 図 433	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	破片		111314

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
434	(砂) 精胎に微砂多量。(金) 多量。(赤) 含まず。(角) かなり多い。(雲) やや多い。 器内外共に 90 明るい茶灰 (10.0Y R 6.0/2.0) 黒斑は体部下位に14箇所 (焼成) 良	完形	P54西	001829 (Na30)
435	(砂) 精胎に微砂多い。(金・赤) 多量。(角) わずか。 器内 76 暗い黄茶 (7.0Y R 4.0/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 黒斑は底部器外に大きい。 (焼成) 良	完形	カマド西 (P61内)	005833 (Na67)
436	(砂) 精胎に微砂少し。(金・赤) 多い。(角) わずか。 器内 76 暗い黄茶 (7.0Y R 4.0/2.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.0) (焼成) 良	破片		075903
437	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤・角) 若干。 器内 36 茶 (9.5R 4.5/7.0) 器外 83 にお橙 (8.0Y R 3.5/6.0) (焼成) 良	3/8強		070898
438	(砂) 細砂多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 少し。 器内 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外 31 灰味赤茶 (8.5R 4.0/6.0) 黒斑は体部下位・上位に大きく対峙。 (焼成) 良	完形	P54-P55間	003831 (Na20)
439	(砂) 精胎に細砂多い。2~3mm大も含む。(金) 多い。(角) 少し。 器内 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.0) (焼成) 良	{口縁一部残 体部}	P55東	015843 (Na10)
440	(砂) 微砂・8mm大少し。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) わずか。 器内 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外 39 にお赤味橙 (10.0R 4.5/4.5) (焼成) 普通	1/4弱	P55東	018846 (Na6-1)
441	(砂) 微砂少し。(金) やや多い。(赤) 多い。(角) 含まず。 器内 63 明るい茶 (3.5Y R 5.5/7.0) 器外 77 にお橙 (7.5Y R 7.0/7.0) (焼成) 普通	3/8		012840
442	(砂) 精胎に微砂若干。(金・赤) 多量。(角) わずか。 器内 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外 82 にお橙 (8.0Y R 6.0/2.0) 黒斑なし。 (焼成) 良	完形	カマド西 (P61)	011839 (Na57)
443	(砂) 精胎に微砂若干。(金) 若干。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 89 暗い黄 (10.0Y R 6.0/8.0) (焼成) 普通	3/8		016844
444	(砂) 精胎に微砂やや多い。(金) 若干。(赤) やや多い。(角) わずか。 器内 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外 82 にお橙 (8.0Y R 6.0/2.5) (焼成) 普通	3/8	カマド西 (M22内)	038866
445	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) 多い。0.9mm大のものあり。(角) やや 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 多い。 黒斑は器外口縁部に1箇所。 (焼成) 良	完形 (穿孔有)	西壁	008836 (Na35)
446	(砂) 細砂多い。1mm大もやや多い。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 普通	1/2		106942
447	(砂) 精胎に微砂少し。(金) やや多い。(赤) 若干。(角) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4強		076904

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
第 73 図 448	(砂) 精胎に細砂と共に0.5mm大やや多い。(金・赤・角)若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅓	P55東	017845 (Na13)
449	(砂) 精胎に微砂・0.5mm以下若干。(金) 多い。(赤) 多量。(角) わずか。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 黒斑は器外体部にうすく小さく1箇所。 (焼成) 良	完形	カマド西	009837 (Na38)
450	(砂) 精胎に微砂多い。4mm大やや多い。(金・赤) 多い。(角) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 黒斑については本文に記載。 (焼成) 良	口縁⅓欠	カマド東 (M22)	010838 (Na59)
451	(砂) 微砂多い。(金・赤) 多い。(角) 若干。 器内 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	完形		069897
452	(砂) 精胎に微砂やや多い。(金) やや多い。(赤) 多い。(角) 若干。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 黒斑はない。 (焼成) 普通	完形	カマド西 (P61)	006834 (Na54)
453	(砂) 精胎に微砂多量。(金・赤) 多量。(角) わずか。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 普通	⅓		072900
454	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 黒斑は器外体部に1個現存。 (焼成) 良	⅓強		071899
455	(砂) 精胎に微砂わずか。(金) 多量。(赤・角) わずか。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 78 にお黄橙 (7.5YR 7.0/5.5) (焼成) 良	⅓弱		077905
456	(砂) 精胎に微砂やや多い。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 黒斑は器外口縁部に2箇所。 (焼成) 良	同一 個体片 ⅓ ⅓		019847
457	(砂) 精胎に微砂少し。(金・赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 普通	⅓強		073901
458	(砂) 精胎に微砂多量。(金・赤) 多量。(角) 若干。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 良	完形	P55東	002830 (Na5)
459	(砂) 精胎に微砂多い。(金・赤) やや多い。(角) わずか。 器内 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 器外 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) (焼成) 良	完形	カマド西 (M22)	004832 (Na39)
460	(砂) 細砂・2mm大かなり含む。(金) やや多い。(赤・角) わずか。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 黒斑は体部～底部の器外に大きく1個。 (焼成) 良	{ 口縁⅓ 体部⅓		014842
461	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 少し。(赤) 多い。(角) 含まず。 器内 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅓	東壁	047875 (Na1)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
462	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤・角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外体部下位煤付着。 (焼成) 良	¼		074902
第 74 図 463	(砂) 細砂・1.5mm大やや多い。(金) 多い。(赤) ほとんど含まず。(角) 含まず。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) 黒斑は器内口縁部から器外体部にかけて現存1個。 (焼成) 良	破片		107943
464	(砂) 精胎に微砂多量。(金・赤) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 黒斑は器外底部に小さなうすい黒斑1個。 (焼成) 良	完形	カマド西 (P61)	007835 (No56)
465	(砂) 細砂多い。0.5mm大もやや多い。(金) 多い。(赤) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径18.0 (焼成) 良	¾		078906
466	(砂) 精胎に微砂・細少し。(金) 少し。(赤) 多い。(角) わずか。 器内外共に 69 うず橙 (5.0Y R 7.5/6.5) 口径18.0 (焼成) やや悪い	¼		079907
467	(砂) 微砂少し。(金・赤) 少し。(角) 含まず。口径11.6。 器内 90 明るい茶灰 (10.0Y R 6.0/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 黒斑・器外体部から器内口縁部にかけて大きな黒斑1箇所。 (焼成) 普通	¾		013841
468	(砂) 微砂多い。細若干。(金・赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) やや悪い	½強		100928
469	(砂) 精胎に微砂若干。(金) わずか。(角) 若干。(雲) 若干。 器内外共に 73 黄茶 (5.0Y R 5.0/5.0) 器外口縁部～底部にかけて大きな黒斑。現存1個。 (焼成) 良	略完	D21北	046874 (No33)
470	(砂) 細砂・0.5～1.5mm大多い。(金) 若干。(赤) やや多い。(角) 多い。 器内 65 うす橙 (4.0Y R 8.5/4.0) 器外 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 普通	¾	D21南	045873 (No31)
471	(砂) 0.5～1mm大やや多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.0) (焼成) 良	¾		063891
472	(砂) 精胎に細砂・0.5mm大かなり含む。(金) 若干。(赤) 含まず。(雲) 少し。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) (焼成) 良	完形	P54西	048876 (No28)
第 75 図 473	(砂) 精胎に微砂若干。1～4mm大多い。(金) やや多い。(赤) 若干。(雲) 含む。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5Y R 5.5/7.0) (焼成) 不良	同一個体片	カマド内 (最下層)	066894
474	(砂) 精胎に微砂・1～4mm大多い。(金・雲) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	口縁½ 体部½ 底部½	カマド内 カマド内	068896 (No60 No62)
第 77 図 475	(砂) 微砂少し。(金) 多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.0) 口径9.4 (焼成) 良	½		016239

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
476	(砂) 微・細砂多い。0.5mm大若干。(金・角) 若干。(赤) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径8.0 (焼成) 良	1/8		018241
477	(砂) 精胎に微砂少し。0.5~1.5mm大若干。(雲・赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) (焼成) 普通	1/4		020243
478	(砂) 精胎に0.5~1.5mm大やや多い。(金・赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) 8mm大の雲母片岩も含む。口径16.8 (焼成) 良	1/4	調査区北 壁寄り	010233
479	(砂) 精胎に細砂やや多い。0.5mm大多い。(金) 若干。(赤・角) 含まず。 器内外共に 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) 口径17.6 (焼成) 良	1/4弱	調査区壁 寄り	008231
480	(砂) 細砂・0.5mm大多く。1.5~2mm大やや多い。(金・角) 多い。(赤) 若干。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 口径18.4 (焼成) 良	破片		009232
481		破片		019242
482	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径15.7 (焼成) 良	杯上半1/8 杯下半1/8	調査区北 壁寄り	011234
483	(砂) 微砂多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径18.2 (焼成) 良	1/4		013236
484	(砂) 精胎に微砂多い。(金) ほとんど含まず。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/2強		012235
485	(砂) 精胎に微・細砂少し。(金) わずか。(赤・角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径18.3~21.6 黒斑・赤褐色斑本文中に記載。器高16.1~17.5 脚裾径16.0 (焼成) 普通	本文中	調査区北 壁寄り	014237
486	(砂) 精胎に微・細砂多い。(金・角) 若干。(赤) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	破片		024247
第 78 図 487	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) わずか。 器内 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 器外 83 にお橙 (8.5YR 5.5/6.0) 黒斑は器外口縁部~体部下位にかけて大きく1個。 (焼成) 良	完形	調査区北 壁寄り	002225
488	(砂) 精胎に微砂多い。細少し。(金) 多い。(赤) わずか。(角) やや多い。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.0) 黒斑器外下半にやや大きく1個のみ。 (焼成) 良	完形	調査区北 壁内	001224
489	(砂) 精胎に微砂多い。2mm大若干。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径12.1 器高5.1 (焼成) 良	1/4		003226

挿 図 番 号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
490	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) わずか。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.5) 口径12.0 器高4.5 器内はすべて黒斑・器外も体部上半部に大きく1個遺存。(焼成) 良	⅜		004227
491	(砂) 微砂多い。(金) 若干。(赤) 含まず。(角) なし。 器内 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) 器外 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	¼弱		007230
492	(砂) 精胎に微砂やや多い。(金) やや多い。(赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径13.8 器高5.2 黒斑は器外口縁部～体部下位にかけて大きく1個遺存。(焼成) 良	½弱	調査区北 壁寄り	006229
493	(砂) 微砂やや多い。(金) 若干。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.0) 口径13.0 器高約4.5 (焼成) 良	⅜強		015238
494	(砂) 微砂多い。0.5～3mm大若干。(金) やや多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	½強		005228
495	(砂) 微砂少し。細やや多い。(金・角) 多い。(赤) わずか。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) 口径14.0 器高約6.8 (焼成) 良	⅜	調査区北 壁寄り	023246
第 81 図 496	(砂) 精胎に微砂多い。細少し含む。(赤) 多量。(角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径10.2 胴部最大径13.4 器高13.8 (焼成) 普通	完形	カマド北 (床面)	001114 (No 1)
497	(砂) 微・細砂多い。1mm大も若干含む。(金) 多い。(赤) わずか含む。(角) 含まず。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.0) 口径約15.5 胴部最大径13.7 (焼成) 普通	⅜ ⅜	カマド北 (床面)	003116 (No 2)
498	(砂) 1mm大多い。5mm大も若干含む。(金・赤) 若干。(角) 多い。 器内 102 黄茶 (2.5Y 5.0/3.0) 器外 63 明るい茶 (3.5Y R 5.5/7.0) 口径19.0 胴部最大径26.4 (焼成) やや悪い	本文中	北壁(床) カマド内	005118 (No 4)
499	(砂) 精胎に微砂少し。1～3mm大やや多い。(金・赤) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5Y R 5.5/7.0) 胴部最大径30.0 (焼成) やや悪い	⅜弱 ⅜強	カマド内 カマド最 下層	006119
500	(砂) 0.5～1mm大多量含む。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 82 にお橙 (8.0Y R 6.0/2.5) 口径29.6 (焼成) 良	⅜ ⅜強	カマド内	004117 (No 5)
第 82 図 501	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径約14.0 (焼成) 良	小破片		008412
502	(砂) 細砂・0.5mm大多い。1mm大もやや多い。(赤) 若干含む。(角) 含まず。 器内 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) 器外 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.0) 口径14.0 (焼成) 良	⅜	(床面)	009413
503	(砂) 細砂多い。0.5mm大もやや多い。(金) やや多い。(赤) 多い。(角) 多い。 器内外共に 82 にお橙 (8.0Y R 6.0/2.5) 脚裾径11.7 (焼成) 良	⅜ ⅜強	カマド内	002115 (No 6)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
504	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 脚裾径12.0 (焼成) 良	⅛		007411
505	(砂) 精胎に微砂多い。(金・赤) 多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径22.4 (焼成) 良	⅛強	カマド内	010414
第 83 図 506	本文中	本文中	本文中	(Na 3)
第 86 図 507	(砂) 精胎に微砂若干含む。0.5~1.5mm大多く含む。(金・赤) やや多い。(角) 含まず。 器内 78 にお黄橙 (7.5YR 7.0/5.5) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 口径21.6 胴部最大径15.0 器高15.5 (焼成) 普通	本文中	本文中	003122 (本文中)
508	(砂) 精胎に微砂多い。細多い。(金・赤) 多い。 器内 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器外 31 灰味赤茶 (8.5R 4.5/4.5) 口径10.0 胴部最大径12.8 器高11.8 (焼成) やや悪い	口縁⅞ 胴 ⅞ 底部⅞	カマド東 (+1.0cm)	002121 (Na 2)
509	(砂) 精胎に細砂多い。0.5~3mm大多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 多い。 器内 12 灰味黄茶 (6.5Y 4.5/1.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径18.2 胴部最大径26.8 器高28.5 (焼成) 普通	本文中	本文中	004123 (Na 4)
510	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) 多量。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径15.2 脚裾径11.2 器高13.6 (焼成) 良	本文中	カマド内	001120 (Na 3)
第 89 図 511	(砂) 微砂多い。1mm大やや多い。(金・赤) やや多い。(角) 多い。 器内 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径13.2 (焼成) 良	破片		005298
512	(砂) 1.5mm大多い。(金) 多量に含む。(赤) わずか。(角) やや多い。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 口径13.2 胴部最大径20.0 器高約20.9 (焼成) 良	口縁⅞ 胴部⅞ 底部⅞		018311
513	(砂) 微砂多量に含む。(赤) 若干含む。(角) 多量に含む。 器内 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/6.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径16.2 胴部最大径20.8 (焼成) 良	⅞		006299
514	(砂) 細砂・1.5mm大多い。(金) 若干含む。(赤) わずか。(角) 多い。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) 器外に煤附着 (焼成) 良	⅞強	カマド	019312
515	(砂) 細砂若干含む。(金) やや多い。(赤) 若干含む。 器内 82 にお黄橙(8.0YR 6.0/2.5) 器外 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) 口径25.0 (焼成) 悪い	杯上半⅞ 杯下半⅞	カマド	001294
516	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多量。(赤) 多い。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 39 にお赤味橙 (10.0R 4.5/4.5) 口径19.0 (焼成) 良	⅞弱	東壁攪乱 土埴内	021404
517	(砂) 精胎に (金・赤) 多い。 器内外共に 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) 口径12.0 (焼成) 不良	⅞		004297

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
518	(砂) 精胎に (金) 多く含む。(赤) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 焼成後の穿孔有り。口径14.1 器高4.7 (焼成) 良	略完	カマド西 (中層)	003296
519	(砂) 細砂・1.5mm大多く含む。(金) 多く含む。(角) 多く含む。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 器外底部黒斑。 (焼成) 良	½		002295
第 91 図 520	(砂) 0.5~1mm大多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径15.0前後 (焼成) 良	½	(下層)	012419
521	(砂) 微・細砂多い。(金) 多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径11.5 胴部最大径13.1 (焼成) 良	½強	(下層)	007223
522	(砂) 精胎に微砂少し。1.0~2.0mm大やや多い。(金) 多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器肉 83 にお橙 (8.5YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅓	(下層)	006222
523	(砂) 精胎に微砂多い。細砂少ない。(金・角) 多い。(赤) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径22.0 胴部最大径15.0 胴中部器外に大きく黒斑1個遺存。 (焼成) 良	⅓		001217
524	(砂) 微砂やや多い。細若干。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	破片	(下層)	005221
525	(砂) 微砂少し。0.5~1.5mm大多い。(金) 若干。(赤・角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 黒斑は器外胴部に遺存。口径22.0 胴部最大径22.0 (焼成) 普通	½強		003219
526	(砂) 細・微砂多い。0.5mm大わずか。(金・角) 多い。(赤) わずか。 器内 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	破片		002218
527	(砂) 微・細砂多い。1.5mm大やや多い。(赤) わずか。(角) 若干。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) (焼成) 良	½強		008415
528	(砂) 細砂~3mm大やや多い。(金) やや多い。(赤・角) わずか。 器内外共に 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) (焼成) 良	½強		009416
529	(砂) 細砂~1.5mm大多い。(金・角) やや多い。(赤) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅓		010417
530	(砂) 微砂~2mm大多い。(金) やや多い。(赤) 含まず。(角) 多い。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 器外底部~胴部煤付着。 (焼成) 良	⅓		011418
531	(砂) 微砂・0.5mm大多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外体部下位に黒斑。 (焼成) 良	⅓		004220

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
第 94 図 532	(砂) 細砂多い。0.5~1mm大やや多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) わずか。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 口径11.0 胴部最大径13.0 黒斑は、器外の口縁・肩・底部に認める。 器高14.0 (焼成) 良	3/8 口縁片 胴部片 口縁片	中央(+5cm) 中央(+3~9cm) (上層)	060106 (Na 7) Na36-3
533	(砂) 細砂多い・0.5mm大多い。(金) 多量。(赤) 若干。(角) 石やや多い。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器外胴部煤付着。口径12.4 胴部最大径15.2 (焼成) 良	口肩 3/8 胴 1/4	BM23北(+7cm) 中央(一括)	061107 (Na19-2)
534	(砂) 微砂0.5mm大砂を多く含む。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外口縁部以下に煤付着する。口径14.8 (焼成) 良	破片	(下層)	042987
535	(砂) 細砂多い。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) 多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8	(下層)	045990
536	(砂) 微・細砂多い。1~2mm大砂若干。(金) 多量。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 黒斑は頸部に2個が対峙する。(焼成) 良	口肩部完形	カマド東 (+9cm)	051996 (Na 9)
537	(砂) 細砂多い。1mm大のものはわずか。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 煤は口縁~胴部に付着。口径16.4 胴部最大径約24.0 (焼成) 普通	1/2	中央 (+12cm)	059105 (Na 2)
538	(砂) 微・細砂多い。2mm大砂若干含む。(金・赤) やや含む。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径17.6 (焼成) 良	口肩部完形	カマド東 (+16cm)	056102 (Na10)
539	(砂) 精胎にやや細砂多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径19.0 (焼成) 良	破片	(上層)	044989
540	(砂) 細砂少し含む。(金・赤) 若干。(角) 多い。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 口径10.0 (焼成) 普通	1/8強	(上層)	040985
541	(砂) 細砂・1mm大多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 多い。 器内外共に 78 にお黄橙 (7.5YR 7.0/5.5) 器外は口縁部から煤付着。(焼成) やや悪い	3/8強	(上層)	057103
542	(砂) 微砂多い。細砂やや少ない。(金) やや少ない。(赤) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口縁端部~器外は煤付着。(焼成) 良	1/8弱	(上層)	043988
第 95 図 543	(砂) 細砂・1.5~2mm大も多い。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) 多い。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 器外胴部に煤一部付着。口径16.2 胴部最大径24.2 (焼成) 良	3/8 口縁片 胴 1/2 胴 1/4	BM23北(+7cm) 中央(+3~9cm) 中央(床)	062108 (Na19-3) Na36-4 Na59
544	(砂) 1~2mm大多い。(金) やや多い。(赤) わずか。(角) 多い。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 器外口縁~胴下位まで煤全面。(焼成) 良	1/2 弱 肩部 3/8強 口縁 3/8強 肩胴 3/8強	BM23北 (+7) 中央(一括)	063109 (Na19-4) 中央(一括)
545	(砂) 精胎に細砂を少し含む。(金) やや多い。(赤) 含まず。(角) 含まず。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 31 灰味赤茶 (8.5R 4.5/4.5) (焼成) 良	1/8弱	(下層)	041986

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
546	(砂) 微砂ほとんど含まず。(金) 若干。(赤) 含まず。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	完形	カマド内	065111
547	(砂) 微砂ほとんど含まず。(金) ほとんど含まず。(赤) 含まず。(角) 含まず。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) (焼成) 良	完形 ($\frac{3}{4}$ / $\frac{1}{4}$)	D 21 内 カマド東袖外	064110
548	(砂) 精胎に微砂をほとんど含まない。(金) 若干。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内 81 茶灰 (7.5YR 2.5/0.5) 器外 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) (焼成) 良	{ 上半 $\frac{1}{8}$ / 下半 $\frac{1}{4}$ 強 }	(下層)	046991
549	(砂) 微砂多い。細少ない。2mm大やや多い。(金) 多量。(赤) 含まず。(角) 含まず。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 黒斑は器外底部～胴上位にかけて大きなもの1個。 (焼成) 良	{ 胴下半 $\frac{1}{4}$ / 胴上半 $\frac{1}{4}$ }	{ 中央 (+3~9cm) / (上層) }	058104 (No.36-2)
550	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多量。(赤) わずか。(角) 若干。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) 口径12.3 (焼成) 良	$\frac{1}{2}$	(上層)	036981
第 95 図 551	(砂) 精胎に微砂ほとんど含まず。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 口径16.4 (焼成) 良	{ 杯上半 $\frac{1}{4}$ / 杯下半 $\frac{1}{4}$ }	中央(+11cm)	012957 (No.57)
552	(砂) 精胎に細砂ほとんど含まず。(金) やや多い。(赤) 含まず。(角) 含まず。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) 器外杯部に $\frac{1}{2}$ 周の大黒斑と小黒斑が対峙する。口径17.7 (焼成) 良	{ 口縁一部欠 / 脚欠失 }	中央(+8cm)	011956 (No.56)
553	(砂) 精胎に微砂多い。細若干。(金・赤) やや多い。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 黒斑は器内外杯上半部 $\frac{1}{2}$ とこれに対峙して同 $\frac{1}{2}$ のものがある。 (焼成) 良	杯部完形 (脚部欠失)	D21	018963 (No.22)
554	(砂) 精胎に細砂多い。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 多い。 器内外共に 36 茶 (9.5R 4.5/7.0) 口径17.3 (焼成) 良	{ 杯上半完 / 杯下半 $\frac{1}{4}$ 欠 }	カマド東 (+8cm)	020965 (No.15)
555	(砂) 精胎に微砂をわずか含む。(金) 若干。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径17.4 (焼成) 良	{ $\frac{1}{8}$ 強 / $\frac{1}{2}$ }	{ 中央 (+4cm) / (下層) }	021966 (No.8)
556	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 黒斑は口縁部器外に1個現存。 (焼成) 良	$\frac{1}{4}$ 強	中央 (+3~9cm)	022967 (No.36-2)
557	(砂) 精胎に微砂少し含む。(金・赤) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) 黒斑は口縁部器外に現存1個。口径19.8 (焼成) 良	$\frac{1}{4}$ 弱	(下層)	024969
558	(砂) 精胎に微砂を少し含む。(金) やや多い。(赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径20.5 (焼成) 良	$\frac{1}{4}$ 弱	(下層)	025970
第 97 図 559	(砂) 0.5mm大やや多い。(金・赤) 多い。(角) 含まず。 器内 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) 器外 82 にお橙 (8.0YR 6.0/2.5) 杯部下半径12.8 脚裾径16.2 脚高9.6 (焼成) 良	本文中	カマド支脚 (上段)	016961

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
560	(砂)若干。(金・赤)多量。(角)含まず。 器内 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 脚裾径18.7 脚高9.4 (焼成) 良	本文中	カマド支脚 (下段)	015960
561	(砂)精胎に微砂少し含む。(金)やや多い。(赤)多い。(角)含まず。 脚部・器外 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 脚部器内・杯部内外 83 にお 橙 (8.0YR 5.5/6.0) 黒斑は脚裾部に1箇所わずかある。(焼成) 良	本文中	D21 (壇底+14cm)	052997 (Na24)
562	(砂)精胎に細砂を少し含む。(金)多い。(赤)若干。(角)含まず。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 杯部下半径12.9 脚裾径17.8 脚高10.1 (焼成) 良	本文中	D21	017962 (Na25)
563	(砂)精胎に微砂を少し含む。(金)多い。(赤)やや多い。(角)わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 脚裾径約13.2 脚高約7.7 (焼成) 良	脚柱 1/2 脚裾欠失	(下層)	019964
564	(砂)精胎に微砂多い。(金)多い。(赤)やや多い。(角)含まず。 器内外共に 36 茶 (9.5R 4.5/7.0) (焼成) 良	杯底 1/2 脚部 1/2強	(上層) (下層)	023968
第 98 図 565	(砂)精胎に微砂少し。(金)多量。(赤)含まず。(角)含まず。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 良	1/8	中央(+2cm)	039984 (Na35)
566	(砂)精胎に微砂少し。(金)若干。(赤)含まず。(角)含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	完形	D21 (壇底+10cm)	003948 (Na30)
567	(砂)微砂多い。細若干。(金)多い。(赤)若干。(角)含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 黒斑は器外口縁部に黒斑その外周に赤褐色斑。(焼成) 良	完形	D21 (壇底+14cm)	004949 (Na29)
568	(砂)精胎に微・細砂多い。(金)やや多い。(赤)わずか。(角)若干。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器内外とも大半が黒斑。(焼成) 良	完形	カマド東 (+14cm)	033978 (Na14)
569	(砂)精胎に細砂わずか。(金)若干。(赤)多い。(角)含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	完形	カマド東 (+18cm)	001946 (Na16)
570	(砂)細砂を若干。(金)含む。(赤)多い。(角)含まず。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) (焼成) 良	口・底部 が一部欠	(上層)	048993
571	(砂)わずか。(金・赤)わずか。(角)なし。 器内 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) 器外 80 暗い黄茶色 (7.5YR 3.0/1.0) (焼成) 良	1/4強	中央(+9cm)	014958 (Na55)
572	(砂)精胎に微砂少し。(金・赤)多い。(角)含まず。 器内 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/2強	中央(+10cm)	028973 (Na1)
573	(砂)精胎に微砂少し。(金・赤)少し。(角)若干。 器内 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 器外 36 茶 (9.5R 4.5/7.0) 器外の大半が赤褐色斑。(焼成) 良	口縁一部欠	カマド東 (+17cm)	047992 (Na17)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
574	(砂) 精胎に微砂わずか含む。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) 含まず。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 黒斑は器内外面に現存1個。(焼成) 良	1/2強	(下層)	029974
575	(砂) 精胎に微砂多く。(金) 多く。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 81 茶灰 (7.5YR 2.5/0.5) (焼成) 良	体部一部欠	中央(+3cm)	049994 (No3)
576	(砂) 微・細砂多い。(金) 多量。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内 80 暗い黄茶 (7.5YR 3.0/1.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器外口縁部以外は黒斑。(焼成) 良	完形	中央(+14cm)	006951 (No52)
577	(砂) 細砂若干。(金) 多い。(赤) なし。(角) なし。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 黒斑は器内外口縁～底部にかけての大半に有り。(焼成) 良	完形	中央(+14cm)	005950 (No51)
578	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 若干。(赤) 含まず。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 黒斑なし。(焼成) 良	完形	D21 (+7cm)	002947 (No32)
579	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	3/8	(上層)	031976
580	(砂) 精胎に微砂多い。細もやや多い。(金・赤) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 良	完形	カマド東 (+18cm)	053998 (No13)
581	(砂) 精胎に微砂少し。(金) やや多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	3/8	(下層)	030975
582	(砂) 精胎に微砂少し。(金・赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	{口縁3/8 体部完	BM32東 (+6cm)	032977 (No20)
583	(砂) 精胎に微・細砂少し。(金) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0)	3/8 { 3/8 3/8	D 21 (坑底+14cm) (上層)	026971 (No28)
584	(砂) 精胎に微・細砂少し。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	口縁一部欠	BM23内	050995
585	(砂) 精胎に微砂少し含む。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 良	1/4強	(上層)	038983
586	(砂) 精胎に微砂少し。(金) やや多い。(赤) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	3/8 (3/8 1/2	中 央 (+9~5cm) 中 央(+2cm)	034979 (No34) (No38)
587	(砂) 細砂少し。(金) やや少し。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 黒斑は器外口縁～体部下位にかけて1個。(焼成) 良	完形	D21 (No25下位 坑底)	009954

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
第 99 図 588	(砂) 精胎に微砂ほとんど含まず。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	¼強	(下層)	037982
589	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) ほとんど含まない。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) 黒斑は器外口縁～底部の1/3周。 (焼成) 普通	完形	D21 (坑底+14cm)	054999 (Na27)
590	(砂) 精胎に微砂少し。(金・赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	体部¾ 口縁⅓	BM23東 (+7cm) (上層)	035980 (Na19)
591	(砂) 精胎に細砂少し。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外口縁部以下全面にスス付着。 (焼成) 良	口縁一部欠	カマド東 (+17cm)	010955 (Na11)
592	(砂) 微砂多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	完形	中央(+3cm)	007952 (Na54)
593	(砂) 精胎に微砂多い。(金・赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 59 明るい茶 (3.0Y R 5.5/4.0) (焼成) 良	完形	カマド東 (+15cm)	155101 (Na12)
594	(砂) 精胎に微砂多く含む。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 若干。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0Y R 4.0/2.0) (焼成) 良	口縁⅓ 体部⅓	D21 (+1~5cm)	027972 (Na31)
595	(砂) 精胎に微砂多い。(金) やや多い。(赤) 含まず。(角) 含まず。 器内 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外 95 明るい茶灰 (1.0Y 6.5/2.0) (焼成) 良	完形	中央(+3cm)	008953 (Na53)
第 100 図 596	(砂) 微砂多い。細砂わずか。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) 含まず。 器内 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) 口径27.0 (焼成) 良	体部¼ 口縁片	中央(+12cm) カマド前 庭東袖部	066112 (Na58-1)
597	(砂) 微・細砂多い。(金) 多い。(角) 若干。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) 黒斑底部は暗。口径27.0 底径13.3 器高30.0 (焼成) 良	下半¼ 上半¼強 把手1個	中央(+12cm) カマド (上層)	067113 (Na58-2)
第 101 図 598	(砂) 細砂・0.5mm大多く含む。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内 90 明るい茶灰 (10.0Y R 6.0/2.0) 器外 31 灰味赤茶 (8.5R 4.5/4.5) (焼成) 良	¼	(上層)	013958
第 103 図 599	(砂) 精胎に微・細砂多い。(金) 多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) 口径15.8 (焼成) 良	¼弱		007149
600	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) わずか含む。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径18.3 (焼成) 良	杯部上半¾ 杯部下半¼強	D21南 (床+4cm)	005147
601	(砂) 精胎に(金) 多い。(赤) やや多い。 器内 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) 器外 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 普通	⅓		012422

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
602	(砂) 精胎に微砂若干。(金) やや多い。(赤) ほとんど含まず。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	5/8		006148
603	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 脚裾径16.0 (焼成) 良	1/8弱		010420
604	(砂・金) 少し。(赤) わずか含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8		011421
605	(砂) 精胎に微砂多い。(金・赤) わずか含む。(角) 含まず。 器内外共に 74 茶 (5.0YR 4.5/5.5) 口径14.9 器高5.7 (焼成) 良	7/8	M14上 (床面+0cm)	001143
606	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	1/2弱		004146
607	(砂) 精胎に微・細砂少し。(金) 多い。(赤) 若干。(角) わずか含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径12.3 器高6.0 (焼成) 良	(口 縁 一部欠)	D21西 (南壁床+2cm)	009199
608	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	3/4	D21西 (床+3cm)	003145
609	(砂) 細砂多い。1mm大少し。(金) 多量。(赤・角) 含まず。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	7/8	D21西 (南壁床+3cm)	002144
第 104 図 610	(砂) 細砂～2mm大多い。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径15.4 (焼成) 良	1/8弱		002400
611	(砂) 細砂～2mm大多い。4mm大若干。(金) 若干。 器内外共に 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) (焼成) 良	3/8		004423
612	(砂) 精胎に1mm大やや多い。(金) 多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4		005424
613	(砂) 細砂～1mm大多い。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) わずか。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 口径23.0 (焼成) 良	1/8強		003401
614	(砂) 微砂～1.5mm大多い。7mm大わずか。(金) 多量。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 口径24.0 (焼成) 良	1/8強		001399
第 108 図 615	(砂) 微砂やや多い。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径9.3 胴部最大径15.5 (焼成) 良	1/4		014137

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
616	(砂) 微砂〜0.5mmが多い。(金) 多い。(赤) わずか含む。(角) 含まず。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8弱		022425
617	(砂) 細砂多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内 54 明るい茶 (2.5YR 5.5/8.0) 器外 86 灰味黄茶(8.5YR4.5/2.0) 口径19.0 (焼成) 普通	1/8強	D21西	015138
618	(砂) 細砂・1.5mmが多い。(金) 多い。(赤・角) 若干。 器内 80 暗い黄茶 (7.5YR 3.0/1.0) 器外 82 にぶ黄橙(8.0YR6.0/2.5) 黒斑は器外胴下位に大きく1個。器外全面煤付着。(焼成) 良	完形 (本文中)	本文中	004127
619	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多量。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 口径6.6 (焼成) 良	5/8	カマド内	009132
620	(砂) 微砂多い。(金) 少し。(赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 口径11.8 器高5.3 (焼成) 良	完形	D21西 (床面)	021198 (No.3)
621	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) 黒斑は大きく器外口縁部から底部にかけて全体周の1/3。(焼成) 良	完形	D21	020197
622	(砂) 精胎に微砂少し。(金) わずか含む。(赤・角) 含まず。 器内 78 にぶ黄橙 (7.5YR 7.0/5.5) 器外 54 明るい茶(2.5YR5.0/8.0) (焼成) 普通	1/4		013136
623	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤) 多量。(角) 含まず。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) 黒斑は器外口縁部に1個有り 口径13.4 器高4.6 (焼成) 良	1/8弱	カマド西袖外 (+6cm)	008131
624	(砂) 細砂〜1.5mmが多い。(金) やや多い。(赤) 含まず。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8弱		026429
625	(砂) 微砂・1.5mmが多い。(金) 多い。(角) やや多い。 器内外共に 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) (焼成) 良	1/4		027430
第 109 図 626	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) 黒斑は器外杯上半部に小さく1個。口径18.7 (焼成) 良	本文中	本文中	005128
627	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤) やや多い。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	1/8強		025428
628	(砂) 細砂多い。(金) 中量。(角) 若干。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) 杯内底全面に煤付着。脚裾径16.2 (焼成) 良	本文中	本文中	002125
629	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤) 若干。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8	D21	023426

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
630	(砂) 精胎に微砂少し。(金) 多い。(赤・角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径18.2 脚裾径13.1 器高15.1 黒斑は器外杯上半部と同じ側の脚裾内外に小さく1個ずつ有り。(焼成) 良	本文中	本文中	006129
631	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) わずか含む。 器内外共に 90 明るい茶灰 (10.0Y R 6.0/2.0) (焼成) 良	1/8		024427
632	(砂) 精胎に微・細砂少し。(金・赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径18.4 脚裾径12.9 器高15.3 黒斑は器外杯上半部と同じ側の脚裾内外に1個ずつ有り。(焼成) 良	本文中	本文中	001124
633	(砂) 0.5mm大多い。3mm大若干。(雲) 多い。(赤) わずか含む。(角) 含まず。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0Y R 4.0/2.0) 口径22.0 器高約10.0 黒斑は器外下半部と器内上半部に大きく有り。器外に一部煤付着。(焼成) 良	底部欠失 以外は完形	{ D21 床面	007130
634	(砂) 精胎に細砂少し。(金・赤) 多い。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径22.3 器高18.2 体部上位に大きい黒斑・赤褐色斑が対峙する。(焼成) 良	完形	南東隅壁 (+23cm)	003126 (No 1)
635	(砂) 精胎に微砂少し。(金・赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	完形	カマド西 (床面)	011134
636	(砂) 精胎に微・細砂多い。(金) やや多い。(赤) 多い。(角) 含まず。 器内 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) (焼成) 良	完形	西壁南半 (床面)	010133 (No 4)
637	(砂) 精胎に微砂多い。(金・赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器内外各所に灰褐色斑有り。(焼成) 良	完形	D21西肩 (床面)	012135 (No 2)
第 111 図 638	(砂) 細砂多い。2mm大やや多い。(金) 多い。(赤) 多量。(角) わずか。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) 口径11.0 (焼成) 良	3/8		004206
639	(砂) 多い。1mm大も若干。(金) やや多い。(赤) 多い。(角) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8		009211
640	(砂) 微・細砂多い。(金・赤・角) 多い。口径14.0 胴部最大径16.4 器高約13.9 器内外共に 78 にお黄橙 (7.5Y R 7.0/5.5) 黒斑は器外肩部から胴下位にかけて大きい。(焼成) 良	1/4弱		014216
641	(砂) 微砂多い。0.5~1mm大多い。(金) やや多い。(赤・角) 多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4弱		007209
642	(砂) 細砂多い。2~3mm大わずか。(金) 多い。(赤・角) やや多い。 器内 83 にお橙 (8.5Y R 5.5/6.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.0) (焼成) 良	1/4	東ベッド肩 (+12cm)	003205 (No 2)
643	(砂) 微砂~0.5mm大多い。1~2mm大も若干。(金) 多量。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.0) 口径12.5 胴部最大径13.9 器高12.9 (焼成) 良	{ 口縁 3/8 胴略完 底 1/4		001203

挿 番 号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
644	(砂)細砂多い。0.5~1mm大多い。(金)やや多い。(赤)若干。(角)多い。 器内 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 器外 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0)	⅜		013215
645	(砂)細砂~1mm大多い。(金・赤・角)多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径15.1 胴部最大径14.8 器高18.3 (焼成) 良	口縁⅝ 胴⅜ 底⅙	D11南(+9cm) 東ベッド肩 (+10cm)	002204 (No.1) (No.3)
646	(砂)微砂多い。細砂若干。(金)やや多い。(赤)若干。(角)多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅝強		010212
647	(砂)精胎に微砂少し。0.5~2mm大若干。(金)多い。(赤)やや多い。(角)若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径15.1 (焼成) 良	⅙弱		012214
648	(砂)微砂少し。1.5mm大若干。(金・赤・角)やや多い。 器内外共に 78 にお黄橙 (7.5YR 7.0/5.5) (焼成) 良	⅙		006208
649	(砂)微・細砂多い。0.5mm大少し。(金)多い。(赤)わずか。(角)多い。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	⅙弱	P44上(+3cm)	005207 (No.4)
650	(砂)細砂・0.5mm大多い。(金)多い。(赤)わずか。(角)含まず。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) (焼成) 良	破片		011213
651	(砂)微砂・1mm大多い。(金・赤)やや多い。(角)多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅙弱		008210
第 120 図 652	(砂)精胎に微砂多い。(金)微片やや多い。(赤)やや多い。(角)若干。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) 口径13.5 底径8.8 器高2.6 (焼成) 普通	⅜	(床面)	001790
653	(砂)微砂少し。(金)微片少し。(赤)やや多い。(角)含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径14.5 糸切り底径9.8 板目状圧痕径8.2 器高3.15 (焼成) 良	⅙	(+3cm)	002791
第 122 図 654	(砂)精胎に細砂多い。(金)多い。(赤・角)含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	破片		015340
655	(砂)細砂多い。2~3mm大多い。(金・赤)やや多い。(角)含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径18.4 (焼成) 普通	⅝強		002186
656	(砂)0.5~2mm大多い。5mm大少し。(金)少し。(赤)わずか。(角)含まず。 器内外共に 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) (焼成) 良	⅝強		018452
657	(砂)0.5~1.5mm大やや多い。(金)若干。(赤)含まず。(角)若干。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器外は口縁部以下に煤付着。口径15.3 胴部最大径15.3 (焼成) 良	⅙		012337

挿 図 番 号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
658	(砂) 微砂多い。1.5~2mm大わずか。(金) 多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8		003187
659	(砂) 0.5mm大多い。3mm大少し。(金) 若干。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器内 11.4 暗い黄茶 (5.0YR 3.0/1.0) 器外 胴に煤付着。(焼成) 良	1/8強	2号住居西 壁北半近く	001796
660	(砂) 0.5~1mm大多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器外 口縁以下に煤付着。(焼成) 良	1/8強		013338
661	(砂) 細砂・0.5mm大多い。1mm大若干。(金) やや多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) (焼成) 普通	1/8		014339
第 123 図 662	(砂) 0.5~1mm大やや多い。(金) 若干。(赤) 含まず。(角) わずか含む。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 口径14.2 器高7.3 (焼成) 良	3/8弱		017342
663	(砂) 細砂・1.5mm大多い。(金・赤・角) わずか含む。 器内 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器外 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) (焼成) 良	3/8		007191
664	(砂) 細砂やや多い。2mm大若干。(金) わずか。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) (焼成) 普通	1/4強		008192
665	(砂) 細砂・0.5mm大多い。1mm大少し。(金) 若干。(赤) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 黒斑は器外に1個有り。(焼成) 良	1/4		009193
666	(砂) 細砂・0.5~2mm大多い。(金) 若干。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内 102 黄茶 (2.5Y 5.0/3.0) 器外 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) (焼成) 良	3/8		006190
667	(砂) 微・細砂多い。0.5~1mm大やや多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4		004188
668	(砂) 精胎に微砂少し。1~1.5mm大多い。(金・赤) わずか。(角) 含まず。 器内 80 暗い黄茶 (7.5YR 3.0/1.0) 器外 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) (焼成) 良	3/8		005189
669	(砂) 0.5~1mm大多い。(金) 多量。(赤) 含まず。(角) わずか含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4		019453
670	(砂) 細砂多い。2mm大やや多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) わずか含む。 器内 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 裾径10.0 (焼成) 良	1/4		010194
671	(砂) 細砂・0.5mm大やや多い。(金) 若干。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	1/8		016341

挿 図 番 号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
672	(砂) 微砂多い。1.5mm大若干。(金) 多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外中位にはほぼ全周に煤付着。口径13.7 裾径16.5 器高22.1 (焼成) 良	口縁 $\frac{1}{2}$ 頸部 $\frac{1}{2}$ 下半 $\frac{1}{4}$ 強	2号住居西 壁北半近	011195
第 124 図 673	(砂) 細砂少し。1~1.5mm大多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) 底径6.8 (焼成) 良	$\frac{1}{4}$ 強		001343
674	(砂) 精胎に微・細砂少し。(金) 多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 裾径10.0 (焼成) 良	$\frac{1}{4}$		002454
675	(砂) 精胎に 微・細砂少し。(金) 多い。(赤) 少し。(角) かなり多い。 器内 78 にお橙 (7.5Y R 7.0/5.5) 器外 95 明るい茶灰 (1.0Y 6.5/2.0) 底径7.6 (焼成) 良	$\frac{1}{4}$ 弱		002456
676	(砂) 微~細砂多い。1.5mm大若干。(金) 多量。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5Y R 5.5/7.0) (焼成) 良	$\frac{1}{8}$ 強		001455
677	(砂) 0.5~1mm大多い。(金) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 81 茶灰 (7.5Y R 2.5/0.5) 胴部最大径30.5 (焼成) 良	$\frac{1}{8}$		003460
678	(砂) 0.5~1.5mm大多い。(金・赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径30.0前後 (焼成) 良	破片		001344
679	(砂) 細砂・1mm大多い。(金・赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	小破片		002345
680	(砂) 精胎に微砂多い。1.5mm大少し。(金) 多い。(赤) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	小破片		005459
681	(砂) 微・細砂少し。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) 口径約17.1 (焼成) 良	$\frac{1}{8}$		004458
682	(砂) 細砂・1mm大やや多い。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) わずか含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	小破片		002347
683	(砂) 精胎に1mm大多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径12.0 器高6.0前後 (焼成) 良	$\frac{1}{8}$ 強		001346
684	(砂) 精胎に0.5~1.5mm大多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) やや多い。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) 口径9.6 (焼成) 良	$\frac{1}{4}$		003457
685	(砂) 微砂・1.5~2mm大多い。(金) 若干。(赤・角) わずか含む。 器内 92 黄味白 (1.0Y 8.5/3.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.0) 口径34.0 (焼成) 良	破片		001348

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
686	(砂) 精胎に0.5~1.5mm大やや多い。(金) 多い。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 80 暗い黄茶 (7.5YR 3.0/1.0) (焼成) 良	破片		002451
687	(砂) 精胎に細砂・2mm大やや多い。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 底径8.7 器高9.4 (焼成) 良	口縁一部欠		001349
第 125 図 688	(砂) 0.5mm大多い。1mm大少ない。(金) 多い。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) (焼成) 良	1/8		007463
689	(砂) 細砂・0.5mm大多い。(金・角) 多い。(赤) 若干。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	1/8強		003352
690	(砂) 精胎に細砂・1mm大やや多い。(金) 多い。(赤・角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8弱		006462
691	(砂) 細砂・1~1.5mm大多い。(金) 多い。(赤・角) 含まず。 器内 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径22.4 胴部最大径22.6 (焼成) 良	1/8弱		004353
692	(砂) 細砂多い。1.5mm大若干。(金) 多い。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 80 暗い黄茶 (7.5YR 3.0/1.0) (焼成) 普通	1/8弱		009465
693	(砂) 微・細砂多い。1.5mm大やや多い。(金) 多い。(赤) 少し。 器内 80 暗い黄茶 (7.5YR 3.0/1.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8弱		010466
694	(砂) 細砂・1mm大多い。(金・角) 若干。(赤) わずか。 器内 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 器外 36 茶 (9.5R 4.5/7.0) (焼成) 普通	3/8		001350
695	(砂) 0.5~1.5mm大多い。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) わずか。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) (焼成) 良	1/4		002351
696	(砂) 微砂~0.5mm大多い。1mm大若干。(金) 多い。(赤) 含まず。(角) 多量。 器内 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	1/8弱		008464
697	(砂) 精胎に細砂・1mm大やや多い。3mm大少し。(金) 多い。(赤) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8弱		005461
第 127 図 698	(砂) 微・細砂多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) やや多い。 器内 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8強		003361
699	(砂) 細砂・0.5mm大多い。1mm大若干。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	小破片		002355

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
700	(砂) 1~1.5mmが多い。2mm大若干。(金)多い。(赤・角)含まず。 器内外共に 39 にお赤味橙 (10.0R 4.5/4.5) (焼成) 良	1/8弱		004467
701	(砂) 細砂・1mmが多い。3mm大若干。(金)多い。(赤・角)含まず。 器内 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 口径29.0前後 (焼成) 良	1/8弱		001354
702	(砂) 精胎に細砂・2mmが多い。(金)やや多い。(赤)わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 底径7.4 (焼成) 良	1/4強		006469
703	(砂) 細砂・1.5mmが多い。2mm大少し。(金)多い。(赤)わずか。(角)含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4強		007470
704	(砂) 0.5~3mmが多い。(金)若干。(雲)多い。(赤)やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	5/8		008471
705	(砂) 細砂・1mm大やや多い。(金)多い。(赤)わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 裾径16.0前後 (焼成) 良	小破片		005468
第 128 図 706	(砂) 微砂・0.5~1mmが多い。(金)わずか。(赤)わずか。(角)含まず。 器内 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8弱		001202
707	(砂) 微・細砂・0.5mmが多い。2mm大少し。(金)多い。(赤)若干。(角)含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 口径27.2 胴部最大径24.9 (焼成) 良	1/4強		005359
708	(砂) 細砂・2mmが多い。(金・赤)少し。(角)わずか。 器内 91 暗い黄茶 (10.0YR 3.5/3.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 底径10.8 (焼成) 良	1/8強		008473
709	(砂) 細砂・2mm大やや多い。(金)多い。(赤)若干。(角)多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 底径9.0 (焼成) 良	1/4強		007472
710	(砂) 0.5mmが多い。1.5~2mm大若干。(金)若干。(赤)やや多い。(角)含まず。 器内外共に 78 にお黄橙 (7.5YR 7.0/5.5) 口径13.6 底径6.0 器高9.0 器肉 57 茶灰 (2.5YR 3.5/0.5) (焼成) 良	1/4弱		004358
711	(砂) 細砂多い。(金)多量。(赤)含まず。(角)含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 裾径11.0 器高9.8 (焼成) 良	一部欠		002356
712	(砂) 微砂・1.5mmが多い。(金・赤)多い。(角)含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径11.5 (焼成) 良	5/8		003357
713	(砂) 微・細砂多い。1.5~2mm大若干。(金)多い。(赤)やや多い。(角)わずか。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) 裾径13.6 (焼成) 良	破片		006360

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
第 132 図 714	(砂) 1~2mm大多い。(金) 2mm大多い。(赤・角) 多い。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 口径16.4 口縁部最小径11.3 胴部最大径22.0 (焼成) 良	胴下半欠	中群南東端 (+8cm)	004004 (Na26)
715	(砂) 細砂多い。1.5~2mm大若干。(金) 多い。(赤) 若干。(角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外頸部に黒斑。口径10.5 口縁部最小径9.5 (焼成) 良	¼強	中東西群	046179
716	(砂) 細砂・0.5mm大多い。1.5mm大若干。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) 胴部最大径19.0 底径7.1 (焼成) 普通	胴下半¼ 底 ⅝		032165
717	(砂) 0.5mm大多い。(金) 含む。 器内外共に 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) 口径19.3 口縁部最小径11.8 胴部最大径28.0 (焼成) 良	口頸完存 胴 ½	中東西群	017017
718	(砂) 細砂多い。1mm大やや多い。(金) やや多い。(赤) 少し。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径23.0 口縁部最小径16.0 (焼成) 良	⅝	北群西	026159 (Na4)
719	(砂) 2~3mm大多量。(金) 多い。 器内 70 うす茶 (5.0YR 7.5/2.5) 器外 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 口径17.7 口縁部最小径12.6 胴部最大径24.4 底径6.9 器高38.4 (焼成) 良	完形	中群北西端 (+10cm)	016016 (Na13)
720	(砂) 1~2mm大多量。(金・角) 少量。 器内外共に 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) 口径17.0 口縁部最小径12.0 胴部最大径27.0 底径8.9 器高39.7 (焼成) 良	完形	中東西群 (+22cm) 中群北 (Na27内)	015015 (Na18-1) (Na17-2)
721	(砂) 細砂・0.5mm大多い。(赤) 多い。 器内外共に 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) 口径19.5 口縁部最小径14.2 胴部最大径26.5 器高39.0 (焼成) 良	略完形	中群北 (+15cm) 中東西群 (+15cm)	001001 (Na17-1) (Na18-2)
第 133 図 722	(砂) 細砂多量。(金・角) 細片多量。 器内 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) 器外 39 にお赤味橙 (10.0R 4.5/4.5) 口径25.4 胴部最大径30.0 底径5.7 器高41.0 (焼成) 良	½	中群南 (Na27内)	005005 (Na27-2)
722	(砂) 細砂多量。(金・角) 細片多量。 器内 73 黄茶 (5.0YR 5.0/5.0) 器外 39 にお赤味橙 (10.0R 4.5/4.5) 器内上半部・器外上半部にスス附着 (焼成) 良	¼	南群西 (+35cm)	006006 (Na22-1)
723	(砂) 微砂~0.5mm大多い。3mm大やや多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良		中群中	039172
724	(砂) 1mm大多い。(金・角) 含む。 器内 70 うす茶 (5.0YR 7.5/2.5) 器外 95 明るい茶灰 (1.0Y 6.5/2.0) 口径27.6 胴部最大径30.0 (焼成) 良	¼	中群中 (+20cm)	010010 (Na21-1)
725	(砂) 0.5mm大多い。(金) 微含む。(角) 含む。 器内外共に 67 茶 (4.0YR 5.0/4.0) (焼成) 普通	胴下半欠		008008
726	(砂) 細砂・1mm大多量。1.5mm大若干。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) 口径25.4 胴部最大径26.8 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	¼(+11) ¼(+11) ¼(+15)	北群東 中群北 中東西群	036169 (Na9-11) (Na18-5)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
727	(砂) 0.5mm大多量。1.5mm大若干。(金・赤) 若干。(角) わずか。 器内外共に 92 黄味白 (1.0Y 8.5/3.0) (焼成) 良		南群西 (+35cm)	033166 (No22-2)
728	(砂) 0.5~1mm多い。(金) 多量。(赤・角) 含まず。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	⅓	中群中	040173
729	(砂) 0.5~1mm大多い。(金) 若干。(赤・角) 多い。 器内 65 うす橙 (4.0YR 8.5/4.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 口径27.4 胴部最大径25.6 (焼成) 良	⅓強	中群中 (+34cm)	038171 (No22-3)
730	(砂) 細砂少し。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	⅓	中群南 (No28内)	027160 (No28-2)
第 134 図 731	(砂) 細砂多い。1.5mm大若干。(金・赤) 若干。(角) 多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅓	中群中	054187
732	(砂) 微・細砂多い。2~3mm大若干。(金・赤) 多い。(角) 含まず。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 口径26.3 (焼成) 良	⅓		029162
733	(砂) 1.5mm大多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅓弱	北群 (+13cm)	028161 (No 2)
734	(砂) 細砂・1.5mm大やや多い。(金・赤) 多い。(角) わずか。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	⅓弱	中群中	044177
735	(砂) 微砂~0.5mm大多い。1.5mm大多い。(金) 多量。(赤・角) 若干。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 口径27.0 (焼成) 良	⅓弱	北群 (+13cm)	031164 (No 5)
736	(砂) 0.5~1.5mm大多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅓	中群	053186
737	(砂) 微砂多い。細若干。(金) 多量。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	⅓強	中群南 (No27内)	030163 (No27-5)
738	(砂) 微砂多い。細若干。(金・角) 多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅓	中群中	035168
739	(砂) 1mm大少し。(金) やや多い。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 口径21.2 胴部最大径23.5 底径7.8 器高33.3 (焼成) 良	完形	中群中 (+20cm) 中群南 (No27内)	014014 (No21-2) (No27-3)
740	(砂) 1mm大含む。(金・角) 少量。 器内 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器外 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) (焼成) 良	⅓	中群中 (+17cm)	021021 (No15)

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
741	(砂) 微・細砂多い。1.5mm大少し。(金) 若干。(赤) やや多い。(角) 多い。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	1/2強	中群中	034167
742	(砂) 細砂・2mm大多量。(金) 微片多い。(角) 多い。 器内 78 にお黄橙 (7.5YR 7.0/5.5) 器外 66 にお橙 (4.0YR 7.5/7.5) 口径24.0 胴部最大径28.0 底径8.1 器高38.5 (焼成) 普通	(上半1/4 下半1/4)	(中群南 (+13cm) 中群南 (+21cm)	009009 (No24 No25)
第 135 図 743	(砂) 微・細砂多い。0.5mm大やや多い。(金) 多い。(赤・角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/8	中群中	045178
744	(砂) 0.5~1mm大含む。(金) 微片少量。(角・赤) 少量。 器内外共に 73 (5.0YR 5.0/5.0) 口径14.7 胴部最大径18.4 底径6.5 器高27.1 (焼成) 良	略完形	(中群北 (+17cm) 中群北 (+22cm)	018018 (No14 No19)
745	(砂) 0.5~1mm大多量。(金) 微片多量。(角) 少量。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 口径15.2 胴部最大径23.8 底径7.2 器高31.8 (焼成) 良	完形	中群南 (+10cm)	003003 (No30)
746	(砂) 1~1.5mm大多い。(金) 少し。(角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径14.8 胴部最大径17.2 底径6.6 器高18.8 (焼成) 良	1/2	中群北 (+7cm)	011011 (No12)
747	(砂) 精胎に微砂多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 多い。 器内外共に 78 にお黄橙 (7.5YR 7.0/5.5) 黒斑は口唇部~器内底部にかけて大きい。 (焼成) 良	1/4		048181
748	(砂) 精胎に微砂少ない。(金) 多量。(赤) やや多い。(角) 含まず。 器内 80 暗い黄茶 (7.5YR 3.0/1.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	破片	9号住居部 (溝底)	037170
749	(砂) 細砂多い。(金・角) 含む。 器内 76 暗い黄灰 (7.0YR 4.0/2.0) 器外 58 暗い茶 (2.5YR 3.5/2.0) 胴部最大径24.7 底径9.2 (焼成) 良	1/8	中群中	012012
750	(砂) 細砂・2mm大多い。(金) 微片少い。(角) 少い。 器内 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器外 59 明るい茶 (3.0YR 5.5/4.0) 口径20.6 胴部最大径27.1 (焼成) 良	1/2弱	中群中	020020
751	(砂) 微・細砂多い。2mm大若干。(金) ほとんど含まず。(赤) わずか。(角) 多い。 器内 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) 器外 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) (焼成) 良	1/4		025158
752	(砂) 細砂・0.5mm大多い。(金) わずか。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) 器外 63 明るい茶 (3.5YR 5.5 /7.0) (焼成) 普通	1/4	中群中	043176
753	(砂) 精胎に微砂若干。1~3mm大多い。(金) わずか。(赤) やや多い。(角) 含まず。器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	1/4弱	中群中	042175
754	(砂) 細砂・1mm大多い。(金) やや多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4		041174

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
第 136 図 755	(砂) 細砂～2mmが多い。(金・角) 含む。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径20.6 胴部最大径34.8 器高39.8 (焼成) 良	完形	中群北 (+10cm)	013013 (Na16)
756	(砂) 0.5～2mm大含む。(金) 少し。(赤) 若干。 器内 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 胴下半部は一周して欠失。口径19.2 胴部最大径34.0 (焼成) 良	下半欠 他は完形	中群南 (+17cm)	007007 (Na23)
757	(砂) 微・細砂～3mmが多い。(金) 微片含む。(赤・角) 含む。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径18.7 胴部最大径34.2 底径9.4 器高43.5 (焼成) 良	完形	中群南 (+13cm)	002002 (Na27-1)
758	(砂) 1～2mmが多い。(金) 微片含む。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径24.7 胴部最大径36.8 底径8.2 器高46.2 (焼成) 良	完形	中群南 (+13cm) 中群南 (+10cm)	019019 (Na28-1) (Na29)
759	(砂) 精胎に0.5mm大若干。(金) 若干。(赤) わずか。(角) やや多い。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4	中群中	047180
760	(砂) 微・細砂多い。2～3mm大少し。(金) やや多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	1/4	中群中	055188
761	(砂) 微砂多い。1mm大やや多い。(金) やや多い。(赤) わずか。(角) 若干。 器内 82 にぶ黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 器外 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	3/8	中群中	052185
762	(砂) 0.5mmが多い。(金・赤) わずか。(角) 含まず。 器内 78 にぶ黄橙 (7.5YR 7.0/7.5) 器外 82 にぶ黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) (焼成) 良	1/4	中群中	050183
763	(砂) 細砂・0.5mmが多い。(金) 若干。(赤) 含まず。 器内 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器外 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) (焼成) 良	1/4	中群中 (+26cm)	024157 (Na20)
764	(砂) 0.5～1mmが多い。(金) 1.5mm大やや多い。(赤) わずか。(角) 若干。 器内 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	1/4		023156
765	(砂) 微・細砂多い。2mm大若干。(雲) 多い。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	1/4		022155
766	(砂) 細砂・0.5～1.5mmが多い。(金) 若干。(赤・角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 良	1/4	中群中	051184
767	(砂) 0.5mmが多い。1mm大もやや多い。(金・赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 82 にぶ黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) (焼成) 良	1/4	中群中	049182
第 137 図 768	(砂) 細砂多い。1mm大若干。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 若干。 器内外共に 83 にぶ橙 (8.0YR 5.5/6.0) 底径11.8 (焼成) 良	1/4弱		001431

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
第 138 図 769	(砂) 0.5~1mm大多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径15.2 (焼成) 良	¼	グリッド内	014330
770	(砂) 細砂・1mm大多い。(金) 多い。(赤) わずか含む。(角) 若干。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) (焼成) 普通	⅕	(埋土)	017333
771	(砂) 精胎に微砂・1mm大多い。(金) やや多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 胴部最大径24.0 (焼成) 良	⅕弱	(埋土)	019335
772	(砂) 0.5mm大多い。1.5mm大少し。(金) 多い。(赤) 若干。(角) やや多い。 器内 76' 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径16.0前後 (焼成) 良	⅕	(埋土)	007323
773	(砂) 精胎に細砂わずか含む。1~3mm大やや多い。(金) 多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅕強	グリッド内	013329
774	(砂) 0.5~1.5mm大多い。(金) 多い。(赤) わずか含む。 器内外共に 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) (焼成) 良	⅕	(埋土)	024435
775	(砂) 0.5~1mm大多い。(金) 多い。(赤・角) わずか含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅕強	グリッド内	011327
776	(砂) 細砂多い。1mm大わずか。(金) 多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径20.0前後 (焼成) 良	⅕弱	グリッド内	015331
777	(砂) 0.5~1.5mm大多い。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) わずか含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅕強	トレンチ	009325
778	(砂) 細砂多い。1.5mm大若干。(金) 多い。(赤・角) わずか含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅕	グリッド内	003319
779	(砂) 細砂少し。0.5~1mm大やや多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 若干。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	⅕弱	グリッド内	012328
780	(砂) 1~2mm大多い。(金) やや多い。(赤) 多い。(角) わずか含む。 器内 54 明るい茶 (2.5YR 5.0/8.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅕強	(埋土)	004320
781	(砂) 微・細砂多量。(金) わずか。(赤) やや多い。(角) 多量。 器内 78 にお黄橙 (7.5YR 7.0/5.5) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	⅕	(埋土)	022433
782	(砂) 1.5~2mm大多い。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 含まず。(黒) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径30.0前後 (焼成) 良	⅕以下	(埋土)	006322

挿 図 番 号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
第 139 図 783	(砂) 細砂・0.5mmが多い。1mm大少し。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 口径11.6 底径38.8 器高5.7 (焼成) 良	口縁 $\frac{1}{4}$ 体部 $\frac{1}{8}$	グリッド内	018334
784	(砂) 微・細砂多量。1mm大やや多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 多量。 器内 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 器外 81 茶灰 (7.5Y R 2.5/0.5) (焼成) 良	$\frac{3}{8}$	(埋土)	026437
785	(砂) 細砂～1.5mmが多い。(金・赤) 若干。 器内 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) 器外 54 明るい茶 (2.5Y R 5.0/8.0) (焼成) 良	$\frac{3}{8}$	(埋土)	025436
786	(砂) 細砂若干。2～3mm大やや多い。(金) かなり多い。(赤) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 裾径11.2 (焼成) 良	$\frac{5}{8}$	グリッド内	002318
787	(砂) 1.5～2mmが多い。(金) 多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	$\frac{1}{8}$ 強	グリッド内	010326
788	(砂) 細砂若干。1～3mmが多い。(金) 若干。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) 器外 76 暗い黄茶 (7.0Y R 4.0/2.0) 口径29.5 胴部最大径28.5前後 (焼成) 良	$\frac{1}{8}$	グリッド内	016332
789	(砂) 1～1.5mmが多い。(金) やや多い。(赤) 多い。(角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 普通	$\frac{1}{8}$ 弱	(埋土)	008324
790	(砂) 細砂多い。1mm大かなり多い。(金) 多い。(赤・角) 含まず。 器内外共に 59 明るい茶 (3.0Y R 5.5/4.0) (焼成) 良	$\frac{1}{4}$	グリッド内	001317
791	(砂) 精胎に微・細砂少し。(金) 多い。(赤) やや多い。(角) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) 裾径11.2 (焼成) 良	$\frac{5}{8}$	(埋土)	021432
792	(砂) 細砂～1.5mmが多い。(金) 多量。(赤) わずか含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	$\frac{1}{8}$ 弱	(埋土)	023434
第 140 図 793	(砂) 精胎に微砂若干。1mm大少し。(金) 若干。(赤) 含まず。(角) やや多い。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0Y R 6.0/2.5) (焼成) 良	小破片	(最上層)	020336
794	(砂) 細砂～1mmが多い。(金) 少し。(赤) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0Y R 5.5/6.0) (焼成) 良	$\frac{1}{8}$	(最上層)	027438
795	(砂) 1.5～2mmが多い。(金) 若干。(赤) かなり多い。(角) わずか含む。 器内外共に 75 にお橙 (6.5Y R 7.5/6.0) (焼成) 良	$\frac{1}{8}$	(最上層)	005321
796	(砂) 微砂・0.5mmが多い。(金) 多い。(赤) 含まず。 器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5Y R 4.5/2.0) (焼成) 良	$\frac{1}{8}$ 弱	(最上層)	028439

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
797	(砂) 細砂～0.5mmが多い。(雲) 若干。(赤) わずか。(角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	孔器周残 ¼	(最上層)	033444
798	(砂) 微砂～細砂多い。1.5mm大若干。(金) 若干。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅝	(最上層)	034445
799	(砂) 0.5～1mmが多い。3mm大若干。(金) 少し。(赤) わずか含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	¼	(最上層)	035446
800	(砂) 細砂～1mmが多い。2mm大やや多い。(金) 多い。(赤) わずか含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅝強	(最上層)	029440
801	(砂) 精胎に微砂～細砂多い。(金) 多い。(赤) わずか含む。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	¼弱	(最上層)	030441
802	(砂) 微砂～1mmが多い。(金) やや多い。(赤) 若干。(角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	¼弱	(最上層)	032443
803	(砂) 細砂～2mmが多い。(金) 多い。(赤) 若干。 器内 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	¼	(最上層)	031442
第 141 図 804	(砂) 精胎に細砂やや多い。(金) 若干。(赤)・角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 口径9.2 胴部最大径18.6 (焼成) 良	¼		004795
805	(砂) 微砂多い。1mm大若干。(雲) 多い。(赤) 含まず。(角) 若干。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	⅝弱		007449
806	(砂) 1.5～2mm大やや多い。(金)・赤) やや多い。(黒) 少し。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器内 80 暗い黄茶 (7.5YR 3.0/1.0) (焼成) 良	破片		003794
807	(砂) 0.5mm大多量。(金) 若干。(赤)・角) かなり含む。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 102 黄茶 (2.5Y 5.0/3.0) (焼成) 良	破片		002793
808	(砂) 1～1.5mm大多量。(金) やや多い。(赤) 含まず。(黒) 少し。 器内外共に 76 暗い黄茶 (7.0YR 4.0/2.0) (焼成) 良	¼		001792
809	(砂) 細砂多い。3mm大やや多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) 多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅝強		008450
810	(砂) 微砂～0.5mmが多い。2～3mm大やや多い。(金) 多い。(赤) わずか。 (角) 若干。器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅝弱		006448

挿図 番号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
811	(砂) 細砂～2mmが多い。4mm大わずか。(金) 少し。(赤) わずか含む。 器内 78 にお黄橙 (7.5YR 7.0/5.5) 器外 70 うす茶 (5.0YR 7.5/2.5) (焼成) 良	⅝		005447
第 14 区 812	(砂) 0.5mm以下多い。(金) わずか。(赤) やや多い。(角) 多い。 器内 95 明るい茶 (1.0Y 6.5/2.0) 器外 80 暗い黄茶 (7.5YR 3.0/1.0) 器肉 81 暗い茶灰 (7.5YR 2.5/0.5) (焼成) 良	破片	14号住居	
813	(砂) 0.5mm以下多い。(金) 少し。(赤) 若干。(角) わずか。 器内外共に 82 にお黄橙 (8.0YR 6.0/2.5) 器肉 80 暗い黄茶 (7.5Y 3.0/1.0) (焼成) 良	破片	11号円形 周溝内	
814	(砂) 細砂多い。1mm大も多い。(金) 多い。(角) やや多い。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器肉 81 茶灰 (7.5YR 2.5/0.5) (焼成) 良	破片	D地区	
815	(砂) 0.5mm以下多量。(白) 若干。(赤) やや多い。(角) 多い。 器内 90 明るい茶灰 (10.0YR 6.0/2.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器肉 81 茶灰 (7.5YR 2.5/0.5) (焼成) 良	破片	D地区	
816	(砂) 1.5～2mmが多い。(金) やや多い。(赤) 若干。(角) 含まず。 器内 80 暗い黄茶 (7.5YR 3.0/1.0) 器外 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 普通	破片	15号住居東 壁攪乱土塊	
817	(砂) 細砂～1.5mmが多い。(金) 1～1.5mm多量。(赤) わずか。(角) 含まず。 器内 80 暗い黄茶 (7.5YR 3.0/1.0) 器外 78 にお黄橙 (7.5YR 7.0/5.5) (焼成) 良	破片	15号住居東 壁攪乱土塊	
818	(砂) 微砂多い。細砂多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) わずか。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	破片	15号住居東 壁攪乱土塊	
819	(砂) 精胎に微砂少し。0.5mmが多い。(金) 多い。(赤) わずか。(角) わずか。 器内 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) 器外 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成) 良	⅝	15号住居東 壁攪乱土塊	
820	(砂) 微砂多い。(金) 多い。(赤) 多い。5mm大も含む。(角) 含まず。 器内外共に 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成) 良	⅝	7号住居 近く (表採)	
821	(砂) 精胎に微砂やや多い。(黒色粒) かなり多い。(白色粒) やや多い。 器内外共に 95 明るい茶灰 (1.0Y 6.5/2.0) 器肉 112 明るいオリーブ灰 (5.0Y 6.5/2.0) (焼成) 軟質・良	胴部片	7号A(新) 住居(上層)	
822	(砂) 精胎に微砂わずか。(黒色粒) やや多い。(白色粒) わずか。 器内外共に 294 明るい灰 (N6.0) (焼成) 硬質・良	底部片	7号B(古) 住居BP21北 (+1.5)	(No15)
823	(砂) 精胎に微砂わずか。(赤) わずか。(白色粒) わずか。 器内外・器肉 16 灰味赤 (5.0R 4.0/2.5) 器内外表面から0.5mm間のみ 209 明るい青味灰 (2.5PB 5.5/2.0) (焼成) 硬質・良	底部片	A地区3号 (新) 住居 (上層)	(No45)
824	(砂) 精胎に微砂わずか。(黒色粒) わずか。(白色粒) 多い。 器内 296 灰 (N4.5) 器外 297 明るい灰 (N4.0) 器肉 294 明るい灰 (N6.0) (焼成) 硬質・良	胴部片	9号住居	

挿 番 号	胎 土 色 調 焼 成	器周残	出土位置 (レベル)	実測番号 (出土番号)
825	(砂) 精胎に微砂多い。(金) わずか。(赤) やや多い。(角) 多い。(白色粒) わずか。器内外共に 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) 器肉 102 黄茶 (2.5Y 5.0/3.0) (焼成)軟質・良	頸胴部片	A地区11号竪穴	
826	(砂) 精胎に微砂少し。 器内外肉共に 295 灰 (N5.5) (焼成)硬質・良	胴部片	6号A(新)住居 (最上層)	
827	(砂) 精胎に微砂多い。(黒色粒) かなり多い。(白色粒) かなり多い。 器内外肉共に 194 明るい青味灰 (7.5B 7.0/1.0) (焼成)硬質・良	胴部片	9号住居	
828	(砂) 微砂わずか。(赤) 多量。(黒色粒) わずか。(白色粒) わずか。 器内 294 明るい灰 (N6.0) 器外 297 暗い灰 (N4.0) 器肉 116 灰味赤 (5.0R 4.0/2.5) 器内自然釉 102 黄茶 (2.5Y 5.0/3.0) (焼成)硬質・良	底部片	5号住居 (最上層)	
829	(砂) 精胎に微砂多い。(白色粒) やや多い。 器内 297 暗い灰 (N4.0) 器外 113 暗いオリーブ灰 (5.0Y 3.5/0.5) 器肉 296 灰 (N4.5) 器内外自然釉 153 灰味黄緑 (2.0G 5.0/1.0)	胴部片	2号住居 (-20cm)	
第 144 図 830	(砂) 微砂わずか。(金) わずか。(白色粒) やや多い。 器内 159 緑味灰 (5.0G 5.0/0.5) 器外 202 青味灰 (1.0PB 4.5/2.0) 器肉 202 青味灰 (1.0PB 4.5/2.0) (焼成)硬質・良	胴部片	17号住居 南壁中央 寄り	
831	(砂) 精胎に微砂わずか。(金) やや多い。(赤) わずか。(白色粒) やや多い。 器内外共に 159 緑味灰 (5.0G 5.0/5.0) 器肉 258 紫味灰 (5.0P 4.5/2.0) (焼成)硬質・良	胴部片	15号住居	
832	(砂) 精胎に微砂わずか。(金) わずか。(赤) わずか。(白色粒) やや多い。 器内 159 緑味灰 (5.0G 5.0/0.5) 器外 202 青味灰 (1.0PB 4.5/2.0) 器肉 258 紫味灰 (5.0P 4.5/2.0) (焼成)硬質・良	胴部片	9号住居 17号住居 (床面)	
833	(砂) 精胎に微砂わずか。(赤) わずか。 器内・器外上位 159 緑味灰 (5.0G 5.5/0.5) (焼成)硬質・良 器外中位 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成)硬質・良 器肉・器外下位 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成)硬質・不良	{ 上位片 中位片 下位片	{ 17号住居(Na26) 17号住居南壁中央寄り 9号住居(最上層)	
834	(金) やや多い。(白) やや多い。 器内・器外上位 159 緑味灰 (5.0G 5.5/0.5) (焼成)硬質・良 器肉・器外中位 86 灰味黄茶 (8.5YR 4.5/2.0) (焼成)硬質・普通 器外下位 83 にお橙 (8.0YR 5.5/6.0) (焼成)硬質・不良	{ 胴部片 胴底部片 底部片	{ 17号住居南壁中央寄り 19号住居埋土 17号住居(Na33)	
第 145 図 835	(砂) 細砂多い。1cm大やや多い。(金・角) 若干。(赤) 含まず。 器内外共に 63 明るい茶 (3.5YR 5.5/7.0) (焼成)やや悪い。			007611

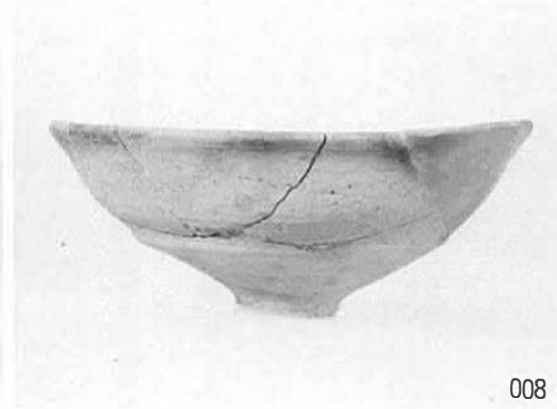
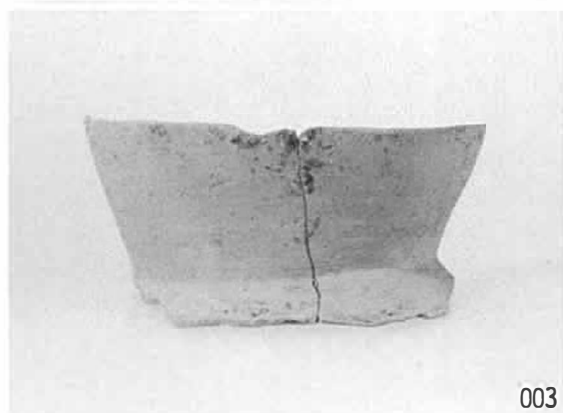
図 版

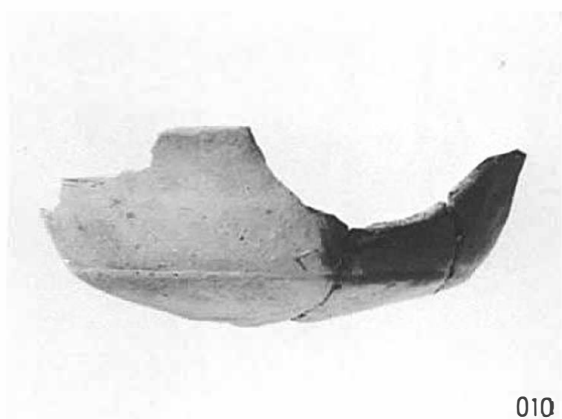
図版152～211 D地区出土遺物（A地区出土土器 823・825 を含む）

図版212 寸 描（1～5）

図 版

D 地区(遺物)





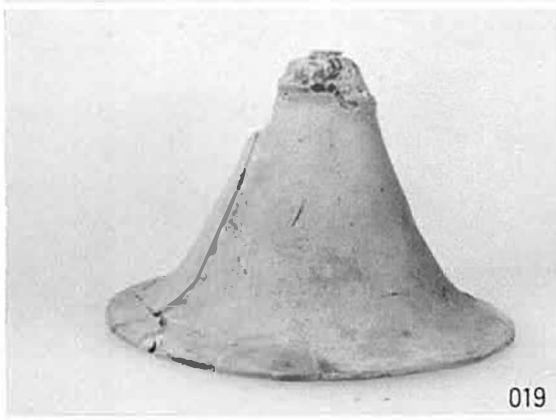
010



017



013



019



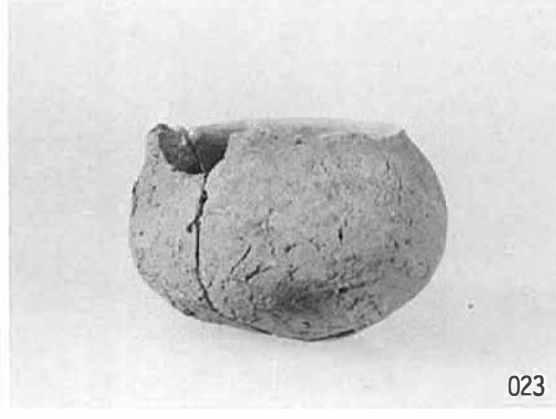
014



020



015



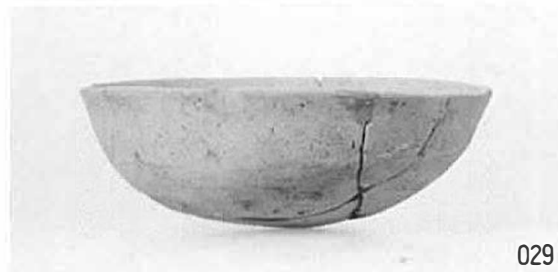
023



024



028



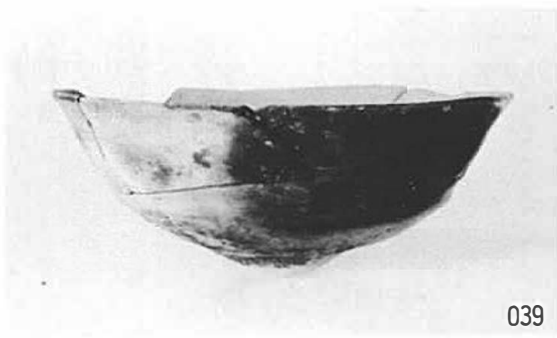
029



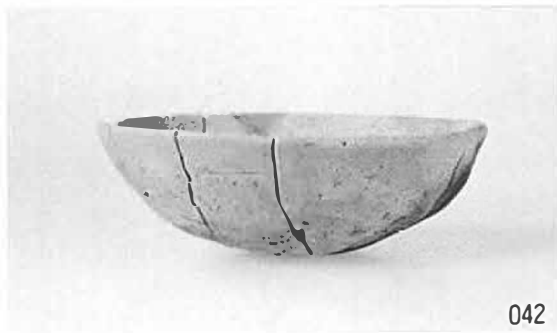
030



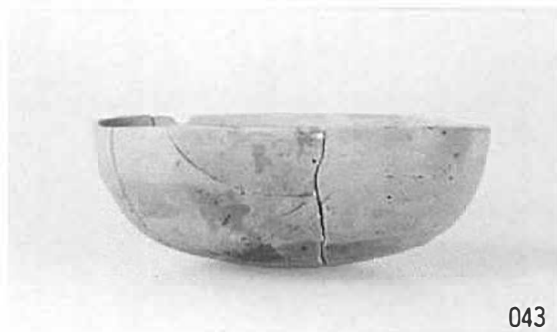
033



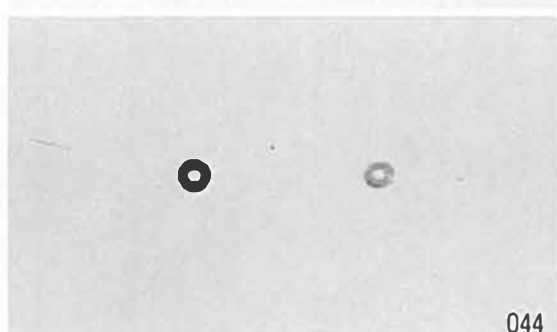
039



042



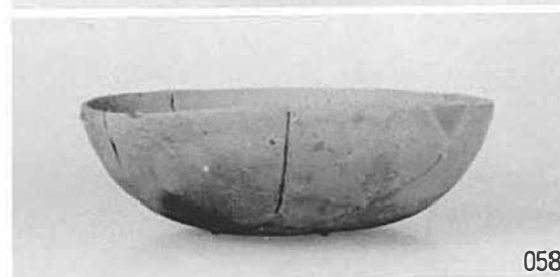
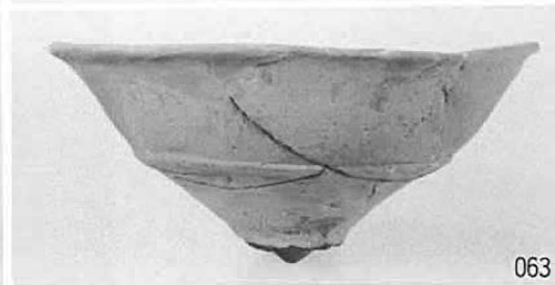
043



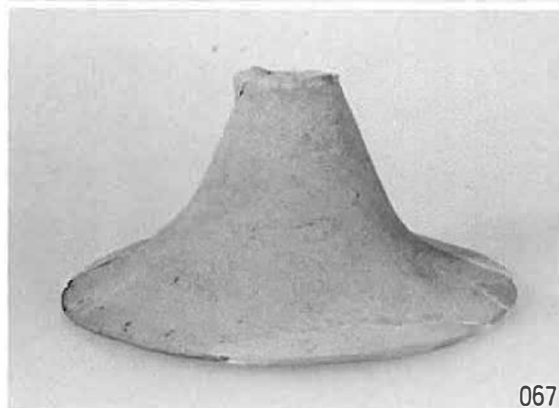
044

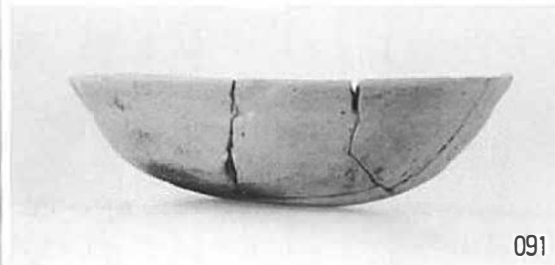
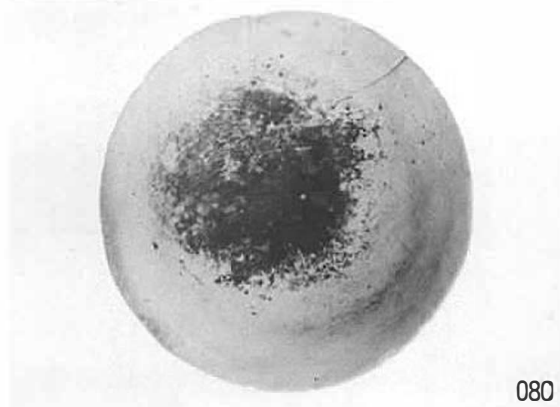
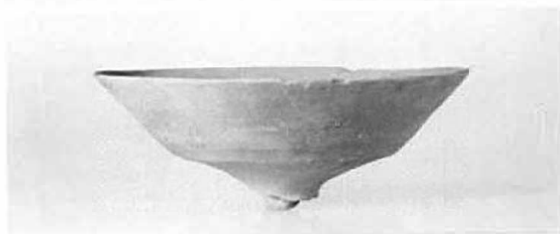
1号住居跡出土土器 ③

2号住居跡出土土器・ガラス小玉

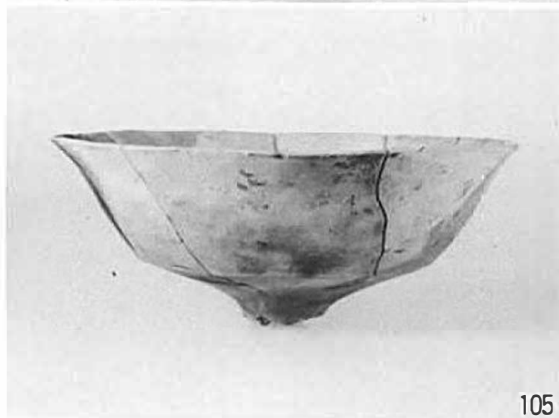
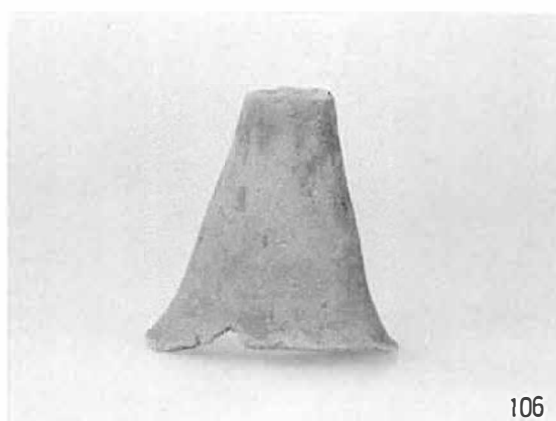


4号住居跡出土土器 ①





5号住居跡出土土器 ①



5号住居跡出土土器②・6号A(新)住居跡出土土器①



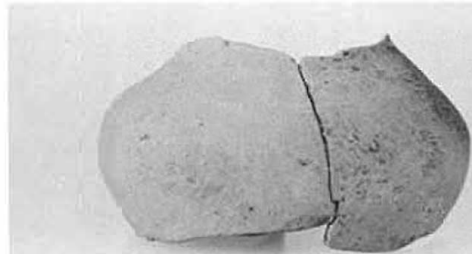
112



116



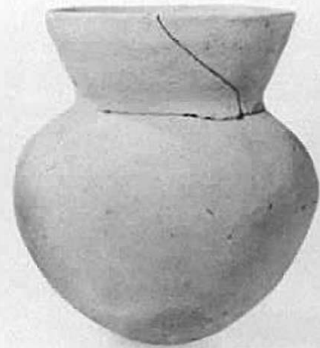
113



126



114



127



115



130

6号A(新)住居跡出土土器②

6号B(古)住居跡出土ガラス小玉
7号A(新)住居跡出土土器①



131



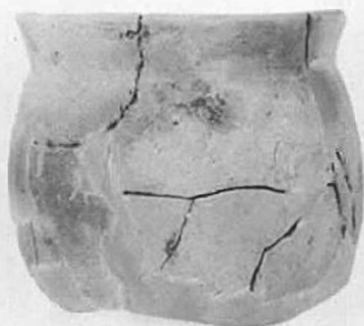
140



136



141



137



142



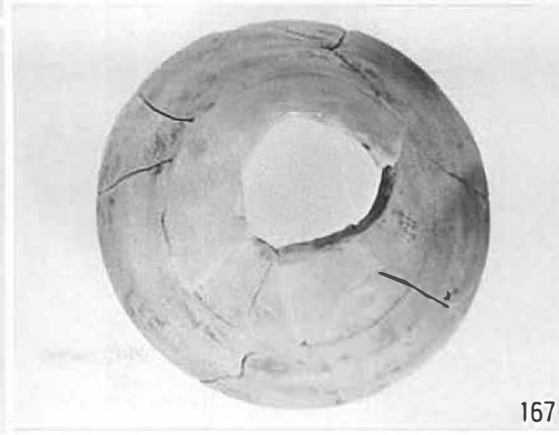
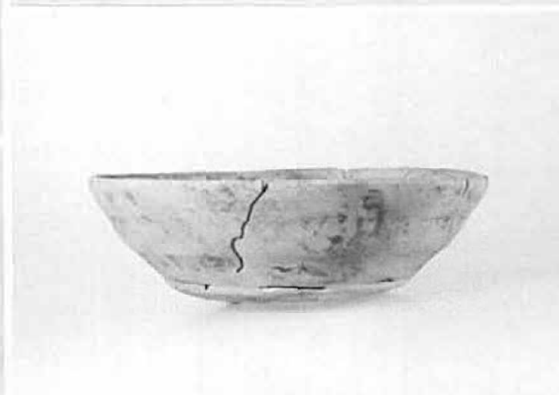
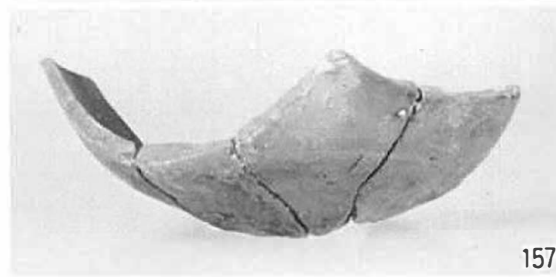
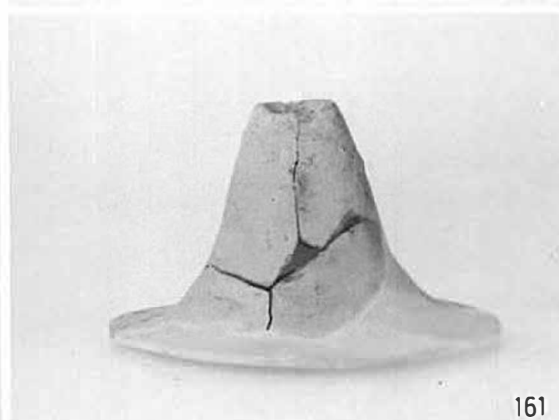
143



139



145





169



170



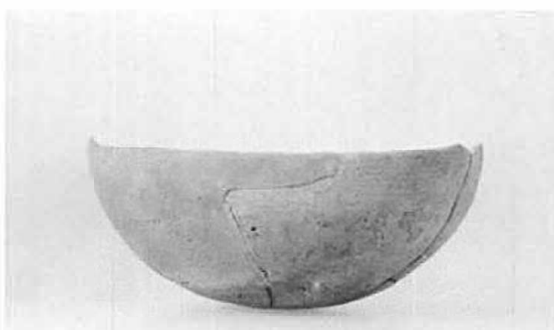
171



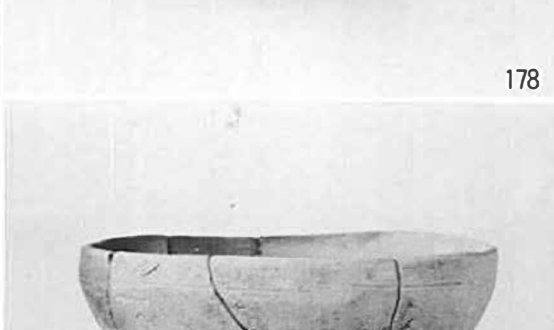
175



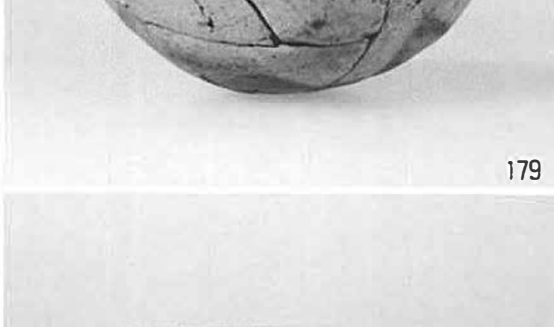
177



178



179

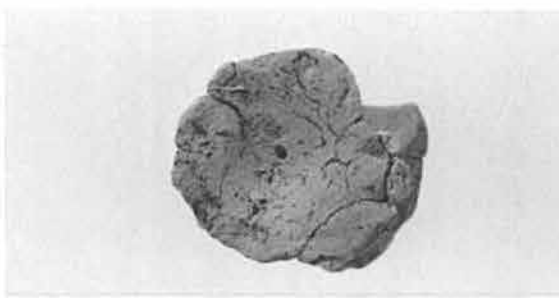


180

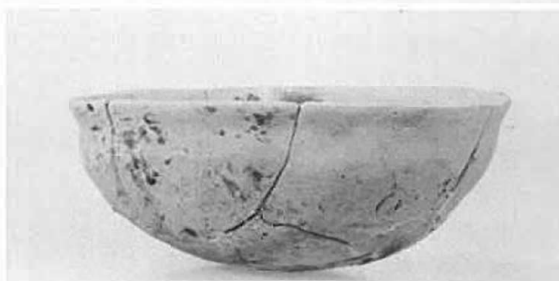
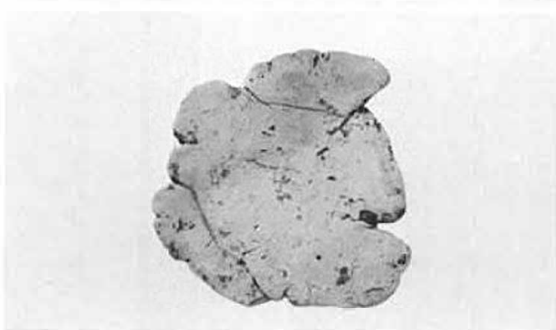




197



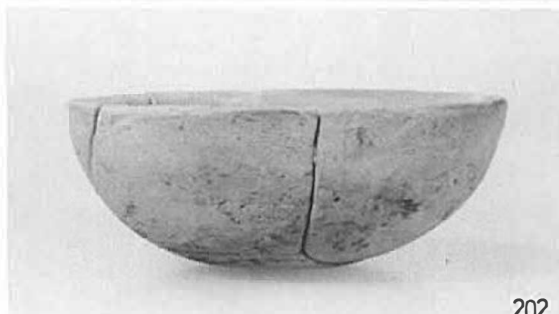
199



201



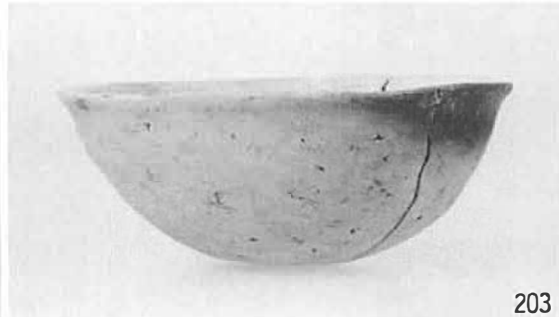
198



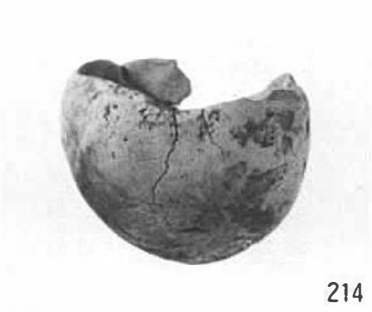
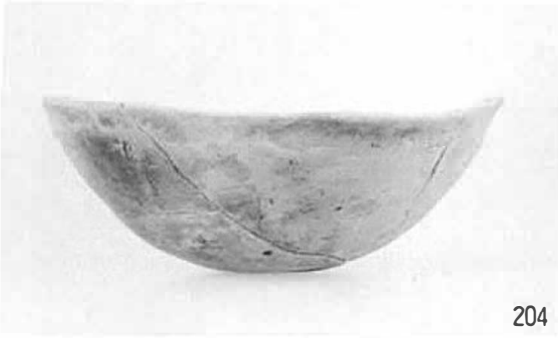
202

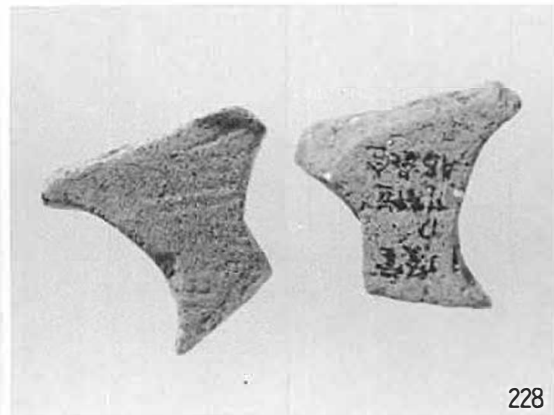
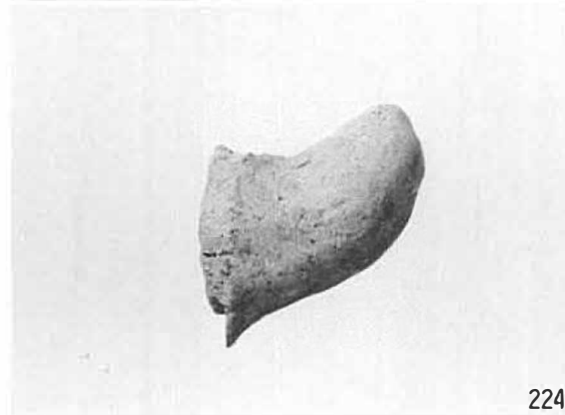
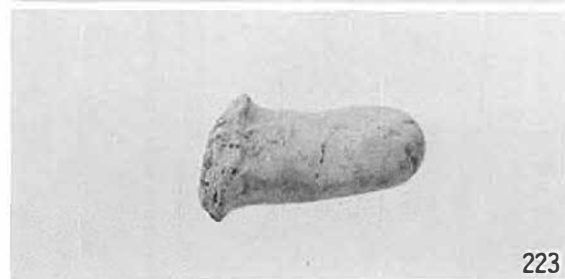
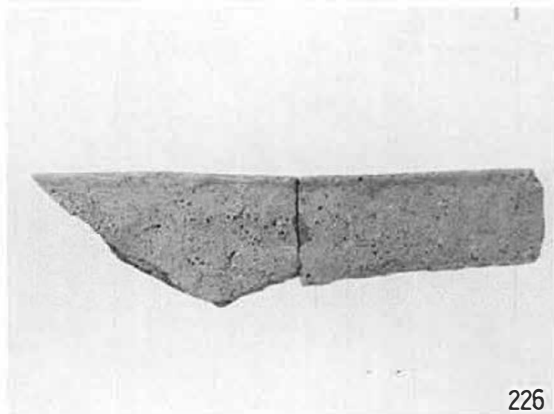
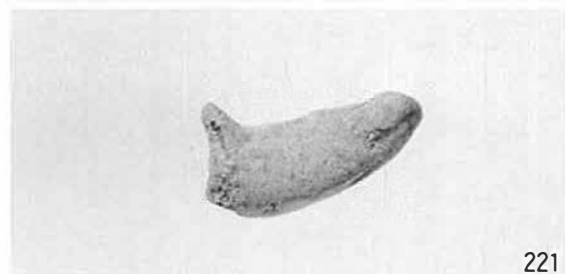
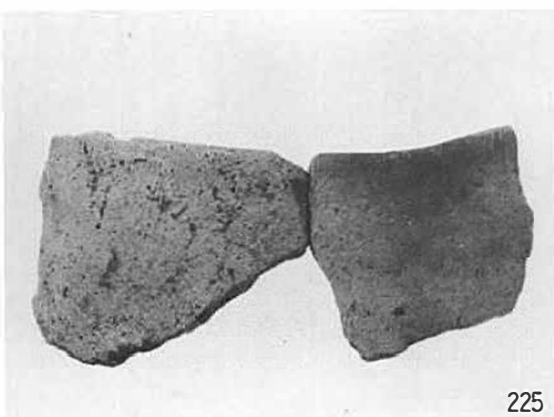
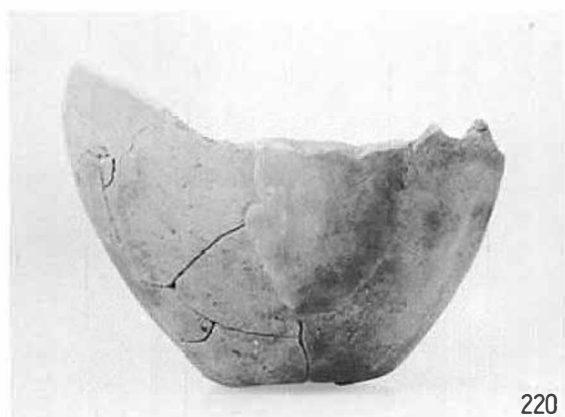


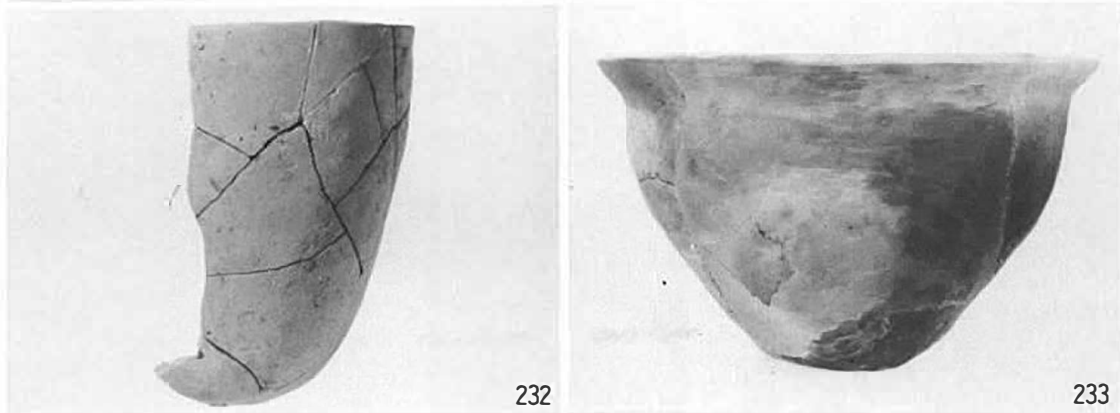
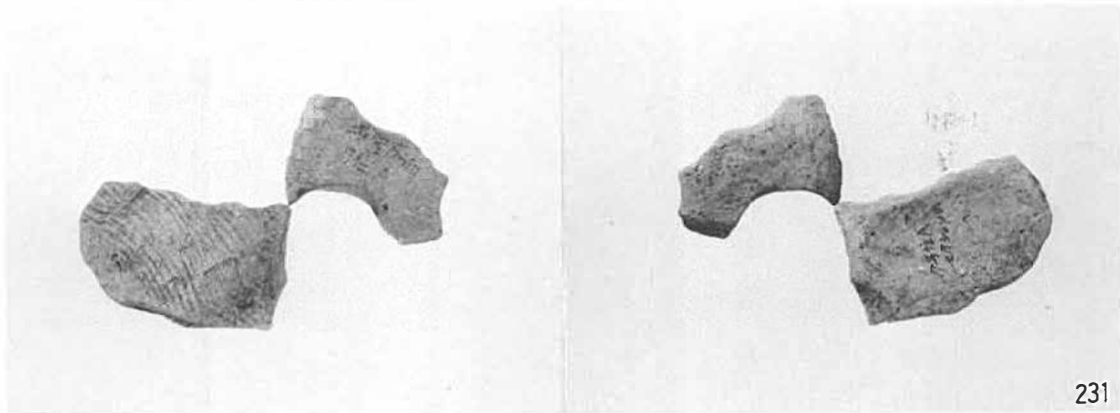
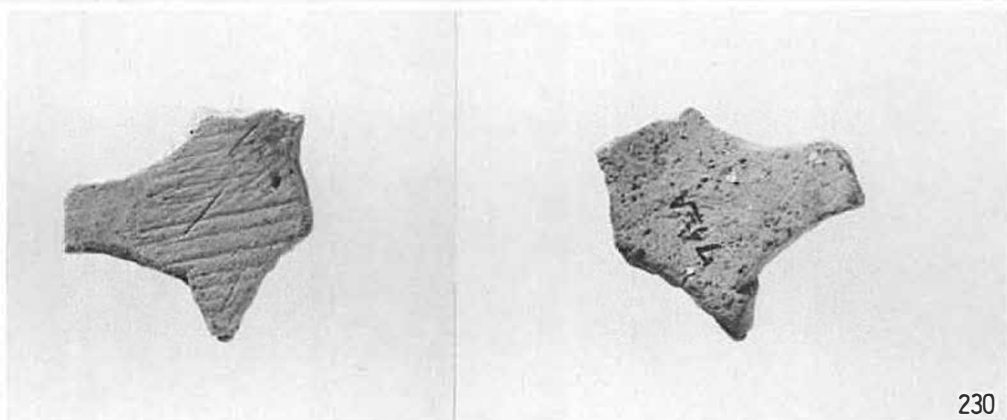
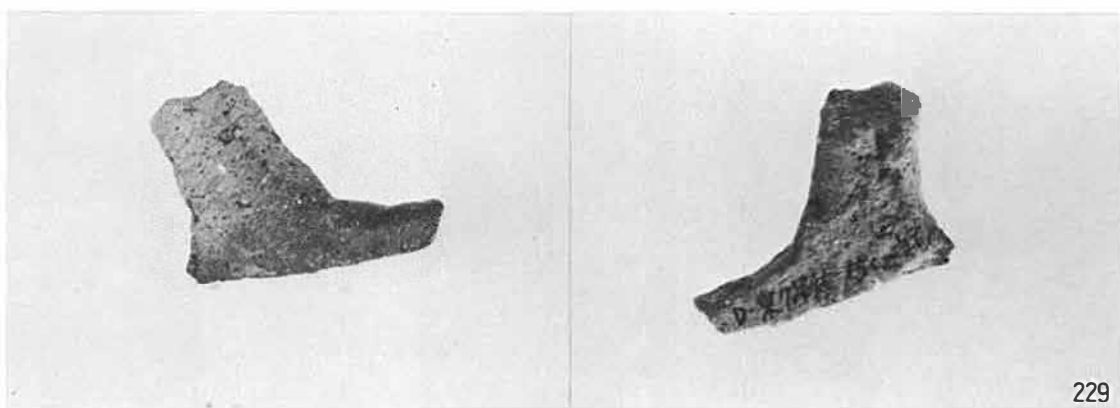
200



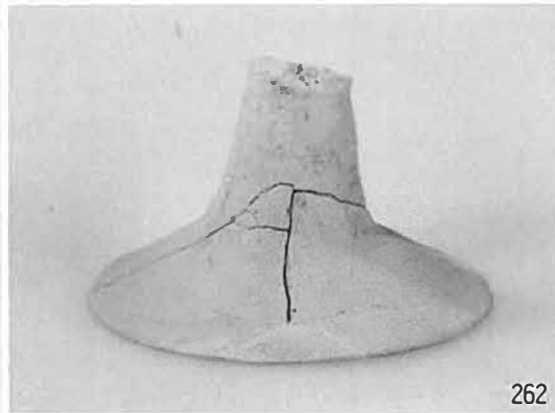
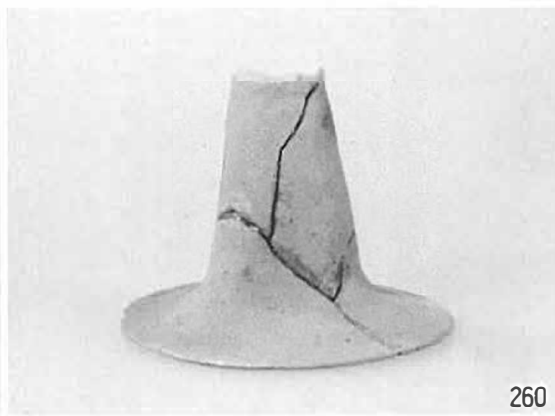
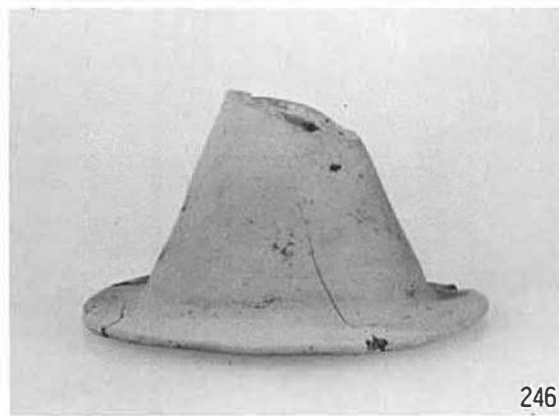
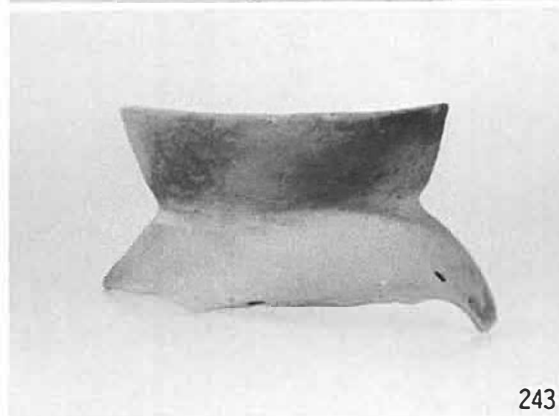
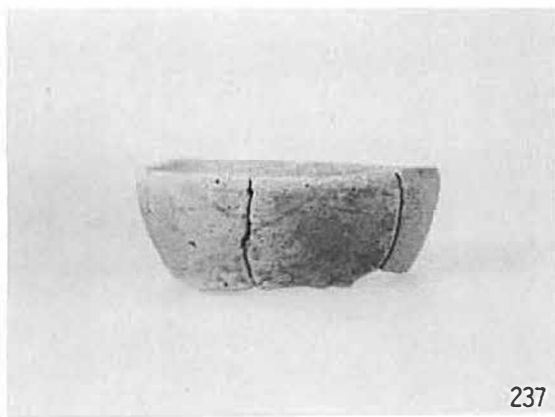
203

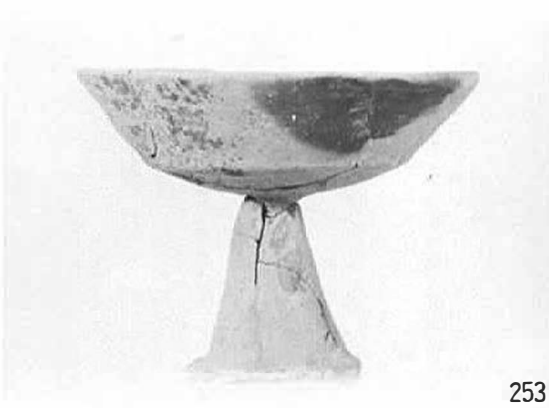






7号A(新)住居跡出土土器 ⑨・同M24出土鉄刀子





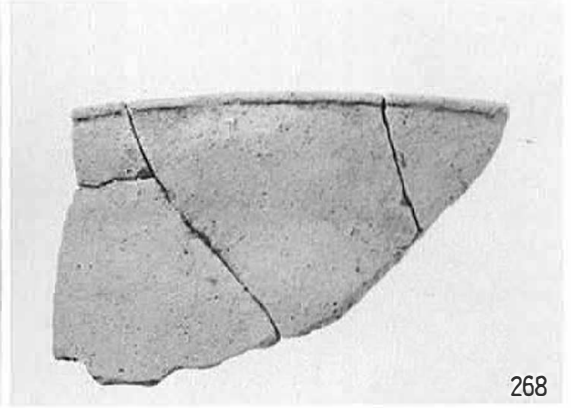
253



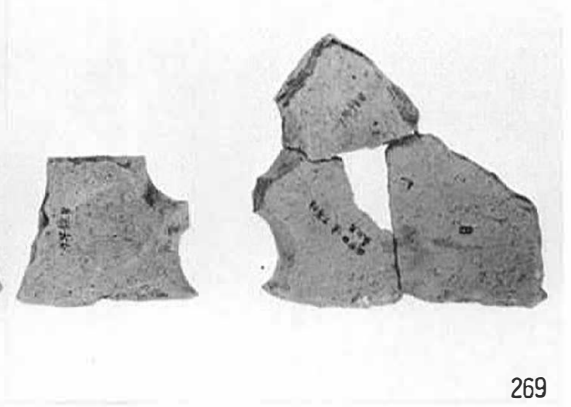
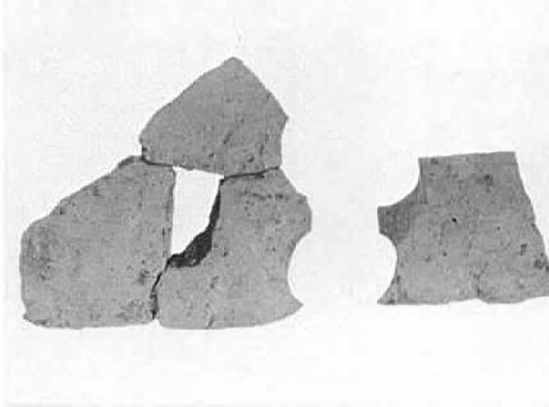
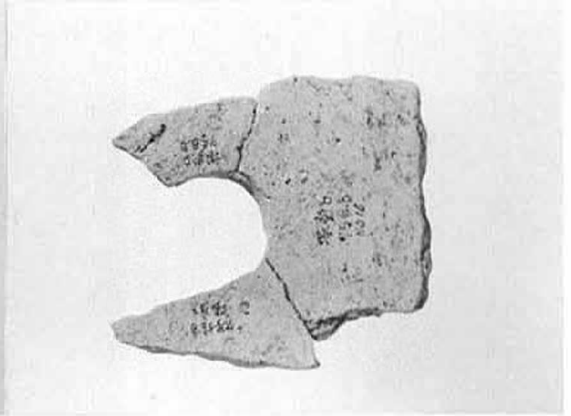
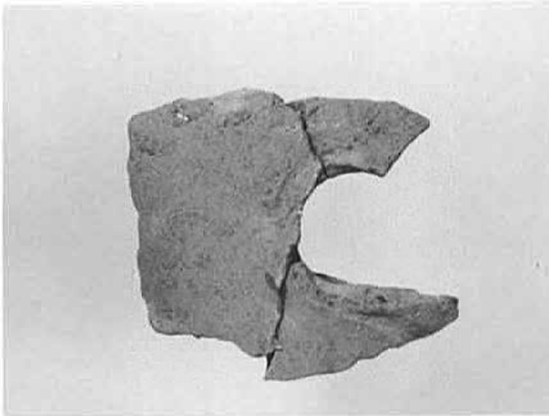
264



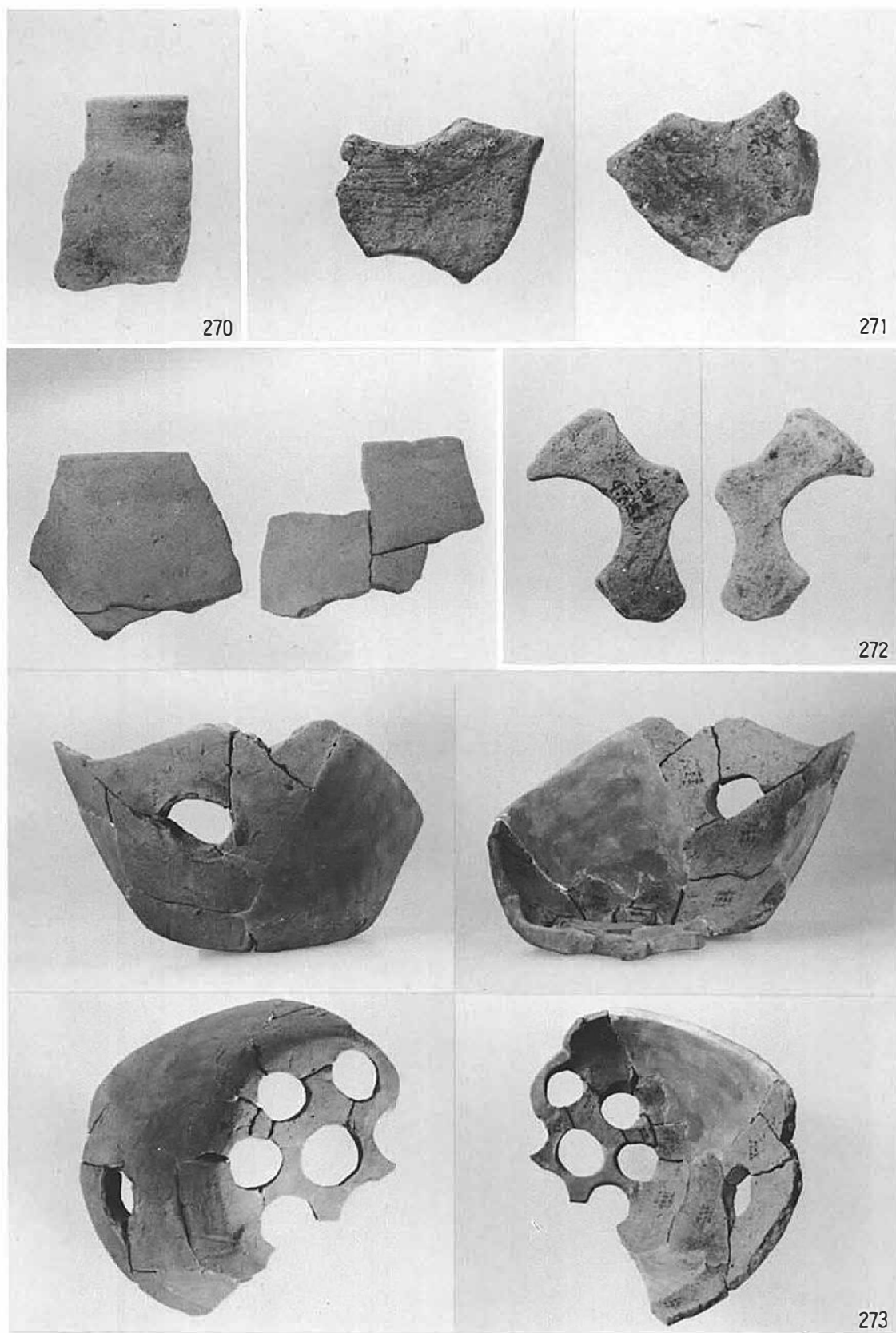
265



268



269



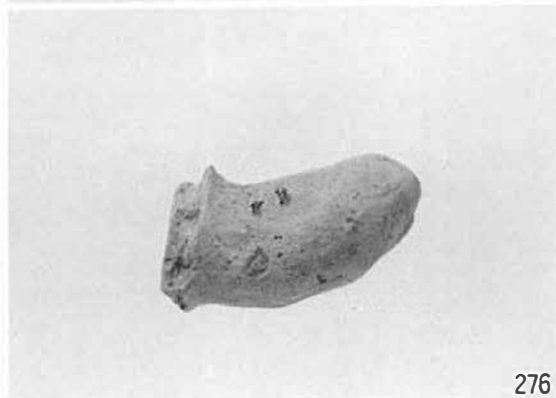
7号B(古)住居跡出土土器③



273



275



276



277



279



281

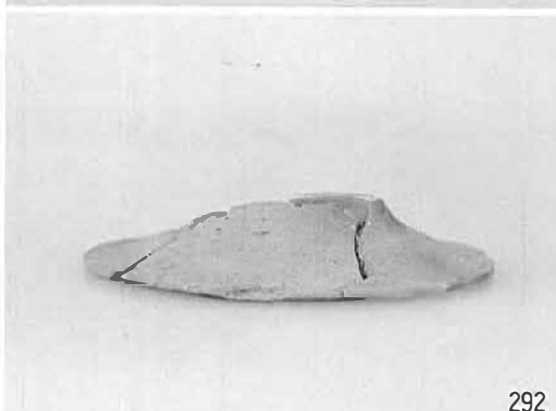
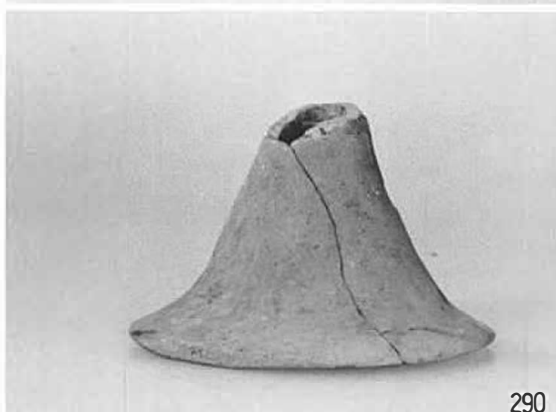
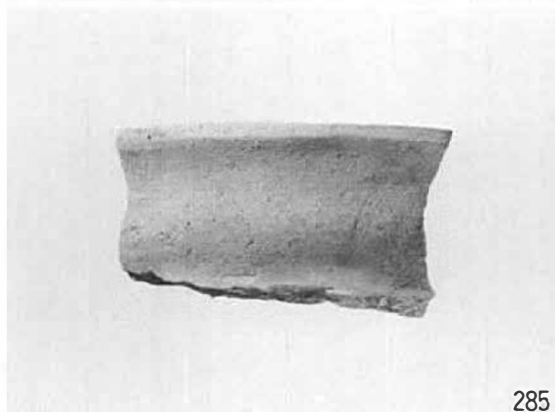
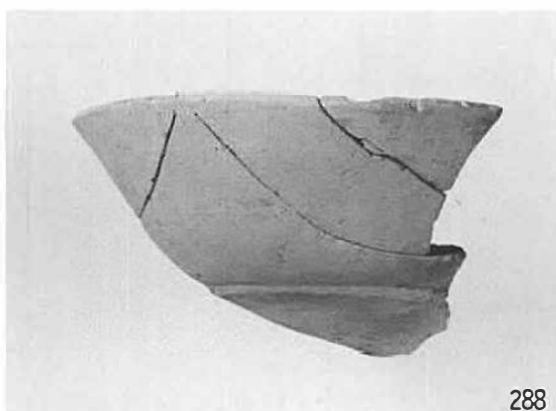


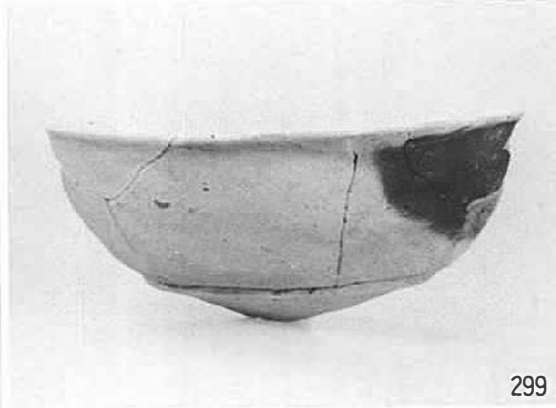
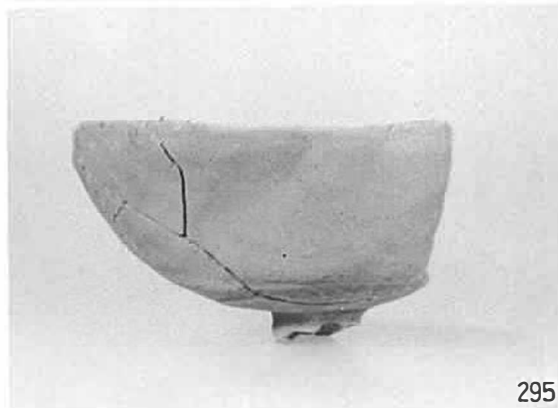
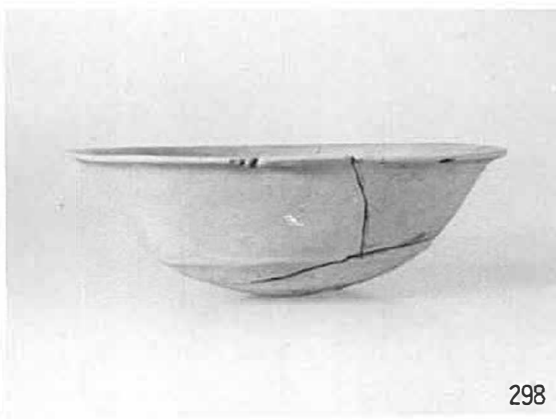
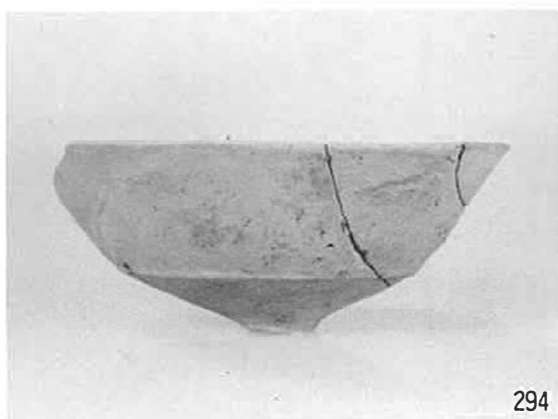
280



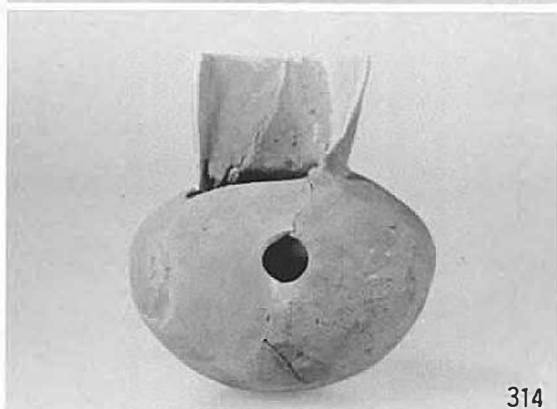
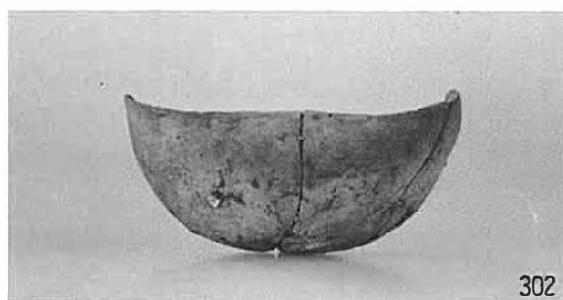
282

7号B(古)住居跡出土土器④
9号住居跡出土土器①



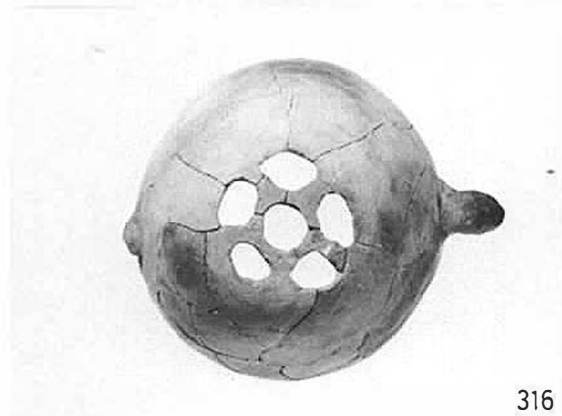


9号住居跡出土土器 ③





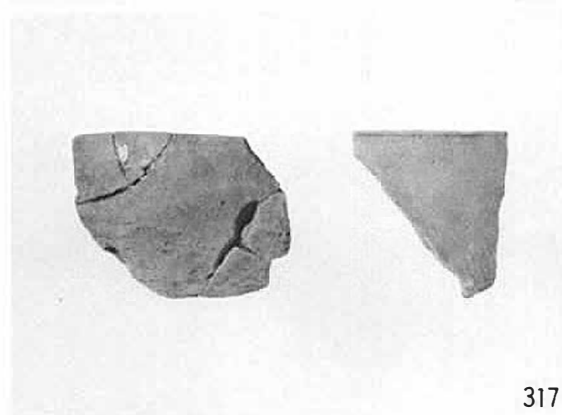
319



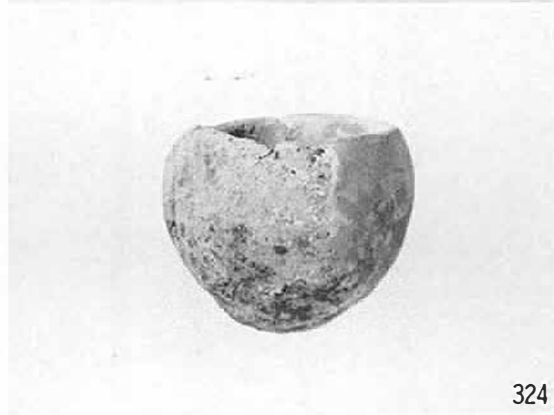
316



320



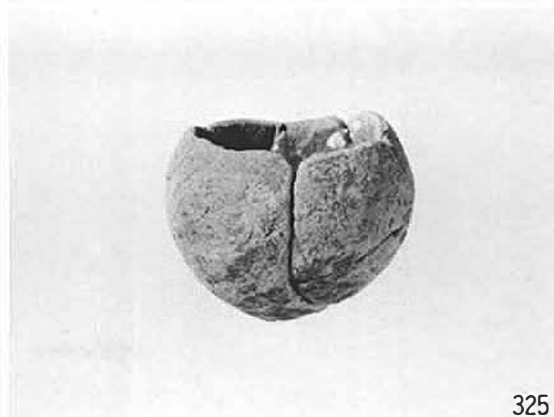
317



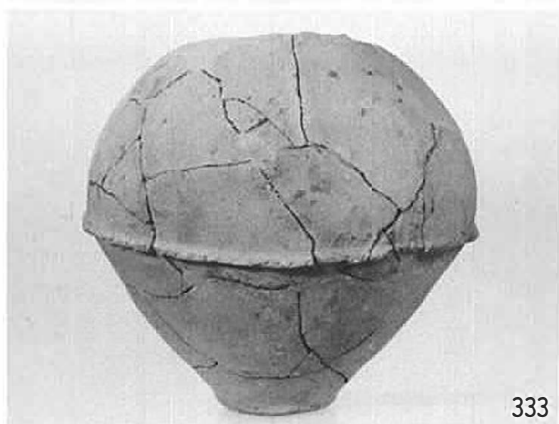
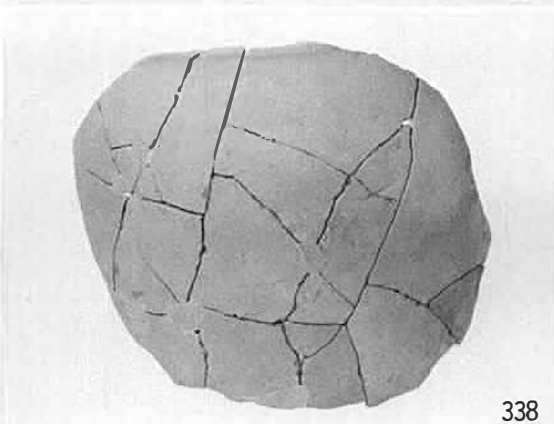
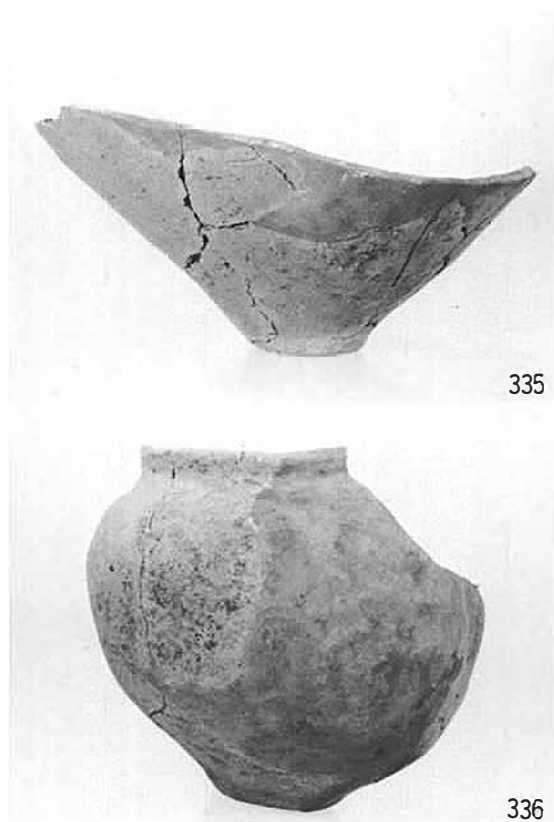
324



318



325



9号住居跡出土土器 ⑥
10号住居跡出土土器 ①





348



353



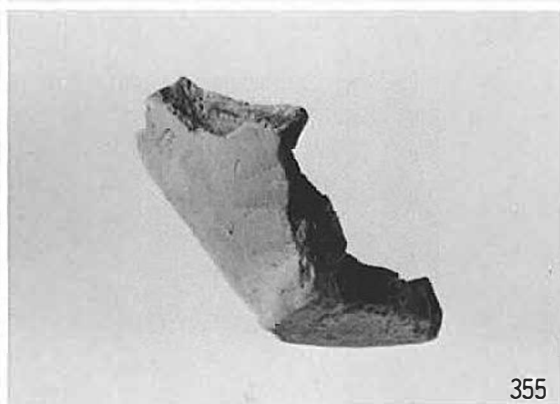
349



354



351



355



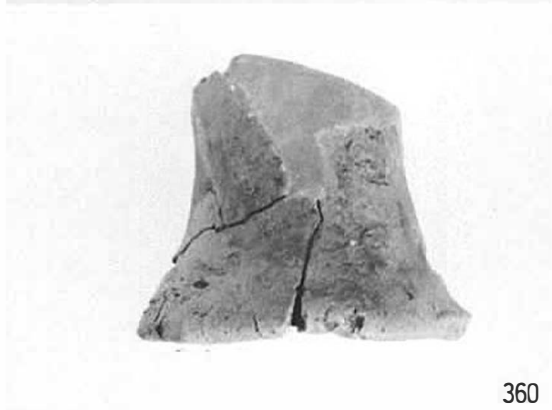
352



359



363



360



364



361



365



362

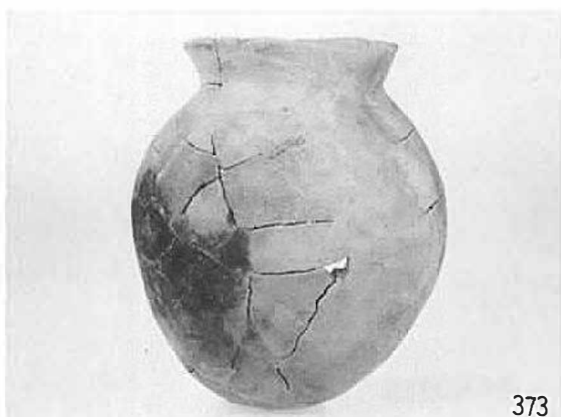


367

10号住居跡出土土器 ④
11号住居跡出土土器 ①



369



373



370



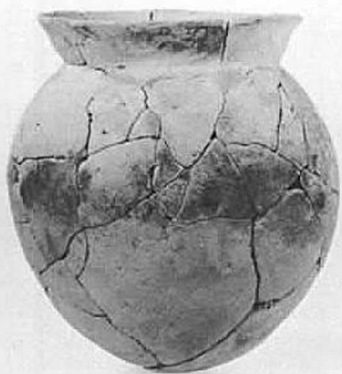
376



371



377



372



378



380



387



381



388



382



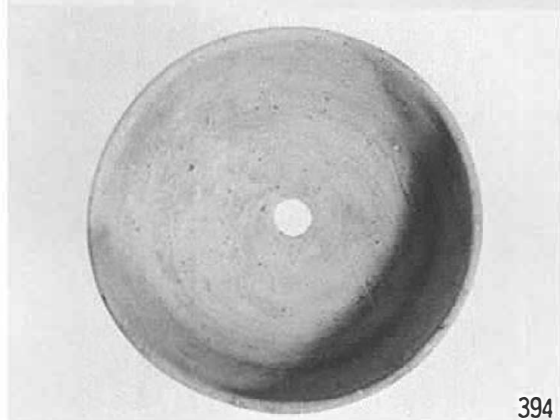
391



383



392



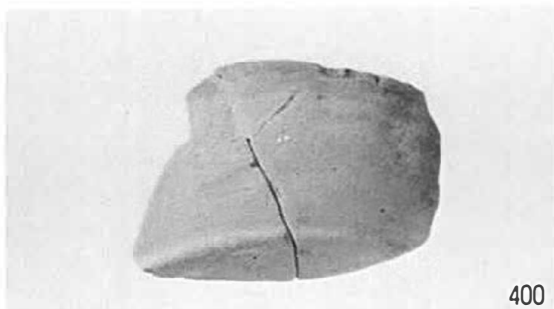
394



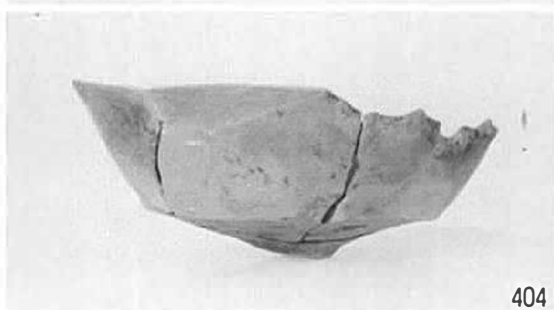
396



399



400



404



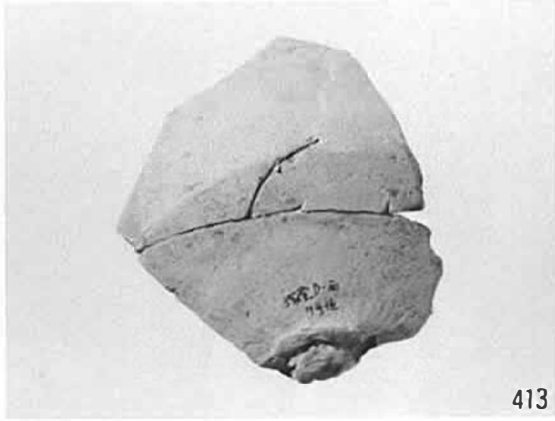
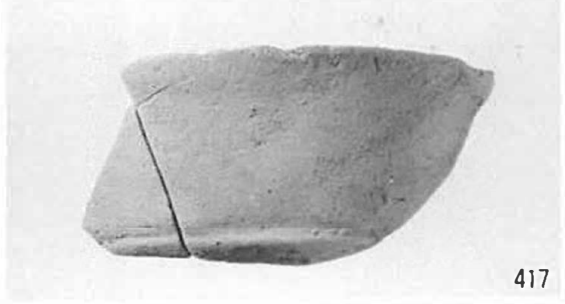
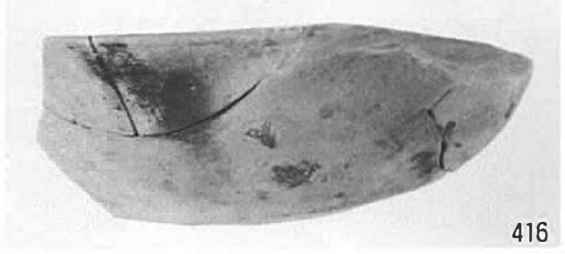
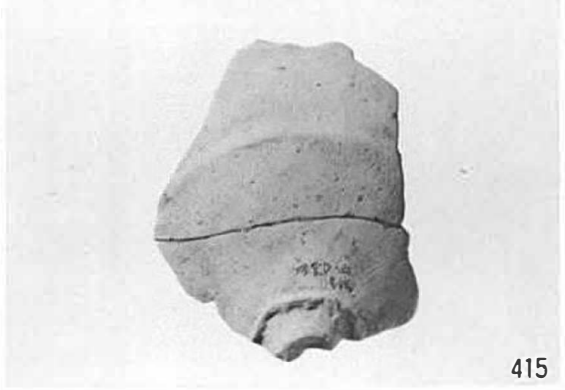
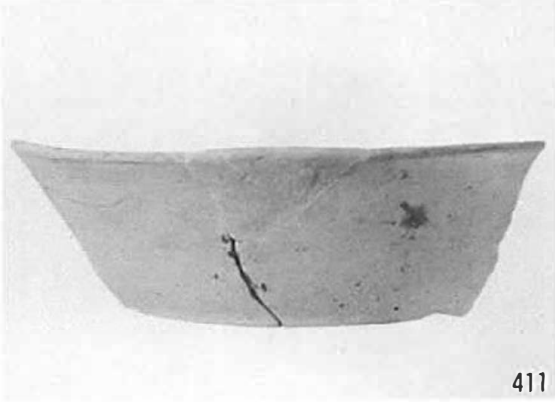
407



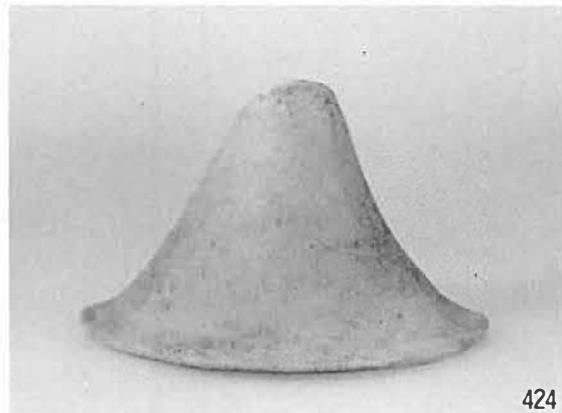
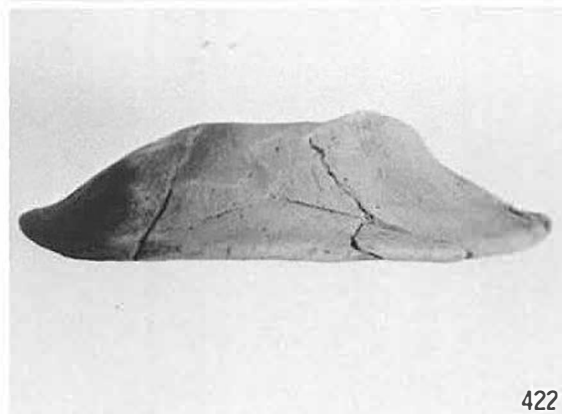
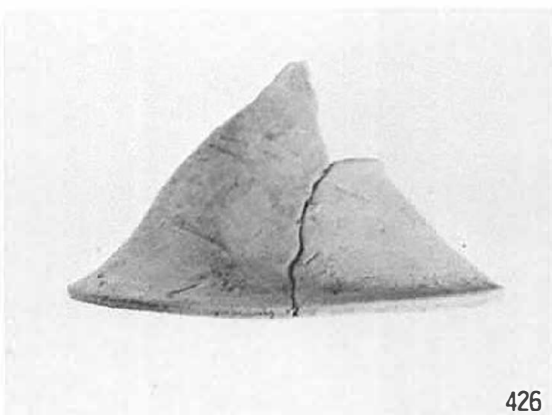
408



409

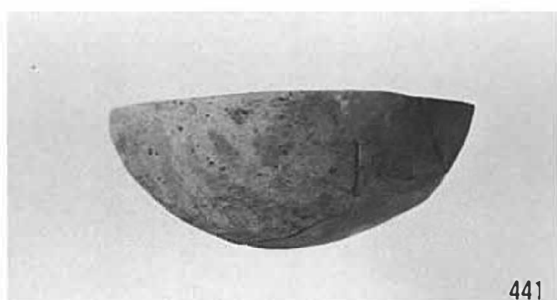


11号住居跡出土土器 ⑤





433



441



434



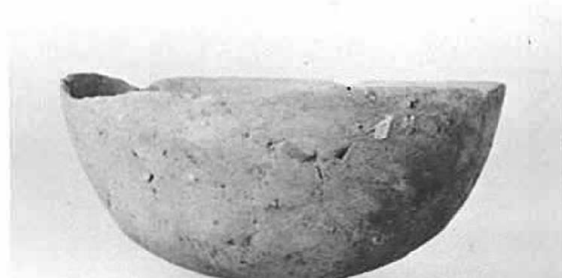
442



435



443



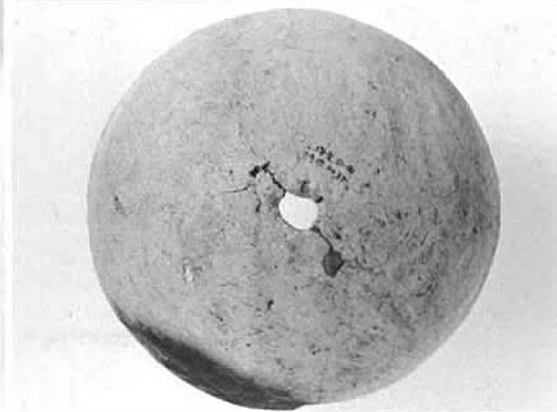
438

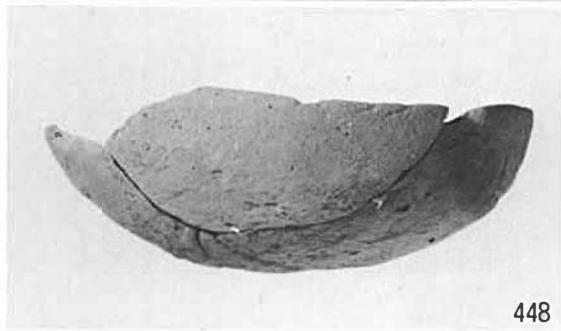
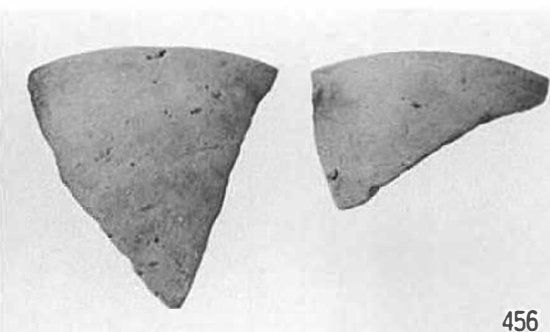
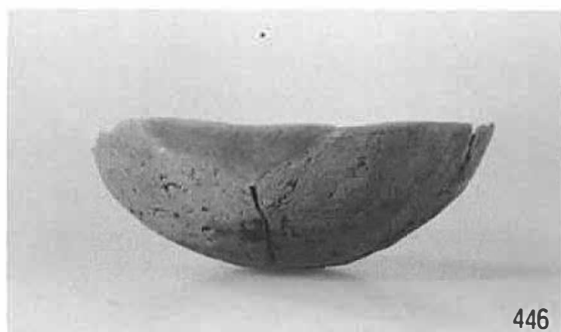


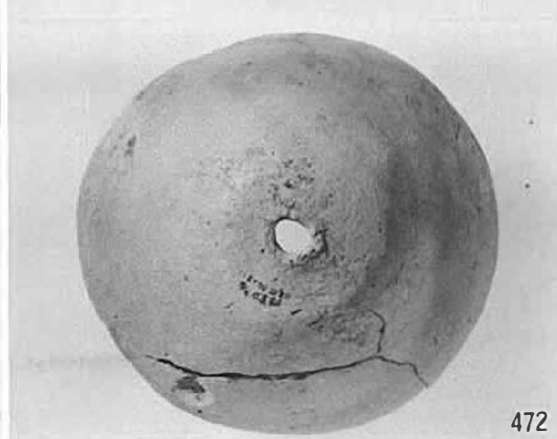
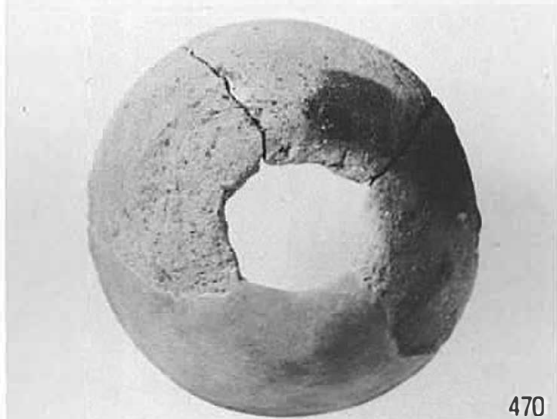
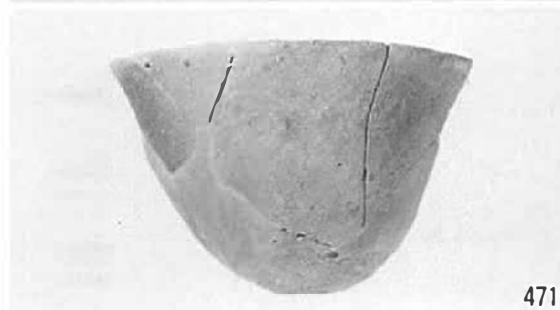
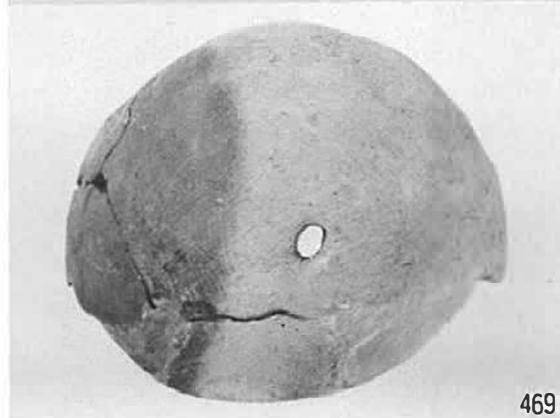
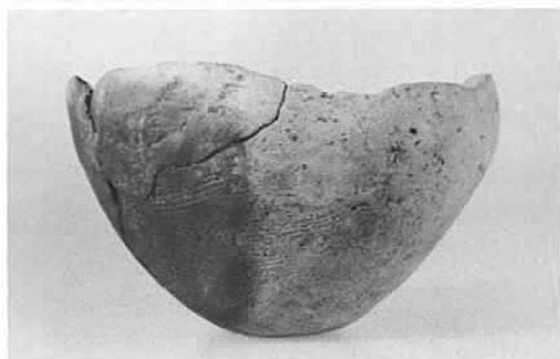
445

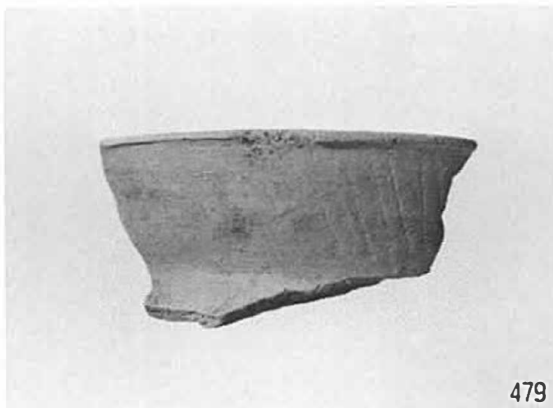
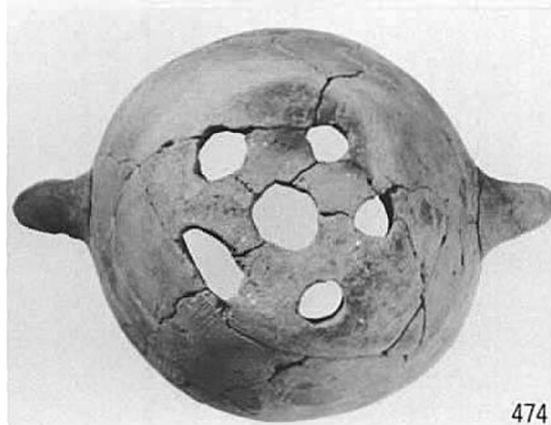


439









479



480



鉄 No. 3



鉄 No. 4



482

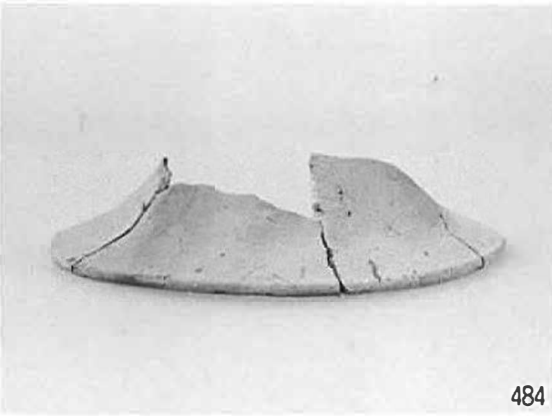


478



483

11号住居跡出土土器 ⑩・鉄刀子
12号住居跡出土土器 ①



484



489



485



490



487



491



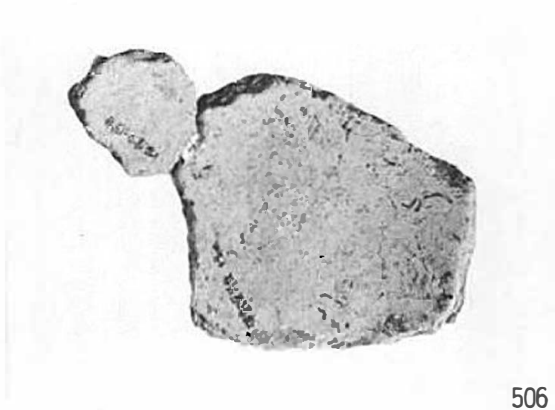
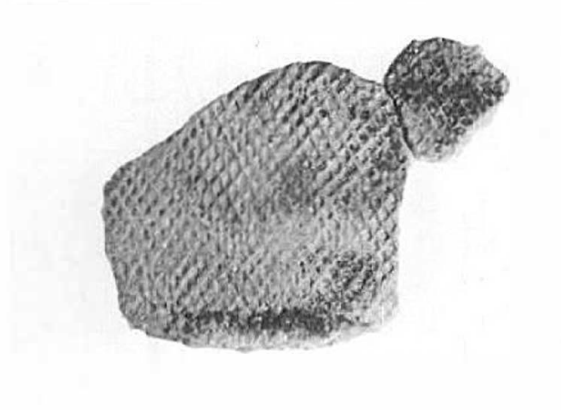
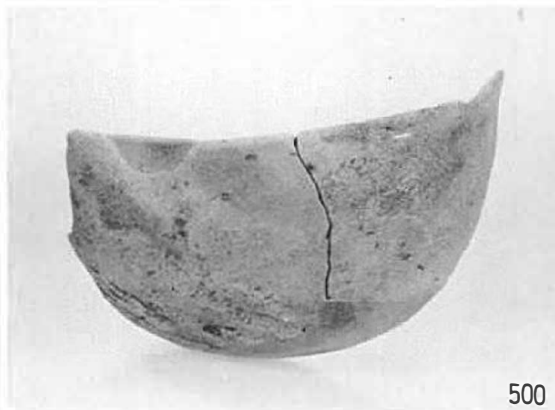
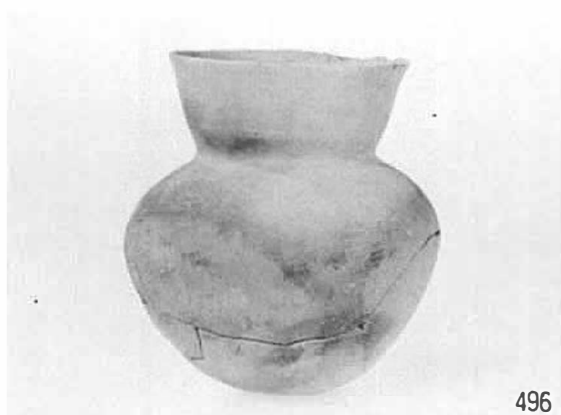
488



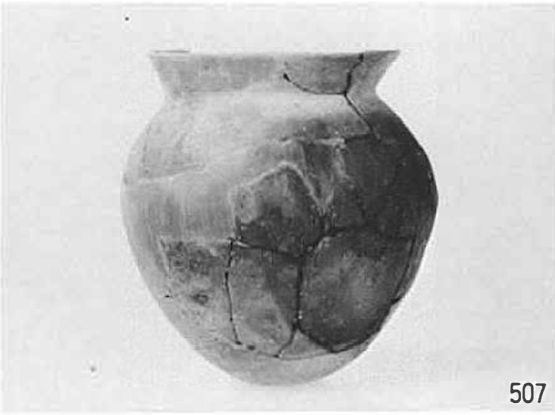
492



494



13号住居跡出土土器
13・14号住居跡出土土器



507



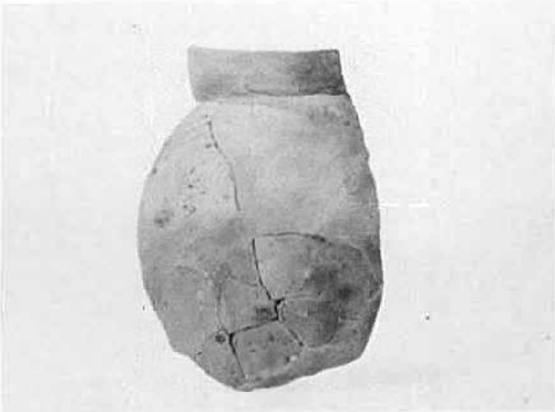
510



508



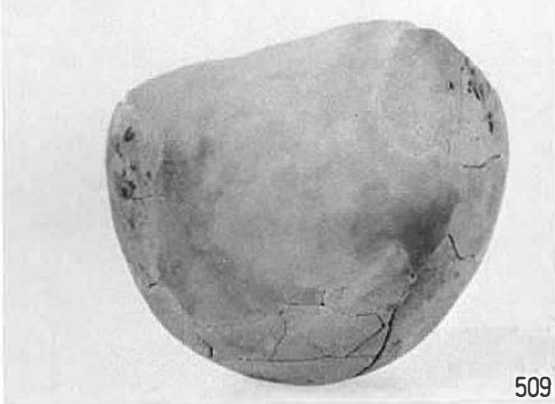
512



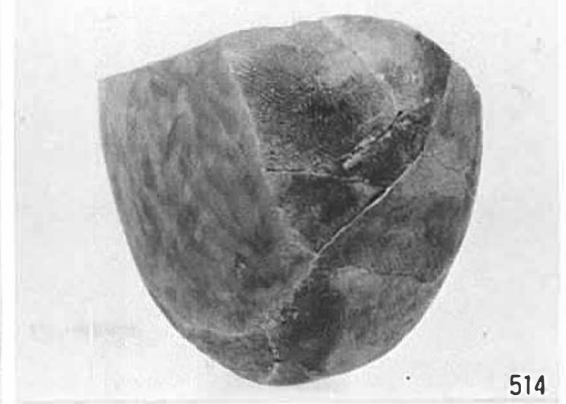
509



513



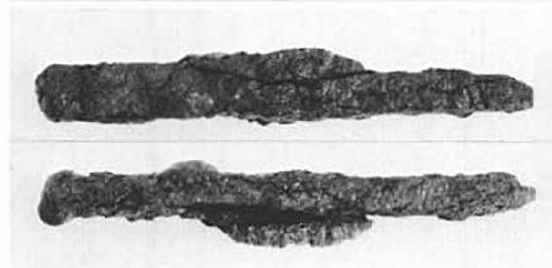
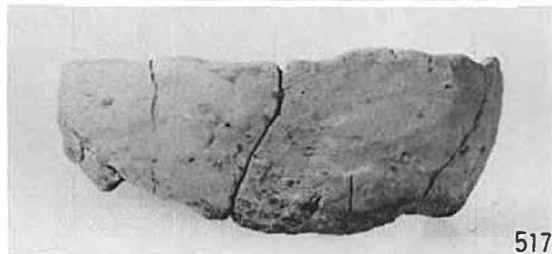
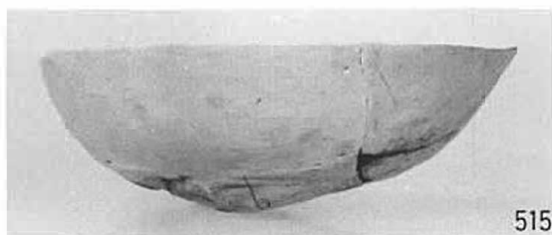
509



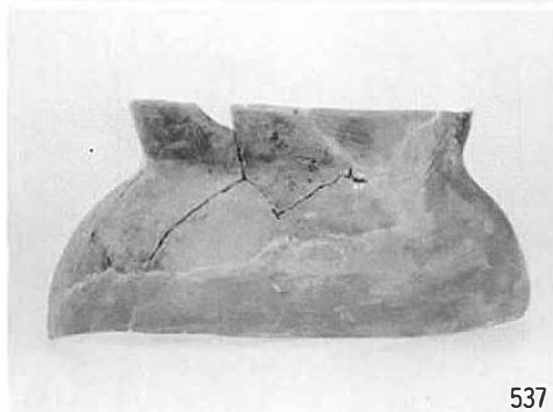
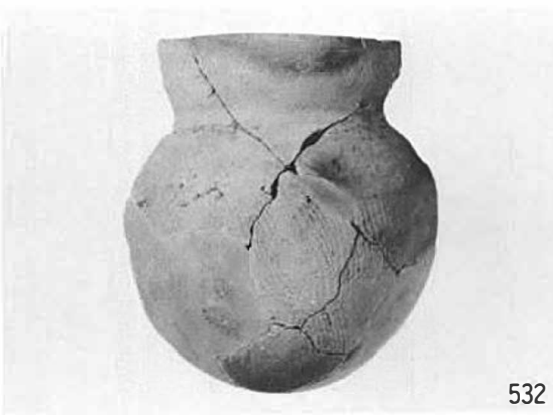
514

14号住居跡出土土器

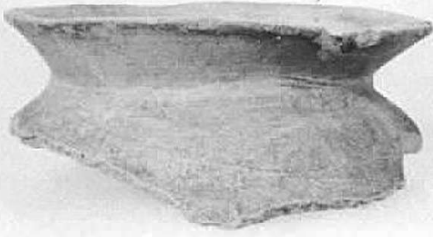
15号住居跡出土土器 ①



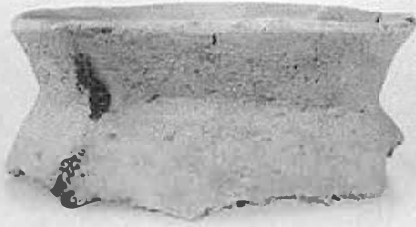
15号住居跡出土土器 ②
16号住居跡出土土器・鉄鏝



17号住居跡出土土器 ①



538



541



543



544



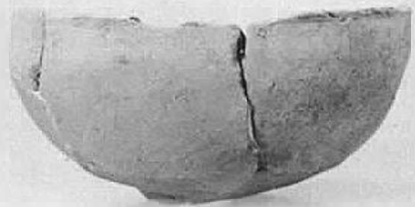
546



547



549

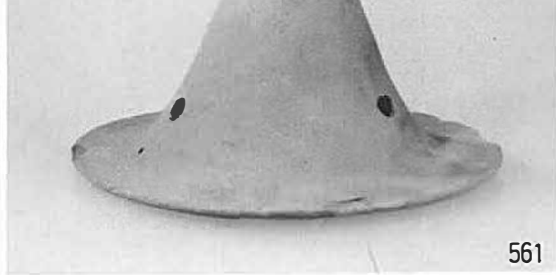
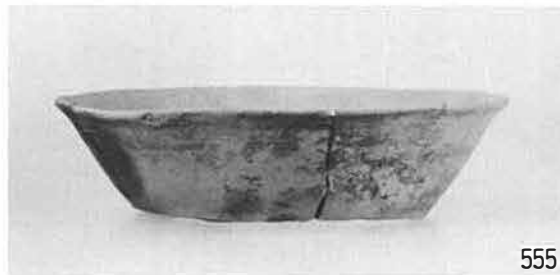
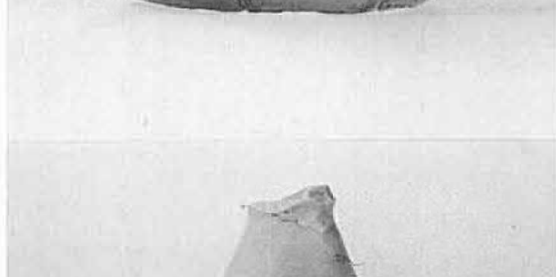
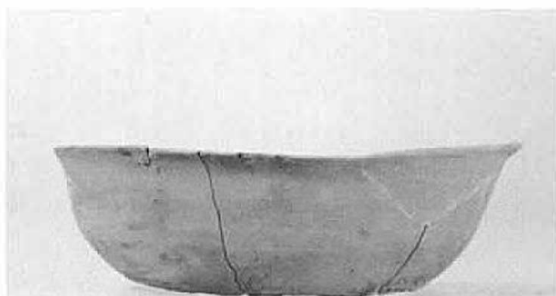
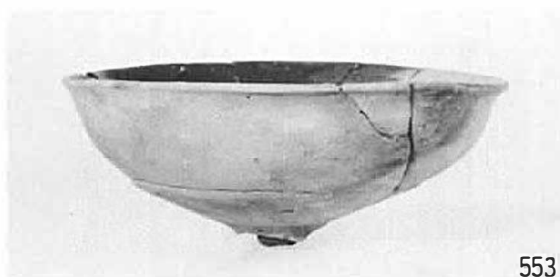


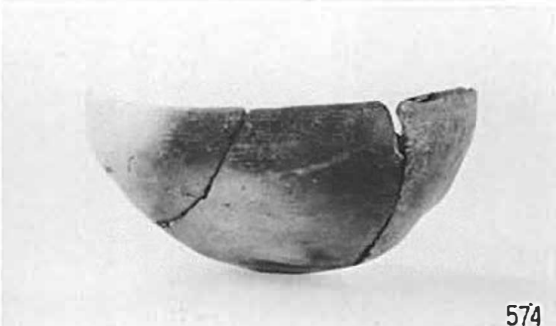
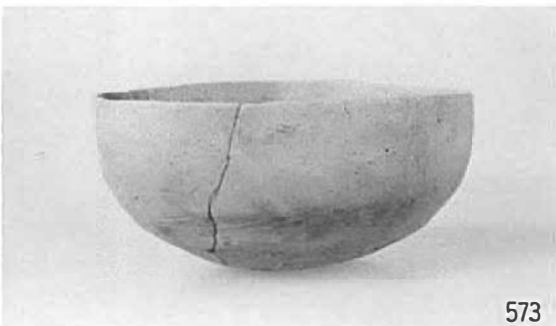
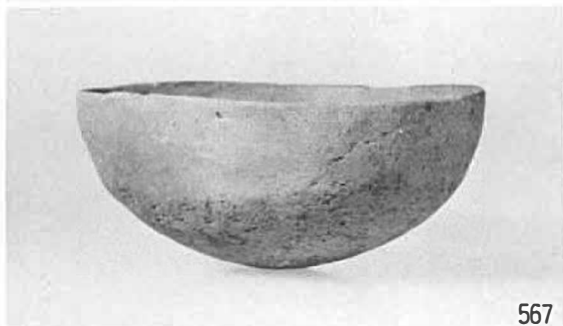
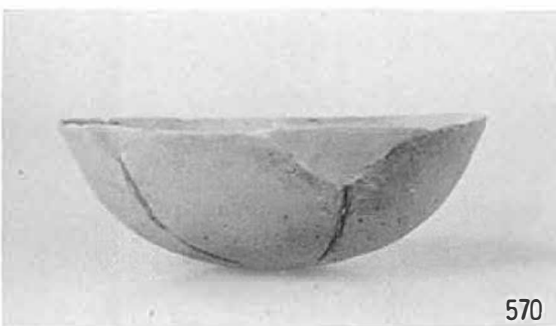
550



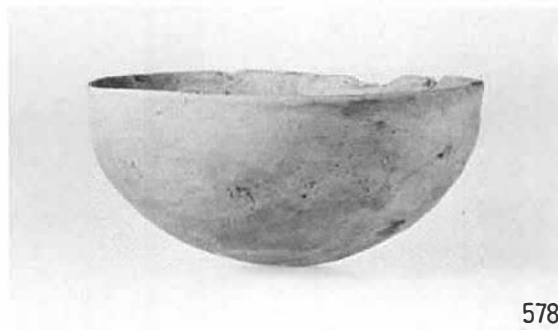
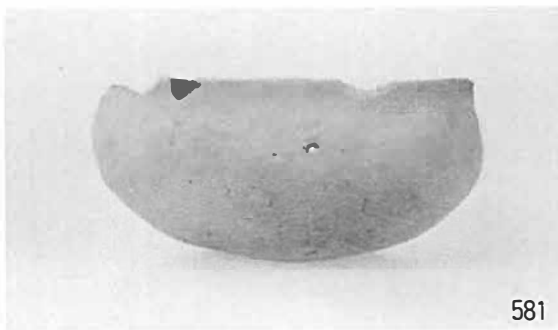
552

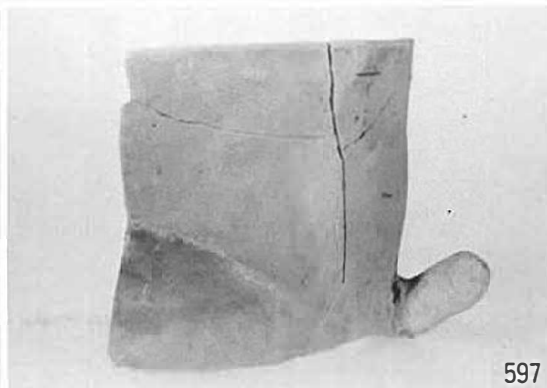
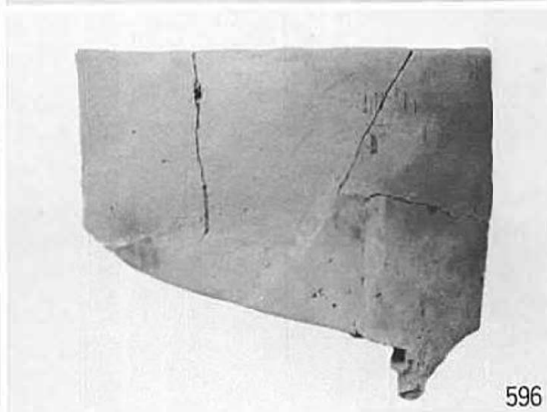
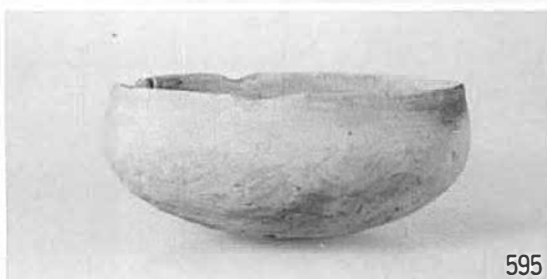
17号住居跡出土土器 ②

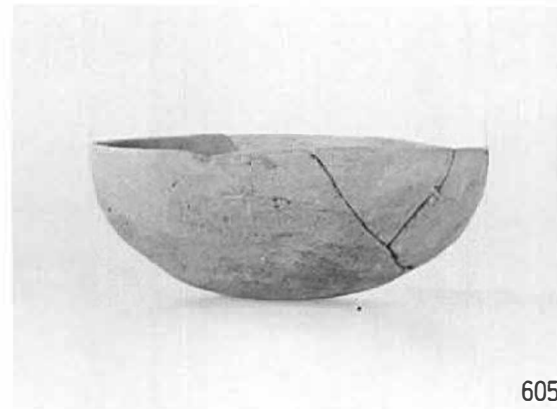
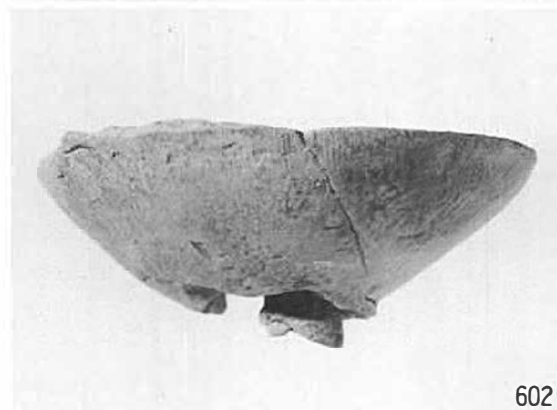
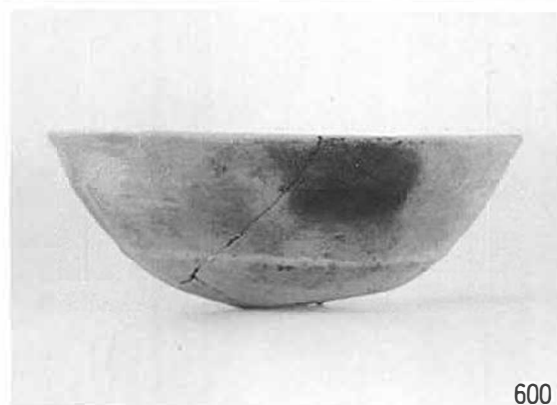
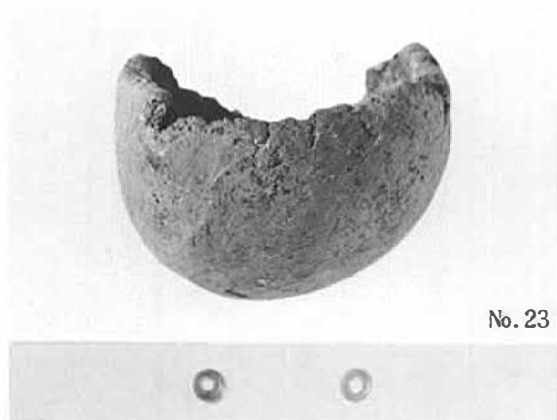




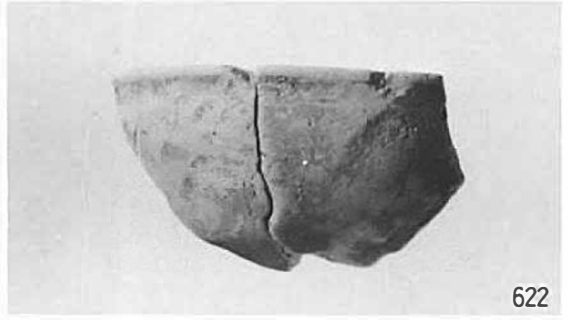
17号住居跡出土土器 ④







17号住居跡出土土器 ⑦・ガラス小玉
18号住居跡出土土器





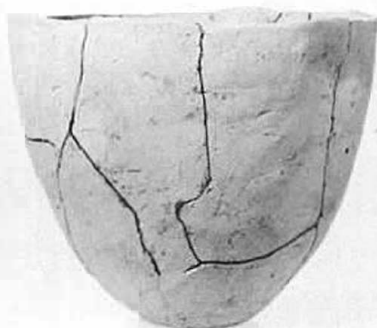
630



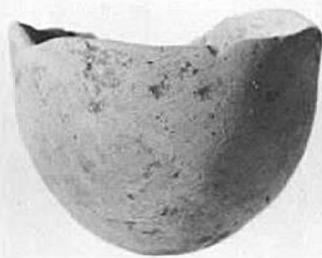
632



633



634



635



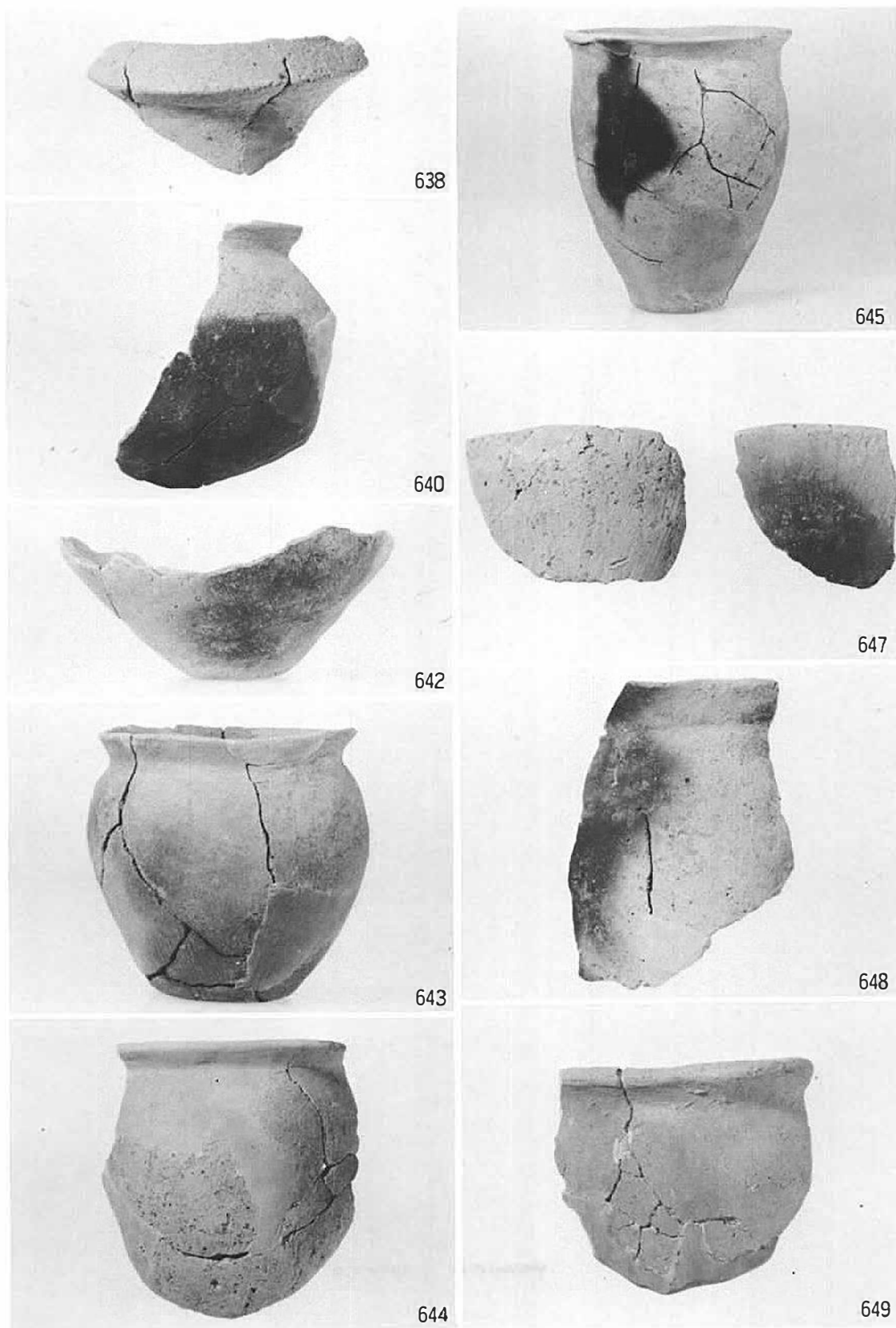
636



637



No. 2



21号住居跡出土土器



657



701



706



662



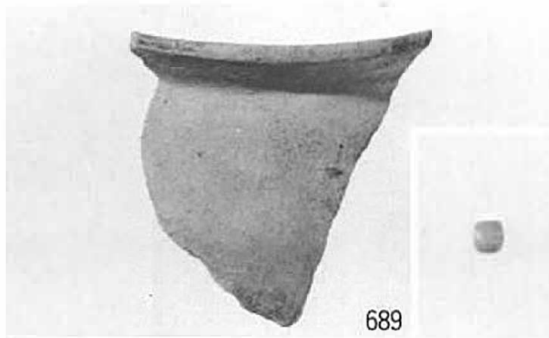
707



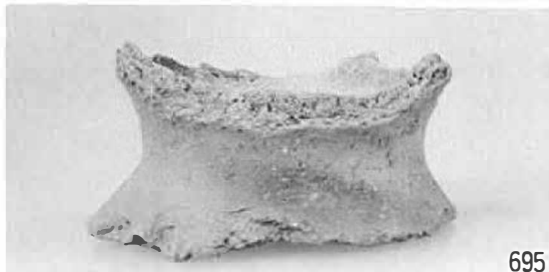
687



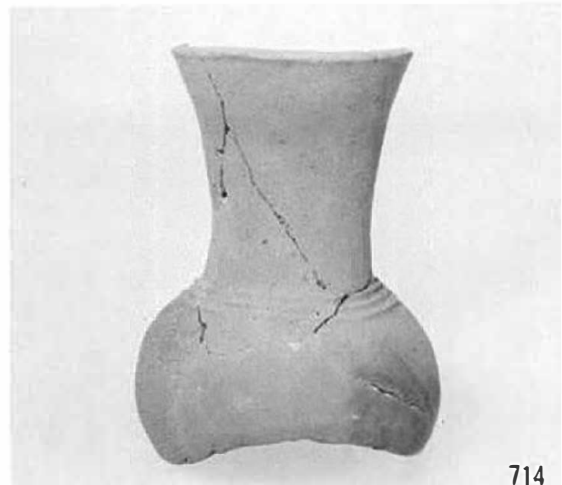
711



689



695



714

1・7・8号円形周溝出土土器
8号円形周溝出土ガラス小玉

9・10号円形周溝出土土器
11号円形周溝出土土器 ①



719



724



720



725



728



721



739



742



744



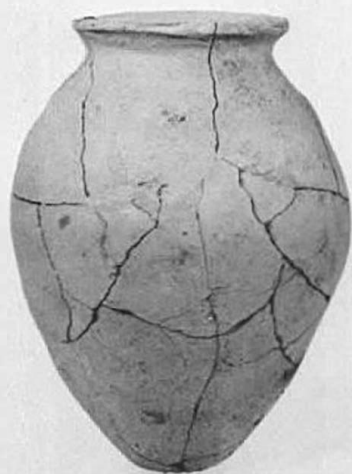
746



749



750



745



755

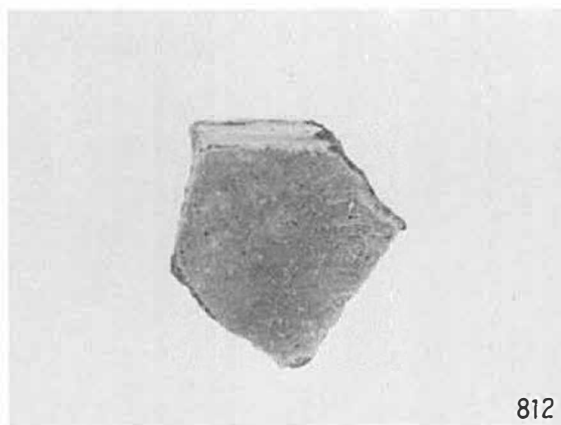


757



756





812



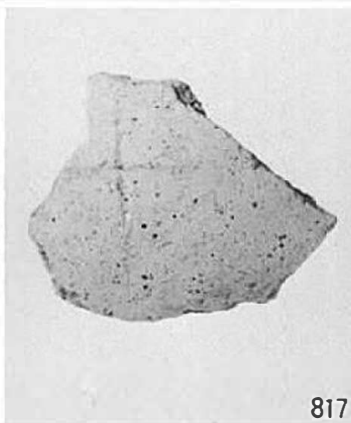
814



816



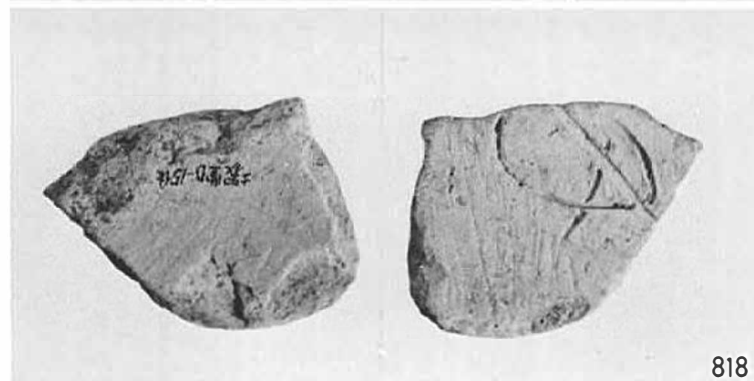
815



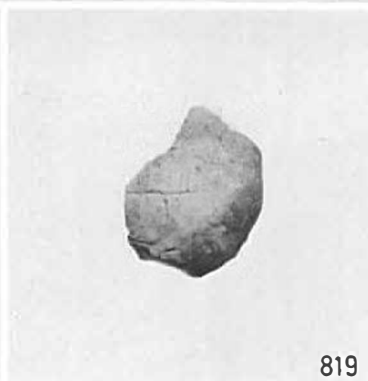
817



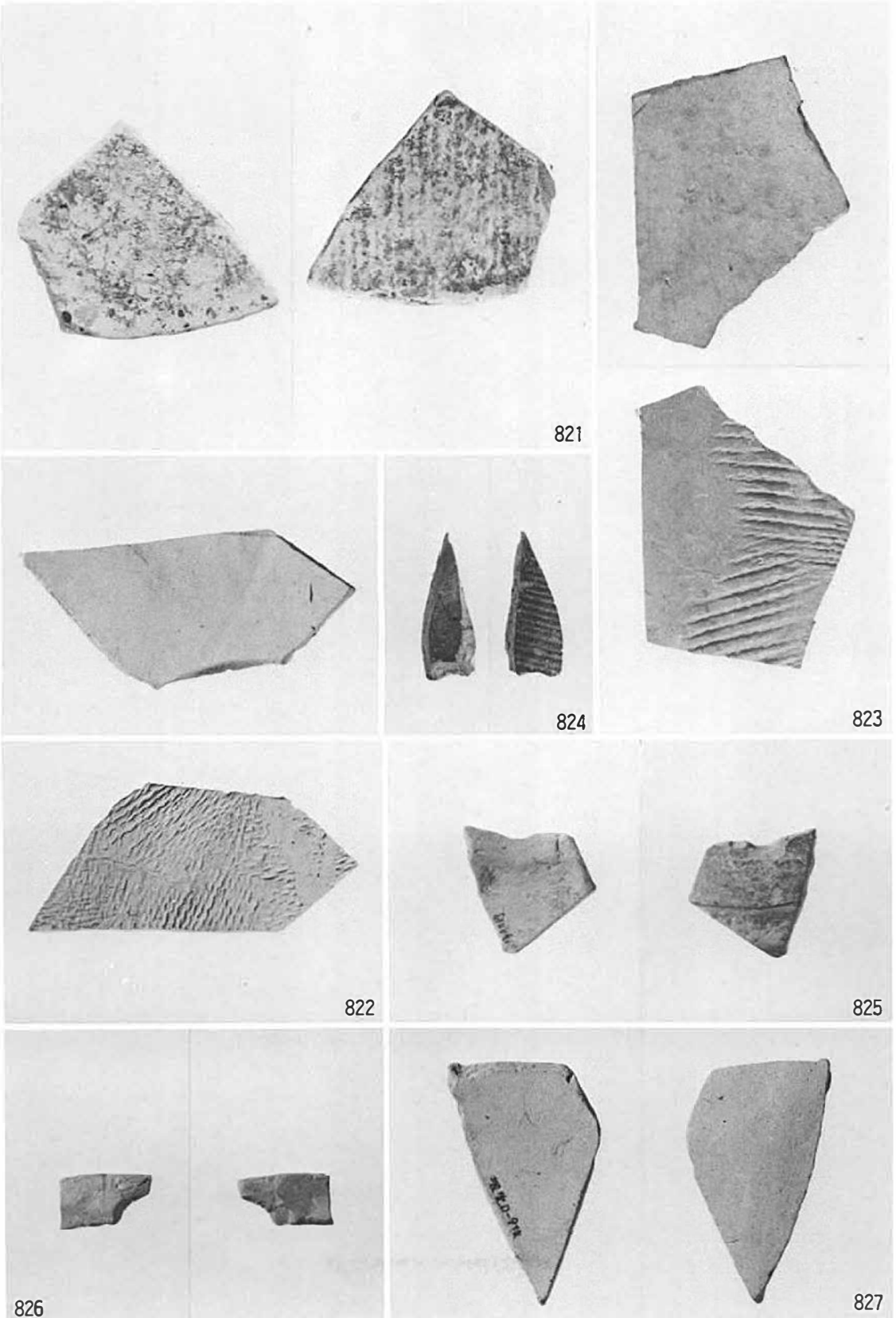
820



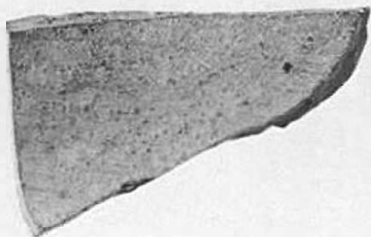
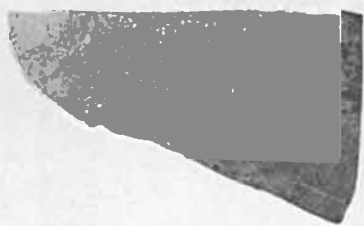
818



819



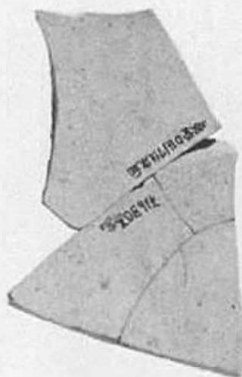
軟質粗席タタキ目・沈線文土器，須恵器 ①



828



829



832



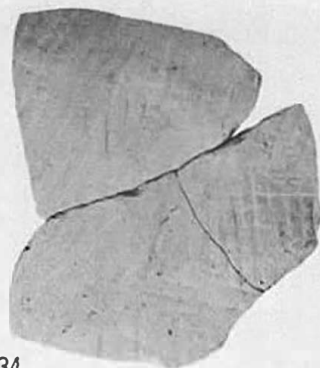
830



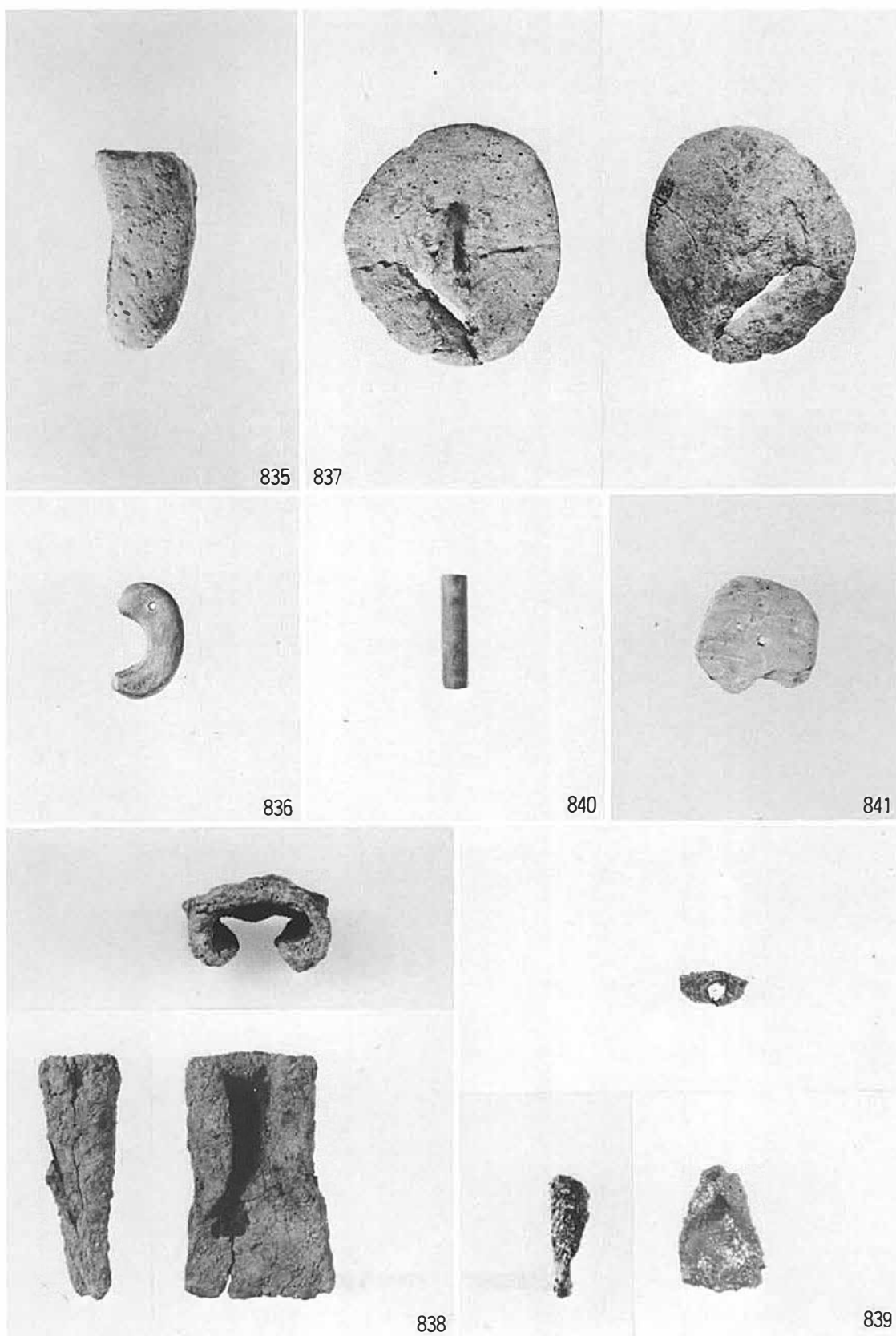
833



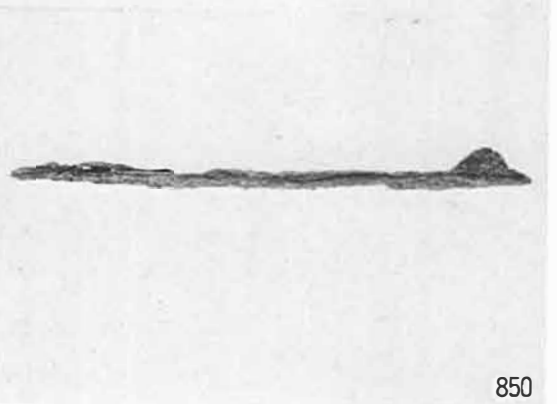
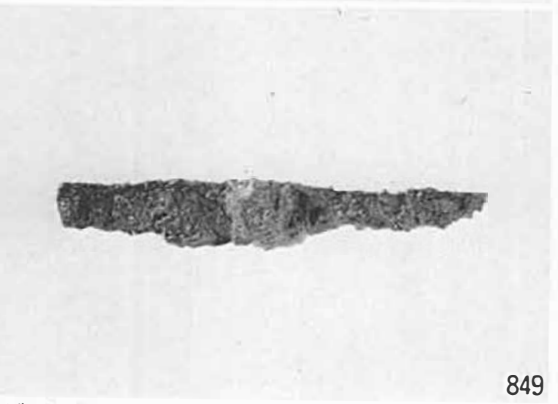
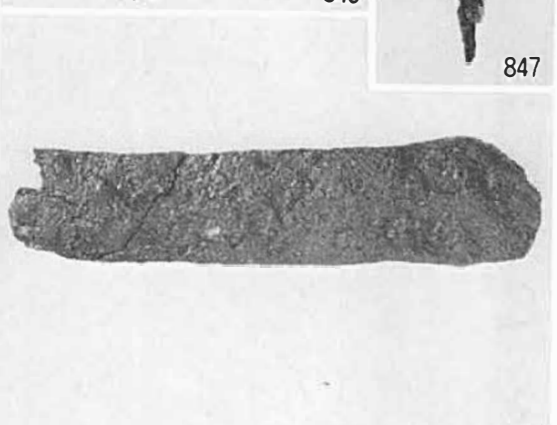
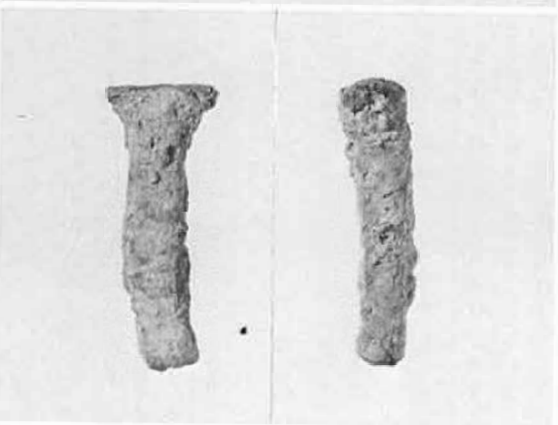
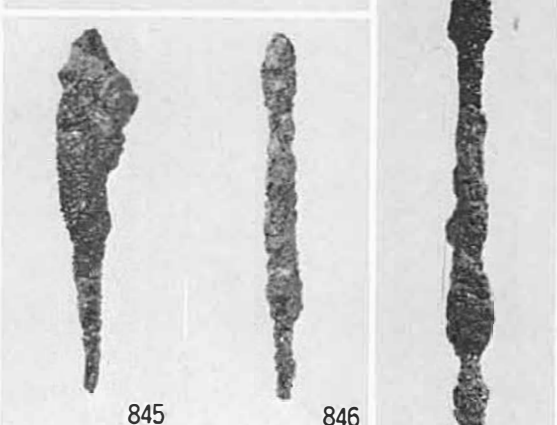
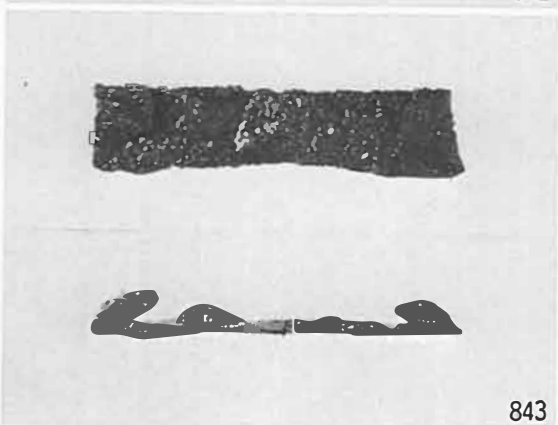
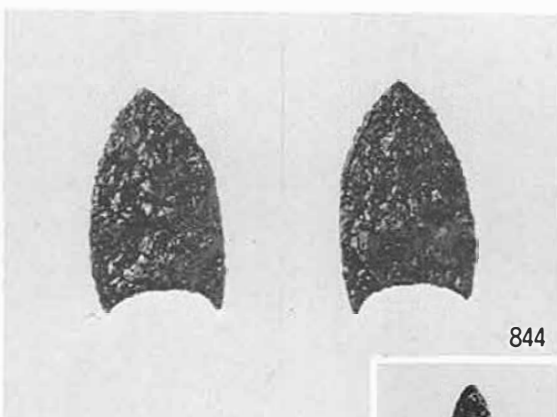
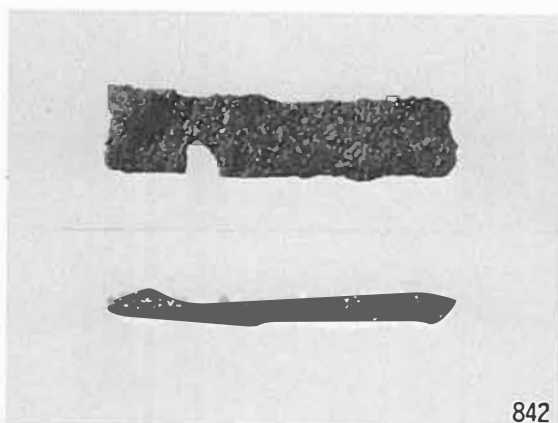
831

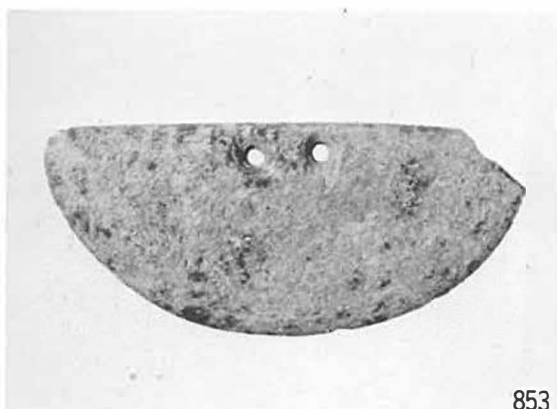


834



土製品・石製品 ①・鉄製品 ①

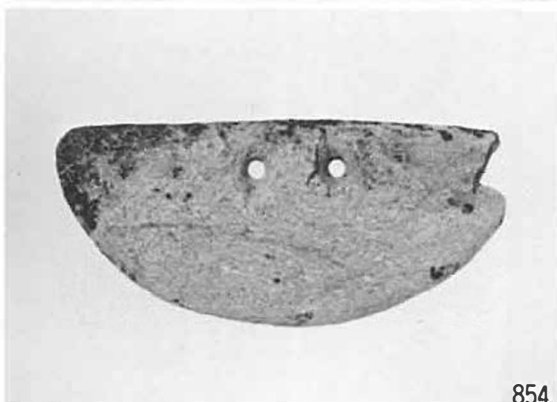




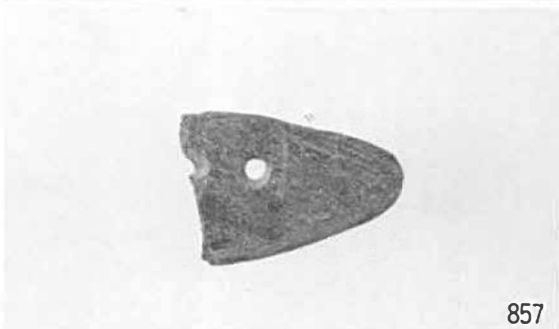
853



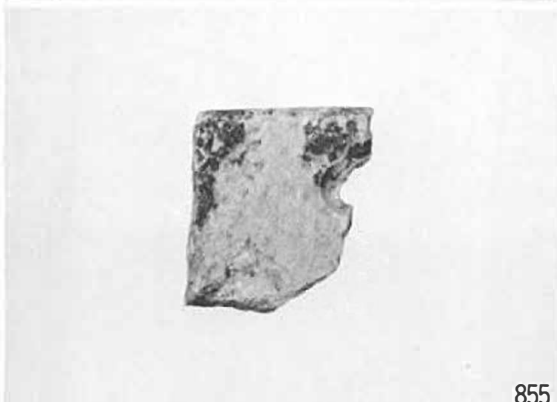
856



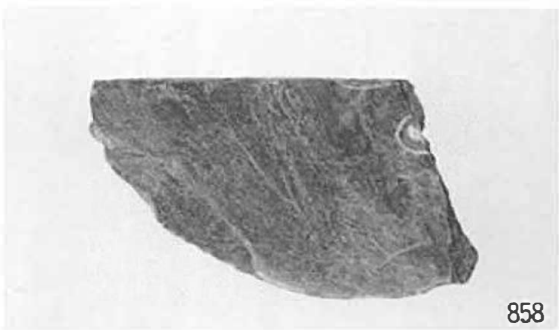
854



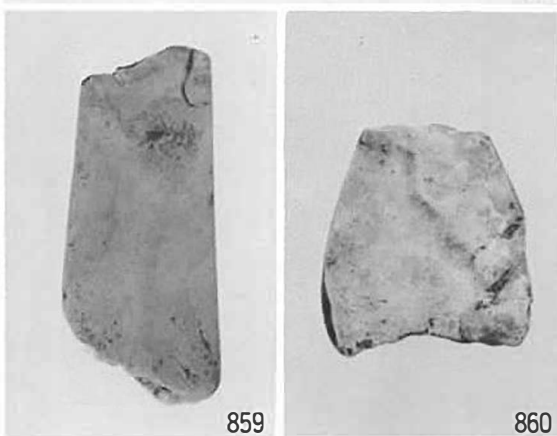
857



855

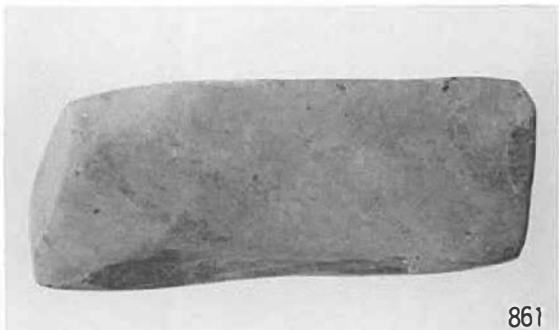


858

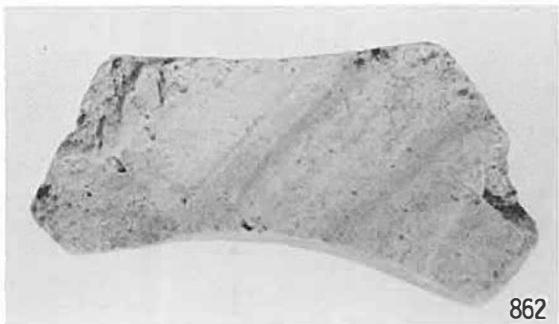


859

860



861



862

浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4集

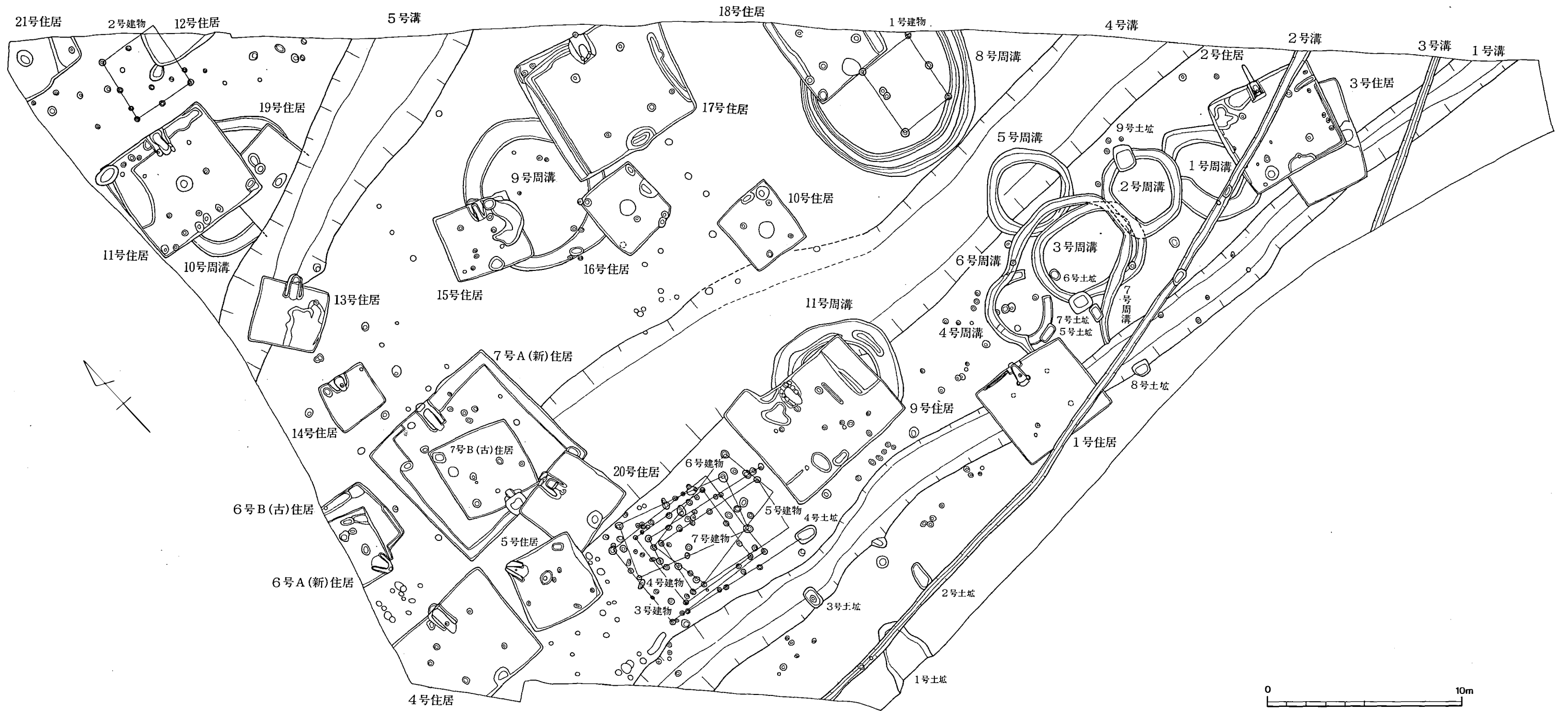
つかんどう
塚堂遺跡Ⅳ(第2分冊)

D地区

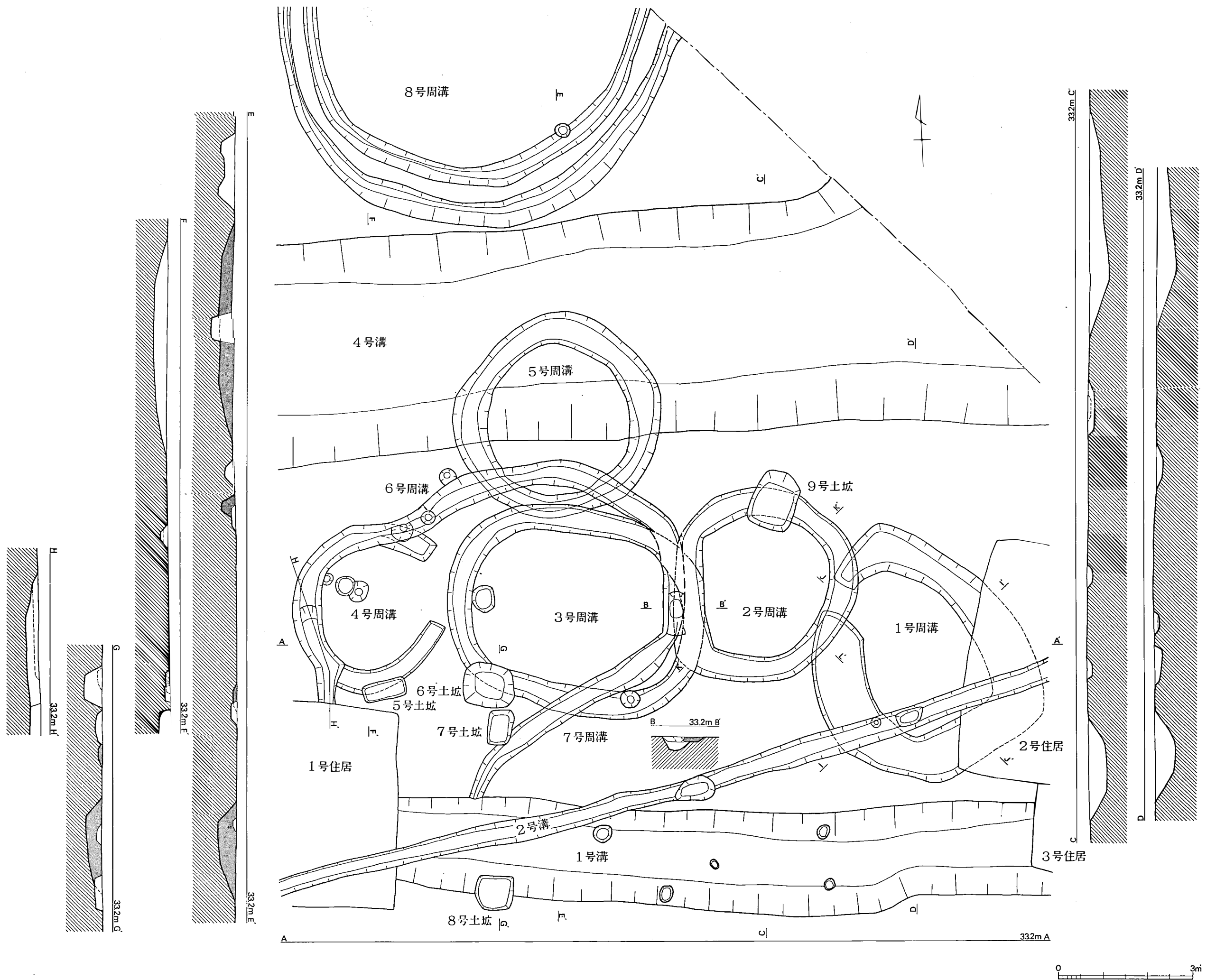
1985年3月30日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 栄光印刷株式会社
福岡市東区箱崎下入道800



付 図 2 塚堂遺跡 D地区遺構配置図 (1/200)



付图 3 1~7号圆形周溝实测图(1/80)